

秋田県文化財調査報告書第91集

# 東北縦貫自動車道発掘調査報告書 V

——上萬岡IV遺跡・駒林遺跡・案内II遺跡・猿ヶ平I遺跡——

秋田県埋蔵文化財センター

1982・3

秋田県教育委員会

# 序

十和田湖の南玄関口である鹿角市に、東北縦貫自道車道の建設計画が立てられ、現在工事進行中であります。

この道路通過地（八幡平・十和田錦木間）に埋蔵文化財包蔵地が33ヶ所あることが判明し、秋田県教育委員会は日本道路公団の委託を受け、昭和54年度から発掘調査を実施しております。昭和55年度は19遺跡の発掘調査を無事終了し、今回上葛岡IV遺跡、駒林遺跡、案内II遺跡、猿ヶ平I遺跡の発掘調査成果を報告書として刊行することになりました。

本報告書は、今まで不明分野の多かった鹿角地方の歴史解明に役立つものと考えられ、広く永く活用されることを望むものであります。  
最後に発掘調査から報告書刊行までに顧問、専門指導員、日本道路公団、鹿角市、同教育委員会はじめ関係各位から多大の協力を得ましたことについて、心から感謝の意を表するものであります。

昭和57年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

# 例　　言

1. 本書は東北縦貫自動車道路線内に位置する昭和55年度発掘調査19遺跡のうち、上葛岡IV遺跡（遺跡番号No13）、駒林遺跡（遺跡番号No14）、案内II遺跡（遺跡番号No19）、猿ヶ平I遺跡（遺跡番号No20）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡については機会を見て発表してきたが、本報告書を正式のものとする。
3. 発掘調査遺跡の記載は、岩手県境から付した遺跡番号による。
4. 報告遺跡の発掘調査においては、次の各氏からご助言、ご教示をいただいた。

秋田大学教授 新野直吉  
秋田県鹿角市立干和田中学校長 安村二郎  
秋田県立秋田高等学校教諭 塩谷順耳  
秋田県立十和田高等学校教諭 大里勝哉  
秋田県鹿角市大日堂彌宜 安倍良行

5. 本書 IIの1「地形と地質」は、秋田県立能代北高等学校教諭藤本幸雄氏の執筆である。
6. 古陶磁器類の鑑定は、金沢大学法文学部助教授佐々木達夫氏にお願いした。
7. 土器の产地同定は、奈良教育大学教授三辻利一氏にお願いした。
8. 石器の石質鑑定は、秋田県立博物館学芸主事黒崎二郎氏にお願いした。
9. <sup>14</sup>C年代測定は、日本アイソトープ協会にお願いした。
10. 花粉分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社にお願いした。
11. 遺構内外の土壤の構分析は、秋田県農業試験場環境部にお願いした。
12. 報告書に使用した地図は、建設省国土地理院発行5万分の1、2万5千分の1、日本道路公団作成の1,000分の1の地形図である。
13. 遺跡の土層、遺物の色調記載は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所、色票監修「新版、標準土色帖」を使用した。
14. 遺物の実測には、画像工学研究所のスケッチグラフ卓上型を活用した。
15. 遺物の細部観察には、ニコン実体顕微鏡SM2-10を使用した。
16. 本書は下記の調査員、補佐員が協議して作成した。

I, IIの2 岩見誠夫

駒林遺跡、上葛岡IV遺跡、案内II遺跡

小林克、閑直、田中和徳、石木田正幸、花田孝夫

阿部 義行

遺物の実測・採拓・トレース・整理には、上記調査員・補佐員の他次の者があたった。

浅石 恵留子 三上 美子 小田島 礼子 苗代沢 ノブ

小田島 キクエ 三上 スガ子 浅石 悅子 田中 春美

加藤 正子 原 ツヨ 才田 環 小松 瞳子

猿ヶ平 I 遺跡

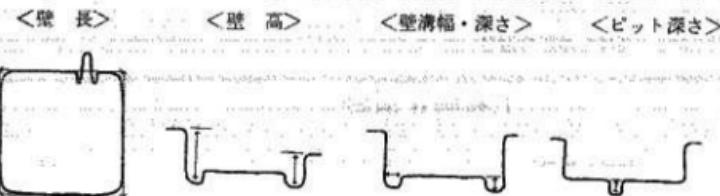
岩見 誠夫 栗沢 光男 藤井 安正 松岡 忠仁 児玉 悅朗

高橋 学 奈良 義博

遺物の実測・採拓・トレース・整理には、上記調査員・補佐員の他次の者があたった。

津島 满子 安保 幸子 池田 邦子 岛山 千代美 奈良 恵

17. 住居跡計測方法は以下の通りである。



- 壁長は各壁の外接線の交点から交点までを計測した。
- 壁高は周溝のある場合は周溝底から、ない場合は床面からの高さを計測した。
- 傾斜角は断面形における床面と壁面の外接線の交叉の内角を計測した。
- 周溝幅は床面レベルでの幅を計測した。
- 周溝深は床面レベルからの深さを計測した。
- ピットは床面における開口部径と深さを計測した。
- 面積は遺構上端の占地面积である。計測にはプランジャーを用い、3回計測して平均値を算出した。
- 計測値単位はcmを用い、面積はm<sup>2</sup>を用いた。推定のものには〈 〉を付した。

18. 土器の計測はcmの単位で行い、推定のものには( )を付した。

# 目 次

## 序

## 例 言

I	はじめに	1
1	発掘調査に至るまで	1
2	発掘調査経過	2
3	調査の組織と構成	4
4	調査の方法	5
II	遺跡の立地と環境	7
1	地形と地質	7
2	環境と周辺の遺跡	14

## 上葛岡IV遺跡

1	遺跡の概観	23
2	調査の方法	24
3	調査経過	24
4	遺跡の層位	26
5	遺構と遺物	28
6	まとめ	134

## 駒林遺跡

1	遺跡の概観	181
2	調査の方法	181
3	調査経過	181
4	遺跡の層位	183
5	遺構と遺物	189
6	まとめ	241

## 案内 II 遺跡

1	遺跡の概観	275
2	調査の方法	275
3	調査経過	276
4	遺跡の層位	276
5	遺構と遺物	279
6	まとめ	313

## 猿ヶ平 I 遺跡

1	遺跡の概観	341
2	調査の方法	341
3	調査経過	341
4	遺跡の層位	342
5	遺構と遺物	388
6	まとめ	390

## 挿 図 目 次

### II. 遺跡の立地と環境

第1図	段丘地形図	8
第2図	露頭柱状図	10
第3図	周辺遺跡分布図	15
第4図	秋田県鹿角市における東北縦貫自動車道路上の遺跡分布図	19・20

### 上葛岡IV遺跡

第1図	上葛岡IV遺跡グリッド配置図	25
第2図	遺跡の層位	27
第3図	第1号土壙～第4号土壙	30
第4図	遺構外遺物出土状況	31
第5図	遺構外出土遺物	32
第6図	遺構外出土遺物	33
第7図	遺構外出土遺物	34
第8図	遺構外出土遺物	35
第9図	遺構外出土遺物	36
第10図	遺構外出土遺物	37
第11図	第1号住居跡	41～44
第12図	第1号住居跡カマド	45
第13図	第1号住居跡出土遺物	46
第14図	第2号住居跡	48
第15図	第2号住居跡カマド	49
第16図	第2号住居跡出土遺物	50
第17図	第2号住居跡出土遺物	51
第18図	第3号住居跡	54
第19図	第3号住居跡カマド	55
第20図	第3号住居跡出土遺物	56
第21図	第4号住居跡カマド	58
第22図	第4号住居跡	59～62

第23図	第4号住居跡出土遺物	63
第24図	第5号住居跡	65
第25図	第5号住居跡カマド	66
第26図	第5号住居跡出土遺物	67
第27図	第6号住居跡	69
第28図	第6号住居跡カマド	70
第29図	第6号住居跡出土遺物	75 71
第30図	第7号住居跡出土遺物	74
第31図	第7号住居跡	81~88
第32図	第8号住居跡カマド	89
第33図	第8号住居跡	81~84
第34図	第8号住居跡出土遺物	85
第35図	第8号住居跡出土遺物	86
第36図	第8号住居跡出土遺物	87
第37図	第9号住居跡カマド	90
第38図	第9号住居跡	91~94
第39図	第9号住居跡出土遺物	95
第40図	第10号住居跡	97~100
第41図	第10号住居跡出土遺物	101
第42図	第11号住居跡	103~106
第43図	第11号住居跡カマド	107
第44図	第11号住居跡出土遺物	108
第45図	第11号住居跡出土遺物	109
第46図	第12号住居跡カマド	112
第47図	第12号住居跡	113~116
第48図	第12号住居跡出土遺物	117
第49図	第5号土壤~第7号土壤	119
第50図	第8号土壤~第10号土壤	121
第51図	第11号土壤~第14号土壤	123
第52図	第15号土壤~第21号土壤	125
第53図	各土壤内出土遺物	126
第54図	壠立柱建物跡	128

第55図	第1号溝跡	129
第56図	第2号溝跡	130
第57図	第3号溝跡	131
第58図	遺構外出土遺物	132
第59図	遺構外出土遺物	133
付図1	上葛岡IV遺跡遺配図	

## 駒林遺跡

第1図	駒林遺跡グリッド配図	182
第2図	遺跡の層位	184
第3図	駒林遺跡（農道北側区）遺構配置図	185～188
第4図	集疊遺構	190
第5図	トレンチ内遺物出土状況図	192
第6図	縄文時代土器拓影（1）	193
第7図	縄文時代土器拓影（2）	194
第8図	縄文時代土器拓影（3）	195
第9図	縄文時代土器拓影（4）	196
第10図	縄文時代土器拓影（5）	197
第11図	弥生時代土器拓影	198
第12図	縄文時代土器実測図（1）	199
第13図	縄文時代土器実測図（2）	200
第14図	トレンチ調査区内出土石器・鐵器実測図	201
第15図	遺構外出土石器実測図	202
第16図	第1号住居跡	204
第17図	第1号住居跡カマド	206
第18図	第1号住居跡出土土器（1）	205
第19図	第1号住居跡出土土器（2）	207
第20図	第1号住居跡出土土器（3）	208
第21図	第1号住居跡出土土器（4）	219
第22図	第1号住居跡出土土器拓影	210
第23図	第1号住居跡出土石器・土製品	211
第24図	第2号住居跡	215

第25図	第2号住居跡カマド	216
第26図	第2号住居跡出土土器(1)	217
第27図	第2号住居跡出土土器(2)	218
第28図	第2号住居跡出土土器(3)	219
第29図	第2号住居跡出土土器(4)	220
第30図	第2号住居跡出土土器(5)	221
第31図	第2号住居跡出土土器(6)	222
第32図	第2号住居跡出土土器(7)	223
第33図	第2号住居跡出土土器(8)	224
第34図	第2号住居跡出土土器・石器	225
第35図	第3号住居跡	230
第36図	第3号住居跡カマド	231
第37図	第3号住居跡出土土器	232
第38図	第3号住居跡出土土器拓影	233
第39図	第1号土壤～第4号土壤	234
第40図	掘立柱建物跡	236
第41図	遺構外出土土器(1)	237
第42図	遺構外出土土器(2)	238

## 案内II 遺跡

第1図	案内II 遺跡グリッド配置図	277
第2図	遺跡の層位	278
第3図	第1号住居跡	280
第4図	第1号住居跡出土土器	281
第5図	第2号住居跡	283
第6図	第3号住居跡	285
第7図	第3号住居跡出土土器	286
第8図	第4号住居跡	287～290
第9図	第4号住居跡出土土器	291
第10図	第1号土壤～第3号土壤	294
第11図	第4号土壤～第6号土壤	296
第12図	第7号土壤～第9号土壤	298

第13図	第10号土壙～第11号土壙	300
第14図	第12号土壙	301
第15図	各土壙内出土土器	302
第16図	埋設土器遺構	304
第17図	埋設土器	305
第18図	配石遺構	307～311
第19図	配石遺構周辺出土土器	311
第20図	遺構外出土遺物	312
付図 2	案内II 遺跡遺構配置図	

## 猿ヶ平I遺跡

第1図	グリッド配置図	343
第2図	遺構配置図	345・346
第3図	S I001竪穴住居跡実測図	344
第4図	S K001, 002, 003, 004土壤実測図	348
第5図	S K005, 006, 007, 008土壤実測図	350
第6図	S K009, 010, 011, 012土壤実測図	352
第7図	S K013, 014, 015, 016土壤実測図	354
第8図	S K017, 018, 019, 020土壤実測図	356
第9図	S K(F)001, 002, 003, 004フラスコ状ピット実測図	358
第10図	S K(F)005, 006, 007, 008, 009フラスコ状ピット実測図	360
第11図	S K(F)010, 011, 012フラスコ状ピット実測図	362
第12図	S K(F)013, 014, 015, 016フラスコ状ピット実測図	364
第13図	S K(T)001落し穴状遺構, SX(F)001焼土遺構, SX(U)001埋設土器	366
第14図	S I001竪穴住居跡, S K001, 002土壤出土土器(1)	368
第15図	S K002, 003, 004土壤出土土器(2)	369
第16図	S K016土壤出土土器(3)	370
第17図	S K(F)001フラスコ状ピット出土土器(4)	370
第18図	S K(F)005, 006フラスコ状ピット出土土器(5)	371
第19図	S K(F)007, 009フラスコ状ピット出土土器(6)	372
第20図	S X(U)001埋設土器実測図(7)	372
第21図	遺構外出土土器(1)	373

第22図	遺構外出土土器（2）	374
第23図	遺構外出土土器（3）	375
第24図	遺構外出土土器（4）	376
第25図	遺構外出土土器（5）	377
第26図	遺構外出土土器（6）	378
第27図	遺構外出土石器	379

## 表 目 次

### II. 遺跡の立地と環境

第1表	重鉱物組成	11
第2表	周辺遺跡一覧	16

### 上葛岡IV遺跡

第1表	第1号土壤観察表	29
第2表	第2号土壤観察表	29
第3表	第3号土壤観察表	29
第4表	第4号土壤観察表	29
第5表	第1号住居跡観察表	40
第6表	第1号住居跡出土遺物観察表	46
第7表	第2号住居跡観察表	47
第8表	第2号住居跡出土遺物観察表	52
第9表	第3号住居跡観察表	53
第10表	第3号住居跡出土遺物観察表	55
第11表	第4号住居跡観察表	57
第12表	第4号住居跡出土遺物観察表	63
第13表	第5号住居跡観察表	64
第14表	第5号住居跡出土遺物観察表	67
第15表	第6号住居跡観察表	68
第16表	第6号住居跡出土遺物観察表	71
第17表	第7号住居跡A観察表	72

第18表	第7号住居跡B観察表	73
第19表	第7号住居跡出土遺物観察表	74
第20表	第8号住居跡観察表	79
第21表	第8号住居跡出土遺物観察表	88
第22表	第9号住居跡観察表	89
第23表	第9号住居跡出土遺物観察表	95
第24表	第10号住居跡観察表	96
第25表	第10号住居跡出土遺物観察表	101
第26表	第11号住居跡観察表	102
第27表	第11号住居跡出土遺物観察表	110
第28表	第12号住居跡観察表	111
第29表	第12号住居跡出土遺物観察表	117
第30表	第5号土壤観察表	118
第31表	第6号土壤観察表	118
第32表	第7号土壤観察表	118
第33表	第8号土壤観察表	120
第34表	第9号土壤観察表	120
第35表	第10号土壤観察表	120
第36表	第11号土壤観察表	122
第37表	第12号土壤観察表	122
第38表	第13号土壤観察表	122
第39表	第14号土壤観察表	122
第40表	第15号土壤観察表	124
第41表	第16号土壤観察表	124
第42表	第17号土壤観察表	124
第43表	第18号土壤観察表	124
第44表	第19号土壤観察表	124
第45表	第20号土壤観察表	124
第46表	第21号土壤観察表	124
第47表	各土壤内出土遺物観察表	124

## 駒林遺跡

第1表	第1号住居跡観察表	203
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	212
第3表	第1号住居跡出土遺物観察表	213
第4表	第2号住居跡観察表	214
第5表	第2号住居跡出土遺物観察表	226
第6表	第2号住居跡出土遺物観察表	227
第7表	第2号住居跡出土遺物観察表	228
第8表	第3号住居跡観察表	229
第9表	第3号住居跡出土遺物観察表	233
第10表	遺構外出土遺物観察表	239
第11表	遺構外出土遺物観察表	240

## 案内II遺跡

第1表	第1号土壤観察表	293
第2表	第2号土壤観察表	293
第3表	第3号土壤観察表	293
第4表	第4号土壤観察表	295
第5表	第5号土壤観察表	295
第6表	第6号土壤観察表	295
第7表	第7号土壤観察表	296
第8表	第8号土壤観察表	296
第9表	第9号土壤観察表	296
第10表	第10号土壤観察表	299
第11表	第11号土壤観察表	299
第12表	第12号土壤観察表	299

## 猿ヶ平I遺跡

第1表	S K 001 竪穴住居跡観察表	347
第2表	S K 001 土壌観察表	349
第3表	S K 002 土壌観察表	349
第4表	S K 003 土壌観察表	349

第5表	S K 004 土壌観察表	349
第6表	S K 005 土壌観察表	351
第7表	S K 006 土壌観察表	351
第8表	S K 007 土壌観察表	351
第9表	S K 008 土壌観察表	351
第10表	S K 009 土壌観察表	353
第11表	S K 010 土壌観察表	353
第12表	S K 011 土壌観察表	353
第13表	S K 012 土壌観察表	353
第14表	S K 013 土壌観察表	355
第15表	S K 014 土壌観察表	355
第16表	S K 015 土壌観察表	355
第17表	S K 016 土壌観察表	355
第18表	S K 017 土壌観察表	357
第19表	S K 018 土壌観察表	357
第20表	S K 019 土壌観察表	357
第21表	S K 020 土壌観察表	357
第22表	S K (F) 001 フラスコ状ビット観察表	359
第23表	S K (F) 002 フラスコ状ビット観察表	359
第24表	S K (F) 003 フラスコ状ビット観察表	359
第25表	S K (F) 004 フラスコ状ビット観察表	359
第26表	S K (F) 005 フラスコ状ビット観察表	361
第27表	S K (F) 006 フラスコ状ビット観察表	361
第28表	S K (F) 007 フラスコ状ビット観察表	361
第29表	S K (F) 008 フラスコ状ビット観察表	361
第30表	S K (F) 009 フラスコ状ビット観察表	363
第31表	S K (F) 010 フラスコ状ビット観察表	363
第32表	S K (F) 011 フラスコ状ビット観察表	363
第33表	S K (F) 012 フラスコ状ビット観察表	363
第34表	S K (F) 013 フラスコ状ビット観察表	365
第35表	S K (F) 014 フラスコ状ビット観察表	365
第36表	S K (F) 015 フラスコ状ビット観察表	365

第37表	S K (F) 016 フラスコ状ビット観察表	365
第38表	S K (T) 001溝状土壌観察表	367
第39表	S X (F) 001 焼土遺構観察表	367
第40表	S X (U) 001 埋設土器観察表	367
第41表	豎穴住居跡、土壤、フラスコ状ビット出土土器観察表	380
第42表	土壤、フラスコ状ビット出土土器観察表	381
第43表	フラスコ状ビット出土土器、埋設土器観察表	382
第44表	遺構外出土土器観察表	383
第45表	遺構外出土土器観察表	384
第46表	遺構外出土土器観察表	385
第47表	遺構外出土土器観察表	386
第48表	遺構外出土石器観察表	387

## 図版目次

### 上葛岡IV遺跡

図版1	航空写真、遺跡遠景	137
図版2	農道南側区全景、農道北側区全景	138
図版3	遺跡層序	139
図版4	第1号住居跡確認状況 第1号住居跡覆土堆積状況	140
図版5	第1号住居跡完掘状況 第1号住居跡カマド	141
図版6	第2号住居跡確認状況 第2号住居跡カマド	142
図版7	第2号住居跡カマド、第4号住居跡完掘状況	143
図版8	第3号住居跡完掘状況 第3号住居跡カマド	144
図版9	第5号住居跡完掘状況 第5号住居跡煙道	145
図版10	第6号住居跡完掘状況 第6号住居跡カマド	146
図版11	第7号住居跡完掘状況 第7号住居跡カマド	147
図版12	第8号住居跡完掘状況 第8号住居跡カマドA	148
図版13	第8号住居跡カマドB、第12号住居跡完掘状況	149
図版14	第12号住居跡カマド、第11号住居跡出土状況	150
図版15	第11号住居跡出土状況、第11号住居跡完掘状況	151
図版16	第11号住居跡カマド、第9号・第10号住居跡完掘状況	152

図版17	第10号住居跡炭化材出土状況、第9号住居跡カマド	159
図版18	第9号住居跡カマド、掘立柱建物跡	154
図版19	第1号溝跡(西▶東)、第1号溝跡(南▶北)	155
図版20	第1号土壤完掘状況、第2号土壤完掘状況	156
図版21	第11号土壤完掘状況、第5号土壤完掘状況	157
図版22	第6号土壤完掘状況、第7号土壤完掘状況	158
図版23	第8号土壤完掘状況、第10号土壤完掘状況	153
図版24	第12号土壤内覆土堆積状況、第12号土壤完掘状況	160
図版25	第13号第14号土壤完掘状況、第3号土壤完掘状況	161
図版26	遺構外遺物出土状況	162
図版27	遺構外遺物出土状況	163
図版28	遺構外出土遺物	164
図版29	遺構外出土遺物	165
図版30	遺構外出土遺物、第1号住居跡出土遺物	166
図版31	第2号住居跡出土遺物	167
図版32	第3号住居跡出土遺物	168
図版33	第4号住居跡、第5号住居跡、第6号住居跡出土遺物	169
図版34	第7号住居跡出土遺物	170
図版35	第8号住居跡出土遺物	171
図版36	第8号住居跡出土遺物	172
図版37	第9号住居跡出土遺物、第10号住居跡出土遺物	173
図版38	第11号住居跡出土遺物	174
図版39	第11号住居跡出土遺物	175
図版40	第12号住居跡出土遺物、各土壤内出土遺物	176
図版41	遺構外出土石器	177
図版42	遺構外出土土器(須恵器、陶器)	178

## 駒林遺跡

図版1	遺跡全景、遺跡全景	245
図版2	農道北側調査区、農道南側調査区	246
図版3	農道北側区層序、農道南側区トレンチ内層序	247
図版4	第1号住居跡完掘状況 第1号住居跡カマド	248

図版 5	第1号住居跡カマドセクション 第1号住居跡カマド煙道	249
図版 6	第1号住居跡ピット内出土土師器坏、第1号住居跡覆土内出土土師器甕	250
図版 7	第2号住居跡完掘状况 第2号住居跡カマド	251
図版 8	第2号住居跡カマド内遺物出土状況、第2号住居跡炭化材出土状況	252
図版 9	第3号住居跡確認状況 第3号住居跡完掘状況	253
図版10	第3号住居跡カマド遺物出土状況、掘立柱建物跡	254
図版11	第1号土壤完掘状況、集落遺構	255
図版12	遺構外遺物出土状況、遺構外（トレンチ内）遺物出土状況	256
図版13	遺構外（トレンチ内）遺物出土状況	257
図版14	第1号住居跡出土遺物	258
図版15	第1号住居跡出土遺物	259
図版16	第2号住居跡出土遺物	260
図版17	第2号住居跡出土遺物	261
図版18	第2号住居跡出土遺物	262
図版19	第2号住居跡出土遺物	263
図版20	第3号住居跡出土遺物	264
図版21	遺構外出土縄文時代土器	265
図版22	遺構外出土縄文時代土器	266
図版23	遺構外出土縄文時代土器	267
図版24	遺構外出土縄文時代土器、遺構外出土弥生時代土器	268
図版25	遺構外出土土器（土師器）	269
図版26	遺構外出土土器（須恵器、陶器）	270
図版27	遺構外出土石器	271

## 案内 II 遺跡

図版 1	遺跡遠景、遺跡近景	317
図版 2	遺跡全景、トレンチ調査区	318
図版 3	遺跡層序、第1号住居跡完掘状況	319
図版 4	第2号住居跡完掘状況、第3号住居跡完掘状況	320
図版 5	第4号住居跡完掘状況、第4号住居跡内遺物出土状況	321
図版 6	土器埋設遺構、同断面	322
図版 7	配石遺構、同近接	323

図版 8	配石遺構配石状況、同配石除去後	324
図版 9	第1号土壤完掘状況、第2号土壤遺物出土状況、同断面、同完掘状況	325
図版10	第3号土壤断面、同完掘状況、第5号第6号土壤完掘状況	326
図版11	第5号土壤断面、同完掘状況、第6号土壤断面、同完掘状況	327
図版12	第8号土壤断面、同完掘状況、第9号土壤断面、同完掘状況	328
図版13	第10号土壤断面、同完掘状況、第11号土壤断面、同完掘状況	329
図版14	第7号土壤断面、同完掘状況、第4号土壤完掘状況	330
図版15	第1号住居跡出土土器	331
図版16	第3号住居跡出土土器	332
図版17	第4号住居跡出土土器	333
図版18	各土壤内出土土器	334
図版19	埋設土器	335
図版20	配石遺構周辺出土土器	336
図版21	遺構外出出土土器	337

## 猿ヶ平I遺跡

図版 1	遺跡全景（北▶南）上　発掘調査前	393
	下　発掘調査後	
図版 2	(上) 調査終了後遺跡全景（南東▶北西）	394
	(下) (東▶西)	
図版 3	(上) 調査風景	395
	(下) 調査風景	
図版 4	(上) S I 001 竪穴住居跡確認状況（南▶北）	396
	(下) S I 001 竪穴住居跡（北▶南）	
図版 5	(上) S I 001 竪穴住居跡と炉（西▶東）	397
	(下) S I 001 竪穴住居跡・炉の下のS K 020 土壤（西▶東）	
図版 6	(上) S K 016 土壤（東▶西）	398
	(下) S K 016 土壤土器出土状況	
図版 7	(上) S K (F) 012 フラスコ状ピット（南▶北）	399
	(中) S X (F) 001 焼土遺構（南東▶北西）	
	(下) S X (U) 001 埋設土器（南▶北）	
図版 8	(上) 9-S グリッド土器出土状況	400
	(中) 蓋出土状況	

(下)耳飾出土状況.....

図版 9	S I 001 竪穴住居跡・S K 001, 002, 003, 004 土壙.....	401
	S K (F) 001 フラスコ状ビット出土土器 (1) .....	
図版10	S K (F) 005, 006, 007, 009 フラスコ状ビット出土土器 (2) .....	402
図版11	S K 016 土壙, S X (U) 001 埋設土器, 遺構外出土土器, 土製品 (3) .....	403
図版12	遺構外出土土器 (4) .....	404
図版13	遺構外出土土器 (5) .....	405
図版14	遺構外出土石器.....	406

# I は じ め に

## 1. 発掘調査に至るまで

秋田県の北東部、鹿角市と鹿角郡小坂町を通過する東北縦貫自動車道の建設計画の魁は、昭和40年11月公表の鹿角市・青森市間、同42年11月公表の盛岡市・鹿角市間の基本計画である。

次いで昭和43年4月の鹿角市・青森市間約81kmの第2次施行命令と同46年6月の岩手県二戸郡安代町・鹿角市間約37kmの第5次施行命令によって、その通過予定区域が知られ、これを受け同47年11月27日に、鹿角市十和田錦木・小坂町間の路線発表があつて、ようやくその具体的な姿を県民に表わしたのである。

このため、秋田県教育委員会では、文化庁と日本道路公団が交わした覚書に基づき、昭和44年8月、鹿角市十和田地区から鹿角郡小坂町の青森県境まで、幅4km、延長25kmにわたって遺

跡の分布調査を行い、67遺跡を確認し、その成果を公表した。昭和48年8月には、鹿角市八幡平、尾去沢、花輪地区で、幅4km、延長20kmの遺跡分布調査と試掘を実施して、46ヶ所の遺跡<sup>(註1)</sup>を確認した。

昭和51年2月12になると、昭和48年8月実施の鹿角市内遺跡分布調査結果をふまえて、日本道路公団から鹿角市八幡平から同市十和田錦木に致る延長約21.1kmの路線の発表があり、測量が実施されるに及んだ。

秋田県教育委員会では、日本道路公団仙台建設局鹿角工事事務所の依頼により、昭和52年10月にこの路線上の遺跡分布調査を行い31遺跡の存在を確認した。昭和55年に新たに2遺跡が発見追加され、現在総計33遺跡となっている。<sup>(註2)</sup>

その後、遺跡の処遇や調査方針について日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会の間に協議が持たれ、最終的に遺跡は記録保存が決定した。昭和54年2月に遺跡の発掘調査依頼があり、秋田県教育委員会では昭和54年度八幡平地区7遺跡の発掘調査を行った。昭和55年度は追加委託契約をも含めて八幡平、花輪地区19遺跡の発掘調査が4月から実施されたのである。

註1 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第20集 1970年

註2 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第24集 1972年

註3 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書(八幡平~十和田錦木)』秋田県文化財調査報告書第56集 1978年

## 2. 発掘調査経過

発掘調査は昭和55年4月15日から12月13日まで行われた。

4月14日鹿角市花輪中央公民館に発掘調査に参加する作業員に集まってもらい、調査の目的、発掘の仕方と諸注意、勤務内容、賃金等について説明と連絡を行う。4月15日歌内遺跡（小玉班）と、駒林遺跡（小林班）、小豆沢館遺跡取付道路部分（桜田班）の発掘調査に入る。駒林遺跡は工事用車道に予定されている西側部分から発掘を行う。4月16日北の林I遺跡（岩見班）、4月22日飛鳥平遺跡（橋本班）の発掘調査に入る。

5月1日駒林遺跡工事用道路部分の発掘調査完了。直ちに隣接部分の調査に移行す。遺構は検出されず、遺物は縄文土器片のみ、小豆沢館遺跡農道上部の拡幅予定地から縄文時代のフラスコ状ピット、竪穴住居跡、平安時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡などを検出、重複多く調査は難行す。5月29日工事用重機待機の中で小豆沢館遺跡取付道路部分の発掘調査を終了す。一方飛鳥平遺跡、北の林I遺跡では表土除去も順調に進み、数棟の縄文・平安時代竪穴住居跡の検出報告がされた。

6月1日北の林II遺跡、2日上葛岡II遺跡の発掘調査に入る。これは桜田班が併行して担当。6月9日鳥居平遺跡の粗掘りを橋本班が飛鳥平遺跡と併行して進める。

6月8日小林班は駒林遺跡に実測班を残し、上葛岡IV遺跡の発掘調査にとりかかる。6月16日駒林遺跡の発掘調査終了。検出遺構は平安時代の竪穴住居跡3棟である。歌内遺跡の発掘調査では、縄文時代のフラスコ状ピット、平安時代の竪穴住居跡の検出が相次ぐ。

7月22日道路公団鹿角工事事務所にて、用地未解決であった発掘調査予定地について協議す。7月30日橋本班中の崎遺跡の刈払いとグリット設定に入る。

7月23日小林班案内II遺跡の試掘と刈払いに入り、8月6日猿ヶ平I遺跡の試掘と刈払いに移行す。8月8日上葛岡II遺跡の発掘調査終了。検出遺構は縄文前期竪穴住居跡2棟。8月18日道路公団鹿角工事事務所と今後の発掘調査行程について協議。8月21日鳥居平遺跡発掘調査終了。本年度追加発掘調査契約6遺跡について文化課から指示あり。22日文化課門間光夫参事、富樫泰時学芸主事来所し、追加契約遺跡の現地踏査を行い、調査員と発掘調査方法について協議す。同日中の崎遺跡発掘調査開始。8月23日追加契約遺跡発掘調査につき、道路公団鹿角工事事務所と用地等の件について協議す。8月28日県立博物館庄内昭男主事、鈴木秋良補佐員、花田孝夫補助員発掘調査応援に来所。8月29日金沢大学法学部助教授佐々木達夫先生発掘調査視察。

9月6日庄内昭男主事、鈴木秋良補佐員、花田孝夫補助員帰秋。9月9日財團法人岩手県埋蔵文化財センター高橋文夫、四ツ井謙吉氏発掘調査視察。9月10日調査専門指導員国学院大学

助教授小林達雄先生各発掘調査現場を視察し指導くださる。9月11日県庁報課県政ニュース作成のため北の林I遺跡地を取材す。9月12日文化課船木義勝学芸主事、熊谷太郎、柴田陽一郎文化財主事、佐々木金正補助員発掘調査応援に来所。熊谷調査員すぐ下乳牛遺跡の試掘に入る。9月16日飛鳥平遺跡調査終了。縄文中期、後期、晩期の竪穴住居跡、土壙、平安時代の竪穴住居跡の遺構が確認された。同日乳牛、東山地区所在の追加契約遺跡である妻の神II遺跡（船木班）と案内I遺跡（柴田班）、それに上葛岡IV遺跡の調査を終了した小林班の案内II遺跡の発掘調査が開始された。粗堀の段階では遺物の発見は僅少である。調査顧問奈良国立文化財研究所所長坪井清足先生各遺跡の発掘調査状況を視察し指導くださる。9月24日2ヶ月年継続調査の歌内遺跡の発掘終了。ここからは縄文時代のフラスコ状ピット、縄文時代竪穴住居跡1棟、平安時代の49棟に及ぶ竪穴住居跡と、12棟の中世の掘立柱建物跡の遺構の検出があった。9月26日青森県埋蔵文化財調査センター所長北山峰一郎氏と調査第三課長工藤泰博氏来所し、北の林II遺跡を視察する。9月27日歌内遺跡の発掘調査を終了した小玉班、西町地区の西町II遺跡の発掘調査に入る。中の崎遺跡では排水溝のある平安時代の竪穴住居跡、土師器合口甕棺が発見される。

10月4日東山地区の猿ヶ平I遺跡の発掘調査に岩見班が入る。同日岩手県北上市教育委員会沼山源喜治氏歌内遺跡他を視察する。西町II遺跡は時期不明の竪穴住居跡2棟が検出されたのみで遺物の出土は殆んどない。10月18日小玉班は西町II遺跡の調査と併行し、丘陵上の西町I遺跡の調査を開始する。10月後半は降雨多く発掘調査難行。北の林I遺跡、同II遺跡とも遺構の実測に終始する。10月25日北の林I遺跡で縄文時代竪穴住居跡3棟、平安時代竪穴住居跡22棟、土壙等の検出実測を終え調査終了する。10月28日明童長根遺跡の南方で新たに土師器を出土する遺跡を発見、一本杉遺跡（遺跡番号No.33）と命名する。

11月8日船木調査員払田樹跡調査事務所へ帰る。案内I遺跡、同II遺跡、猿ヶ平I遺跡では縄文後期の竪穴住居跡、フラスコ状ピットの検出がある。各遺跡の発掘調査とも午前中は、降雨の処理に時間を費やす。11月11日西町I遺跡発掘調査終了。出土遺物は縄文土器、弥生土器、遺構は検出されなかった。11月12日西町II遺跡及び上葛岡I遺跡で縄文中期の竪穴住居跡1棟を検出し調査終了する。11月25日館跡でもあり、縄文中期、平安時代、中世の竪穴住居跡の検出された妻の神II遺跡の発掘調査終了する。11月27日道路公団鹿角工事事務所と来年度調査予定の小坂町地内路線の遺跡分布調査について協議す。案内II遺跡下方の平場で縄文土器と竪穴住居跡の一部が検出され、新発見遺跡と認定される。遺跡名は案内III遺跡（遺跡番号No.34）とする。

12月2日縄文後期の竪穴住居跡、フラスコ状ピットの検出のあった案内II遺跡の発掘調査終了する。12月3日秋田大学教授新野直吉先生、北の林II遺跡他を視察する。熊谷太郎、柴田陽一郎調査員能代、秋田に帰る。12月6日猿ヶ平I遺跡降雪の中で発掘調査終了する。12月8日

孫右エ門館遺跡より、平安時代の堅穴住居跡1棟検出。焼失家屋のもよう。12月12日小坂町地内の縦貫道路線踏査を実施するも残雪と枯草多く、遺跡の確認は来春の試掘に待つ。孫右エ門館の発掘調査終了する。12月13日北の林II遺跡、中の崎遺跡、下乳牛遺跡の発掘調査が済み、発掘作業はすべて終了する。

### 3. 調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会		
調査顧問	坪井 清足	奈良国立文化財研究所所長	
	芹沢 長介	東北大学教授	
専門指導員	小林 達雄 国学院大学助教授		
	林 謙作	北海道大学助教授	
	桑原 澄郎	多賀城跡調査研究所研究第一科長	
	藤沼 邦彦	東北歴史資料館考古研究科長	
	須藤 隆	東北大学助教授	
調査担当者	岩見 誠夫	秋田県教育庁文化課 北の林I・猿ヶ平I遺跡	
	船木 義勝	秋田県教育庁文化課 妻の神II遺跡	
	熊谷 太郎	秋田県教育庁文化課 下乳牛遺跡	
	桜田 隆	秋田県教育庁文化課 小豆沢館、北の林II、上葛岡I	
		II遺跡	
	柴田陽一郎	秋田県教育庁文化課 案内I、孫右衛門館遺跡	
	小玉 準	秋田県教育庁文化課 歌内、西町I・II遺跡	
	橋本 高史	秋田県教育庁文化課 飛鳥平、鳥居平、中の崎遺跡	
	小林 克	秋田県教育庁文化課 駒林、上葛岡IV、案内II遺跡	
調査補佐員	栗沢 光男	藤井 安正、関直、山崎 文幸	
	三ヶ田俊明		
補 助 員	松岡 忠仁、北川 恵一、福島 昭彦、米村 博美	阿部 明人、児玉 悅郎、小田島幸二、佐藤 幸夫、佐々木金正	石木田正幸、田中 和徳、畠山 圭
			神田 公男
事務補助員	佐藤 順子	金沢万里子	
調査協力	庄内 昭男	秋田県立博物館主事	補佐員 鈴木秋良 補助員

花田 孝夫

調査協力機関 鹿角市教育委員会 東北縦貫自動車道対策事務所、鹿角市建設部建設  
課高速道路対策室

## 4. 調査の方法

### (1) 発掘区の設定

東北縦貫自動車道の調査では、路線内の遺跡地に  $5\text{ m} \times 5\text{ m}$  のグリッドを設定して発掘を行う。グリッド設定基準線は、歴史時代の遺跡は方位に合わせ、他は日本道路公団の設置した任意二本の中心杭を結ぶ線を設定基準線とし、路線の進行方向に沿わせる。

### (2) 測量と実測

地形や遺構状況に応じて、造り方測量、平板測量、航空写真測量の方法をとる。遺構の実測の縮尺は  $1/20$ 、遺構配置図は  $1/200$ 、竪穴住居跡のカマド、石垣塀などの平面図、断面図、土層断面図は  $1/1.0$  を原則とするが、必要に応じて任意の縮尺も活用する。

### (3) 遺構発掘と遺物のとりあげ

遺構の発掘は 4 分割法を原則とし、平面、断面、層序、レベル、遺物の実測は県統一のセクショントレスターに記入し、水糸高は標高を記入する。

遺物の取りあげは、1 点 1 袋、1 括 1 袋とし、遺跡名、グリッド名、遺物の種類、層位、出土年月日の記入された遺物カードを同封する。

遺構・遺物記号は、平城京発掘調査で実施しているものを参考に定めたものを使用する。

記号	遺構	記号	遺構	記号	遺構・遺物	記号	遺物
S A	柵列・柱列	S K	土 壤	S X(F)	焼 土 遺 構	R Q	石 製 品
S B	建 物 跡	S K(F)	フ ラ スコ 状 ピ ッ ツ	S X(R)	捨 場	R T	貝 製 品
S C	廊	S K(I)	豎 穴 状 遺 構	S X(S)	配 石 (巖石・立石・板石) ス ト ナ ザ ク ル	R U	人 骨
S D	溝・堀・濠	S K(P)	ビ ッ ト	S X(U)	土 器 埋 設 遺 構	R V	紙・布 製 品
S E	井 戸 跡	S K(S)	幕	R C	炭 化 物	R W	木・竹 製 品
S F	築 地・土 堆	S K(T)	溝 状 土 壤	R M	金 属 製 品	R Y	そ の 他
S G	菟 池	S L	河 川	R N	自 然 遺 物		
S H	広 場	S M	道 路・橋・階段	R O	骨 角 製 品		
S I	住 塔 跡	S X	そ の 他	R P	土 器 製 品		

#### (4) 写真撮影

実測と同様記録保存の要である写真撮影には、35%判小型カメラ2台(ニコンF-E)と6×9%判の大型カメラ(ホースマンプレス),ゼンザプロニカETRS 6×9×4.5%判とポラロイドカメラを使用する。

35%判カメラは、モノクロとカラーリバーサル用に使い分け、大判カメラは特に重要な遺構遺物の検出記録に、フィルムバックを交換し、モノクロ、カラーの撮影をする。撮影は遺構、出土遺物とも1方向三枚撮影を原則とする。また、ポラロイドカメラを日誌や遺構の検討、打合会に活用する。

#### (5) 遺物整理と実測

- ① 出土遺物は遺物台帳に記入し、写真や実測図とのスムーズな活用をはかる。
- ② 土器の内面実測が必要と思われるものは、4分割方法をとり、左半に外面、右半に内面および断面を記載する。実測図には輪積底、巻上げ底、文様、調整痕を主として記載する。
- ③ 大破片の実測は、土器の中心線を算出し180度回転して作図する。
- ④ 破片の拓本は、土器の外面を左に置き、中央に断面、右に内面図を表す方法をとる。
- ⑤ 石器の実測は、原則として第三投影図法をとる。

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 地形と地質

#### (1) 地形・地質の概要

本地域の地形は大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積低地の三つに区分される。

これらについて、秋田県(1973)、内藤(1970)および、日本道路公団の東北自動車道土性総断図表(日本道路公団仙台建設局: 1978年)等を参考にして地形地質の概要をまとめると次のようになる。

地形は、東側が800~1,100mの標高で、満壯年期のけわしい地形を示し、特に皮投岳(1,122.4m)、五の宮嶽(1,115.0m)などを中心とした起伏量の大きい山塊が南部に連なり、米代川は八幡平より上流では先行谷を形成して東西に流れている。地質は主として新第三紀中新世の火山碎屑岩類からなるが、それらを貫ぬいて石英安山岩や安山岩も分布している。また、福士川上流、谷内付近および湯瀬南方には粘板岩を主とする古生層の露出も知られている。これらの東側山地の山列はほぼ南北に連なっているが、北北東方向にのびる斜面や水系もみられる。これは新第三紀層の走向に大略一致するほか、貫入岩類や断層系の方向ともほぼ一致している。

一方、西側山地は400~600mの標高で、山容も東側山地ほどのけわしさは見られない。地質は東側山地と同様に新第三紀中新世の火山碎屑岩を主とするが、大葛層、大滝層などでは砂岩、泥岩などの碎屑岩が広く発達している。これらの走行は南北方向のものが多い。

花輪盆地南部の段丘面は、花輪高位段丘、花輪中位段丘(内藤, 1970)<sup>※</sup>、鳥越段丘(秋田県, 1973)、松館段丘、大里段丘の5段に区分できる。このうち、鳥越段丘は秋田県(1973)では鳥越段丘と閑上段丘に区分されたものであるが、後者は前者の河成二次堆積面であり、構成層の時代的な差異も区分を必要とするほど大きいとはみられないことから一括して使用する。また、松館、大里の各段丘は、内藤(1970)の花輪低位段丘群とされたものである。なお、本報告書I(秋田県教育委員会, 1981)において、中位段丘と閑上面、鳥越面を一括して180~250m面としたが、試録資料および露頭の観察結果などから中位段丘構成層が花輪以南でやや広く分布することが明らかになったのでこれを区別することにする。次にそれについて簡単に記載する。

<sup>※</sup>以下、高位段丘、中位段丘と略称する。



第1図 段丘地形図

高位段丘：福士川、浦志内川、歌内川等が盆地に注ぐ山地の末端部からなだらかな斜面で扇状地状に広く分布する。かなり開析されているものの明らかに平坦面を残している。

標高は1/2.5万地形図から、浦志内川左岸の扇顶部で350 m、葛岡北東の末端部で240 mであり、平均こう配は7.2% (4.1°) となる。また、歌内川流域でも320 mから250 mまでの高度差を持つ。一方、福士川左岸では350 mから250 mまでであるが、右岸では花輪スキーフィールド北東の300 mから女森西方の200 mまでと明らかに低い。また、平均こう配も福士川以北では4.4

% (2.5°) と小さくなる。

構成層は径数cmから50cm前後までの亜角礫が雜然と混入した不淘汰礫層であり、地表面に近い部分は數mにわたって風化が進み、礫はくさってマトリックスと大して変わらないかたさになることが多い。段丘面の分布範囲のほかに、葛岡西方では鳥越軽石質火山灰層（内藤、1970）の下に見られたりする。全体的に扇状地堆積物としての層相をよく残している。また、上部は数mが赤褐色の粘土質土になっており、中に未風化的亜角礫もしばしばみられる。最上部には粘土質になった火山灰層もみられる。

ところで内藤（1970）は、上田（1965）の産土神断層をさかいにしてそれ以北の高位面が240m前後、以南が290m前後と異なること、さらに中位段丘の分布範囲が以南に限られること等から断層以南は以北に対して50m程度隆起したことを指摘した。かりに断層以北の河床が安定しているとすれば、前述した福士川をさかいにした（産土神断層およびその延長にはほぼ一致する）高位面の平均こう配のちがいは、断層以南のブロックの西に傾動した隆起運動を示唆するものかも知れない。

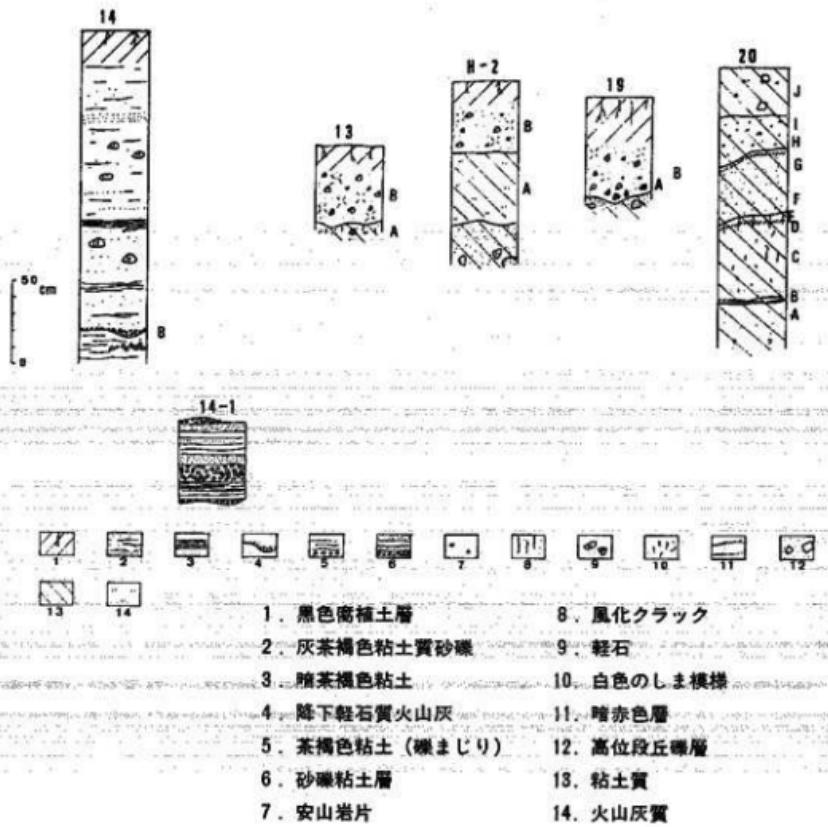
**中位段丘**：浦志内川下流で標高230mから180m、歌内川下流で270mから220mにかけて分布し、末端部は鳥越軽石質火山灰層の火砕流堆積物におおわれるが明瞭に扇状地状の地形面を残している。平均こう配は柏木森の西方で6.0% (3.5°) である。

構成層は黄褐色のシルトないし砂のマトリックス中に数cmから30cm以上の角礫ないし亜角礫が雜然と混入する礫層で、全体的に塊状であるが末端部では厚さ数cmの連續性のわるいシルトないし砂の薄層を含むこともある。葛岡南方ではN値が70以上の高位段丘礫層の土に、最大6mの厚さの泥炭質粘土層が発達する。この付近は浦志内川の扇状地地形と、歌内川の扇状地にはさまれた湖沼的な堆積環境にあったものであろう。なお、この粘土層の上位に5~6mの厚さで重なる中位段丘構成層は、すでに述べたように不良淘汰の亜角礫からなる礫層であるが、全体的にマトリックスは灰緑色を呈する。同様の色調の構成層は花輪東方の鳥越軽石質火山灰層の下位にもみられる。

**鳥越段丘**：鳥越軽石質火山灰層の堆積面であり、標高は福士川の右岸で170m、左岸から浦志内川にかけて180~190m、歌内川下流で190~200mとなる。火砕流台地としての形態を示しており、段丘面は平坦で段丘崖は急崖となることが多い。

**松館段丘**：米代川左岸に沿い、尾去から松館、荒町にかけて広く分布し、標高は160~170mで夜明鳥川、黒沢川等による扇状地の開析された段丘とみられる。構成層は未確認である。

**大里段丘**：米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で、標高は150~155mと低平であり、構成層も上部はくずれやすい河床性の礫層を主とし、田泥質の砂理層が重なっている。葛岡西方の段丘崖の下部から中部にかけて、固結度のよい成層した円磨礫を含む砂礫、粘土層が見ら



第2図 露頭柱状図

れるが、これは上部の堆積物と一括するには問題があり、段丘基盤の更新統の一部である可能性がつよい。

ところで、この地域の第四紀地質と地形を特徴づけるものに花輪断層と十和田火山起源の火山碎屑物層があげられる。

花輪断層はほぼ直線的に米代川沿いに北上しており、東西における山地の起伏層、山容のちがい、段丘の非対称的分布等は、東側山地を含む断層の東部地塊が第四紀を通じて上昇傾向がより強かったことを物語っており、注目に値する。一方、火山碎屑物層については内藤（1966, 1970）、中川・他（1972）等によりくわしく知られており、古い方から高市軽石質火山灰層（ $25,850 \pm 1,360$ ），鳥越軽石質火山灰層（ $12,000 \pm 250$ ），申ヶ野軽石質火山灰層（ $8,600 \pm 250$ ），大湯軽石質火山礫層（ $3,680 \pm 130$ ），毛馬内軽石質火山灰層（ $1,280 \pm 90$ ）に区分されている。このうち大湯軽石質火山礫層と毛馬内軽石質火山灰層については同一火山活動にと

もうう降下堆積物、火碎流堆積物であることが知られている。(大池、1974; 藤本、1980)※。

第1表 重鉱物組成

サン ブルNo	重鉱物	鉄 鉱 物	角 閃 石 Ho	單斜輝石 Cpx	斜方輝石 Opx	Opx Cpx	Cpx Ho	測定個数
14-B	60		5	35	7.0			332
14-A	56	7	10	27	2.7	1.4	418	
14-C	57	18	7	18	2.6	0.4	332	
13-A	66.1	1.8	5.3	26.5	5.0	2.9	393	
13-B	16.9	13.5	33.5	36.1	1.1	2.5	266	
H-2A	43.7	0.5	17.1	38.7	2.3		387	
H-2B	10.9	12.0	36.6	40.5	1.1	3.1	276	
19-A	36.2	8.3	18.5	37.0	2.0	2.2	335	
19-B	9.4	22.1	32.0	36.5	1.1	1.5	244	
20-J	70.7	5.6	5.6	18.1	3.2	1.0	425	
20-I	61.7	1.7	5.7	30.9	5.4	3.4	418	
20-H	70.8		6.6	22.6	3.4		380	
20-G	76.0	0.2	3.5	20.2	5.8		430	
20-F	49.0	0.2	11.4	39.4	3.5		412	
20-E	40.9		15.2	43.9	2.9		369	
20-D	20.2	0.2	29.5	50.0	1.7		312	
20-C	13.5		35.2	51.3	1.5		193	
20-B	18.7	0.4	32.5	48.4	1.5		283	
20-A	79.4	3.7	5.1	11.8	2.3	1.4	296	

甲ヶ野軽石質火山灰層は角閃石が少なく、 $Cpx/Ho$ は2.8(8個平均)に対し、鳥越軽石質火山灰層は1.4(20個平均)。

東 すなわち、中川、ほかにより大湯浮石のC<sup>14</sup>年代とされたものは同層の下位の炭質物についての値であり、同層の降下時期よりも古い年代値を与えているものであろう。

## (2) 発掘地点の地質

### 駒林遺跡

大里段丘上にある。山側ほど田泥質の砂礫層が厚いが、その下に大湯軽石質火山壁層が分布し、さらに下部は亜角礫を含む砂礫層になる。砂礫中には5cm以上の軽石片が散在するが、これは鳥越軽石質火山灰層起源のものである。(第1表の14-A, 14-C)。

ところで大里面の構成層のうち下部のものは砂礫層、粘土層、砂層の互層であり、成層状態がよく、しまっていてかたい(第2図の14-1)。これと同質の砂礫層は本遺跡西方の段丘崖においても見られる。14-1においては露頭と大里面のあいだは約5m位であって田泥質砂礫層との直接の関係は不明であるが層相が極めて異なることから一連の構成層として一括するには疑問が残る。高位段丘構成層より古い盆地内の更新統の一部と考えられる。

#### 上葛岡IV遺跡

標高 214 ~ 215 m で中位段丘上にある。上部は 10 cm の黒色腐植土層で、その下にオレンジ色の軽石 (0.3 ~ 0.8 cm) に富み、安山岩の岩片 (0.5 ~ 1.5 cm) が目立つ火山灰層が 35 cm の厚さでみられる (13-B)。この火山灰と同質な火山灰は本遺跡の東方の高位段丘上にも 30 cm の厚さで分布しており (H-2B)。降下火山灰である。これらは重鉱物組成では申ヶ野軽石質火山灰層の特徴に似ている。次に、この火山灰の下にはかなり風化した軽石を含む粘土質灰茶褐色の火山灰層 (13-A) が見られるが、これは乾燥部でたてにクラックが入っていることが多い。

#### 案内II遺跡

標高 209 ~ 211 m で高位段丘の末端部にあり、開析されて丘陵状であるがよく原面を保存している。最上部の黒色腐植土 (26 cm) 中に大湯軽石質火山礫層をうすく含み、その下は 33 cm でオレンジ色軽石を含む火山灰に変る。これは軽石が 0.4 ~ 1 cm、岩片が 0.2 ~ 1.5 cm (時に 4.5 cm) の降下火山灰で、重鉱物組成上申ヶ野軽石質火山灰層に似る 19-A, 19-B。この火山灰層より下位は赤褐色の粘土で、未風化の角閃石が散在しており、高位段丘の堆積物とみられる。

#### 猿ヶ平I遺跡

標高 203 ~ 205 m で高位段丘上にある。最上部は約 60 cm の厚さで黒色腐植土が発達し、この中に地表から 30 cm 位のところに 2 ~ 7 cm の厚さで大湯軽石質火山礫層が含まれる。黒色腐植土層の下位には所によりオレンジ色軽石と安山岩片の細礫を含む火山灰が見られるが、これは上葛岡IV遺跡や案内II遺跡で見られるものと同質の降下火山灰層である。次に本遺跡の黒色腐植土層より下 1.6 m の土壤断面で見られた火山灰層について記載する。

この断面では肉眼的に 5 層の火山灰層が識別されるが、いずれも風化して粘土質になっており軽石は含まれない。最下位の火山灰 (A) は茶褐色粘土質で礫質の部分はなく、水洗しても細粒の砂、粘土以外はほとんど残らない。角閃石を含んでいる。この上は白色のすじ (不規則) が入る火山灰層で (B, C, D) 上下を赤色層 (2 cm) にはさまれ、上部はクラックがたてに入っている (E)。なお、B の部分は 1 ~ 3 mm の黒色の岩片が目立つ。更に上位は径 0.1 ~ 0.6 cm の黒色安山岩礫を含む火山灰層で灰茶褐色を呈し、上下が暗赤褐色 (2 ~ 4 cm) になっている (F, G)。この上位は重鉱物組成は大して変わらないものの (H)、白っぽい礫 (1.0 ~ 0.2 cm) が目立つ黄褐色火山灰で、更に上位は径 2.0 ~ 3.5 cm の安山岩礫が散在する粘土質火山灰になる (J)。J は下位の火山灰とは異なり角閃石を比較的多く含んでいる。A ~ J は、花輪盆地内では異質な火山灰であり、簡単に対比はできないが、今後、広く追跡する必要がある。

## 参考文献

- 内藤博夫「秋田県米代川流域の第四紀火山碎屑岩と段丘地形」『地理学評論』第39巻第7号  
1966年
- 内藤博夫「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論』第43巻第10号  
1966年
- 中川久夫・他「十和田火山発達史概要」『東北大地質古生物研究報』第73号 1972年
- 大池昭二「十和田火山は生きている」『国土と教育』第26号 1972年
- 秋田県「秋田県総合地質図帳、花輪」 1973年
- 藤本幸雄「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成(その1)大館、花輪盆地における火山灰層」  
『大館工業高校研究紀要』 1980年
- 上田良一「秋田県北部の第三系の層位と造構造運動について」『秋田大地下資源開発研究所報  
告』 第32号 1965年

## 2. 環境と周辺の遺跡

東北縦貫自動車道の通過する鹿角は、秋田県の北東隅に位置する。ここは米代川の最上流部にあたり、奥羽山脈中に形成された壯年期の山々と断層盆地からなる。年間の平均気温は花輪の観測によると9.8℃、冬期の最低気温は-22℃にも達したことがあり、年間を通して風向は西にかたむき、風速は小さく、積雪もあまり多くない昼夜の温度較差の大きい内陸的気候を示す土地である。<sup>(註1)</sup>

盆地の東には五の宮嶺(1,150m)、皮投岳(1,122m)、中岳(1,024m)などの急峻な地形の壯年期の山が連なり、花輪盆地東の出口、湯瀬渓谷から流れくる米代川の本流は、八幡平地区で熊沢川、夜明鳥川、歌内川、浦志内川を合流させて盆地の西部を北流し、花輪柴平地区では福士川、乳牛川、間瀬川、草木川、北西の十和田地区にて西流する大湯川、小坂川を入れて大館盆地へ流れ去る。

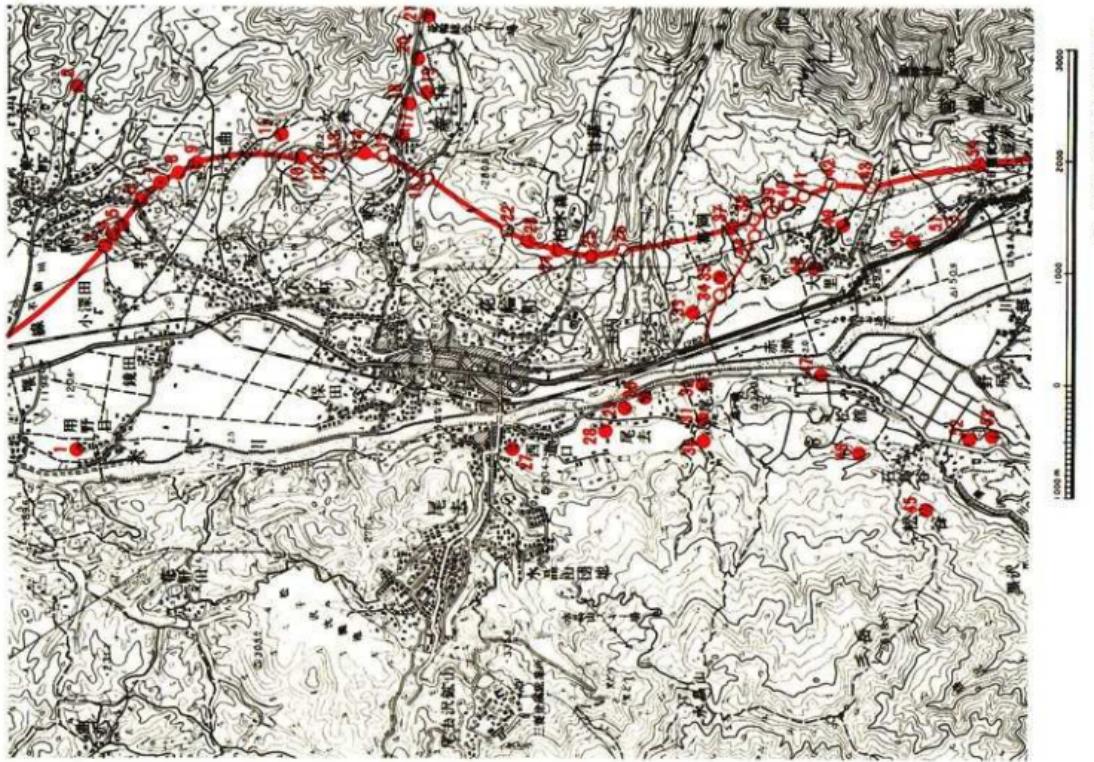
この水系や盆地周辺には花輪高位段丘、鳥越段丘などと呼ばれる数段の段丘の発達が見られ、<sup>(註2)</sup>段丘上には大湯環状列石をはじめとし、450ヶ所以上に及ぶ縄文時代から中世にかけての遺跡<sup>(註3)</sup>が確認されている。

東北縦貫自動車道の通過が予定され、今年度19遺跡の発掘調査の行われた八幡平地区の小豆沢、大里、玉内(官廳地区)、花輪地区東の新興住宅地東山と乳牛、東町の柴平の地域には花輪高位段丘、中位段丘、鳥越段丘、大里段丘と呼ばれる標高150~270mにかけて4段の段丘面が確認されており、ここに存在する遺跡は「秋田県遺跡地名表」と「鹿角市遺跡地図」に記載のあるように、54ヶ所以上の多さにわたる。旧石器時代の遺跡の発見はなく、縄文時代から中世にかけての複合遺跡が殆んどである。米代川対岸の松館、尾去地区にも松館面と呼ばれる標高160~170mの段丘面が開拓されており、ここも遺跡が多い。

縄文時代の遺跡は、今年度発掘調査の行われた上葛岡IV遺跡の早期末のものからはじまり、前期は円筒土器を出土する遺跡が多い。それらの中の一つ、清水向遺跡は昭和29年に発掘調査<sup>(註4)</sup>が行われ、秋田県で最初に2棟の竪穴住居跡が報告されている。中期になると、円筒土器とともに大木式土器を出土する遺跡が多くなる。飛鳥平遺跡、北の林I遺跡などでは、円形で石組炉を持つ中期末大木10式の竪穴住居跡が報告されている。<sup>(註5)</sup>後期は十腰内式土器を出土する飛鳥平遺跡、案内I遺跡があり、晩期の遺跡は、前半期の配石を伴う玉内遺跡と東在家遺跡が著名である。<sup>(註6)</sup>

弥生時代の遺跡は少量の撚糸文土器を出土する上葛岡III遺跡、天王山式土器を出土する猿ヶ平I遺跡がある。立地は高位の段丘上で遺構は確認されておらず、稻作農耕の可能性は低い。

第3図 周辺道路分布図



第2表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名(所在地)	時代・時期	遺跡・遺物
1	用野目(用野目)	平安	绳文器 土器群
2	新野田(新野)	平安	绳文器
3	西町II(西町)	繩文	绳文土器、弥生土器
4	西町I(西町)	繩文、弥生	平安堅穴住居跡、ラスコ状ビット、绳文土器、土師器、須恵器
5	下乳牛(下乳牛)	繩文、平安、中世	绳文土器
6	乳牛平(乳牛平)	繩文、平安	平安堅穴住居跡、土塙墓、獨立柱建物跡、ラスコ状ビット、绳文土器、土師器
7	者の神田(者の神)	繩文、平安、中世	平安堅穴住居跡、平安堅穴住居跡
8	妻の神II(妻の神)	繩文、平安	平安堅穴住居跡、土塙器、绳文土器、ラスコ状ビット
9	妻の神I(妻の神)	繩文、平安	平安堅穴住居跡、土塙器、绳文土器、ラスコ状ビット
10	猿ヶ平II(猿ヶ平)	繩文(早期~晚期)	绳文土器(早期、円筒下層b、大木9、10式、十脚内、大洞B)、绳文堅穴住居跡
11	大曲(大曲)	繩文、平安	绳文土器、土師器
12	猿ヶ平I(猿ヶ平)	繩文(中期~晚期)	绳文土器(大木8式、十脚内1式、大洞B、C、G式) 弥生
13	案内II(案内)	繩文	绳文土器(崩壊、後期)、堅穴住居跡、土塙、配石遺構
14	案内III(案内)	繩文、平安	绳文土器(崩壊、後期)、土師器、須恵器、绳文堅穴住居跡、平安堅穴住居跡
15	案内I(案内)	繩文、平安	绳文土器(十脚内1式)、土師器、绳文堅穴住居跡、平安堅穴住居跡
16	孫右ヶ門館(孫右ヶ門館)	繩文、平安	绳文土器、土師器、平安堅穴住居跡、屋外炉
17	東山A(東山)	繩文、弥生	绳文土器(後期)、弥生土器
18	東山B(東山)	弥生	弥生土器
19	赤坂B(赤坂)	绳文、続繩文	绳文土器、続繩文土器
20	赤坂A(赤坂)	绳文	绳文土器
21	日向屋敷II(日向屋敷)	繩文	绳文土器
22	中の崎(中の崎)	繩文、平安	平安堅穴住居跡、土師器、須恵器、獨立柱建物跡
23	柏木森(柏木森)	繩文、平安	绳文土器(早期、後期)、土師器、土塙、ラスコ状ビット
24	明室長板(明室長板)	繩文	绳文土器(後期、晚期)、土師器、土塙、ラスコ状ビット
25	一本杉(一本杉)	繩文、平安	绳文土器、土師器、須恵器、绳文堅穴住居跡、平安堅穴住居跡、獨立柱建物跡
26	上葛岡IV(上葛岡)	繩文	平安土器
27	下平(下平)	弥生	弥生土器
28	六角平(六角平)	繩文	绳文土器(大湖式)
29	三光原2号(東在家)	平安	研子玉
30	三光原1号(東在家)	平安	玉類、勾玉
31	東在家(東在家)	繩文(晚期)	绳文土器(大湖B C、C式)、土偶
32	尾去(尾去)	繩文	绳文土器
33	清水向(清水向)	繩文	绳文土器(円筒下層c、d式、大木b式、円筒上層a、d式)、堅穴住居跡
34	駒林(駒林)	繩文	绳文土器、住居跡
35	下館(下館)	中世	绳文土器
36	尾去A~D(尾去)	繩文、平安	绳文土器、土師器
37	上葛岡III(上葛岡)	繩文	绳文土器
38	上葛岡I-(上葛岡)	繩文	绳文堅穴住居跡、绳文土器
39	北の林I(北の林)	繩文、平安	绳文堅穴住居跡、土塙、绳文土器(大木10式)、平安堅穴住居跡、獨立柱建物跡
40	北の林II(北の林)	繩文、平安	绳文堅穴住居跡、绳文土器(十脚内1式)、平安堅穴住居跡、土師器
41	飛鳥平(飛鳥平)	繩文、平安	绳文土器、绳文堅穴住居跡
42	鳥居平(鳥居平)	繩文	绳文堅穴住居跡、土塙、绳文土器(大木8式、後期)、平安堅穴住居跡、土師器
43	案内(案内)	繩文、平安	绳文(円筒上層a、b層)
44	上葛岡II(上葛岡)	繩文	绳文(円筒上層a、b層)
45	石鳥谷(竹集)	繩文	绳文土器
46	後山田II(後山田)	繩文	绳文土器
47	岩瀬(岩瀬)	繩文	绳文土器
48	大里塙(大里、塙合)	中世	绳文土器(大木9式)
49	大里(大里)	繩文	绳文土器(大木9式)
50	下笠の巣(下笠の巣)	繩文	绳文(中期、後期)
51	小豆沢館(小豆沢)	繩文、中世	绳文土器
52	下モ和志賀(下モ和志賀)	土器	土器
53	田中館	中世	土器
54	堂の上(堂の上)	繩文	绳文土器

奈良平安期の遺跡としては、県内で墳丘の残っている唯一の古墳、尾去地区の三光塚古墳と東北縦貫道路線上の遺跡、歌内、北の林I、同II、上葛岡IV、中の崎、案内II遺跡など、数十棟の竪穴住居跡の検出されている平安期後半の聚落跡がある。

環状列石と終末期古墳群のほかに、魔角の特色ある遺跡を求めるすれば、中世の館跡があげられよう。42館、もしくは48館と称される城館がせまい盆地周辺に群在する。<sup>(註8)</sup>

鎌倉時代後期に關東から移住した成田、安保、秋元、奈良の4氏に始まるとされるこの中世の城館は、大里館、玉内館、尾去館、古館、乳牛館などの地名で村落に残る。既中、大里館は鎌倉時代以来安保一族の惣領の本拠で、史料の初見は南北朝にさかのばる。すなわち、建武3年（1336年）と4年（1337年）に陸奥国北朝党のため攻撃された記録（南部文書）がそれである。大里館以外の館は、戦国期における南部氏と安東氏の確執の記録に散見するが、創建期など不明部分が多い。これらの館は平地に臨む舌状台地を空堀で分断し、主郭を中心に数個の郭を配しており、館上面の平場は、繩文、弥生、奈良、平安時代の人々の居住地でもあって、各時代各種の遺構遺物が出土する。

註1 秋田県教育研究所『秋田県地誌』研究No.104 1969年

註2 藤本幸趙氏の(1)「地形・地質」による。

註3 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』 1977年

魔角市教育委員会『埋蔵文化財の保護と開発に関する説明会資料』 1979年

註4 大和久善平・奈良修介『秋田県史考古編』 1960年

奈良修介・豊島昂『秋田県の考古学』 1967年

岩見誠夫『半田先生と秋田県の考古学』 1981年

註5 秋田県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告会発表要旨』 1981年

註6 阿部義平『配石苑の成立』『考古学雑誌54-1』 1965年

註7 註4と同じ

註8 沼館愛三著・盛田聰編『津軽諸城の研究』（草稿）青森県文化財保護協会 1977年

塙谷順耳『魔角の館』『秋田県立博物館研究報告』第3号 1978年

第4図 秋田県能代市における東北新幹線自動車連絡線上の道路分布図



1:50,000

1000 2000 3000 4000

## 上 葛 岡 IV 遺 跡

遺 跡 番 号 No.13

所 在 地 鹿角市八幡平字上葛岡

調 査 期 間 昭和55年6月8日～9月19日

発 勘 調査予定面積 4,400m<sup>2</sup>

発 勘 面 積 4,000m<sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

遺跡は、国鉄花輪線陸中花輪駅南東2.2km米代川右岸の標高215m前後の台地上に位置する。遺跡の立地する台地は、花輪盆地の東側に広がる一連の台地の一画、標高804mの北林山の裾野北端に位置する。北林山から広がる裾野には、米代川へ注ぎ込む浦志内川、歌内川がそれぞれ西流して、台地を画しており、遺跡地北側は比高差約210mの急斜面となって浦志内川へと続いている。

遺跡地は、本来台地を東西に貫く市道苅岡線の南側を含めてその範囲と推定されるが、現在この市道の南側は整地のため削平されていた。したがって調査区は市道から北側、浦志内川によって画される台地縁辺までの幅約50m程の現在畠地として利用されている箇所に限られた。また台地は全体に北西側に向って緩い傾斜を呈するが、調査区南側1/4程を横切る農道付近で3~5m前後の段差があり、便宜上調査区をこの農道を境として南側と北側とに分けている。

遺跡の立地する台地は、東北縦貫自動車道の予定線でも多くの遺跡が確認されており、南側から平安時代竪穴住居跡50数基を検出した歌内遺跡（遺跡番号No.6 55年度調査、東北縦貫自動車道発掘調査報告書II所収）、飛鳥平遺跡（遺跡番号No.7 55年度調査、同報告書III所収）、縄文時代後期と平安時代の複合遺跡である飛鳥平遺跡（遺跡番号No.8 55年度調査、同報告書III所収）、平安時代竪穴住居跡の検出された北の林I遺跡（遺跡番号No.9 55年度調査、同報告書III所収）、北の林II遺跡（遺跡番号No.10 55年度調査、同報告書III所収）、縄文時代中期の上葛岡I遺跡（遺跡番号No.11 55年度調査、同報告書IV所収）、縄文時代後期の上葛岡II遺跡（遺跡番号No.32 55年度調査、同報告書IV所収）、上葛岡III遺跡（遺跡番号No.12 54年度調査、同報告書I所収）等がある。これらの遺跡は、歌内川と浦志内川に挟まれた標高200m前後の一つづきの台地上に位置するが、本遺跡と同じように平安時代竪穴住居跡を検出した遺跡は、より狭小な沢筋によって区切られた舌状に張り出した台地上に立地している。また、立地の条件を異にするが、浦志内川の左岸より低位の標高約180mの台地上には県内で初めての住居跡を検出した縄文時代前期の清水向遺跡、右岸の標高約155mの台地上には、立石を伴った環状の組石の検出された縄文時代晚期の土内環状列石がある。さらに、本遺跡と浦志内川の対岸にあたる台地には、やはり平安時代竪穴住居跡を検出した一本杉遺跡が遺跡番号No.33として追加され、昭和56年度に調査が実施されている。

## 2. 調査の方法

調査は、日本道路公団設置の東北縦貫自動車道予定地内中心杭STA110+80とSTA111を結ぶ直線を基線とし、STA110+80を基準点として方眼杭を設置し、5m×5mのグリッドを設定して行った。

調査区は前述したように、農道によって南側区と北側区とに分かれていたため、便宜上その呼称を用いた。また、南側区と北側区では5m程度の高低差があり、粗掘作業はその両区で併行しながら行った。調査区はその大半が畑地で整地が行われていた。畑地の耕作は鍵層となるべき浮石層を貫いて行われており、部分的には所謂地山面まで及んでいた。このため、粗掘作業では、浮石層下の黒色土までを除去した。次いで遺構のアラジ確認にあたっては、地山面の精査によって行い、部分的プランの不鮮明な箇所には試掘溝を入れる等の措置をとった。

遺跡基本層序の観察は、Fライン、及び4ライン、11ラインに残した跡によっておこなったが、前述したように、調査区の表土以下地山までは耕作のための整地が行われており、遺跡全体を通しての基本層序の把握は困難であった。最終的には、比較的表土の厚く残っていた16-Bグリッドに設けた試掘坑の断面によって観察を行った。

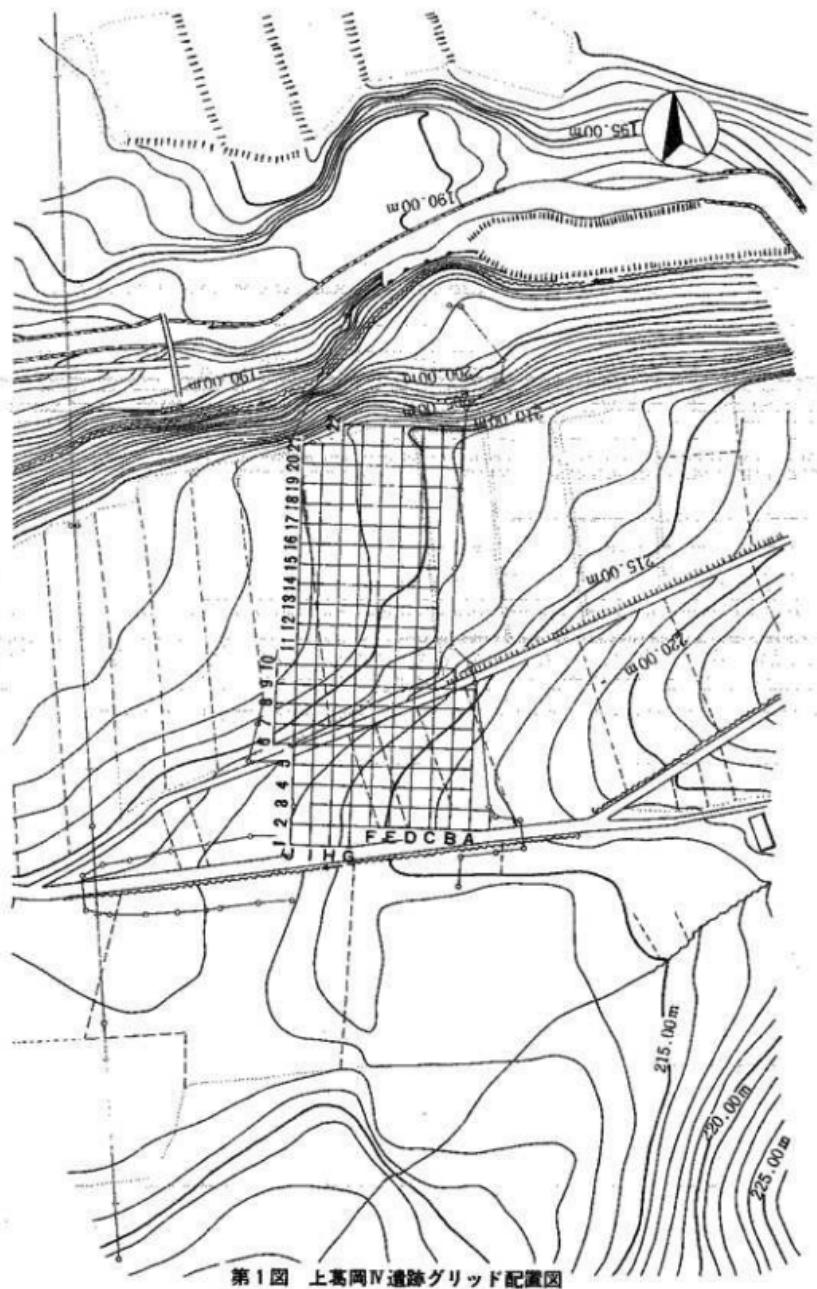
粗掘作業での遺物のとりあげは、方眼杭によって設定したグリッド毎に行い、遺構精査中に出土した遺物については、その遺構名を付してとりあげたが、その際原則として遺構内の出土位置及びレベルを記録することとした。

## 3. 調査の経過

本遺跡の調査は、昭和56年6月8日から開始し同9月19日までの約3ヶ月間を費して行われた。なお粗掘作業の開始前に遠景の写真撮影を5月23日に、また仮杭の設置を5月24日からおよそ1週間をかけて行っている。

6月8日以降の調査概略は以下の通りである。

- 6月8日 農道北側台地縁辺部の雜木刈払い、及びグリッドの設定、粗掘作業開始
- 6月10日 第12号住居跡プラン確認
- 6月23日 繩文時代晚期土器片、及び石棒出土
- 6月24日 繩文時代前期一括土器片の出土
- 6月25日 農道南側区粗掘作業開始、第1号住居跡プラン確認
- 6月26日 繩文時代後期一括土器片の出土
- 6月27日 第8号住居跡プラン確認



第1図 上高岡IV遺跡グリッド配置図

- 6月30日 第1号溝跡プラン確認
- 7月2日 農道南側区粗掘作業終了
- 7月7日 粗掘作業終了、遺構確認面精査開始、方眼杭設置
- 7月9日 方眼杭設置終了
- 7月10日 第2号住居跡プラン確認、第1号、7号、8号、9号、12号、13号、土壤プラン確認
- 7月11日 第3号住居跡、第4号住居跡、第5号住居跡、第6号住居跡プラン確認
- 7月14日 農道南側区プラン確認、第1号住居跡から精査開始
- 7月22日 第2号、3号、4号、5号、21号、23号、土壤プラン確認、精査開始
- 8月1日 第7号住居跡、第8号住居跡プラン確認、精査開始、第2号溝跡プラン確認
- 8月7日 第9号住居跡プラン確認、精査開始
- 8月18日 挖立柱植物跡精査
- 8月23日 第12号住居跡精査開始
- 8月26日 農道南側区のピット群精査開始
- 8月28日 第11号住居跡プラン確認精査開始、第3号溝跡プラン確認
- 9月3日 第10号住居跡プラン確認精査開始
- 9月16日 遺跡基本層序確認のため試掘坑を設け、断面図を作成する
- 9月18、19日 調査区の全体図平板測量によって作成、全体写真撮影、調査完了

#### 4. 遺跡の層位

本遺跡の上層堆積状態を確認するためトレーナーを設け、土層断面図を作成した結果、次のI～IXまでの9つに分類することができる。

- I：色調は上層では、黒褐色を呈し、下層黒色へと漸移する。比較的孔隙が多く、粘性も少い。径1mm～7mm程のバミスを3～5%含むが、その量もまた上層少から下層多と漸移する。バミスの混入状態は本遺跡の豈穴内に充填する埋土と共通する上層は、耕作による擾乱を多くうけている。
- II：十和田火山灰に由来すると思われるバミス層である。堆積状態は良好とは言えず部分的に認められたにすぎない。黒褐色土中に、バミスがかなりの量混入した程度である。特に上層では混入量は希薄となり、I層下部へと漸移する。本遺跡住居跡に若干ながらブロック状のバミスの混入を確認したが、そのあり方はII層下部のバミスの凝縮した形である。

III：色調は、黒色を呈する。比較的均質であり、孔隙も少なく粘性もやや認められる。バミス等の混入も殆んど認められない。

IV：色調は、上層では黒褐色を呈し下層はにぶい黄褐色へと漸移する。均質であり、孔隙は少なく粘質である。

V：色調は、明黄褐色を呈する。細砂及びシルトよりなる。粘性は殆ど認められないが、孔隙はなく硬く締っている。

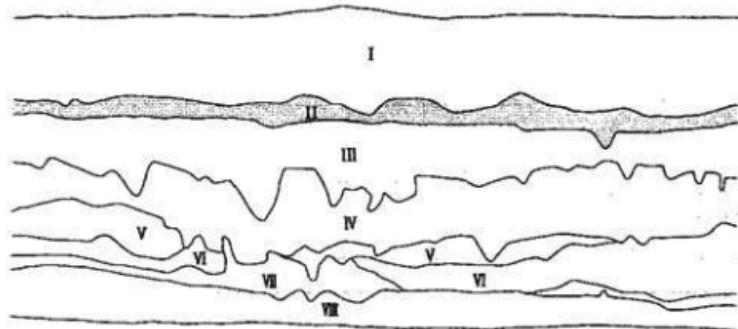
VI：色調は、黄褐色を呈する。粗砂及び細砂よりなる。V層と同様、粘性はないが、硬く締っている。

VII：色調は、明黄褐色を呈する。シルトを主体とし若干細砂が混じる。粘性なく硬く締る。

VIII：色調は、にぶい黄褐色を呈する。粘土層である。

IX：色調は、にぶい黄褐色を呈する。凝灰岩（色調は緑灰色を呈し径15~20cm程度）を多く含む。

以上、土層中、本遺跡での竪穴及び土壙等の確認はIV層上面で行われ、また、縄文時代後期及び晩期土器片はIV層上層から前期の土器はIV層下層からV層上層にかけて出土している。また、VII層は第7、8号住居跡の床面をなしており、第10、11号住居跡はほぼIX層上面まで掘り込まれている。



第2図 遺跡の層位

## 5. 遺構と遺物

### (1) 繩文時代の遺構と遺物

遺構としては、土壙4基があげられるが、これらの土壙については積極的に縄文時代の所産とする根拠がない。伴出する遺物があっても縄文土器の細片である。ここで、縄文時代の遺構として記すのは、1つに他に確認されている土壙が一定の型をもって検出されているからであり、また調査区全体を通して出土している遺物が縄文時代と平安時代とに限られるという、甚だ消極的な理由による。したがって、縄文時代という大枠の中に入れることは可能であるが、より細かな時期の特定及び性格の把握は困難である。

縄文時代出土遺物は、早期後葉から晩期に至る各期の土器片及び石器類である。これらの遺物は遺構に伴って出土したものではなく、その殆どが遺構外から出土している。また、各期の遺物はそれぞれ平面的な分布を異にしてはいたものの、層位的な事実の観察は困難であった。

遺構外出土土器の大半は単独の破片として出土したもので、一括の出土例、単独の破片どうしが接合した例は極めて稀である。

第4図は一括で出土した土器の出土状況を示したものである。

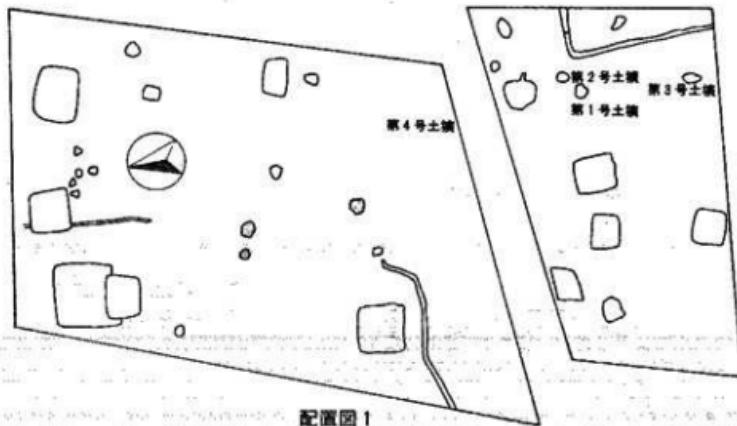
第5図1~7は、所謂表裏縄文の施された土器である。原体はRLを用いているが、6のみLRの原体を使用している。胎土には若干の纖維を含み、焼成も良好で全体に薄手に作られている。この種の土器は、赤御堂貝塚、崎山弁天遺跡、早稲田貝塚等で出土例があり、また県内では大地平遺跡（遺跡番号No.4、昭和54年度調査、東北緯貫自動車道発掘調査報告書I所収）でも出土している。早期後葉に位置づけられよう。

第8図は、尖底の深鉢形土器で器表全面にRLRとLRLの複節の原体が結束されて横位に回転されている。器内面は、指頭による粗い調整が施されている。胎土にはかなり多量の纖維を含み、かなり厚手につくられている。この種の土器は沢内B遺跡等に出土例があり、早期末葉~前期初頭に位置づけられよう。

第5図8, 9は2条1組の撚糸圧痕の施された土器であり、平行並びに波状の文様が描かれる。薄手につくられてはいるが、中期初頭円筒上層a式に比定される。

第5図10, 11は折り返し口線上に粘土紐によって鋸歯状の貼付文が施されたものであり、12~17は粘土紐による隆帯上及び隆帯に沿ってヘラ状工具による刻目の施されたものである。いずれも中期前葉円筒上層b式に比定される。

第5図18, 19は2条の平行沈線文が文様を構成している。19は沈線間が微隆帯となり、波状口縁の波頂部には、刺突が施される。後期前葉十腰内I式に比定される。



配置図 1

第1表 第1号土壤観察表

検出区	標 因	3	回数	20
法 量	開口 部 位	底 位	深 度	傾 斜 角
層 土	250	140	50	103°~116°
	1. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少く孔隙多い 2. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少く孔隙多い 黑褐色土粒子10%混入する 植物相はある 3. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少く孔隙多い 黑褐色土粒子20%混入 植物相はある 4. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少く孔隙少い 黑褐色土粒子7%混入する 5. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少く孔隙少い 黑褐色土粒子1%以上より植物相はある 6. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少く孔隙少い 黑褐色土粒子10%混入 植物相はある 7. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少く孔隙少い 黑褐色土粒子20%混入 植物相はある 8. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少く孔隙多い 黑褐色土粒子10%混入 植物相はある			
出土遺物	陶土器2片を地中から出土			

第2表 第2号土壤観察表

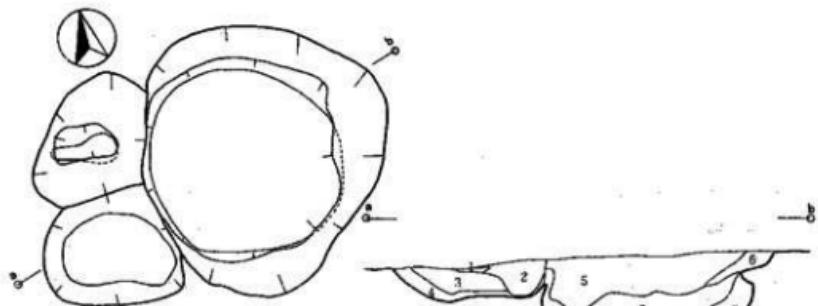
検出区	標 因	3	回数	20
法 量	開口 部 位	底 位	深 度	傾 斜 角
層 土	218	94	40	
	1. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少 孔隙大 黑褐色土粒子20%混入する 植物相はある 2. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少 孔隙大 黑褐色土粒子20%混入する 3. 10YR 5/2 黑褐色 粘性少 孔隙大 植物相はある 4. 10YR 5/2 黑褐色 粘性大 孔隙少 植物相はある			

第3表 第3号土壤観察表

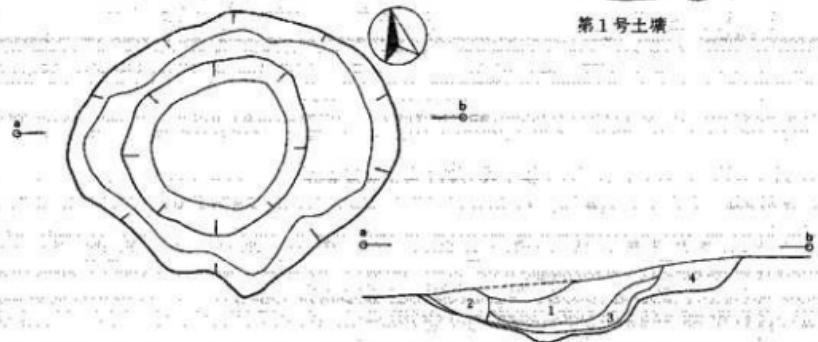
検出区	標 因	3	回数	25
法 量	開口 部 位	底 位	深 度	傾 斜 角
層 土	180×94	140~38	64	123°~126°
	1. 10YR 5/2 黑白色 粘性少 孔隙大 桐枝根直径小 (直1m以下) 2. 10YR 5/2 黑褐色 砂質土 孔隙大 砂石屑粒径小 (直1~2cm) 3. 10YR 5/2 当褐色 粘性やや少 孔隙少 混合土 1%以上入 4. 10YR 5/2 黑褐色 粘性大 孔隙なし 黑褐色土粒子1%以上入			
備考	第1層から第3層までハマエ層である 第1層→第3層と42度が大きくなる			

第4表 第4号土壤観察表

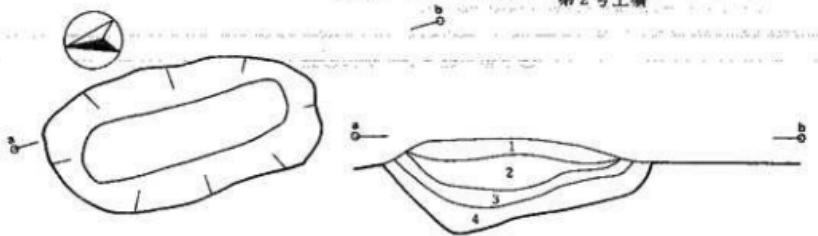
検出区	標 因	3	回数	
法 量	開口 部 位	底 位	深 度	傾 斜 角
層 土	面	94	16	103°~110°
	1. 10YR 5/2 粘性大 孔隙少 黑褐色土粒子5~10%混入 2. 10YR 5/2 粘性やや少 黑褐色土粒子20~30%混入			
出土遺物	陶土器1片を地中から出土			



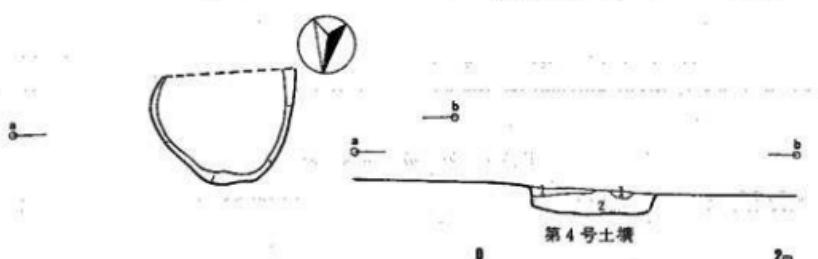
第1号土壤



第2号土壤



第3号土壤



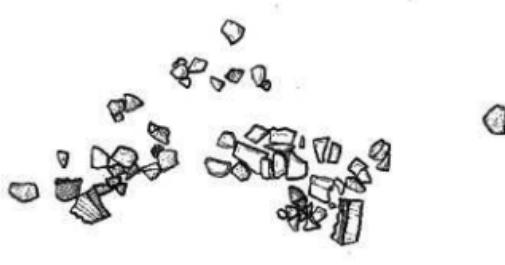
第3図 第1号土壤~第4号土壤



第7図1に対応



第8図に対応

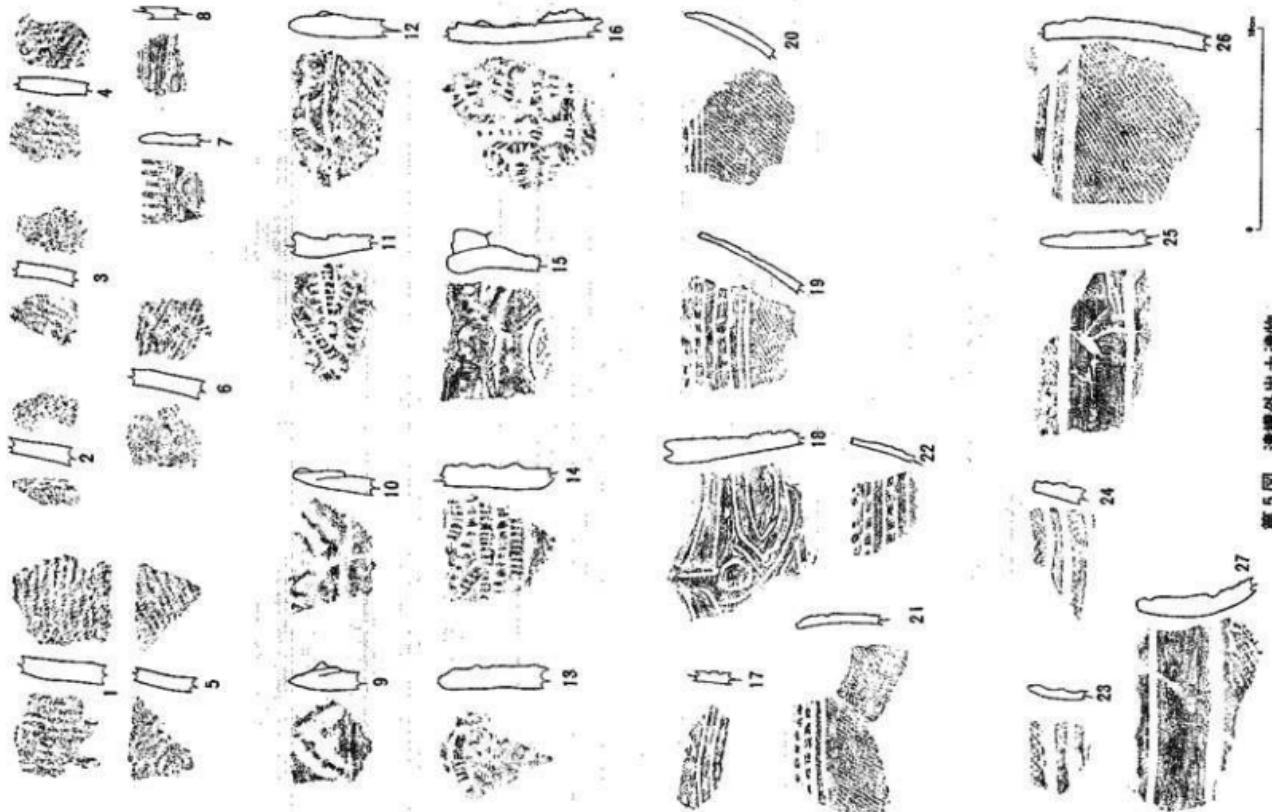


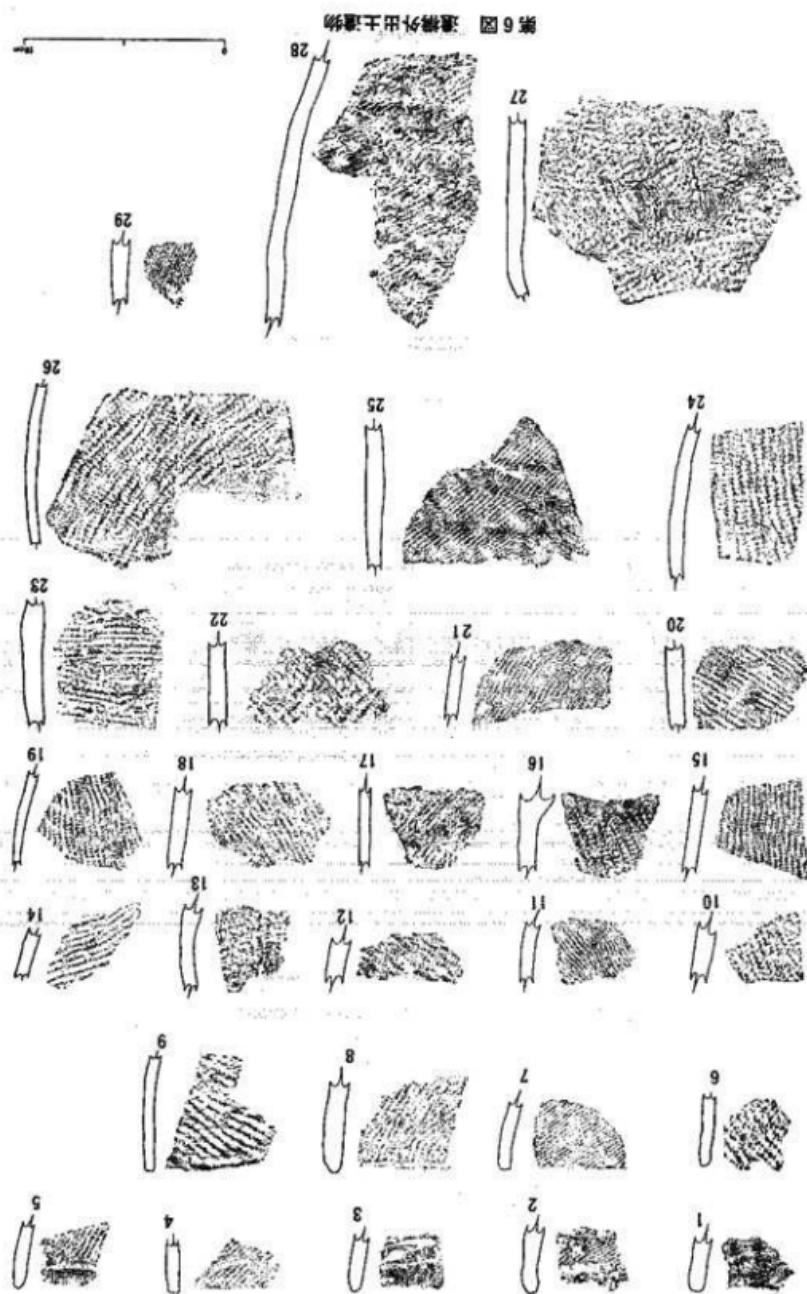
第7図2に対応

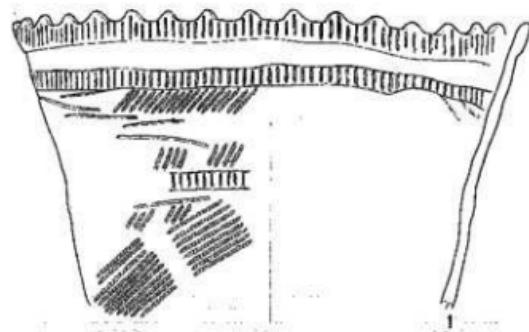


第4図 造構外遺物出土状況

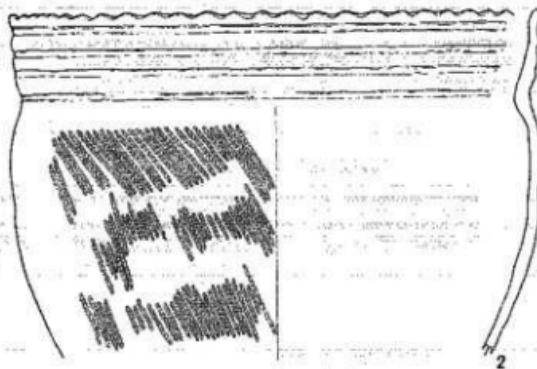
第5圖 這標外出土物



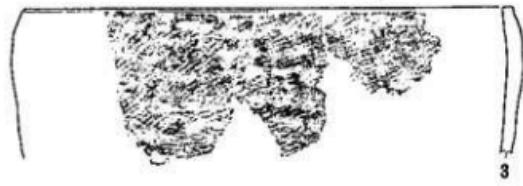




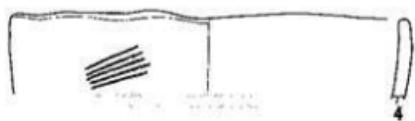
1



2

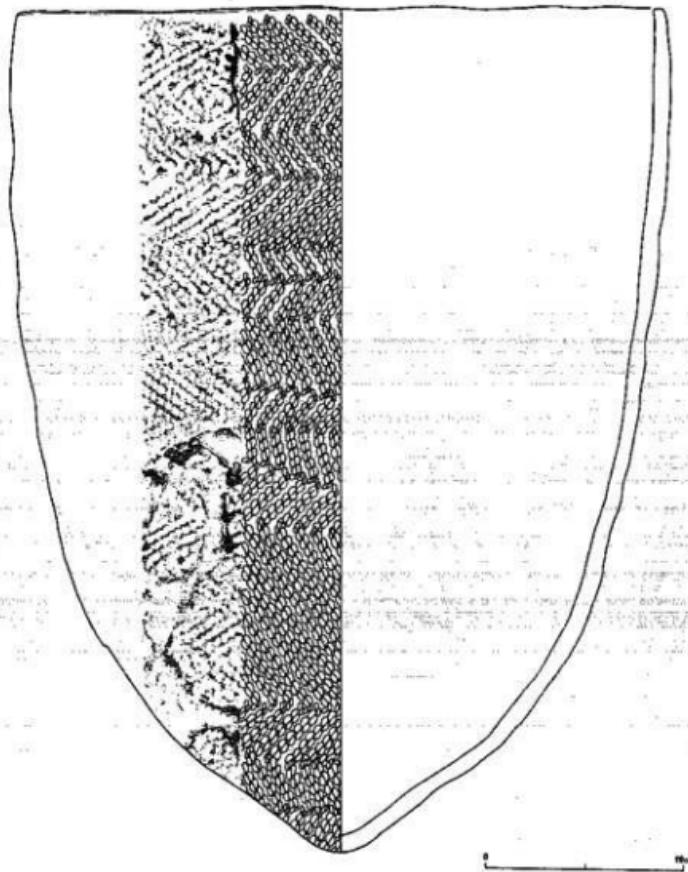


3



4

第7図 造構外出土遺物

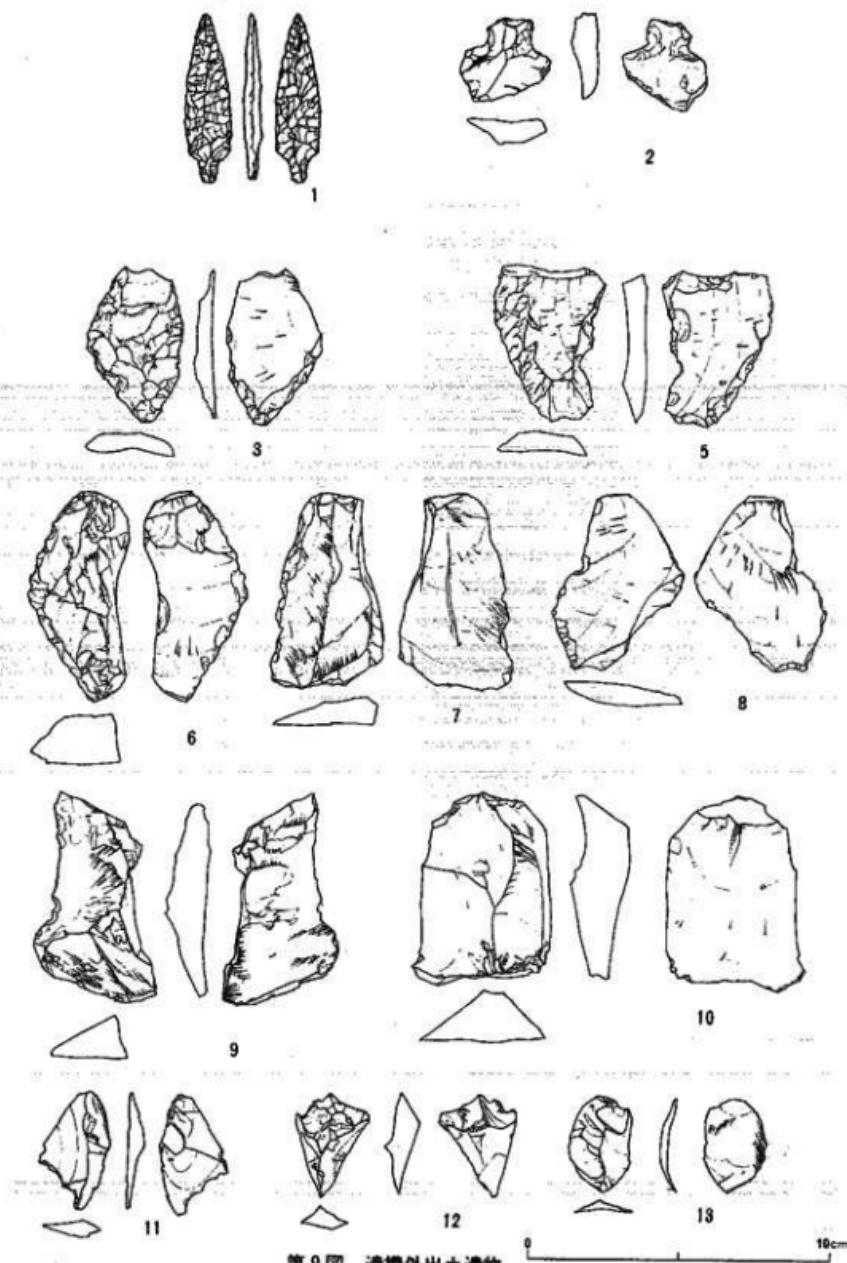


第8図 造構外出土遺物

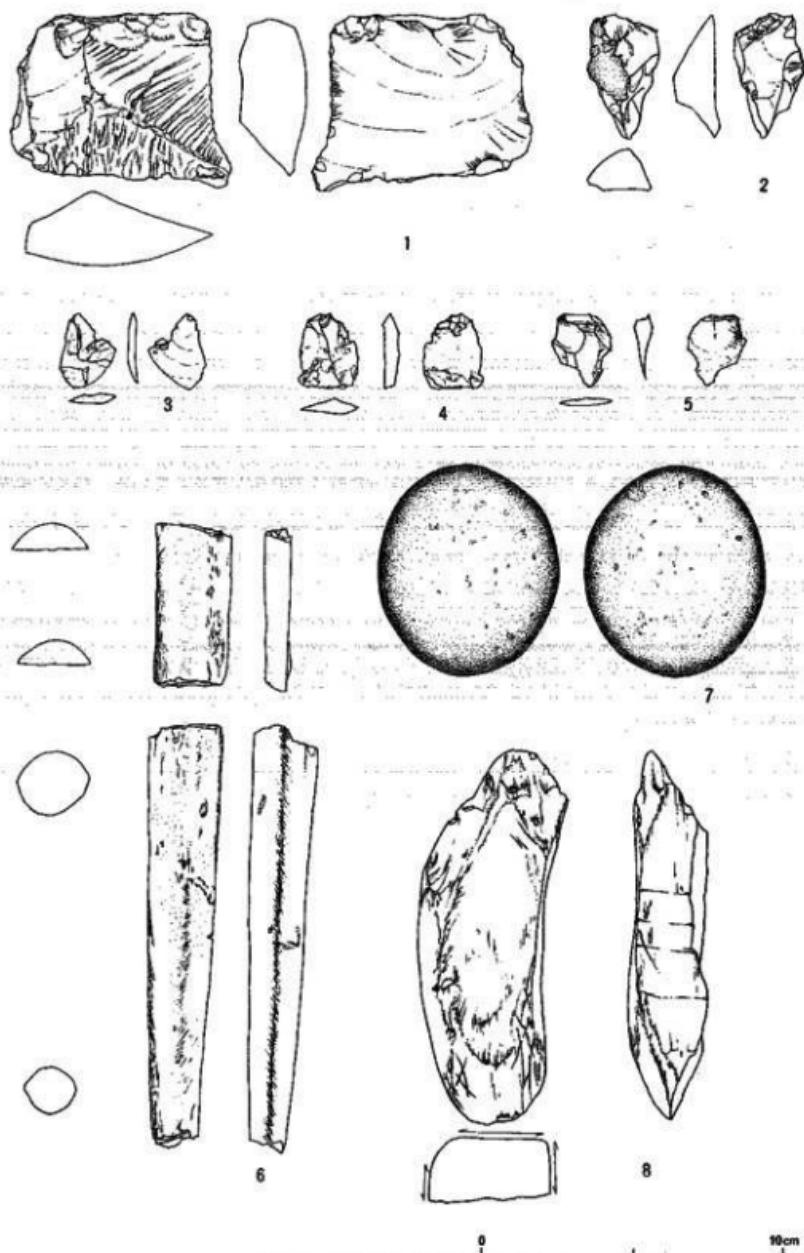
第7図1は波状の折り返し口縁の鉢形土器であるが、口頸部に3段の刻目帯があげてある。2段及び3段目の刻目帯の中には、粗雑な横位の沈線がひかれている。地文にはL Rの原体が用いられている。おそらく後期後葉の入組文系土器に比定されよう。

第5図20～28は口縁に2個1対の所謂B突起が作出され、口頸部の文様帶には数条の平行沈線と沈線間に大きな截痕列が施されている。体部以下は細密なL R原体が全面に横位に回転押捺される。

第5図24～28、第7図2は口縁に数条の平行沈線が描かれ、体部以下には全面繩文が施され



第9図 造構外出土遺物



第10図 遺構外出土遺物

ている。第7図2のように頸部に屈曲をもつものと、もたないものがある。体部に施される繩文は、第7図2のRLを除いて全てLR原体が用いられている。後晩期に位置づけられるものと思われる。

第6図2～28、第7図3、4は全面縄文の施された破片である。口縁は平縁でやや内に傾くものが多い。第6図1のように無文、29のように条痕のものも同様と思うが、やはり後晩期に伴った粗製土器であろう。

遺構外から出土している石器は、石錐、石匙、搔器、石棒、磨石、砥石、フレイク等である。石棒、磨石、砥石以外の剥片を用いて製作された石器及びフレイクは全て頁岩製である。

第9図1、最大長56mm、最大幅15mm、最大厚6mmを測る。有茎の石錐である。両面から丹念な調整剝離が施され形状を整えている。

第9図2、最大長28mm、最大幅30mm、最大厚9mmを測る。つまみ部に比べて刃部の極端に大きな石匙である。つまみ部分頂部には素材となった剥片の打面が残されている。つまみ部を作出するための抉り込みの部分を除いては調整剝離は殆ど行われておらず、主要剝離面の側、つまみとの反対側の刃部に僅かに細かな剝離が施されるのみである。

第9図3～7は不定形の搔器を一括した。

第9図8～13、第10図1～5は全て剥片類である。

第10図6は、粘板岩製の石棒である。丹念に磨いて製作しているが、断面形はやや菱形に近い。

第10図7は、安山岩製の磨石である。

第10図8は、縄文時代の所産ではないか、凝灰岩製の砥石である。三面を砥面としている。

## (2) 平安時代の遺構と遺物

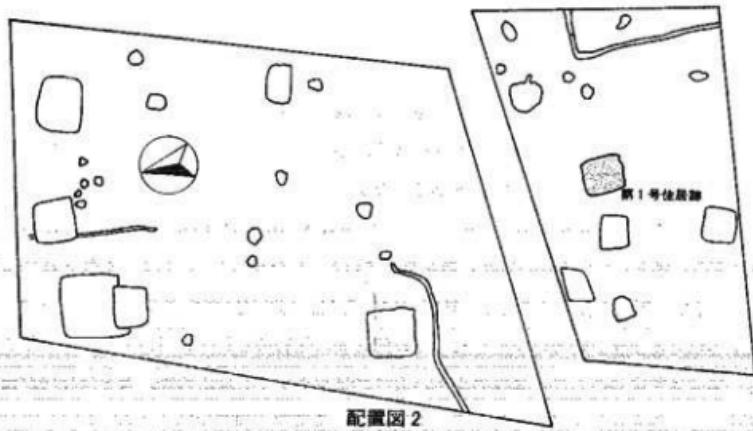
### ア. 住居跡

住居跡は農道南側区で6棟、北側区で6棟の計12棟検出された。検出面は第IV層上面である傾斜面に構築されているとの耕作のため遺存状態は必ずしも良好とは言えず、特に南側調査区で検出された住居跡では北西側の壁の確認できなかったものもある。覆土は、ある程度の規模の平面プランをもち、最深部で50cmを越えるような住居跡、第1号住居跡、第7号住居跡等にあっては断面形は整ったレンズ状の堆積状態を呈している。したがって、このような住居跡では平面プランの検出の際にも住居の中心から外側へ向って黒色→黄褐色(壁面の崩落土)という同心円状の覆土の色調度変化が顕著に認められ、比較的容易に住居跡と判断し得た。しかし、第5号住居跡、第6号住居跡のように規模の小さいものでは平面プラン検出の際、覆土は住居跡構築層へ漸移的な色調変化しか示しておらず、土壤等他の遺構等と判別が困難であった。また、覆土中には焼土、炭化物等の細粒、及び径1~3mm程度の十和田降下火山灰に由来すると思われるバミスが含まれており、これらも検出の際の大きな目安となっている。但し、遺構外で部分的ではあるが層となって確認できたバミスは、住居跡内では覆土全体に粒状に混入するかブロック状の混入の状態しか示していない。

床面は、遺跡基本層序第VII層~第IV層中に掘り込まれている。第IV層が床面となっている場合は粘土質であるため硬く締った状態で確認できたが、第VII層を床面としている場合は砂質土であって良好な床面とは言い難い。また、大半の住居跡には床面の上に焼土及び炭化物の堆積層が広範囲に認められている。第10号住居跡では炭化した遺材も確認されており、第11号住居跡の中で確認された多量の礫も火熱を受けて赤変したものが多い。

カマドはどの住居跡も概して遺存状態が悪く、本体部分にしっかりと芯材が残っていないためか、袖部等に用いられた粘土は床に流れたような状態でしか確認できなかった。またカマド内に遺存する遺物も概して少ない。

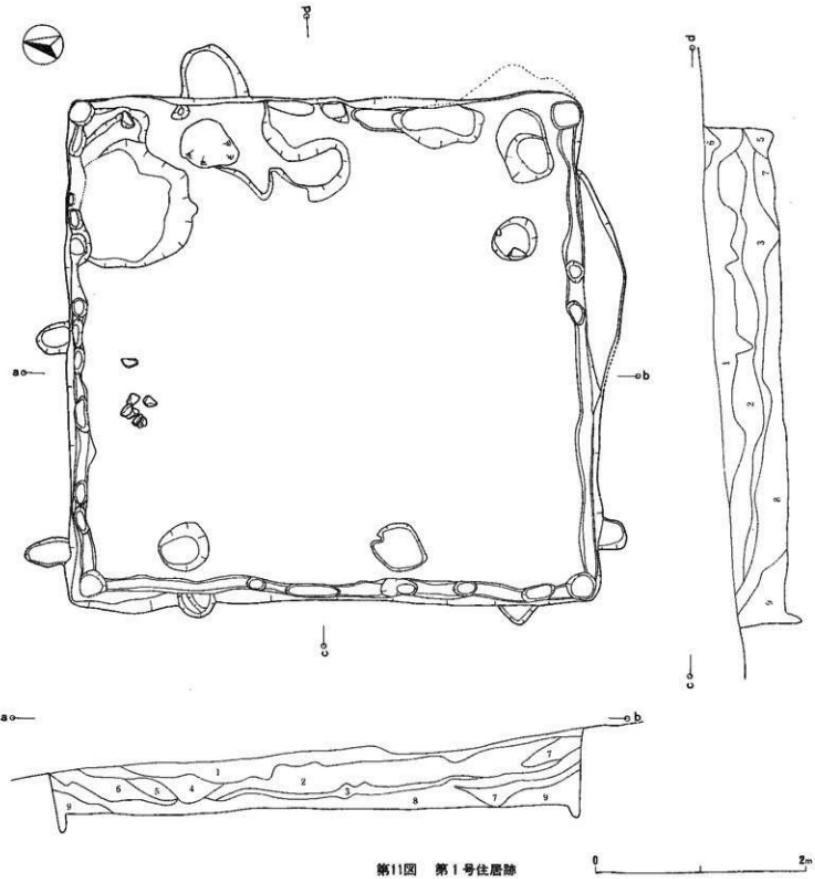
出土した遺物は、土器、砥石、鉄器及び自然遺物であるが、その量は全般に少ない。土器は、大半が破片で出土しており、完形のままで出土するなど使用時の状態を示すような例はない。住居跡全体で見れば、やはりカマド付近に多く分布するが、覆土中から床面にかけて出土している。鉄器は釘状の鉄製品が出土している。鉄製品は覆土中にあってもより下部からの出土であり、床面から出土しているものが多い。自然遺物は、第1号住居跡から出土した炭化した柳ノ実、ヨシの他、第10号住居跡等で確認されている炭化した遺材があげられる。



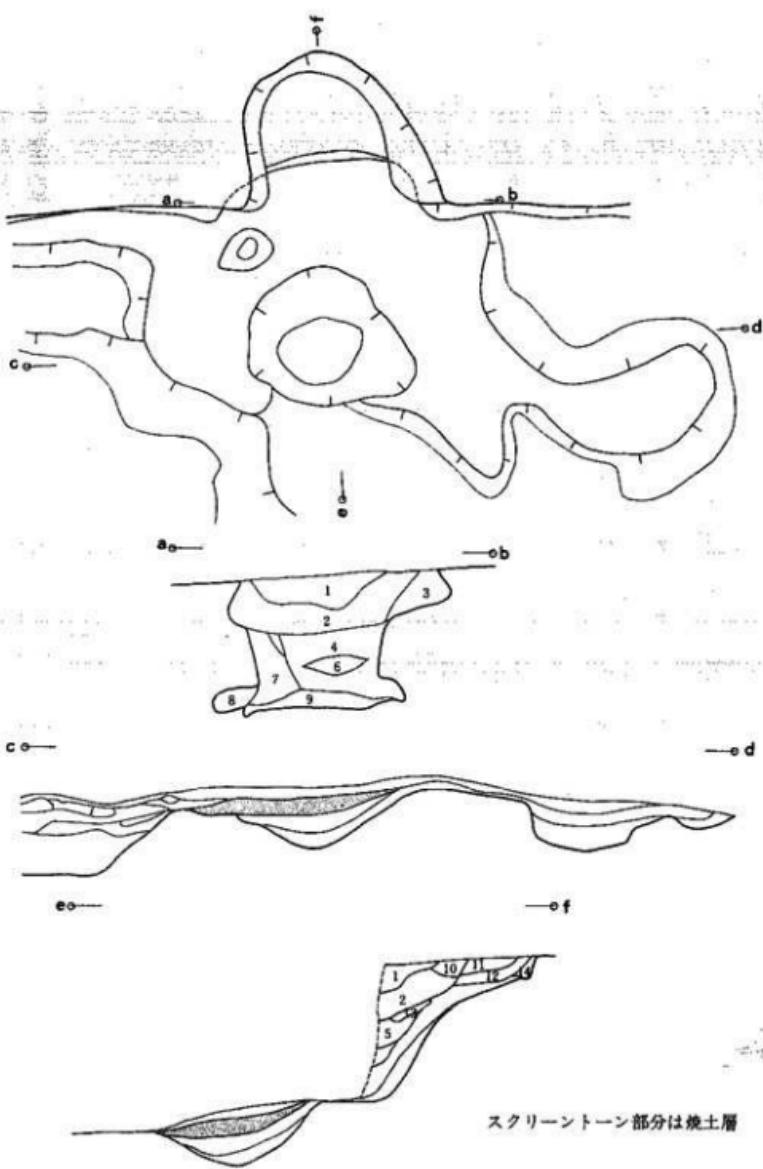
配置図2

第5表 第1号住居跡観察表

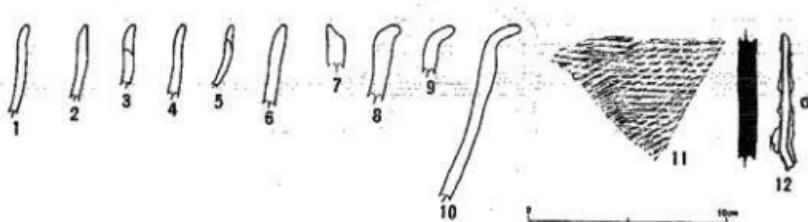
第1号住居跡		地図	11, 12, 13	地図	4, 5, 30
施出区	東壁	西壁	南壁	北壁	
施設	456	514	480	496	
壁高	46.5~47.5	33.5~38	36.5~38	30~39	
壁構成	22	—	22	19	
壁厚	17	—	9.5	20	
雨樋	24.64	—	—	—	
北緯方位	N=59.3°~W	北緯	方位		
種一 土	1. 10YR 8° 黒褐色 粘性土 孔隙なし パスをやや含む 2. 10YR 8° 黑褐色 粘性土 孔隙率有 パスをやや含む 3. 10YR 8° 黑褐色 粘性土 孔隙率有 ロームブロック約5%混入 4. 10YR 8° 黑褐色 粘性土 孔隙率有 パスを少し含む 5. 10YR 8° 黑褐色 粘性土 孔隙率有 ロームブロック約3%混入 6. 10YR 8° 黑褐色 粘性土 孔隙率有 ロームブロックが約5%混入	7. 10YR 8° 黑褐色 粘性土 孔隙率有 パスをやや含む 8. 10YR 8° 黑褐色 粘性土 孔隙率有 ロームブロック約5%混入 9. 10YR 8° 黑褐色 粘性土 ロームブロックが約2%混入 黑褐色約2%混入			
種二 土	床	床の傾斜角度=110°を計る。			
床	更埴付近全体にかなり広く炭化物の範囲を見ることができ、厚い所で4cm程ある。また、この炭化物中からトチの実がかなり多量に出土している。地上も東壁付近一帯に見られる。				
周 清	瓦の一部を抜いてすべての壁竪間に見られる。幅は約7~21cm、高さは9.5~20.0cm程度で構内には多数の瓦片を立てかけたと思われるpHが抽出された。				
ビート	P1 26×29×25 建居跡南北壁側 P2 25×28×25 南壁西側 P3 23×26×23 北壁東側 P4 23×25×23 カマF 北側 P5~P8までが実験火と見られる。	P4 44×40×30 南壁東寄り P5 40×44×25 南壁東寄り P3より西側 P6 45×50×8 西壁南寄り P7 44×47×12.5 西壁北寄り P8 41×36×36.5 P5より北側	P1 34×28×15.5 住居跡外東側に接して西側 P2 23×35×17.5 西壁外に接して北側 P3 26×43×14.5 北壁外に接して西側 P4 28×31×15.0 P3より東側		
セ	壁	壁厚 北寄り			
ウ	1. 7.5YR 8° 黑褐色 シルト質 孔隙少 地下1.5m 火山灰石2~3%混入 2. 7.5YR 8° 黑褐色 シルト質 孔隙少 地上1.5~(5~10)cm 15~20% 火山灰石1%混入 3. 10YR 8° 黑褐色 粘質土 孔隙少 黑褐色土20%程ブロック状に混入 やや所色がひいて見える。 4. 7.5YR 8° 黑褐色 粘質土 孔隙少 黑褐色土5%程 氧化鉄鉱+土鉄鉱が1%位混入 5. 7.5YR 8° 黑褐色 4と2は同じだが、壁と炭化物の混入がない。 6. 10YR 8° 黑褐色 孔隙少 地上1.5m 炭化物約20~30%混入 一種類 7. 7.5YR 8° 黑褐色 粘質土 地山にやや近いが块土状、炭化物約2~3% 黑褐色土が20%混入して地山よりやや明るい。 8. 7.5YR 8° 黑褐色 粘質土 7とは逆同じだが块土状、炭化物の混入がない ややボロボロしている 9. 10YR 8° 黑褐色 孔隙少 黑褐色土40~50%混入 3~6cmより多く見える。 10. 10YR 8° 黑褐色 孔隙少 黑土質 火山灰が5~6%混入 11. 10YR 8° 黑褐色 孔隙少 真っ黒くなっている 炭化物20% 灰土2~3%混入 12. 10YR 8° 黑褐色 孔隙少 黑化物 灰土の様 (2~3cm) 5%混入 13. 10YR 8° 黑褐色 孔隙少 山根がブロック状に混入 14. 10YR 8° 黑褐色 シルト質				
ア	※ 地図上のスクリーンの部分はカマド本体部分における地上的堆積状態を示す。				
	カマド内から芯材などは検出されていない。壁遺物及び剥出し孔は平面プランで確認されたもので、その壁遺物は壁部のアラブ窓等にその先端部分に25×35cmほどの円形の黒褐色土のアラブを確認し、これが剥出し孔ではないかと推測されたものである。				



第11図 第1号住居跡



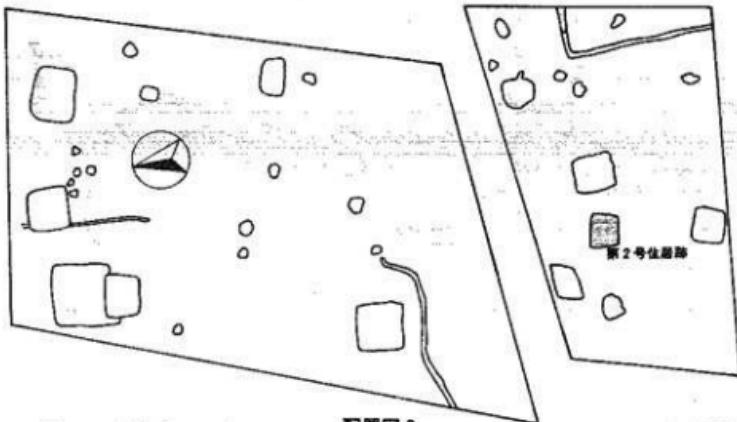
第12図 第1号住居跡カマド



第13図 第1号住居跡出土遺物

第6表 第1号住居跡出土遺物観察表

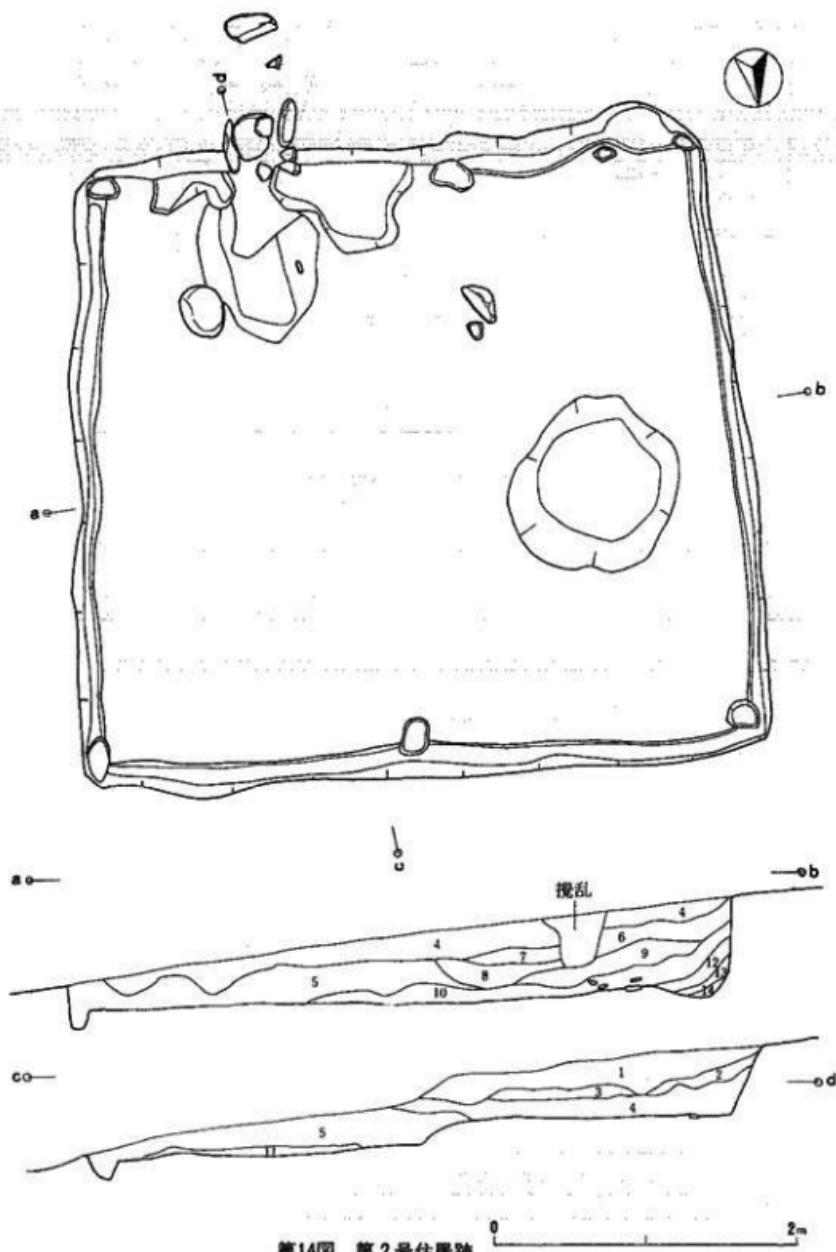
得回 番号	出 土 地 点	形 状	部 位	法 量(cm)			調 査 (地 文)		底 形	色 調	粒 子	整 成	
				口徑	体径	底径	高	外 面					
1	第1号 住居跡	琴	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水底	淡黄褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
2	第1号 住居跡	甌	口縁					横位ナテ	斜位ナテ	積み上げ	褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
3	第1号 住居跡	甌	口縁					横位ナテ	横位ナテ	積み上げ	にじみ+褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
4	第1号 住居跡	甌	口縁					横位ナテ。縦位ナテ	横位ナテ	積み上げ	淡黄褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
5	第1号 住居跡	甌	口縁					横位ナテ。縦位ナテ	横位ナテ	積み上げ	淡黄褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
6	第1号 住居跡	甌	口縁					横位ナテ	横位ナテ	積み上げ	明瞭褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
7	第1号 住居跡	甌	口縁					横位ナテ	横位ナテ	積み上げ	淡黄褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
8	第1号 住居跡	甌	口縁					横位ナテ。縦位ナテ	縦位ナテ。横位ナテ	積み上げ	にじみ+褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
9	第1号 住居跡	甌	口縁					横位ナテ。縦位ナテ	横位ナテ	積み上げ	にじみ+褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
10	第1号 住居跡	甌	口縁					横位ナテ。縦位ナテ	横位ナテ	積み上げ	にじみ+褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
11	第1号 住居跡	甌(漆器)	制					叩き目	---	積み上げ	灰色 灰色(N5')	精	良
12	第1号 住居跡	瓦?	既存長5.7cm 既存幅0.38×0.47cm										



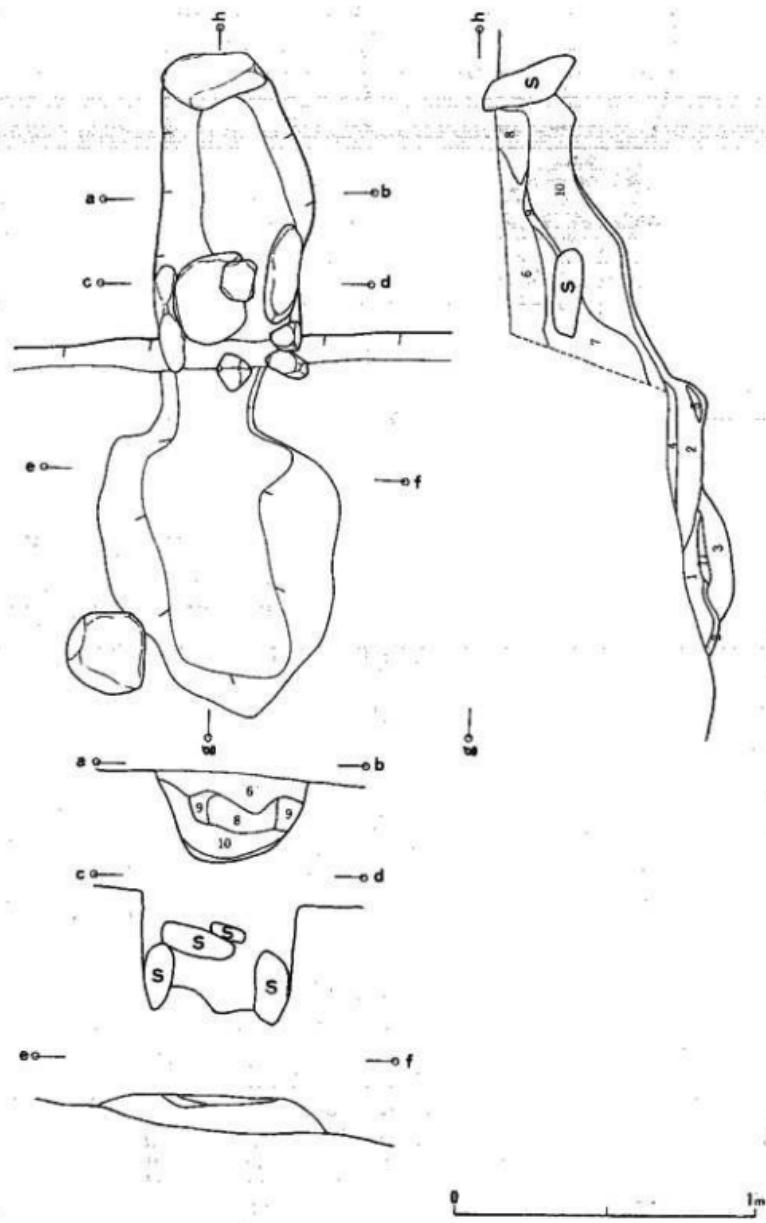
配置図 3

第7表 第2号住居跡観察表

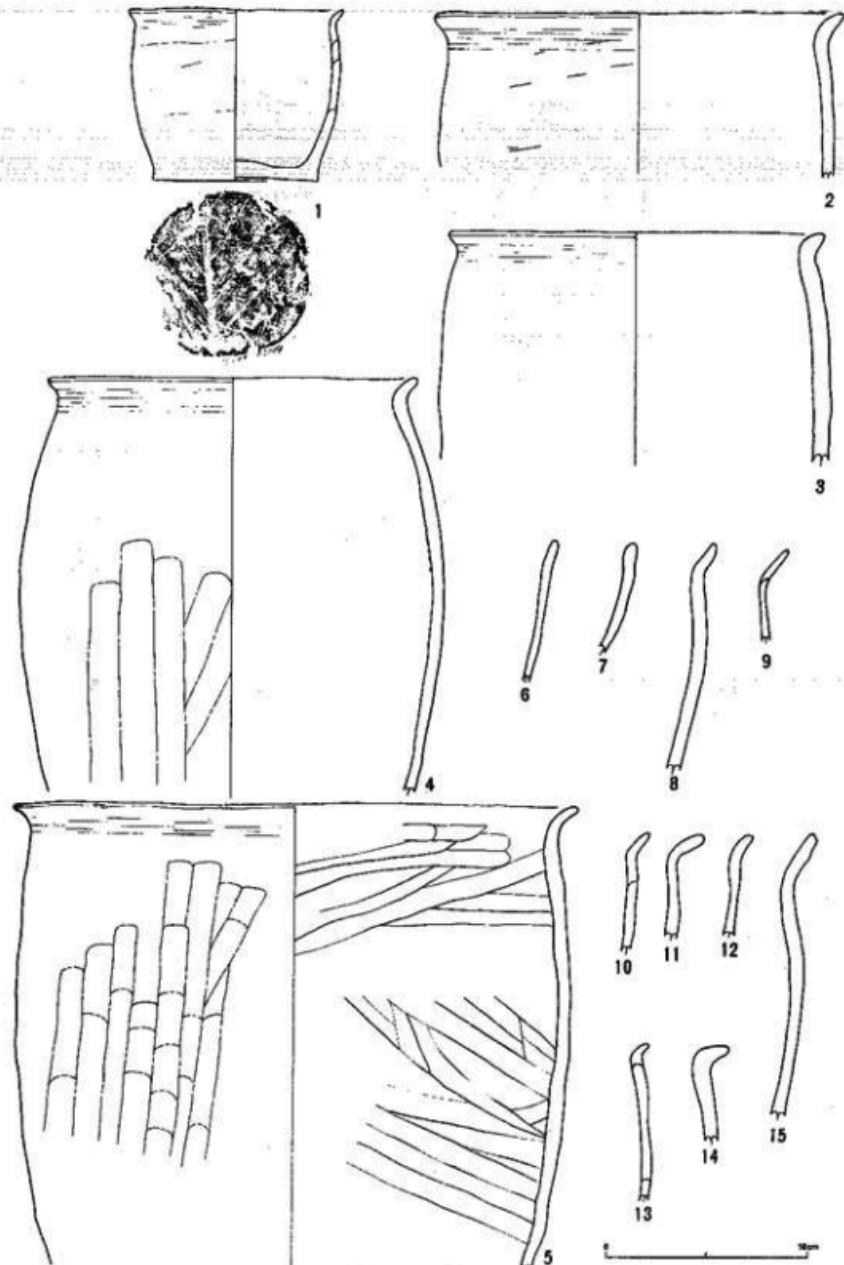
第2号住居跡		持 国	14. 15. 16. 17	国 地	6. 7. 31
施 出 区	4-F, 4-G, 5-F, 5-G	東 集	西 集	南 集	北 集
法	地 程	425	442	416	440
理 高	38-55	1-24	41-60	4-32	...
開 墓	29	14	16	23	...
並	4	11	16	21	...
面 積	18.72				
北緯 方 位	N-2°-W		影 影	方 位	
風	北				
1. 10Y R 46 黄褐色 粘性土 孔隙中 混石粒約5%混入 2. 10Y R 46 黑褐色 粘性土 孔隙中 混石粒約5%混入 3. 10Y R 46 黄褐色 粘性物質 孔隙中 ロームブロック約7%混入 混石約3%混入 4. 10Y R 46 黄褐色 粘性物質 孔隙中 ロームブロック約10%混入 5. 10Y R 46 黄褐色 粘性物質 孔隙中 混石粒約3%混入 ロームブロック約3%混入 6. 20Y R 46 に少く 黄褐色 粘性物質 孔隙中 混石粒約5% 混石約2%混入 7. 10Y R 46 黑色 粘性物質 孔隙中 砂質土 砂質土 砂質土 50%以上混入 8. 10Y R 46 泥場 粘性物質 孔隙中 腐化物約3% 混石約5%混入 9. 10Y R 46 黒色 粘性物質 孔隙中 腐化物約5% ミス約10%混入 10. 10Y R 46 黄褐色 粘性土 孔隙中 腐化物約5% 混石約1% ロームブロック約5%混入 11. 10Y R 46 黄褐色 粘性物質 孔隙中 ロームブロック約5%混入 12. 10Y R 46 黑色 粘性物質 孔隙中 バミス約10%混入 13. 10Y R 46 に少く 黄褐色 粘性物質 孔隙中 私上記ある。 14. 10Y R 46 黑色 粘性物質 孔隙大 バミス約50%以上混入					
壁	床面と天井面の傾斜角は80°-112°までである。最も大きいのは北壁で、最も小さいのは東壁である。				
周	溝	溝壁の幅一般を除いてはすべての駆寄りの面に見られる。幅5-30cm、深さ4-18cmで周溝内及びそれに接するような形でP1-P5まで5つの柱穴が検出された。			
ピ	ト	P1 9×15×22 住居跡敷地西側隅 P2 18×20×21.5 北壁西側隅 P3 18×25×30 北壁中央付近	P4 14×30×32 北壁東側隅 P5 14×22×31 カドア花園隅 P6 106×120×19.5 廊下持内西隅	P1の覆土に施土の痕跡が見られた P2-P5は柱穴である	
壁	國 南壁 東寄り				
カ		1. 10Y R 46 黄褐色 粘性小 孔隙中 地上及び腐化物各10%混入 2. 10Y R 46 黑色 粘性小 孔隙大 腐化物80%以上混入 3. 2.5Y H 46 黄褐色 粘性小 孔隙小 地上層 4. 10Y R 46 黄褐色 粘性小 孔隙大 地上及び腐化物各10%混入 5. 10Y R 46 黑色 粘性大 孔隙小 バミス約10%混入			
マ		6. 10Y R 46 黑褐色 粘性小 孔隙中 バミス約10%混入 7. 10Y R 46 黄褐色 粘性小 孔隙大 バミス約5%混入 8. 10Y R 46 黄褐色 粘性小 孔隙小 地上5%混入 9. 5Y R 46 黄褐色 粘性小 地上30% 腐化物約5%混入 10. 10Y R 46 黑色 粘性小 孔隙大 腐化物50%以上 地上約10%混入 11. 10Y R 46 黄褐色 粘性小 孔隙小 貨物の上面が非常に高い温度で焼けた物			
リ		カマド本体と煙道の部分が本村として用いられたと思われる河原石が検出された。 カマド本体内外に腐化物の付着範囲が見られる。保育状態はあまりよくなく煙道・煙管などは検出できなかったが、煙道の先端部に16×30cmなどの河原石が検出された。これが使用しにあたる部分と思われる。			



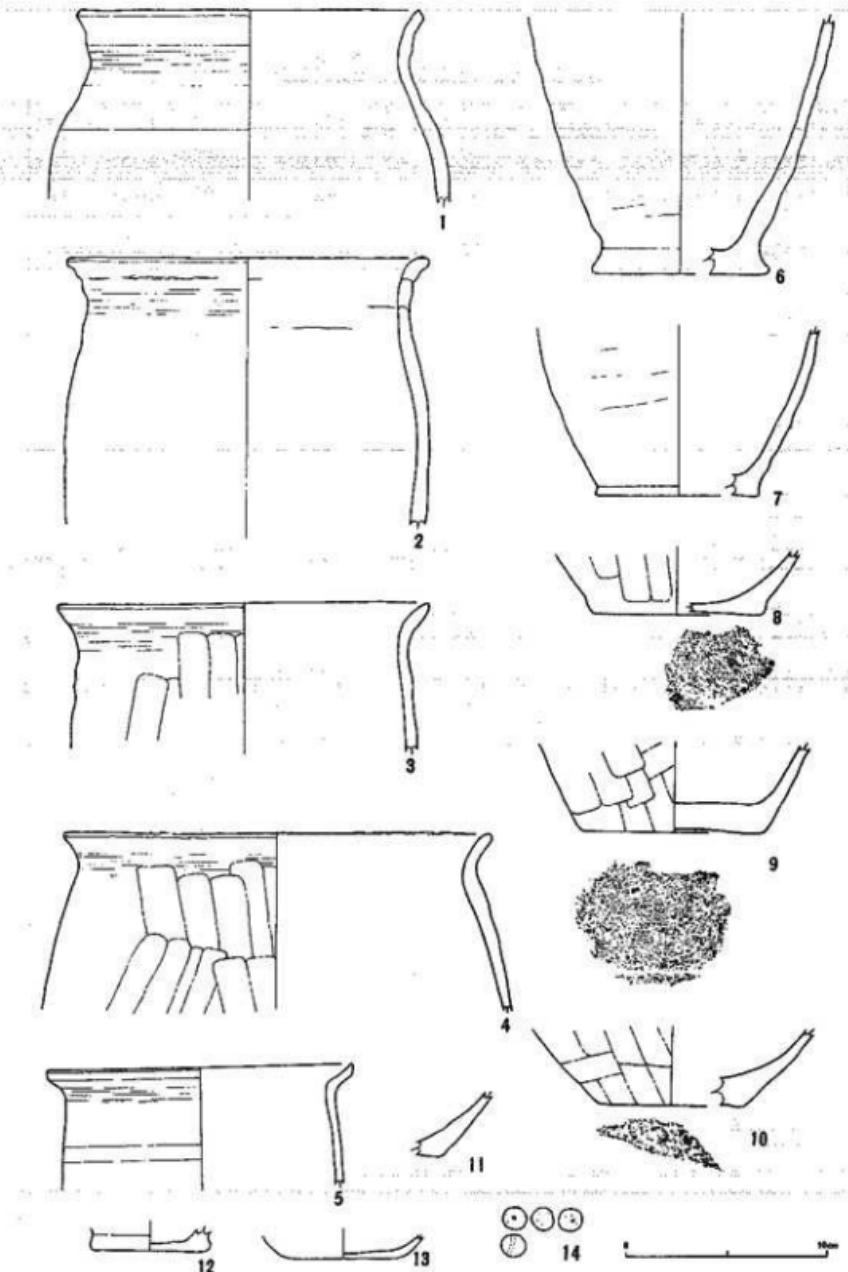
第14図 第2号住居跡



第15図 第2号住居跡カマド



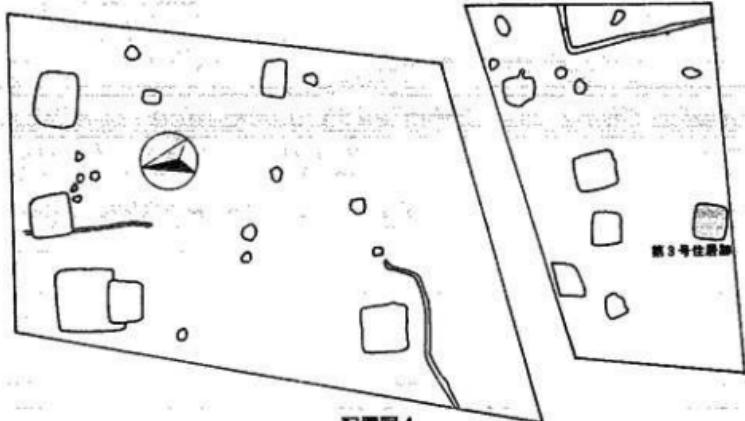
第16図 第2号住居跡出土遺物



第17図 第2号住居跡出土遺物

第8表 第2号住居跡出土遺物観察表

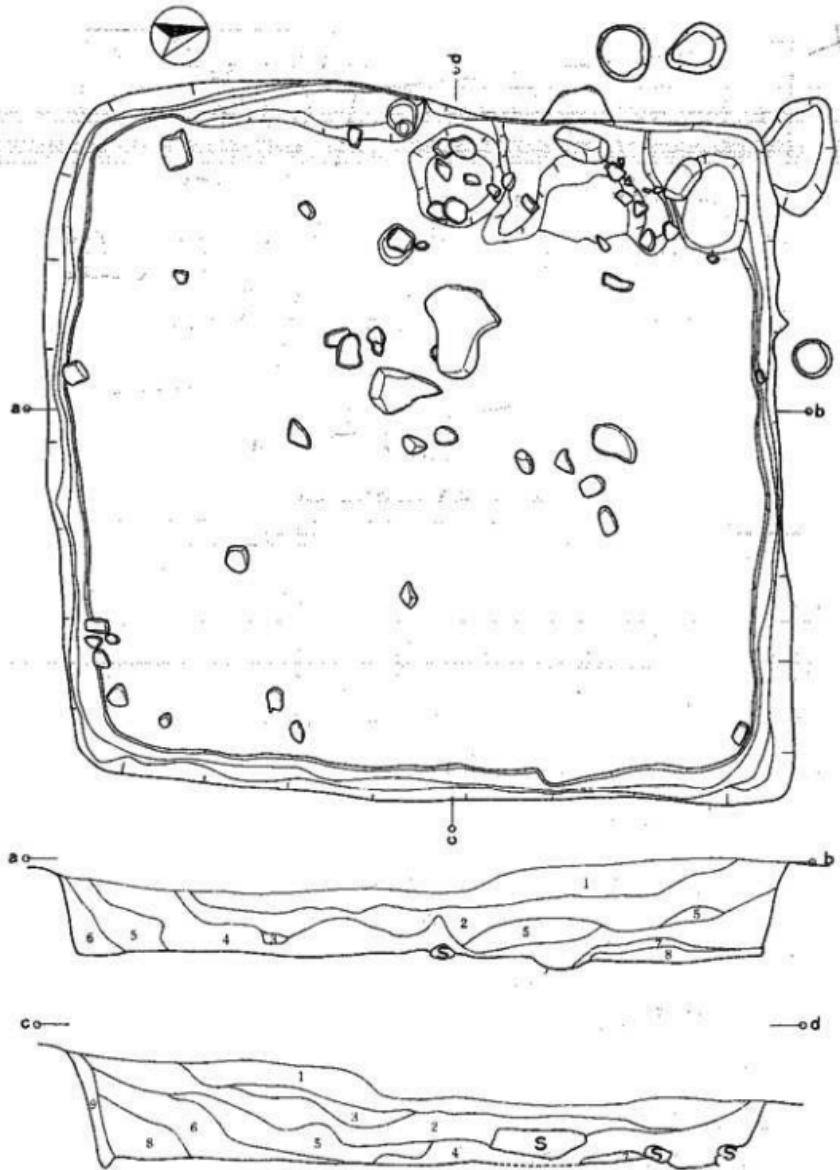
特徴 番号	出 土 地 点	器 形	部 位	法 量 (cm)			調 整 (地 文)		成 形	色 調	施 工	構成	
				口 径	体 径	底 径	厚 さ	外 面					
16-1	第2号 住居跡 (小形)	甕	口縁～底 部	10.7	10.4	8.2	8.5	ナデ 木製軸	ナデ	積み上げ法	にじい黄褐色 (10YR)	砂粒を含む	良好
2	第2号 住居跡	甕	口 縁	(20.1)				ナデ	ナデ	積み上げ法	にじい褐色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
3	第2号 住居跡	甕	口 縁	(18.6)				斜位ナデ 底位ナデ	斜位ナデ	積み上げ法	灰黄褐色 (10YR)	砂粒を含む	良好
4	第2号 住居跡	甕	口縁～胴	(18.3)				ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	灰黄褐色 (10YR)	砂粒を含む	良好
5	第2号 住居跡	甕	口縁～胴	(27.9)				ナデ ヘラケズリ	ナデ 底状 炭化物付着	積み上げ法	にじい黄褐色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
6	第2号 住居跡	甕	口 縁					ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にじい褐色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
7	第2号 住居跡	甕	口 縁					底位ナデ 底位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にじい褐色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
8	第2号 住居跡	甕	口 縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	淡灰褐色 (10YR)	砂粒を含む	良好
9	第2号 住居跡	甕	口 縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	灰褐色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
10	第2号 住居跡	甕	口 縁					横位ナデ 底位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	褐色 (10YR)	砂粒を含む	良好
11	第2号 住居跡	甕	口 縁					横位ナデ ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にじい黄褐色 (10YR)	砂粒を含む	良好
12	第2号 住居跡	甕	口 縁					横位ナデ ナデ	横位ナデ	積み上げ法	褐色 (7.5YR)	砂粒を僅 かに含む	良好
13	第2号 住居跡	甕	口 縁					横位ナデ 底位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	褐色 (10YR)	砂粒を含む	良好
14	第2号 住居跡	甕	口 縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にじい褐色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好
15	第2号 住居跡	甕	口 縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	褐色 (5YR)	1～9mm位の砂粒 を含む	良好
17-1	第2号 住居跡	甕	口 縁	(17.3)				横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にじい黄褐色 (10YR)	1～8mm位の砂粒 を含む	良好
2	第2号 住居跡	甕	口 縁	(18.0)				横位ナデ ナデ	ナデ	積み上げ法	褐色 (7.5YR)	1～2mm位の石と 20mmの石を含む	良好
3	第2号 住居跡	甕	口 縁	(18.5)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にじい褐色 (7.5YR)	3～7mm位の砂粒 を含む	良好
4	第2号 住居跡	甕	口 縁	(21.4)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にじい黄褐色	砂粒を微かに含む	良好
5	第2号 住居跡	甕	口 縁	(15.2)				斜位ナデ	横位ナデ	ロクロ木挽(?) 積み上げ法(?)	にじい黄褐色	石灰を含む類遇	良好
6	第2号 住居跡	甕	底 部	(4)			(8.8)	ナデ	ナデ	積み上げ法	にじい褐色 (5YR)	1～1.5mm位の石 を多く含む	良好
7	第2号 住居跡	甕	底 部				8.8	ナデ	ナデ	積み上げ法	にじい褐色 (5YR)	小粒を含む。瓶部 には3～5mm位の石が 多く見られる	良好
8	第2号 住居跡	甕	底 部				(8.8)	ヘラケズリ 砂底	ナデ	積み上げ法	にじい褐色 (7.5YR)	4mm位の砂粒(石 英・長石)を含む	良好
9	第2号 住居跡	甕	底 部				(9.0)	ヘラケズリ 砂底	横位ナデ ナデ	積み上げ法	灰黄褐色 (10YR)	1～6mm位の砂粒 を含む	良好
10	第2号 住居跡	甕	(汚欠) 底 部				(7.2)	ヘラケズリ 砂底	ナデ	積み上げ法	灰白色 (10YR)	砂粒5mm位の小石 を含む	良好
11	第2号 住居跡	甕	底 部					底位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にじい黄褐色 (10YR)	砂粒	良好
12	第2号 住居跡	甕	底 部				(5.8)	?	ナデ	積み上げ法	淡灰褐色 (7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好
13	第2号 住居跡	小形の 甕(?)	底 部				6.0	ナデ	ナデ	積み上げ法	にじい褐色 (5YR)	砂粒を含む	良好
14	第2号 住居跡	土器玉	径1.2cm	孔φ0.3cm				表面は丹念に磨きあげられている					



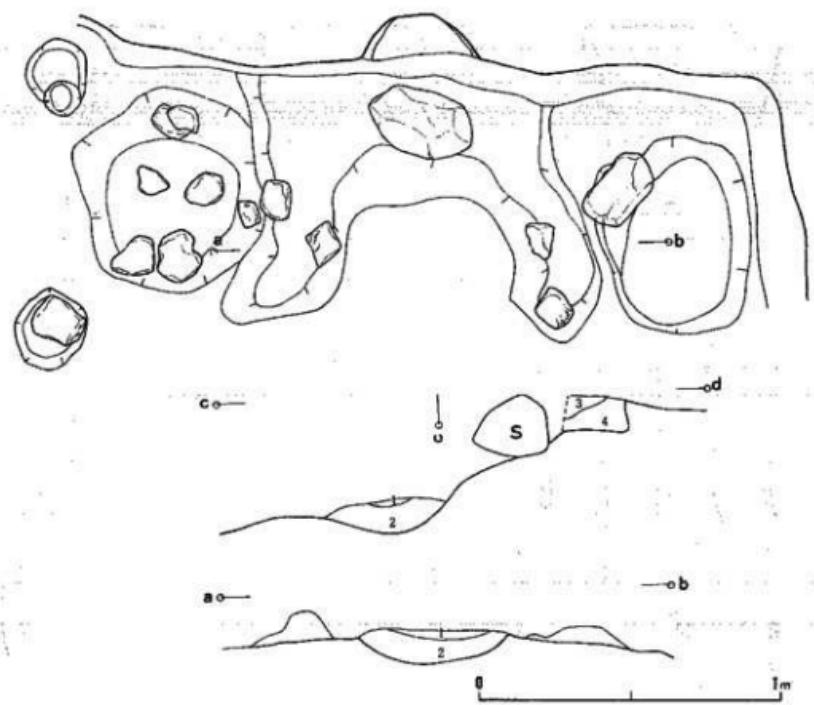
配置図4

第9表 第3号住居跡観察表

第3号住居跡		標 12	16, 19, 20	区 類	8, 32
検 出 区	I-E, 1-F, 2-E, 2-F	東 面	西 面	南 面	北 面
法					
壁 長	490		498		447
壁 高	70~76		20~28	35~74	52~72
周辺幅	24		16	22	14
周 边	8		9	14	8
面 積	24, 84				
主 視 方 位	N-108.5°-E			形 塾	方 形
質					
1. 10Y R 8 黄褐色 粘性強 孔隙なし バニス約3%混入					
2. 10Y R 8 黑褐色 粘性やや強 孔隙小 バニス約3%混入					
3. 10Y R 8 黑色 粘性強 孔隙なし バニス約1%混入					
4. 10Y R 8 黑褐色 粘性や中強 孔隙小 バニス約1%混入 ロームブロック混入					
5. 10Y R 8 黑褐色 粘性やや弱 孔隙やや大 バニス約1%混入 ロームブロック混入					
6. 10Y R 8 黑褐色 粘性強 孔隙なし ロームブロック 水化物混入					
7. 10Y R 8 黑色 粘性強 孔隙やや小 水化物混入					
8. 10Y R 8 明黄褐色 粘性弱 孔隙なし ロームブロック多量に混入					
9. 10Y R 8 黄褐色 粘性弱 孔隙大 黄褐色土と水化物の混合層					
壁					
傾斜角101~110°を計る。壁の立ち上がりが明瞭で遺存状態は良い。					
床					
中央の床面で径10~60cmの縁が検出され、カマド付近、窓沿いにも径10~20cmの縁が検出されている。					
凸 凹が少なく、全体に平坦である。					
床					
径 10~30cmの縁で住居の整地に検出されている。					
P <sub>1</sub> 60×70×8 径10~15cmの縁 多量の土器片を検出					
P <sub>2</sub> 51×65×8 多量の土器片を検出					
ピ ッ ト					
P <sub>1</sub> 40×33×15					
P <sub>2</sub> 45×75×20					
P <sub>3</sub> 25×25×13					
柱	直径 約50cm				
カ					
1. 7.5Y R 8 黄褐色 粘性なく 孔隙小 高温のため表面に硬化					
2. 5Y R 8 黑褐色 粘性ややあり 孔隙小 均質でキメ細い					
マ					
3. 10Y R 8 黄褐色 粘性大 孔隙小 砂土粒混入					
4. 10Y R 8 黑褐色 粘性弱 孔隙大 砂土粒混入					
リ					
カマド兩脇は左右とも径20~30cmの粘土のたかまりにすぎない。					
保津町と鶴見郡の境には長さ15m幅20cm厚さ20cmの縁が認められた。おそらく矢井部の花崗岩として用いられたものであろう。					



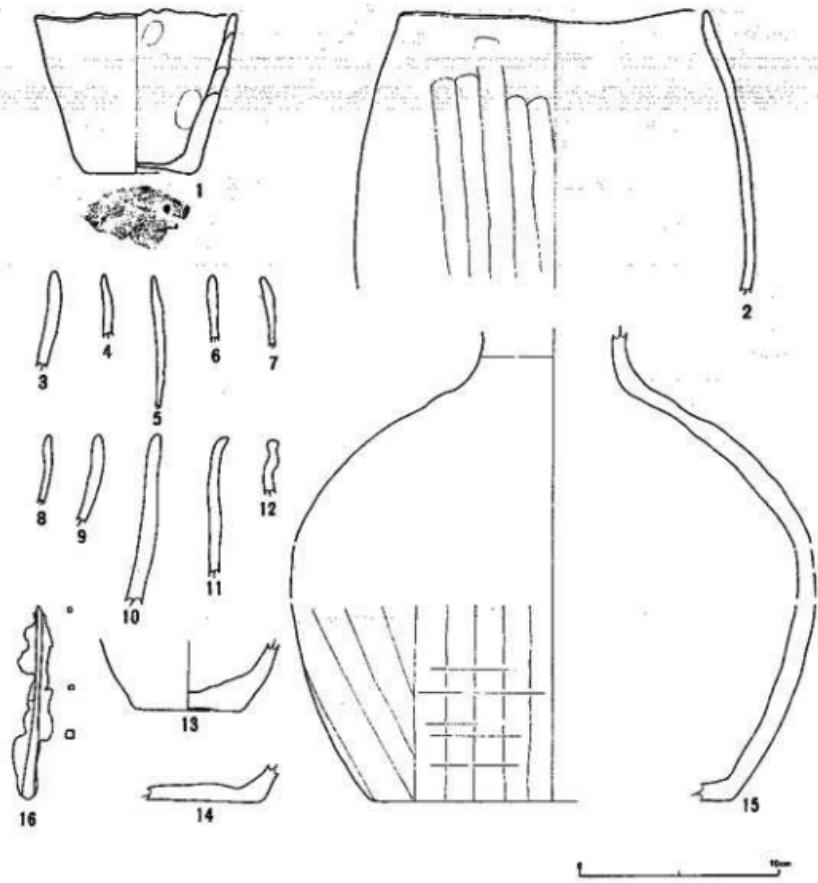
第18図 第3号住居跡



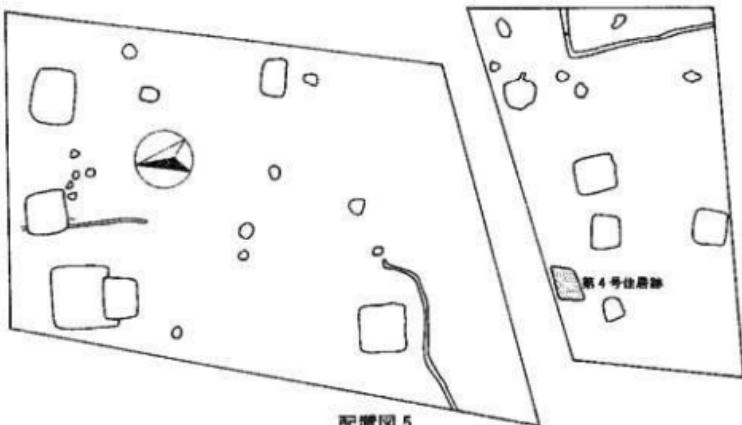
第19図 第3号住居跡カマド

第10表 第3号住居跡出土遺物観察表

件目 番号	所 在 地	種 類	直 径 (cm)	厚 さ (mm)	外 形	内 部 形	材 料	名 称	特 徴	考 察	
1 1	小室 内壁 上部 中央部	口縁 - 断面	100.3	8.0	断面ナギ - 断面ナギ、土壌層 内に現れ、断面ナギの内側に、土壇付 近傍に瓦片が付いた。土壇付近 は、土壇付近に瓦片が付いた。	断面ナギ - 断面ナギ 土壇付近に瓦片が付いた。	陶土	灰白色 - 黄褐色 (17.5mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ
2 2	窓 内壁 上部	口縁 - 断面	15.6	-	断面ナギ - ハラカギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (15.6mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	
3 3	壁 内壁 上部	口縁	11	-	断面ナギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (11mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	
4 4	窓 内壁 上部	口縁	11	-	断面ナギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (11mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	
5 5	窓 内壁 上部	口縁	11	-	断面ナギ - 断面ナギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (11mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	
6 6	壁 内壁 上部	口縁	11	-	断面ナギ - 断面ナギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (11mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	
7 7	窓 内壁 上部	口縁	11	-	断面ナギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (11mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	
8 8	火 炉 内壁 上部	口縁	11	-	断面ナギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (11mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	
9 9	窓 内壁 内 部	口縁	11	-	断面ナギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (11mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	
10 10	窓 内壁 内 部	口縁	11	-	断面ナギ - 断面ナギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (11mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	
11 11	壁 内壁 上部	口縁	11	-	断面ナギ - ハラカギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (11mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片を含む 断面ナギ	
12 12	壁 内壁 上部	口縁	11	-	断面ナギ	断面ナギ	陶土	内底板 (10.5) 厚さ (7.5mm)	2-4mmの断面ナギ	瓦片	
13 13	窓 内壁 壁	壁	5.2	-	チン - ワタセ陶器粘土切石 チン - ワタセ陶器粘土切石	チン - ワタセ陶器粘土切石	チン - ワタセ陶器粘土切石	チン - ワタセ陶器粘土切石	チン - ワタセ陶器粘土切石	瓦片	
14 14	窓 内壁 壁	壁	5.2	-	ハラカギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (5.2mm)	瓦片を含む 断面ナギ	瓦片	
15 15	火 炉 内壁 内 部	壁	5.2	-	断面ナギ - ハラカギ	断面ナギ	陶土	灰白色 - 黄褐色 (5.2mm)	2-4mmの断面ナギ	瓦片	



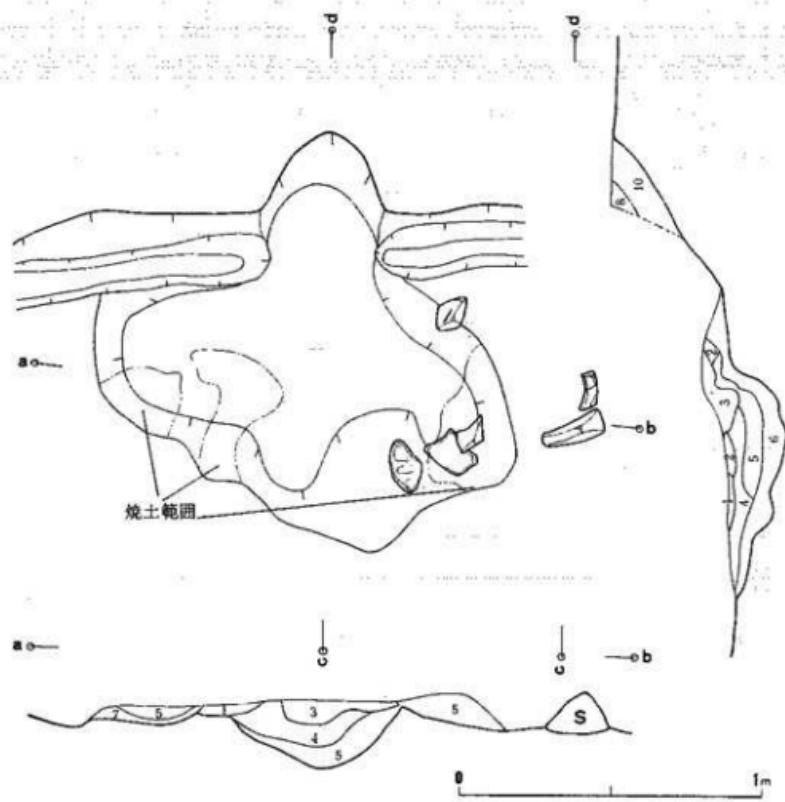
第20図 第3号住居跡出土遺物



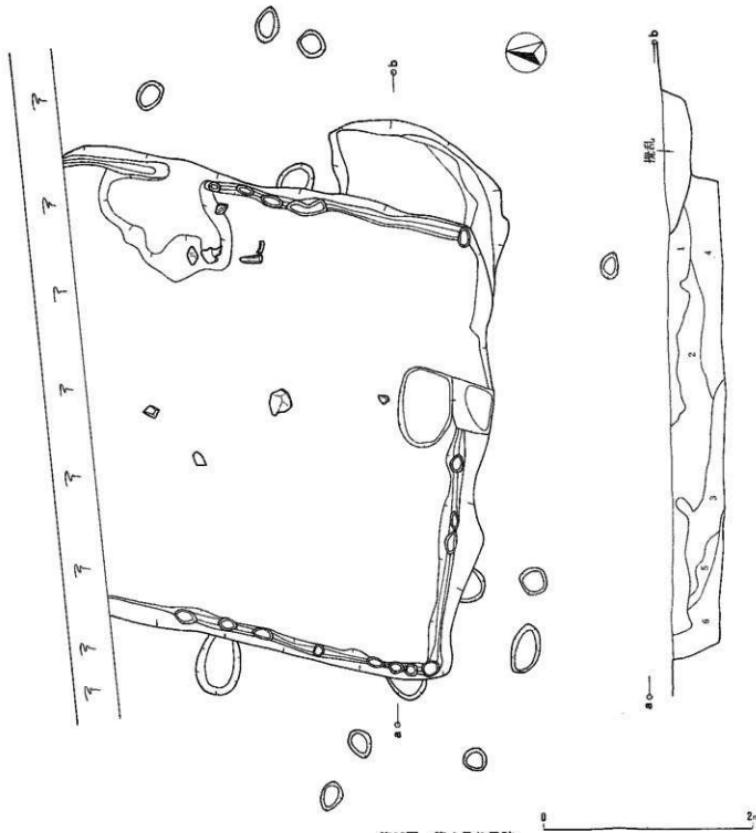
配置図 5

第11表 第4号住居跡観察表

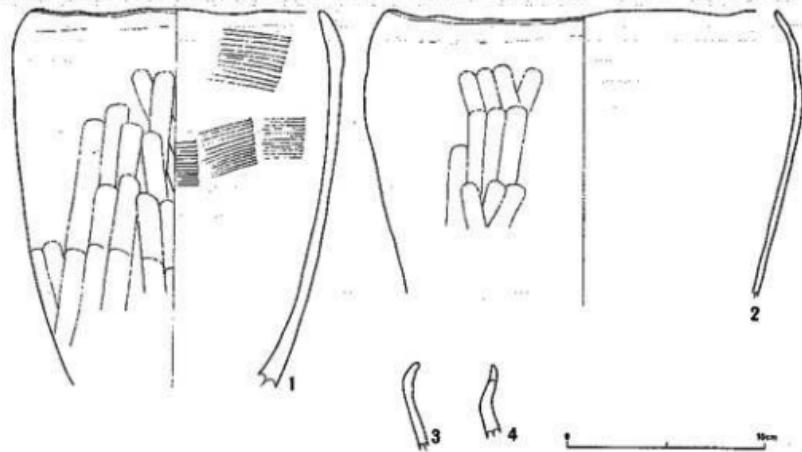
第4号住居跡		種類	21, 22, 23	種類	7, 8
検出区	5-G, 5-H, 6-G, 6-H				
法		大きさ	西壁	南壁	北壁
壁	—	—	—	—	—
壁高	30~40	13~41	50~72	—	—
面積	18	22	20	—	—
層	10	26.5	10	—	—
面積	17.20	—	—	—	—
北緯方位	N-80°W	射影	方別	—	—
直上					
1. 10Y R 5 黒色 粘性やや大 孔隙小 バス約3%混入					
2. 10Y R 5 黑褐色 粘性やや大 孔隙小 バス約5%混入 黄褐色土約3%混入					
3. 10Y R 5 黑褐色 ロームブロック約3%混入 水化物約1%混入 孔隙やや大 孔隙やや小					
4. 10Y R 5 黑褐色 ロームブロック約5%混入 バス約3%混入 粘性やや大 孔隙やや小					
5. 10Y R 5 黑褐色 粘性やや大 孔隙小 ロームブロック50%混入					
6. 10Y R 5 黑褐色 孔隙やや大 粘性やや小 バス約30%混入 水化物5%混入					
壁	傾斜約10°~11°を有する。北壁は調査区外のため検出不可能であり、東壁も激しく擾乱をうけた。				
壁	現存壁から近代の鉄製品が出土している。				
床	中央付近に10~20cmの礫を検出している。				
周	東壁及び南壁(ウッドパネルをのぞく)に沿って検出。南壁は中央より西側に検出する。				
ピット	P1 15×18×20 正方形 P2 20×12×20 P3 78×51×23 多巻の土器片を出土 P4 47×30×20 P5 35×18×18 P6 50×22×10	P1 25×28×10 P2 26×18×7 P3 25×34×15 P4 27×25×16 P5 35×22×20 P6 37×33×23	P1 35×42×20 P2 30×20×8 P3 25×24×8 P4 29×35×14 P5 22×23×8		
位置	東壁南北				
内	1. 10Y R 5 黑褐色 粘性大 孔隙大 水化物約3%混入 2. 10Y R 5 黑褐色 粘性やや大 孔隙小 粘土層 3. 10Y R 5 黑褐色 粘性大 孔隙大 遷土約10%混入 4. 10Y R 5 黑褐色 粘性やや大 孔隙やや小 槌土約5%混入 5. 5 Y R 5 木場色 粘性大 孔隙なし 塗土層				
外	6. 10Y R 5 黑褐色 粘性やや大 孔隙やや小 黄褐色土約30%混入 7. 10Y R 5 黑褐色 粘性やや大 孔隙小 ロームブロック約30%混入 8. 10Y R 5 黑褐色 粘性大 孔隙なし 粘土層 9. 7.5 Y R 5 木場色 粘性やや大 孔隙小 10. 10Y R 5 黑褐色 粘性やや大 孔隙大 バス約5%混入				
外	道旁状態よく、底部の礫層がむづかしい。わずかに右側部の芯材と思われる壁が検出されている。				



第21図 第4号住居跡カマド



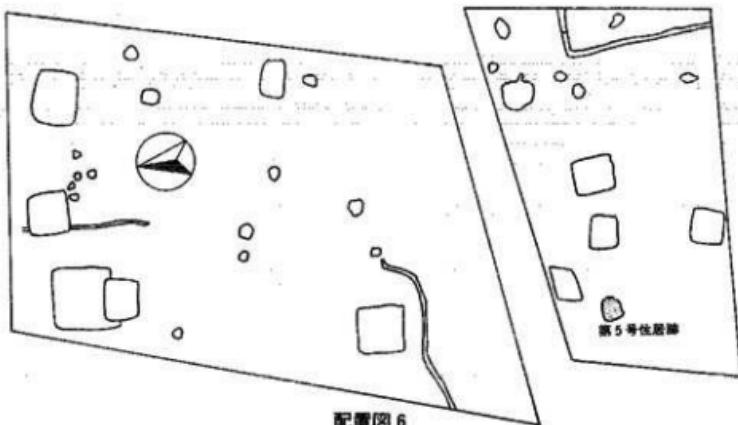
第22図 第4号住居跡



第23図 第4号住居跡出土遺物

第12表 第4号住居跡出土遺物観察表

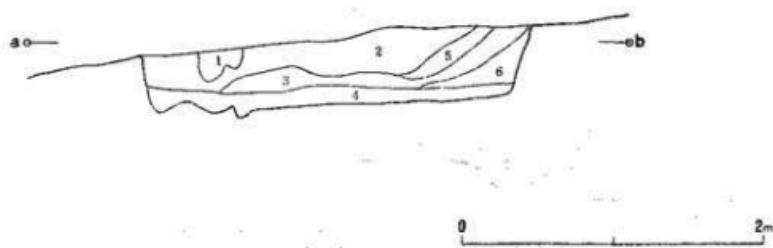
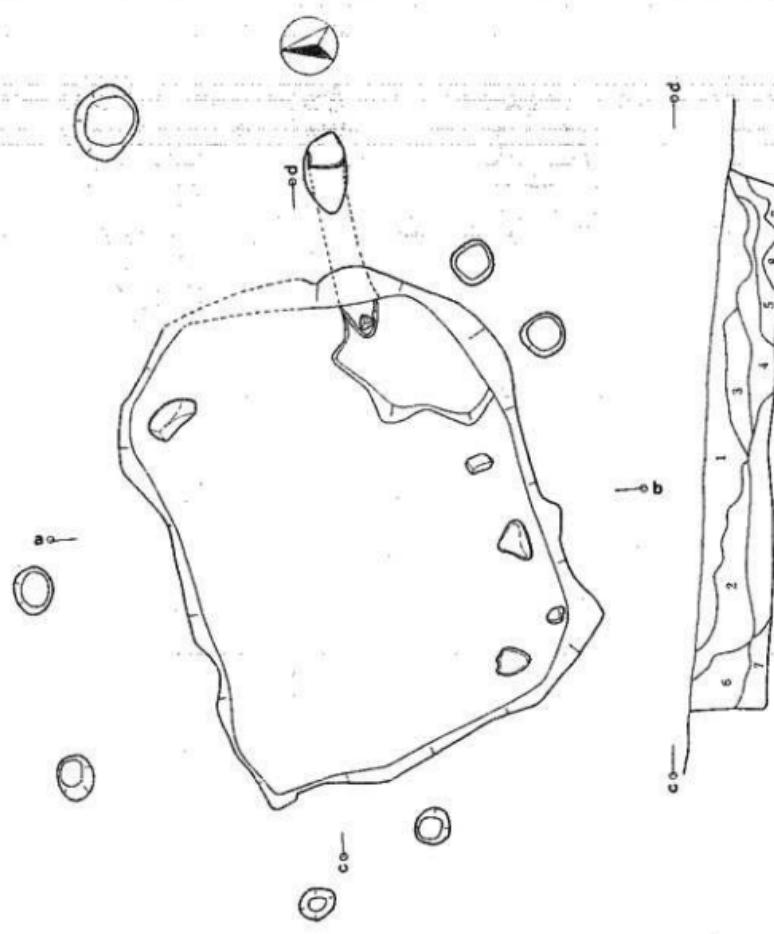
検査番号	出土場所	器形	部位	法量(cm)			調査(地文)		成形	色調	地土	地成
				口径	体径	底径	壁高	外面				
1 第4号 住居跡	甕	口縁-胴部	(14.4)	ドウ (16.5)			横位ナギ ヘラケズリ	ハケメ	積み上 げ法	褐色 (5 YR)	1~7mmの砂粒を含む 石英、黄玉を含む	良好
2 第4号 住居跡	甕	口縁-胴部	(19.6)	ドウ (22.0)			横位ナギ ヘラケズリ	ナギ、一部に螺旋 の炭化物の付着	積み上 げ法	褐色 (7.5 YR)	0.5~6mmの砂粒を含む、 石英を含む	良好
3 第4号 住居跡	甕	口 縁					横位ナギ ヘラケズリ	横位ナギ	積み上 げ法	褐色 (7.5 YR)	2~5mm位の砂粒を含む	良好
4 第4号 住居跡	甕	口 縁					横位ナギ 斜粒ナギ	横位ナギ	積み上 げ法	灰白色 (10 YR)	粘土、1~4mmの石 英の砂粒	良好



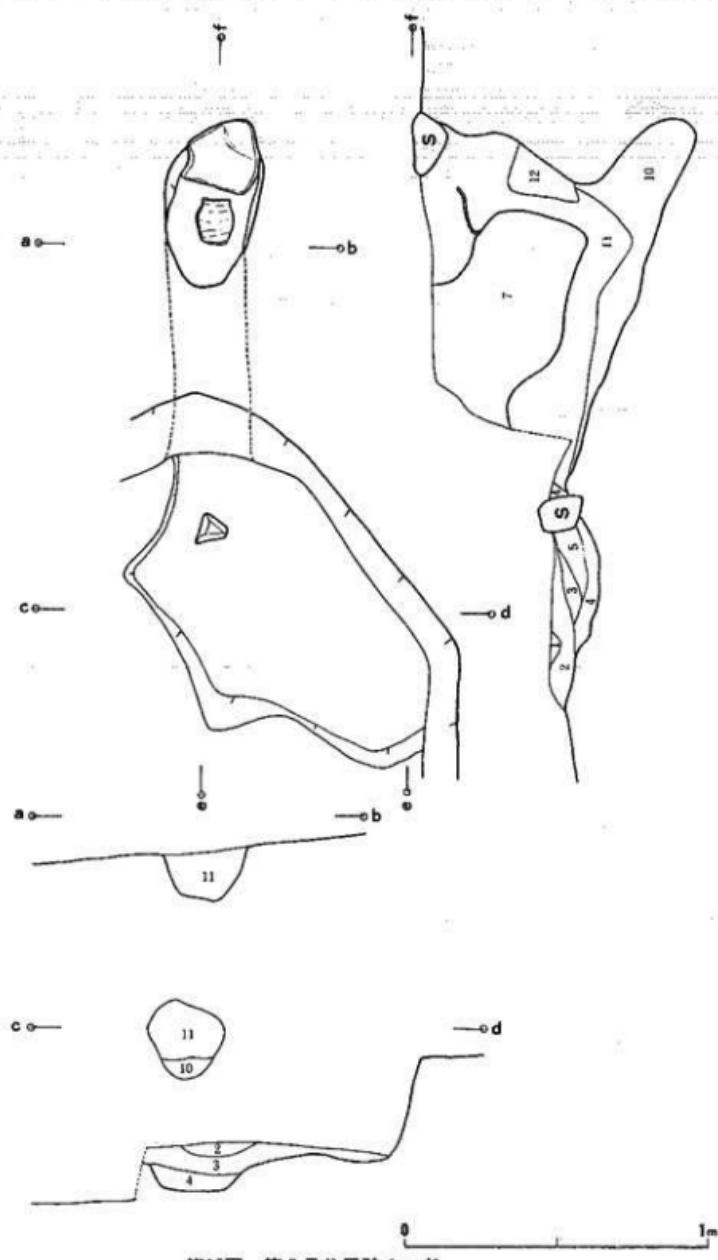
配置図 6

第13表 第5号住居跡観察表

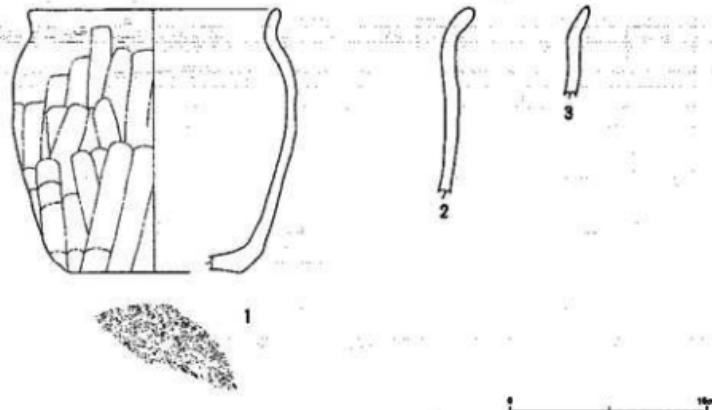
第5号住居跡		標 領	24, 25, 26	同 領	9, 33
移 出 区	3-H, 4-H				
法 壁 長	東 邊	西 邊	南 邊	北 邊	
壁 高	264	282	336	342	
間 隔	39~52	35~48	44~51	36~39	
最 深	—	—	—	—	
面 積	—	—	—	—	
主 軸 方 位	N-94°-W		形 性	不整 方 位	
土	1. 10YR 4H 黒褐色 粘性小 孔隙大 黄色土粒子40% ロームブロック10%植物根混入。 2. 10YR 4H 黑色 粘性中 孔隙大 黄色土粒子30% ロームブロック10%植物根混入。 3. 10YR 4H 黑褐色 粘性大 孔隙小 ロームブロック40%植物根混入+ 黄化物1% 4. 10YR 4H 黑褐色 粘性大 孔隙小 黄色土粒子10% ロームブロック40% 黄化物1%植物根混入。 5. 10YR 4H 黑色 粘性大 孔隙小 黄色土粒子10% ロームブロック30% 6. 10YR 4H 黄色 粘性大 孔隙なし 7. 10YR 4H 黑褐色 粘性大 孔隙なし 黄土である。 8. 10YR 4H 黄褐色 黄化物5% ロームブロック10% 地土2%混入 粘性大 孔隙やや小 尖石1%混入				
壁	傾斜角92°~109.5°を計る。				
床	床面より北壁東寄に1個、南壁西寄に4個及びカマド焼換部部分に1個の坑が検出されている。				
ビ ッ ト	P <sub>1</sub> 24×31×13cm 西壁北寄外に位置する P <sub>2</sub> 23×34×21cm 西壁中央外に位置する P <sub>3</sub> 30×30×15cm 南壁東寄外に位置する P <sub>4</sub> 28×30×14.5cm カマド焼換部南寄に位置する	P <sub>1</sub> 42×50×24cm カマド、煙出部北側に位置する P <sub>2</sub> 27×33×13cm 北壁、中央外に位置する P <sub>3</sub> 25×30×17cm 北壁、西寄外に位置する P <sub>4</sub> 住居跡内にpitの検出はできなかった。			
位 置	東壁やや南寄				
カ	1. 7.5YR 4H 黄褐色 粘性大 孔隙なし 黄土である 2. 7.5YR 4H 黄褐色 粘性やや大 孔隙小 バミス約10%混入 3. 10YR 4H 黄色 粘性大 孔隙なし バミス約3%混入 黄土約10% 4. 5YR 4H 明黄褐色 粘性大 孔隙なし 黄土である 5. 10YR 4H 黄褐色 粘性大 孔隙なし 黄土である 6. 10YR 4H 黄褐色 粘性中 孔隙やや大 黄化物を約50%混入 7. 10YR 4H に近い黄褐色 粘性やや大 孔隙小 ロームブロック約10%混入 8. 7.5YR 4H 黄褐色 粘性大 孔隙なし 黄土である 9. 10YR 4H 黄黃褐色 粘性大 孔隙小 バミス約3%混入 10. 10YR 4H 黑色 粘性小 孔隙大 黄化物を約40%以上混入 11. 10YR 4H 黄褐色 粘性小 孔隙大 黄化物を50%以上混入 12. 10YR 4H 黑褐色 粘性小 孔隙大 黄化物約50%混入				
F	遺存部が強く、壁部及び基礎部の確認がむずかしい。壁部断面は円形であったと思われる。煙出部中央部分においては土器片が検出され、また、煙出部東寄には使用部をおおうように裡(24×25cm)が検出されている。				



第24図 第5号住居跡



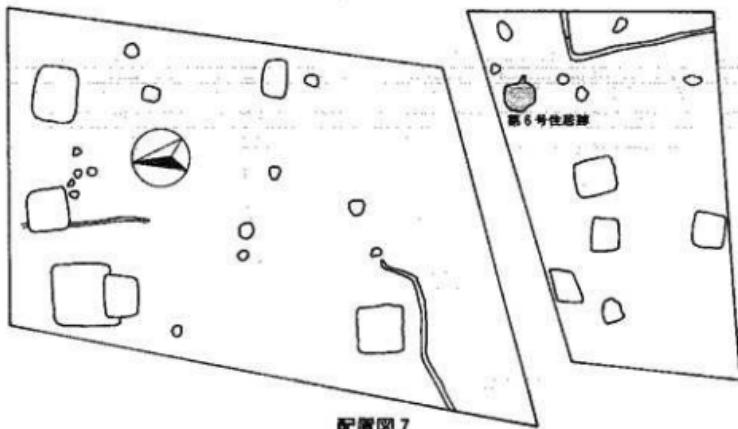
第25図 第5号住居跡カマド



第26図 第5号住居跡出土遺物

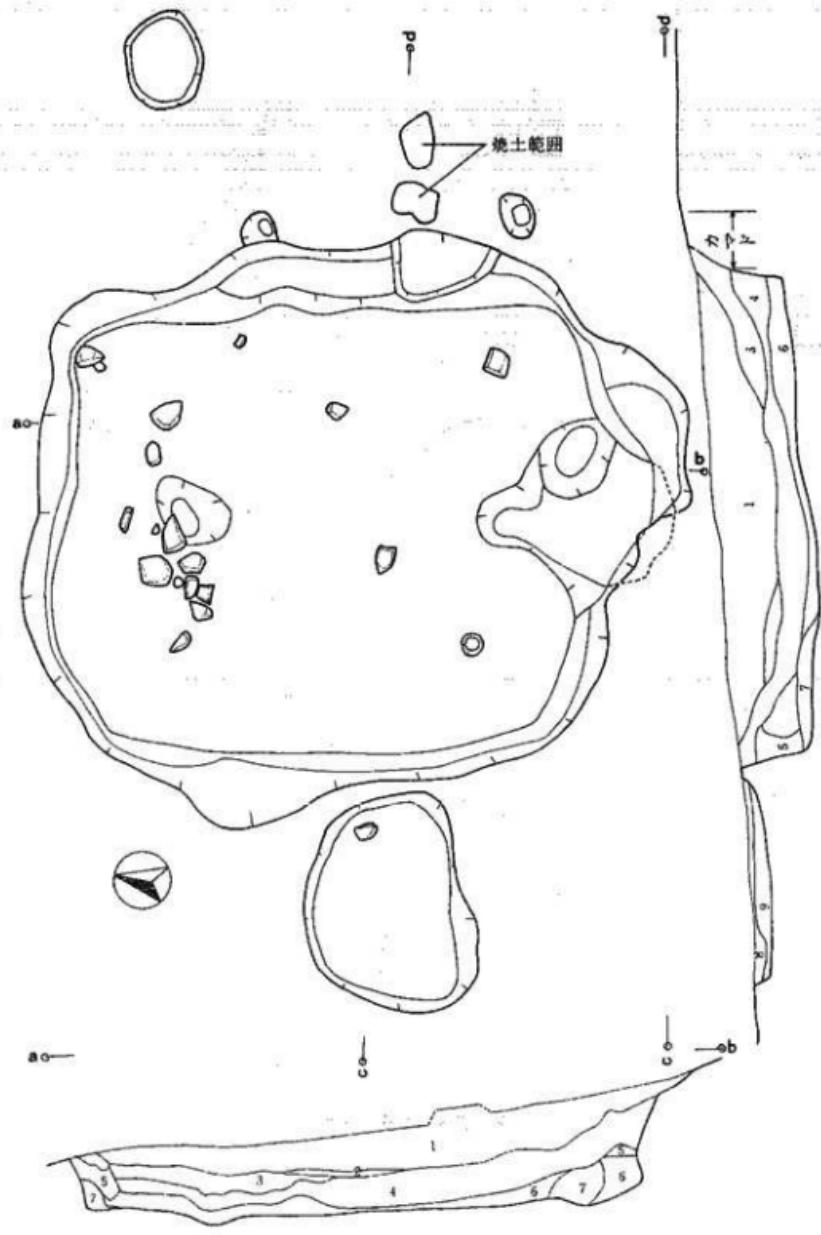
第14表 第5号住居跡出土遺物観察表

探査番号	出土地点	器形	部位	法 尺 (cm)				調 算 (地 大)		成 形	色 調	胎 土	焼成
				口 径	体 径	底 径	厚 度	外 面	内 面				
1 第5号 住居跡	小形 の壺	口縁—底部 底部—脚矢縁	(12.7)	(8.7)	13.3	横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ、内面に薄茶の 黒化物が底点状に付着	積み上 げ法	褐色 (5 YR R)	3~5mmの砂粒 を幾かに含む	良好		
2 第5号 住居跡	甕	口 縁				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上 げ法	にぼい褐色 (7.5 Y R)	2~5mmの砂 粒を含む	良好		
3 第5号 住居跡	甕	口 縁				横位ナデ 縦位ナデ	横位ナデ、内面に球状 の炭化物付着	積み上 げ法	にぼい褐色 (7.5 Y R)	砂粒を含む	良好		

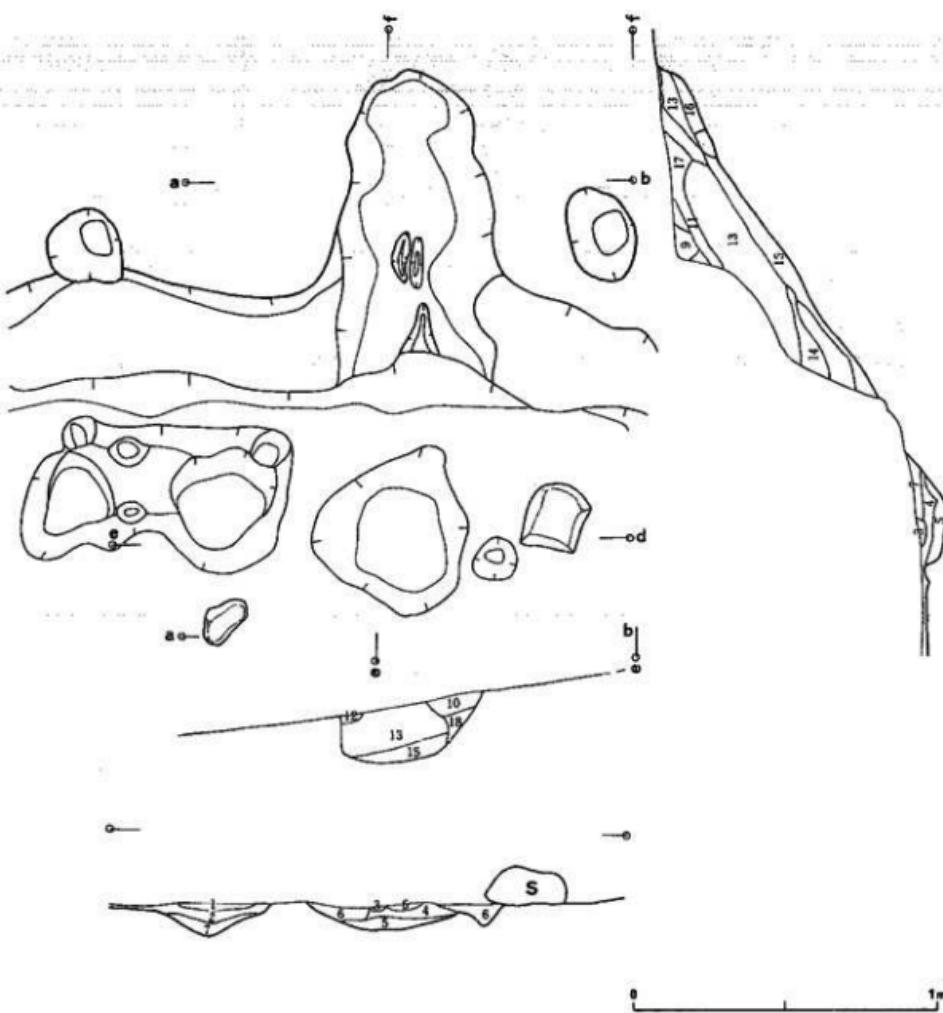


第15表 第6号住居跡観察表

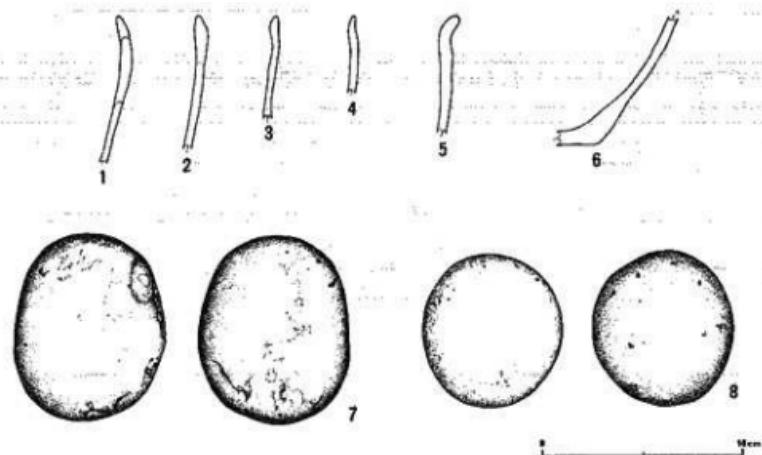
第6号住居跡		沖縄	27, 28, 29	沖縄	10, 33
検出区	7-B, 7-C				
法	東壁	西壁	南壁	北壁	
盤長	340	370	350	335	
盤高	40-83	32-49	67.5-72	17-25.5	
間隔深	—	—	—	—	
壁深	—	—	—	—	
面積	12.08				
主軸方位	N-102°-W	形態	不整方形		
質	1. 10YR 2/4 黒褐色 硅化小 孔隙率 大 1-5mm程のパラス 5-7% 岩 褐色土粒 2-3% 2. 10YR 2/4 黑褐色 硅化小 パラス 1-2% 3. 10YR 2/4 黑褐色 硅化やや有 褐色やや有 褐色土粒 10-15% 枯化 物 1-2% 4. 10YR 2/4 黑褐色 硅化やや有 花崗小 黑褐色土 ブロック 25-30%	5. 10YR 2/4 黑褐色 硅化小 孔隙小 キノコかく均質 6. 10YR 2/4 黑褐色 硅化大 孔隙小 黑褐色土粒 7-10% 7. 10YR 2/4 黑褐色 硅化大 孔隙小 8. 10YR 2/4 黑褐色 硅化小 孔隙大 9. 10YR 2/4 黑褐色 硅化大 孔隙小			
壁	傾斜角 102°-112°を計る。あまり過多な傾斜のよい壁とはいえない。				
床	北壁中央寄りのpin そばに 5-30cm程の塊がかかるようにして検出されている。				
周辺	検出されず				
ビート	P1 50×60×10cm 東壁北側(外)に位置する P2 25×20×45cm 東壁中央や北寄り5cm(外)に付設している P3 23×22×5cm 東壁南側(外)に位置する P4 46×52×10cm カマド 左隣接間に位置する	P1 46×53×15.5cm 北壁中央より約60cm程のところに位置する P2 15×15×8cm カマド 右隣接間に位置し、多数の遺物を作成する P3 110×147×15cm 西壁中央(外)に位置する			
位	南壁や中央				
方	1. 10YR 2/4 黑褐色 硅化物は認められず、黑色土が若干ではあるが薄くかきこまっている。 2. 10YR 2/4 黑褐色 硅化物 1-2% 黑褐色土粒 5% 枯化物 2% 混入 3. 5YR 2/4 黑褐色地帯 硅化なし 小-大の隙間まで土粒と砂が混入している(岩貝をくだけとキノコかくさらさらしている) 崩くても多い。 4. 10YR 3/4 黑褐色土 硅化なし 枯れかわい 砂の小の隙間で黑色土粒を多く含んでいる。 5. 5YR 2/4 黑褐色地帯 硅化なし 花崗石 (年々崩かれて細かい砂のあつまり、生き残らしている) 崩く。 6. 10YR 2/4 黑褐色土 硅化物 1-2% 黑褐色土粒 15% 枯化物 5% 混入 7. 10YR 2/4 黑褐色土 硅化物 1-2% 黑褐色土粒 15% 枯化物 5% 混入 8. 10YR 2/4 黑褐色土 硅化物 1-2% 黑褐色土粒 15% 枯化物 5% 混入 9. 10YR 2/4 黑褐色土 硅化物 1-2% 黑褐色土粒 15% 枯化物 5% 混入 10. 10YR 2/4 黑褐色 地盤内に 10YR 2/4 黑褐色の 砂のあつまり (10-15mm) 3% 植物根混入 11. 5YR 2/4 黑褐色 地盤内に 10YR 2/4 黑褐色の 砂のあつまり (10-15mm) 3% 植物根混入 12. 10YR 2/4 黑褐色 地盤内に 10YR 2/4 黑褐色の 砂のあつまり (10-15mm) 3% 植物根混入 13. 10YR 2/4 黑褐色 地盤内に 10YR 2/4 黑褐色の 砂のあつまり (10-15mm) 3% 植物根混入 14. 10YR 2/4 黑褐色 地盤内に 10YR 2/4 黑褐色の 砂のあつまり (10-15mm) 3% 植物根混入 15. 10YR 2/4 黑褐色 地盤内に 10YR 2/4 黑褐色の 砂のあつまり (10-15mm) 3% 植物根混入 16. 10YR 2/4 黑褐色 硅化物 1-2% 黑褐色土粒 15% 枯化物 5% 混入 17. 10YR 2/4 黑褐色 地盤内に 10YR 2/4 黑褐色の 砂のあつまり (10-15mm) 3% 植物根混入 18. 10YR 2/4 黑褐色 地盤内に 10YR 2/4 黑褐色の 砂のあつまり (10-15mm) 3% 植物根混入				
地	西側部及び北側部東側のpinの近傍には飛げたあとがみられる。また、袖部の芯材に用いられたと思われる、飛げたあとのある。27×87cmの塊と43×10cm(削除している)の塊が検出されている。また、袖道部中央には袖道部の補強材を示す跡と思われるpinが2つ検出されている。				



第27図 第6号住居跡



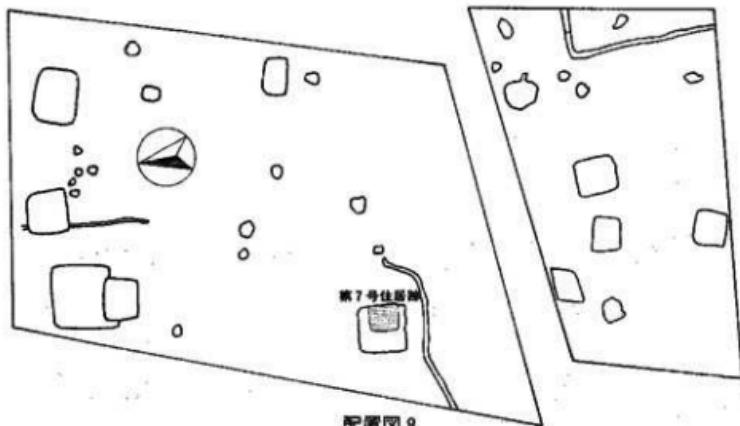
第28図 第6号住居跡カマド



第29図 第6号住居跡出土遺物

第16表 第6号住居跡出土遺物観察表

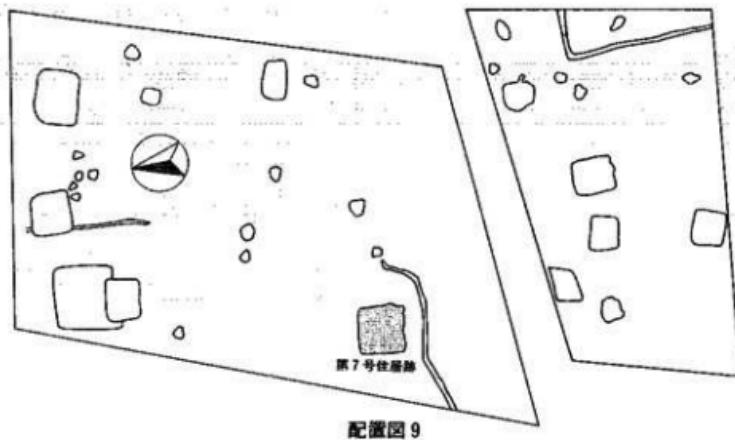
検査番号	出土地点	形態	部位	法 直 (cm)			調 整(地文)	成 形	色 調	粘 土	施 成
				口径	体深	底径					
1	第6号住居跡	楕	口縁				ナデ ヘラケズリ	ハケメ	積み上げ法 (外)にぶい褐色 (内)灰褐色 (7.5Y)	1~4mmの砂粒を含む	良 好
2	第6号住居跡	楕	口縁				ナデ ヘラケズリ	積位ナデ	積み上げ法 にぶい褐色 (5YR)~褐色	砂粒を微かに含む	良 好
3	第6号住居跡	楕	口縁				積位ナデ ナデ ヘラケズリ	積位ナデ	にぶい褐色 外周一部、紺灰色	砂粒を微かに含む 石英を含む	良 好
4	第6号住居跡	楕	口縁				積位ナデ ヘラケズリ	積位ナデ	にぶい褐色 (5YR)	砂粒を微かに含む 石英を含む	良 好
5	第6号住居跡	楕	口縁				積位ナデ	積位ナデ	にぶい褐色 (7.5YR)	砂粒を微かに含む	良 好
6	第6号住居跡	楕	底部				ヘラケズリ	積位ナデ	積み上げ法 にぶい褐色 (5YR)	砂粒を含む石英を含む	良 好
7	第6号住居跡	塊 石		径9.3	×	7.5	×	5.7cm	石質 安山岩		
8	第6号住居跡	塊 石		径7.5	×	7.0	×	7.3cm	石質 安山岩		



配置図 8

第17表 第7号住居跡A観察表

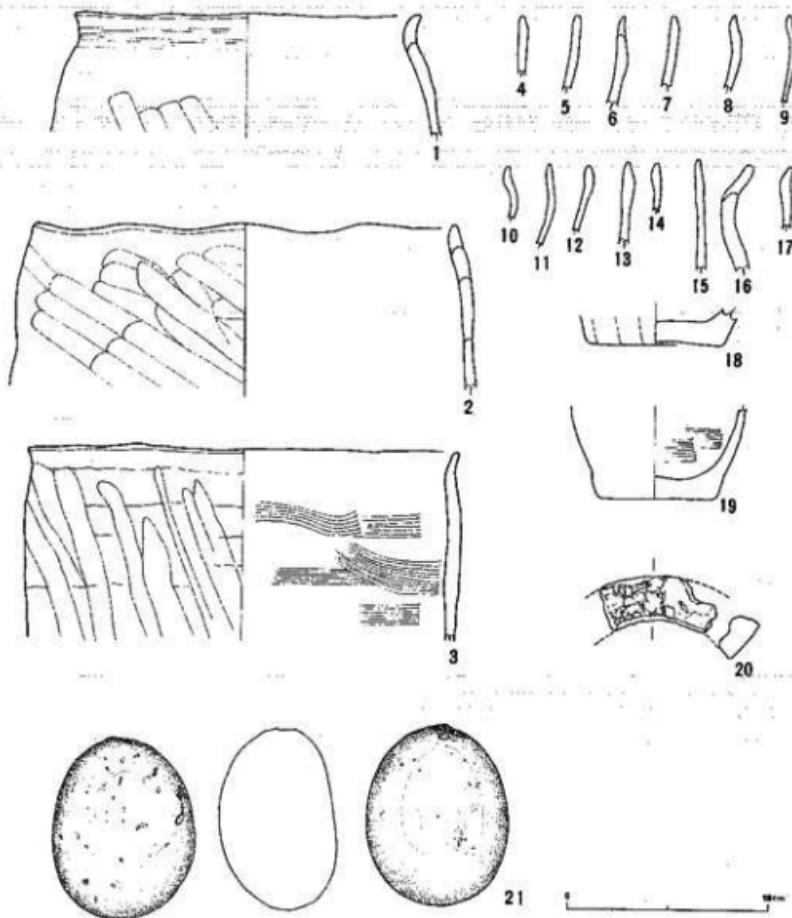
第7号住居跡A		辨 因	30, 31	因 版	11, 34
検 出 区	9—I, 9—J, 10—I, 10—J				
法	東 壁	西 壁	南 壁	北 壁	
盤 長	〈444〉	〈456〉	〈443〉	〈449〉	
盤 高	〈20.9~40.2〉	—	〈3.5~15.7〉	—	
周溝幅	5~13	—	5~10	—	
周溝深	3.0~18.3	—	0.9~9.0	—	
面 積	〈20.24〉				
主 軸 方 位	N—85°—E	形 態	方 形		
覆 土	1. 10Y R 5分 黒褐色 粘性大 孔隙小 粘土25~30%混入 2. 10Y R 5分 黑色 粘性やや有 孔隙大 黄褐色土粒15~20%混入 3. 10Y R 5分 褐色 粘性大 孔隙小 粘土で砂質性がやや混入				
壁	北壁及び西壁がほとんど検出できなかった。 また検出された他の壁面の保存状態もきわめて悪い。				
周 溝	東壁のカマド両側極く僅かと南壁の一部に検出することができた				
ビ ッ ク	P <sub>1</sub> 20×20×26.7 東壁南側隅 P <sub>2</sub> 28×30×31.5 南壁外中央付近 P <sub>3</sub> 15×26×7.8 南壁西側 P <sub>4</sub> 44×46×20 南壁西側 P <sub>5</sub> 31×50×36.2 南壁西側隅 P <sub>6</sub> 26×31×8 西壁南側 P <sub>7</sub> 37×45×16.6 西壁中央付近 P <sub>8</sub> 41×46×30 西壁北側隅 P <sub>9</sub> 44×47×31 北壁東側 P <sub>10</sub> 30×34×19.5 北壁東側隅 P <sub>11</sub> 41×45×18.5 住居跡内北西側 P <sub>12</sub> 115×168×17.8 北壁中央付近				
カ マ ド	カマド本体部分に芯材を立ててあったと思われるpitが検出されているが、芯材に使用されたと思われる石材は見あたらなかった。またこのカマドは拡張後もS1007Bと共用したものと思われる。				



配置図 9

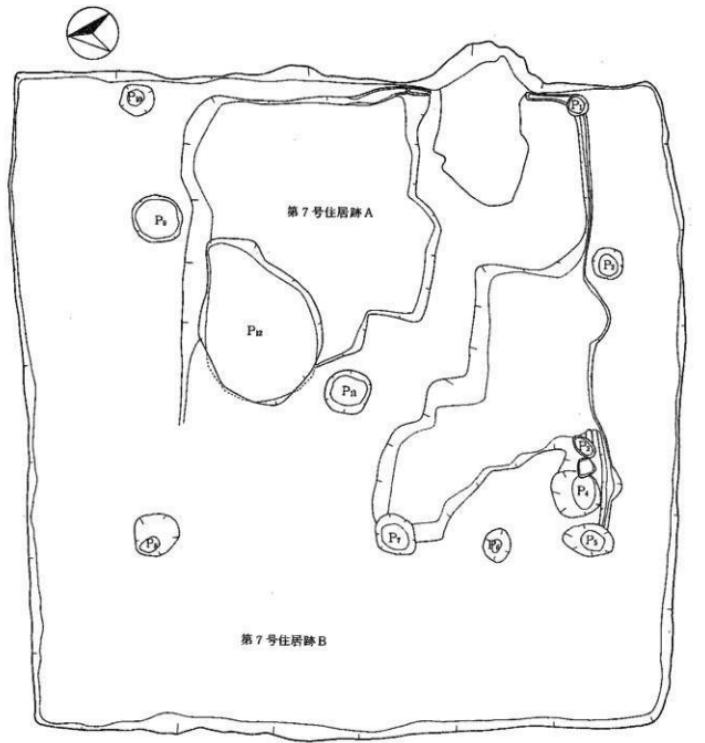
第18表 第7号住居跡B観察表

第7号住居跡B		沖 国	30, 31	国 版	11, 34		
検出区	9-I, 9-J, 10-I, 10-J						
	東 壁	西 壁	南 壁	北 壁			
法 壁・長	702	600	618	684			
壁・高	50.6~78.2	17.5~28.1	38.8~55.5	25.2~40			
量 周溝幅	—	—	—	—			
周溝深	—	—	—	—			
面 積	39.6						
主軸方位	N-83.6-W		形 態	方 形			
種 土	1. 10Y R 5% 黒褐色 孔隙大 ロームブロック20~30%混入 植物根入 2. 10Y R 5% 黒褐色 孔隙小 パミス10~15%混入 3. 10Y R 5% 黒色 孔隙小 ロームブロック5~7%混入 4. 10Y R 5% 黒褐色 孔隙小 粘性有 黄褐色土粒40~45%混入 5. 10Y R 5% 黒褐色 孔隙小 粘性有 ロームブロック2~3%混入 6. 10Y R 5% 砂褐色 孔隙大 ロームブロック50~55%混入 7. 10Y R 5% 黒褐色 孔隙小 ロームブロック60~65%混入						
	壁 床面に対する傾斜角は98°~112°を計る						
	位 置 東壁 南寄り						
	カマド カマド本体部分に芯材を立ててあったと思われるpHが検出されているが、芯材に使用されたと思われる石材は見あたらなかった。またこのカマドはS1007を強張した後も共用したものと思われる。						

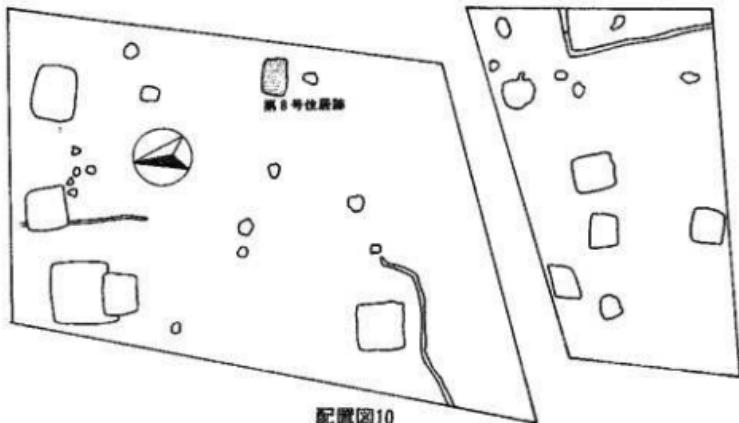


第30図 第7号住居跡出土遺物

19表 第7号住居跡出土遺物觀察表

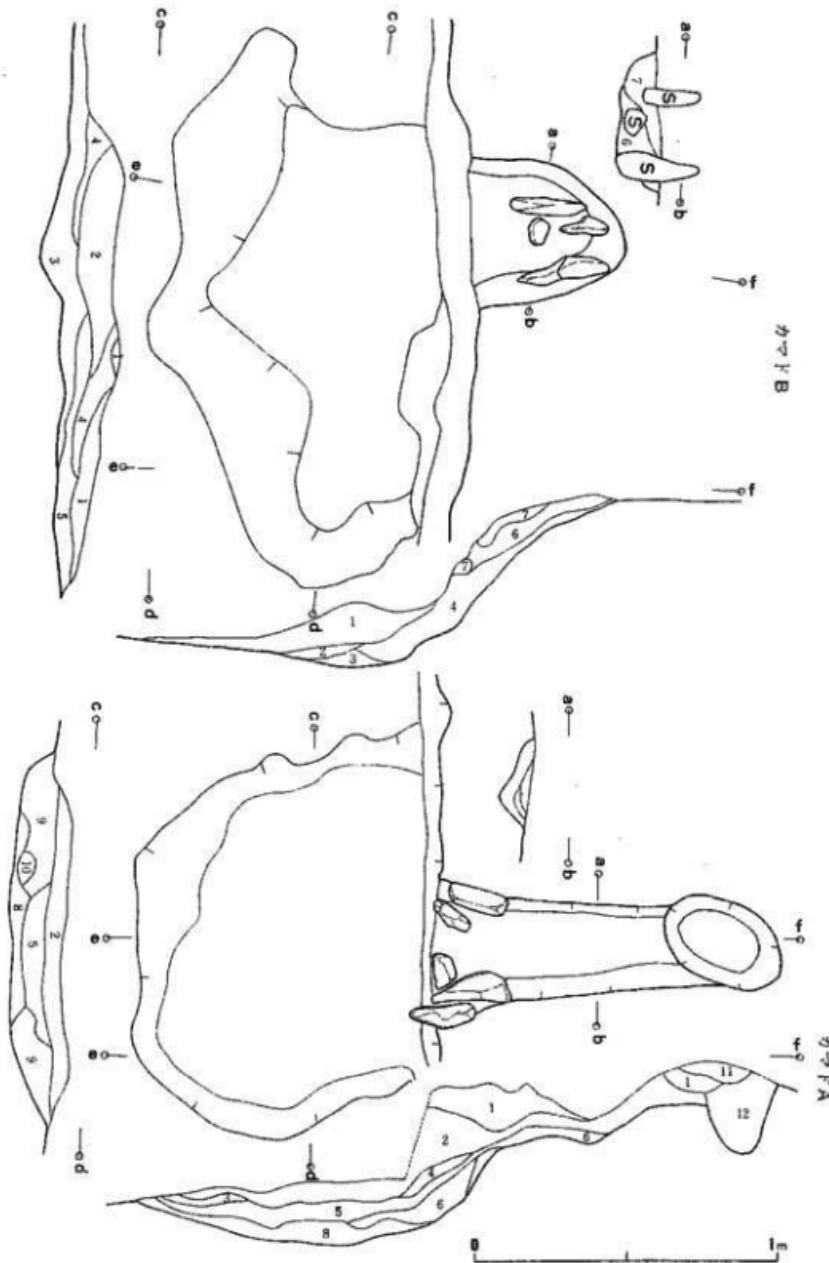


第31図 第7号住居跡

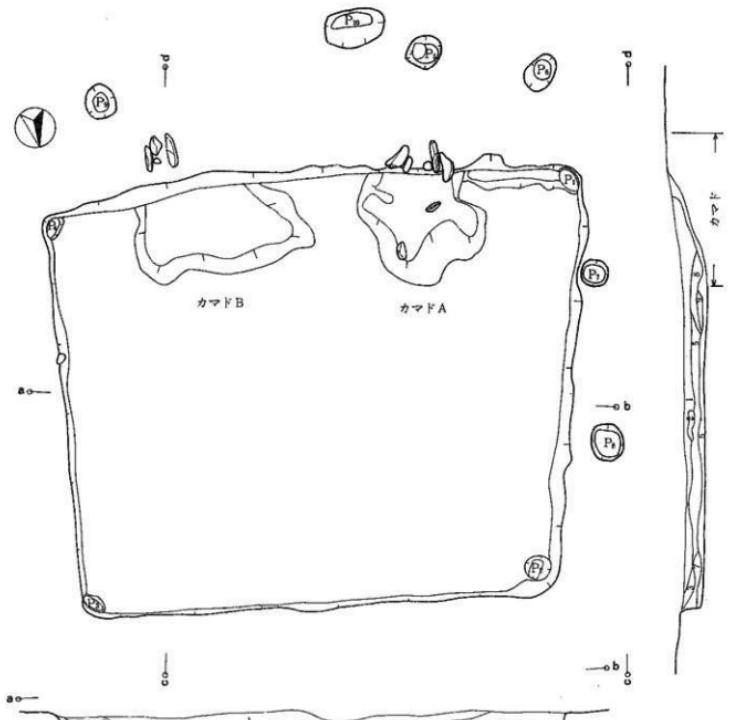


第20表 第8号住居跡観察表

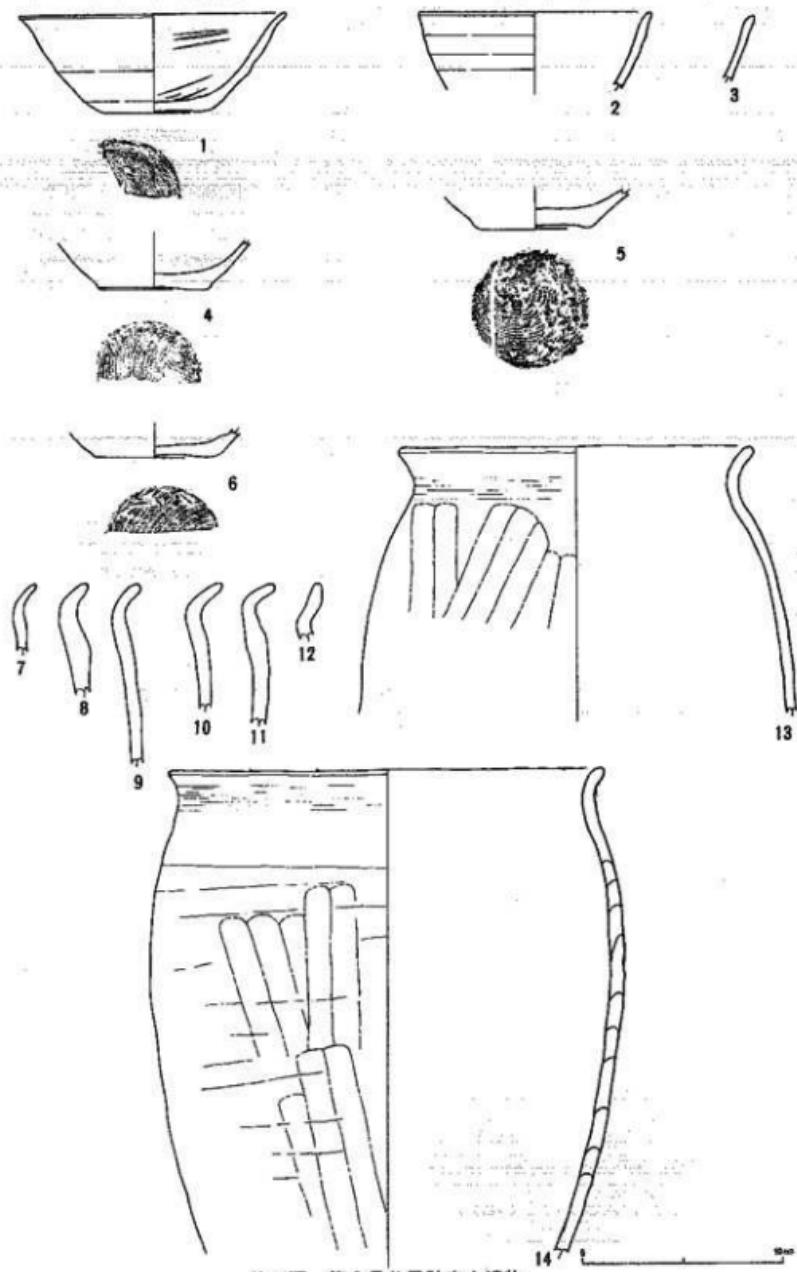
第8号住居跡		神奈川	32, 33, 34, 35, 36	横浜	12, 13, 25, 36
検出区	13-B, 13-C, 14-B, 14-C				
法	東壁	西壁	南壁	北壁	
壁長	420	435	531	455	
壁高	24~36	12~19	23~45	15~23	
周辺地	—	—	9.0~20.0	—	
湖底深	—	—	5.7~13.0	—	
面積	30.0				
上部方位	N~N-E	E	東方角		
覆土	1. 10Y R 5 黒色 粘性質なし 孔隙大 バリス10~15%含 部分的真 褐色土粒混入 2. 10Y R 5 黑色 パリス用50% 粘性質 孔隙大 3. 10Y R 5 黑褐色 やや粘質 孔隙小 ミジンなし 4. 10Y R 5 黑褐色 やや粘質 孔隙大 バリス20~40% 5. 10Y R 5 黑褐色 粘性質 孔隙やや有 バリス7~10%	6. 10Y R 5 黑褐色 粘性質 孔隙大 バリス1~5% 7. 10Y R 5 黑褐色 粘性質 孔隙大 黑褐色土粒10~15%+柱 8. 10Y R 5 黑色 粘性質やや有 孔隙大 バリス20~30% 9. 10Y R 5 黑色 粘性質 孔隙大 バリス7~10%			
壁	傾斜角92.5°~99° 海側の壁だけ143.5°ありこれはセクション測の際、古いカドの上を通したためである				
床	北西隅方向に37×30cm程の炭化物範囲が見られる				
周溝	カマドB面側より約までわざかではあるが面溝が見られる。その他の見られない。				
ビット	P1 14×24×26.8 カマドB西側 P2 12×24×16.3 住居跡北西側 P3 18×23×11.1 住居跡北東側 P4 13.5×20×20.9 住居跡南東側 P5 30×36×26.8 カマドBの壁側	P1 25×37×15.6 カマドB南側西面 P2 25×25×10.8 住居跡南壁外北側 P3 31×34×13.7 住居跡南壁外北側 P4 28×33×20.6 カマドA南側東面 P5 35×56×18.8 カマドB南側東面			
位 置	2つあり カマドA 南壁裏寄り カマドB 南壁裏寄り				
カ	1. 7.5Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙小 濃度30% 厚さ10mm混入 カマドBと見われる万からよせられた丸石 2. 10Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙大 土塊30% 黑褐色7% 黑褐色土 3. 10Y R 5 黑色 粘性土 孔隙小 黑褐色の砂質粒子30%混入 4. 10Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙中 黑褐色7% 孔隙3%混入 5. 10Y R 5 黑色 粘性土 孔隙大 土塊2~3%混入 6. 10Y R 5 黑色 粘性土 孔隙大 土塊中 黑褐色土3~4% 黑褐色土 7. 10Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙中 土塊入 8. カマドB	2. 10Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙大 黑褐色土粒混入 3. 10Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙大 孔隙少 4. 7.5Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙中 土塊 5. 7.5Y R 5 黑褐色土 黑褐色 粘性土 孔隙中 4に比して粘度化 6. 10Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙中 7. 7.5Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙大 土塊 8. 10Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙少 砂質 9. 10Y R 5 黑褐色 粘性土 砂質混入 黑褐色土粒3~4%混入 10. 10Y R 5 黑色 粘性土 孔隙大 ロック 11. 10Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙小 黑褐色土粒7% 粘性の塊上3% 混入 12. 10Y R 5 黑褐色 粘性土 孔隙大 ロームブロック3%混入			
シ	この住居跡には2つのカマドが見られる。南壁裏寄りのカマドBが被用されたものと思われる。双方とも被用部分の芯材には青磚瓦が用いられている。カマドBの方は被道及び突出し孔は被出できたが、カマドAは被出できなかった。				
通	物 カマドA全体部分より多数の上部漆器が出土している。				
備	考 カマドAはカマドBよりも新しい。				



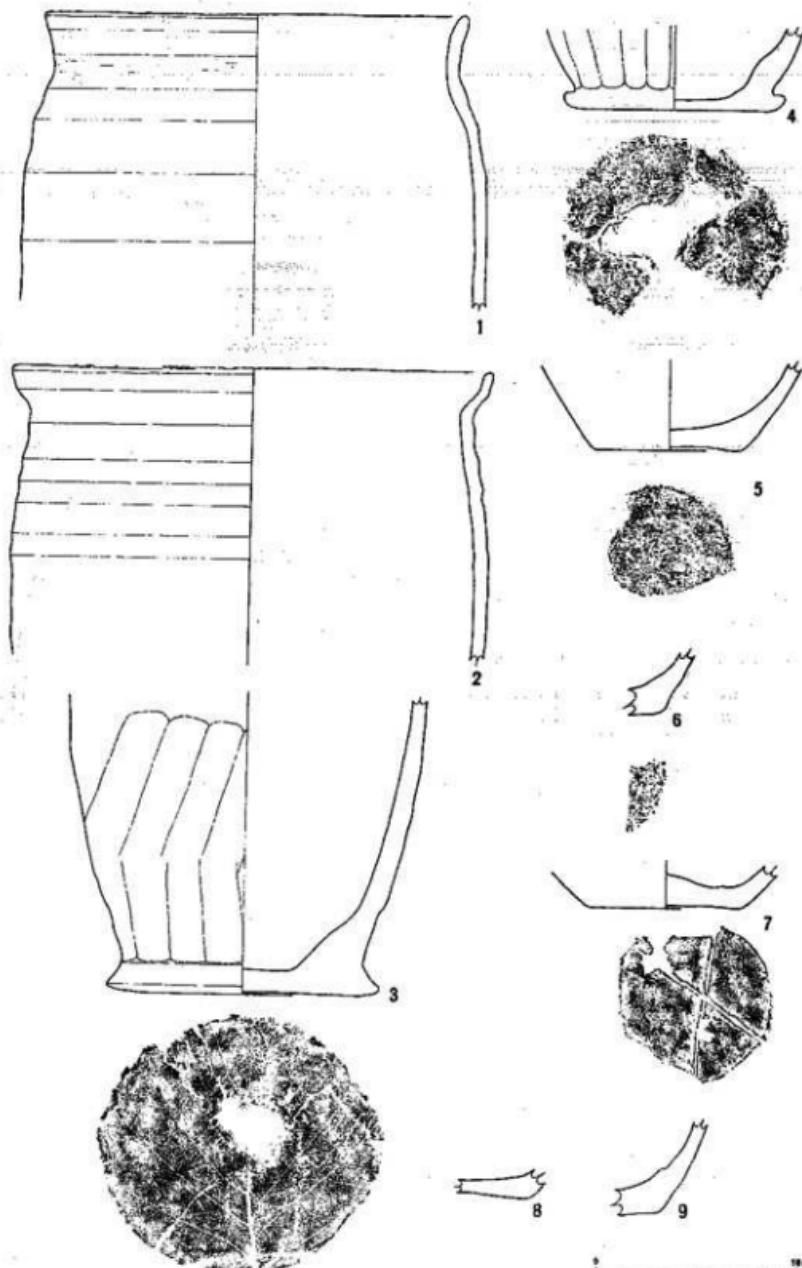
第32図 第8号住居跡カマド



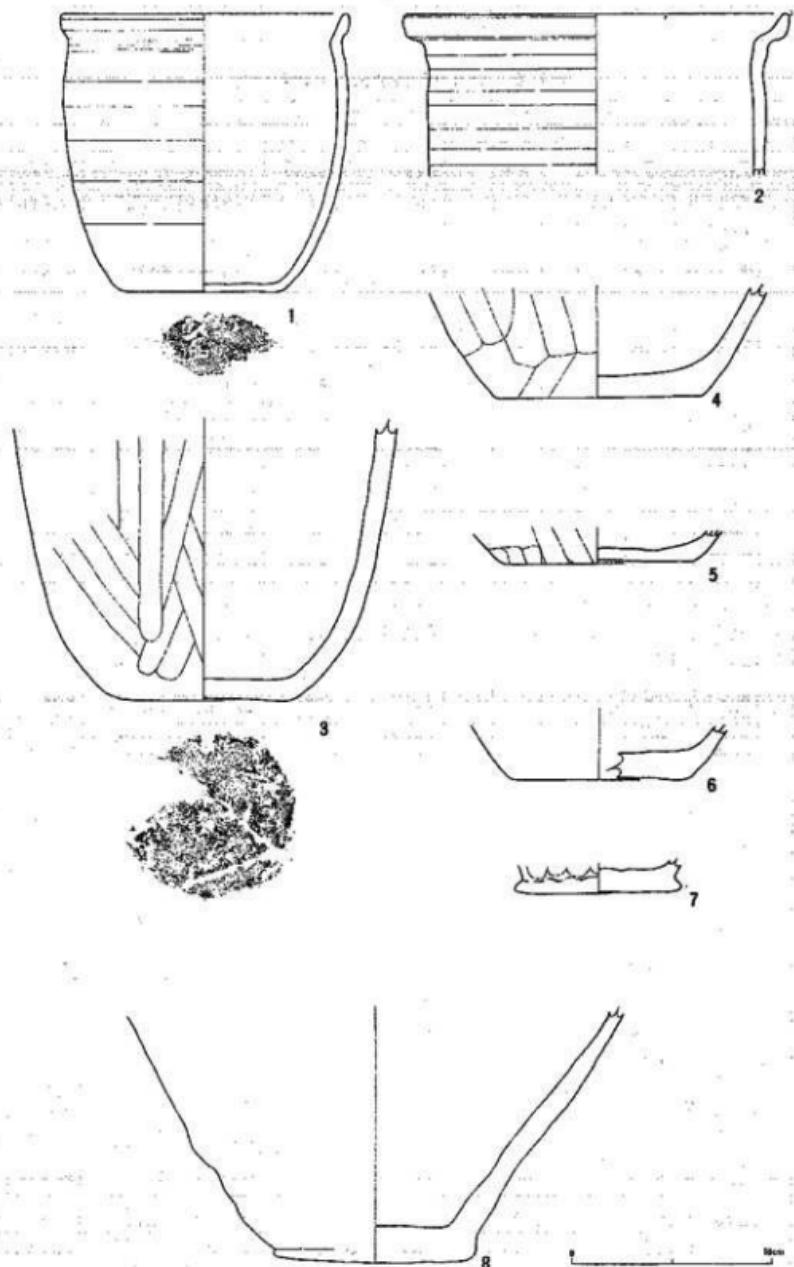
第33図 第8号住居跡



第34図 第8号住居跡出土遺物



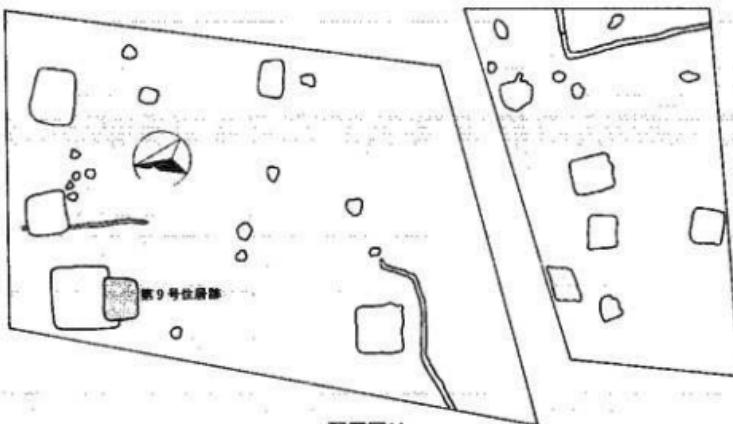
第35図 第8号住居跡出土遺物



第36図 第8号住居跡出土遺物

第21表 第8号住居跡出土遺物観察表

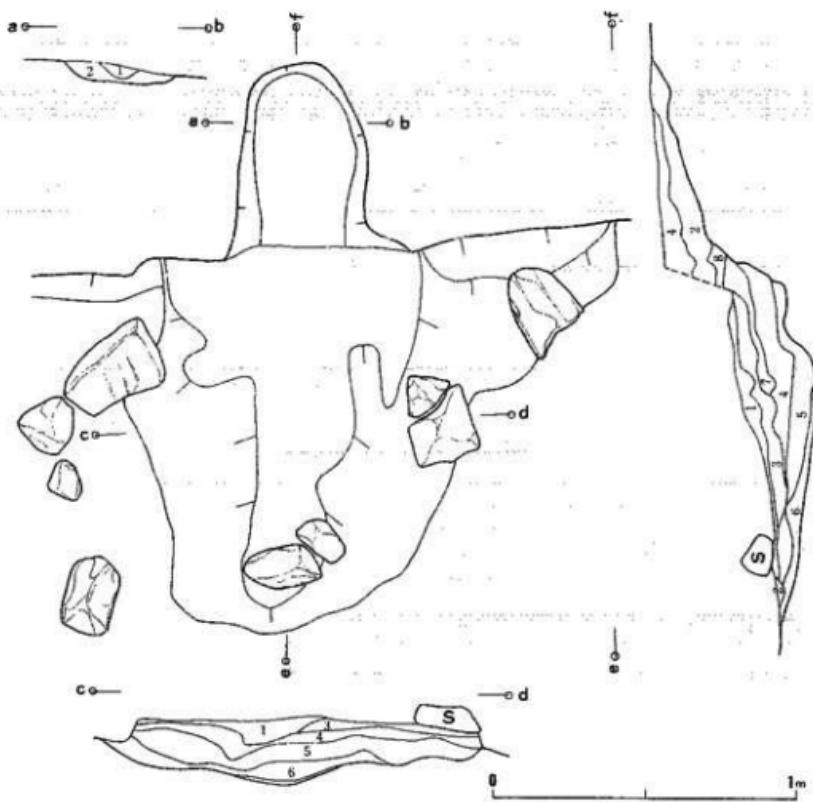
標	出	土	点	器形	部	位	法			量 (cm)			調			成	形	色	調	地	土	地
							口	径	体	径	走	径	器	高	外	面	内	面				
34-1	第8号	住居跡	环	口縁~底部	(13.3)		(5.1)	(4.9)	ナシ	ロクロ右削	ヘラミガキ	板み切り	ロクロ日本焼き	褐色 (5 YR)	砂粒を含む	激かに含む	良好					
2	第8号	住居跡	环	口 縁	(11.6)				ナシ		ナシ		ロクロ日本焼き	に古い褐色 (5 YR)	砂粒を含む		良好					
3	第8号	住居跡	环	口 縁					ナシ		ナシ		ロクロ水焼き	浅黄褐色 (7.5 YR)	砂粒を含む		良好					
4	第8号	住居跡	环	底 部			(5.4)		ナシ	ロクロ回転糸切り	ナシ		ロクロ水焼き	浅黄褐色 (7.5 YR)	砂粒を含む		良好					
5	第8号	住居跡	环	底 部			5.6		ナシ	ロフロ回転糸切り	ナシ		ロクロ水焼き	に古い黄褐色	砂粒を含む		良好					
6	第8号	住居跡	环	底 部			(6.7)		ナシ	糸糸切り	ナシ		ロクロ水焼き	浅黄褐色 (10 YR)	砂粒を含む		良好					
7	第8号	住居跡	甕	口 縁					横位ナデ	ヘラケズリ	横位ナデ		積み上げ法	浅黄褐色 (7.5 YR)	砂粒を含む		良好					
8	第8号	住居跡	甕	口 縁					横位ナデ	ヘラケズリ	横位ナデ		積み上げ法	灰黃褐色 (10 YR)	砂粒を含む		良好					
9	第8号	住居跡	甕	口 縁					横位ナデ	ヘラケズリ	横位ナデ		積み上げ法	灰白色 (10 YR)	砂粒を含む		良好					
10	第8号	住居跡	甕	口 縁					横位ナデ	ヘラケズリ	横位ナデ		積み上げ法	浅黄褐色 (7.5 YR) (5.5 YR) に古い 褐色 (10 YR)	砂粒を含む		良好					
11	第8号	住居跡	甕	口 縁					横位ナデ	ヘラケズリ	横位ナデ		積み上げ法	に古い黄褐色 (10 YR)	砂粒を含む		良好					
12	第8号	住居跡	甕	口 縁					横位ナデ		横位ナデ		積み上げ法	に古い褐色 (7.5 YR)	砂粒を含む		良好					
13	第8号	住居跡	甕	口縁~側部	(17.8)				横位ナデ	ヘラケズリ	横位ナデ		積み上げ法	浅黄褐色 (10 YR)	砂粒を含む		良好					
14	第8号	住居跡	甕	口縁~側部	(21.6)				積み上げ痕が基部 ナシ、丸み立ヶズリ		横位ナデ		積み上げ法	に古い褐色 (7.5 YR)	砂粒を含む		良好					
35-1	第8号	住居跡	甕	口 縁	(21.1)				横位ナデ		横位ナデ		積み上げ法	に古い黄褐色~ 褐色	砂粒を含む		良好					
2	第8号	住居跡	甕	口縁~側部	(23.9)				ナデ		横位ナデ		積み上げ法	灰白色 (10 YR)	砂粒を含む		良好					
3	第8号	住居跡	甕	側部~底部			13.5		ヘラケズリ	木製鉢	横位ナデ		積み上げ法	に古い褐色 (5 YR)	砂粒を含む		良好					
4	第8号	住居跡	甕	底 部			11.0		ヘラケズリ、砂砾	ナデ	横位ナデ		積み上げ法	に古い黄褐色 (10 YR)	砂粒を含む		良好					
5	第8号	住居跡	甕	底 部			(7.4)		ナデ、砂砾	横位ナデ	横位ナデ		積み上げ法	浅黄褐色	砂粒を含む		良好					
6	第8号	住居跡	甕	底 部					ナデ、砂砾	ナデ	横位ナデ		積み上げ法	浅黄褐色	砂粒を含む		良好					
7	第8号	住居跡	甕	底 部			7.6		ナデ、ヘラケズリ の×印がある	ユビナデ	横位ナデ		積み上げ法	に古い褐色 (7.5 YR)	砂粒を含む		良好					
8	第8号	住居跡	甕	底 部					ヘラケズリ	ナデ	横位ナデ		積み上げ法	(外)に古い褐色 (内)灰褐色 (7.5 YR)	砂粒を含む		良好					
9	第8号	住居跡	甕	底 部					ナデ、×印あり	横位ナデ	横位ナデ		積み上げ法	に古い褐色 (7.5 YR)	砂粒を含む		良好					
36-1	第8号	住居跡	甕	口縁~側部	14.4	(7.8)	13.8		横位ナデ	回転糸切り	横位ナデ		ロクロ使用 積み上げ法	(?) 棕色 (2.5 V R)	砂粒を含む		良好					
2	第8号	住居跡	甕	口 縁	(19.2)				ナデ	ナデ	横位ナデ		ロクロ使用 積み上げ法	浅黄褐色	2~5mmの砂粒を含む		良好					
3	第8号	住居跡	甕	側部~底部			8.4		ヘラケズリ、砂砾	横位ナデ	横位ナデ		積み上げ法	褐灰色	砂粒を含む		良好					
4	第8号	住居跡	甕	底 部			(10.0)		ヘラケズリ スス付帯	横位ナデ	横位ナデ		積み上げ法	に古い褐色	砂粒を含む		良好					
5	第8号	住居跡	甕	底 部			(9.4)		ナデ、ヘラケズリ (西側)砂砾	ナデ	横位ナデ		積み上げ法	褐色と に古い褐色	砂粒を含む		良好					
6	第8号	住居跡	甕	底 部			(8.4)		ナデ	ナデ	横位ナデ		積み上げ法	浅黄褐色 (7.5 YR)	砂粒を含む		良好					
7	第8号	住居跡	甕	底 部			8.2		ヘラケズリ	ナデ	横位ナデ		積み上げ法	に古い黄褐色 (10 YR)	砂粒を含む		良好					
8	第8号	住居跡	甕	底 部			9.1		微細孔による両脇	横位ナデ	横位ナデ		積み上げ法	に古い黄褐色 (10 YR)	砂粒を含む		良好					



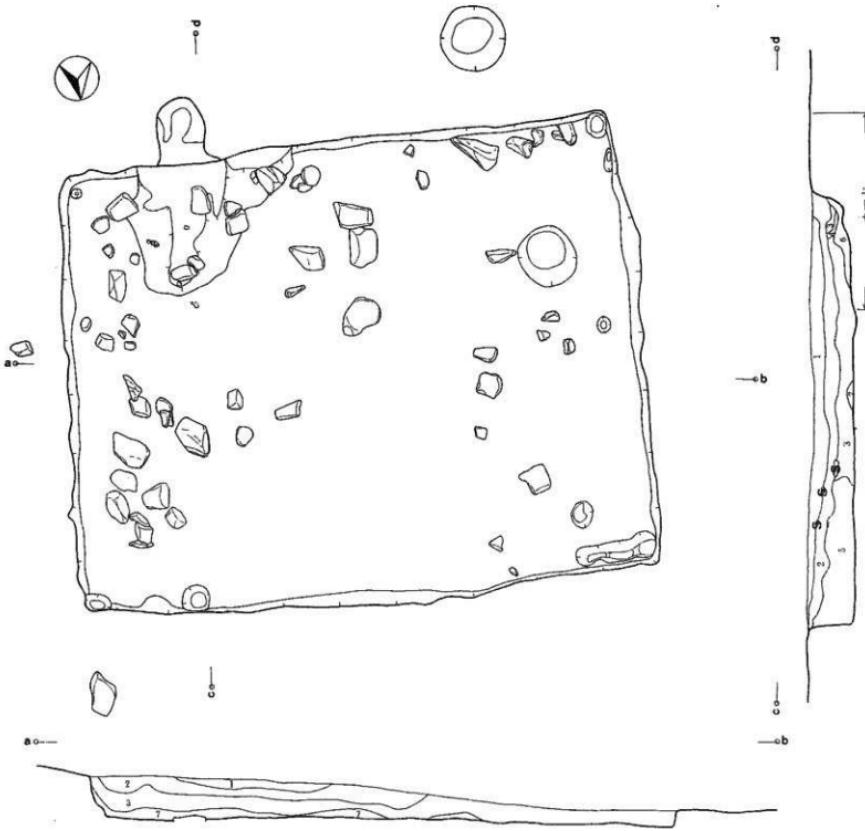
配置図11

第22表 第9号住居跡観察表

第9号住居跡		総面積	37. 38. 39	面積	16. 17. 18. 37
検査区	16-1, 16-J, 17-I, 17-J				
法		東壁	西壁	南壁	北壁
長	427	464	561	545	
高	32.4~47.6	8.3~19.2	13.6~42.3	27.9~39.6	
面積	—	—	—	—	
最深部	—	—	—	—	
最高部	—	—	—	—	
面積	28.4				
主検方位	N-2°-E	形態	長方形		
瓦		1. 10Y R 4R 黒色 粘性少なくサラッとしている。ハニス瓦及び植物根を含む 2. 10Y R 5R 黒褐色 孔隙性少なくしまっている。植物根を含む 3. 10Y R 5R 黒褐色 粘性大でしまっている。炭化物及びロームブロックがある。 4. 10Y R 5R にねじ 黑褐色 ロームブロックかなくしまっている 5. 10Y R 5R 黑褐色 孔隙性大でロームブロックを20~35%含む 6. 10Y R 5R 黒色 サラッとしている 20~75%の浮石を含む 7. 10Y R 5R 黑褐色 粘性がありしまっている。1~2%の浮石混入 植物根を含む			
瓦		傾斜角90°~112°を計る。壁材の確認はされていない			
床		床面において10~30cmの塊が非常に多い。床面、西壁中央に30cm×20cm程度の炭化物の範囲が確認されている			
四隅		住居跡西壁南側端から東に向ってわざわざではあるが検出されている			
ピットト		P1. 25×17×20cm 北壁東側隅に位置する主柱穴 P2. 25×25×16cm 北壁東側隅等に位置する P3. 15×25×14cm 北壁西側隅等に位置する P4. 20×23×26cm 南壁西側隅等に位置する 主柱穴 P5. 10×10×23.5cm 南壁東側隅に位置する P6. 56×58×40cm 西壁市帯Ⅱ、壁より40cm程のところに位置する P7. 62×62×15cm 北壁西側等、壁より40cm程のところに位置する P8. 61×61×30cm 南壁西側等外間に位置する			
壁	検査東側壁				
カ		1. 10Y R 5R 黑褐色 地土及び炭化物が点々と混じっている粘性あり 2. 10Y R 5R 黑褐色 ロームブロック 3. 10Y R 5R 黑褐色 粘性大で均質 地土が混じっている 4. 10Y R 5R 黑褐色 粘性大で均質 5. 10Y R 5R 黑褐色 孔隙性あり 発生及びロームか15~20%含まれる 6. 10Y R 5R 黑褐色 サラッとしているが砂質でしまっている 7. 7.5Y R 5R 増粘土 粘性質に富みやわらかい 砂土を20~25%含む 8. 10Y R 5R 黑褐色 孔隙性あり ボンボンしている			
マ					
リ		地表面において炭化物が検出されている。また、石材・埴輪材であったと思われる10cm~15cm程の块が散乱検出されている			

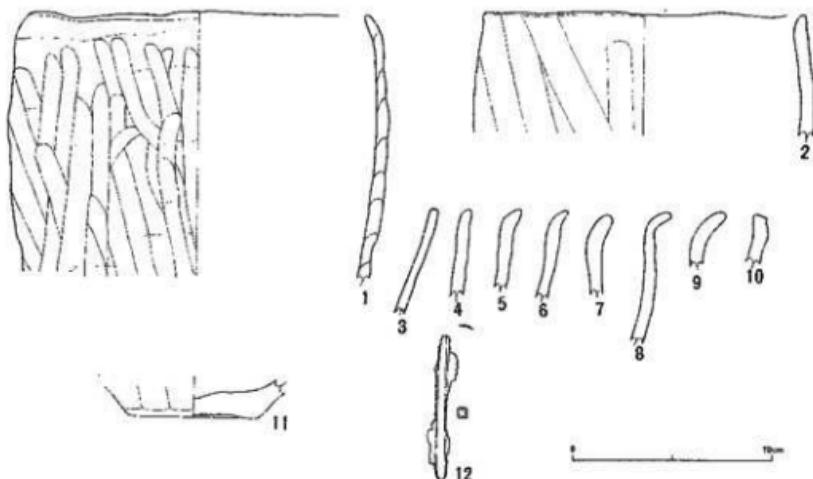


第37図 第9号住居跡カマド



第38図 第9号住居跡

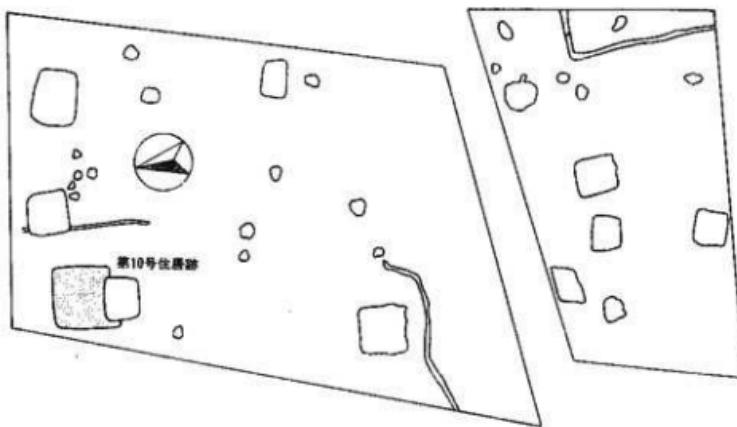
0 1 2m



第39図 第9号住居跡出土遺物

第23 第9号住居跡出土遺物観察表

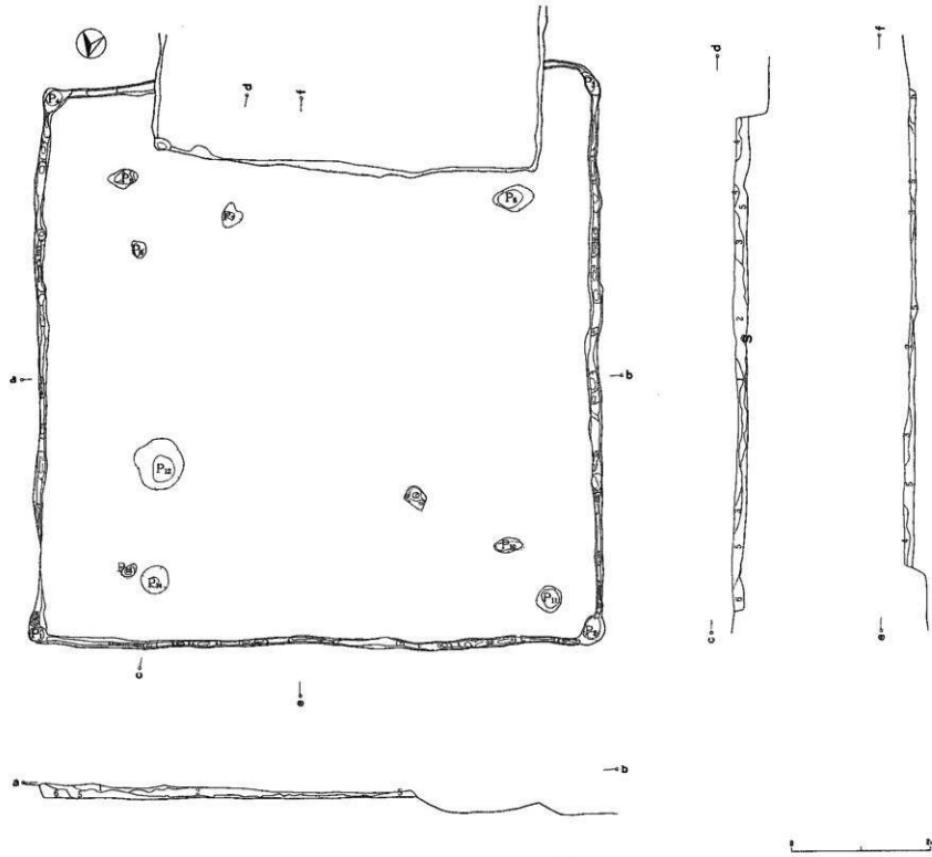
件目 番号	出土地点	器種	部位	法 量 (cm)		測 定 (地文)		成 形	色 調	地 土	地 成		
				口 深	体 深	底 径	器 高						
1	第9号住居跡	甕	口縁	(17.2)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にじみ褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
2	第9号住居跡	甕	口縁	16.2				斜位ナデト ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	にじみ褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
3	第9号住居跡	甕	口縁					ヘラケズリ ナデ	ナデ	積み上げ法	にじみ褐色 (7.5Y R)	砂粒を僅かに含む	良好
4	第9号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 斜位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅黄色 (7.5 Y)	砂粒を含む	良好
5	第9号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	赤褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
6	第9号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 斜位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	明褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
7	第9号住居跡	甕	口縁					横位ナデ 斜位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	明褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
8	第9号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	向陽灰色	砂粒を含む	良好
9	第9号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	浅米色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
10	第9号住居跡	甕	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法 ロコロ使用	浅黄色 (7.5Y R)	砂粒を僅かに含む	良好
11	第9号住居跡	甕	底部					ヘラケズリ ハケメ	ハケメ	積み上げ法	強灰褐色 (7.5Y R)	砂粒を僅かに含む	良好
12	第9号住居跡	灰 瓶?		残存高7.20m	径0.35×0.3m			断面は中空					



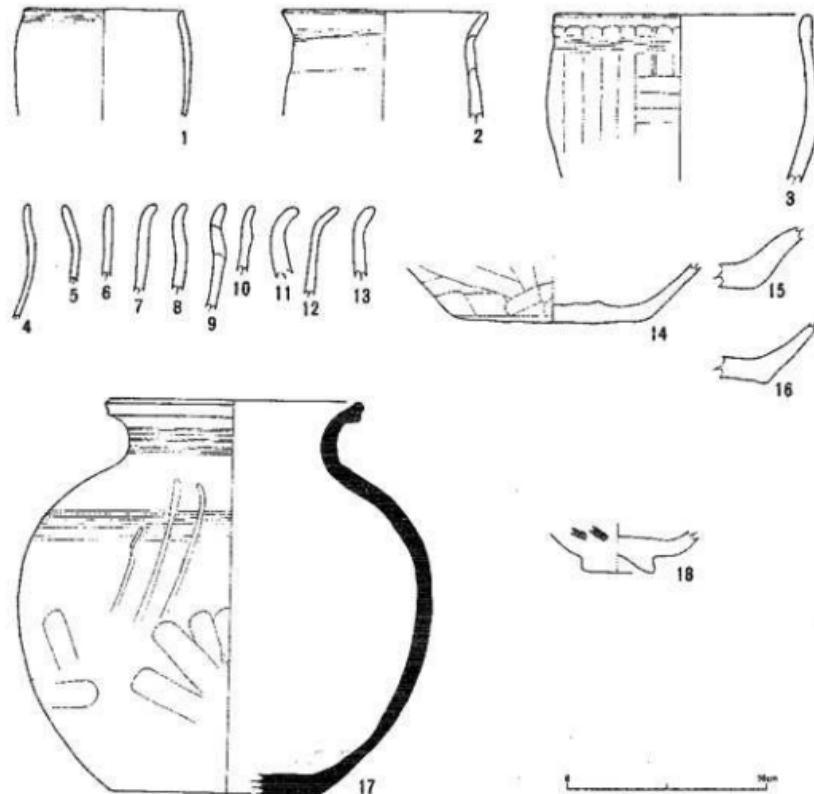
配置図12

第24表 第10号住居跡観察表

第10号住居跡		坪 国	40, 41	国 版	16, 17, 37
検出区	17-H, 17-I, 17-J, 18-H, 18-I, 18-J, 19-I				
法	東 壁	西 壁	南 壁	北 壁	
壁 長	805	852	812	828	
壁 高	—	—	—	—	
周 面 幅	18	18		10	
周 面 長	12.5	16		13.8	
面 積	64.16				
主 軸 方 位	N-2°5'-W	形 素	方 形		
地 土	1. 10Y R 5% 黒褐色 粘性弱 孔隙大 植物根による擾乱多い。 2. 10Y R 4% 黄褐色 粘性弱 孔隙比較的少ない 植物根による擾乱多く、黄褐色土ブロックが混入する。 3. 10Y R 4% 黑褐色 粘性弱 孔隙比較的少ない 粘土粒及び炭化物粒若干含む 4. 10Y R 4% 黑色 粘性弱 孔隙大 5. 10Y R 4% 暗褐色 粘性有 孔隙比較的少ない 黃褐色土粒若干混入する。 6. 10Y R 4% 黑褐色 粘性弱 孔隙大 非常にボソボソしている黄褐色土粒が多量に混入する。				
壁	東壁及び北壁ともに102°を計る。南壁は第9号住居跡に切られているため検出はほぼ不可能であり、また西壁はほとんど掘りこまれずが検出されているのみである。				
床	床全体に焼けた跡が残っており、焼失家屋であったと思われる。				
周 邊	切り合っている部分を除く部分で幅10~15cm程で検出されている。また10~50cmの礫が多数検出されている。				
ビ ッ ド	P <sub>1</sub> 20×19×13.5cm 北壁の西側隅 P <sub>2</sub> 23×32×14cm 北壁の東側隅 P <sub>3</sub> 39×18×18.5cm 南壁の東側隅 P <sub>4</sub> 40×34×8cm 南壁の西側隅 P <sub>5</sub> 42×28×22.5cm 西南隅 P <sub>6</sub> 20×23×16cm 南壁の西側隅 P <sub>7</sub> 34×29×13cm 南壁や中央より西側	主柱穴	P <sub>8</sub> 58×38×35.5cm 南壁の東側隅 P <sub>9</sub> 32×30×11.5cm 北壁のやや中央より東側 P <sub>10</sub> 40×21×48cm 北壁の東側隅 P <sub>11</sub> 37×38×22.5cm 北壁の東側隅 P <sub>12</sub> 71×73×18cm 北壁のやや中央より西側 P <sub>13</sub> 21×17×45cm 北壁の西側隅 P <sub>14</sub> 40×39×14.0 北壁の西側隅		
カ 位 置	南壁東側寄りにあったものと思われる				
F	カマドは第9号住居跡によって切られているため検出は不可能であった				



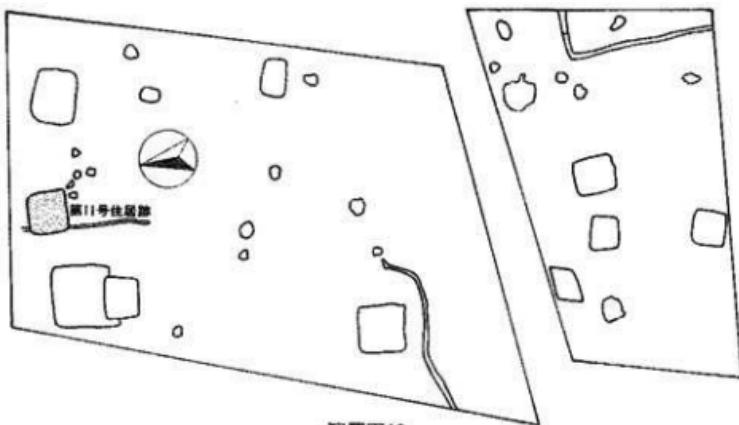
第40図 第10号住居跡



第41図 第10号住居跡出土遺物

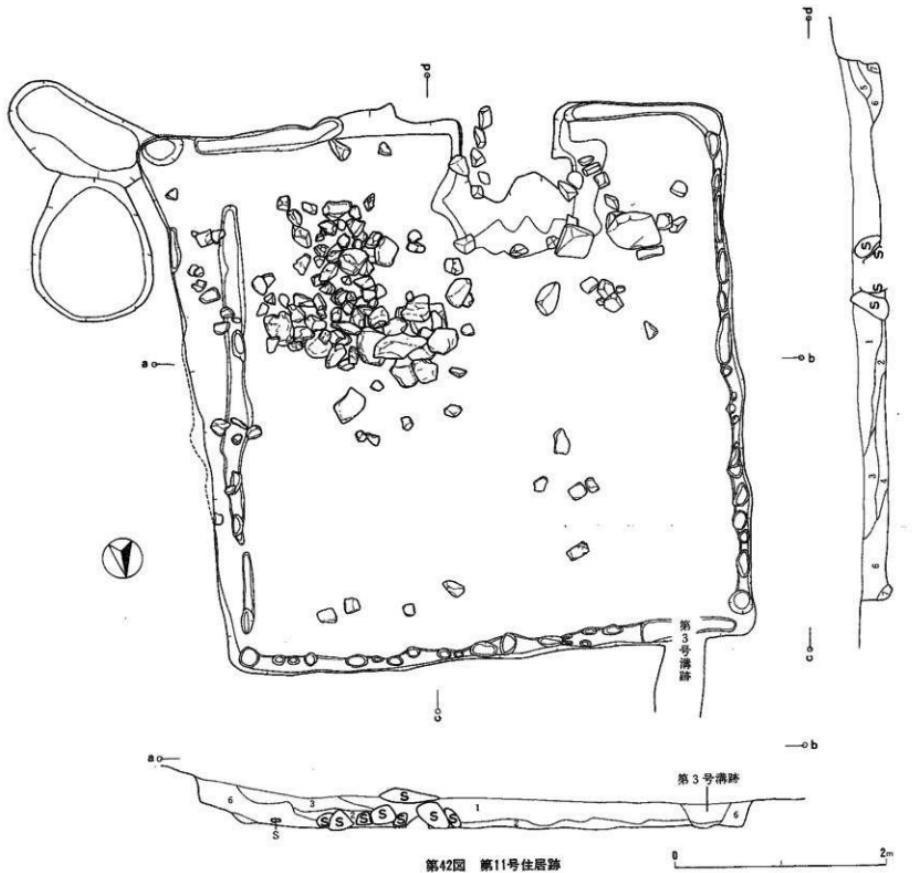
第25表 第10号住居跡出土遺物観察表

序号	出土地名	器 特	品種	材質	寸	内 容	外 形	分 類	性 質	地 上	地 下
1	東洋寺住居跡 小村の窓	口幅 8.5cm	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ、有孔瓦片等付属	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
2	東洋寺住居跡：窓	口幅 12.0cm	縫合テープ	縫合テープ		縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
3	東洋寺住居跡：窓	口幅 12.0cm ドラム(3.5)	ハニカム、チサ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
4	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
5	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
6	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
7	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
8	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
9	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
10	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
11	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
12	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
13	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
14	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
15	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
16	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
17	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ
18	東洋寺住居跡：窓	丸窓	縫合テープ、セロタテ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ	縫合テープ

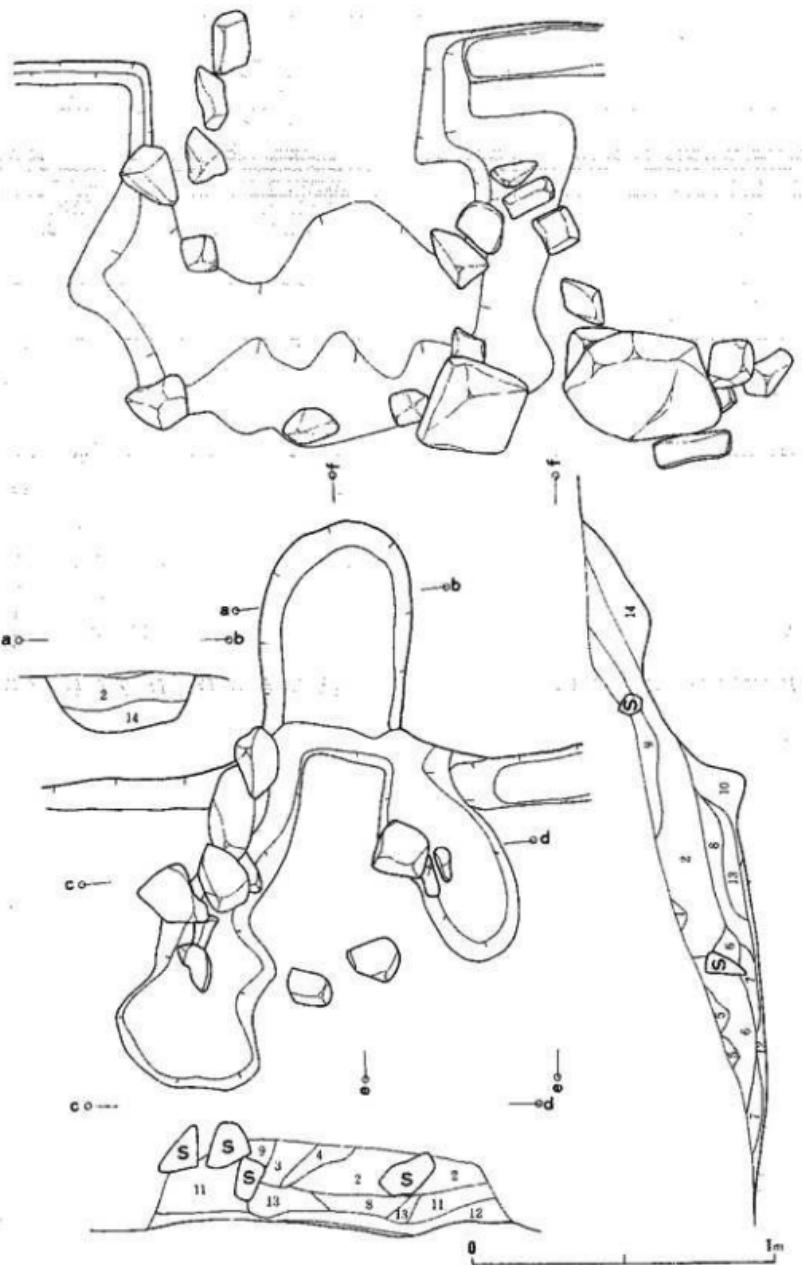


配置图 13

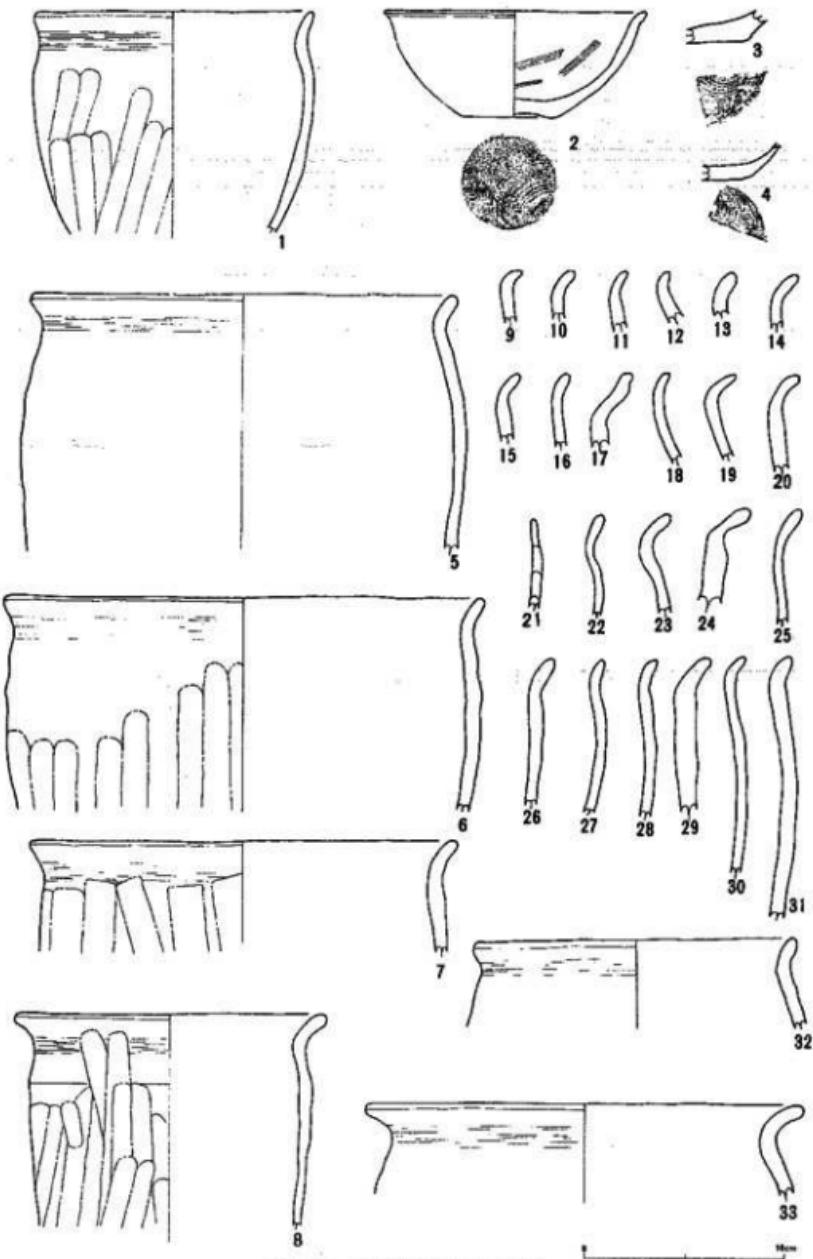
第26表 第11号住居跡觀察表



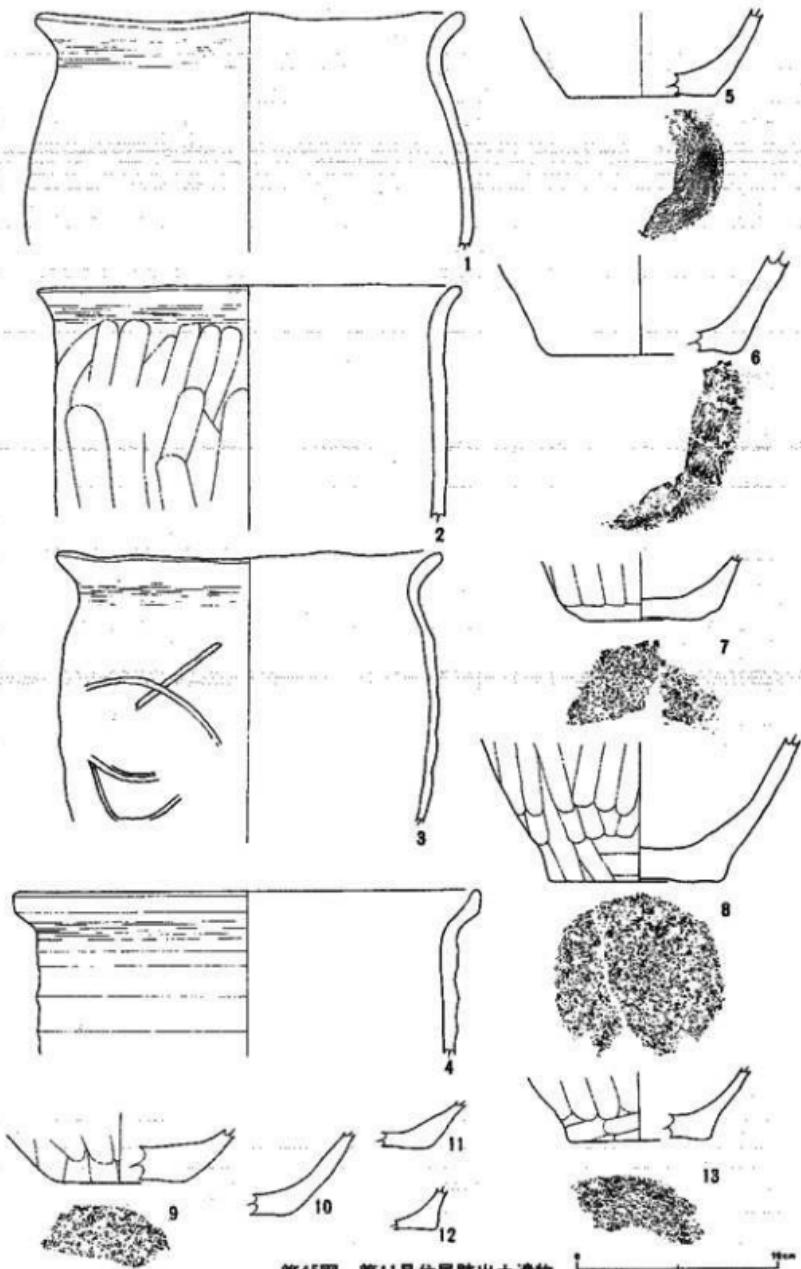
第42図 第11号住居跡



第43図 第11号住居跡カマド



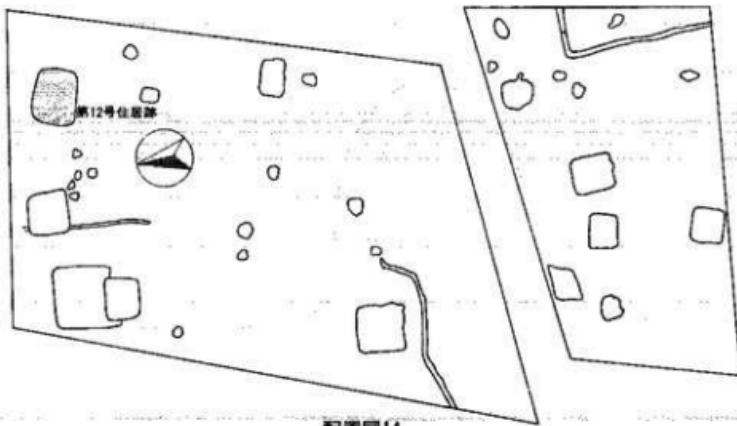
第44図 第11号住居跡出土遺物



第45図 第11号住居跡出土遺物

第27表 第11号住居跡出土遺物観察表

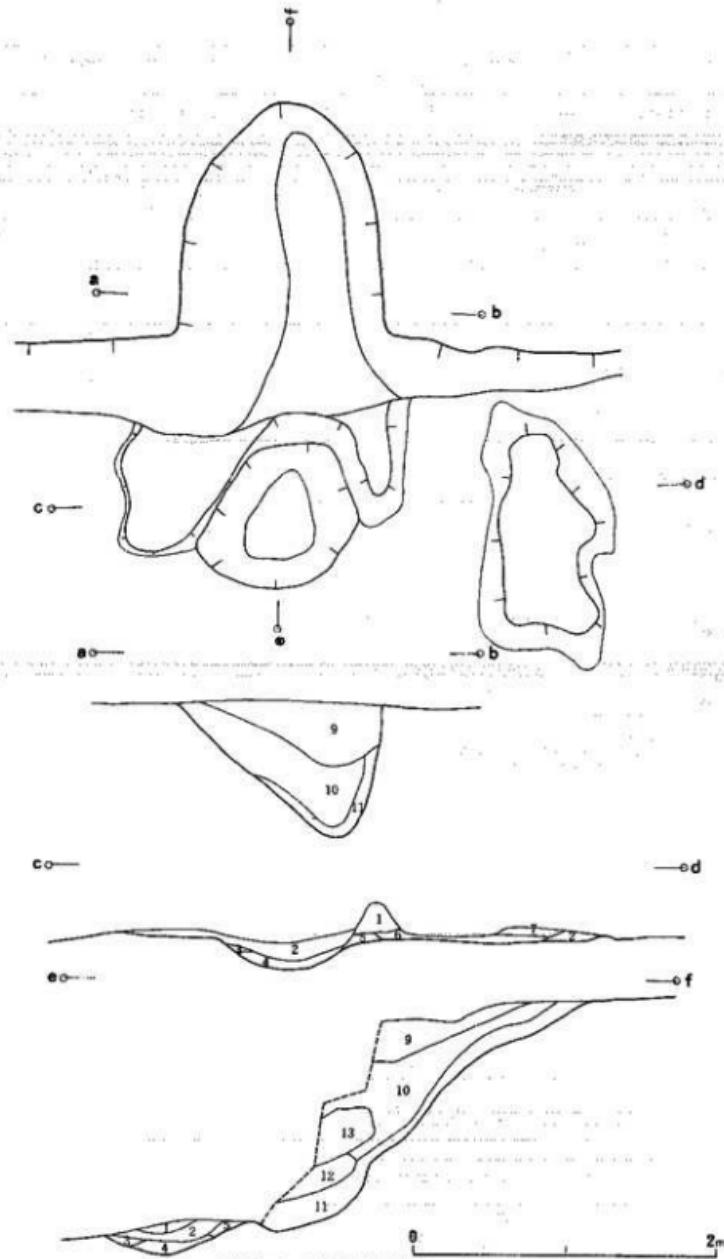
件番号	出土点	番号	部位	寸法 (cm)				調査 (地文)		成形	色調	断面	地成
				口径	張径	底径	器高	外	内				
44-1	第11号住居跡	便	口縁～腹部	(13.9)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ、斜位ナデ 黒色処理	積み上げ法	オリーブ灰 (2.5Y R)	砂粒を含む	良好
2	第11号住居跡 (漆器)	口縁～底部	(13.0)	4.6	5.2			ナシ、ロフロ右斜 斜位切り	ヘラとガキ 黒色処理	ロクロ水焼 き	にふい褐色 (3.5Y R)	砂粒を含む	良好
3	第11号住居跡 (漆器)	环(土器)	底部					ナシ	ヘラとガキ ロクロ斜位切り	ロクロ水焼 き	浅黄褐色 (2.5Y R)	砂粒を含む	良好
4	第11号住居跡	环	底部					ナシ	ナシ	ロクロ水焼 き	浅黄褐色 (2.5Y R)	砂粒を含む	良好
5	第11号住居跡	便	口縁	(21.2)				横位ナデ 斜位ナデ	横位ナデ、斜位ナデ	積み上げ法	2.5YRの 色(10Y H)	砂粒を含む	良好
6	第11号住居跡	便	口縁	(23.5)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ、斜位ナデ	積み上げ法	にふい黄褐色 (30Y R)	砂粒を含む	良好
7	第11号住居跡	便	口縁	(21.3)				ナシ、ヘラケズリ	横位、横位ナデ	積み上げ法	にふい黄褐色 色	砂粒を含む	良好
8	第11号住居跡	便	口縁	(15.5)				横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (5Y R)	砂粒を含む	良好
9	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ～横位ナデ (漆器)、横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	淡黄色 (10Y R)	砂粒を含む	良好
10	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	淡黄色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
11	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ 55空ナデ	横位ナデ～斜位ナデ 横位ナデ	積み上げ法	1.5YRの 色(7.5Y R)	砂粒を含む	良好
12	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	明褐色 (2.5Y R)	砂粒を含む	良好
13	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
14	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ	横位ナデ、斜位ナデ	積み上げ法	褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
15	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ 横位ナデ	横位ナデ～横位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
16	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ～次加 工品の表面がも うそでている	横位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
17	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ	横位ナデ	ロクロ水焼 き	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
18	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
19	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
20	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ 横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (10Y R)	砂粒を含む	良好
21	第11号住居跡	便	口縁					ユビナデ	ユビナデ	積み上げ法	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
22	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ 斜位ナデ	横位ナデ、斜位ナデ	積み上げ法	にふい褐色 (5 Y R)	砂粒を含む	良好
23	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (5 Y R)	砂粒を含む	良好
24	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ、斜位ナデ 横位ナデ	横位ナデ～斜位ナデ 横位ナデ、横位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
25	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ、ナデ	横位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (10Y R)	砂粒を含む	良好
26	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ、横位ナデ 黒色がみられる(?)	横位ナデ、斜位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
27	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ、ナデ(?)	横位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
28	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ 横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
29	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ 斜位ナデ～斜位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (5 Y R)	砂粒を含む	良好
30	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ、斜位ナデ 横位ナデ	積み上げ法	褐色 (2.5Y R)	砂粒を含む	良好
31	第11号住居跡	便	口縁					横位ナデ ヘラケズリ	横位ナデ、斜位ナデ	積み上げ法	淡褐色 (10Y R)	砂粒を含む	良好
32	第11号住居跡	便	口縁	(16.0)				横位ナデ	横位ナデ、斜位 横位ナデ	積み上げ法	褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
33	第11号住居跡	便	口縁	(21.8)				横位ナデ	横位ナデ	積み上げ法	にふい黄褐色 (10Y R)	砂粒を含む	良好



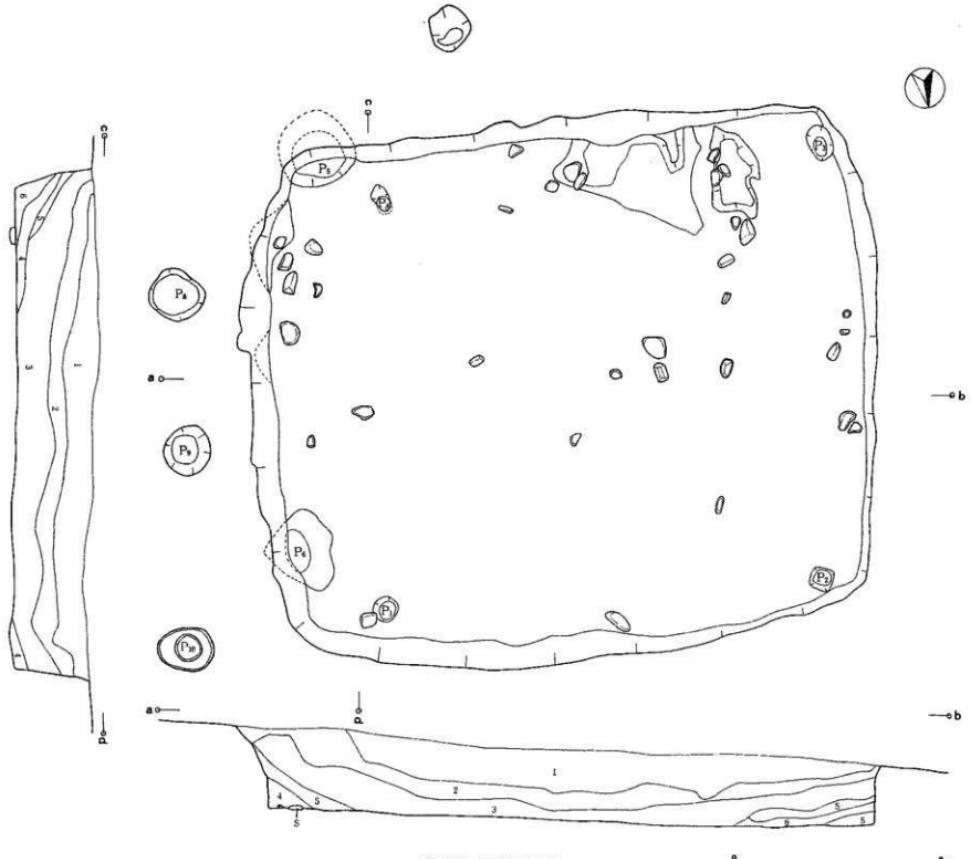
配置図14

第28表 第12号住居跡観察表

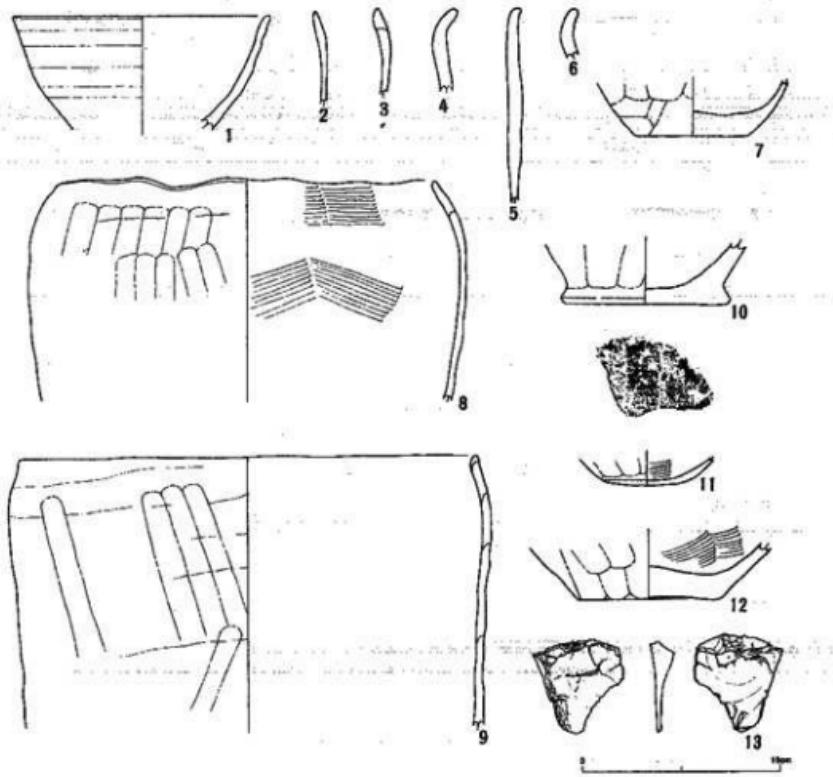
第12号住居跡		件 号	46, 47, 48	団 号	13, 14, 40
検出区	19-C, 19-D, 20-C, 20-D				
		東 壁	西 壁	南 壁	北 壁
注		485	504	596	567
壁 長	73~82	58~60	61~73.5	57~82	
壁 高	—	—	—	—	
雨 滴	—	—	—	—	
基礎深	—	—	—	—	
面 紹	20.2				
主物方位	N-6°-E	形 細	長 方 形		
地					
土					
注	1. 10Y R 4/4 黒色 粘性大 孔隙大 植物根進入 2. 10Y R 4/4 黑褐色 粘性大 孔隙大 ロームブロック2~3%混入 3. 10Y R 4/4 黑褐色 粘性大 化成物 5%混入 4. 10Y R 4/4 黑褐色 粘性大 孔隙大 5. 10Y R 4/4 黑褐色 粘性大 孔隙大 6. 10Y R 4/4 黑褐色 粘性大 しまりあり				
壁	傾斜角94°~115°を計る。収材等の遺物は検出していない。				
床	床面において5cm~20cm程度の埋が多数ある				
ビ タ プ	P1 25×24×23cm 住居跡 東壁前面に位置する P2 25×25×13.5cm 住居跡 北壁西側面に位置する P3 23×33×16.5cm カマド裏面に位置する P4 18×26×25cm カマド裏面に位置する P5 73×72×14cm カマド裏面 東壁面に位置し住居跡外側に開りこまれている 空洞穴の可能性もある	P1 62×82×25cm 住居跡 東壁北側面に位置し、軽井穴の可能性もある P2 40×45×42cm 住居跡 南壁外 中央や東側寄りに位置する P3 55×50×30.5cm 住居跡 東壁外南寄りに位置する P4 45×48×32.5cm 住居跡 東壁外中央や北側に位置する P5 幅り方55×42×28 床上方26×25×30 住居跡東壁外北側に位置する			
位 置	南壁西寄				
カ					
ア					
リ					
ヤ					
リ					
カ					



第46図 第12号住居跡カマド



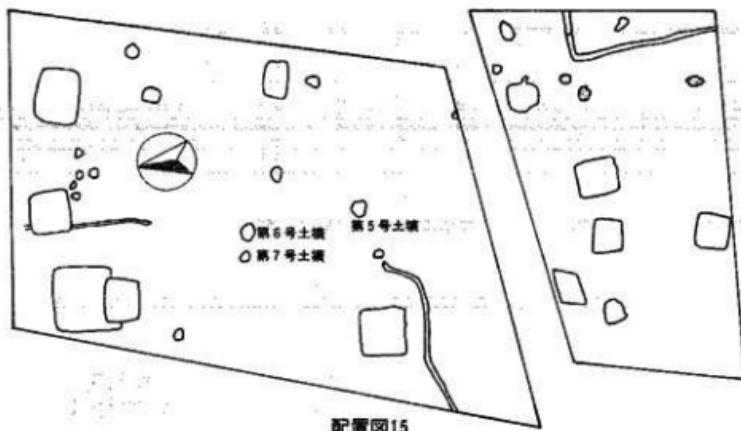
第47圖 第12號住居跡



第48図 第12号住居跡出土遺物

第29表 第12号住居跡出土遺物観察表

標印番号	出土地点	基材	断面	寸 宽 (cm)				形 型 (英 文)		成 形	色 调	地 土	施 成
				口 径	幅	体 長	深 度	外 面	内 面				
1	第12号住居跡	石	口縫	(32.0)				ナシ	ロクロ水洗き	淡黄褐色 (7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好	
2	第12号住居跡	骨	口縫					稍凹ナギ	積み上げ	灰褐色 (7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好	
3	第12号住居跡	骨	口縫					ナギ	積み上げ	灰色 (10Y)	砂粒を含む	良好	
4	第12号住居跡	骨	口縫					稍凹ナギ、幅辺ナギ、ヘラケズリ	積みナギ	積み上げ	にじい褐色	砂粒を微かに含む	良好
5	第12号住居跡	骨	口縫					ナギ、ヘラケズリ	積み上げ	褐色 (7.5YR)	砂粒を微かに含む	良好	
6	第12号住居跡	骨	口縫					稍凹ナギ	積み上げ	にじい褐色 (10YR)	砂粒を含む	良好	
7	第12号住居跡	骨	延長		(5.6)			ヘラケズリ	積み上げ	にじい褐色 (5YR)	砂粒を微かに含む	良好	
8	第12号住居跡	骨	口縫	(38.9)				稍凹ナギ、ヘラケズリ	積み上げ	褐色 (5YR)	砂粒を含む	良好	
9	第12号住居跡	骨	口縫	(23.1)				稍凹ナギ、ヘラケズリ	積みナギ	褐色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好	
10	第12号住居跡	骨	延長		(8.5)			ヘラケズリ、小縫痕	ナギ	積み上げ	淡白色 (10YR)	砂粒を微かに含む	良好
11	第12号住居跡	骨	延長		(4.8)			ヘラケズリ	積み上げ	淡黄褐色 (10Y)	砂粒を微かに含む	良好	
12	第12号住居跡	骨	延長		(7.2)			ヘラケズリ	積み上げ	褐色 (7.5YR)	砂粒を含む	良好	
13	第12号住居跡	骨	長方4.5 次方4.1 厚1.1					表面を下辺を刃部として使用					



配置図15

第30表 第5号土壤観察表

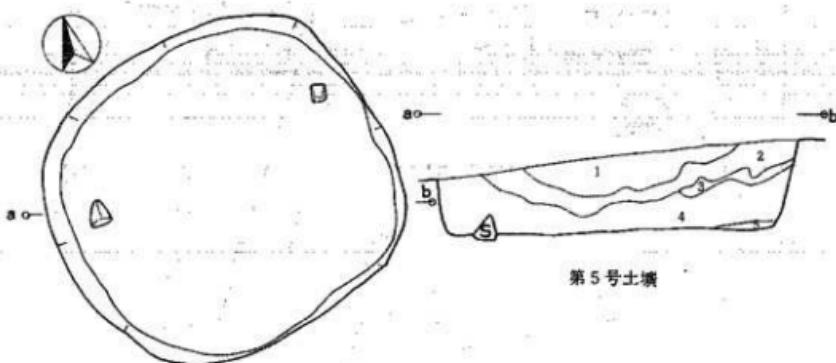
第5土壤		持 团	49	回 版	21
検出区	14-F	開 口 部 径	底 径	深 さ	傾 斜 角
法 量		240	196	50	98°~107°
1. 10Y R 有 黒褐色 やや粘質 孔隙大 貫褐色土ブロック5~7% バミス3~5%					
覆 土	2. a. 10Y R 有 黑色 孔隙稍大 バミス10~15%				
	b. 10Y R 有 黑色 やや粘質 バミス混入は僅か				
植 土	3. a. 10Y R 有 黑褐色 粘性大 孔隙少 貫褐色土程及びブロック10~15% 築土粒も若干混入する				
	b. 10Y R 有 黑色 粘性小 孔隙大 バミス10~15%混入				

第31表 第6号土壤観察表

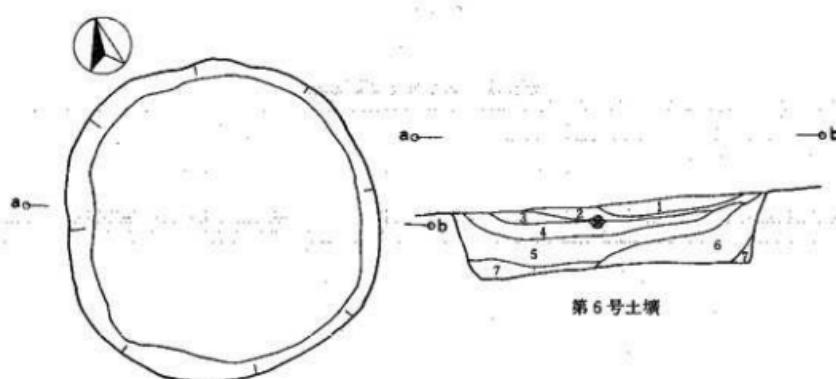
第6土壤		持 团	49	回 版	22
検出区	14-G	開 口 部 径	底 径	深 さ	傾 斜 角
法 量		216	176	40	106°~110°
1. 10Y R 有 黑褐色 孔隙大 浮石混入					
植 土	2. 10Y R 有 黑色 炭化物混入				
	3. 10Y R 有 黑褐色 焙土部分				
覆 土	4. 10Y R 有 浮石2~3%混入 孔隙大				
	5. 7.5Y R 有 黑褐色土 孔隙少 ロームブロック混入				
	6. 10Y R 有 黑褐色土 孔隙大				
	7. 7.5Y R 有 黑色 粘質性 しまる				

第32表 第7号土壤観察表

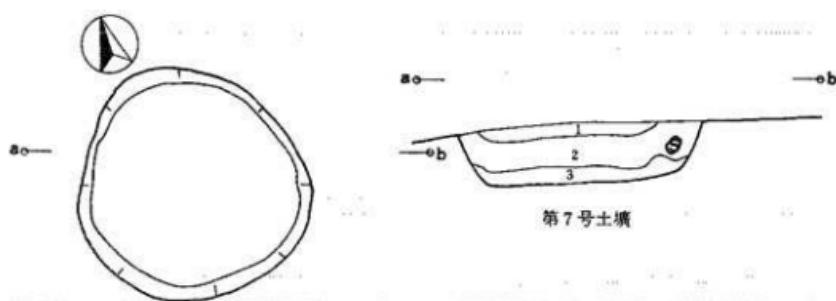
第7号土壤		持 团	49	回 版	22
検出区	14-H	開 口 部 径	底 径	深 さ	傾 斜 角
法 量		156	136	40	115°~118°
1. 10Y R 有 黑色 やや粘質 孔隙少					
植 土	2. 10Y R 有 黑褐色 やや粘質 孔隙やや有				
	3. 10Y R 有 黑褐色 粘質 かたくくしまる				



第5号土壤



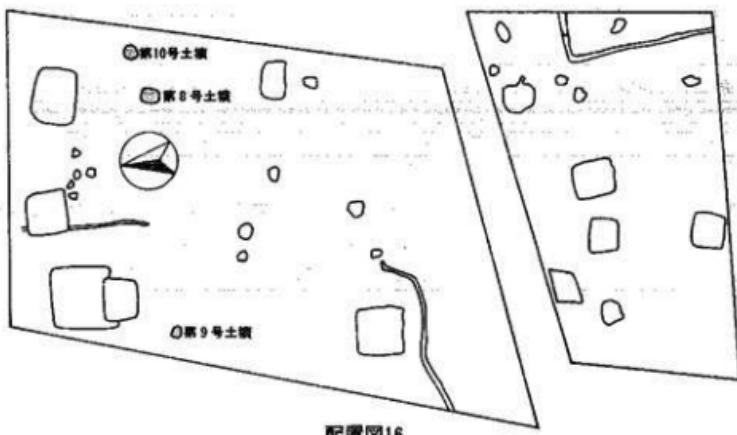
第6号土壤



第7号土壤



第49图 第5号土壤~第7号土壤



配置図16

第33表 第8号土壤観察表

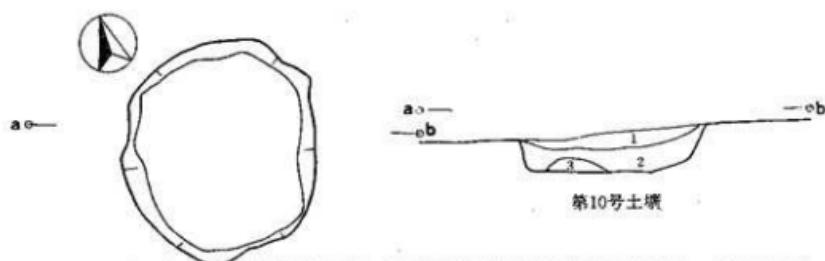
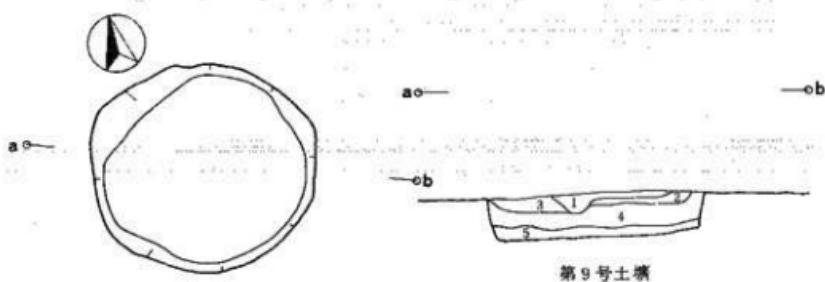
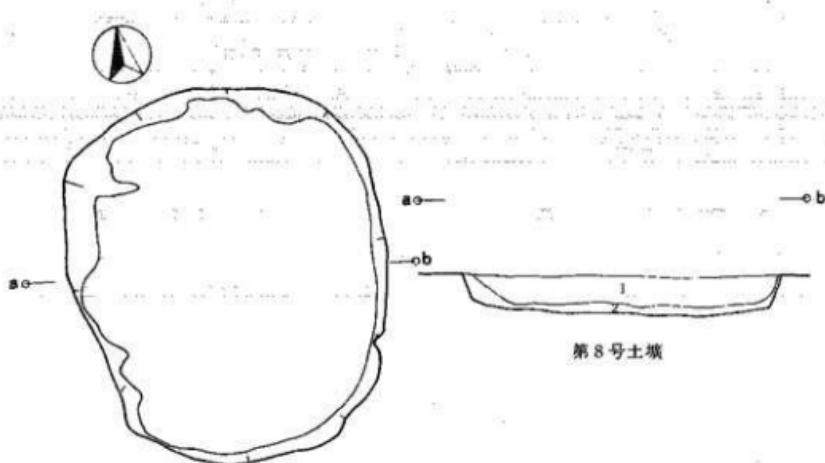
第8号土壤		沖 国	50	回 版	23
検出区	17-D				
法 量	開口部 径	底 径	深 さ	傾 斜 角	
	152	116	30	105°~110°	
覆 土	1. 10Y R 4% 黑褐色 粘性 孔隙少 ロームブロック15~20%混入 2. 10Y R 4% 褐色 粘質性 かたくしまる				

第34表 第9号土壤観察表

第9号土壤		沖 国	50	回 版	
検出区	17-D				
法 量	開口部 径	底 径	深 さ	傾 斜 角	
	152	116	30	97°~103°	
覆 土	1. 10Y R 4% 黑褐色 烙土部分 浮石2~3% 2. 10Y R 4% 黑色 粘質性で孔隙少 3. 10Y R 4% 黑褐色 孔隙やや有 4. 10Y R 4% 褐色 粘性やや有 孔隙やや有 5. 10Y R 4% 黄褐色 粘質性でかたくしまる				

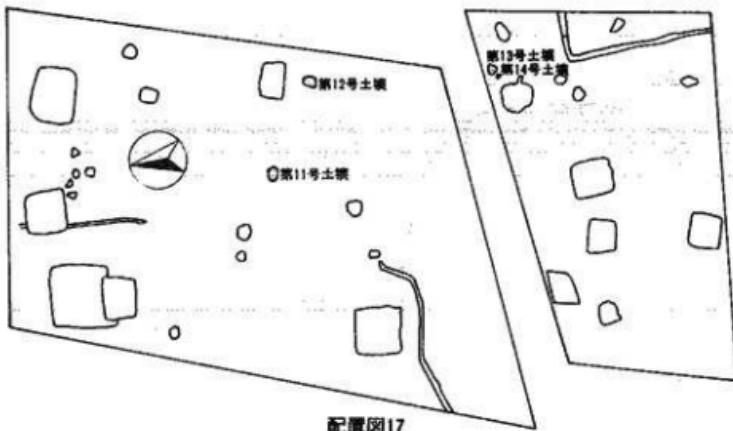
第35表 第10号土壤観察表

第10号土壤		沖 国	50	回 版	23
検出区	17-C				
法 量	開口部 径	底 径	深 さ	傾 斜 角	
	150	104	30	99°~117°	
覆 土	1. 10Y R 4% 黑褐色 粘性孔隙少 2. a. 10Y R 4% 褐色 粘性孔隙少 b. 10Y R 4% 褐色 粘性かたくしまる				



第50図 第8号土壤～第10号土壤

0 1 2m



配置図17  
第36表 第11号土壤観察表

第11号土壤		耕 地	51	因 果	21
検出区	13-F				
法 量	開口部寸法 150×140	底 面	深 度	幅	相 对 角
		150	44		105°~112°
腐 土	1. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、碎石粒子45%混入。 2. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、碎石粒子30%、黄褐色土粒子10%、植物根進入。 3. 10YR 8/2 黑褐色、粘性少、孔隙水、石灰水、ロームブロック2%、碎石粒子1%、植物根進入。 4. 10YR 8/2 黑褐色、粘性少、花びら水、石灰水、ロームブロック2%、碎石粒子1%、植物根進入。 5. 10YR 8/2 黑褐色、粘性中、花びら水、ロームブロック15%、植物根進入。 6. 10YR 8/2 黑褐色、粘性中、孔隙水、植物根進入。				

第37表 第12号土壤観察表

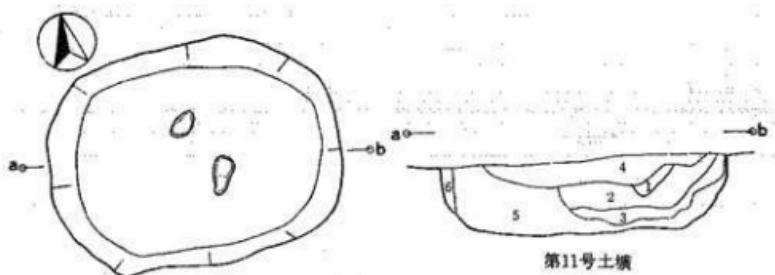
第12号土壤		耕 地	5.51	因 果	34
検出区	17-C				
法 量	開口部寸法 150×140	底 面	深 度	幅	相 对 角
		150×140	104	92	101°~106°
腐 土	1. 10YR 8/2 黑色、粘性弱、孔隙大、(底0.8~1mm)の粗粒を含む。 2. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大(2%)、(底1mm)30~40%含む。 3. 10YR 8/2 黑褐色、粘性少なし、上層は砂質土、下層は1.5mm含む。 4. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、30~36%含む。 5. 10YR 8/2 黑褐色、粘性少なし、(底0.8~1mm)の粗粒を含む。 6. 10YR 8/2 黑褐色、粘性少なし、(底0.8~1mm)の粗粒を含む。 7. 10YR 8/2 黑色、粘性弱、孔隙大、部分的に粗粒土粒子がいる。パミス 10~15%、黄褐色土粒子3~5%。 8. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、黄褐色土ブロック30~40%。 9. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、ローム粒26~30%、 10~15% 10. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、黄褐色土ブロック26~30%、 7%~5%。 11. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、黑色土粒子10~15%。				

第38表 第13号土壤観察表

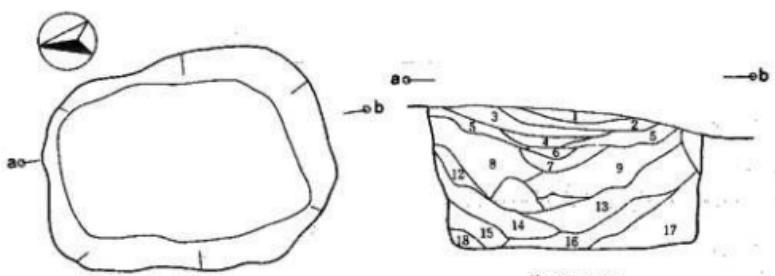
第13号土壤		耕 地	51	因 果	25
検出区	7-D				
法 量	開口部寸法 140	底 面	深 度	幅	相 对 角
		112	40		101°~106°
腐 土	1. 5 YR 8/2 黑褐色、粘性少、孔隙小。 2. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、下層にローム粒10~15%。 3. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、(底1mm)30~40%、植物根進入。 4. 10YR 8/2 黑褐色、粘性少なし、(底1mm)30~40%。 5. 10YR 8/2 黑褐色、粘性少なし、孔隙大、ローム粒20~25%。 6. 10YR 8/2 黑褐色、粘性少、孔隙大、(底0.8~1mm)の粗粒を含む。 7. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、ローム粒20~25%。 8. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、(底1mm)30~40%。 9. 10YR 8/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、(底1mm)30~40%。 10. 10YR 8/2 黑褐色、粘性少なし、孔隙大、(底0.8~1mm)の粗粒を含む。 11. 10YR 8/2 黑褐色、粘性少、孔隙大、(底0.8~1mm)の粗粒を含む。				

第39表 第14号土壤観察表

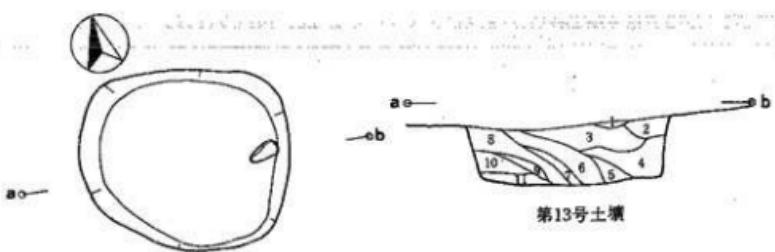
第14号土壤		耕 地	51	因 果	25
検出区	8-B				
法 量	開口部寸法 65	底 面	深 度	幅	相 对 角
		56	30		106°~97°
腐 土	1. 10YR 8/2 黑色、2. 10YR 8/2 黑褐色、3. 10YR 8/2 黑褐色、4. 5 YR 8/2 黑褐色、5. 10YR 8/2 黑褐色 4層以上土層、3層中には底も含む				



第11号土壤



第12号土壤



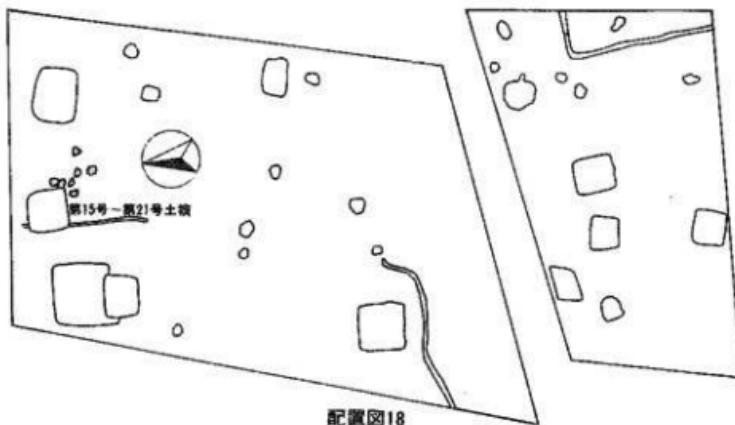
第13号土壤



第14号土壤

0 1 2m

第51図 第11号土壤～第14号土壤



配置図18

第40表 第15号土壤観察表

第15号土壤		神 田 52	内 部
検出区	18-F		
法 番	開 口 部 位	底 位	傾 斜 角
	140	標	80
質 土	1. 10YR 5/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、在下のメタス合せ 2. 10YR 5/4 黑褐色、粘性強、孔隙大、地山層との接続弱		

第41表 第16号土壤観察表

第16号土壤		神 田 52	内 部
検出区	18-F		
法 番	開 口 部 位	底 位	傾 斜 角
	124	標	20
質 土	1. 10YR 5/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、多量に食石 2. 10YR 5/4 黑褐色、粘性強、孔隙有、地山層との接続弱		

第42表 第17号土壤観察表

第17号土壤		神 田 52	内 部
検出区	18-F		
法 番	開 口 部 位	底 位	傾 斜 角
	108×78	90×64	26
質 土	1. 10YR 5/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、黃褐色上部有灰白色及1/3以上を80%含む 2. 10YR 5/4 黑褐色、粘性強、孔隙小、地山層との接続弱		

第43表 第18号土壤観察表

第18号土壤		神 田 52	内 部
検出区	18-G		
法 番	開 口 部 位	底 位	傾 斜 角
	202	65	44
質 土	1. 10YR 5/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、(2.9-4.0)cmに20%含む 2. 10YR 5/4 黑褐色、粘性強、孔隙小、黃褐色土質及1/3以上を30%含む		

第44表 第19号土壤観察表

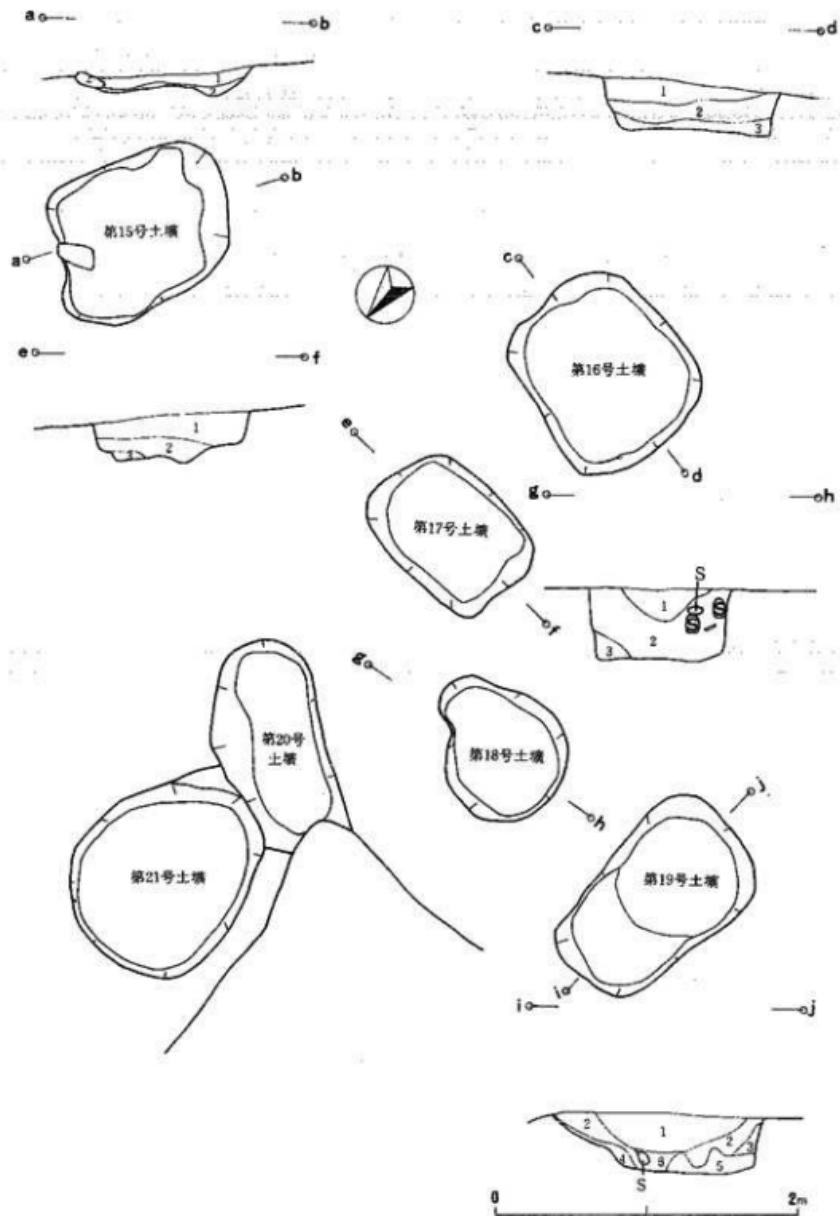
第19号土壤		神 田 52	内 部
検出区	18-G		
法 番	開 口 部 位	底 位	傾 斜 角
	140×80	102×60	38
質 土	1. 10YR 5/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、(2.8-3.0)cmに含む 2. 10YR 5/4 黑褐色、粘性強、孔隙小、黃褐色土質及び1/3以上を30%含む 3. 10YR 5/2 黑褐色、粘性強、孔隙小、(2.7-2.9)cmに含む		

第45表 第20号土壤観察表

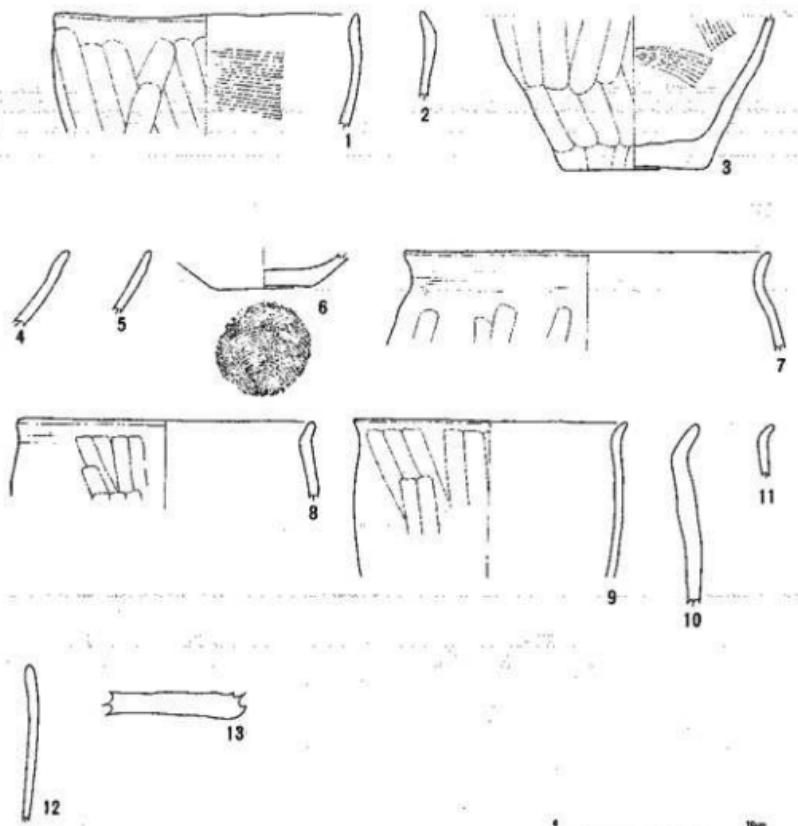
第20号土壤		神 田 52	内 部
検出区	18-G		
法 番	開 口 部 位	底 位	傾 斜 角
	128×74	120×40	34
質 土	1. 10YR 5/2 黑褐色、粘性弱、孔隙大、(2.7-2.9)cmに含む 2. 10YR 5/4 黑褐色、粘性強、孔隙小、黃褐色土質及び1/3以上を30%含む 3. 10YR 5/2 黑褐色、粘性強、孔隙小、(2.7-2.9)cmに含む		

第46表 第21号土壤観察表

第21号土壤		神 田	内 部
検出区	18-G		
法 番	開 口 部 位	底 位	傾 斜 角
	114×140	100×123	31



第52図 第15号土壤～第21号土壤



第58圖 各土壤內出土遺物

第47表 各土壤内出土遺物観察表

地図 番号	出土地点	形 状	部位	規 格 (cm)				性 質	色 調	特 徴	地 成	
				口 径	底 径	高 度	厚 さ					
1	第4号土壇	管	外	φ35	(15.2)			無地ナゲ、ヘラケビリ	無地ナゲ、ナゲメ	無地上げ	褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む
2	第6号土壇	管	外	φ35	(15.2)			無地ナゲ、ヘラケビリ	無地ナゲ	無地上げ	淡黄褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む
3	第6号土壇	管	内	φ35	(15.2)	7.2		ナゲ、ナゲリ	ナゲメ	無地上げ	淡黄褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む
4	第12号土壇	管	外	φ35	(15.2)			ナシ	ナシ	無地上げ	淡黄褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む
5	第12号土壇	管	内	φ35	(15.2)			ナシ	ナシ	無地上げ	褐色 (5Y R)	砂粒を含む
6	第12号土壇	管	外	φ35	(15.2)	4.8		ナシ、ナシの縦筋あり	ナシ	無地上げ	褐色 (5Y R)	砂粒を含む
7	第12号土壇	管	内	φ35	(15.2)	4.8		ナシ	ナシ	無地上げ	褐色 (5Y R)	砂粒を含む
8	第12号土壇	小筒の管	外	φ35	(15.2)			無地ナゲ、ヘラケビリ	無地ナゲ	無地上げ	褐色 (5Y R)	砂粒を含む
9	第12号土壇	小筒の管	内	φ35	(15.2)			無地ナゲ、ヘラケビリ	無地ナゲ	無地上げ	褐色 (5Y R)	砂粒を含む
10	第12号土壇	管	外	φ35	(15.2)			無地ナゲ、ヘラケビリ	無地ナゲ	無地上げ	褐色 (5Y R)	砂粒を含む
11	第12号土壇	管	内	φ35	(15.2)			無地ナゲ	無地ナゲ	無地上げ	褐色 (5Y R)	砂粒を含む
12	第12号土壇	管	外	φ35	(15.2)			ヘラケビリ、ナシ	無地ナゲ、無地ナゲ	無地上げ	褐色 (5Y R)	砂粒を含む
13	第12号土壇	管	内	φ35	(15.2)			ヘラケビリ	ナシ	無地上げ	褐色 (5Y R)	砂粒を含む
14	第12号土壇	管	外	φ35	(15.2)			ヘラケビリ	ナシ	無地上げ	褐色 (5Y R)	砂粒を含む

平安時代の土壇としてとりあげたのは南側調査区で確認した第13号、第14号土壇、及び北側調査区で確認した第5号～第12号、第15号～第21号土壇の計17基の土壇である。

平面プランの確認は住居跡と同様第IV層上面で行われた。覆土中には炭化物、焼土が粒状に混入しており、若干のバミスも混入している。これらの土壇は径2mを越える大形のものから70cm程度の小形のものまで規模にいくらかの開きがあり、また形態にも正円形を呈するもの、横円形を呈するもの、方形のものと変化がある。しかし、いづれの土壇も覆土内から土器片を出土しており、また焼土のレンズ状堆積が観察されたものも多い。

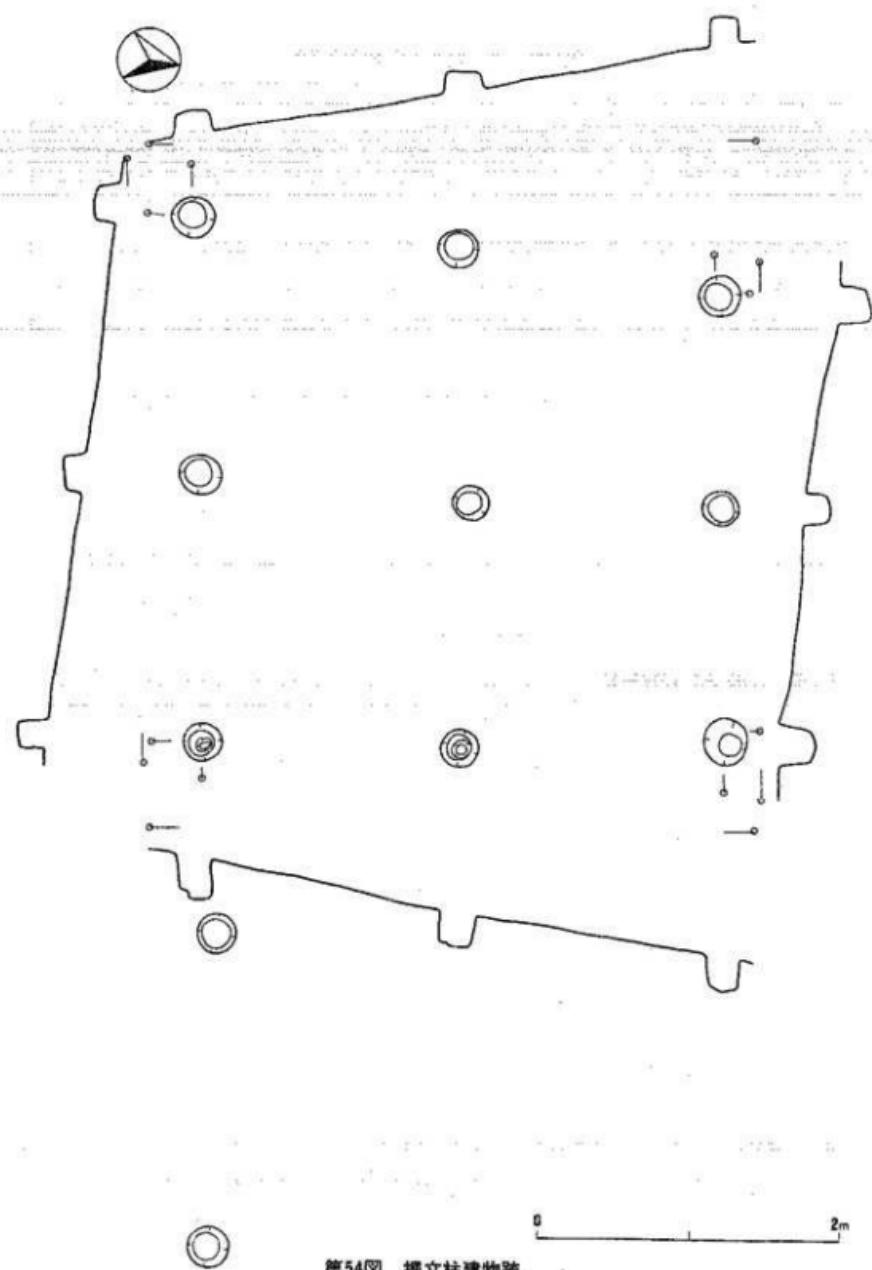
#### ウ. 掘立柱建物跡（第54図）

10-Eグリッドで検出された。規模は北側柱穴列で300cm、西側柱穴列で350cm、東側柱穴列で350cm、南側柱穴列で350cmを計る。なお、P<sub>n</sub> P<sub>m</sub>を含めた南側柱穴列の全体長は685cmである。全体の形状は、北側柱穴列よりも南側柱穴列の長い台形状を呈する。底の存在を示すような柱穴は確認出来なかった。柱間間隔は、北側柱穴列で東から157cm+143cm、西側柱穴列で北から175cm+175cm、東側柱穴列で北から180cm+170cm、南側柱穴列で東から180cm+170cmを計る。各柱穴内には10YR光暗褐色を呈する粘質土が充填しているが、掘り方、据え方を分けるような断面は観察できなかった。但し、P<sub>n</sub> P<sub>m</sub>では底面に僅かながら浅い窪みが認められ、これが据え方であった可能性もある。北側柱穴列との直交軸によって計測される磁北とのずれは、N-3°-Wである。

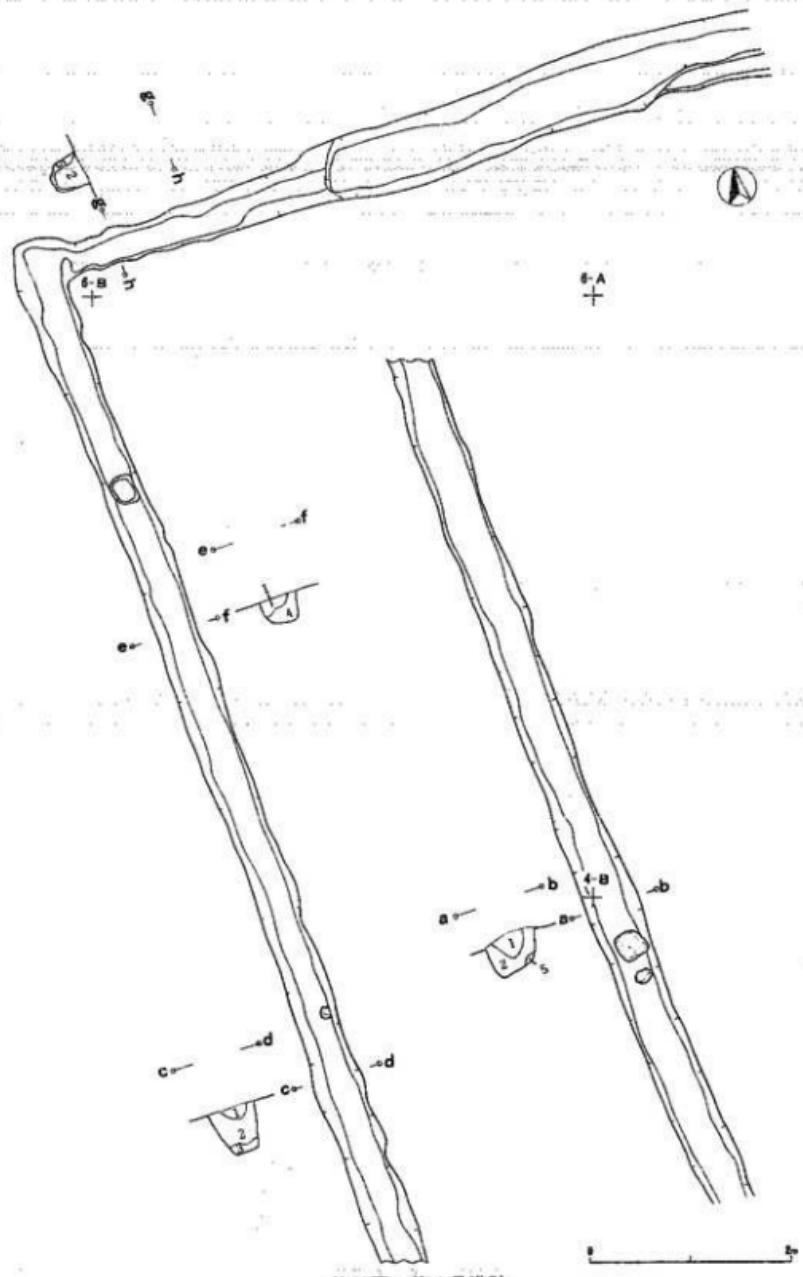
#### エ. 溝跡（第55図～第57図）

##### 3基検出されている。

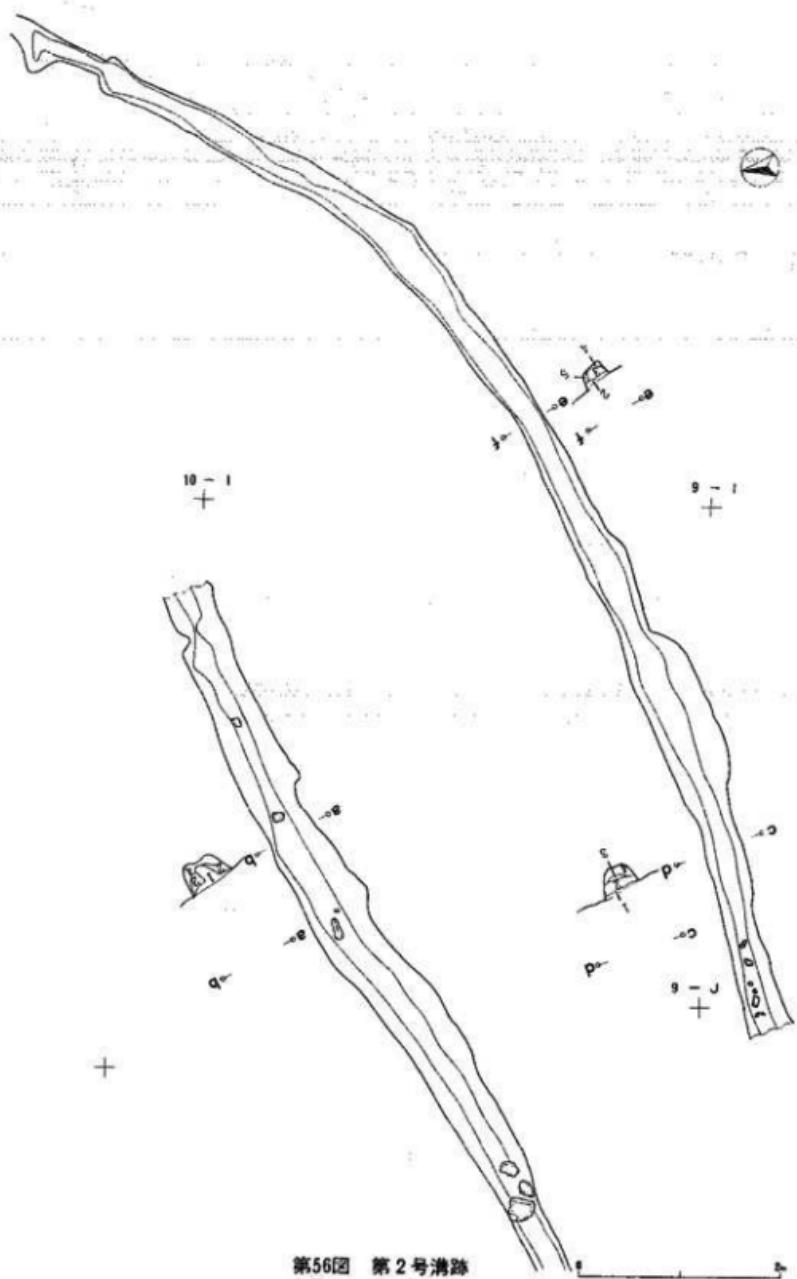
第1号溝跡は3-Aグリッドから6-Aグリッドに亘っている。3基の中では底面、側面とも最も良好な面を検出した。全体のプランは調査区外にも亘るため不明であるが、6-Bグリッドでは直角に折れている。第2号溝跡は、9-J～10-H、第3号溝跡は16-H～19-Hのグリッドで検出され、第3号溝跡は、第11号住居跡を切っている。3基とも遺物の出土は認められない。



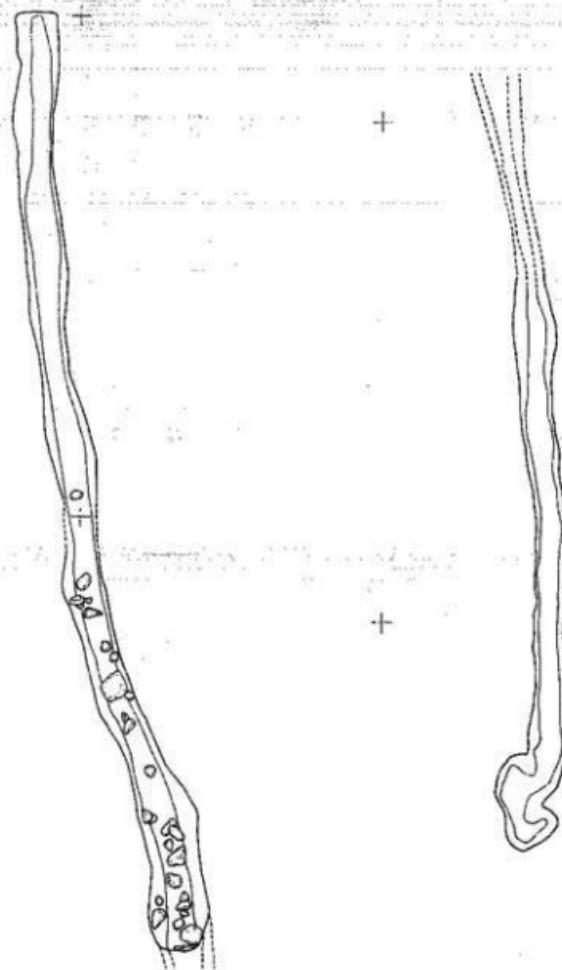
第54図 据立柱建物跡



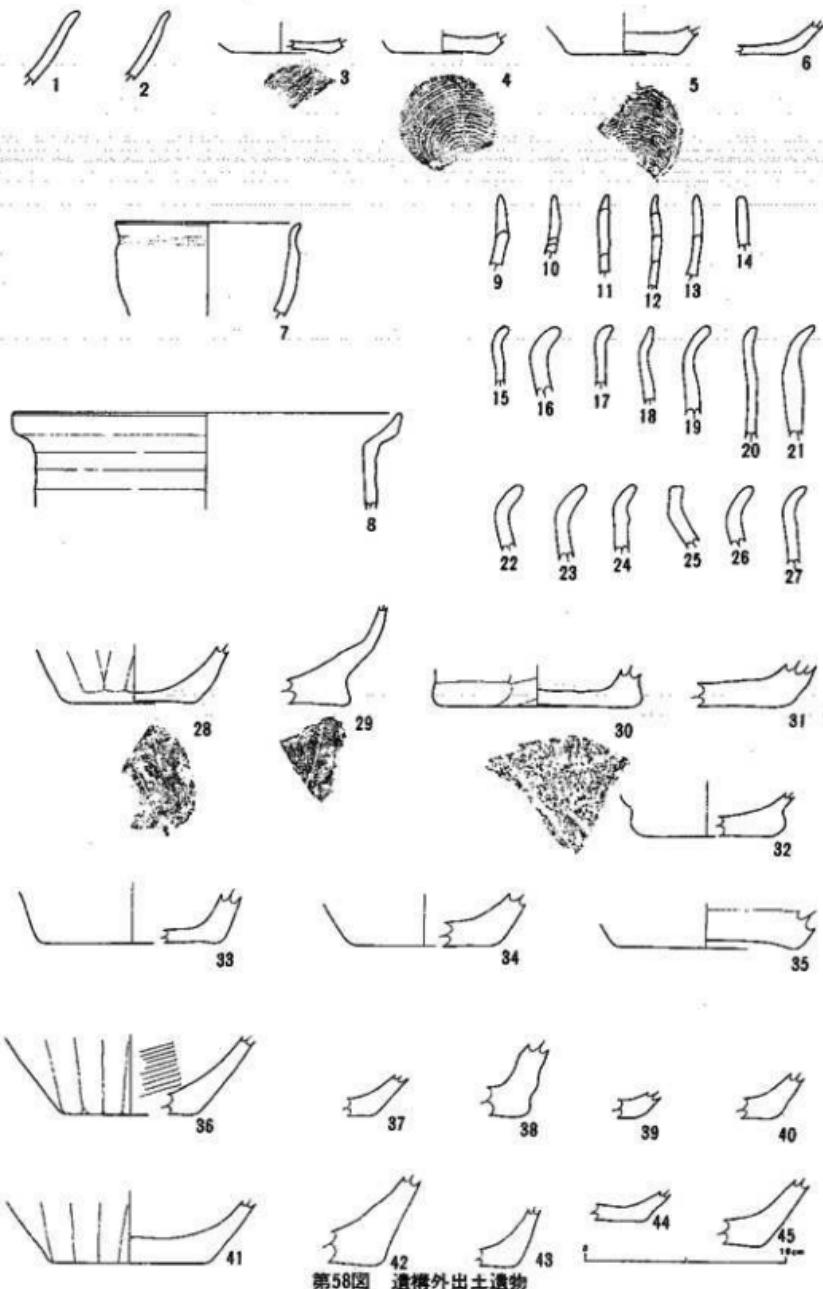
第55図 第1号溝跡



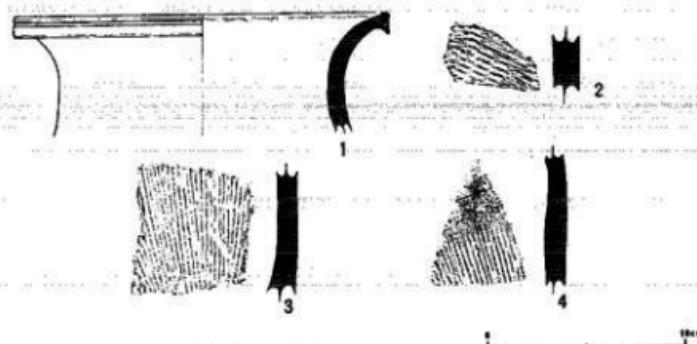
第56図 第2号船体



第57図 第3号溝跡



第58図 造構外出土遺物



第59図 造構外出土遺物

## 6.まとめ

本遺跡で検出された12棟の平安時代竪穴住居跡は、大まかではあるが平面プランから以下の3形態に分類が可能である。

- a. 不整方形のもの……第5号住居跡、第6号住居跡
- b. 長方形のもの……第8号住居跡、第9号住居跡、第12号住居跡
- c. 正方形のもの……第1号住居跡、第2号住居跡、第3号住居跡、第4号住居跡、第7号住居跡、第10号住居跡、第11号住居跡

不整方形のものとして分類した第5号住居跡、第6号住居跡は、壁長が300～350cm前後と小規模で、住居跡内に周溝、柱穴をもたない。また、カマドは燃焼部から煙出し口までの煙道部の長いもので、第5号住居跡の煙道は燃焼部と煙出し口の両方から穿ってつくられた所謂トンネル式のものである。

長方形のものとして分類した第8号住居跡、第9号住居跡、第12号住居跡は、南北壁が東西壁よりも長い。東西両壁長を1とした場合の南北壁長は第8号住居跡で1.12、第9号住居跡で1.25、第12号住居跡で1.17の値を示す。また、柱穴は住居跡内四隅にあるが、周溝はもたない。カマドは南壁にあり、煙道部の短いものである。

正方形のものとして分類した住居跡は規模が大きく第10号住居跡のように一辺が8mを越える大形のものもある。周溝をもち柱穴は周溝内四隅とその中間位置にあるが、第10号住居跡のように大形の住居であると住居跡内対角線上にも4個の柱穴をもつ。カマドは、煙道の短いものであるがその位置は一定しない。

以上が各分類及びその共通する特徴である。各分類間の差異は、おそらく時間差に起因するものと思われるが、今回は時間差を示唆できる程に各住居跡毎の遺物の詳細な検討ができなかった。ただ、第9号住居跡と第10号住居跡が示す切り合いの関係に依れば、長方形のプランを量する住居跡は正方形プランのものよりも時間的に新しい可能性は指摘できる。

また、住居の形態とは別に、本遺跡検出の住居跡床面の焼土の堆積層や、炭化物の堆積層はこれら住居の廃絶が火災による焼失という形で行われたことを物語っている。

本遺跡出土の平安時代の土器は、环、甕、壺からなるが、环の量が極端に少ないと特徴としてあげられる。环は、第1号住居跡、第8号住居跡、第12号住居跡、第12号土壤及び遺構外から出土しているが、全て破片でかつ極く僅かな量であり、住居内ではその土器組成の中に主体的にはいるものではない。住居内における土器組成は殆ど甕によって成り立っている。

本遺跡出土の甕は口縁部の形状によって2つに分けられる。1つは口縁部の先端が肥厚して

外反し、他の1つは先端が薄く断面が鋭角となるもので、直立もしくは内傾する。後者では成形の際の積み上げの痕跡が明瞭に残り、外面は粗い縦方向のヘラケズリ、内面は横方向の刷毛目によって調整される。住居内出土の甕では第2号住居跡、第5号住居跡、第8号住居跡、第11号住居跡出土のものが前者に相当し、第1号住居跡、第3号住居跡、第4号住居跡、第6号住居跡、第7号住居跡、第9号住居跡、第10号住居跡、第12号住居跡のものが後者に相当する。底部の形状では、大きく外側へ張り出すものと直線的に降りるものとの2つがあり、前者は第2号住居跡、第8号住居跡に特徴的に認められる。底面は、所謂砂底のもの、木葉痕のもの、ヘラ状の工具によって調整され線刻の施されたもの等がある。

非常に大雑把な考え方をすれば、本遺跡出土土器の組成では壺が極端に少ないことをあげることができ、また組成の主体をなす甕については断面の鋭角となる口縁が直立へ内傾し、器外面を積み上げ痕を残したままの縦方向の粗いヘラケズリ、内面を横方向の刷毛目で調整していることを形態上の特徴としてあげることができる。この2点に鑑みれば、同じ鹿角の地域内では(註5)は戸内遺跡(遺跡番号No.6)、若干地域を括げてみれば岩手県内では一戸町子守A遺跡、青森(註6)県では碇ヶ関村永野遺跡が類似した特徴をもった遺跡と言える。これらの遺跡はいづれも最近調査されたものであり、出土した土器も未だ編年的な位置づけが明確であるとは言い難い。したがって、現在の段階では上萬岡IV遺跡の時期を明確には決し難い。

- |    |   |       |              |
|----|---|-------|--------------|
| 註1 | 「赤御童貝塚発掘調査概要報告書」  | 昭和50年 | 八戸市教育委員会     |
| 註2 | 「崎山弁天遺跡」  | 昭和49年 | 大槌町教育委員会     |
| 註3 | 「青森県上北郡早稲田貝塚」佐藤 達夫  | 昭和33年 | 考古学雑誌        |
| 註4 | 「一戸市沢内B遺跡」  | 昭和53年 | 岩手県埋蔵文化財センター |
| 註5 | 「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書I」<br>報告者は、出土した土器の分析を通して子守A遺跡を10c後半に位置づけている。 | 昭和56年 | 一戸町文化財愛護協会   |
| 註6 | 「永野遺跡発掘調査報告書」   | 昭和54年 | 青森県教育委員会     |

# 付

日本遺跡第1号住居跡（コードS.I.001）、第9号住居跡（コードS.I.023）出土炭化物の<sup>14</sup>C

測定を日本アイソトープ協会に依頼した。結果は以下の通りである。

## 測定結果報告書

昭和56年1月23日に受取りましたC-14試料の測定結果がでましたのでご報告します。

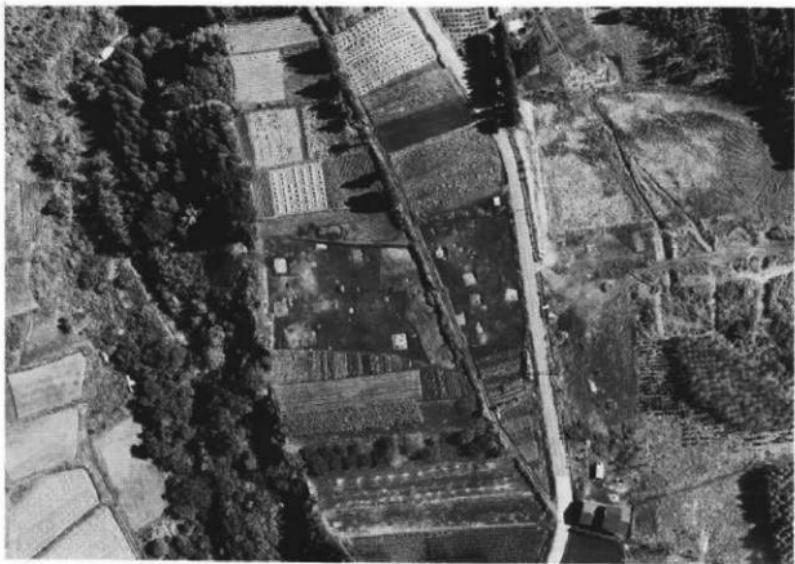
当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
N-4132	TW13 S I 023	1090±80y B.P. (1050±75y B.P.)
N-4133	TW13 S I 001	910±75y B.P. ( 885±70y B.P.)

年代は<sup>14</sup>Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのばる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読み取りの誤差から計算されたもので、<sup>14</sup>C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお<sup>14</sup>C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

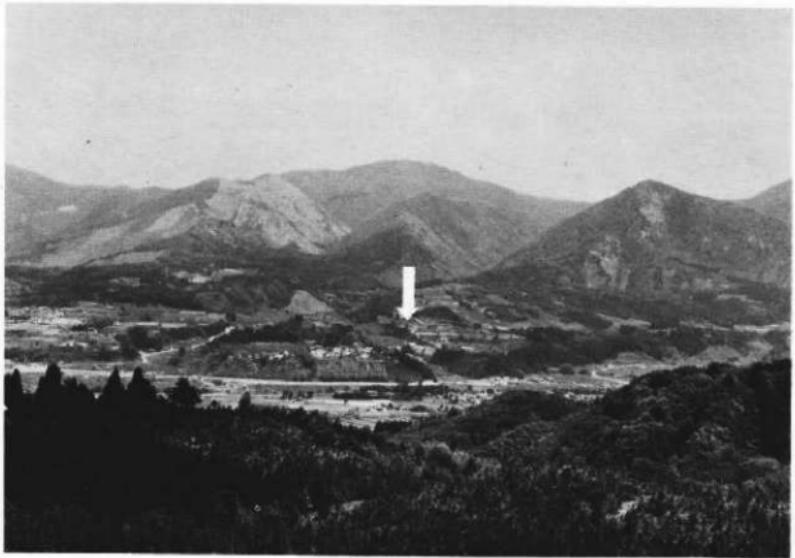
### 調査参加者

畠山 末治 神田 良勇 井上 政治 奥村 一三 梅戸 正次郎 川又 秀也  
川又 武司

豊田 よ里 浅石 恵留子 相川 金子 川又 ヤエ 尾沢 キヨエ 奥村 初恵  
中西 リチ 相川 リヨ 賀川 政子 石鳥谷 妙子 柳沢 ヤス 三カ田 孝子  
田中 ヨシエ 作山 ミエ 苗代沢 ノブ 津江 和子 金沢 ハルエ  
小田島 札子 畠山 陽子 阿部 シガ 小田島 キク 斎藤 キヨエ  
浅石 タミ 井上 トミエ 工藤 スミ 工藤 キヌ 工藤 イツ 阿部 シマ  
佐藤 キエ 松岡 トキヨ 高畠 サキ 阿部 シモ 三上 美子 三上 トヨ  
柳沢 ヤス 安保 柳



航空写真



図版1

遺跡遺景



農道南側区全景

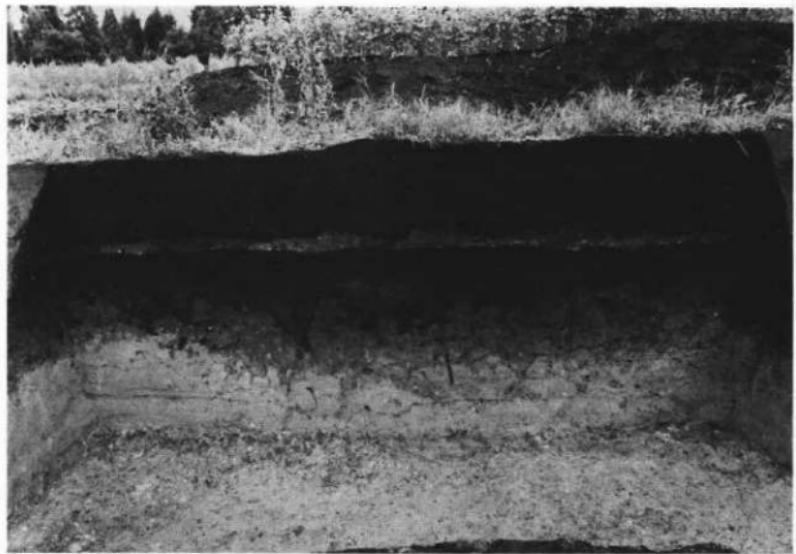


図版 2

農道北側区全景

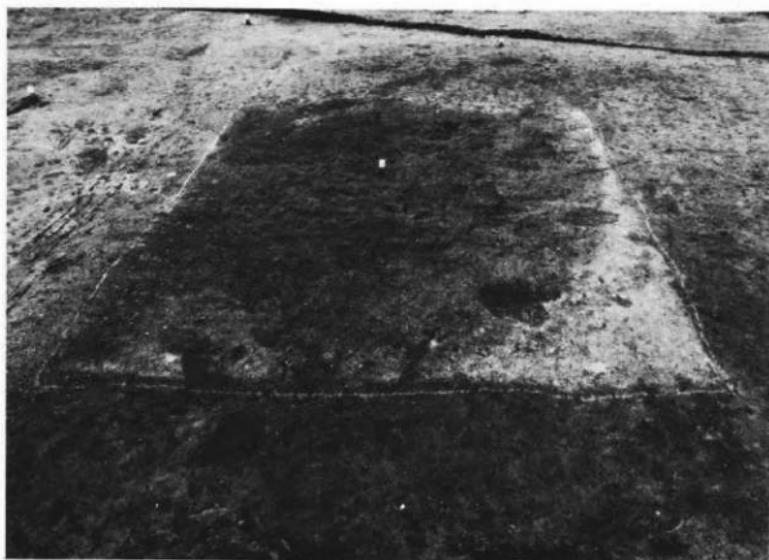


遺跡層序

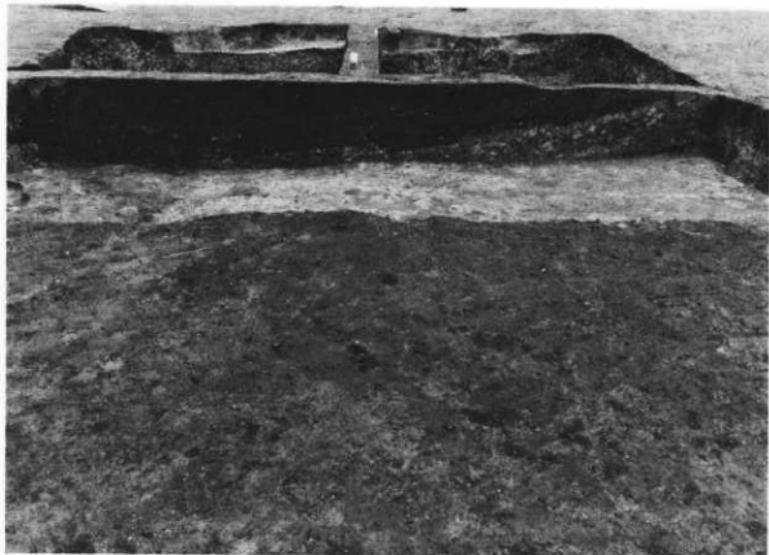


遺跡層序

図版 3



第1号住居跡確認状況



図版4

第1号住居跡覆土堆積状況



第1号住居跡兜掘状況



図版 5

第1号住居跡カマド



第2号住居跡確認状況



図版 6

第2号住居跡カマド

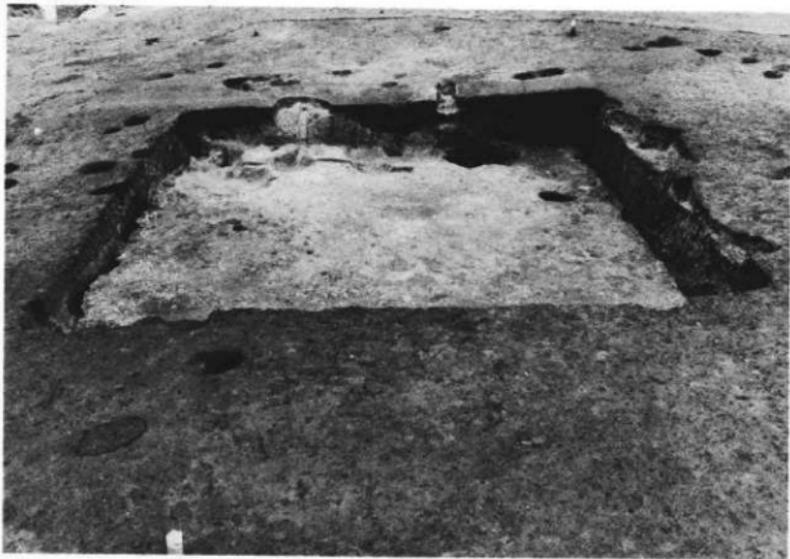


第2号住居跡カマド



図版7

第4号住居跡完掘状況

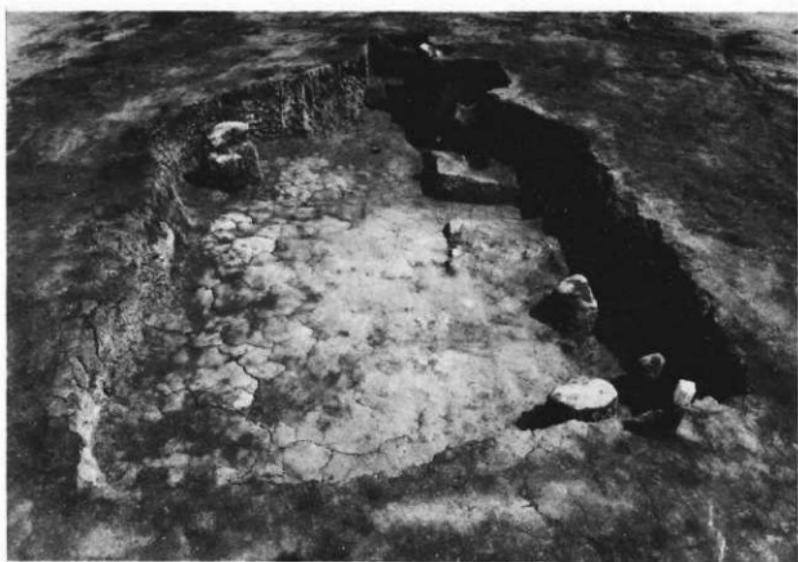


第3号住居跡発掘状況



図版 8

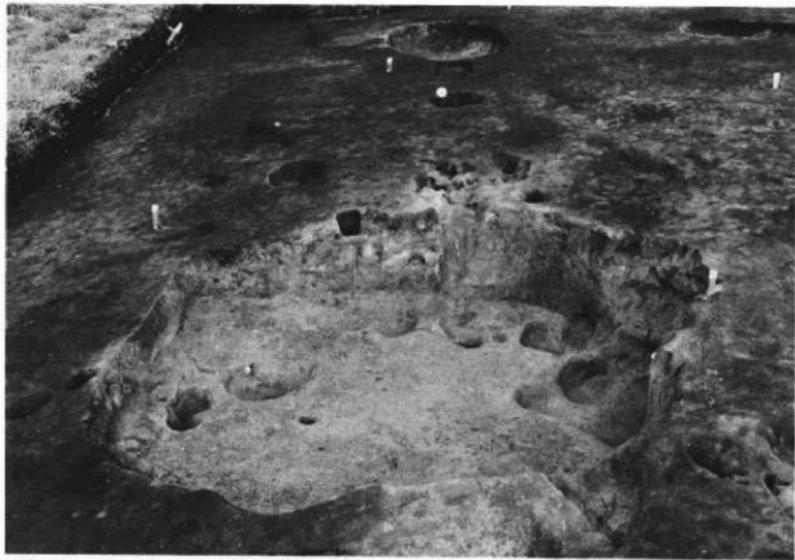
第3号住居跡カマド



第5号住居跡窓掘状況



第5号住居跡カマド煙道

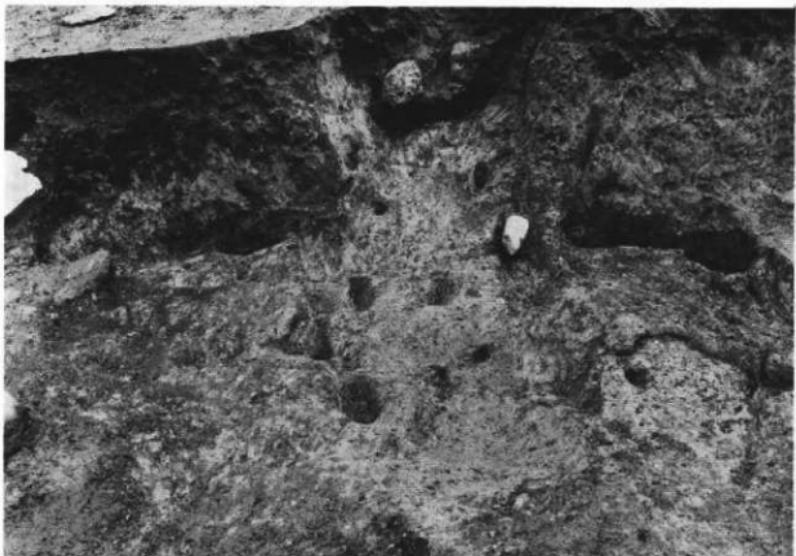


第6号住居跡完掘状況



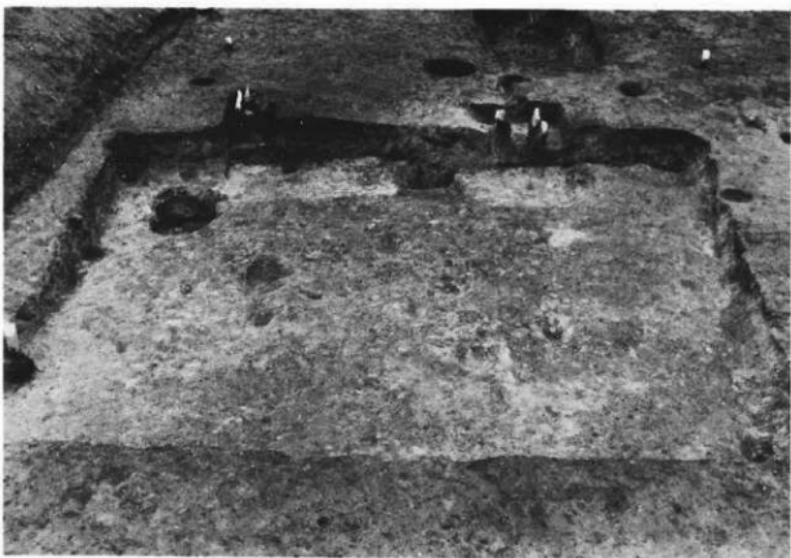


第7号住居跡(A-B)発掘状況



図版II

第7号住居跡カマド



第8号住居跡完掘状況



図版12

第8号住居跡カマドA

上高間IV遺跡



第8号住居跡カマド口



第12号住居跡完壁状況

図版13



第12号住居跡出土状況

上高岡Y遺跡



第11号住居跡出土状況

上高岡Y遺跡

圖版14



第11号住居跡出土状况



第11号住居跡完掘状况



第11号住居跡カマド



図版16

第9号・第10号住居跡完掘状況



第10号住居跡炭化材出土状況

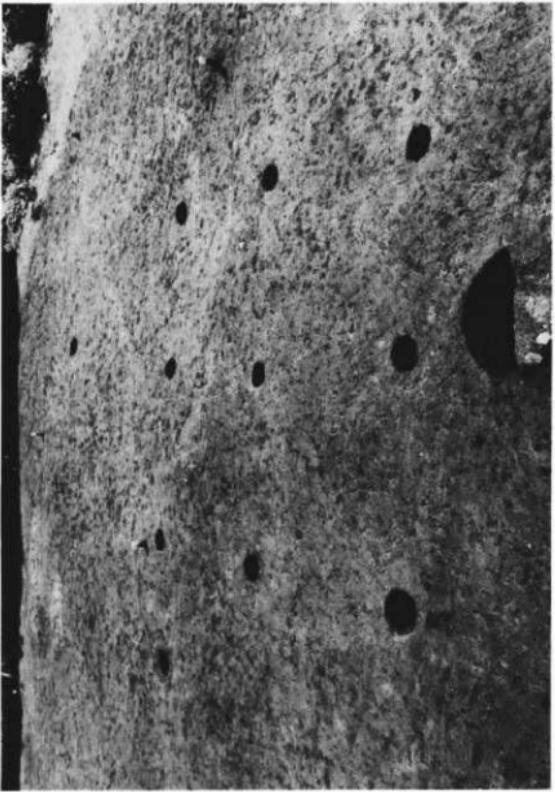


第9号住居跡カマド



第9号住居跡カマド

上部図IV遺跡

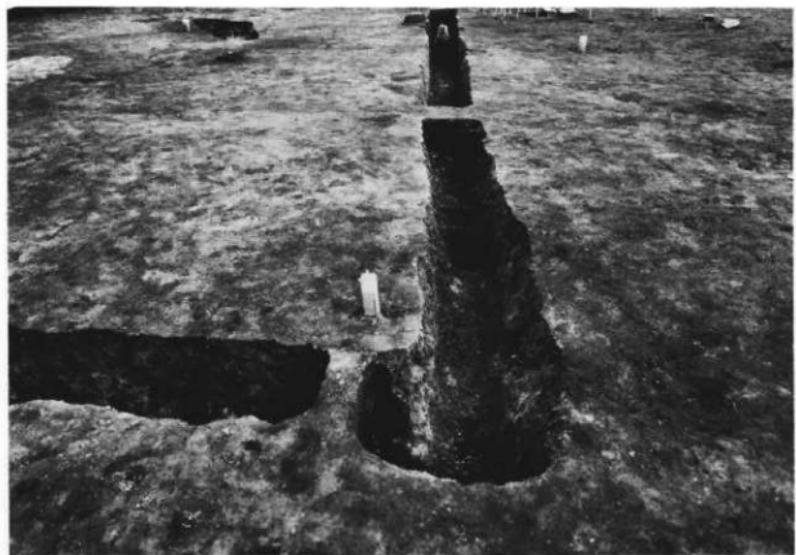


掲立柱建物跡

図版18



第1号溝跡（西▶東）



第1号溝跡（南▶北）



第1号土壤完掘状況



図版20

第2号土壤完掘状況



第11号土壤坑状况



圖版21

第5号土壤坑状况



第6号土壤完掘状况



第7号土壤完掘状况

土壤剖面之情况



第8号土壤完掘状况

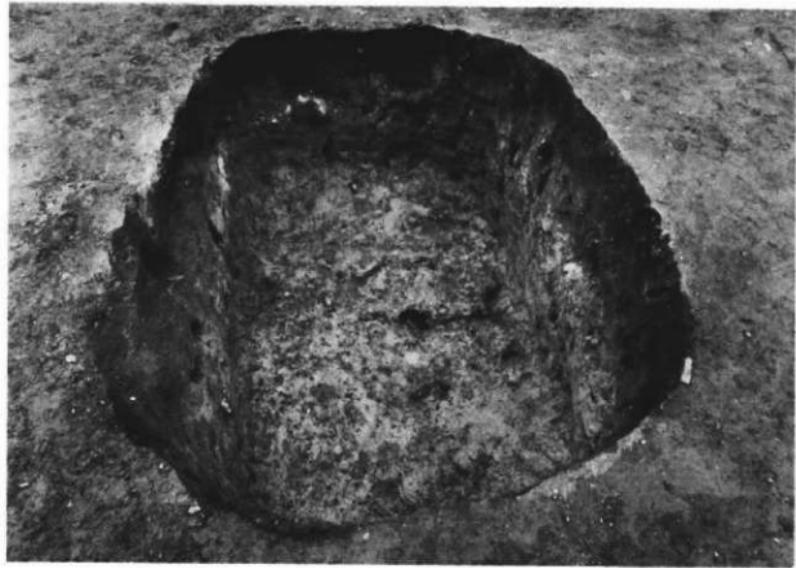


第10号土壤完掘状况

图版23

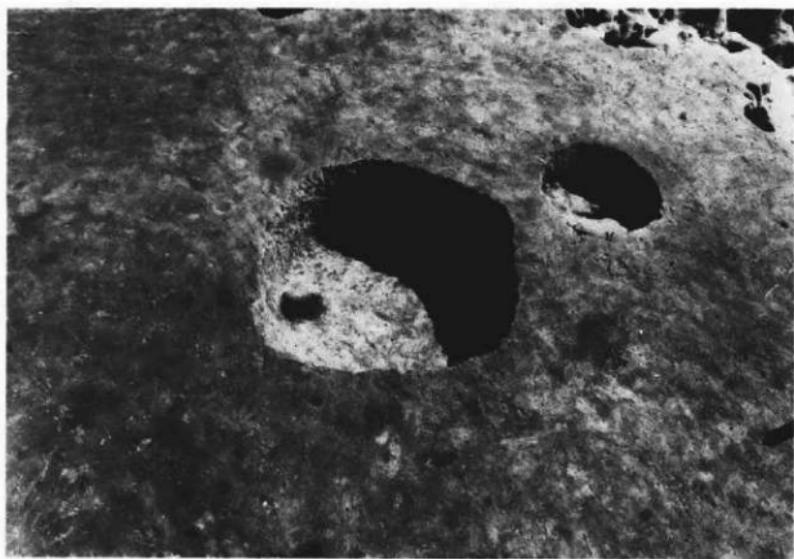


第12号土壤内覆土堆積状况

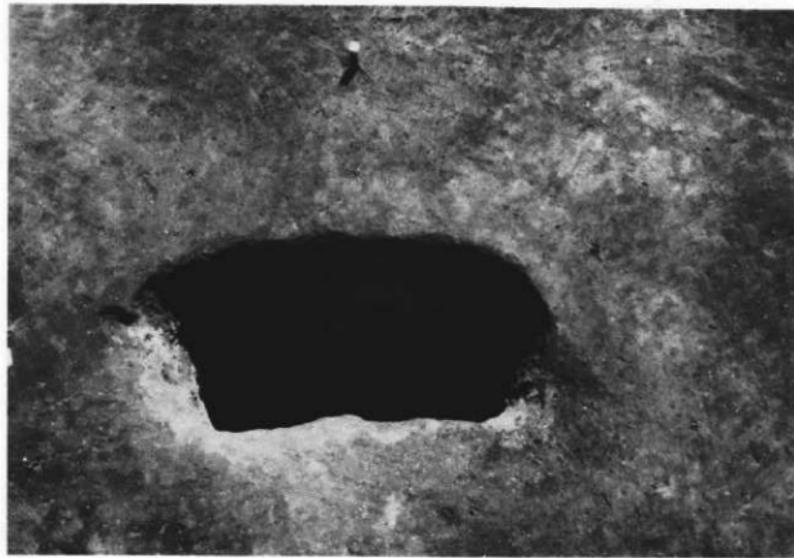


图版24

第12号土壤完掘状况



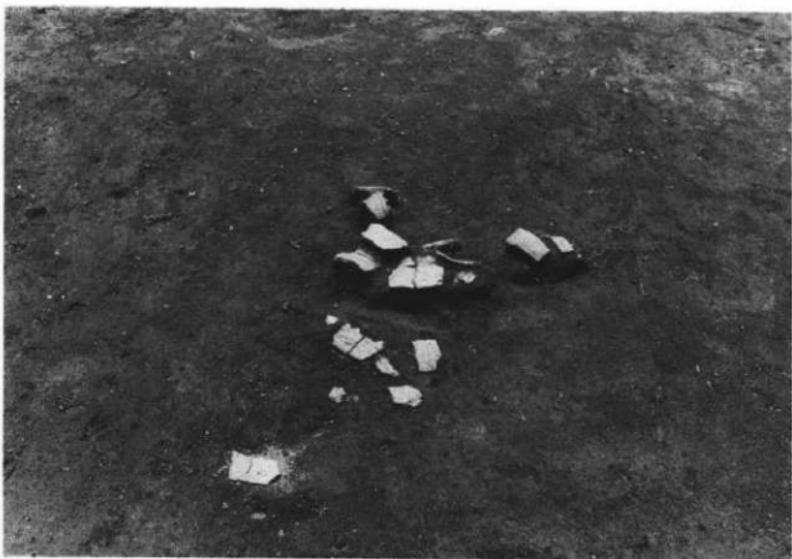
第13号、第14号土壤完掘状况



第3号土壤完掘状况



遺構外遺物出土狀況



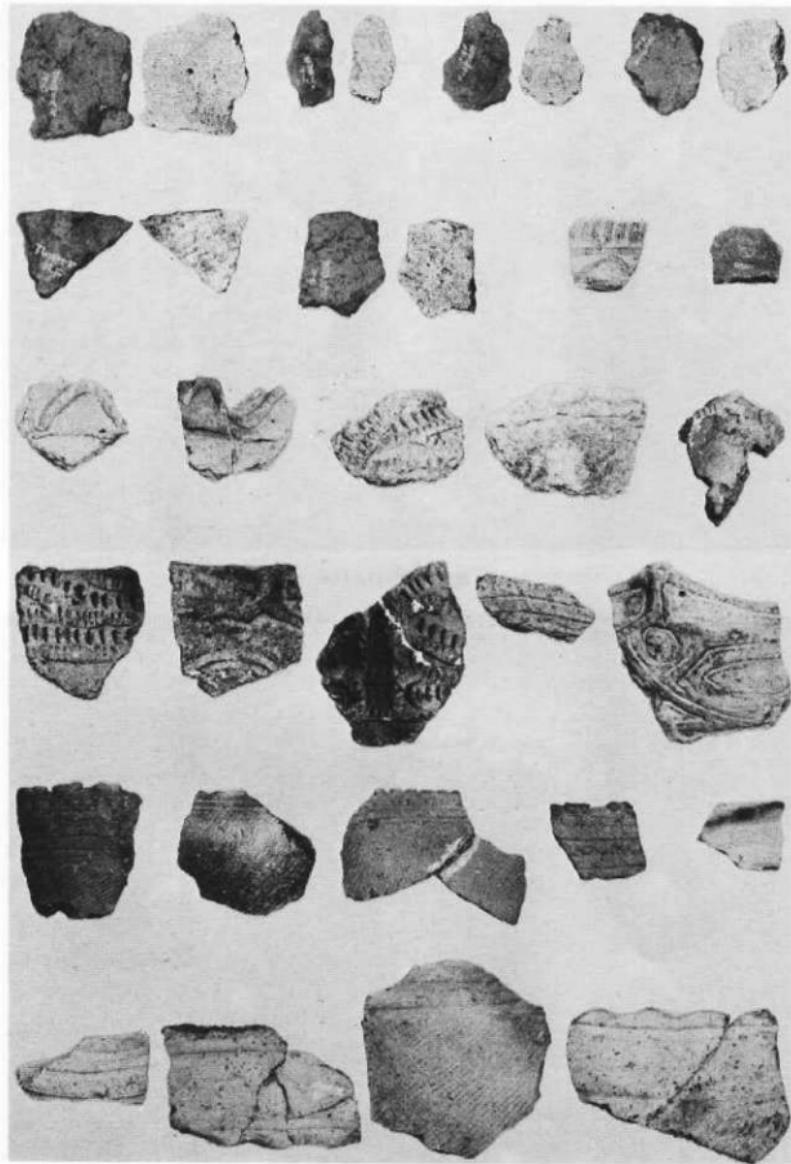
遺構外遺物出土狀況



遺構外遺物出土狀況

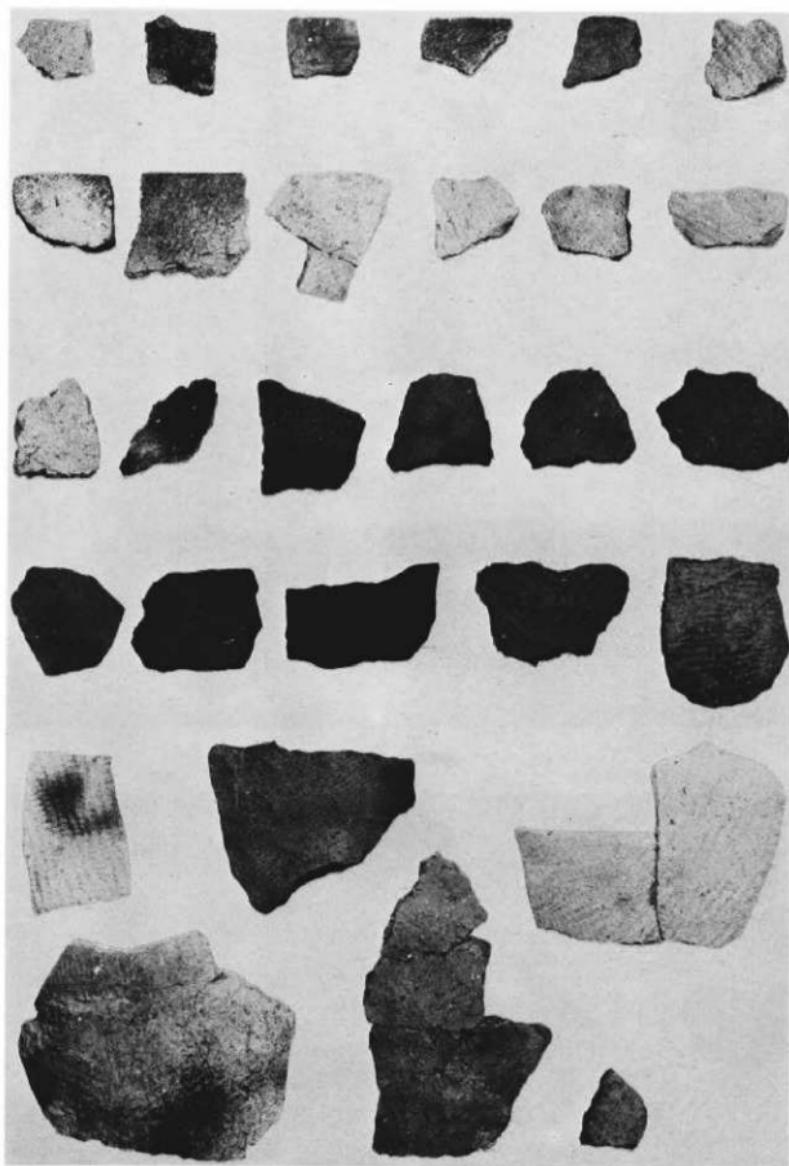


遺構外遺物出土狀況



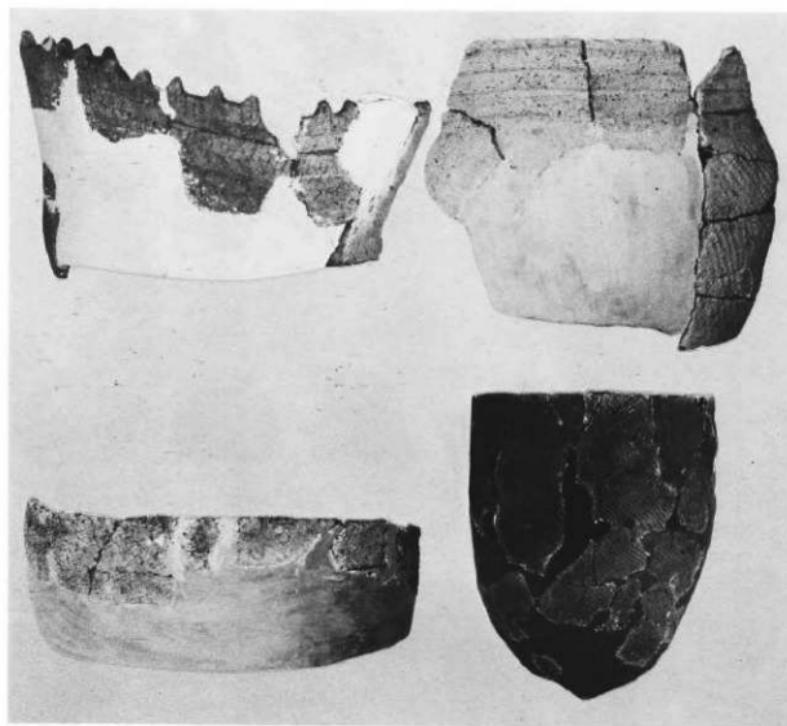
图版28

造柄外出土遗物

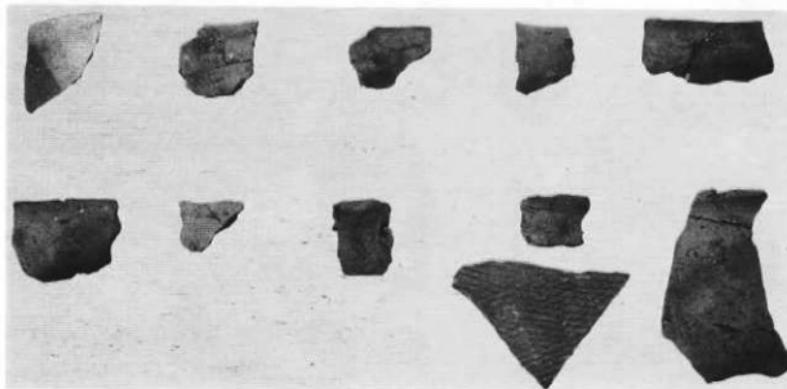


図版29

遺構外出土遺物

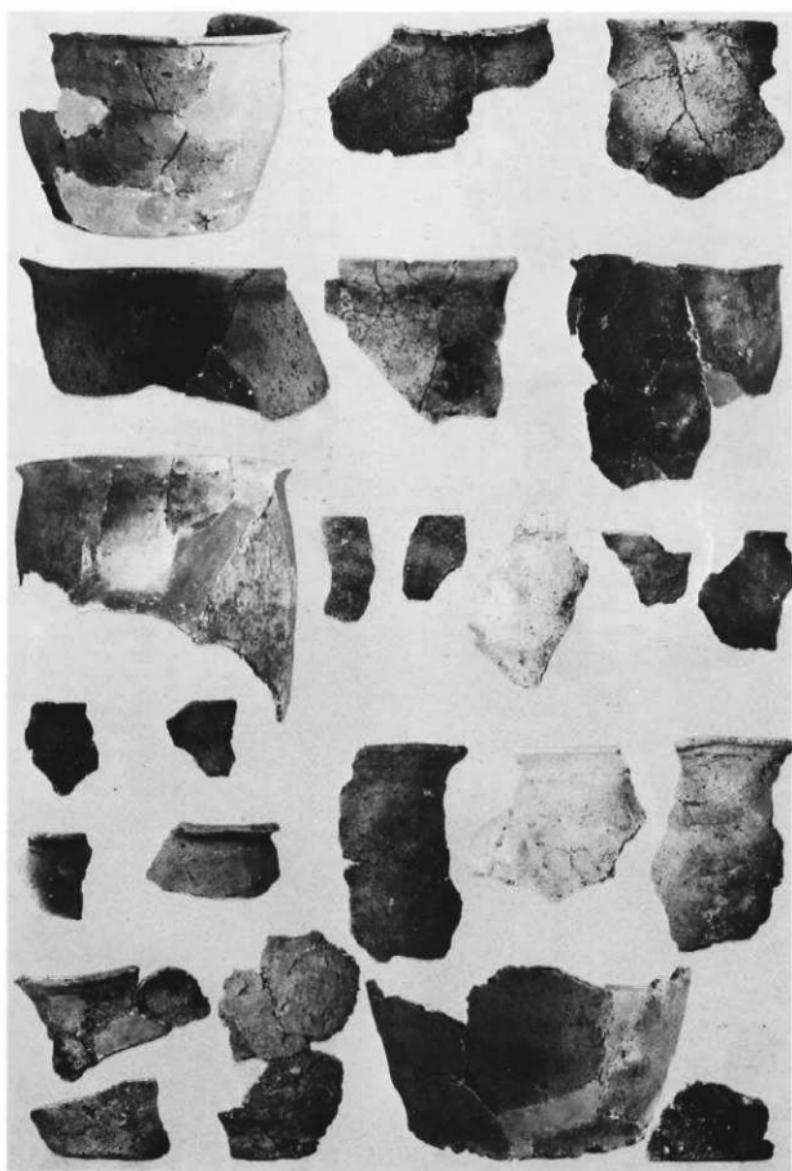


遺構外出土遺物



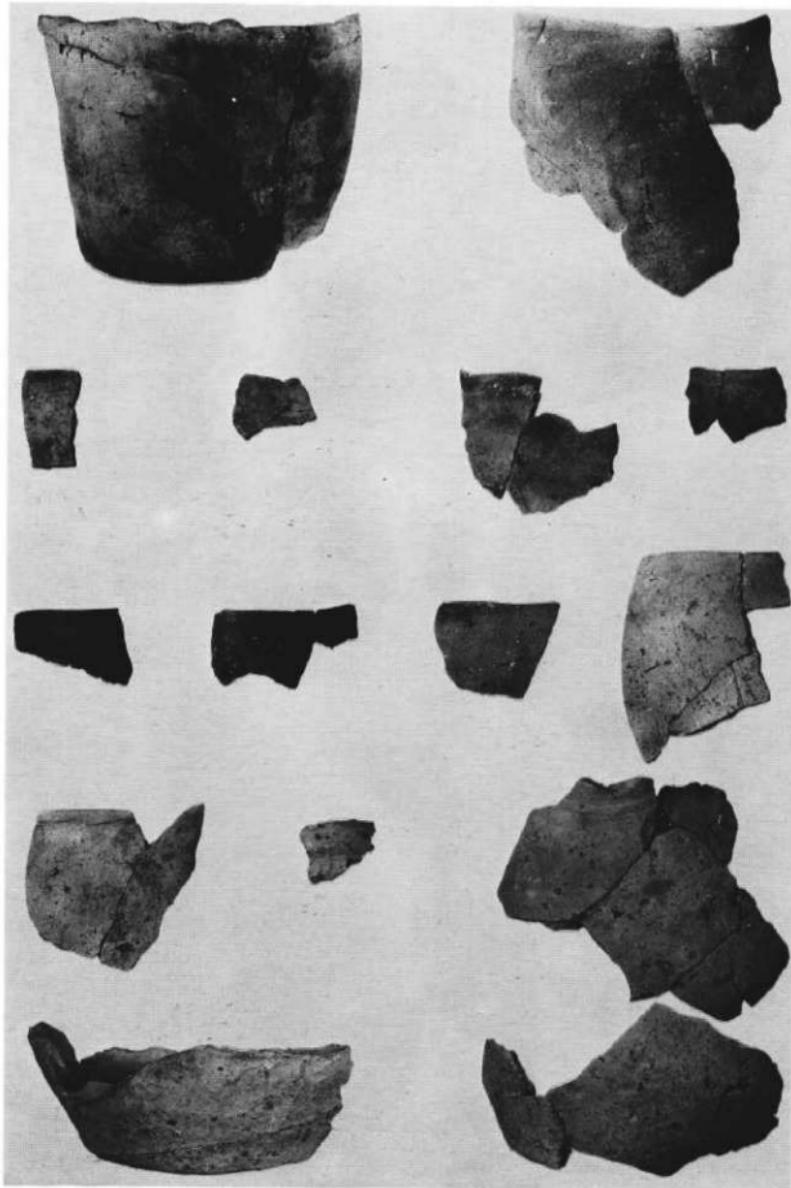
圖版30

第1號住居跡出土遺物



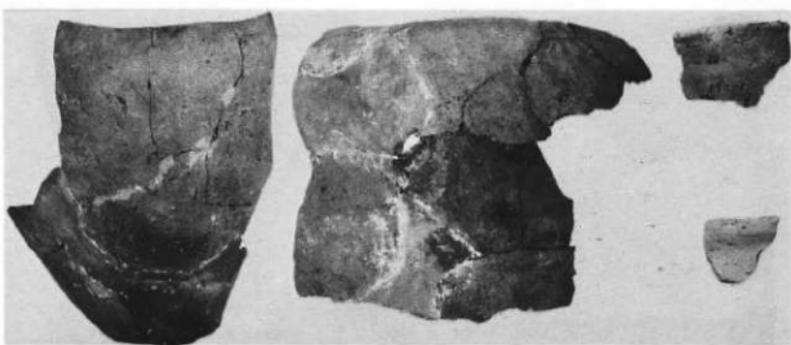
图版31

第2号住居跡出土遺物

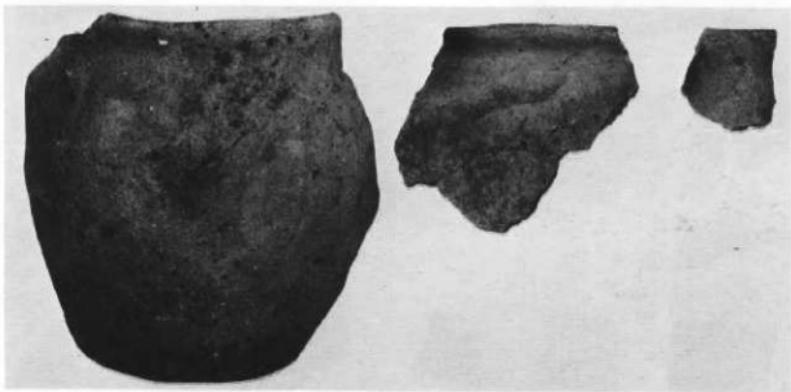


图版32

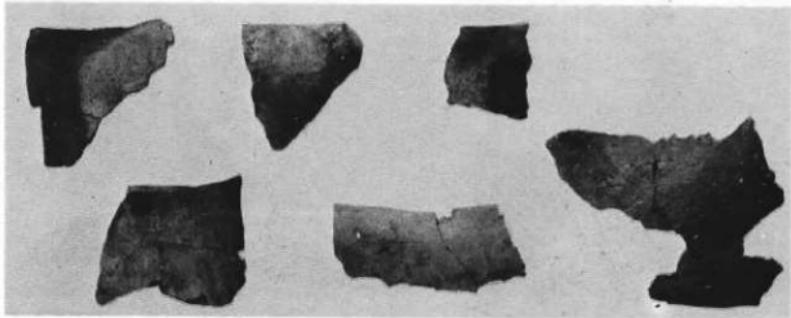
第3号住居跡出土遺物



第4号住居跡出土遺物

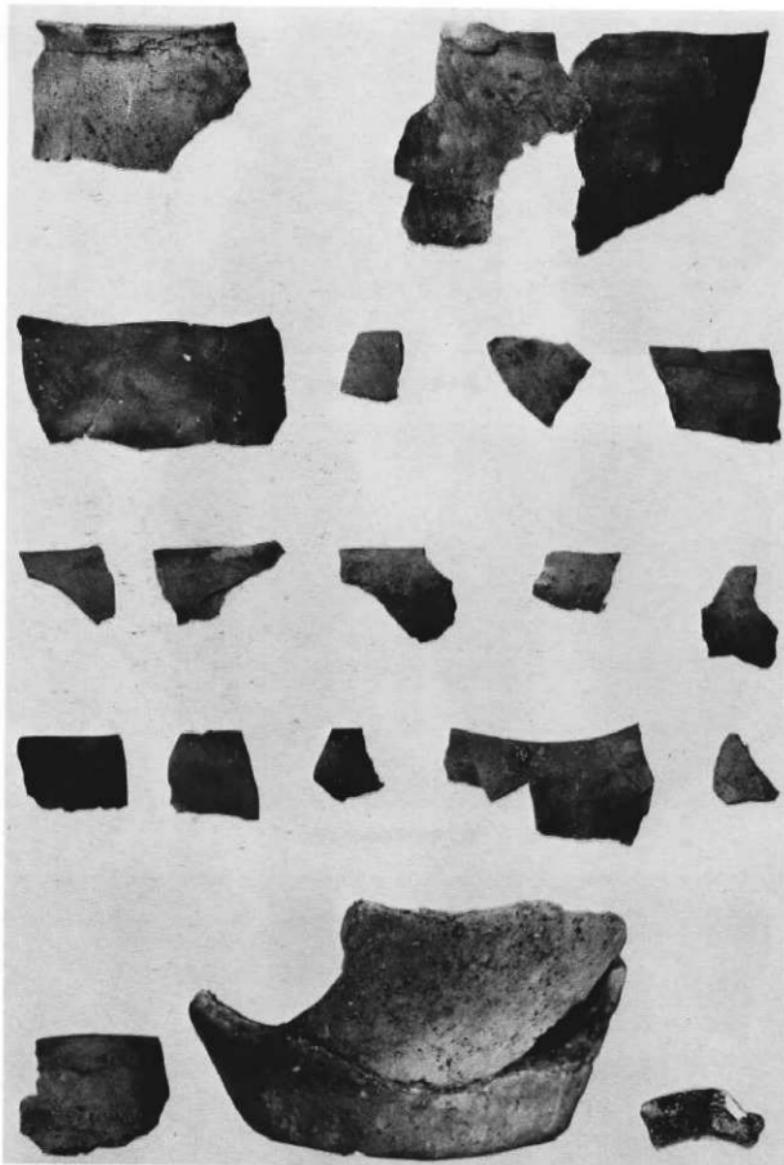


第5号住居跡出土遺物



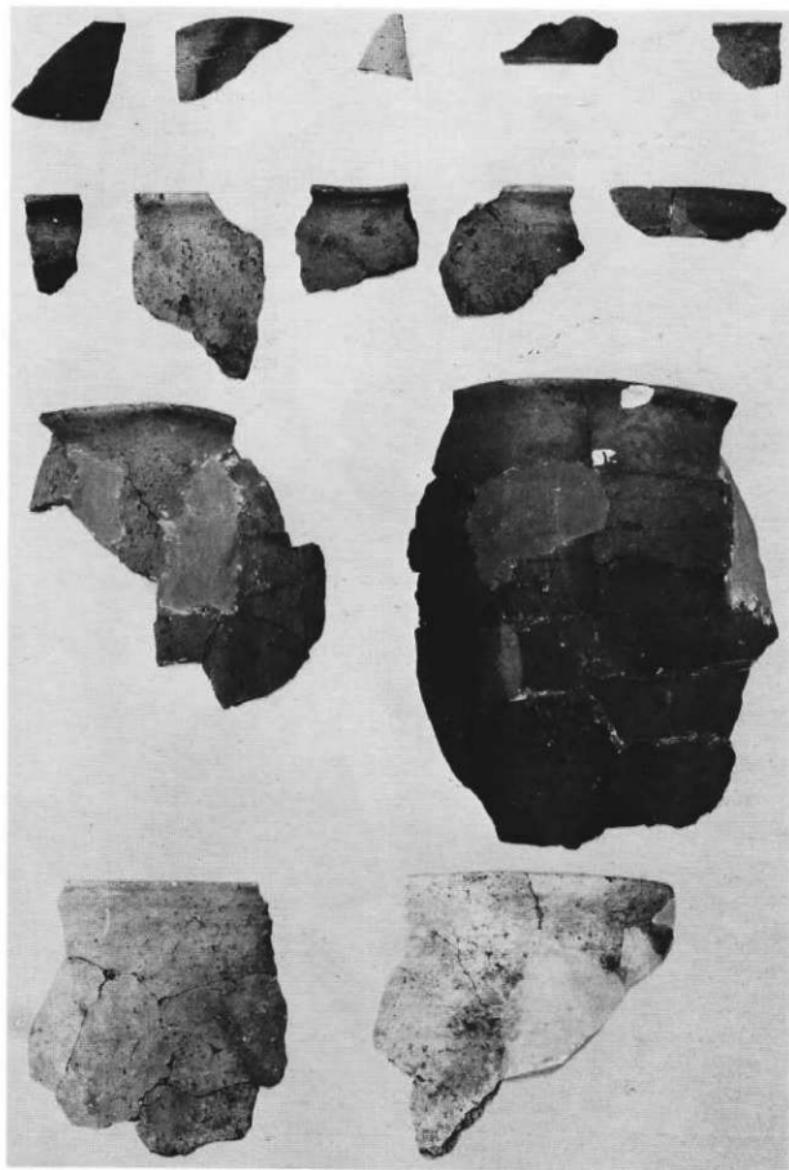
図版33

第6号住居跡出土遺物



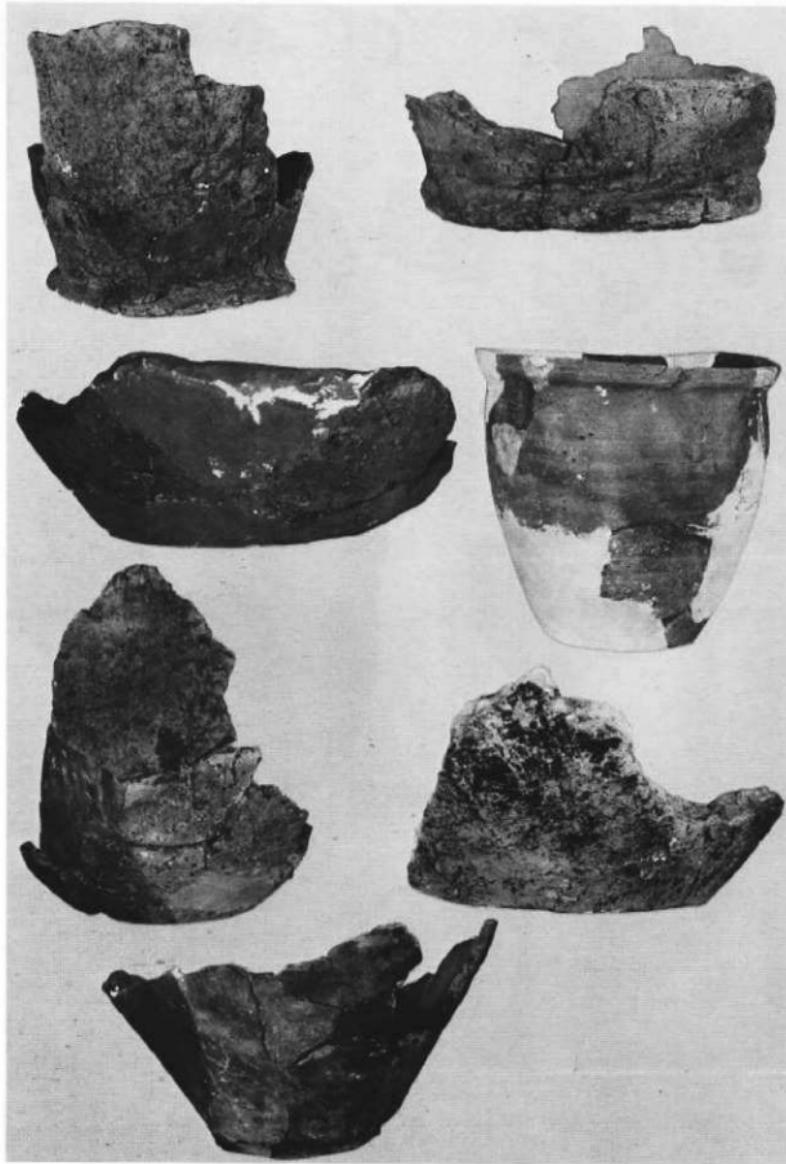
图版34

第7号住居跡出土遺物



圖版35

第8號住居跡出土遺物

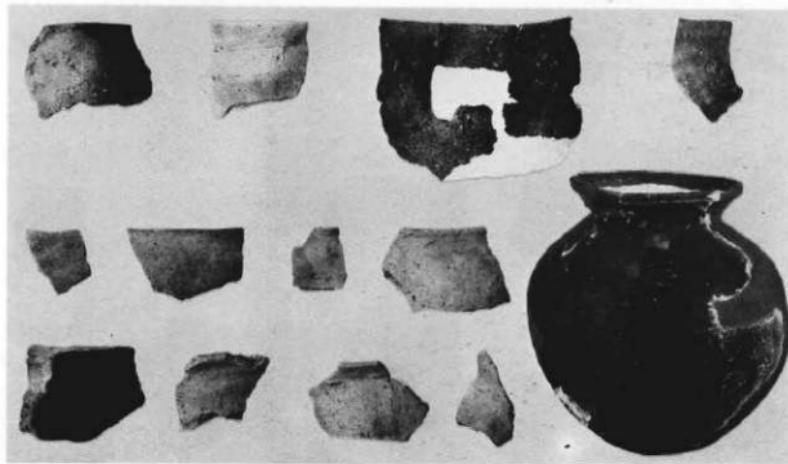


圖版36

第8號住居跡出土遺物

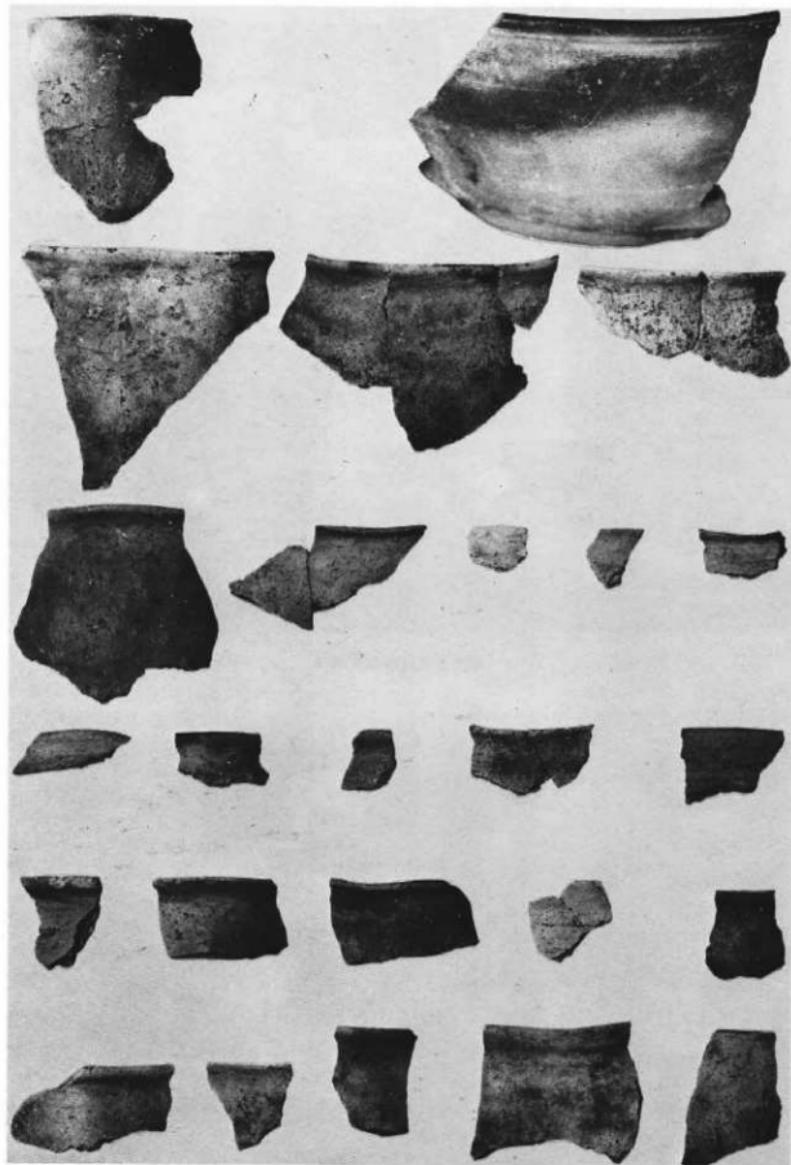


第9号住居跡出土遺物



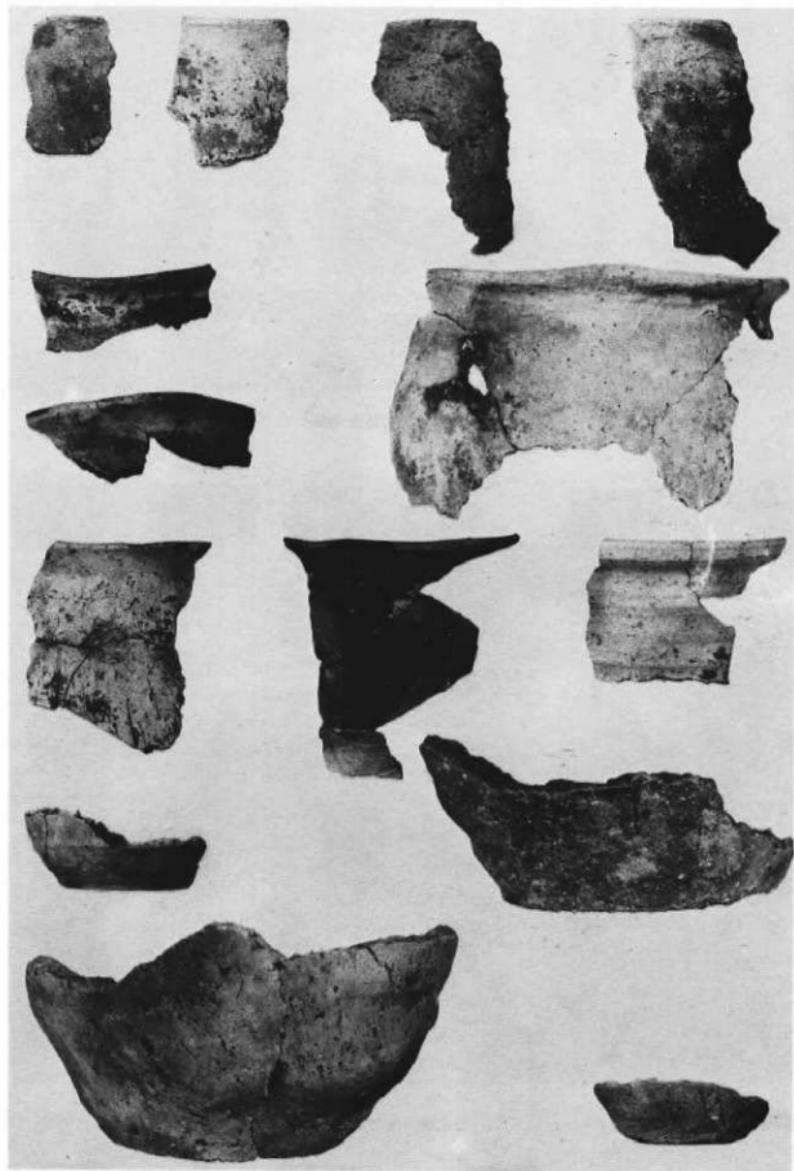
圖版37

第10号住居跡出土遺物



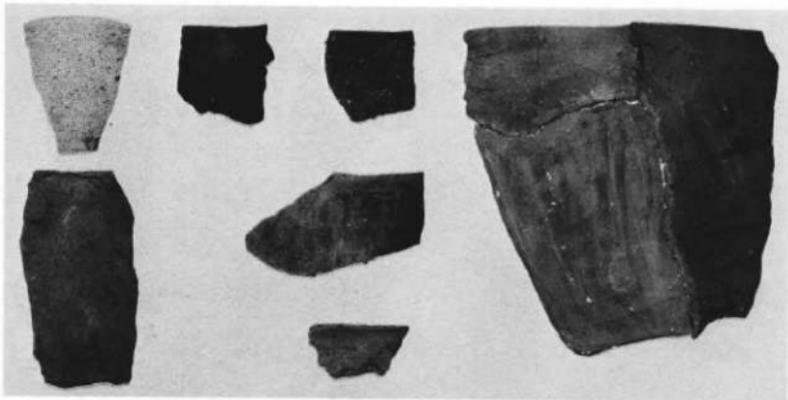
圖版38

第11號住居跡出土遺物



圖版39

第11號住居跡出土遺物

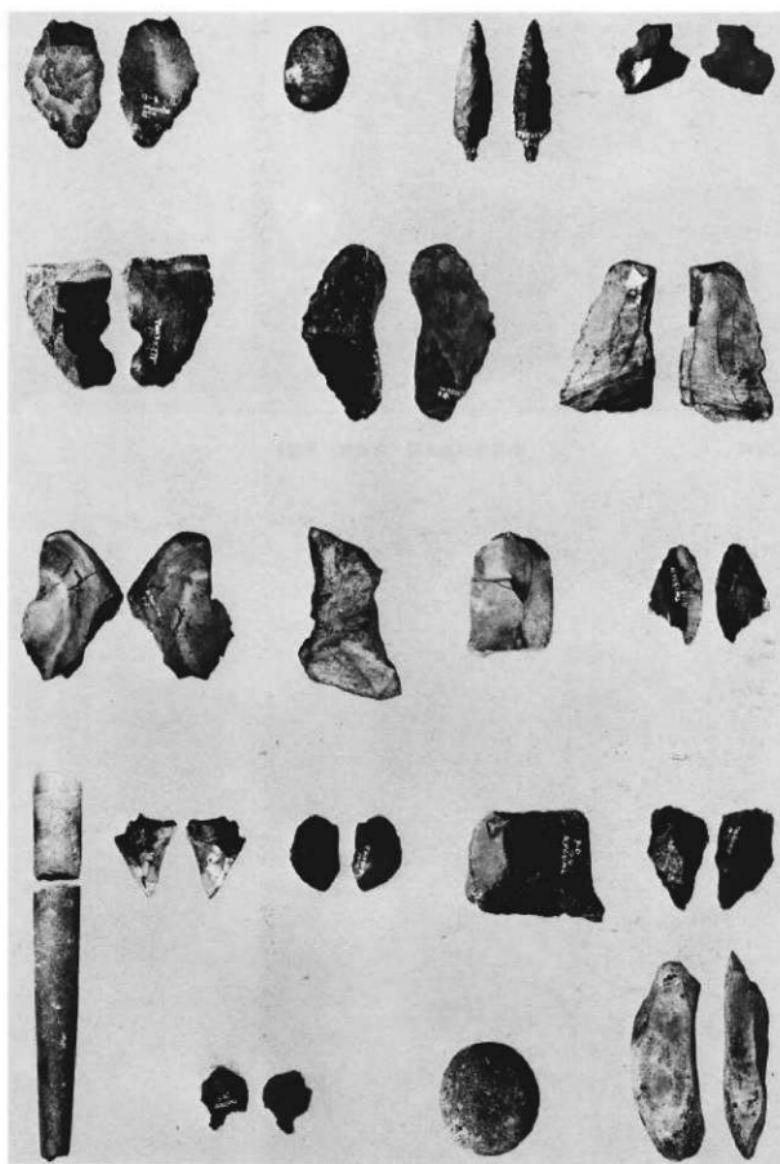


第12号住居跡出土遺物



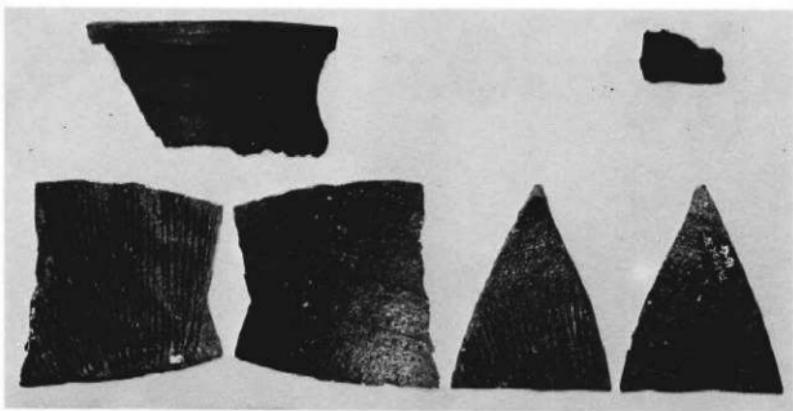
図版40

各土壤内出土遺物



図版41

造構外出土石器



圖版42

造構外出土土器（須恵器，陶器）

## 駒林遺跡

遺跡番号 No.14  
所在地 鹿角市八幡平字駒林  
調査期間 昭和55年4月7日～6月16日  
発掘調査予定面積 2,400m<sup>2</sup>  
発掘面積 2,450m<sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

遺跡は、国鉄陸中花輪駅南方2.7km、米代川右岸の標高150mの台地上に位置する。遺跡の立地する台地は、米代川の第2段丘であり、沖積面、第3段丘との比高はそれぞれ10m、25mをはかる。遺跡のある第2段丘及び下位の沖積面は現在水田として利用されており、上位の第3段丘は山林である。

遺跡の周辺、東側には通称「下モ館」と呼ばれる地がある。この地は、地形図で見る限り、2本の沢と、それに繋がる空堀に区切られた大小四つの郭と推測される平坦面があり、その標高は190~200m程度である。

また、遺跡の南方0.5kmの台地上には、「人形森」と呼ばれる地があり、伝聞ではあるが、縄文時代後晩期の遺物を出土したとされている。

米代川の対岸、標高160mの台地には縄文時代後晩期の東在家遺跡がある。

## 2. 調査の方法

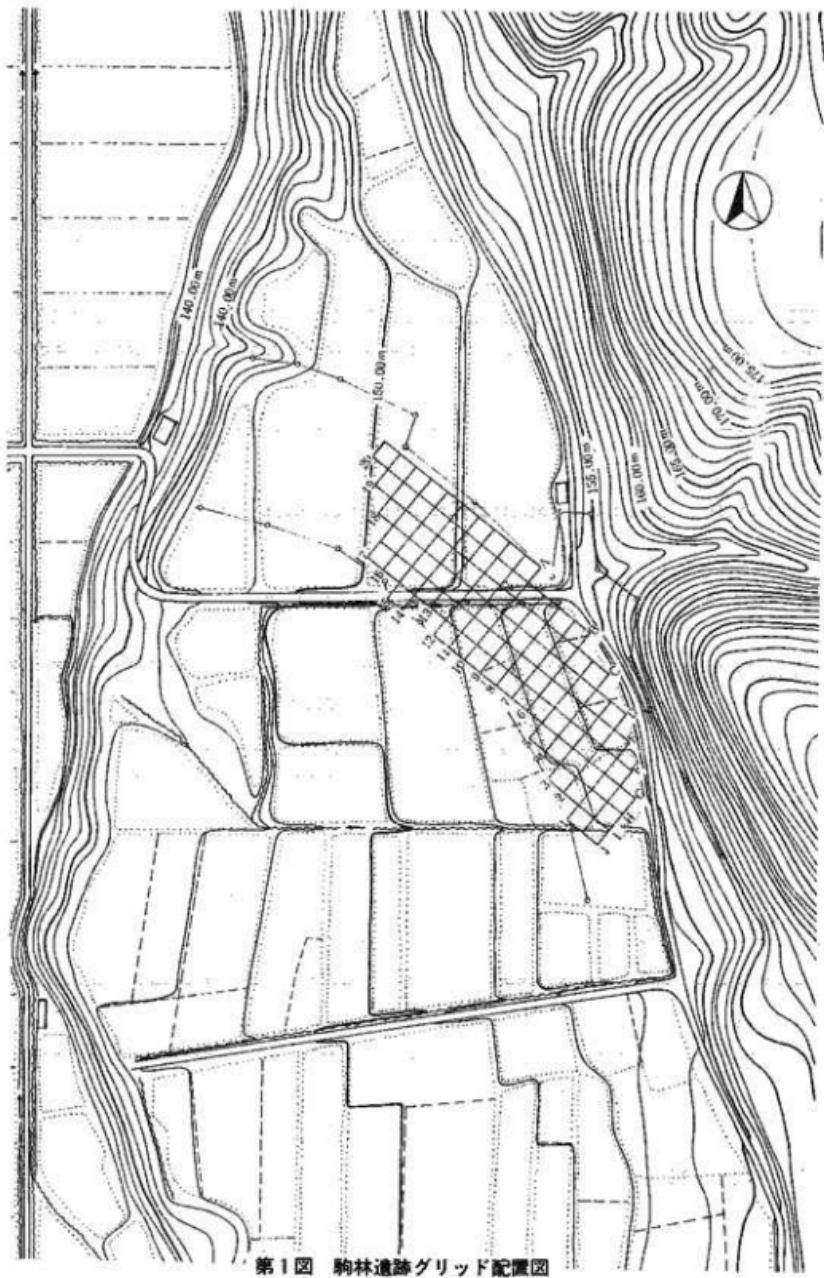
調査区域が、自動車道本線に通ずるランプウェイ予定地であるため、日本道路公団設置の中心杭を利用し、STA 2+40とSTA 2+80を結ぶ線を基線とし、STA 2+40を基準点として5m×5mのグリッドを設定し、南から北へアラビア数字、東から西へアルファベットをして、その組み合わせで各グリッドを呼称した。また、調査区域を中央から分断するように農道が東西に走っており、便宜上農道北側区、農道南側区というような呼称も併せて用いた。

前年度に行った試掘によって、調査区域の所謂地山面が東から西への緩傾斜をなしていることがわかつており、およそその表土厚も知ることができていたので、表土除去に際しては、その深い箇所を中心に重機を用いての作業を行い、その後人力による作業に移行した。

重機による表土除去後の粗掘の作業は、各グリッド毎に行つたが、農道南側区では基盤層である砂礫層まで予想外に深く、3-Cグリッドから10-Cグリッドまで幅5mのトレントを掘っての調査を行つた。農道北側区では、水田造成の際の整地、及びその後の耕作が遺構確認面である地山層にまで及んでいる箇所があり、それらの擾乱層の除去を粗掘作業の目安とした。

## 3. 調査経過

昭和54年12月12日に、トレントと坪掘りによる試掘調査を調査区域内に於いて実施した。



第1図 駒林遺跡グリッド配置図

翌55年4月7日からの本調査経過は概ね以下の通りである。

- |            |                                   |
|------------|-----------------------------------|
| 4月7日～4月14日 | 重機による表土除去作業、テント設営、杭打作業            |
| 4月15日      | プレハブ設置、粗掘作業開始                     |
| 4月23日      | 第1号住居跡検出                          |
| 5月2日       | 第2号住居跡検出                          |
| 5月6日       | 調査区西側に工事用道路建設開始<br>調査区との境に、フェンス設置 |
| 5月17日      | 農道南側区に重機により幅5mのトレンチ掘削             |
| 5月31日      | 掘立柱建物跡検出                          |
| 6月6日       | 第3号住居跡検出                          |
| 6月16日      | 調査区域全体写真撮影 調査終了                   |

重機による表土除去は、試掘調査結果をもとにおよそ調査区域全域で行ったが、特に表土の厚かった西側に重点を置いた。次いで人力による粗掘作業は遺物の出土の多かった農道北側区を中心に行ったが、調査当初から調査区西側に幅10m程度で工事用道路建設が計画されていたため、その計画予定地を事前に調査終了する必要があった。幸い、工事用道路予定地が狭かったのと、遺構検出がなかったために、その区域での調査は滞りなく終了した。

農道南側区では、重機による表土除去後、人力による粗掘りによって遺構の検出に務めた。しかし北側区とはほぼ同位のレベルに於いても遺構は確認されず、出土する遺物も少量であったので、遺跡地基盤層までのトレンチ調査によって、主に層位と遺物の在り方の観察に主眼をおいた。

#### 4. 遺跡の層位

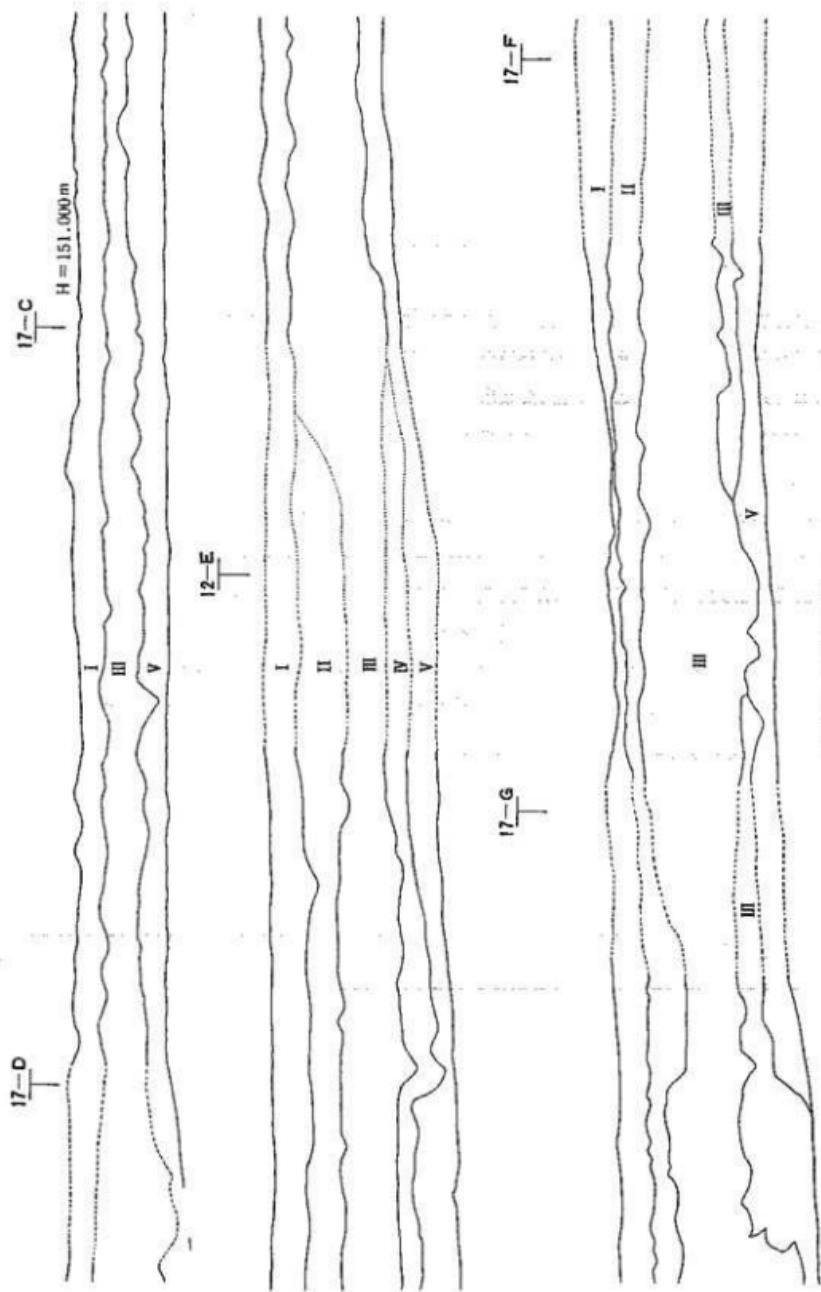
本遺跡の土層堆積状態を観察するため、17ライン上にトレンチを設定し土層断面図を作成した。本遺跡は水田跡地であり、耕作による土層全体の擾乱が激しく、土壤自体は著しくグライ化している。そのため非常に細かく分類されるが、基本的には以下にあげるI～Vの5つの層に分類できる。

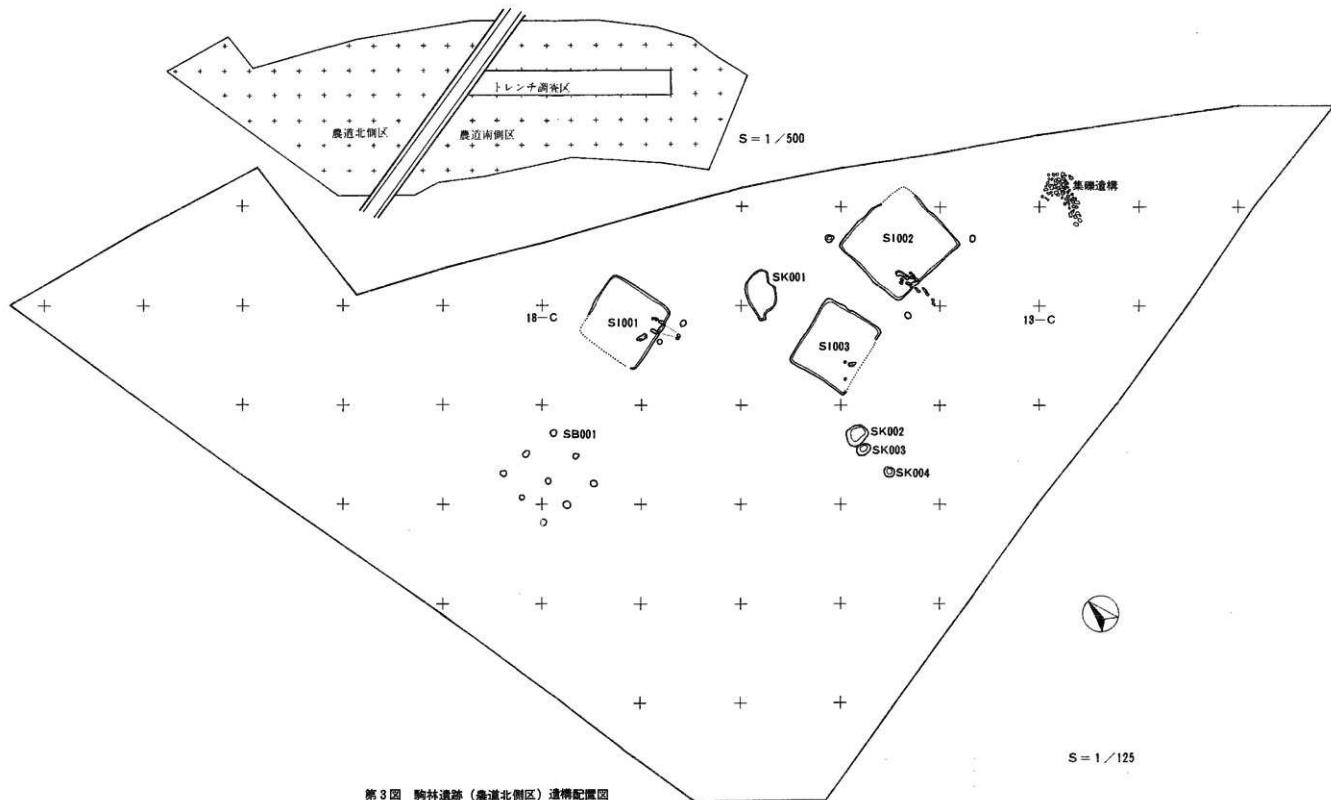
I層：色調は黒褐色～暗褐色を呈する。調査区域全体に広がる耕作土であり、黄褐色～赤褐色の酸化した鉄分と思われる粒を含む。

II層：色調は黄褐色～褐色を呈する。径1～50mmの軽石及び粘土よりなるが、軽石の占める割合が大きく、若干炭化物を含む。

III層：色調は黒色～暗褐色を呈する。粘性があり、径1～30mm程の軽石を15～30%程含む。

第2図 透鏡の層位





第3図 駒林遺跡（県道北側区）遺構配置図

赤褐色の酸化した鉄分を僅かに含む。

IV層：色調は暗褐色～赤褐色を呈する。径10～40mm程の軽石及び礫よりなる砂礫層である。

V層：色調は黒褐色～暗褐色を呈する。粘性があり、赤褐色の酸化した鉄分を含む。また水成堆積によるとと思われる色調が褐色の砂質土をブロック状に含む。

以上各層のうち、平安時代の遺物（土師器片）は田層に、縄文時代の遺物はIV層に包含されており、遺構の確認はIV層中、部分的にV層上面によって行われている。

## 5. 遺構と遺物

### (1) 縄文時代

#### ア. 墓礫遺構（第4図）

12-A, 12-B グリッド第V層面で検出した。大きいもので径25cm程、小さいもので3cm程の礫の集合からなる。

全体の形状は、北に向いた「矢印」の形を呈し、「先端部」での東西の指しわたしが、約255cm、「尾」の部分では約70cm、全体の長さ約320cmを計る。各々の礫は第V層に埋ったような状態で検出され、断面の形状を見ても、組まれた若しくは積みあげられたというような検出状況を呈してはいない。

礫は、赤褐色に変色していたがそれも火熱による変化したものと思われる。

遺物は、僅かに縄文の施されただけの破片が礫の間から数片出土したに停った。

#### イ. 遺構外出土の遺物

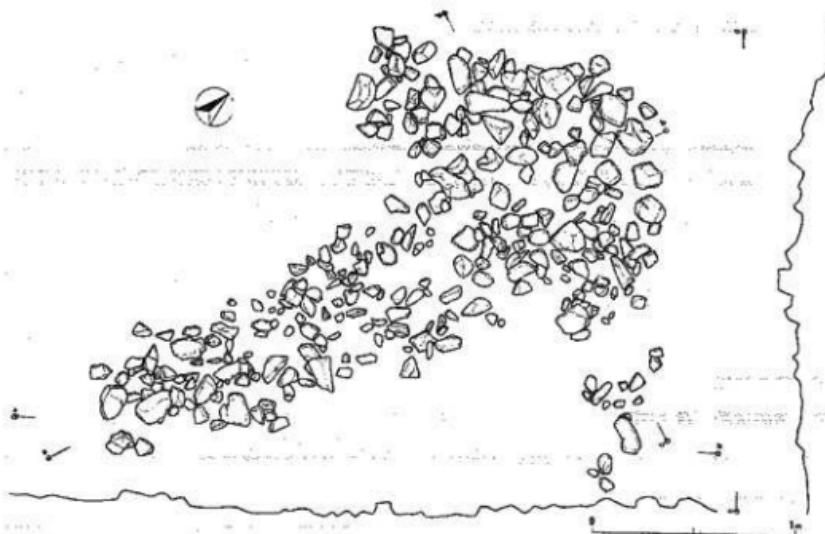
縄文時代の遺物は遺構外で出土したものが多く、粗掘作業の段階で断片的に検出され、殆どが他所からの流れ込みによって遺跡地に運れたと思われるものである。

また、農道南側のトレンチ調査区では、平安時代遺構確認面よりも、下位の礫床上面から時期を異する遺物が出土しており、これらの遺物も遺構に伴うものではなく、礫床を覆う第II層、第III層と相俟って、他所から運び込まれた状況を示す。

#### 〈土器〉

主に前期末葉、後期中葉～後葉、晩期中葉～後葉の三時期に大別し得る。

第6図1～5は前期末葉円筒下層d式に比定できる。1, 3, 4は同一個体であるが、口縁部に計6条の縦縞の圧痕が施され、胴部以下には多軸縦縞が回転押捺される。器形は、頭部に微隆起をもち稍外反する。2は、LR, RLの結束第1種の羽状縄文の施された稍外反する口縁部破片である。5は、横位に不整撚糸文の施された底部破片であるが、底面との輪積痕跡が明瞭に残っている。



第4図 基礎遺構

6は、唯一中期末大木10式に比定されるものである。口縁の内湾するキャリバー状を呈する鉢形土器胴部片と思われるが、LR原体を横位回転施文した後に、粘土紐による微隆起線を配した磨消繩文手法が用いられている。胎土は非常に堅致であり、焼成も良好である。若干の雲母を含む。

7～16は、後期前葉十屢内I式に比定し得るが、7と8のように沈線と繩文を用いた類と、9～16のような沈線のみによる文様構成をとる類とに分けられる。概して後者は、沈線が細く鋭く9～12のように2条の沈線間が微隆帯となるものもある。17は、後期中葉加曾利B式期に比定できる。第12図1は、所謂橋状把手部分の破片であるが、上下2条づつの沈線によって狭まれた微隆帯が、把手上で連結する。3条の平行沈線が波状口縁に沿ってめぐらされ、波頂下では、S字状沈線によって連結される。全体には磨消繩文手法を用いての文様構成がとられる。第6図18及び、第13図1は後期後葉の貼瘤土器、入組文系土器に比定できる。18は沈線による入組文が描かれた後に細かなLR原体が横位回転施文されている。1は、口縁部から底部までほぼ直線的におりる鉢形土器である。口縁には、3個1組の突起が4単位付される。胴部上半は文様帶であろうが、文様帶内は殆ど磨滅しており、上下限を画する点列の加えられた2条づつの平行沈線が現存するのみである。下限をめぐる沈線上には、口縁の突起と対応して、円形のボタン状突起が付され、口縁及び文様帶下限に設けられた突起とも十字に切り込みが入れかれている。胎土は砂粒を混じてあり、全体に磨滅が著しい。

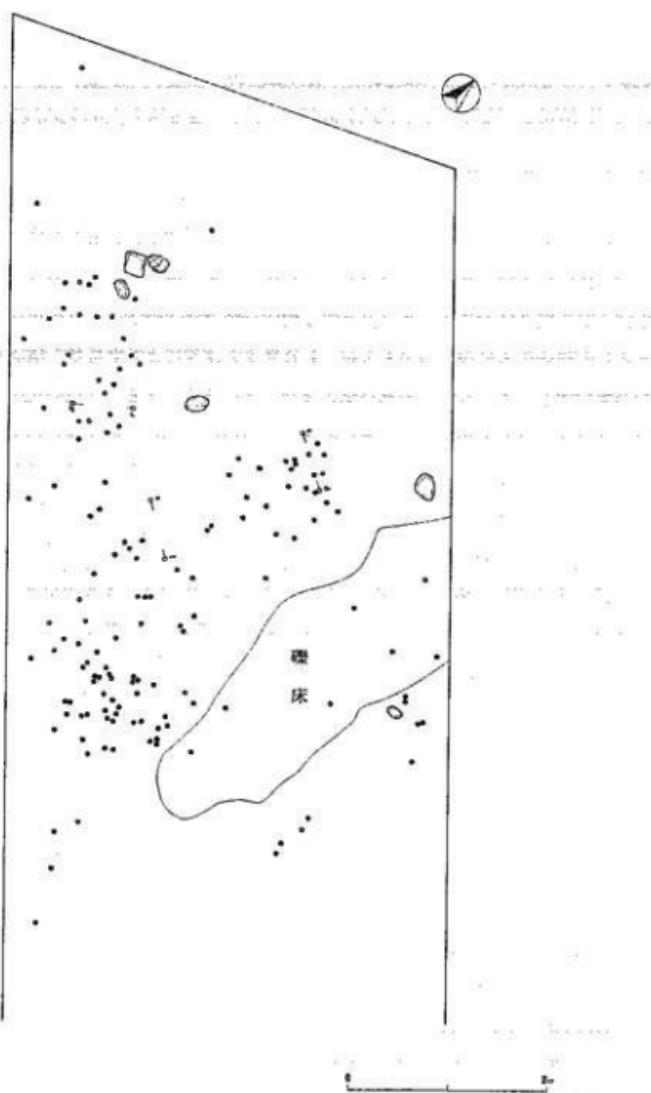
第6図19～22は、晩期中葉大洞C<sub>1</sub>式～C<sub>2</sub>式に比定できる。いづれも口唇上に刻目が加えられ20のように所謂B突起が付されたりもするが、口縁に2～3条の平行沈線がめぐる他は、以下に地文以外の文様は認められない。地文は細密なLR原体を横位回転施文したものである。第7図1～5は大洞C<sub>2</sub>式に比定される。23は楕円形の区画文が沈線によって二重に描かれて、沈線間にLR原体の横位回転施文した地文が残される。第7図1、2は同一個体であり口縁以下ゆるやかに膨みながら降りる鉢形土器である。口縁1箇所にB突起が付され、口縁以下1cm程の間は無文帯として研磨される。無文帯以下の文様帯内には地文としてLR繩文が施された後に、斜位沈線が交錯して施されるが、全体には矢羽状の構図をとるものと思われる。3は、LR繩文が横位回転施文された後に比較的太い沈線による文様が描かれている。4は、細密なLR原体が、横位回転施文された後に直線的な構図が磨消繩文手法により描かれている。5は、頸部で大きく屈曲する鉢形土器であるが、LR繩文と沈線により曲線的な構図が描かれている。6及び第13図3、4、5は、晩期後葉の大洞A式に比定できる。3条の沈線と2個の粘土粒の貼付により工字文が作出される。第13図3は、口縁に5条の平行沈線がめぐり、胴部以下無文研磨される浅鉢形土器である。4は、小形の浅鉢土器であるが、口唇には刻目が施され、口縁、底部に2条づつの平行沈線がめぐる。胴部はLR原体が横位回転施文される。5は、小形の壺形土器である。口唇1箇所には、B突起が付され、口縁部に2条頸部に3条の平行沈線がめぐる。頸部の沈線は1箇所で工字文を作出している。底部は、4箇所が突出しており、所謂四足の形状を呈している。7～8は、大洞A'式に比定できる。口縁は大きな波状を呈し、波頂部は突起となる。口頭部には、口縁の突起と対応して所謂変形工字文が作出される。9は、やはり大洞A式、A'式に比定し得る台付鉢台部破片であるが、T字形の陰刻を組み合わせての工字文が作出される。第7図10～18、第8図、及び第9図1～7は晩期後半期に伴う土器であるが、10～18、第8図1～3のように口頭部に1～数条の平行沈線がめぐり、以下全面繩文の施されるもの、第8図4～8のように口唇が小波状を呈し、口縁の無文研磨されるもの、第8図9～19のように口縁がやや内湾し、全面繩文の施されるもの、第9図1～7のように全面縱位の条線文の施されるものなどがある。

第9図8～12と第10図は、全面繩文の胴部破片であり、時期を特定することは難しいが、原体が殆どLRを用いていることから、やはり晩期後半期に伴うものと思われる。

第12図2～15は、繩文時代出土土器底部であるが、3～8は繩文時代晩期中葉～後葉のものであり、9～15もそれに伴う土器底部と思われる。

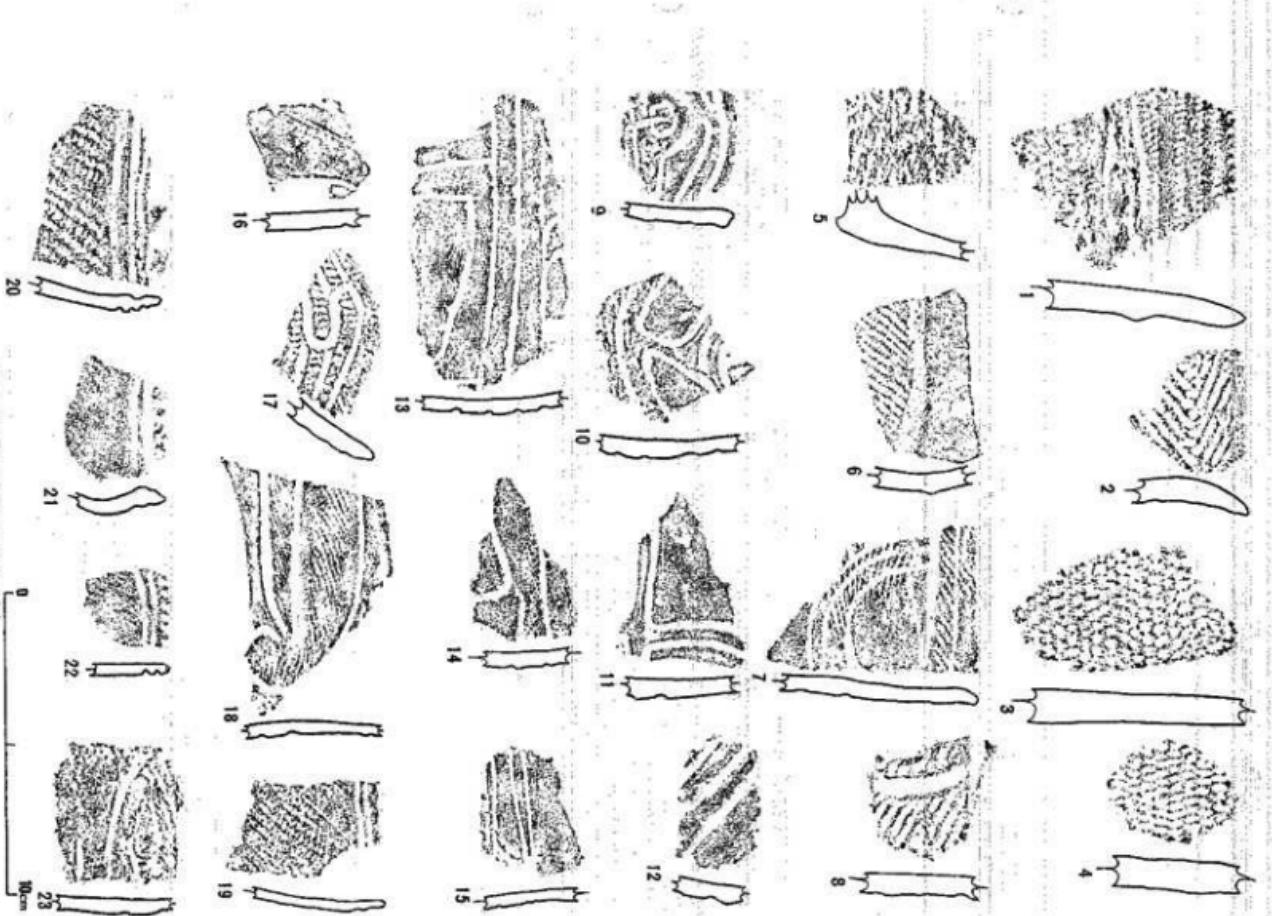
#### 〈石器〉

出土した石器点数は、石鏃2、石匙1、磨製石斧1、剝片9の計13点である。石質は、磨製石斧を除いて全て硬質頁岩である。

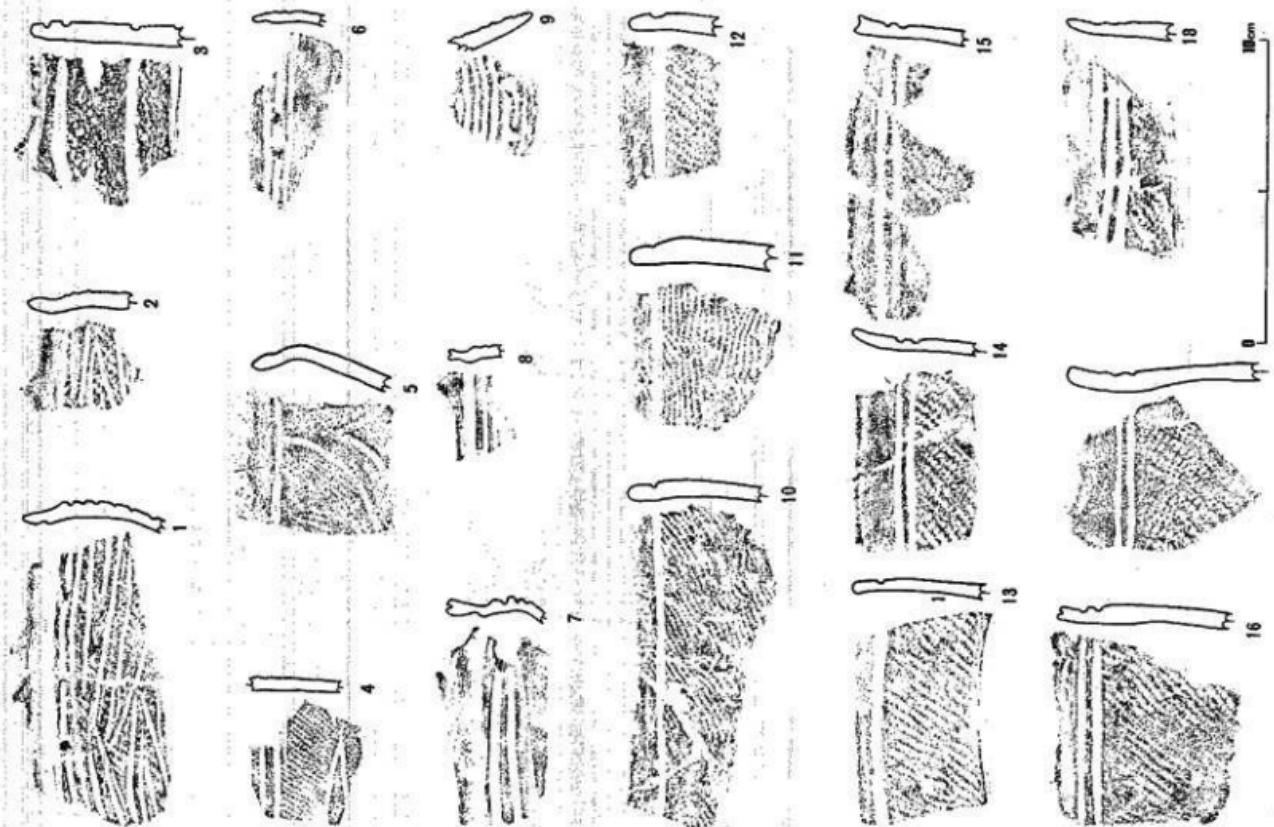


第5図 トレンチ内遺物出土状況図

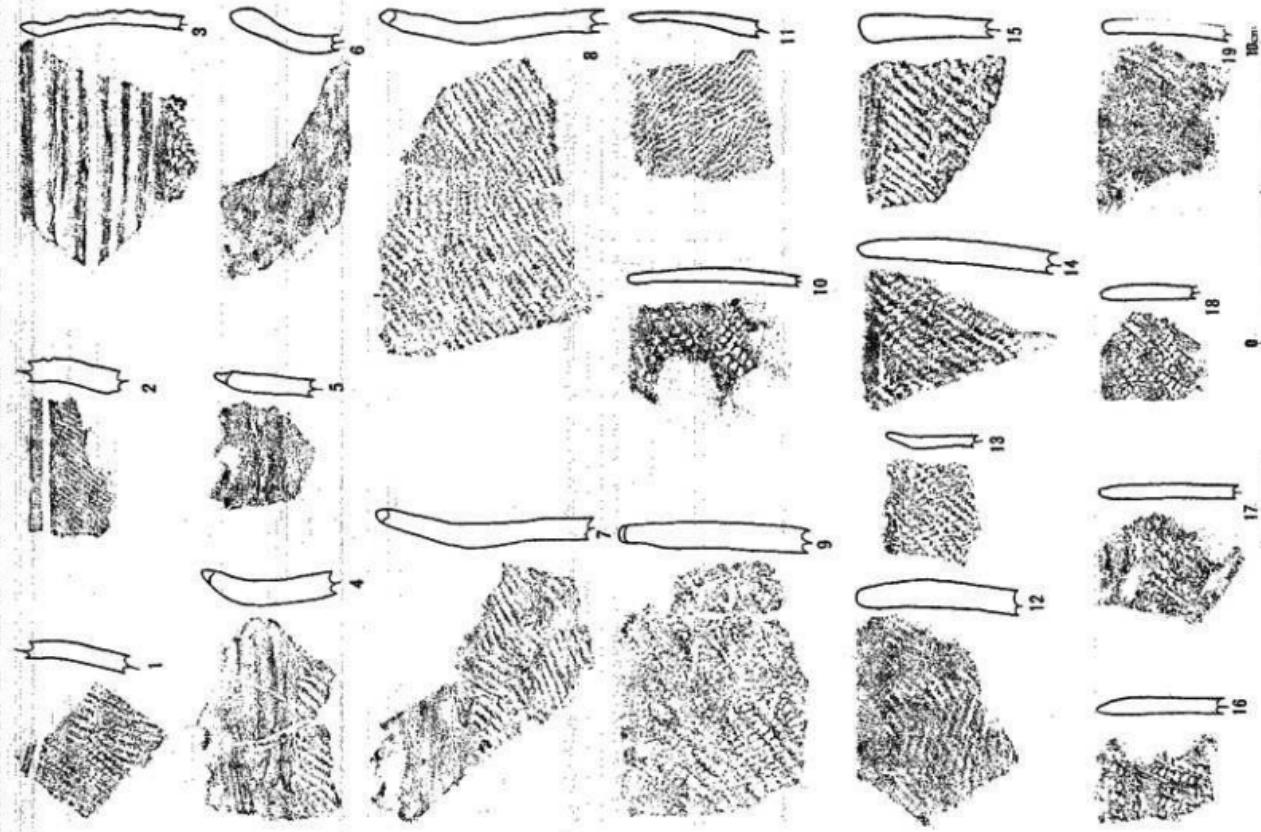
第6図 繩文時代土器拓影(1)

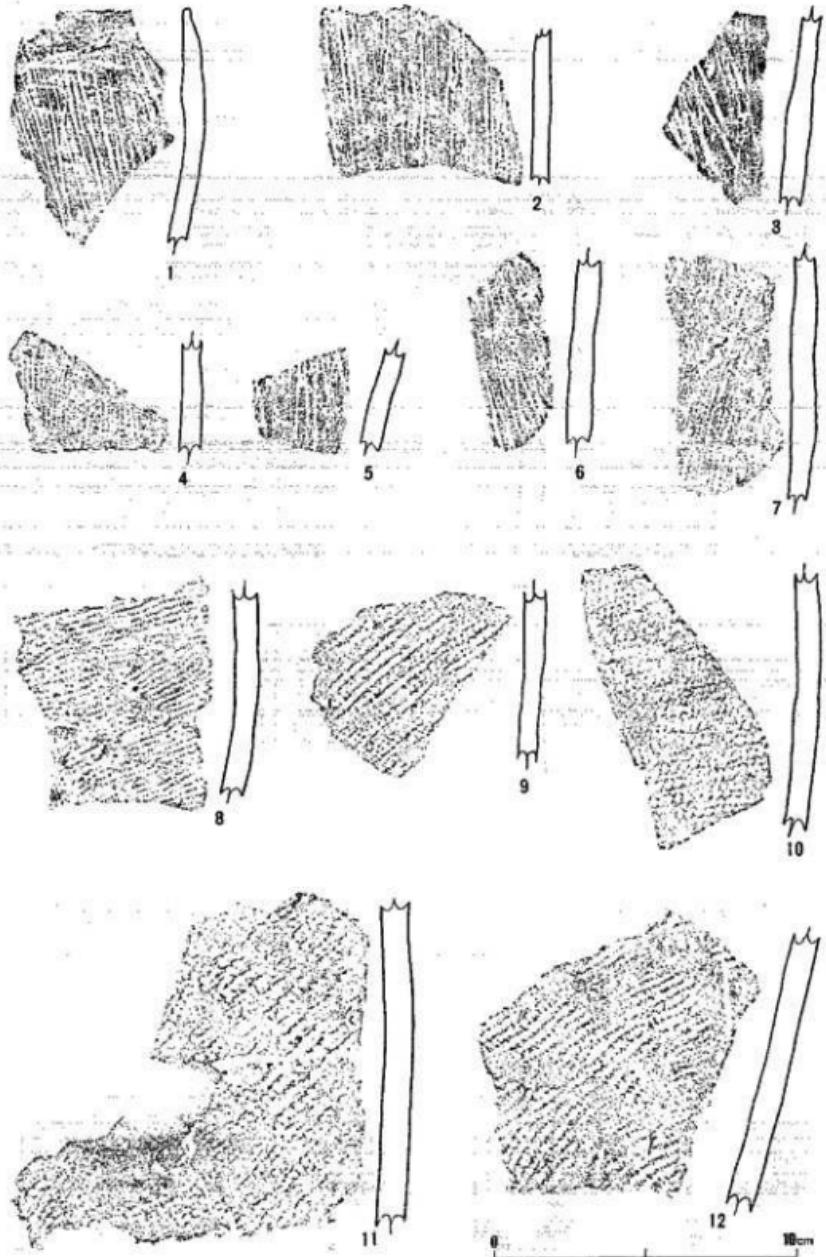


第7圖 繩文時代土器環影(2)

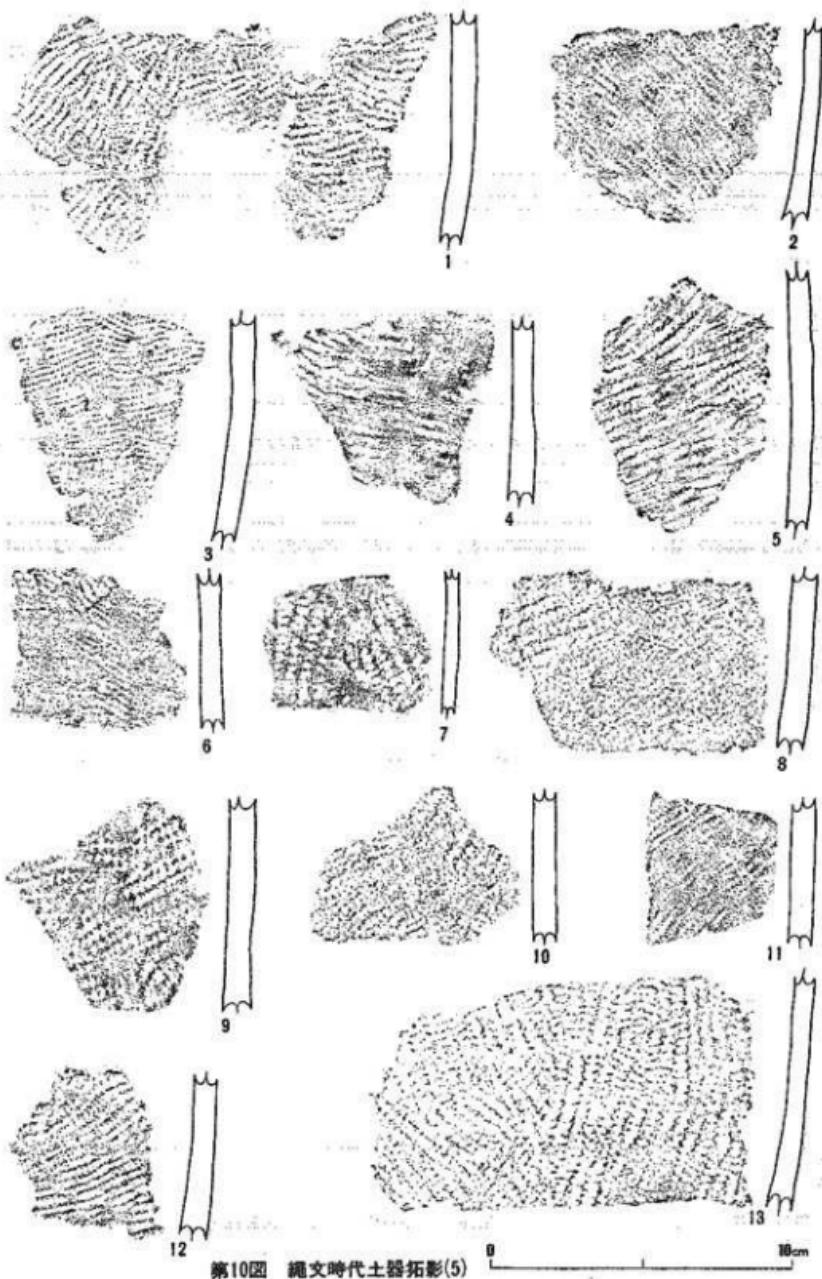


第8図 繩文時代土器拓影(3)

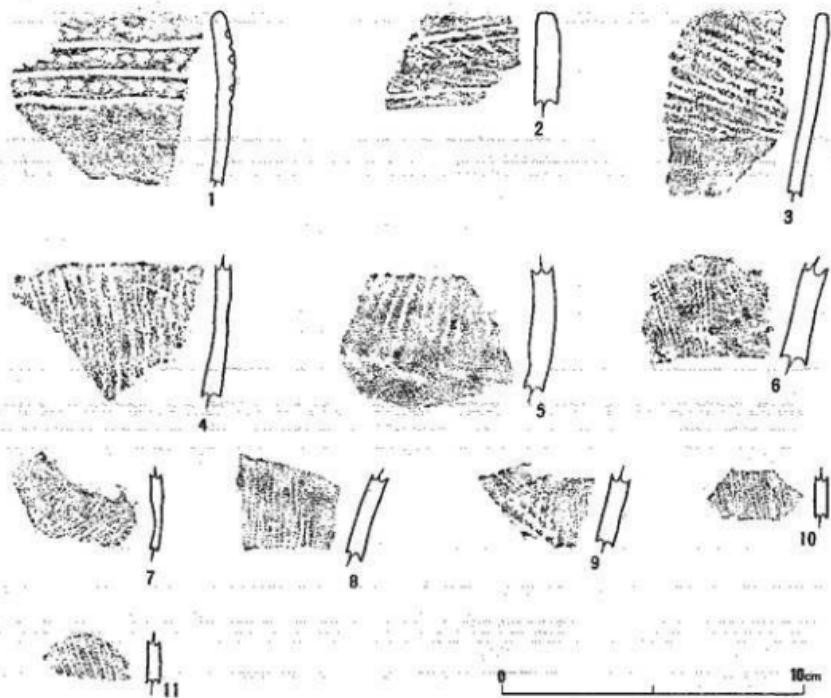




第9図 縄文時代土器拓影(4)



第10図 縄文時代土器拓影(5)



第11図 弥生時代土器拓影

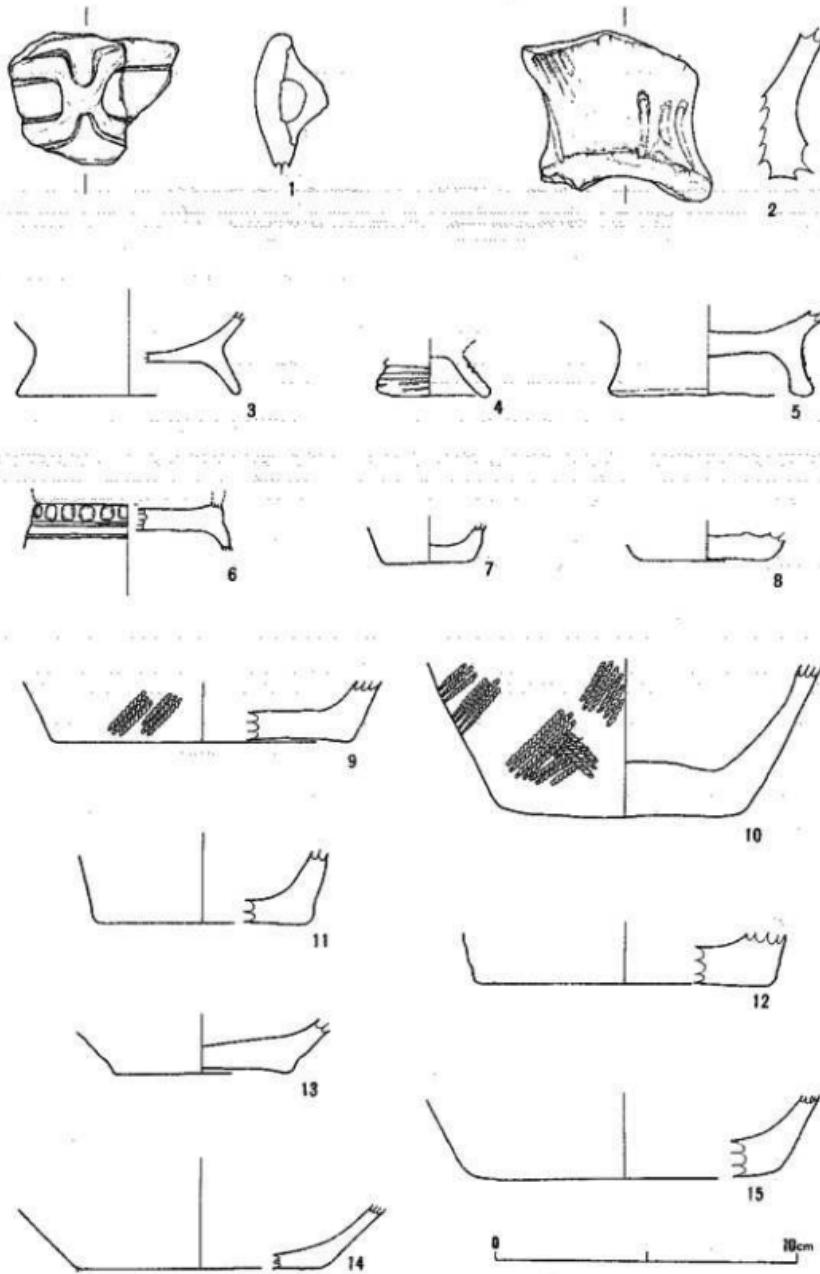
第14図1、最大長24mm、最大幅12mm、最大厚4mm、有茎の石鎌である。両面に丹念な整形のための剥離が施されるが、一方の面中央に第1次剥離面が残される。

第14図2、最大長40mm、最大幅13mm、最大厚4mm、有茎の石鎌であるが、本体から基部を作出するための抉り込み部分がさ程顯著ではない。

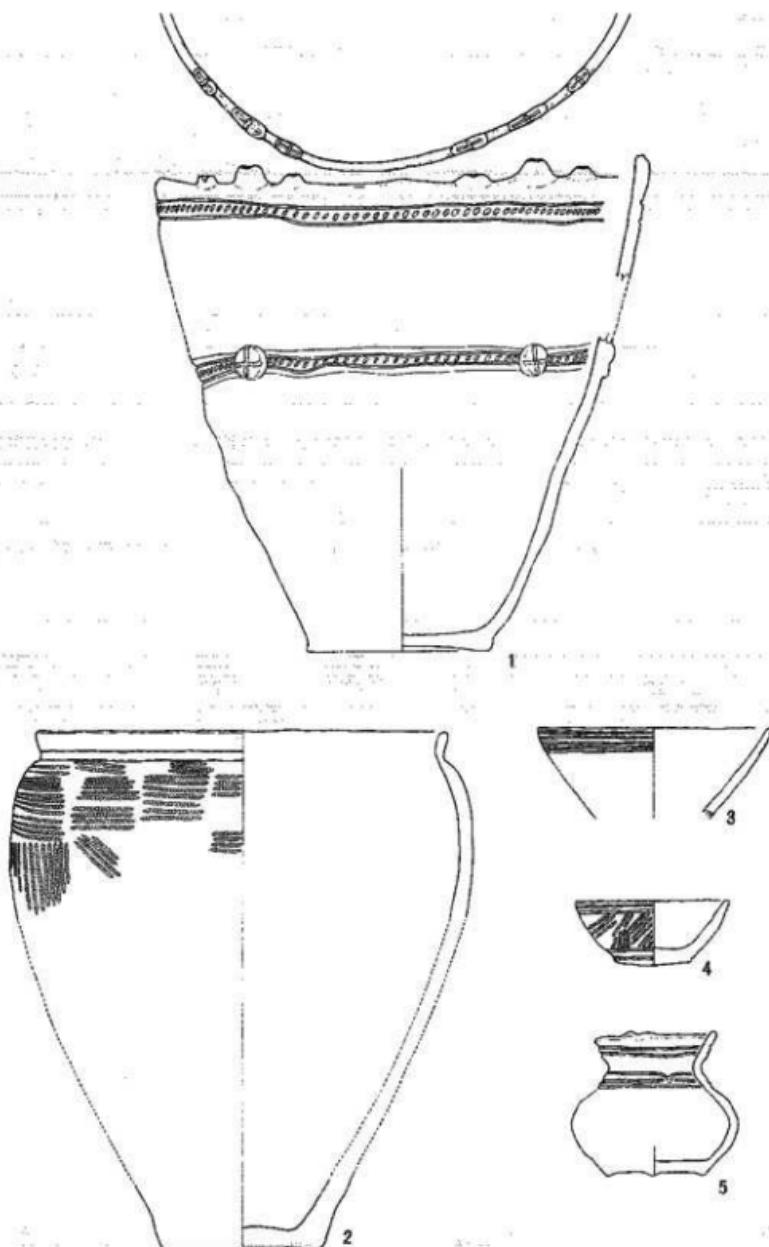
第14図3、最大長39mm、最大幅65mm、最大厚10mm、横形の石匙である。刃部の作出は本体部分底辺で顯著であるが、ほぼ全周に亘って行われている。つまみ部分は第1次剥片の打面近くに作出されているが、背面からのつまみ部作出のための抉りは、第1次剥片の打瘤剥除の効果も合わせて行われている。

剥片には、第14図4、第15図2、8のように第1次剥片に若干の調査剥離を施したものもある。

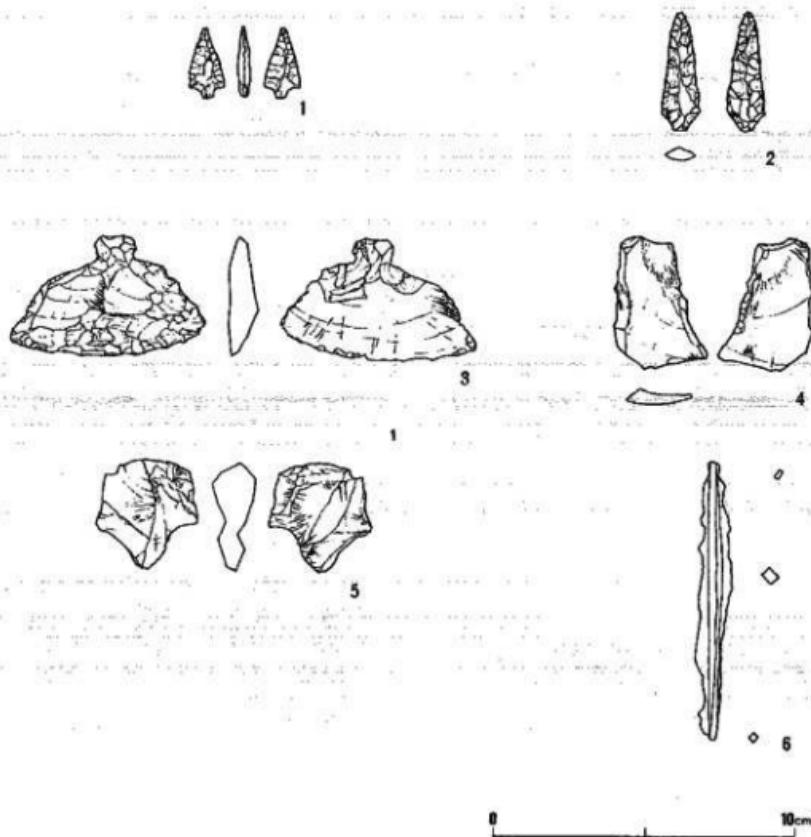
他に、縄文時代のものではないが、断面形が四角形の釘状の鉄製品も出土している。



第12図 繩文時代土器実測図(1)



第18図 縄文時代土器実測図(2)



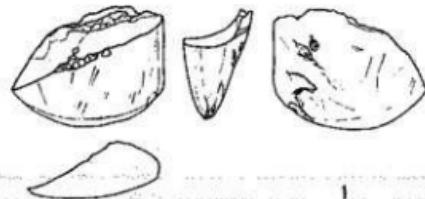
第14図 トレンチ調査区内出土石器・鉄器実測図

## (2) 弥生時代

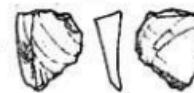
弥生時代の遺物も、縄文時代のものと同様、遺構内から出土したものではなく、縄文時代の遺物に混じって出土したものである。

第11図1は、口縁に3条の平行沈線と刺突列の文様帶が設けられている。口唇上には、縄軸の絡織体による撚糸文が施されている。2は、同じく縄軸の絡織体が施された後に、口縁に沿った平行沈線と斜位の刺突による文様が描かれている。3は、口縁4cm程度の間にやはり縄軸の絡織体が施され、以下無文研磨されている。

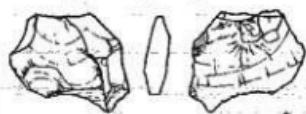
4～11は、同様縄軸の絡織体が施された胸部破片であるが、この類の土器には6、8のように絡織体が単位をなして施されるものもある。



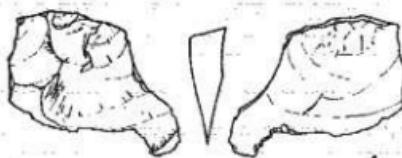
1



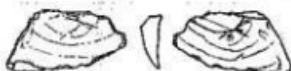
2



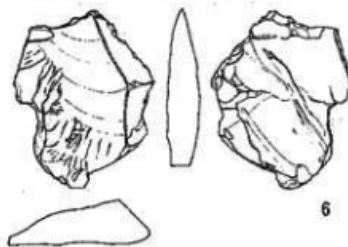
3



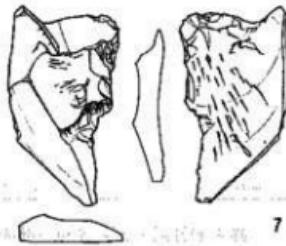
4



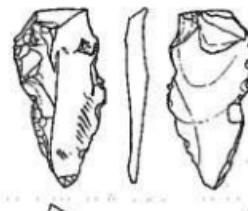
5



6



7



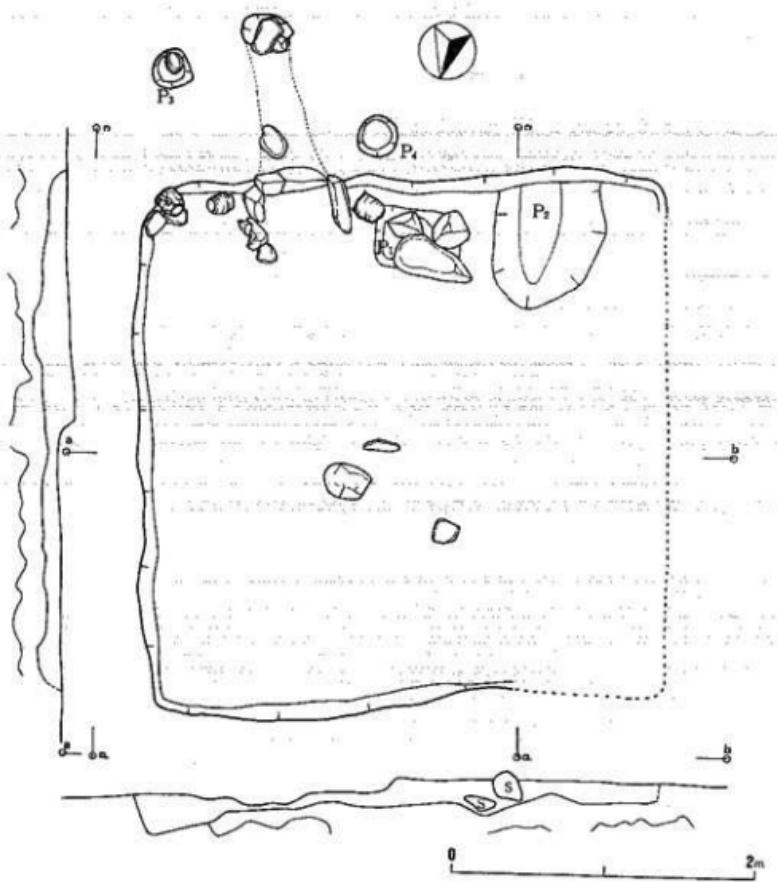
8



第15図 造橋外出土石器実測図

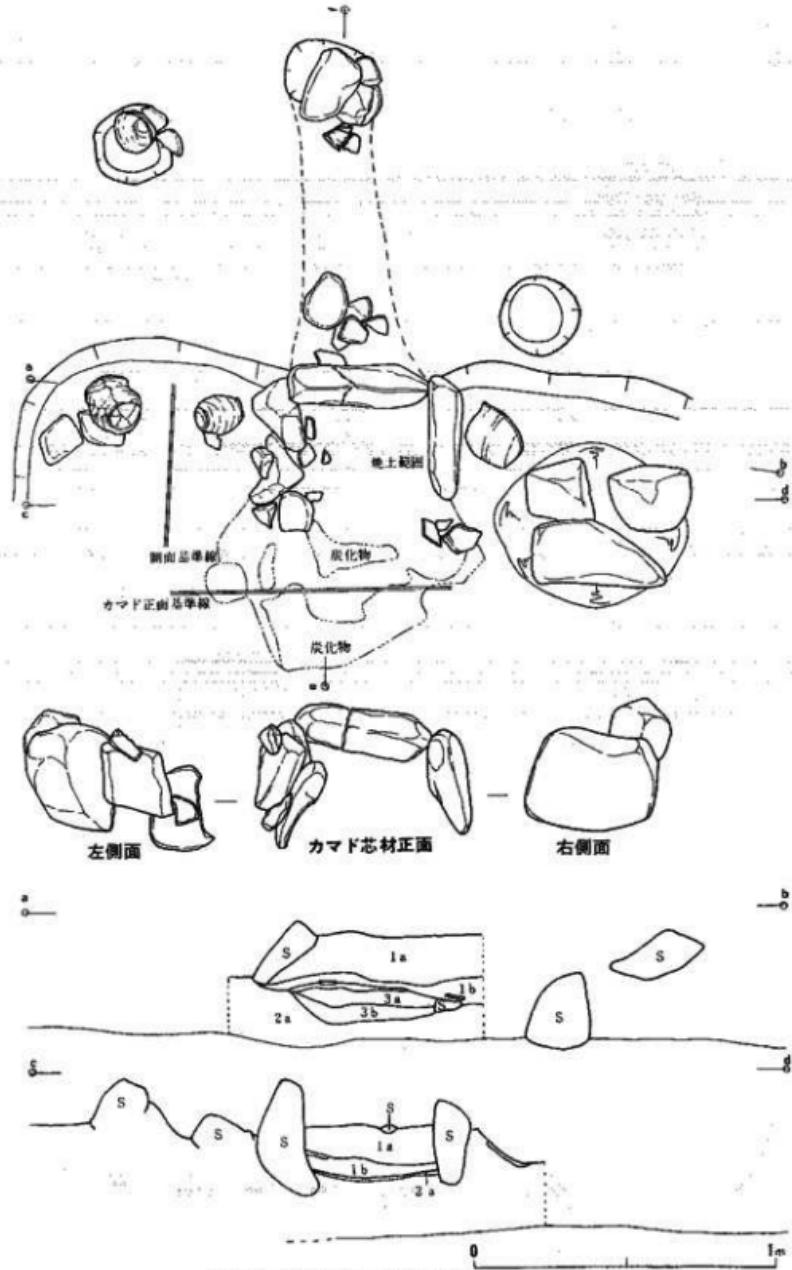
第1表 第1号住居跡観察表

第1号住居跡		神 國 圖 版	16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23	
推 出 区		17-C, 18-C, 17-B, 18-B		
		東 領	西 領	南 領
法	壁 長	360	370	358
壁 高	36	—	26.7	348
層	層高標	—	—	—
層	層高深	—	—	—
面	積	(12,300m <sup>2</sup> )	—	—
主 検 方 位	N-16-W	形 習	方 形	—
構 造 状 況	17-Cグリット瓦葺屋上面の精査により先ずカマド煙突孔の焼上及び煙突孔を覆う円錐を検出し、次いで住居跡南壁及び東壁のプランを検出した。しかし西壁及び北壁のプラン一部は操作のため壊わされており、正確なプランを検出できず、南壁及び東壁から大体の規模を概定して遺構内の精査を行った。また、住居跡アランの検出と同時にカマド芯材の一部と小形の甕2個体を検出している。			
地 壟 土	10Y R 3% 單褐色 色のパミスを2~5%含み、炭化物1%程度含む。 住居跡内複土中にパミスが含まれているため、住居跡外との識別の目安となった。しかし水田耕作の影響で全体にグライ化が進み、色調の点では殆どその差異はないといつてよい。 遺物は十脚器片が複土中に含まれていた他、炭化物は複土の下層に多い。			
壁	西壁及び北壁の一部は検出できず。 南壁及び東壁で床面との傾斜角108°~131°を計る。壁等の遺物は検出していない。			
床	非常に脆弱な面であり、貼床等の施設も施されない。カマド熱効部付近では炭化物、焼土の広がりが認められる。			
ビ ッ ツ	P <sub>1</sub> 65×55×15.5cm カマド西側に位置し、ピット内複土から多量の土器片が出土している。 P <sub>2</sub> 43×37×19cm 住居跡南壁裏面に位置し、焼上付被された状態で検出 P <sub>3</sub> 27×28×45cm カマド煙道東側から検出 P <sub>4</sub> 25×26×38cm 煙道西側南壁近くに検出 住居跡内に柱穴と思われるピットを確認することはできなかった。			
位 置	南壁東寄り			
カ	1a 10Y R 3% 單褐色 住居跡内複土			
マ	1b 5 Y R 3% 赤褐色 カマド天井部からの崩落した焼土 1c 10Y R 3% 單褐色 若干の焼土粒を含む			
ド	2a 10Y R 3% 黒色 炭化物層 2b 10Y R 3% 黑褐色 炭化物 層上部を含む 3a 7.5 Y R 3% 明褐色 粘質 燃焼部の焼土層 3b 5 Y R 3% 明赤褐色 10mm程度の礫を含む焼土層			
遺 物	複土中の遺物は、カマドを中心とした住居跡内南側に主に分布している。 カマド東側からは小形の甕2個体、煙道東側のP <sub>3</sub> から環が1個体ほぼ完形の状態で出土している。その他複土からは土器器蓋、甕、坏が出土し、それらに混じて繩文土器片も出土している。土器以外にはフイゴの羽口の出土があげられる。			

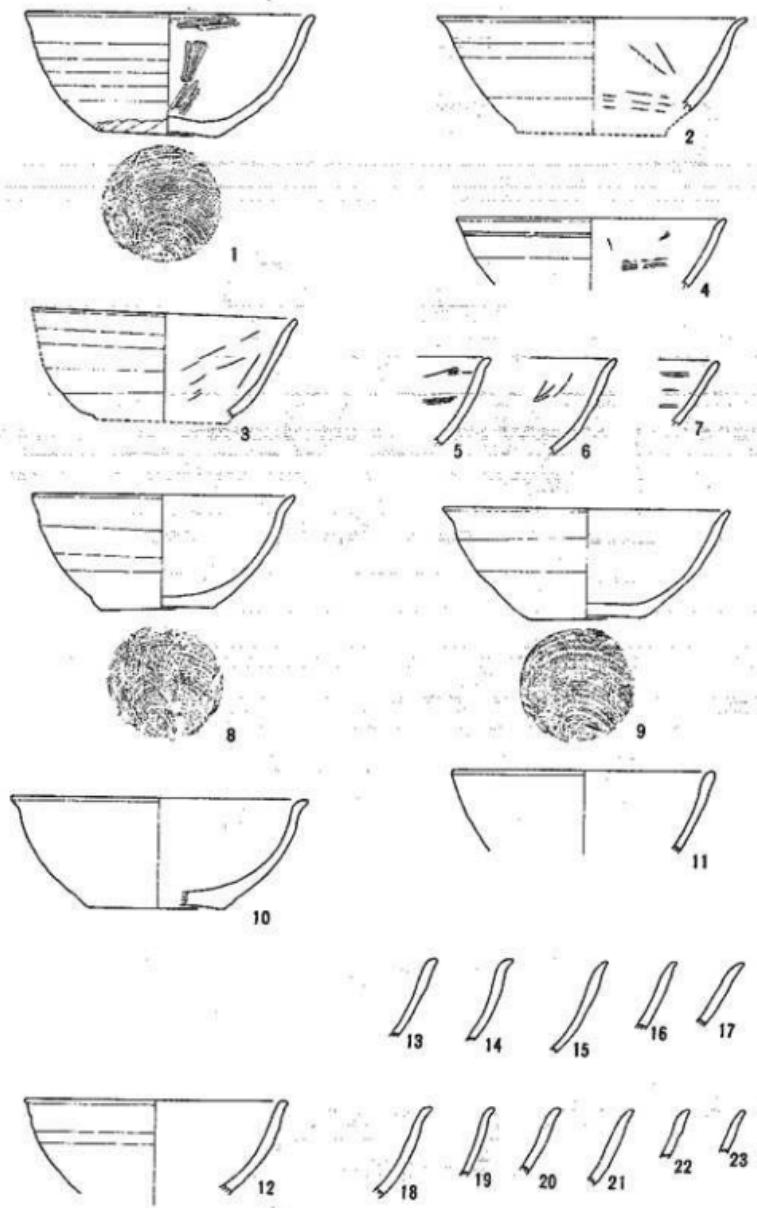


カマド縦断面

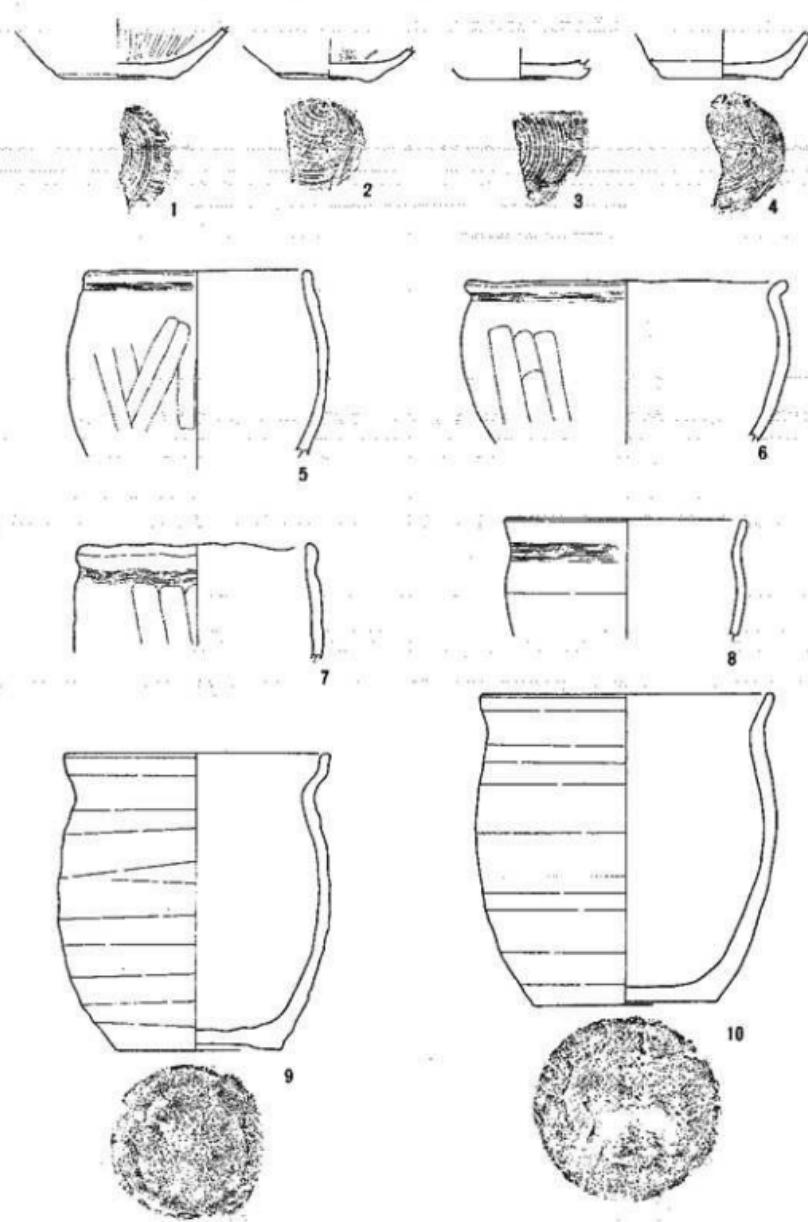
第16図 第1号住居跡



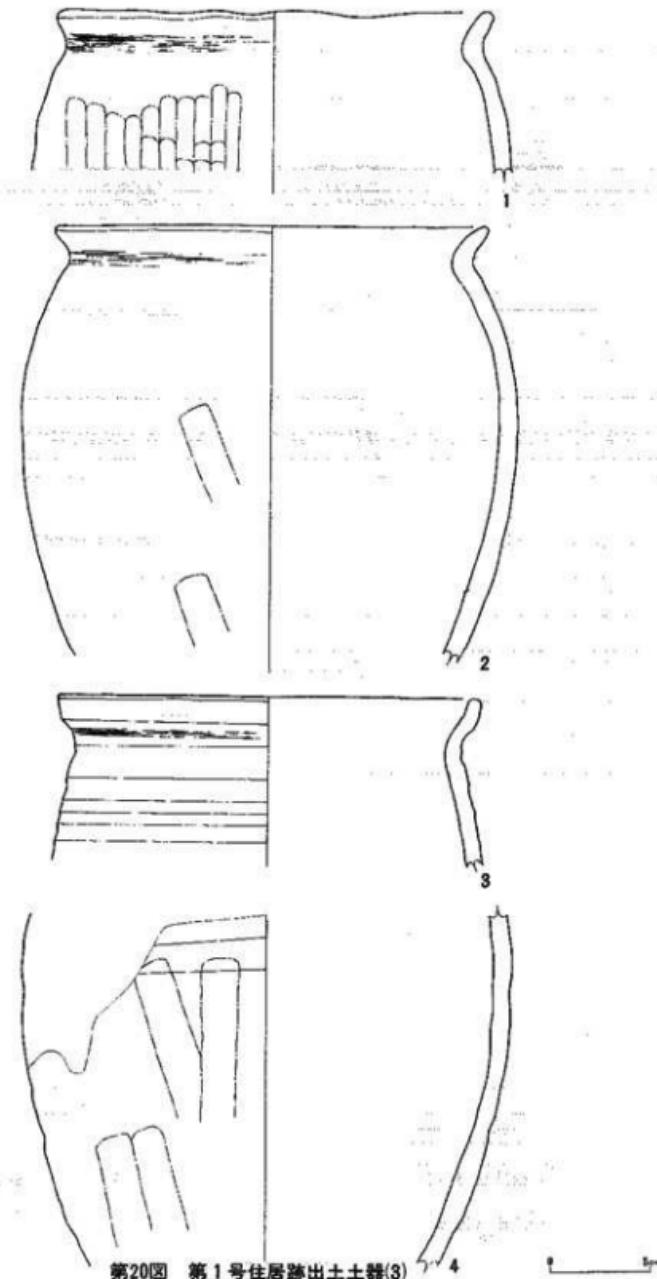
第17図 第1号住居跡カマド



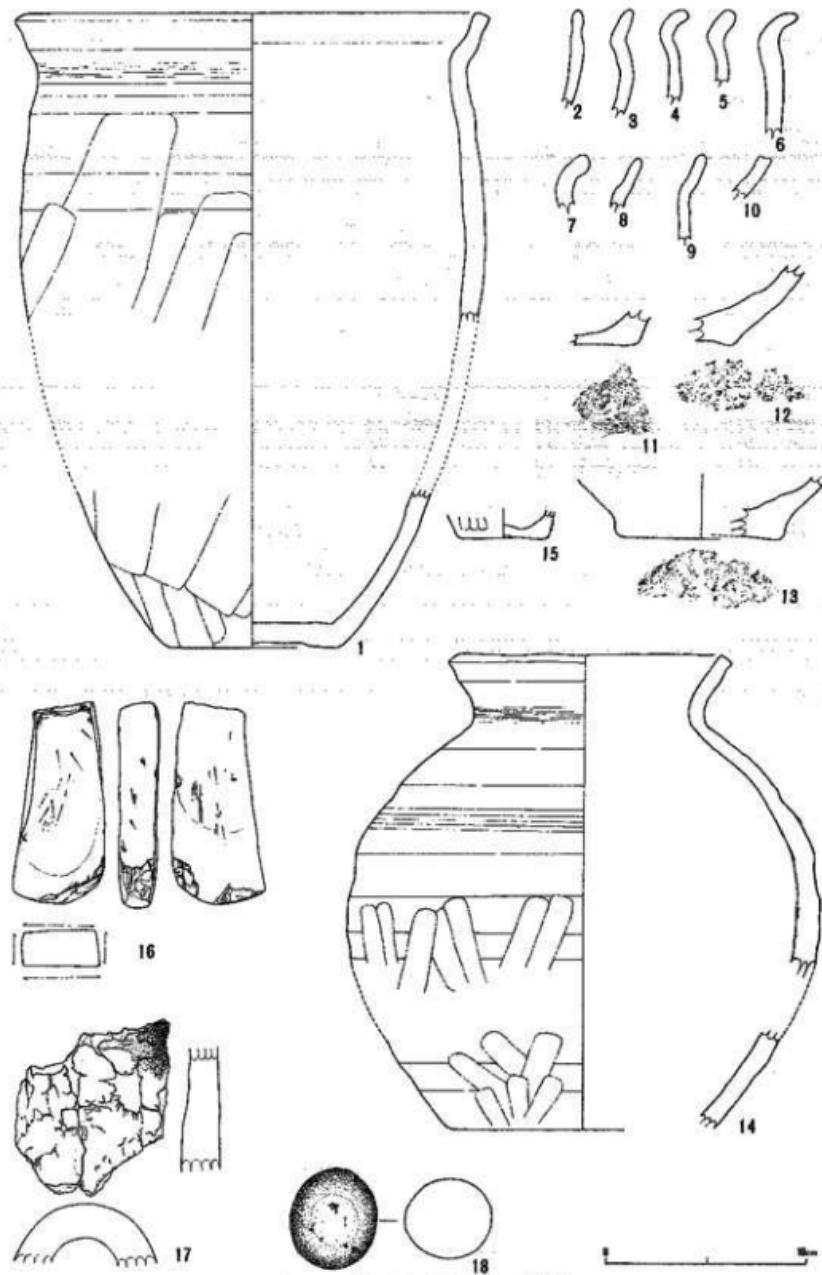
第18図 第1号住居跡出土土器(1)



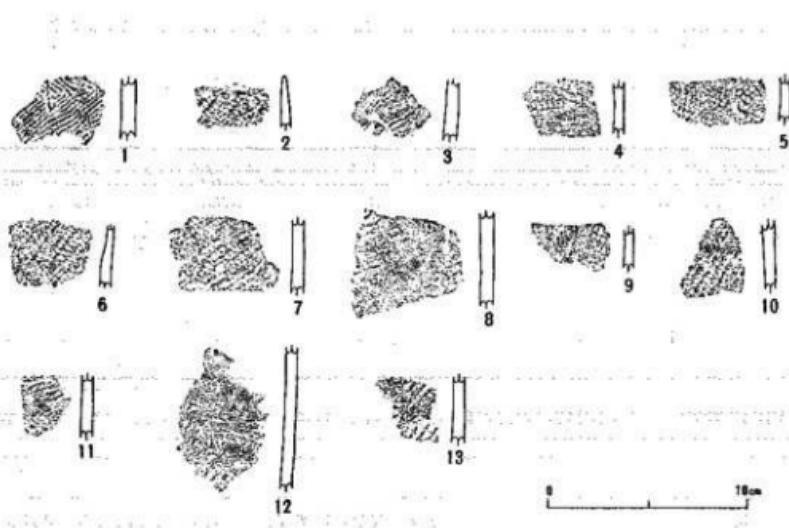
第19図 第1号住居跡出土土器(2)



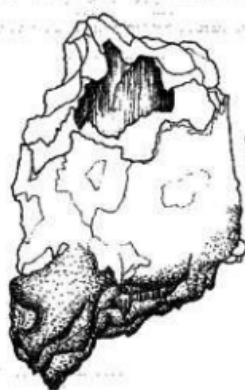
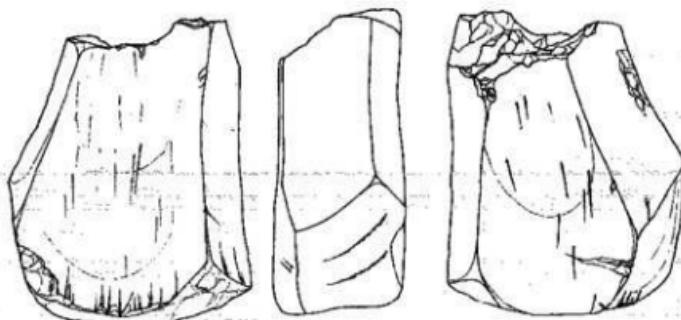
第20図 第1号住居跡出土土器(3)



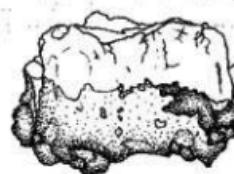
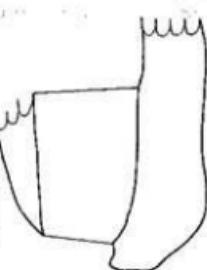
第21図 第1号住居跡出土土器(4)



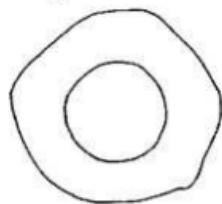
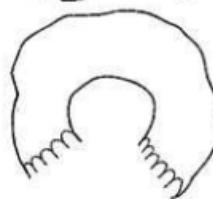
第22図 第1号住居跡出土土器拓影



2



3



0 10cm

第23図 第1号住居跡出土石器・土製品

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

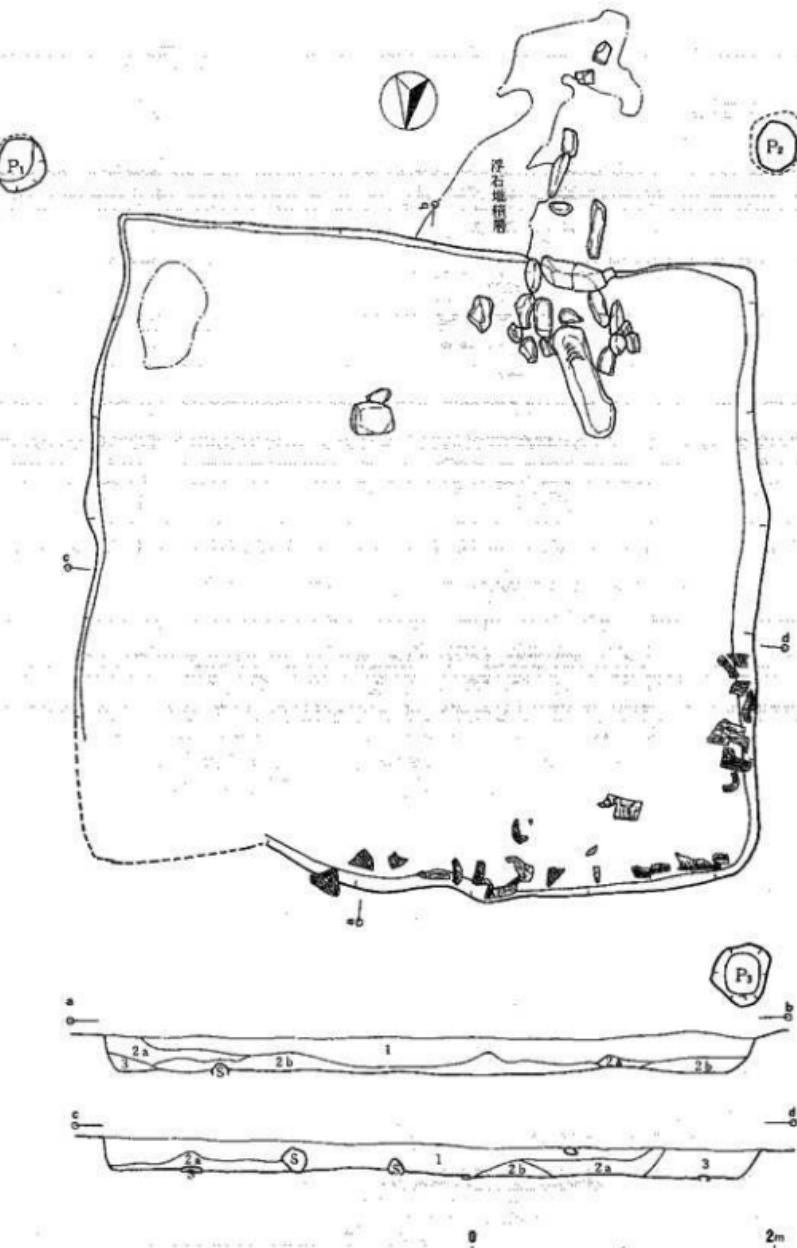
標 番 号	出 土 地 点	器形	部 位	法 量 (cm)			綱 要 (地文)	底 面	底 形	色 調	胎 土	施成		
				口 径	体 径	底 径								
18-1	第1号 住居跡	环	口縁～底 部	14.3		5.9	6.0	ナシ ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水焼き	灰褐色	やや砂粒を 含む	良好	
18-2	第1号 住居跡	环	口縁～底 部	15.4		( 7.4 )	( 5.8 )	ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水焼き	淡黄褐色	砂粒を含む	良好	
18-3	第1号 住居跡	环	口 縁	( 13.1 )		( 6.5 )	( 5.4 )	ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水焼き	にじい褐色 色	砂粒を含む	良好	
18-4	第1号 住居跡	环	口 縁	( 13.4 )				ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 7.5 YR )	稍	適	良好
18-5	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 7.5 YR )	稍	適	良好
18-6	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 7.5 YR )	稍	適	良好
18-7	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 7.5 YR )	稍	適	良好
18-8	第1号 住居跡	环		13.0		5.6	5.7	ナシ ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水焼き	淡黄褐色	砂粒を含む	良好	
18-9	第1号 住居跡	环	(口縁の 内欠損)	14.2		5.5	5.5	ナシ ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水焼き	淡黄褐色	砂粒を含む	良好	
18-10	第1号 住居跡	环	口縁～底 部	( 16.8 )		( 6.8 )	5.5	ナシ ロクロ回転糸切り	ナシ	ロクロ水焼き	にじい褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む	良好	
18-11	第1号 住居跡	环	口 縁	( 13.2 )				ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	中黄褐色 ( 10 YR )	砂粒を含む	良好	
18-12	第1号 住居跡	环	口 縁	( 13.0 )				ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 7.5 YR )	やや砂粒を 含む	良好	
18-13	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	にじい褐色 ( 5 YR )	細颗粒を含む	良好	
18-14	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	にじい褐色 ( 7.5 YR )	細颗粒を含む	良好	
18-15	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 7.5 YR )	微かに砂粒 を含む	良好	
18-16	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	にじい褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む	良好	
18-17	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 10 YR )	やや砂粒を 含む	良好	
18-18	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む	良好	
18-19	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	にじい褐色 ( 7.5 YR )	細颗粒を含む	良好	
18-20	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む	良好	
18-21	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 10 YR )	砂粒を含む	良好	
18-22	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	にじい褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む	良好	
18-23	第1号 住居跡	环	口 縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	にじい褐色 ( 7.5 YR )	細颗粒を含む	良好	
19-1	第1号 住居跡	环	底 部			( 5.6 )		ヘラケズリ ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 7.5 YR )	稍	適	良好
19-2	第1号 住居跡	环	底 部			4.4		ナシ ロクロ回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロ水焼き	淡黄褐色 ( 7.5 YR )	稍	適	良好

第3表 第1号住居跡出土遺物観察表

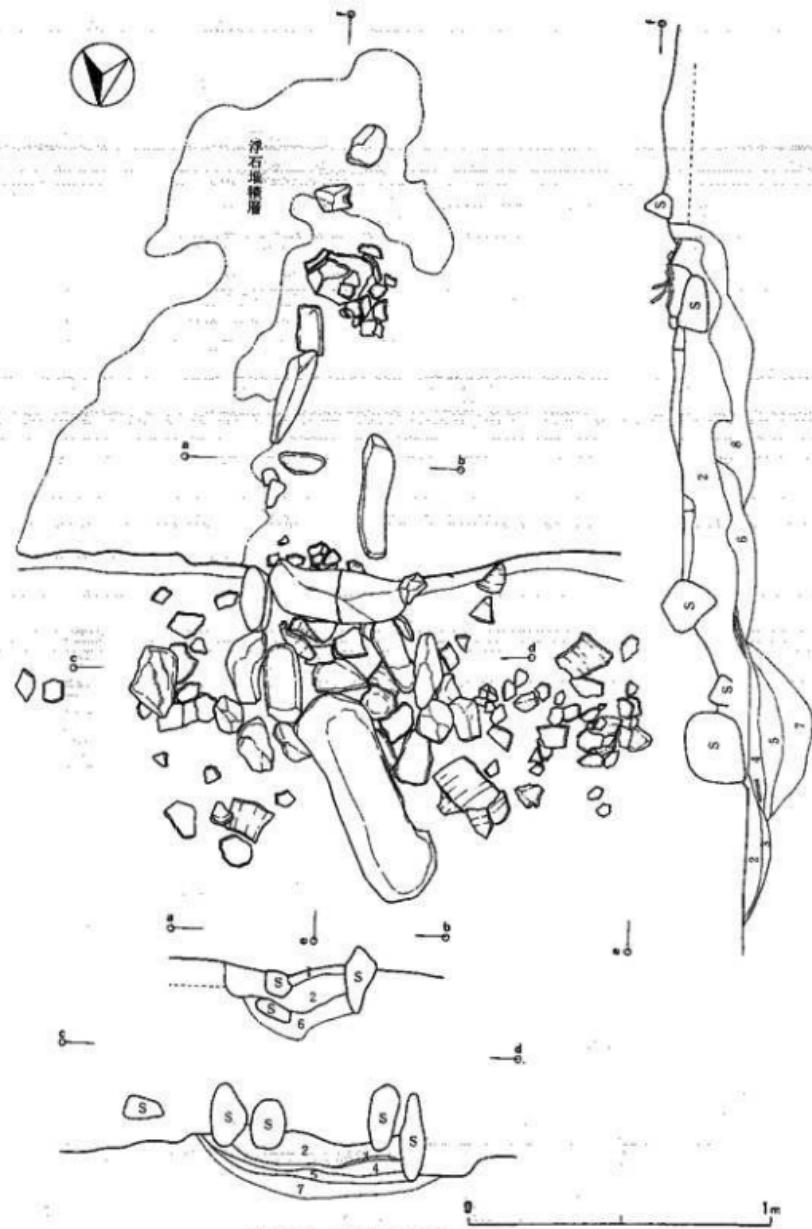
標 番 号	出 土 地 点	形 狀	部 位	寸 法 (cm)		調 査(地文)		成 形	色 調	砂 土	地 成	
				口 径	体 径	底 径	厚 さ					
19-3	第1号 住居跡	环	底 部			( 5.8 )		ナシ、ロクロ 凹板有切り	ナシ	ロクロ水焼き	淡褐色 ( 5 YR )	粘 土 良好
19-4	第1号 住居跡	环	底 部			( 6.0 )		ナシ、ロクロ 凹板有切り	ナシ	ロクロ水焼き	淡黃褐色 ( 7.5 YR )	粘 土 良好
19-5	第1号 住居跡の 壁	小形	口 線	(11.2)	(13.0)			ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	灰褐色一般色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む 良好
19-6	第1号 住居跡	環	口 線	(16.0)	(16.3)			ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	に近い黄褐色 ( 10 YR )	砂粒を含む 良好
19-7	第1号 住居跡	小形	口 線	(11.9)	(13.4)			ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	に近い褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む 良好
19-8	第1号 住居跡の 壁	小形	口 線	(11.9)	(12.0)			ナシ	ナシ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡黃褐色	砂粒を含む 良好
19-9	第1号 住居跡の 壁	(口縫一部 にかけて一部 欠損)		13.2	13.5	8.1	14.8	ナシ、砂底	ナシ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡黃褐色 一般色	砂粒を含む 良好
19-10	第1号 住居跡	小形	(瓶部一部 と底部の一部 が欠損)	14.5	15.0	10.1	15.5	ナシ、砂底	ナシ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡黃褐色	砂粒を含む 良好
20-1	第1号 住居跡	環	口 線	(21.6)				ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	に近い黄褐色 ( 10 YR )	砂粒を含む 良好
20-2	第1号 住居跡	環	口縫～脚部	(21.4)	(24.5)			ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	淡黃褐色 に近い褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む 良好
20-3	第1号 住居跡	環	口 線	(20.8)				ナシ	ナシ	積み上げ法	淡褐色 ( 5 YR )	砂粒を含む 良好
20-4	第1号 住居跡	環	瓶 部					ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	褐色～褐灰色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む 良好
21-1	第1号 住居跡	環		(23.5)	(23.1)	( 8.5 )	(31.8)	ナシ、 ヘラケズリ 砂底	ナシ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡黃褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む 良好
21-2	第1号 住居跡	環	口 線					ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	に近い褐色 ( 5 YR )	砂粒を含む 良好
21-3	第1号 住居跡	環	口 線					ナシ	ナシ	積み上げ法	に近い褐色	砂粒を含む 良好
21-4	第1号 住居跡	環	口 線					ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	に近い褐色 ( 5 YR )	砂粒を含む 良好
21-5	第1号 住居跡	環	口 線					ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	灰白色 ( 5 YR )	砂粒を含む 良好
21-6	第1号 住居跡	環	口 線					ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	淡黃褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む 良好
21-7	第1号 住居跡	環	口 線					ナシ	ナシ	積み上げ法	に近い黃褐色 ( 10 YR )	砂粒を含む 良好
21-8	第1号 住居跡	環	口 線					ナシ	ナシ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡黃褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む 良好
21-9	第1号 住居跡	環	口 線					ナシ	ナシ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡褐色 ( 5 YR )	砂粒を含む 良好
21-10	第1号 住居跡	環	口 線					ナシ	ナシ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡黃褐色	砂粒を含む 良好
21-11	第1号 住居跡	環	底 部					ヘラケズリ、 木製丸	ナシ	積み上げ法	灰白色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む 良好
21-12	第1号 住居跡	環	底 部					ナシ、ヘラケ ズリ、木製丸	ナシ	積み上げ法	淡黃褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む 良好
21-13	第1号 住居跡	環	底 部					ナシ、木製丸	ナシ	積み上げ法	に近い褐色 ( 7.5 YR )	砂粒を含む 良好
21-14	第1号 住居跡	環	口縫～脚部 (瓶部欠損)	14.0	(23.6)	(13.1)	(23.8)	ナシ、 ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	に近い黃褐色	粘 土 良好
21-15	第1号 住居跡	环	底 部			4.6		ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	に近い黃褐色 ( 10 YR )	砂粒を含む 良好

第4表 第2号住居跡観察表

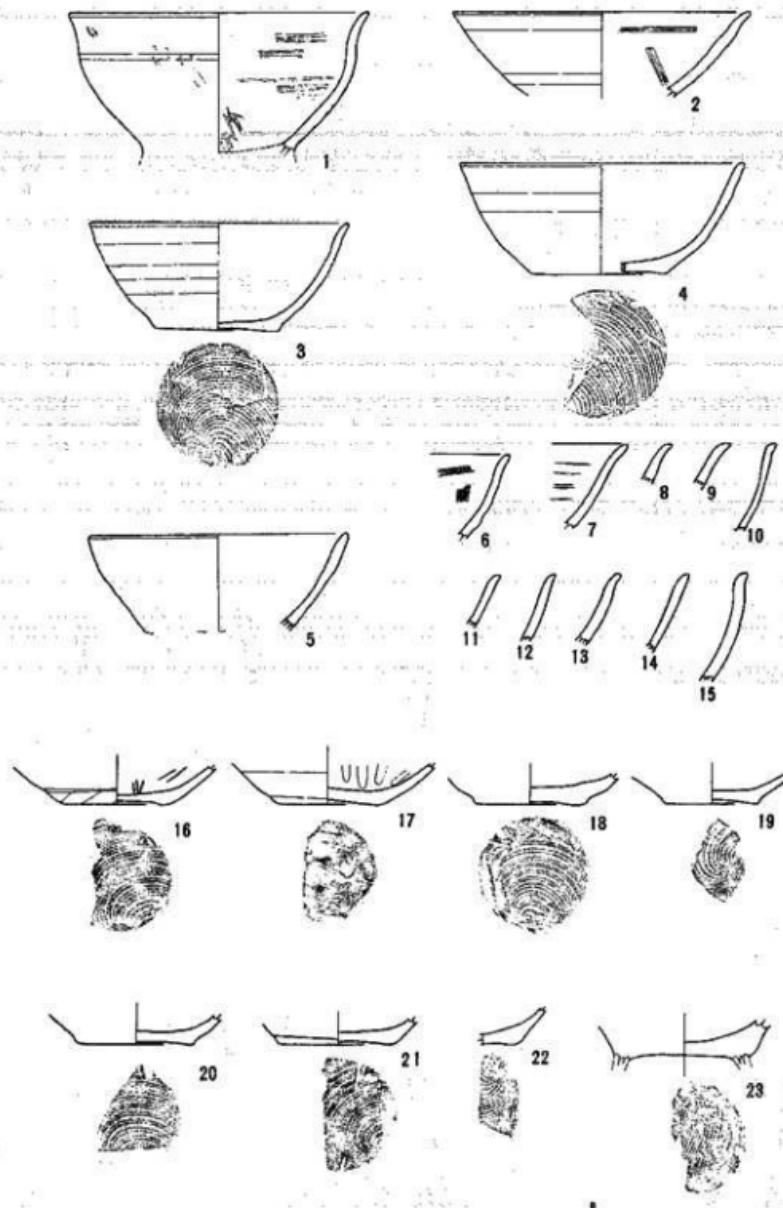
第2号住居跡		地図 図版	24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34 7, 8, 16, 17, 18, 19
検出区	14-A, 14-B, 13-B		
法	東壁	西壁	南壁
壁長	4380	436	446
壁高	23.0	20.0	28.5
周溝幅	—	—	—
周溝深	—	—	—
面積	18.54m <sup>2</sup>		
主軸方位	N-0.5°-E	形態	方形
確認状況	第IV層上面において、先ずカマド燃焼部・煙道部に用いられた芯材である河原石を抜出し、ついで住居跡輪郭を確認した。確認面である第V層上面はグライ化しており、住居跡内覆土と色調の点で識別するのは困難であったが、住居跡北西隅に坐村に用いられたと考えられる炭化材の一部が露出していたので、カマド東側の壁の一部が浮石を切り込んで構築されていたため大まかな規模の推定は可能であった。住居跡北西隅は水田のため調査できなかった。		
覆土	1. 10Y R 5° に近い黄褐色 バミス混入 孔隙多 2a. 10Y R 5° 暗褐色 錫石 2~3%混入 若干の燒土粒を含む 2b. 10Y R 5° 暗褐色 錫石若干量混入 孔隙少く緻密っている 3. 10Y R 5° 黒褐色 粘性強く孔隙少い 覆土は、全体的に季大程度の埋め多量に含み、赤褐色に変化している個所もある。		
壁	傾斜角97°~118°を計る。 北西隅からは炭化した壁材を検出している。		
床	覆土中から床面直上にかけて径5cm~15cm程度の礫が非常に多い。床面自体は第V層を掘り込んで構築されており、硬くしまった個所は認められない。貼床も認められない。東南隅に白色粘土の堆積が認められ、径40×70cm 厚さ1~13cm、南北方向に長い梢円形プランで検出された。		
ピット	P <sub>1</sub> 32×38×43.0 東南隅外側 P <sub>2</sub> 28×34×34.5 西南隅外側 P <sub>3</sub> 38×40×37.5 西北隅外側 住居跡内外柱穴と思われるピットではなく、P <sub>1</sub> ~P <sub>3</sub> とも住居跡各隔壁際から80cm程度外側に1箇所づつ検出された。覆土はいづれも白色の砂質土が多く混入する。		
位置	南壁西寄り		
カ	1. 10Y R 5° 暗褐色 粘質 砂質含む 2. 7.5Y R 5° 暗褐色 砂質 孔隙多 3. 10Y R 5° 黒褐色 粘質 孔隙少 4. 7.5Y R 5° 暗褐色 烧土粒含む 5. 7.5Y R 5° 明褐色 砂質 6. 7.5Y R 5° 暗褐色 粘質 炭化物含む 7. 7.5Y R 5° 明褐色 烧土 8. 7.5Y R 5° 暗褐色 粘質しまっている		
マ	カマド左右周縁は径20~30cm程度、厚さ8~12cm程度の扁平な石を立てて芯材をしている。燃焼部と煙道部の地、袖部芯材の上には長さ45cm、幅18cm、厚さ18cm程の石が置かれている。焚口前部には、長さ74cm幅20~24cm、厚さ19cm程の長大な河原石が置かれている。煙道部はその掘り方の隔壁に径15~40cm、厚さ7~9cm程度の扁平な石が立てられ燃焼材となっている。		
ド	カマド東側壁、煙道部掘り方は、浮石堆積層を切り込んで構築されているが、この浮石堆積層は自然の間に割った再堆積層の可能性がある。		
備考			



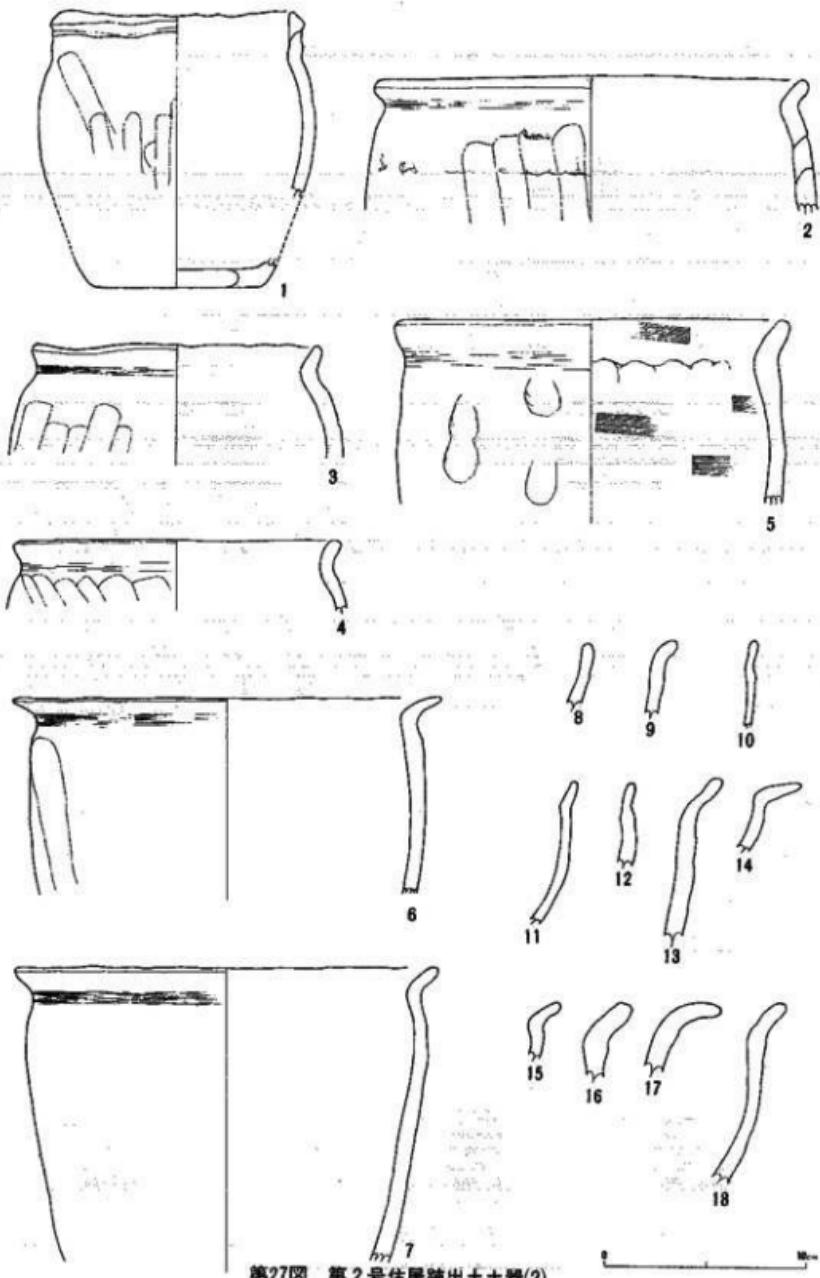
第24図 第2号住居跡



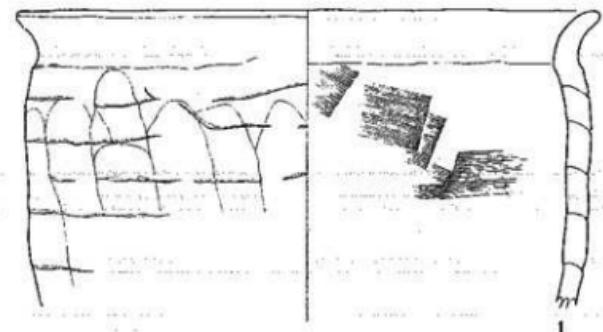
第25図 第2号住居跡カマド



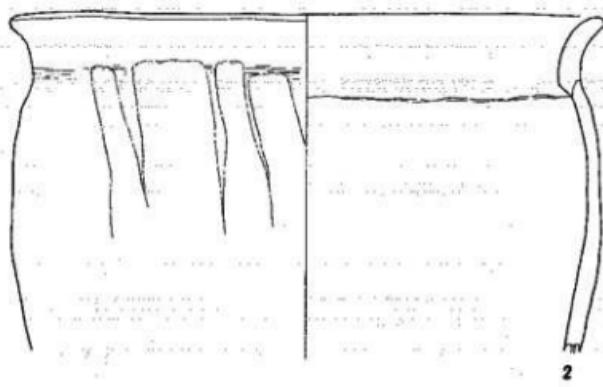
第26図 第2号住居跡出土土器(1)



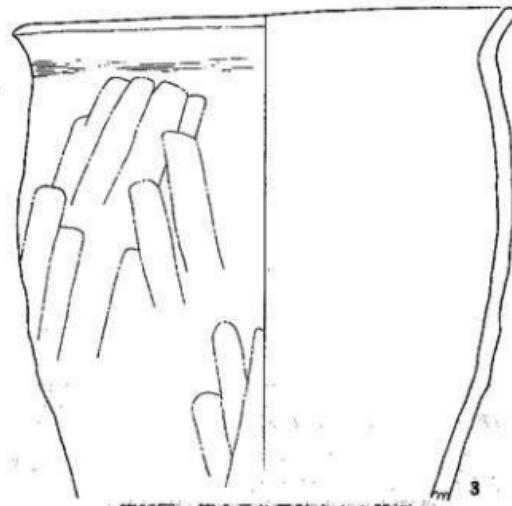
第27図 第2号住居跡出土土器(2)



1

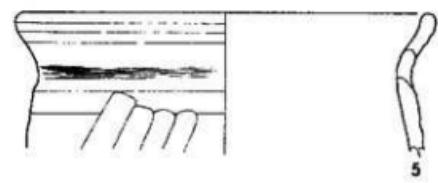
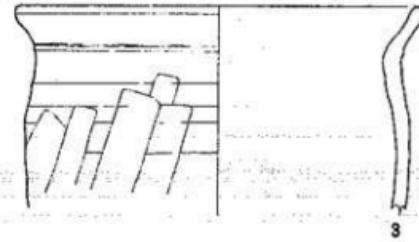
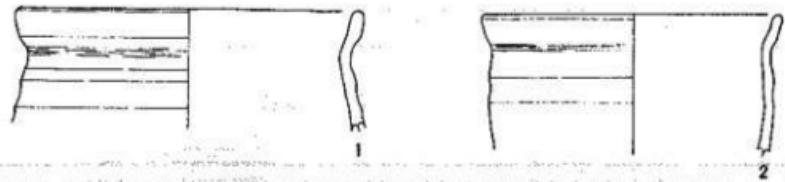


2

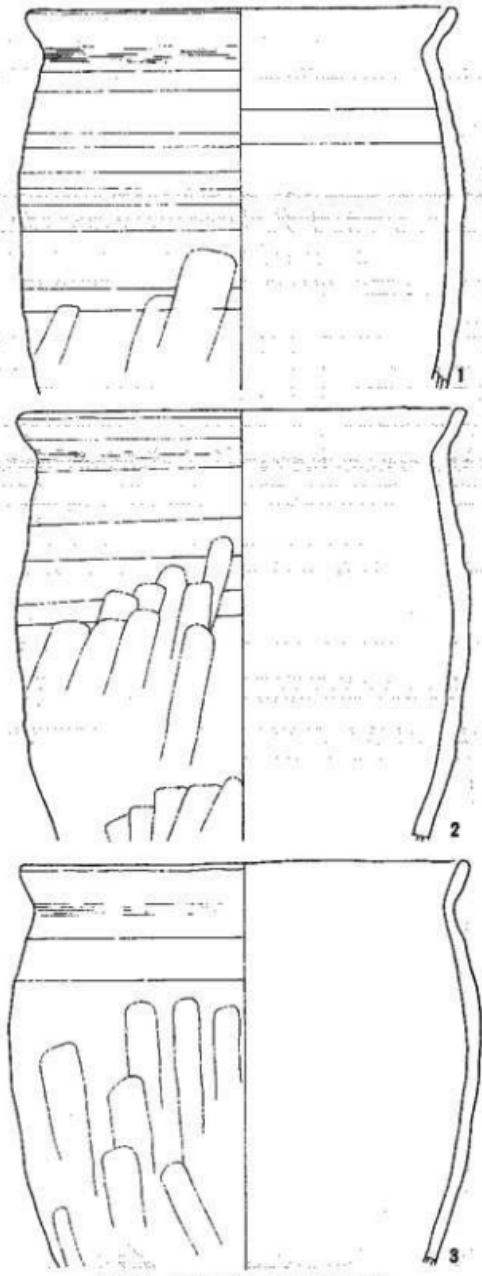


3

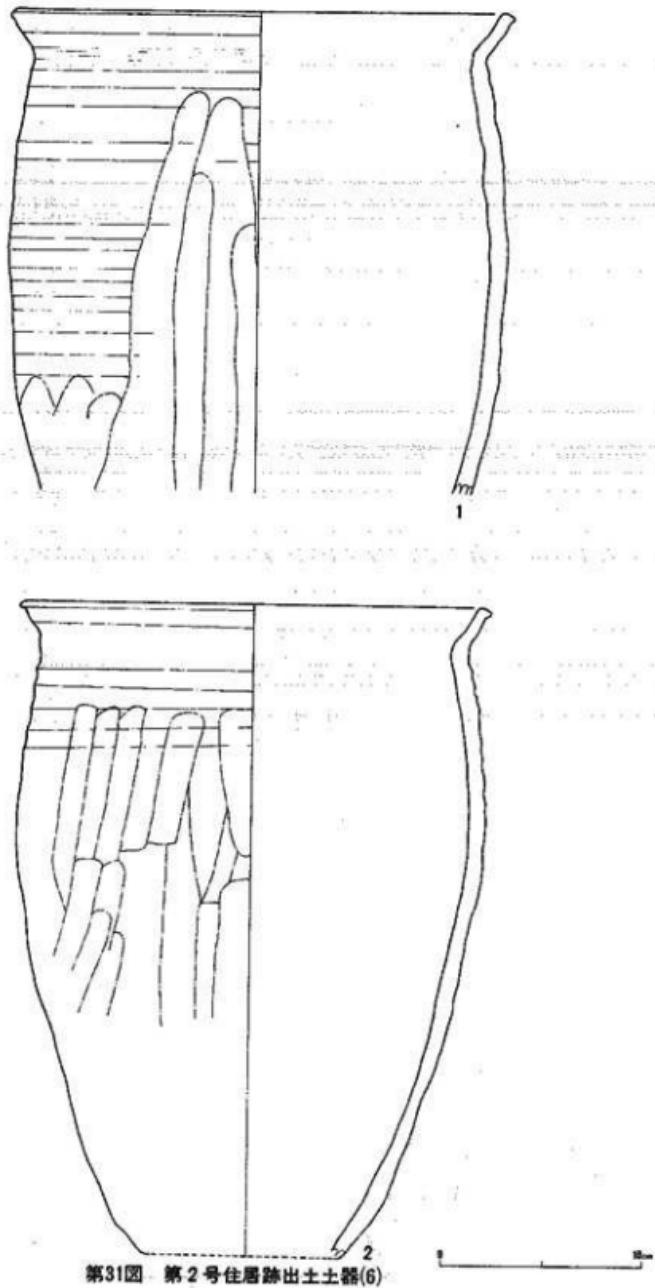
第28図 第2号住居跡出土土器(3)



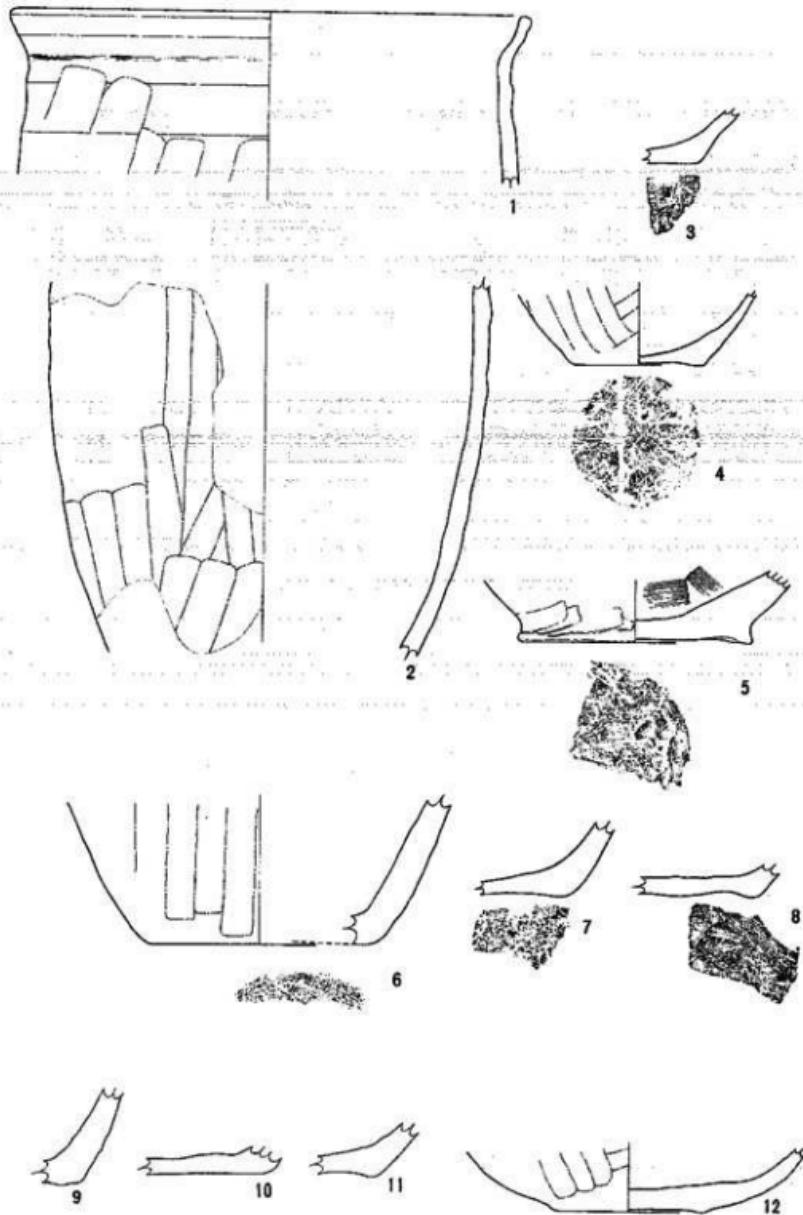
第29図 第2号住居跡出土土器(4)



第30圖 第2号住居跡出土土器(5)...



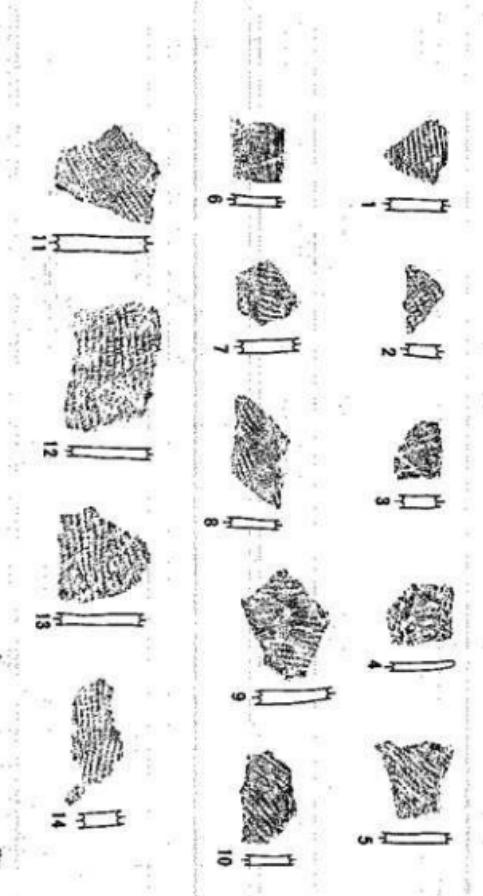
第31図 第2号住居跡出土土器(6)

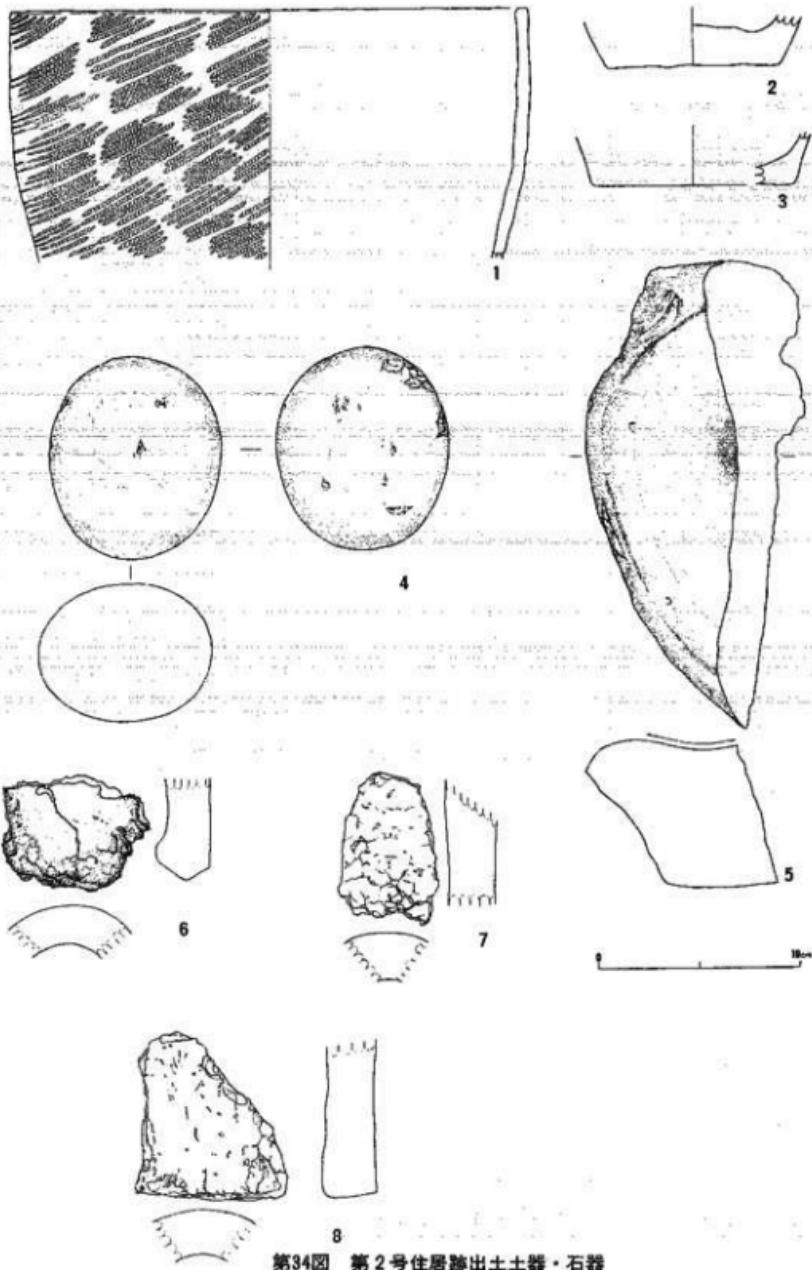


第32図 第2号住居跡出土土器(7)



第38図 第2号住居跡出土土器(8)





第34図 第2号住居跡出土土器・石器

第5表 第2号住居跡出土遺物観察表

序 番 号	出 土 地 点	器形	部 位	法 量(cm)			調 整 部(英文)		成 形	色 調	研 磨	施 工	施 成		
				口 徑	体 径	底 径	高 度	外 面							
26-1	第2号 住居跡 付近	口盤(口縁 一部部にか けて欠損)		14.8				ヘラミガキ(?)	ヘラミガキ 黒色地理	ロクロ 水焼き	オリーブ灰 (10YR)	精	選	良好	
26-2	第2号 住居跡	环	口...縁	(14.8)				ナシ	ヘラミガキ 黒色地理	ロクロ 水焼き	浅黃褐色 (7.5YR)	精	選	良好	
26-3	第2号 住居跡	环		12.9		6.1	5	ナシ、ロクロ回転余切り	ナシ	ロクロ 水焼き	褐色	砂粒を含む		良好	
26-4	第2号 住居跡	环	外...残存	(14.2)	(6.6)	5	ナシ、ロクロ回転余切り	ナシ	ロクロ 水焼き	に赤い褐色 (7.5YR)	砂粒を含む		良好		
26-5	第2号 住居跡	环	口...縁	(13.0)				ナシ	ナシ	ロクロ 水焼き	褐色	砂粒を含む		良好	
26-6	第2号 住居跡	环	口...縁					ナシ	ヘラミガキ 黒色地理	ロクロ 水焼き	淡黄褐色	精	選	良好	
26-7	第2号 住居跡	环	口...縁					ナシ	ヘラミガキ 黒色地理	ロクロ 水焼き	に赤い褐色 (7.5YR)	精	選	良好	
26-8	第2号 住居跡	环	口...縁					ナシ	ナシ	ロクロ 水焼き	深褐色	砂粒を含む		良好	
26-9	第2号 住居跡	环	口...縁					ナシ	ナシ	ロクロ 水焼き	褐色	砂粒を含む		良好	
26-10	第2号 住居跡	环	口...縁					ナシ	ナシ	ロクロ 水焼き	褐色	砂粒を含む		良好	
26-11	第2号 住居跡	环	口...縁					ナシ	ナシ	ロクロ 水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	砂粒を含む		良好	
26-12	第2号 住居跡	环	口...縁					ナシ	ナシ	ロクロ 水焼き	褐色	砂粒を含む		良好	
26-13	第2号 住居跡	环	口...縁					ナシ	ナシ	ロクロ 水焼き	明赤褐色 (5YR)	砂粒を含む		良好	
26-14	第2号 住居跡	环	口...縁					ナシ	ナシ	ロクロ 水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	砂粒を含む		良好	
26-15	第2号 住居跡	环	口...縁					ナシ	ナシ	ロクロ 水焼き	明赤褐色 (5YR)	砂粒を含む		良好	
26-16	第2号 住居跡	环	底...部			5.0		ヘラケズリ、ロクロ回転 余切り	ヘラミガキ 羽色地理	ロクロ 水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	精	選	良好	
26-17	第2号 住居跡	环	底...部			4.9		ヘラケズリ、ロクロ回転 余切りの縁に再開窓	ヘラミガキ 羽色地理	ロクロ 水焼き	淡黃褐色 (5YR)	精	選	良好	
26-18	第2号 住居跡	环	底...部			8.4		ナシ、ロクロ回転余切り	ナシ	ロクロ 水焼き	褐色	(5YR)	精	選	良好
26-19	第2号 住居跡	环	底...部		(4.8)			ナシ、ロクロ回転余切り	ナシ	ロクロ 水焼き	に赤い褐色 (7.5YR)	精	選	良好	
26-20	第2号 住居跡	环	底...部		(5.8)			ナシ、ロクロ回転余切り	ナシ	ロクロ 水焼き	褐色	(5YR)	精	選	良好
26-21	第2号 住居跡	环	底...部			5.6		ナシ、ロクロ回転余切り	ナシ	ロクロ 水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	精	選	良好	
26-22	第2号 住居跡	环	底...部					ナシ、ロクロ回転余切り	ナシ	ロクロ 水焼き	褐色	(7.5YR)	精	選	良好
26-23	第2号 住居跡	高台 付近	底...部					ナシ、ロクロ静止余切り	ナシ	ロクロ 水焼き	淡褐色 (5YR)	砂粒を含む		良好	

第6表 第2号住居跡出土遺物観察表

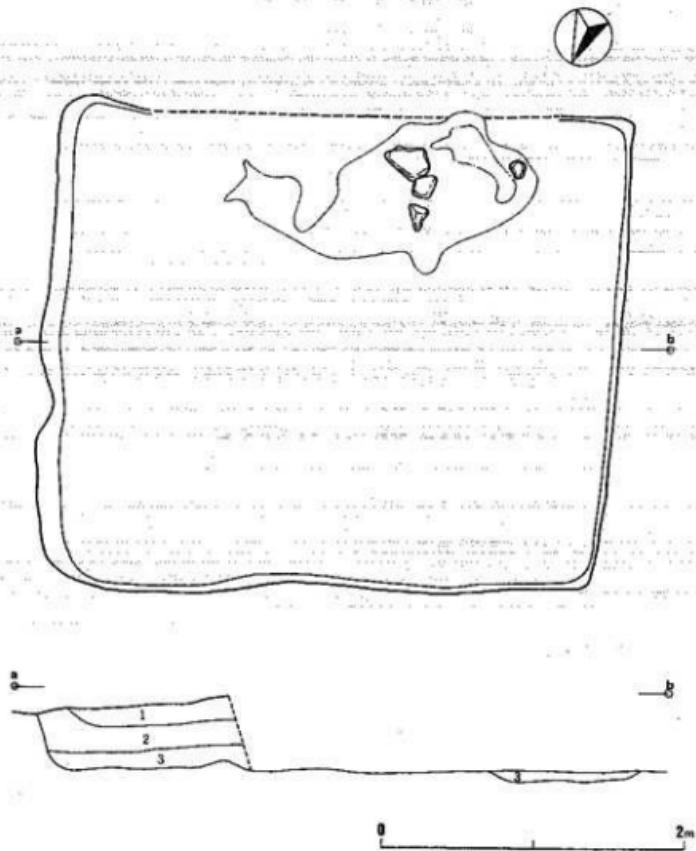
検査番号	出土地点	基形	部位	法 量 (cm)			質 構 (地文)		成 形	色 調	粒 土	塊成	
				上 底	体 高	延 長	外 面	内 面					
27-1	第2号住居跡の外	小形	口縁~底部(脚部欠損)	15.5	(13.7)	8.2	(13.5)	ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	淡黄褐色	微かに 砂粒を含む	良好
27-2	第2号住居跡	裏	口 縁	21.4				ナデ ヘラケズリ	トテ	積み上げ法	にぶい褐色	砂粒を含む	良好
27-3	第2号住居跡の裏	小形	口 縁	(14.4)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	淡赤褐色	砂粒を含む	良好
27-4	第2号住居跡	裏	口 縁	(16.2)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい黄褐色	砂粒を含む	良好
27-5	第2号住居跡	裏	口 縁	(19.6)				ナデ ヘラケズリ	ハサメ	積み上げ法	に古い褐色	砂粒を含む	良好
27-6	第2号住居跡	裏	口縁~脚部	(21.4)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	にぶい褐色(10 YR)	砂粒を含む	良好
27-7	第2号住居跡	裏	口縁~脚部	(31.0)	(20.0)			ナデ	ナデ	積み上げ法	(外)淡褐色 (内)褐色(7.5YR)	砂粒を含む	良好
27-8	第3号住居跡	裏	口 縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	褐色	砂粒を含む	良好
27-9	第2号住居跡	裏	口 縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	に古い褐色(7.5 YR)	砂粒を含む	良好
27-10	第2号住居跡	裏	口 縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	に古い褐色(5 YR)	砂粒を含む	良好
27-11	第2号住居跡	裏	口 縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	褐色(7.5 YR)	砂粒を含む	良好
27-12	第2号住居跡	裏	口 縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	淡黄色(2.5 YR)	砂粒を含む	良好
27-13	第2号住居跡	裏	口 縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	淡黄色(7.5 YR)	砂粒を含む	良好
27-14	第2号住居跡	裏	口 縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	に古い褐色(7.5 YR)	砂粒を含む	良好
27-15	第2号住居跡	裏	口 縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	に古い赤褐色	砂粒を含む	良好
27-16	第2号住居跡	裏	口 縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	に古い褐色(5 YR)	砂粒を含む	良好
27-17	第2号住居跡	裏	口 縁					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	淡黄褐色(7.5 YR)	砂粒を含む	良好
27-18	第2号住居跡	裏	口 縁					ナデ	ナデ	積み上げ法	褐色(7.5 YR)	砂粒を含む	良好
30-1	第2号住居跡	裏	口縁~脚部	(23.4)	(22.1)	(19.5)		ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	板白色	微かに 砂粒を含む	良好
30-2	第2号住居跡	裏	口縁~脚部	22.3	22.5			ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法(後 ロクロ使用)	淡黄褐色	砂粒を含む	良好
30-3	第2号住居跡	裏	口縁~脚部	(22.4)	(23.4)	(20.8)		ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	褐色	微かに 砂粒を含む	良好
28-1	第2号住居跡	裏	口縁~脚部	(29.0)	28.1	(26.6)		ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	に古い褐色	砂粒を含む	良好
28-2	第2号住居跡	裏	口縁~脚部	(29.5)	29.2	27.2		ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	に古い黃褐色	砂粒を含む	良好
28-3	第2号住居跡	裏	口縁~脚部	25.1	25.1			ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	褐色	砂粒を含む	良好
29-1	第2号住居跡	裏	口 縁	(17.2)	(17.4)	(16.0)		ナデ	ナデ	積み上げ法	灰白色	微弱。微かに 砂粒を含む	良好

第7表 第2号住居跡出土遺物観察表

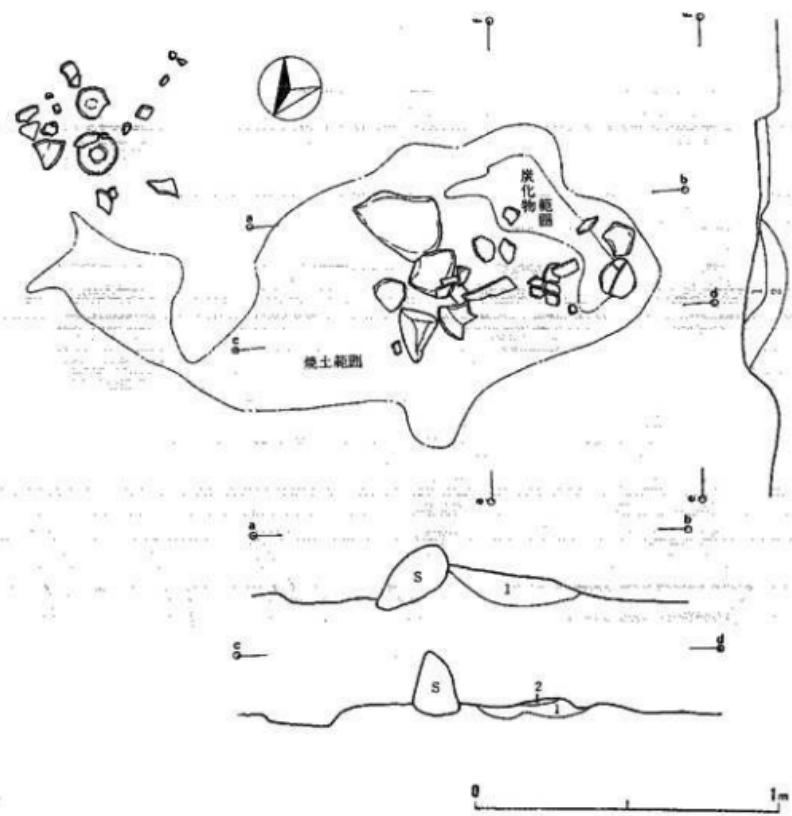
特 殊 標 記 番 号	出 土 地 点	断 面 形	部 位	法 値 (cm)			調 整 (地文)		成 形	色 調	附 上	地 出	
				口 徑	体 径	底 径	厚 度	外 面					
29-2	第2号住居跡 小形の壺	口縁	(14.8)	(13.8)				ナデ	ナデ	積み上げ法	に赤い黄褐色 (10Y R)	難かに 砂粒を含む	良好
29-3	第2号住居跡 壺	口縁～ 胴部	(20.1)	(18.8)				ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
29-4	第2号住居跡 壺	口縁	(21.2)	(19.0)				ナデ	ナデ	積み上げ法	灰白色	砂粒(難かに 砂粒を含む)	良好
29-5	第2号住居跡 壺	口縁	(20.8)					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡黃褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
29-6	第2号住居跡 壺	口縁	(22.6)					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡黃褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
31-1	第2号住居跡 壺	口縁～ 胴部	(30.0)	(30.0)	(27.8)			ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	灰白色	難かに 砂粒を含む	良好
31-2	第2号住居跡 壺	口縁～ 胴部	23.1	23.1	(9.9)	(23.3)		ナデ	ナデ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡黃褐色	砂粒を含む	良好
32-1	第2号住居跡 壺	口縁	(25.6)					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡褐色(5Y R) 一褐色(8Y R)	砂粒を含む	良好
32-2	第2号住居跡 壺	胴部						ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	淡黃褐色	砂粒を含む	良好
32-3	第2号住居跡 壺	底部						ヘラケズリ 木製瓶	ナデ	積み上げ法	淡黃褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
32-4	第2号住居跡 壺	底部			6.4			ヘラケズリ 木製瓶	ナデ	積み上げ法	淡黃褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
32-5	第2号住居跡 壺	底部			11.6			ヘラケズリ 木製瓶	ハゲメ	積み上げ法	淡黃褐色	難かに 砂粒を含む	良好
32-6	第2号住居跡 壺	底部			(10.8)			ヘラケズリ 砂塊	ナデ	積み上げ法	褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
32-7	第2号住居跡 壺	底部						ヘラケズリ 砂塊	ナデ	積み上げ法	褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
32-8	第2号住居跡 壺	底部						ナデ、砂塊	ナデ	積み上げ法	灰白色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
32-9	第2号住居跡 壺	底部						ナデ	ナデ	積み上げ法	淡黃褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
32-10	第2号住居跡 壺	底部						ナデ	ナデ	積み上げ法	に赤い橙色(7.5Y R) (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
32-11	第2号住居跡 壺	底部						ナデ	ナデ	積み上げ法	に赤い橙色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
32-12	第2号住居跡 壺	底部			7.4			ヘラケズリ	?	積み上げ法	灰褐色 (7.5Y R)	砂粒を含む	良好
34-1	第2号住居跡 壺	口縁～ 胴部	(25.8)	(25.0)				且し板状		積み上げ法	另一褐色 褐色(7.5Y R)	砂粒を含む	良好
34-2	第2号住居跡 壺	底部			8.6			ヘラケズリ L.R斜底	?	積み上げ法	褐色 (5Y R)	細砂粒を含む	良好
34-3	第2号住居跡 壺	底部			(9.8)			?	?	積み上げ法	に赤い黄褐色 (10Y R)	砂粒を含む	良好

第8表 第3号住居跡観察表

第3号住居跡		鉢 圓 圓 版	35, 36, 37, 38 9, 10, 20
検出区		14-C, 15-C, 15-B	
法 量	東 壁	西 壁	南 壁
	壁 長 332	320	388
	壁 高 44.5	19	—
	周溝幅 —	—	—
量	周溝深 —	—	—
	面 積 11.98m <sup>2</sup>	—	—
主軸方位	N-19.5°-W		形 態 方 形
確認状況	14-C, 15-Cグリット掘り下げ中に、径10~20cm程の礫2個と焼土及び炭化物の広がりを確認した。また付近から完形の环1個が伏せた状態で出土した。		
覆 土	1. 7.5YR 6/8 暗褐色 砂質 バミスを僅かに混入する 2. 7.5YR 6/8 暗褐色 粘質 バミスを混入する 3. 7.5YR 6/8 褐色 粘質 孔隙少なく繋っている		
壁	遺存状態の良好な東壁で108°の傾斜を見せる。西壁の全体及び南壁・北壁の大部分は、壁の立ち上がりは耕作のため壊されており、床面から僅かしか残っておらない。壁材等の遺材は確認されていない。		
床	覆土に比較すると僅かに硬いという程度で良好な床面とはいえない。カマド付近は炭化物を多量に混じえた層が分布している。		
ビット	検出できず		
カ マ ド	位 置	南壁西寄り	
	覆 土	1. 10YR 6/8 褐色 粘質 やや孔隙有 炭化物僅かに含む 2. 5YR 6/8 赤褐色 粘質 焼土	
		耕作のため壊されており遺存状態は非常に悪い。おそらくは左袖部分芯材と思われる径10~30cm程度の礫を中心に東西に広がる炭化物層が検出されてた。煙道及び煙出し孔は検出できなかった。	
遺 物	カマド本体の位置から1m程東側に完形の环が1箇出土している。その他に、环破片、カマド本体内からは壊片が出土している。		

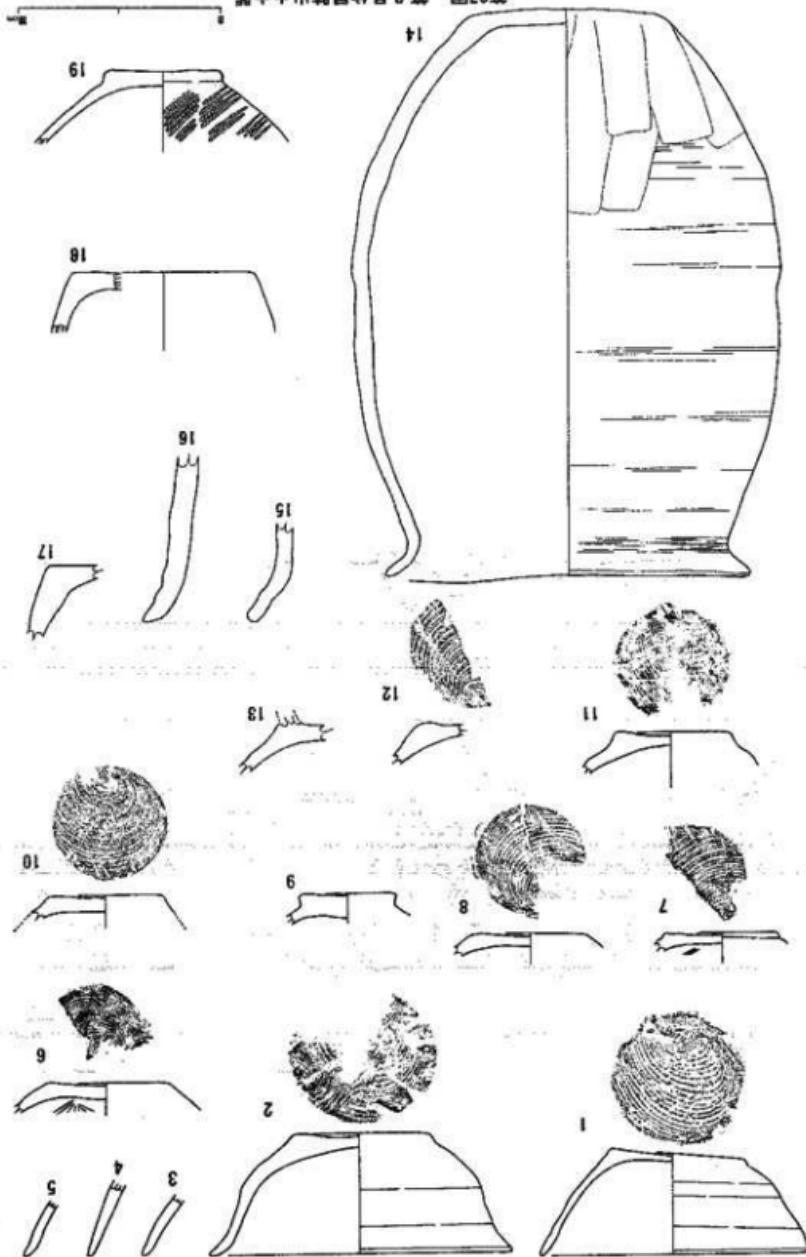


第35図 第3号住居跡



第36図 第3号住居跡カマド

第37圖 第3号住居跡出土土器

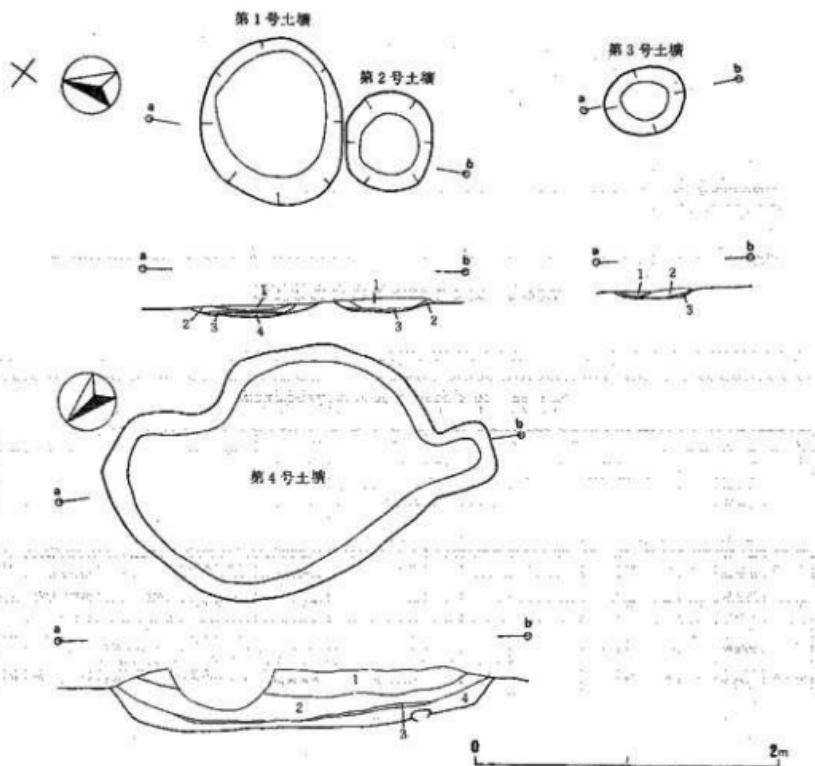




第38図 第3号住居跡出土土器拓影

第9表 第3号住居跡出土遺物観察表

編 號 號	出 土 地 點	器 種	部 位	直 徑 (cm)		圓 底 (地文)		成 形	色 調	胎 土	燒 成	
				口徑	体 徑	底 径	高					
37-1	第3号 住居跡	环		13.3		5.0	6.5	ナシ、ロクロ圆 底水切り	ナシ	ロクロ水焼き	橙色	砂粒を含む 良好
37-2	第3号 住居跡	环	口端、側部 (另欠損)	14.9		6.0	6.6	ナシ、ロクロ圆 底水切り	ナシ	ロクロ水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	精 進 良好
37-3	第3号 住居跡	环	口 端					ナシ	ヘラミガキ 黑色處理	ロクロ水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	微かに砂粒 を含む 良好
37-4	第3号 住居跡	环	口 端					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	橙色 (7.5YR)	微かに砂粒 を含む 良好
37-5	第3号 住居跡	环	口 端					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
37-6	第3号 住居跡	环	底 部			(5.7)		ナシ、ロクロ圆 底水切り	ヘラミガキ 黑色處理	ロクロ水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	精 進 良好
37-7	第3号 住居跡	环	底 部			5.6		ナシ、ロクロ圆 底水切り	ヘラミガキ 黑色處理	ロクロ水焼き	淡褐色 (5YR)	精 進 良好
37-8	第3号 住居跡	环	底 部			5.4		ナシ、ロクロ圆 底水切り	ヘラミガキ 黑色處理	ロクロ水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	精 進 良好
37-9	第3号 住居跡	环	底 部			4.8		ナシ、ロクロ圆 底水切り	ヘラミガキ 黑色處理	ロクロ水焼き	灰色	精 進 良好
37-10	第3号 住居跡	环	底 部			5.4		ナシ、ロクロ圆 底水切り	ナシ	ロクロ水焼き	橙色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
37-11	第3号 住居跡	环	底 部			5.6		ナシ、ロクロ圆 底水切り	ナシ	ロクロ水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	精 進 良好
37-12	第3号 住居跡	环	底 部					ナシ、ロクロ圆 底水切り	ナシ	ロクロ水焼き	淡黃褐色 (7.5YR)	精 進 良好
37-13	第3号 住居跡	环	底 部					ナシ、ロクロ圆 底水切り	ナシ	ロクロ水焼き	橙色 (5YR)	精 進 良好
37-14	第3号 住居跡	環	另欠損	18.0	ケイ(15.8) ドウ(30.5)	9.2	28.1	ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	橙色 (5YR)	砂粒を含む 良好
37-15	第3号 住居跡	環	口 端					ナデ	ナデ	積み上げ法	橙色 (5YR)	砂粒を含む 良好
37-16	第3号 住居跡	環	口 端					ナデ	ナデ	積み上げ法	淡黃褐色 (7.5YR)	精 進 良好
37-17	第3号 住居跡	環	底 部					ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	淡黃褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
37-18	第3号 住居跡	环	底 部			(8.8)	?	?	?	積み上げ法	明黃褐色 (30YR)	砂粒を含む 良好
37-19	第3号 住居跡	环	底 部			5.6	L.R.横位	?	?	積み上げ法	明黃褐色 (30YR)	砂粒を含む 良好



第39図 第1号土壙～第4号土壙

#### イ. 土壙 (第39図)

計4基検出している。第1号土壙～第3号土壙は、径45～112cm程の円形プラン、第4号土壙は、長径260cm、短径160cmの張出しをもった横円形プランを呈し、いづれも浅い皿状の断面形をもつ。各土壙とも覆土中の焼土中に焼土及び炭化物の層が認められ、土師器片、フイゴ羽口、鉄滓を出土している。

覆土注記は、以下の通り。

#### 第1号土壙 (検出区 14-D)

1. 10YR 4.8暗褐色、孔隙多い、炭化物、焼土を僅かに含む。
2. 10YR 4.2黑色、稍粘質、炭化物層であるが焼土を僅かに含む、若干の灰も混入する。
3. 10YR 4.8褐色灰色、キメ細く稍粘質、灰層であるが、暗褐色土、炭化物も若干混入する。

4. 7.5 Y R 5%明褐色、粘質、焼土層

第2号土壤(検出区 14-D)

1. 10 Y R 5%黒褐色、粘性弱く、孔隙多い。多量の炭化物及び僅かながら焼土を含む。
2. 7.5 Y R 5%明褐色、粘質、焼土層、暗褐色土、炭化物僅かに混入する。
3. 10 Y R 1%灰白色及び、10 Y R 1%黒色、キメ細く粘質、上部灰層、下部炭化物層。

第3号土壤(検出区 14-D)

1. 7.5 Y R 5%明褐色、粘性弱く孔隙多い。多量の炭化物、暗褐色土を含む。
2. 10 Y R 5%黒褐色、粘性弱く孔隙多い。僅かに炭化物を混入する。
3. 10 Y R 1%黒色、炭化物層。

第4号土壤(検出区 13-B)

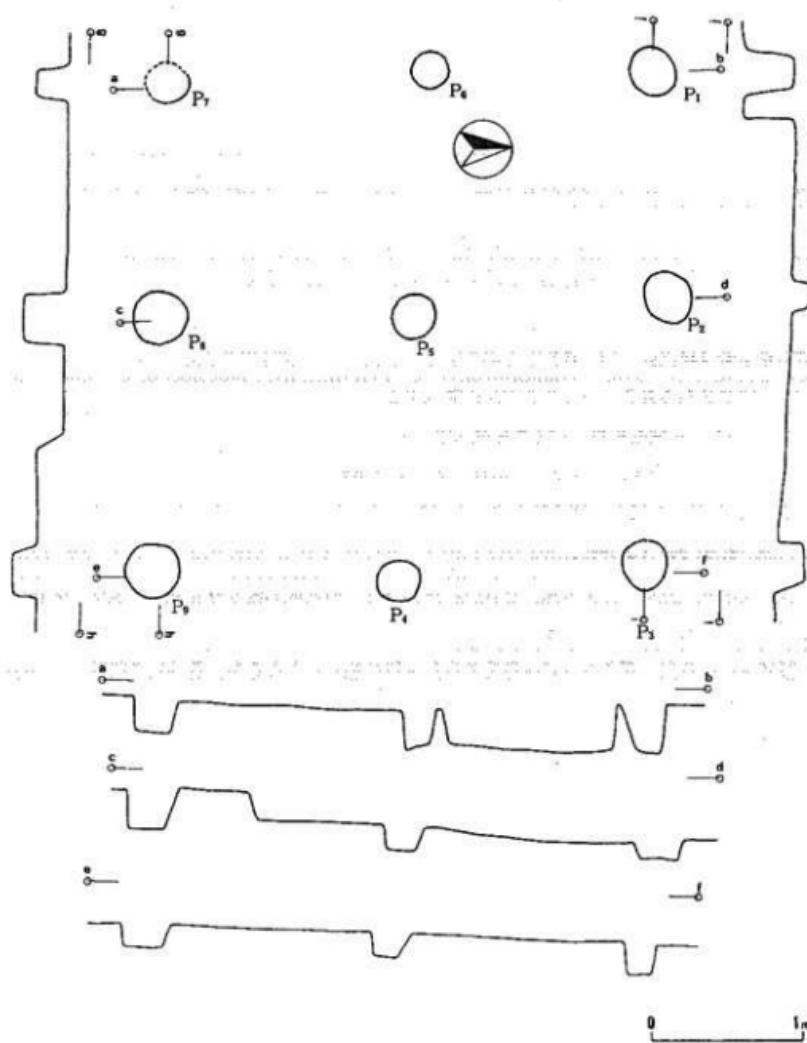
1. 10 Y R 5%黒褐色、バミスを僅かに混入する。
2. 7.5 Y R 5%極暗褐色、バミスを混入する。
3. 10 Y R 1%黒色、キメ細く、粘質、薄い炭化物層。
4. 7.5 Y R 5%暗褐色、粘性強く締っている。

ウ. 挖立柱建物跡(第40図)

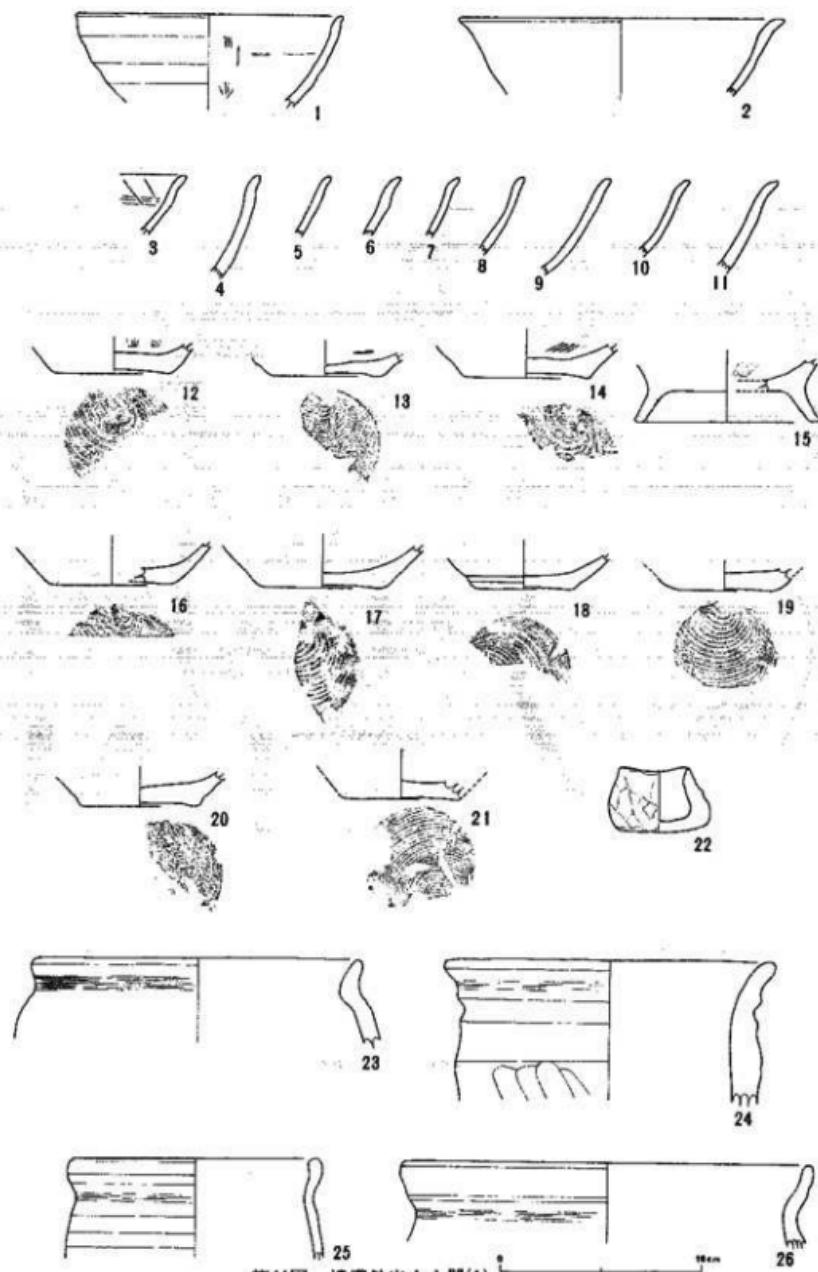
17-D, 18-D グリッドで検出された。検出面は、第IV層上面であるが、一部柱穴は第IV層を掘り下げた後に検出している。

径15~40cm程度、深さ5~18cm程度の合計9個の柱穴からなるが、各柱穴の間隔は、160cm~180cm程である。各柱穴内覆土には、灰白色の砂質土が認められた。

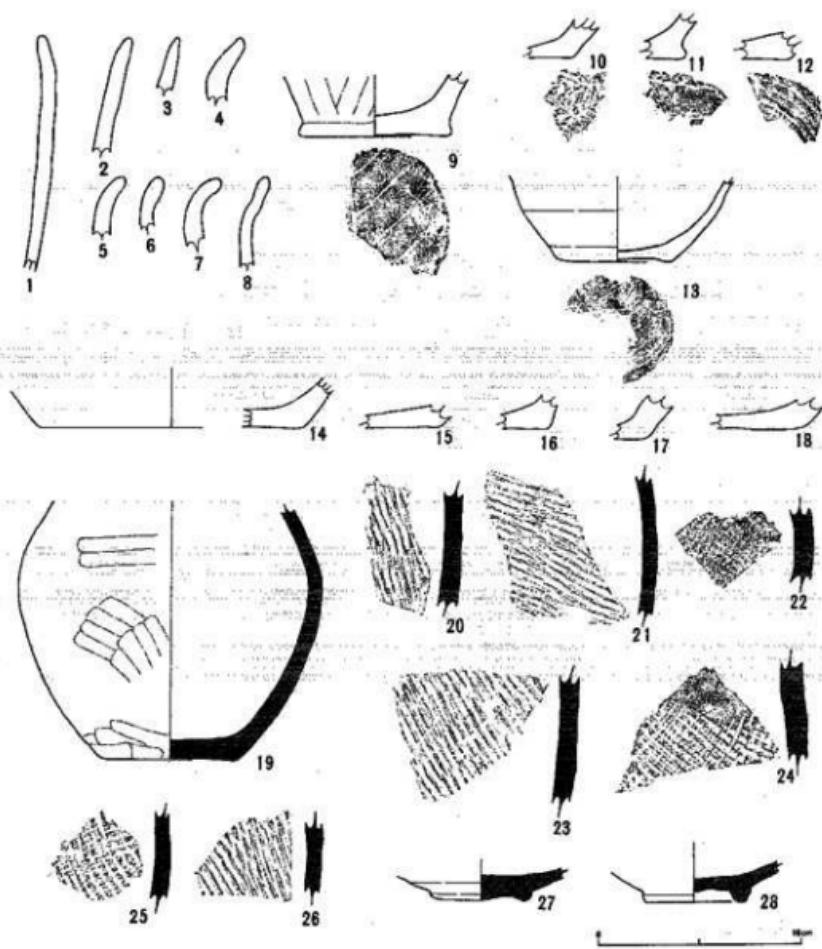
南側柱列を規準としての磁北とのずれはN-7°-Eである。



第40図 据立柱建物跡



第41図 造精外出土土器(1)



第42図 造構外出土土器(2)

第10表 造構外出土遺物観察表

種類 番号	出 土 地 点	器 形	部位	計 量 (cm)		調 査 (焼火)		成 形	色 調	納 土	成 分	
				口 径	体 径	底 径	器高					
41-1	9-C- 11-C	耳	口縁	(13.2)				ナシ	ヘラミガキ 黒色處理	ロクロ水焼き	褐褐色(?) (2.5YR)	砂 泥
41-2	14-A	耳	口縁	(16.2)				ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-3	13-B	耳	口縁					ナシ	ヘラミガキ 黒色處理	ロクロ水焼き	淡褐色 (7.5YR)	砂 泥
41-4	Aトレン 手	耳	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-5	14-D	耳	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	にい褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-6	14-D	耳	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	浅褐色 (7. YR)	砂粒を含む 良好
41-7	15-D	耳	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	淡褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-8	15-E	耳	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	浅褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-9	15-E	耳	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	浅褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-10	16-D	耳	口縁					ナシ	ナシ	ロクロ水焼き	浅褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-11	16-D	耳	口縁					ナシ (口縁に 鉛粉を含む)	ナシ	ロクロ水焼き	にい褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-12	4-C	耳	底部		(5.5)			ナシ、ロクロ 圓板余切り	ヘラミガキ 黒色處理	ロクロ水焼き	浅褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-13	15-D	耳	底部		(5.3)			ナシ、ロクロ 圓板余切り	ヘラミガキ 黒色處理	ロクロ水焼き	浅褐色 (7.5YR)	砂 泥
41-14	16-E	耳	底部		(6.1)			ナシ、ロクロ 圓板余切り	ヘラミガキ 黒色處理	ロクロ水焼き	褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-15	16-D	西古付耳	底部		(9.2)			ナシ、ロクロ 圓板余切り	ヘラミガキ 黒色處理	ロクロ水焼き	浅褐色 (7.5YR)	砂 泥
41-16	14-D	耳	底部		(6.1)			ナシ、ロクロ 圓板余切り	ナシ	ロクロ水焼き	褐色 (7.5YR)	砂 泥
41-17	15-D	耳	底部		(6.1)			ナシ、ロクロ 圓板余切り	ナシ	ロクロ水焼き	浅褐色 (7.5YR)	砂 泥
41-18	16-F	耳	底部		(5.0)			ナシ、ロクロ 圓板余切り	ナシ	ロクロ水焼き	にい褐色 (7.5YR)	砂 泥
41-19	16-F	耳	底部		5.1			ナシ、ロクロ 圓板余切り	ナシ	ロクロ水焼き	褐色 (5YR)	砂 泥
41-20	17-D	耳	底部		(5.9)			ナシ、ロクロ 圓板余切り	ナシ	ロクロ水焼き	浅褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-21	17-E	耳	底部		5.8			ナシ、ロクロ 圓板余切り	ナシ	ロクロ水焼き	浅褐色 (7.5YR)	砂 泥
41-22	17-E	手袋ね ニチュア		3.5	5.0	4.5	3.1	ヘラケズリ	ナシ	手袋ね	褐色	砂 泥
41-23	15-B	裏	口縁	(16.4)				ナシ	ナシ	積み上げ法	褐色 (7.5YR)	砂粒を含む 良好
41-24	13-B	裏	口縁	(16.4)				ナシ ヘラケズリ	ナシ	積み上げ法	浅褐色 (7.5YR)	砂 泥
41-25	13-B	小形の瓶	口縁	(12.6)				ナシ	ナシ	積み上げ法 (複数ロクロ使用)	灰褐色	砂 泥
41-26	13-C	瓶	L189	(20.5)				ナシ	ナシ	積み上げ法 (複数ロクロ使用)	にい褐色 1-2位の砂粒 を微かに含む	良好

第11表 遺構外出土遺物観察表

標 番 号	出 土 地 点	器 形	部 位	法 量 (cm)		調 査 (地文)		成 形	色 調	地 土	施 成		
				口径	体 径	底 径	鋸高						
42-1	15-B 15-B	甕	口 線					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	淡黄褐色	砂粒を含む 良好	
42-2	甕	甕	口 線					ナデ ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	淡黄褐色	砂粒を含む 良好	
42-3	Aトレン チ	甕	口 線					ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法	褐灰色~褐色	砂粒を含む 良好	
42-4	20-D	甕	口 線					ナデ	ナデ	積み上げ法	褐色	稍 濡 良好	
42-5	13-C	甕	口 線					ナデ	ナデ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	淡黄褐色	砂粒を含む 良好	
42-6	16-B	甕	口 線					ナデ	ナデ	積み上げ法	浅い黄褐色	砂粒を含む 良好	
42-7	16-B	甕	口 線					ナデ	ナデ	積み上げ法	淡黄褐色	砂粒を含む 良好	
42-8	17-D	甕	口 線					ナデ	ナデ	積み上げ法	褐色	砂粒を含む 良好	
42-9	13-B	甕	底 部				(7.5)	ヘラケズリ 木製底	ナデ	積み上げ法		砂粒を含む 良好	
42-10	15-B 16-B	甕	底 部					ヘラケズリ 木製底	ナデ	積み上げ法	褐色	砂粒を含む 良好	
42-11	18-E	甕	底 部					ヘラケズリ 木製底	ナデ	積み上げ法		砂粒を含む 良好	
42-12	18-E ベルト	甕	底 部					ナシ。圓輪 ヘラケズリ(?)	ナデ	積み上げ法	浅褐色	砂粒を含む 良好	
42-13	16-C 17-D	小形の甕	底 部				5.6	ナシ。ロクロ 四輪ヘラケズリ	ナシ	ロクロ水洗き	灰色(N)	砂粒を含む 良好	
42-14	15-E 16-E	甕	底 部				(13.0)			積み上げ法	浅い黄褐色	砂粒を含む 良好	
42-15	Fトレン チ	甕	底 部					ナデ	ナデ	積み上げ法	淡黄褐色	砂粒を含む 良好	
42-16	Fトレン チ	甕	底 部					ナデ	ナデ	積み上げ法	褐色	砂粒を含む 良好	
42-17	14-E	甕	底 部					ナデ	ナデ	積み上げ法	淡黄褐色	砂粒を含む 良好	
42-18	13-A	甕	底 部					ナデ	ナデ	積み上げ法	淡黄褐色	砂粒を含む 良好	
42-19	15-B 漆油器底付	甕	底 部				(14.9)	6.6	ヘラケズリ	ナデ	積み上げ法 (後、ロクロ使用)	灰白色	稍 濡 良好
42-20	Aトレン チ	甕	底 部					叩き目		積み上げ法	灰色N%	稍 濡 良好	
42-21	14-C	甕	底 部					叩き目		積み上げ法	灰色N%	稍 濡 良好	
42-22	15-B	甕	底 部					叩き目		積み上げ法	灰色N%	稍 濡 良好	
42-23	15-B	甕	底 部					叩き目		積み上げ法	灰色N%	稍 濡 良好	
42-24	15-D 16-D	甕	底 部					叩き目		積み上げ法	灰色N%	稍 濡 良好	
42-25	15-E	甕	底 部					叩き目		積み上げ法	灰色N%	稍 濡 良好	
42-26	18-E ベルト	甕	底 部					叩き目		積み上げ法	灰色N%	稍 濡 良好	
42-27	16-C	《陶器》甕	底 部							ロクロ使用		稍 濡 良好	
42-28	16-D	《陶器》甕	底 部							ロクロ使用		稍 濡 良好	

## 6. まとめ

駒林遺跡は、米代川の右岸に形成された河岸段丘上に営まれた遺跡であり、主な生活の場として使用された時期は概ね平安時代である。

平安時代住居跡は計3棟確認されている。

個々の住居跡のその構造的な復元は、遺存状態が必ずしも充分であるとは言えず、要約するのに困難な点も多いのであるが、可能な限り観察し得た項目を列挙すれば以下の通りである。

1. カマドの構築壁を基準にした主軸方位は最大でも20度程度ずれているだけでは北と一致している。
2. カマドは、その本体部分に芯材として砾を用いており、煙道部分は、長いトンネル式のものである。
3. 壁構は、確認できなかったが、住居跡には板材が用いられている。
4. 第2号住居跡周辺のピット、第1号住居跡カマド煙出孔周辺のピット等に示されるように住居跡外周にも上屋を支えたり、カマドを覆う構造物を支えたりする柱を想定できる。

また、住居跡内から出土している土器は、甕、壺がその組成の主体をなしているが、甕については、

1. 器高が30cmを越える大形のもの、15cm程度の小形のものと、その大きさにバラエティがあること。
2. 最大径は、副部にあるものが殆どであるが、器高の大きいものになると器高の3/6以下の口縁部が外反し、最大径=口径となるものもある。
3. 口縁部の外反するものでは、口縁全体が弧状に反りかえるものと、口縁部中程に屈曲部をもつものがある。
4. 成形は、粘土帶の積み上げによって行われるが、その後の器面の調整は、全体にロクロにより水挽きの調整のされたものと、その後に縦位のヘラケズリの施されたものがある。
5. 底部は、夥しい砂粒の付着する「砂底」のものと、木葉痕のものがある。

壺については、

1. 器形全体のバランスを決定する口径、底径、器高の測定値割合は、凡そ2:1:1の比率を中心分布し、また、ゆるやかに張り出す体部曲線は、その最大曲率点が体部下半に求められることが多い。
2. 成形はロクロ水挽によるが、調整について外面は再調整されることはない。内面はヘラミガキの施される場合と、再調整の施されない場合があり、前者では黒色処理の行われた

ものも多い。

3. 底部は、回転糸切りによるもので、その後の再調整は認められない。

また、甕、壺といった組成の主体をなす土器の他に第1号住居跡出土例の土師器壺がある。

この土器の胎土は非常に精選したものが用いられており、砂粒を殆ど混えない。胎土の点では壺によく似ており、甕の胎土が粗い砂粒を著しく混入しているとの対照的である。壺形の土器では、他に遺構外からではあるが、色調の灰白色を呈する須恵器と認め得る1点の出土例があり、色調を除いては胎土、成形、調整等前述の壺形の土器と大差ない。

すなわち、住居内出土土器に於いてその組成の中心をなす、甕と壺、それに付随した壺の三者では、製作過程の第1段階である粘土選択の時点で甕に使用される粘土と壺及び壺に使用される粘土とに分けられていたことが看取される。

また、同じ平安時代の遺構としては、4基の土壙があるが、これらの土壙は覆土中にかなりの量の炭化物と焼土を混じえており、フィゴ羽口、鉄滓が出土していることを考え併せると、小規模な鍛冶工房的な役割を果していたのではないかと思われる。

掘立柱建物跡については、各柱穴の遺存状態が必ずしも良好ではなく、また時期を決定する遺物も欠けている。ただ、磁北との振れが7度程度と小さく、三基の住居跡と方向は一致している。その点では、住居跡と同時期に住居と何らかの関連をもって構築された遺構と考えることもできる。

遺構外からは、縄文時代各時期の遺物が出土しているが、調査区内で見える限りこれらの各時期の生活の痕跡を残しているものとは思われず、他所から調査区域へ流れ込んだと考える方が妥当である。したがって駒林遺跡が生活の場として選定されたのは、検出された遺構・遺物が示す平安時代のある一時期に特定できる。

# 付

本遺跡第1号土壙出土炭化物の<sup>14</sup>C測定を日本アイソトープ協会に依頼した。結果は以下の通りである。

## 測定結果報告書

昭和56年1月23日に受取りましたC-14試料24個の測定結果がでましたのでご報告します。

当方のコード

依頼者のコード

C-14年代

N-4134

TW14 14B15B S-X(1)

001

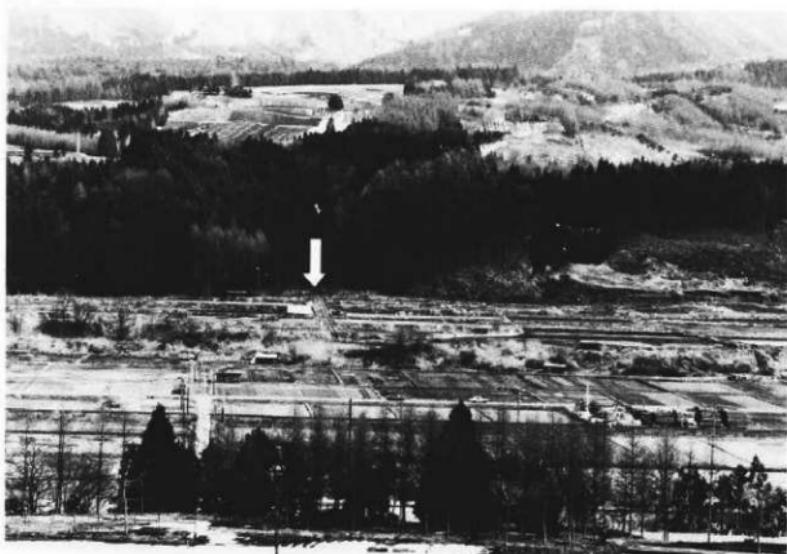
1240±75y B.P. (1200±70y B.P.)

年代は<sup>14</sup>Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読み取りの誤差から計算されたもので、<sup>14</sup>C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお<sup>14</sup>C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）

調査参加者

畠山 末治 神田 良勇 井上 政治 奥村 一三 梅戸 正次郎 川又 秀也  
川又 武司

豊田 よ里 浅石 恵留子 相川 金子 川又 ヤエ 穴沢 キヨエ 奥村 初恵  
中西 リチ 相川 リヨ 賀川 政子 石鳥谷 妙子 柳沢 ヤス 三カ田 孝子  
田中 ヨシエ 作山 ミエ 苗代沢 ノブ 津江 和子 金沢 ハルエ  
小田島 札子 畠山 陽子 阿部 シガ 小田島 キク 斎藤 キヨエ  
浅石 タミ 井上 トミエ 工藤 スミ 工藤 キヌ 工藤 イツ 阿部 シマ  
佐藤 キエ 松岡 トキヨ 高畠 サキ 阿部 シモ 三上 美子 三上 トヨ  
柳沢 ヤス 安保 柳



遺跡遠景



遺跡全景

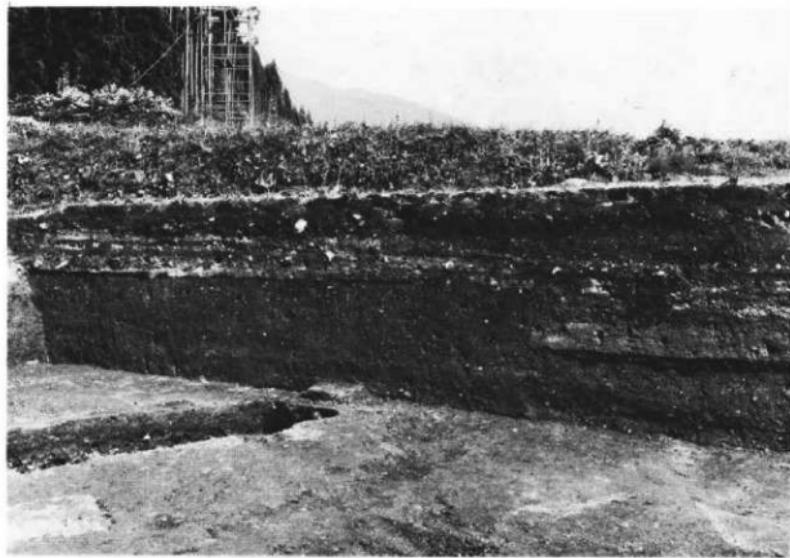


秦道北側調査区



図版 2

秦道南側調査区



農道北側区層序



農道南側区トレンチ内層序



第1号住居跡発掘状況



図版4

第1号住居跡カマド



第1号住居跡カマドセクション



図版 5

第1号住居跡カマド煙道



第1号住居跡ピット内出土土師器杯



図版 6

第1号住居跡覆土内出土土師器甌



第2号住居跡発掘状況



図版 7

第2号住居跡カマド



第2号住居跡カマド内遺物出土状況



図版 8

第2号住居跡炭化材出土状況



第3号住居跡確認状況



圖版 9

第3号住居跡完掘状況



第3号住居跡カマド遺物出土状況



図版10

掘立柱建物跡



第1号土壤完掘状况



圖版11

集堆遺構



遺構外遺物出土状況



図版12

遺構外(トレンチ内)遺物出土状況

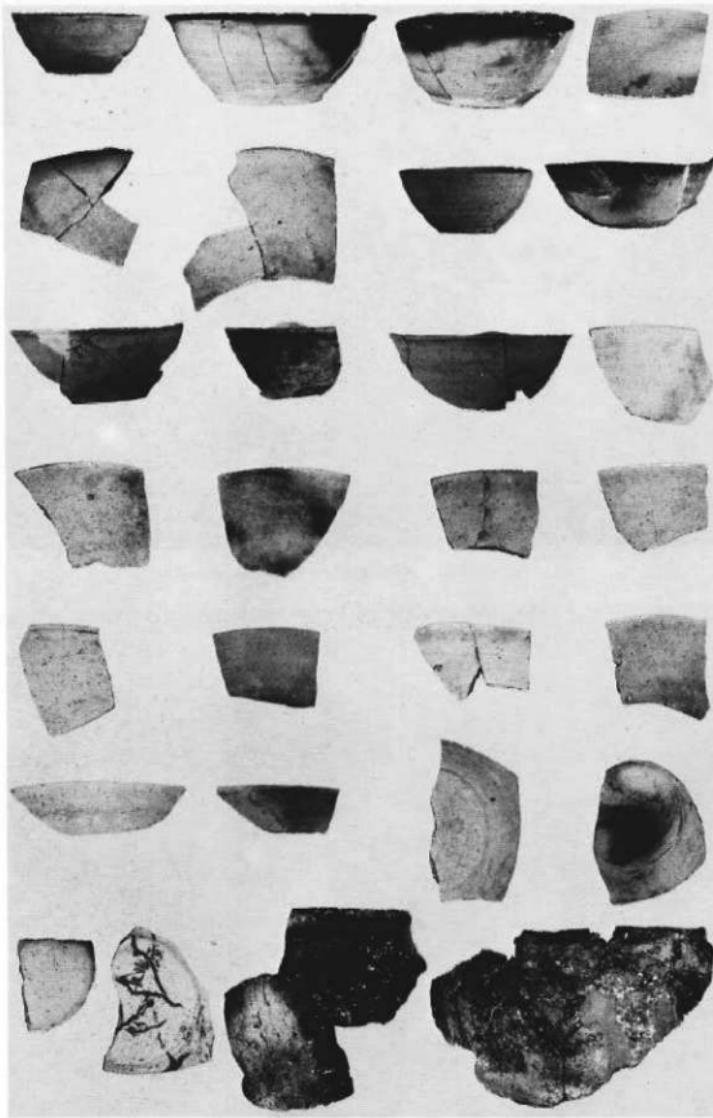


遺構外(トレンチ内)遺物出土状況



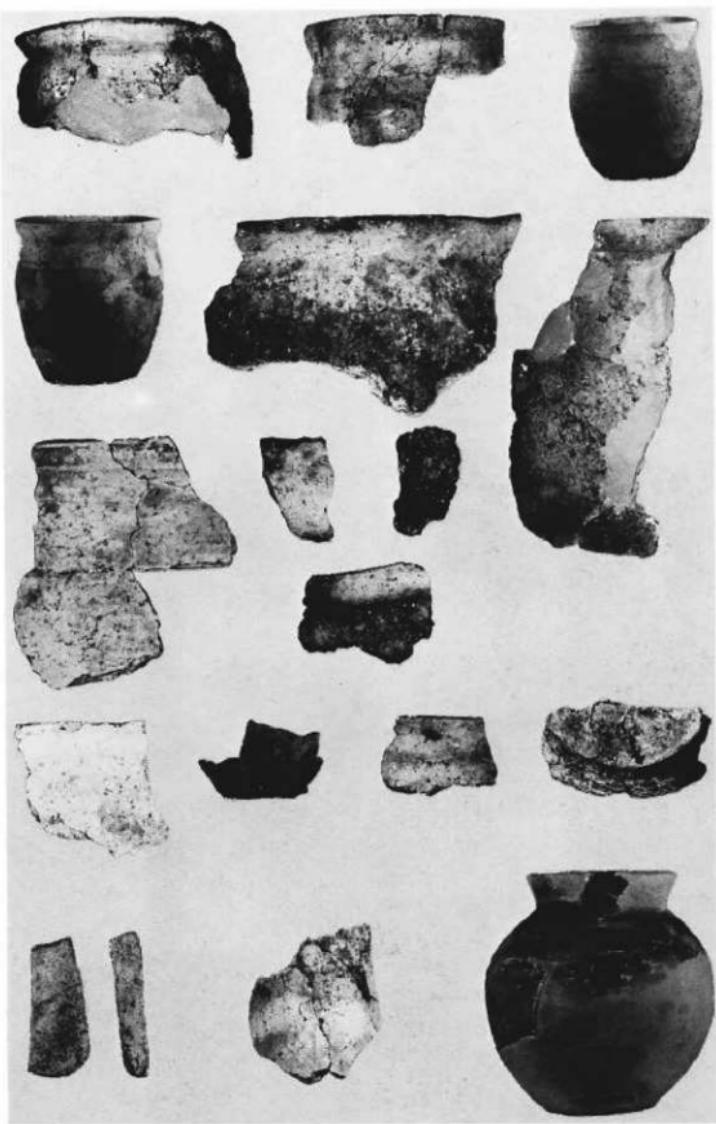
図版13

遺構外(トレンチ内)遺物出土状況



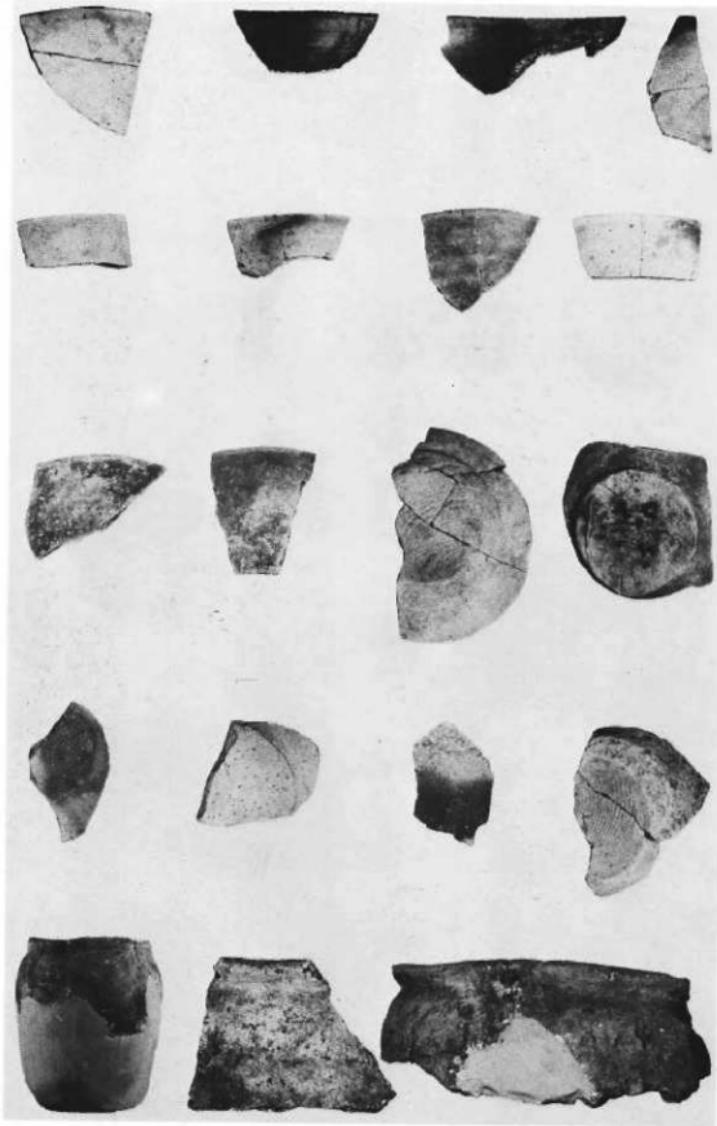
圖版14

第1號住居跡出土遺物



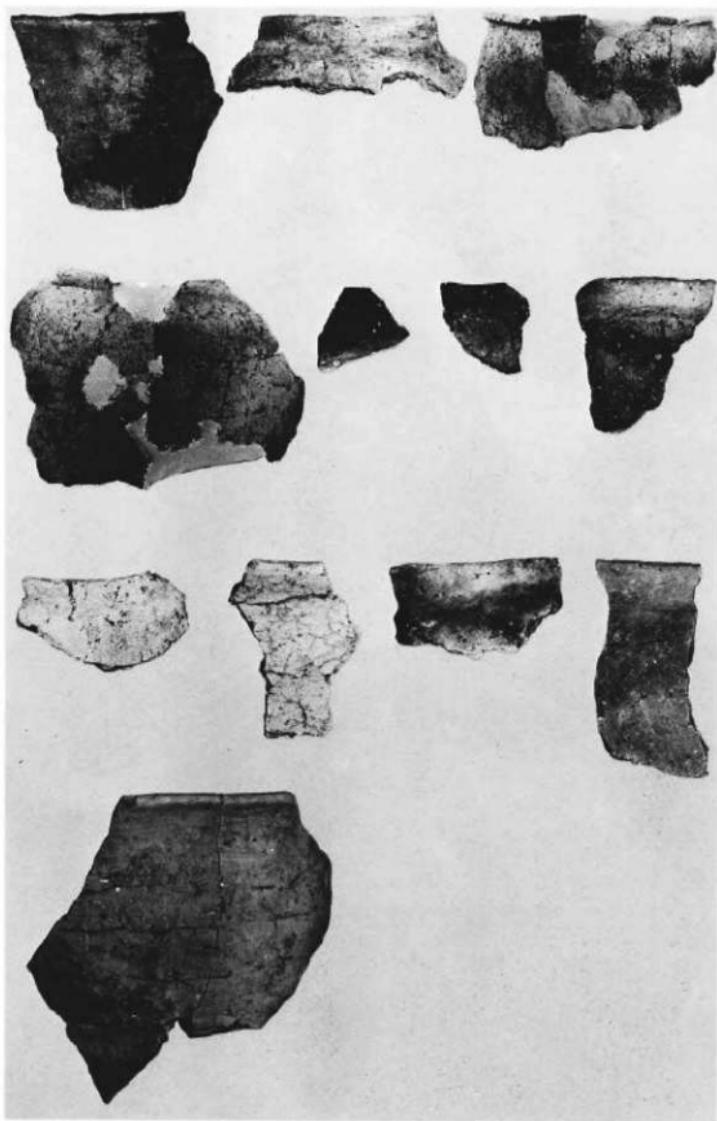
圖版15

第1號住居跡出土遺物



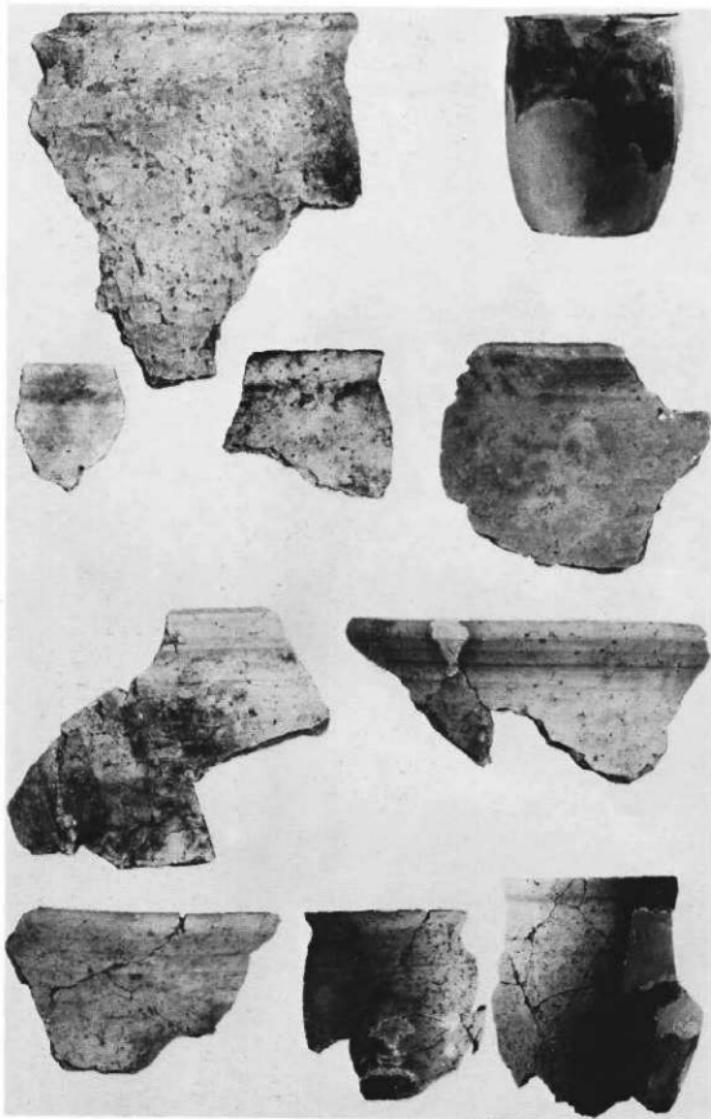
圖版16

第2號住居跡出土遺物



圖版17

第2號住居跡出土遺物



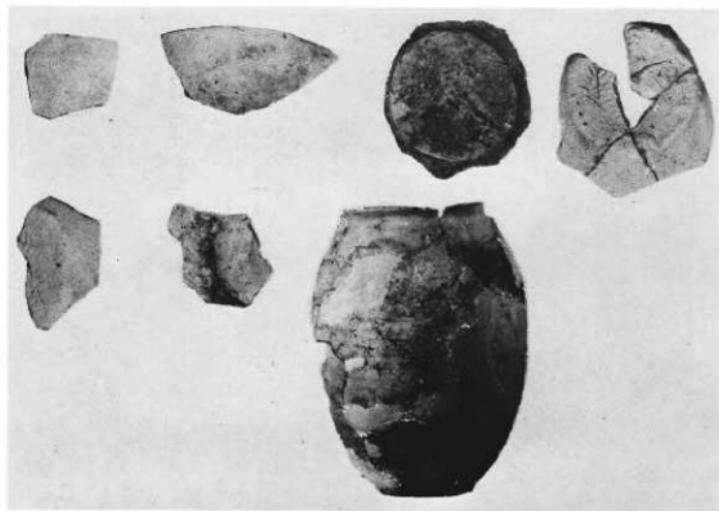
图版18

第2号住居址出土遗物



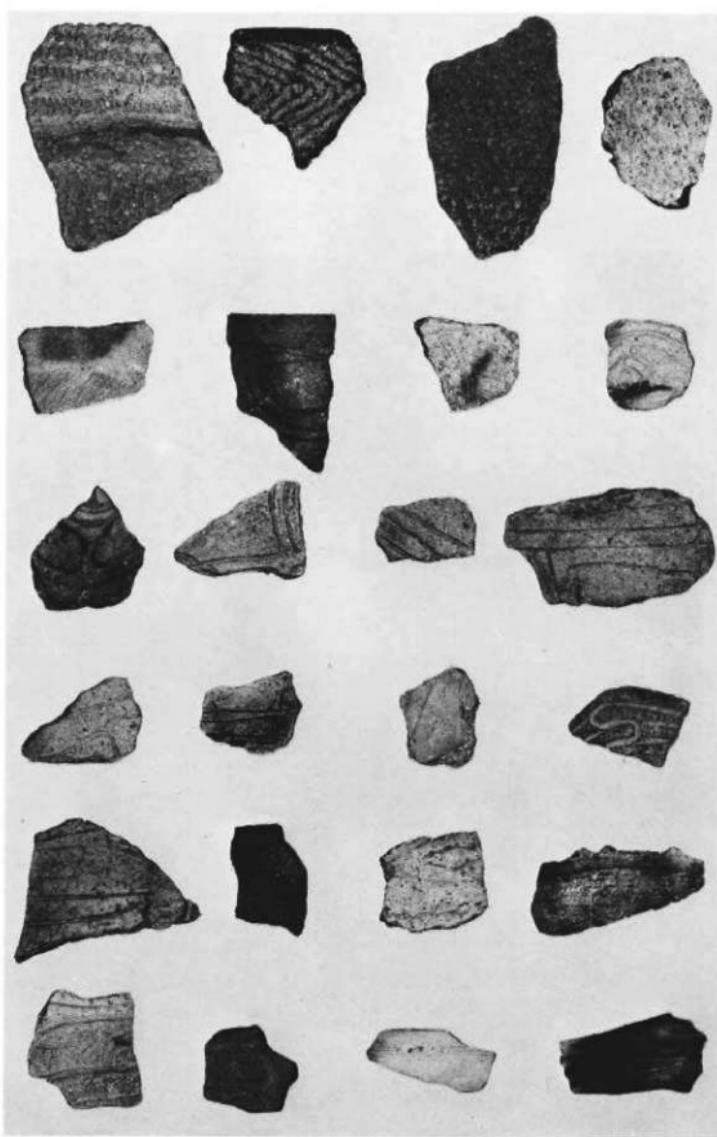
圖版19

第2號住居出土遺物



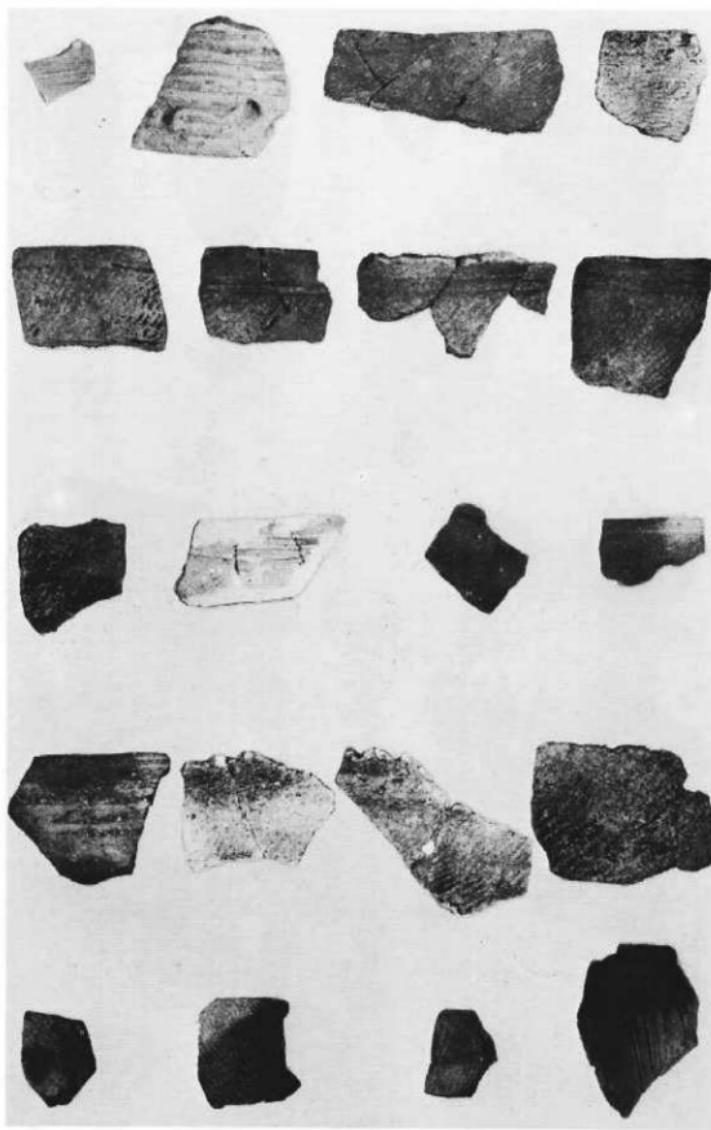
圖版20

第3號住居跡出土遺物



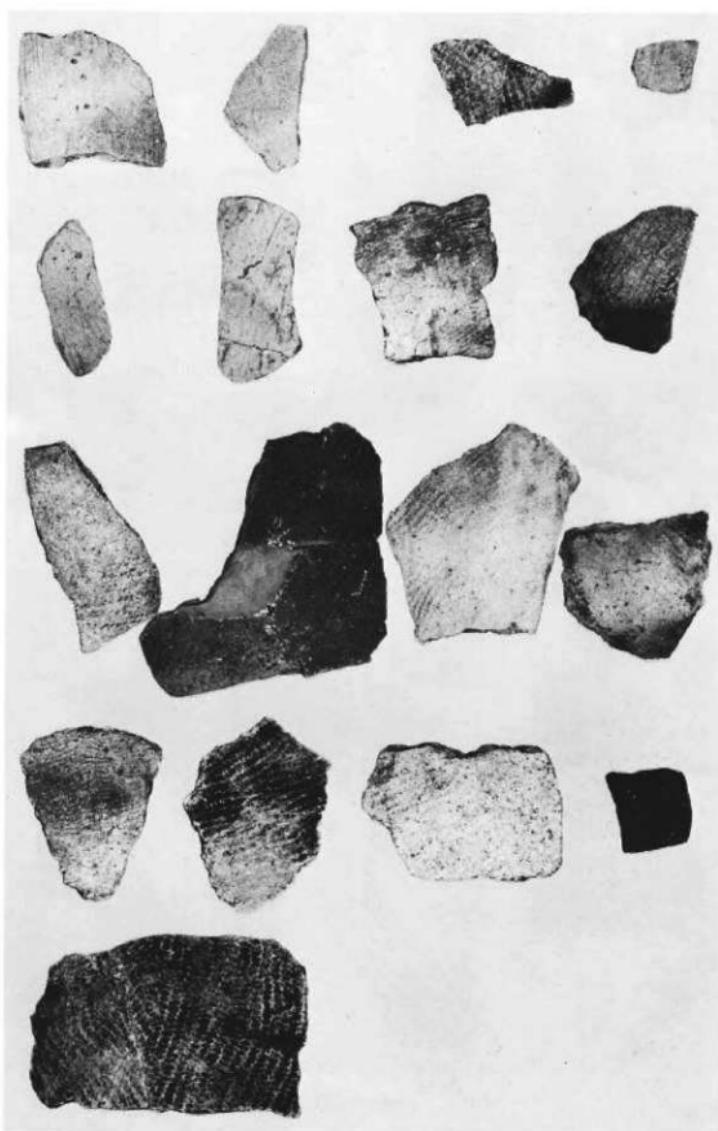
図版21

造構外出土縄文時代土器



圖版22

遺構外出土繩文時代土器

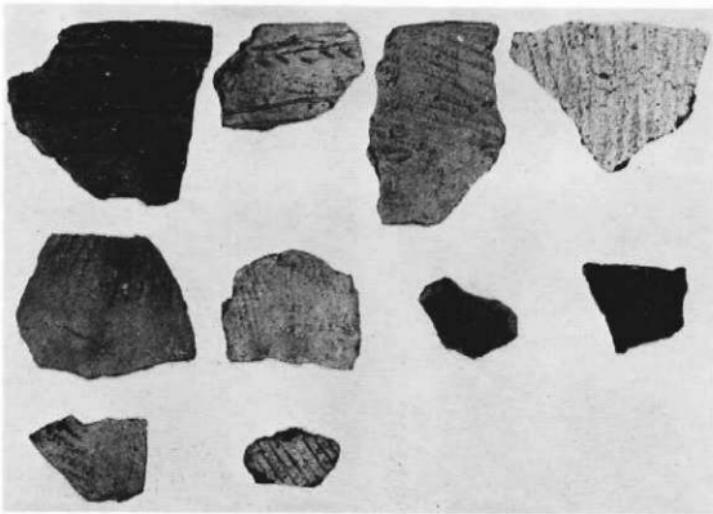


図版23

達摩外出土縄文時代土器

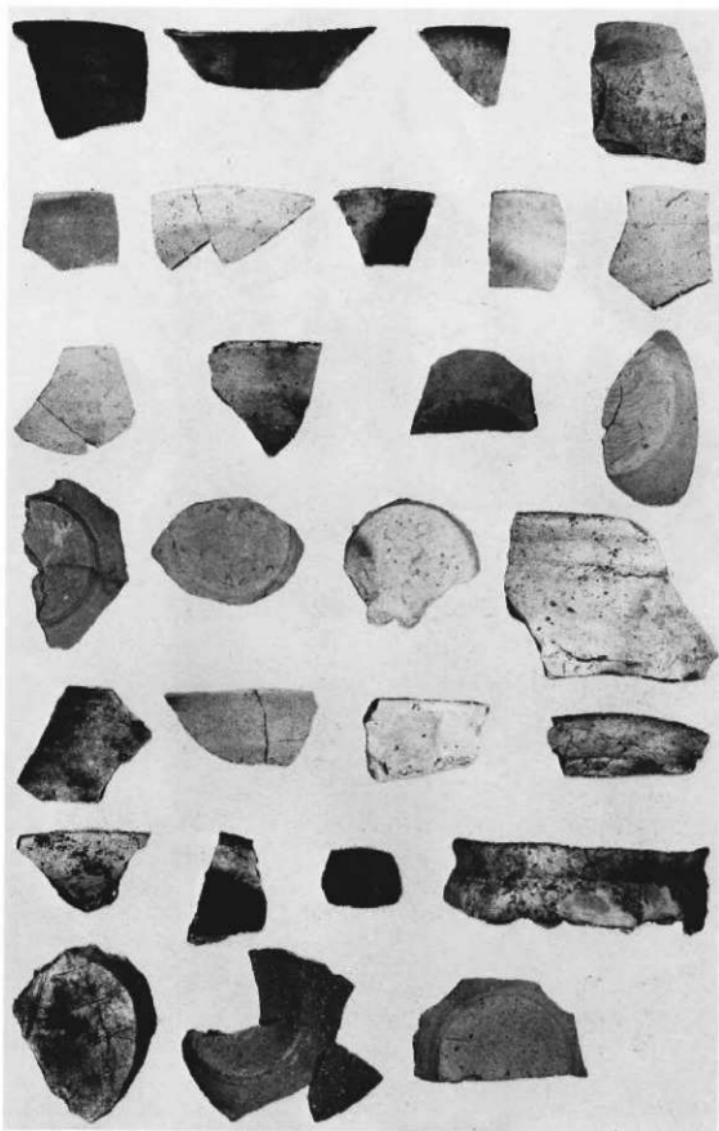


遺構外出土繩文時代土器



圖版24

遺構外出土弥生時代土器



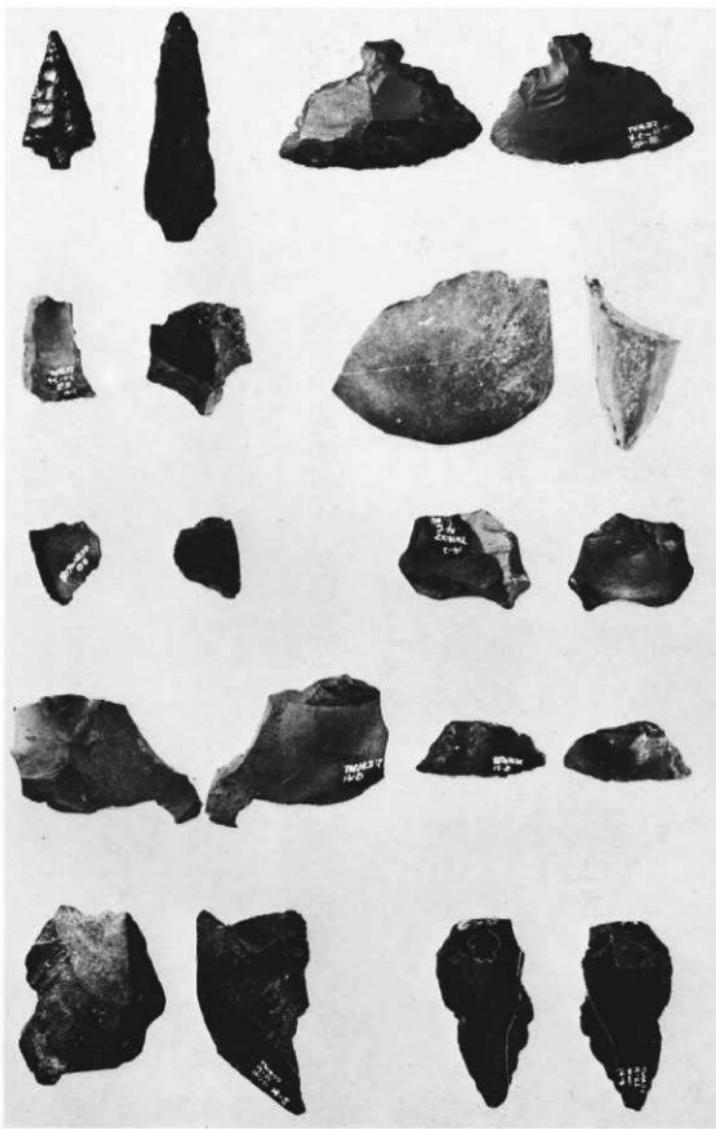
圖版25

遺構外出土土器(土師器)



圖版26

造構外出土土器(須惠器、陶器)



圖版27

遺構外出土石器

## 案 内 II 遺 跡

遺 跡 番 号 No.19  
所 在 地 鹿角市花輪字案内  
調 査 期 間 昭和55年9月16日～12月5日  
発掘調査予定面積 5,724m<sup>2</sup>  
発 堀 面 積 5,550m<sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

遺跡は、国鉄花輪線陸中花輪駅東北東2.25kmの標高約210m前後の台地南端近くに位置する。

遺跡の立地する台地は、花輪盆地の東側に広がる標高200~300mの一連の台地の一つであり、

南側1km程には福士川が西流する。

調査区は、南及び西側へ向う緩斜面上に設定された。調査以前は、上部平坦面は畠地として耕作され、斜面はアカシア等の雜木林となっていた。また、調査区南側斜面を降りると標高200m前後の比較的緩い斜面があり、杉林として利用されていた。

遺跡地に隣接する遺跡としては、標高185m程の水田を狭んだ南側の標高200m前後の台地上に、縄文時代後期と平安時代の複合遺跡である案内I遺跡（東北縦貫自動車道関係遺跡番号No.18、55年度調査）があり、本遺跡と同一の台地北側400mには、縄文時代後晩期の猿ヶ平I遺跡（No.20、55年度調査、本報告書所収）がある。また、西方1km程の標高170m前後の台地には、縄文時代と平安時代の複合遺跡である御休堂遺跡（鹿角市教委、55年度調査）がある。さらに、東北縦貫自動車道関係遺跡では、本遺跡調査中に南側斜面下の緩斜面が、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが確認され、案内II遺跡（No.34、56年度調査）として加えられている。

## 2. 調査の方法

日本道路公団設置の、東北縦貫自動車道予定地内道路中心杭ST A139とST A140を結ぶ直線を基線とし、ST A139を基準点として方眼坑を設置し、5m×5mのグリッドを設定した。グリッド設定のために引いた各ラインには、南から北へ3~30までのアラビア数字、東から西へD~Yのアルファベットを付し、各グリッドはその東南隅の方眼坑によって呼称した。

遺構等の実測は、設置した方眼坑を利用しての簡易遺方測量によったが、配石遺構の実測には本遺方測量を用いた。また、遺構外出土の遺物のとりあげも各グリッド毎に行った。

調査区がアカシア等の雜木の多く生えている所であったのと、全体に緩い斜面であったために人力による粗掘作業以前に抜根を兼ねて重機による除土作業を行うこととした。その際失われる表土から地山面までの土層観察は、調査区東際の畠地での観察で補うこととした。

粗掘作業以後の地山面の精査は、本調査に入る以前の踏査等により縄文時代土器片を確認していた上部平坦面から遺構確認を目的として行った。また、北側の23~30、Q~Yの各ラインのグリッドは、遺構確認後の拡張を想定して東西方向に計5本のトレーナーを設定して調査を行った。

### 3. 調査経過

本調査は、昭和55年9月16日から開始しているが、7月23日から1週間、雜木及び下草の刈払いと重機による除土作業の自安とするため、トレンチを設定して試掘を行った。また、8月23日から約1週間重機による除工と抜根作業を行い、9月11日には方眼坑設置の作業を行っている。

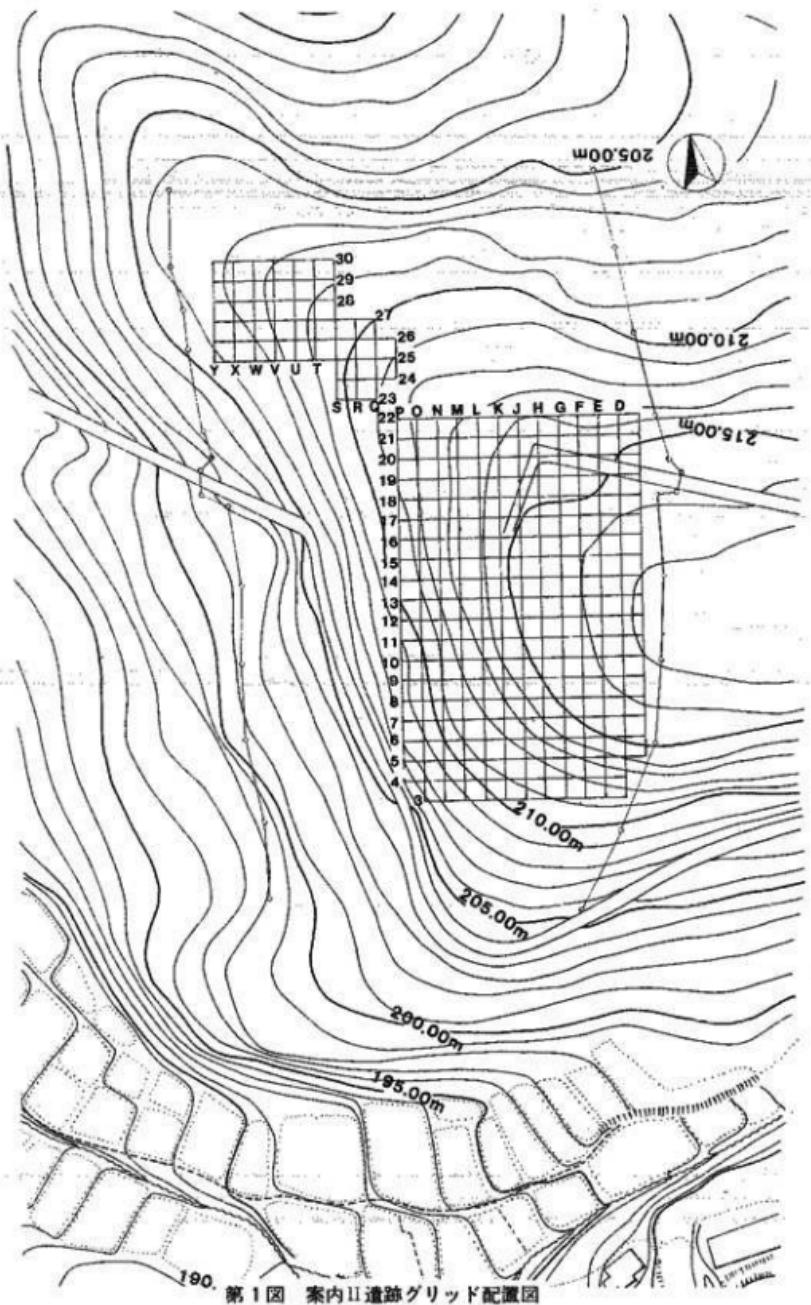
9月16日以降の本調査経過は概ね以下の通りである。
9月16日～9月23日 重機除土後の盛土の除土作業
9月24日～ 上部平坦面から遺構確認面精査
10月3日 第12号土壤確認
10月6日 埋設土器遺構、第1号住居跡確認
10月7日 北側調査区にトレンチ設定
10月7日 配石遺構確認、精査開始
10月11日 第2号住居跡確認
10月17日 第3号第4号住居跡確認
10月24日 北側調査区トレンチ粗掘作業終了
10月31日～11月8日 第1号、2号、3号、7号、8号、10号土壤確認
11月5日～11月22日 第5号、9号、11号土壤確認精査
12月2日 調査区域全体写真撮影、調査終了

調査全行程には78日間を費しているが、この間11月10日には南側斜面下の緩斜面に7本のトレンチを設定、11月27日までの間に平安時代竪穴住居跡2棟と、縄文時代竪穴住居跡1棟を検出し、案内III遺跡（遺跡番号No34）として翌年度本調査を実施することを決めている。

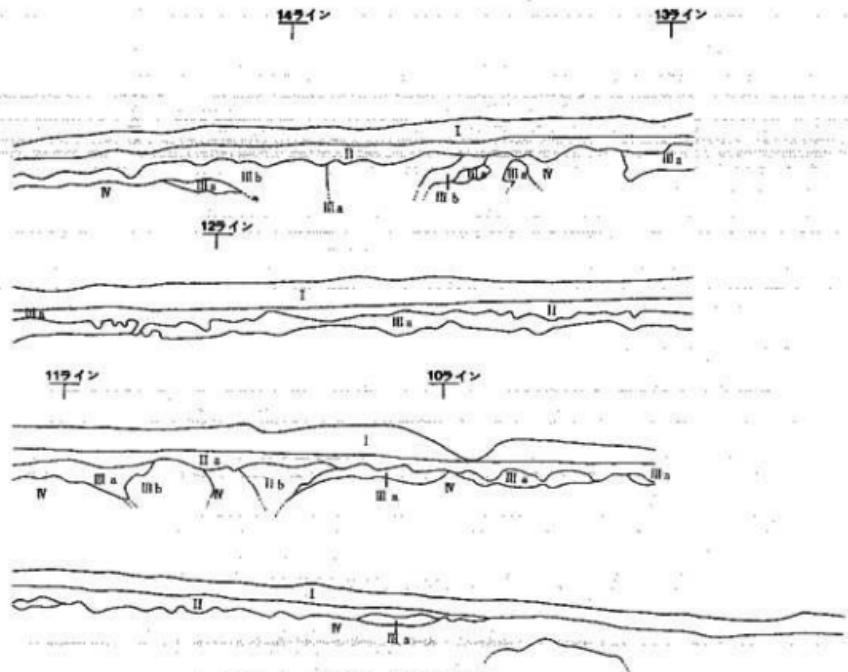
### 4. 遺跡の層位

本遺跡の土層堆積状態を観察するため、調査区の東側にトレンチを設定し、土層断面図を作成した。本遺跡層位は基本的には、4層に分類される。ただし、III層は生成因が同じと思われるが、砂粒の大きさが異なるため、あえてIIIa層、IIIb層の2つに分けており（ところどころIIIa、IIIbが逆転している）。これらを含めた分類では、I、II、IIIa、IIIb、IV層の5つに分けられる。

I層：色調は黒褐色を呈する。調査区全域に広がる耕作土であり、有機物を多量に含み、ま



第1図 案内II遺跡グリッド配置図



第2図 遺跡の層位

た、かなり粒径の大きい（7～10mm程度）のバミスが僅かに混じる。

II層：色調は黒褐色を呈するが、黄褐色土及びI層の黒褐色土がブロック状に入り込むため、かなり明るい印象をうける。また、耕作や植物根による擾乱がかなりはいる。

IIIa層：色調は黄褐色を呈する。砂質であるが、かなり良くしまっており、層自体は非常に硬い。

IIIb層：色調は黄褐色を呈する。砂礫層であり、径0.1～2.0mm程度までの砂及び礫よりなる。かなり部分的にしか認められない層である。

IV層：色調はにぶい黄褐色～明褐色を呈する。非常にキメ細かく、粘性に富む。IV層下部には色調、明褐色を呈する酸化層が存在する。

以上、各層のうち、遺物は主にII層中に包含され、遺構の確認は、IIIa層上面及びIV層上面で行われ、特に竪穴床面、フラスコ状土壙壁面等はIV層よりなっている。

## 5. 遺構と遺物

### ア. 住居跡

#### 第1号住居跡

〈検出区〉 5-H

〈規模〉 長径320cm 短径268cm

〈形状〉 楕円形

#### 〈確認状況〉

南側斜面に於いて周囲よりも稍暗い色調を呈し、炭化物、焼土、土器片を含むプランを検出した。プランを示すラインは不明瞭であり、正確な形状を把握することはできなかった。

#### 〈覆土〉

1. 10Y R 3%, 黒褐色、稍粘質、孔隙は少ない、径5~12mm程度の炭化物、焼土粒を混入する。

2. 10Y R 3%, 黒褐色、粘性弱、孔隙は比較的多い、炭化物、僅かに混入する。

3. 10Y R 3%, 暗褐色、粘性大、孔隙少、黄褐色土粒、黒褐色土粒の混り合ったもの、炭化物、焼土粒僅かに混入する。

4. 10Y R 3%, 黑褐色、粘性大、孔隙少、キメ細かく比較的均質、炭化物僅かに混入。

5. 10Y R 3%, 褐色、稍粘質、壁の崩落土と思われる。

#### 〈壁〉

住居跡が斜面上で確認されたため、南側壁の遺存状態は悪い。残存する壁高は北壁で約24cm、南壁で約9cm、東壁で27cm、西壁で11cmを計る。傾斜角は約118°~128°である。

#### 〈床〉

全体に軟弱であり、根による搅乱も數箇所に認められる。

#### 〈柱穴〉

P<sub>1</sub>22×24×9.6cm, P<sub>2</sub>20×16×5cm 明確に柱穴と判断できるピットは少なく、図面上に記された他のピットは根の搅乱痕跡の可能性もある。

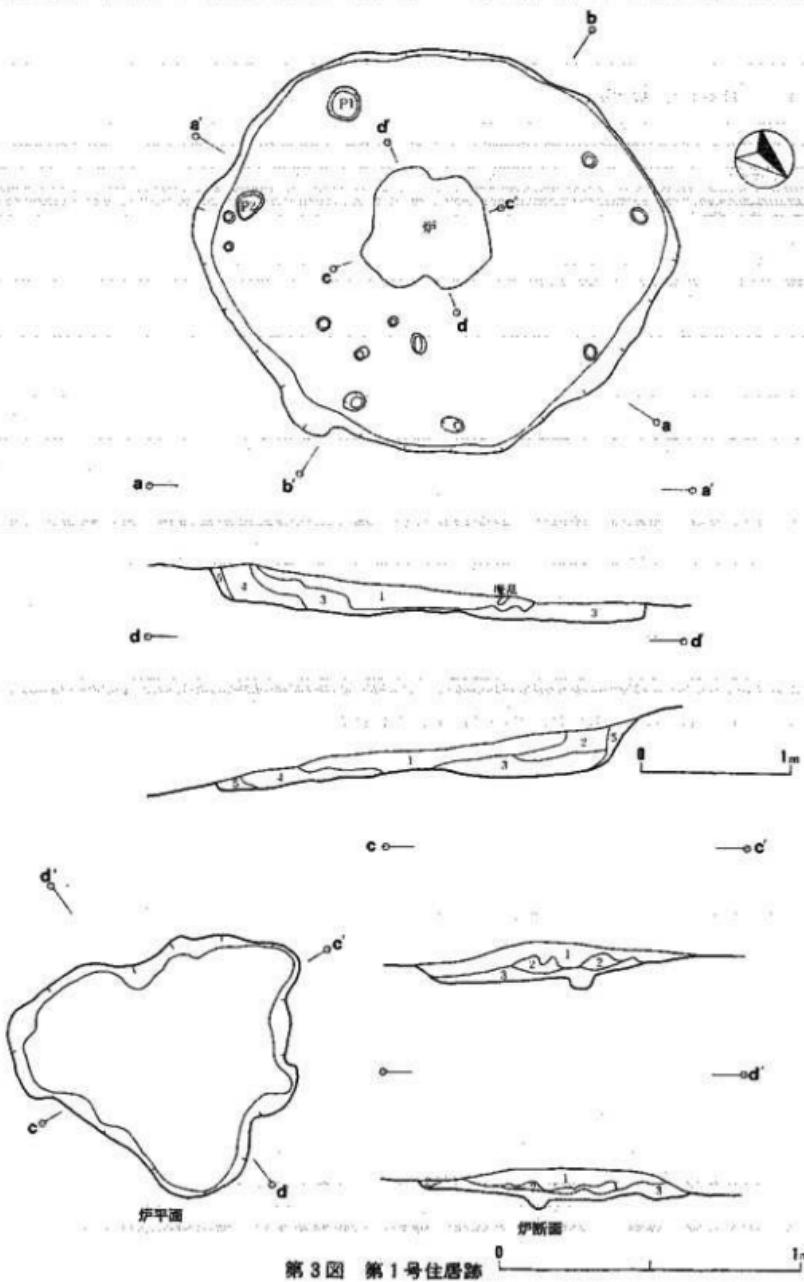
#### 〈炉〉

床面上に焼土が確認されただけの所謂地床炉である。

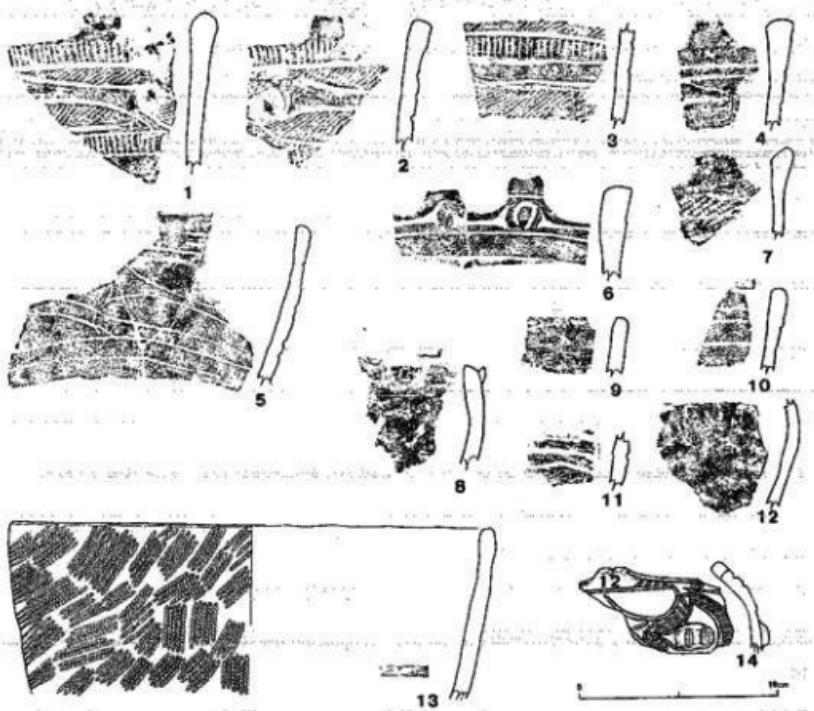
1. 10Y R 3%, 暗褐色、粘性大、孔隙少、多量の炭化物、焼土粒を含む。

2. 10Y R 3%, 赤褐色、粘性大、孔隙少、最も良く火熱を受けている。

3. 10Y R 3%, 褐色、粘性大、孔隙少、僅かに炭化物を含む、地山層へ漸移する。



第3図 第1号住居跡



第4図 第1号住居跡出土土器

#### 〈遺物〉

遺物は全て土器片であり、平面分布は若干東側へ偏る傾向が認められるものの覆土全体に含まれる状態で出土している。

土器片は、東北地方縄文時代後期後葉を特徴づける貼瘤文土器を主としている。

第4図1～3は同一個体である。口縁上に魚尾状の突起が付される。文様帶は口縁部に限り上下限は刻目帶で画される。文様帶中には磨消縄文手法で入組文が描かれ、入組部分には縦位に2個の瘤が貼付される。文様帶下には幅1cm程で無文帶が設けられ、以下縄文が施される。使用された原体はLRである。4は1～3同様、突起をもち入組文の描かれたものである。5は、無文地の上に沈線によって入組文が描かれている。6は、口縁上に付された突起に対応して所謂玉抱きの三叉文が描かれている。7～12もやはり入組文の描かれる破片と思われるが、12のように地に無文が選ばれる場合もあるようである。13は全面縄文の施されたものであるが、後期後葉に伴出する粗製土器と思われる。14は遺跡中唯一の破片であるが、安行2式に比定で

きる。口縁上には二又に分かれる小突起が付され、口縁直下から曲線的な磨消繩文が描かれ、1個所に所謂「ふた鼻」状の瘤が貼付される。地文に使用される原体はLRであり、器形は口縁の内湾する小形の浅鉢と思われる。

## 第2号住居跡

〈検出区〉 7-K

〈規模〉 柱穴から推定した長径316cm、短径298cm

〈形状〉 檜円形

〈確認状況〉

斜面上の暗褐色土除去の際、炉である焼土の検出によって確認された。プランが甚だ不明瞭で、覆土を掘り込んで壁を検出しながら形状を確認した。

〈覆土〉

1. 10YR 4/6, 黒色、粘性弱、孔隙大、2~3m程の比較的大粒のバミスを多量に含む。
2. 10YR 4/6, 黑褐色、比較的粘質、孔隙少ない。
3. 10YR 4/6, 暗褐色、粘質、孔隙少なく、バミスを僅かに含む。
4. 10YR 4/6, 黑褐色、粘質、孔隙少なく均質、炭化物僅かに混入。
5. 10YR 4/6, 褐色、粘性弱、孔隙は少ない。

〈壁〉

斜面上に位置するため、南壁は表土除去の際取除かれている。残存する壁高は北壁で2.4cm、東壁で19cm、西壁で10cmを計る。傾斜角は、116°程度である。

〈床〉

比較的良好な床面である。根などによる擾乱も殆どなく、平坦である。

〈柱穴〉

R<sub>1</sub>28×28×11cm, R<sub>2</sub>28×22×11cm, R<sub>3</sub>25×27×18cm, R<sub>4</sub>20×20×7cm, R<sub>5</sub>20×18×8cm,  
北壁及び東西壁際では柱穴と思われるような良好なピットを検出できなかった。

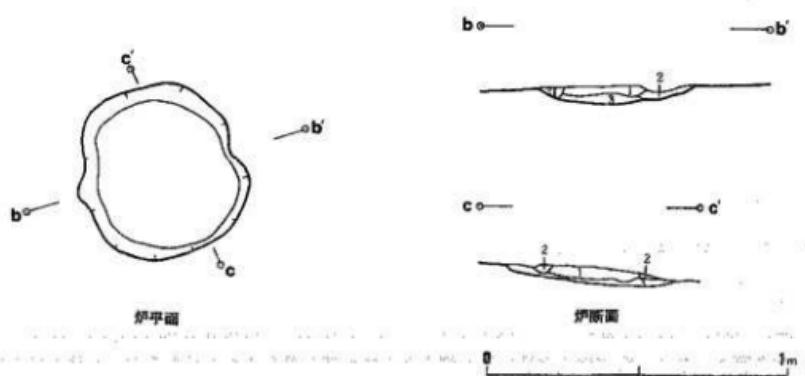
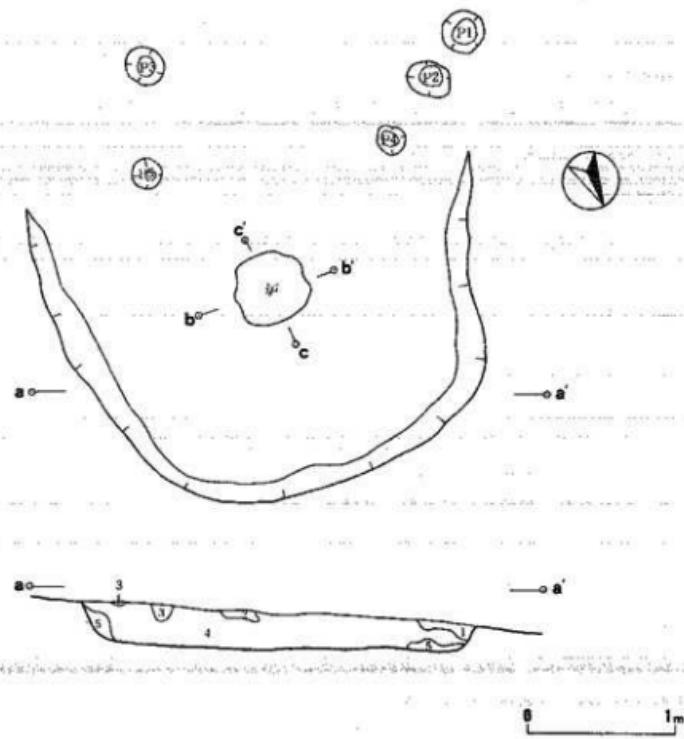
〈炉〉

床面中央部には円形の焼土プランが確認された。

1. 5YR 4/6, 赤褐色、粘性強、孔隙少、最も良く火熱を受けている。
2. 10YR 4/6, 黑褐色、粘性弱、孔隙比較的多
3. 7.5YR 4/6, 明褐色、粘性強、孔隙少、地山層へ漸移する。

〈遺物〉

全面繩文の施された土器片が数点出土している。



第5図 第2号住居跡

### 第3号住居跡

〈検出区〉 5—I

〈規模〉 長径311cm、柱穴位置から推定した短径265cm

〈形状〉 横円形

〈確認状況〉

住居の掘り込みが比較的深いせいか、プラン検出は容易であった。また確認面で焼土の多量に混入する層の広がりを検出した。しかし、斜面下方である南西側のプランは不明瞭であった。

〈覆土〉

1. 10Y R 3%, 黒褐色、稍粘質、孔隙は比較的少ない。若干の焼土粒、炭化物を含むが、下層程混入割合が大きい。
2. 5Y R 3%, 明赤褐色、焼土層、固くしまっており、孔隙は少い。炉の焼土と関係するものか。
3. 10Y R 3%, 黒褐色、稍粘質、孔隙少、若干の炭化物ロームブロックを混入する。
4. 10Y R 3%, 暗褐色、稍粘質、孔隙大、ローム粒が多量に混入しており壁からの崩落土と思われる。

〈壁〉

他の住居跡同様、斜面下方の南西側の壁は検出できなかった。残存する壁高は北東壁で26cm、北西壁で13cm、南東壁で21cmを測る。

〈床〉

床面の遺存状態は概して悪い。植物根等の擾乱が床面まで及び凸凹が著しい。

〈柱穴〉

P<sub>1</sub>26×30×35cm, P<sub>2</sub>24×20×42cm, P<sub>3</sub>22×22×5cm, P<sub>4</sub>20×22×12cm, P<sub>5</sub>26×24×44cm,  
P<sub>6</sub>20×17×23cm, P<sub>7</sub>26×26×36cm, P<sub>8</sub>18×20×21cm, P<sub>9</sub>18×18×22.3cm

住居跡壁内周にめぐるように柱穴と思われるピットが検出された。他の住居跡のものに比較して掘り込みも深く、しっかりしたものである。

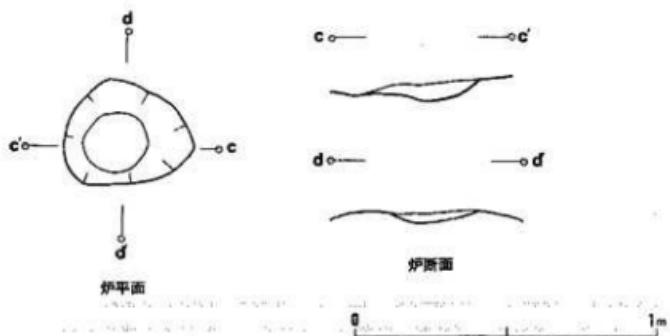
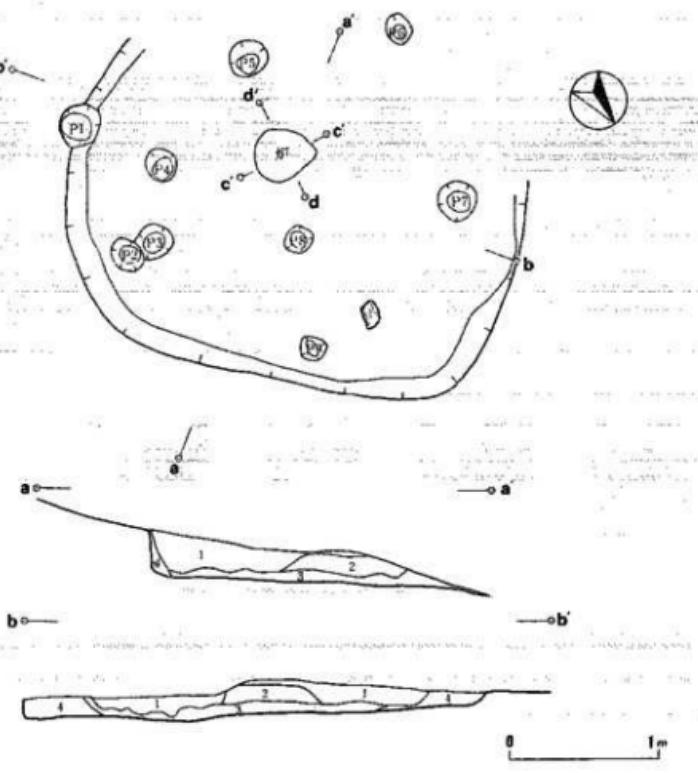
〈炉〉

床面中央部に焼土の広がりを確認した。所謂地床炉である。焼土層は1層で土色、土質とも住居跡覆土第2層と同じである。

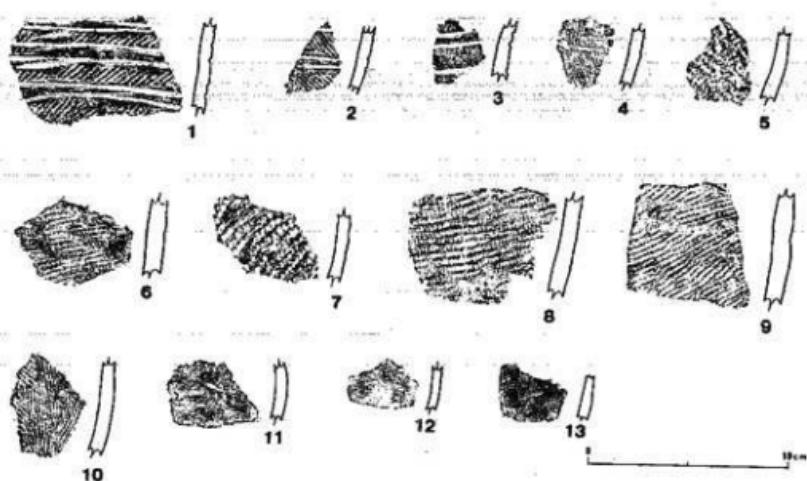
〈遺物〉

全て縄文土器片である。覆土中全体から出土したもので、平面分布に偏りは認められない。

第7図1～3は、磨消縄文手法により縄文帯と無文帯が重なるものであるが、全体では入組文での構図をとると思われ、縄文時代後期後葉に位置づけられる。4～10は全面縄文の施され



第6図 第3号住居跡



第7図 第3号住居跡出土土器

た破片であるが、やはり同時期のものであり、縄文の粗いことから判断して粗製土器と思われる。11~13は無文のものである。

#### 第4号住居跡

〈検出区〉 7-G, 7-H

〈規 模〉 柱穴位置から推定した長径525cm, 短径350cm

〈形 状〉 長円形

〈確認状況〉

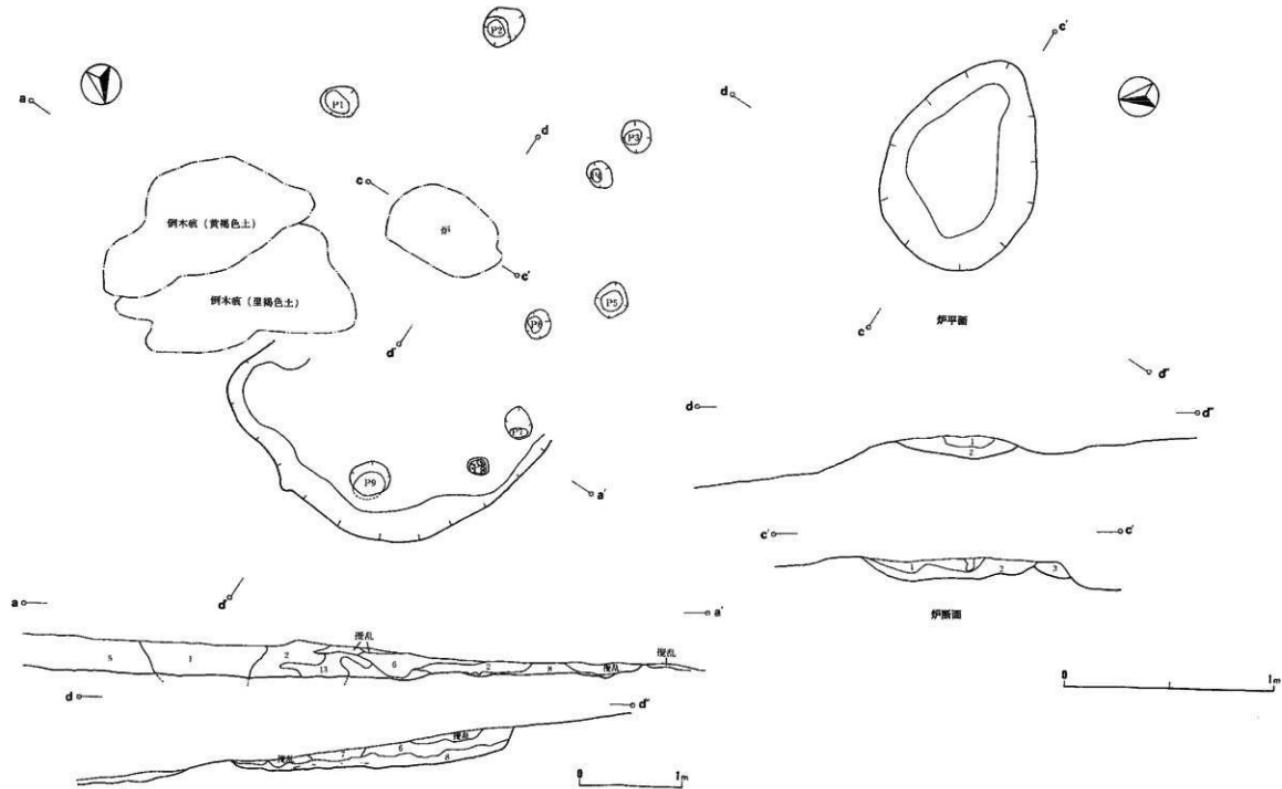
先ず周囲よりも若干暗い色調を呈する暗褐色土の広がりが検出され、次いで炉と思われる焼土が検出された。しかし、住居跡東側は倒木痕によって壊されており、全体の規模、プランの確定には、住居跡内覆土の除去を必要とした。

〈覆 土〉

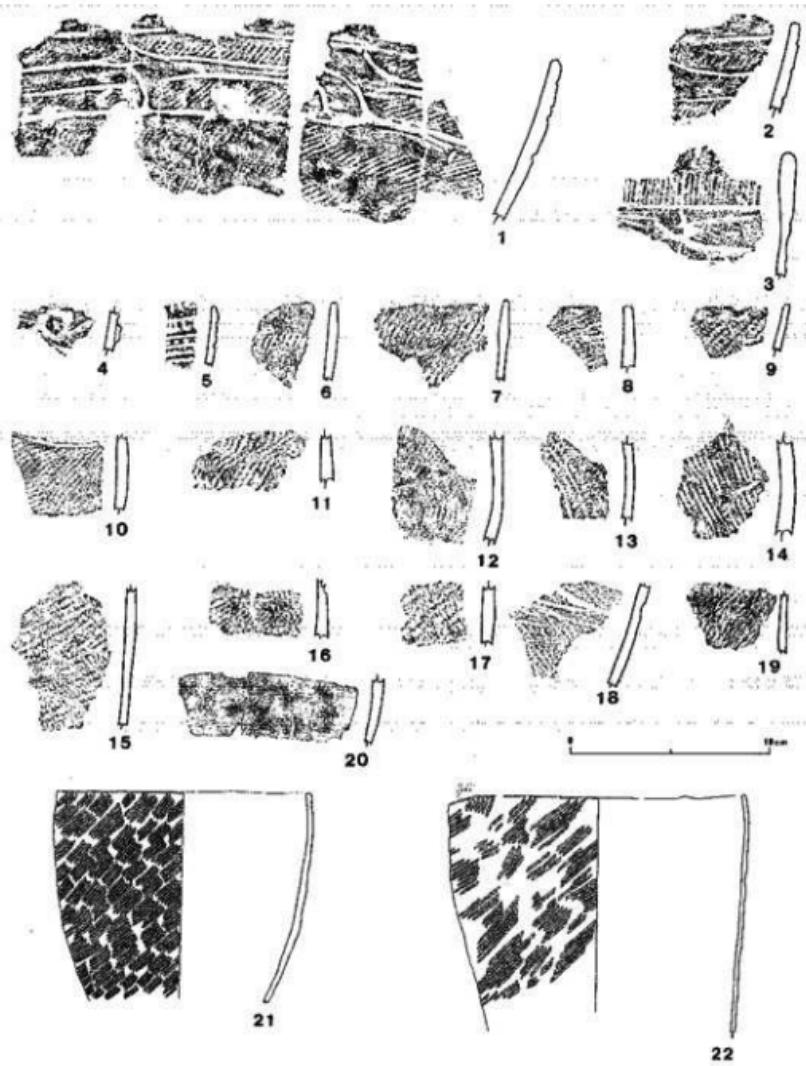
1~4は倒木痕覆土、5は地山層、6~8が住居跡内覆土である。

1. 10Y R 5%, 黒褐色、粘性弱、孔隙は比較的少い、若干の土器片を出土する。

2. 10Y R 5%, 黄褐色、粘性強、通常5層の下に認められるが倒木により逆転したもの。



第8図 第4号住居跡



第9図 第4号住居跡出土土器

0

20m

3. 10YR 3/4, 暗褐色, 粘性強, 孔隙少, ロームブロックの混入者しい。

4. 10YR 3/4, 橙色, 粘性強, 稍孔隙有, 暗褐色土粒混入。

5. 土色土性とも遺跡基本層位第IIIa層と同じである。

6. 10YR 3/4, 黒褐色, 粘性弱, 孔隙大。

7. 10Y R 5%, 黒褐色、粘性弱、孔隙稍有、出土した遺物は主にこの層中に包含される。

8. 10Y R 5%, 暗褐色、粘性弱、孔隙少、地山層へ漸移する。

#### 〈壁〉

斜面上に位置すると倒木痕のために、半分以上の壁は失われている。残存する壁高は、北東壁で14cm、北西壁で11cmである。

#### 〈床〉

全体に遺存状態は悪い。壁の残存する住居跡北側でも倒木痕のため床面は凸凹が著しい。

#### 〈柱穴〉

P<sub>1</sub> 30×36×12cm, P<sub>2</sub> 42×34×45cm, P<sub>3</sub> 30×32×14cm, P<sub>4</sub> 22×28×23cm, P<sub>5</sub> 36×32×50cm,

P<sub>6</sub> 30×24×16cm, P<sub>7</sub> 32×27×51cm, P<sub>8</sub> 20×18×6cm

ピットは全体に掘り込みが深く、柱穴と認め得るものが多い。P<sub>2</sub>, P<sub>4</sub>, P<sub>5</sub>, P<sub>7</sub>が主柱穴に相当すると思われる。

#### 〈炉〉

床面中央部に確認され、他の住居跡と同様の地床がである。

#### 〈遺物〉

他の住居跡と同様貼瘤の入組文土器が主体をなす。

第9図1, 2は同一個体である。口縁に突起をもち、口縁直下に入組文の施される文様帯をもつ。入組文自体は簡略化されたもので、入組部分は殆ど上下を結ぶ一本の沈線と化している。地文に使用された原体はL Rである。3はやはり口縁に突起をもち、文様帯内に入組文の施されるものであるが、口縁と文様帯間に刻目帯が設けられている。4は貼瘤の施された破片であるが、瘤上には刺突がなされている。5は時期的に稍異なるものである。口縁に刻みが施され、口縁下の文様帯には、平行沈線間にC字状の刻目、点列等が充填される。6~19, 21, 22は全面繩文の施された粗製の土器である。

### イ. 土壙

#### 〈各土壙内出土遺物〉

第15図1は、大洞B式に比定可能な無文の注口土器である。全面横位のミガキが丹念に施されている。唯一の文様として注口部分を中心に溝巻状の浮彫文が描かれ、注口部に向う三叉状陰刻が中に入れられる。2~4も同様大洞B式に比定できる鉢形土器である。4は口縁部に所謂B突起をもち、口縁部文様帶には入組三叉文が描かれる。胸部以下には撫りの綴いL R原体が横位に回転押捺される。

5は口縁に突起をもち、平行沈線間に刻目が施されたものである。全体としては入組文の構

第1表 第1号土壤観察表

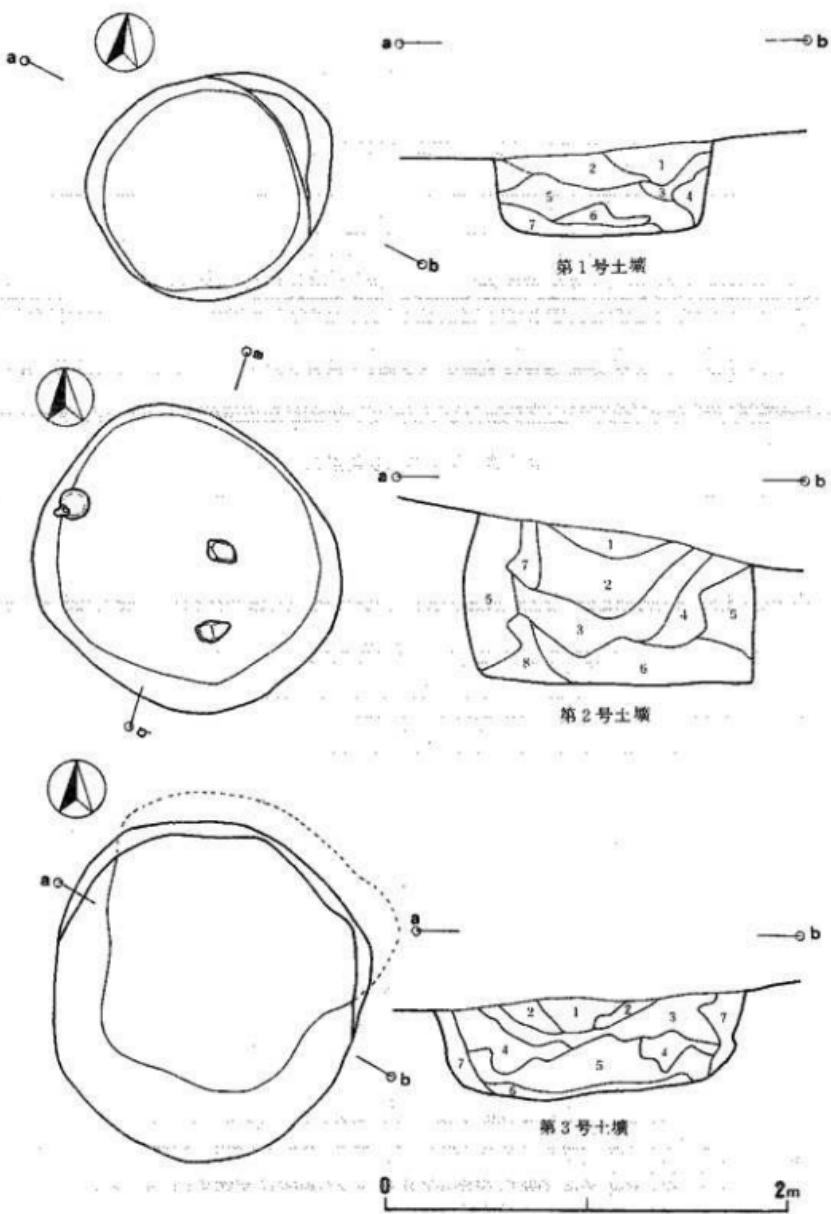
第1号土壤		播種	10	回版	9
検出区	6-L				
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角	
	122×110	96×96	42	93°~100°	
覆土	1. 10Y R 4% 暗褐色 粘質 孔隙少い 若干の炭化物混入				
	2. 10Y R 4% 暗褐色 粘性強 孔隙少い 炭化物褐色土粒僅かに含む				
	3. 10Y R 4% 暗褐色 粘質 孔隙多い キメ細かく褐色土多く含む				
	4. 10Y R 4% 褐色 粘質 孔隙多く 僅かに暗褐色土含む				
	5. 10Y R 4% 黒褐色 粘質 孔隙少 黒褐色土粒含む				
	6. 10Y R 4% 暗褐色 粘質 孔隙多 キメ粗い				
	7. 10Y R 4% 褐色 粘性強 孔隙少 キメ細かく均質				
出土遺物	全面縞文の施された土器敷片が出土している				

第2表 第2号土壤観察表

第2号土壤		播種	10, 15-L	回版	18
検出区	4-L				
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角	
	152×136	132×124	76	90°~91°	
覆土	1. 10Y R 4% 暗褐色 粘質 孔隙少い 黄褐色土粒混入する				
	2. 10Y R 4% 褐色 粘質 孔隙多い 炭化物混入する				
	3. 7.5Y R 4% 暗褐色 粘性強い 孔隙多い				
	4. 10Y R 4% 黑褐色 粘質 炭化物褐色土粒混入				
	5. 10Y R 4% 褐色 粘質 孔隙多い 黑褐色土混入				
	6. 7.5Y R 4% 暗褐色 粘性強 孔隙多い キメ粗い				
	7. 7.5Y R 4% 暗褐色 粘質 孔隙少い 混乱				
出土遺物	床面直上西側壁近くから注口土器(第15図1)が倒立した状態で出土している				

第3表 第3号土壤観察表

第3号土壤		播種	10	回版	10
検出区	5-K, 5-L				
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角	
	164×158	146×154	48	69°~128°	
覆土	1. 10Y R 4% 暗褐色 粘質 孔隙比較的小 黄褐色土粒が混入する				
	2. 10Y R 4% 明褐色 粘性大 孔隙少 均質 キメ細い				
	3. 10Y R 4% 黑褐色 粘質 孔隙大 炭化物若干含む 黄褐色土粒若干混入				
	4. 10Y R 4% 黑褐色 粘性大 孔隙小 キメ細かく僅かに黄褐色土粒の混入するもの均				
	5. 10Y R 4%				
	6. 10Y R 4% 褐色 粘性大 孔隙比較的大 キメ比較的大 黑褐色土粒混入する				
	7. 10Y R 4% 褐色 粘性大 孔隙大 キメ荒い 明褐色 粘性大 均質であり底面黄褐色土へ漸移				



第10図 第1号土壤～第3号土壤

第4表 第4号土壤観察表

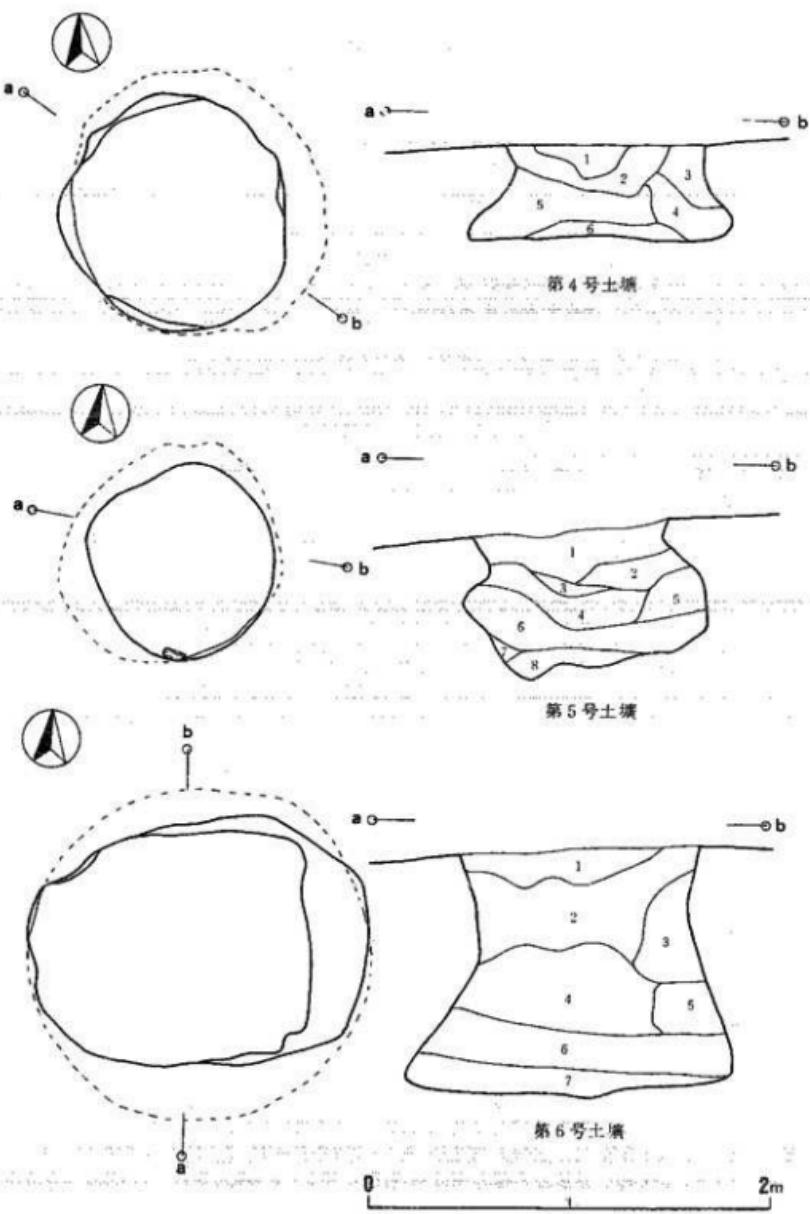
第4号土壤		挿図	11, 15-(2~4)	図版	18
検出区	7-H, 7-I				
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角	
	118×112	138×122	46	49°~52°	
覆土	1. 10Y R 4% 暗褐色 粘性質 孔隙小 僅かに炭化物を含む				
	2. 10Y R 4% 黒褐色 粘性小 孔隙稍有 黄褐色土粒子僅かに混じる				
	3. 10Y R 4% 褐色 粘性稍有 孔隙大				
	4. 10Y R 4% 黑褐色 稍粘性質 孔隙小				
	5. 10Y R 4% 黑褐色 粘性弱 孔隙稍有 黄褐色土粒子若干含む				
	6. 10Y R 4% 褐色 粘性大 孔隙稍有 黑色土粒 黄褐色土粒のまじったもの				

第5表 第5号土壤観察表

第5号土壤		挿図	11	図版	10
検出区	7-M				
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角	
	94×96	114×106	68	—	
覆土	1. 10Y R 4% 暗褐色 孔隙小 粘性強 炭化物 径1~2mmが1~2%混入かたくしまる				
	2. 10Y R 4% 褐色 孔隙中 粘性弱 炭化物10~12mmが1%混入				
	3. 10Y R 4% 褐色 孔隙小 粘性やや有しまっている				
	4. 10Y R 4% 褐色 孔隙中 粘性やや有 炭化物3~4mm 1~2%混入				
	5. 10Y R 4% 暗褐色 孔隙小 粘性弱 比較的もろい 10Y R 4% 褐色土が25~30%固状に混入				
	6. 1CY R 4% 暗褐色 孔隙大 粘性弱 非常にもろい 炭化物1~2%混入				
	7. 10Y R 4% 褐色 孔隙小 粘性強				
	8. 10Y R 4% 褐色 孔隙小 粘性強 非常にかたくしまって均質である				

第6表 第6号土壤観察表

第6号土壤		挿図	11	図版	12
検出区	7-L, 7-M				
法量	開口部径	底径	深さ	傾斜角	
	169×120	170×164	124	54°~72°	
覆土	1. 10Y R 4% 暗褐色 孔隙小 粘性強 炭化物 (5~6mm) が1~2%混入 植物根混入				
	2. 10Y R 4% 黄褐色 孔隙中 粘性小 もろい 径3~4mmの石が混入				
	3. 10Y R 4% 褐色 孔隙大 粘性弱 10Y R 4% の黒褐色土が2~3%混入 もろい				
	4. 10Y R 4% 褐色 孔隙大 粘性弱 径7~8mm小石全体に混入に非常 非常にもろい				
	5. 10Y R 4% 黄褐色 孔隙大 粘性弱 砂質土 径1~2mm炭化物 1~2%混入 ややもろい				
	6. 10Y R 4% 暗褐色 孔隙大 粘性強 炭化物 5層とのきかいに部分的に混入 もろい				



第11図 第4号土壤~第6号土壤

第7表 第7号土壤観察表

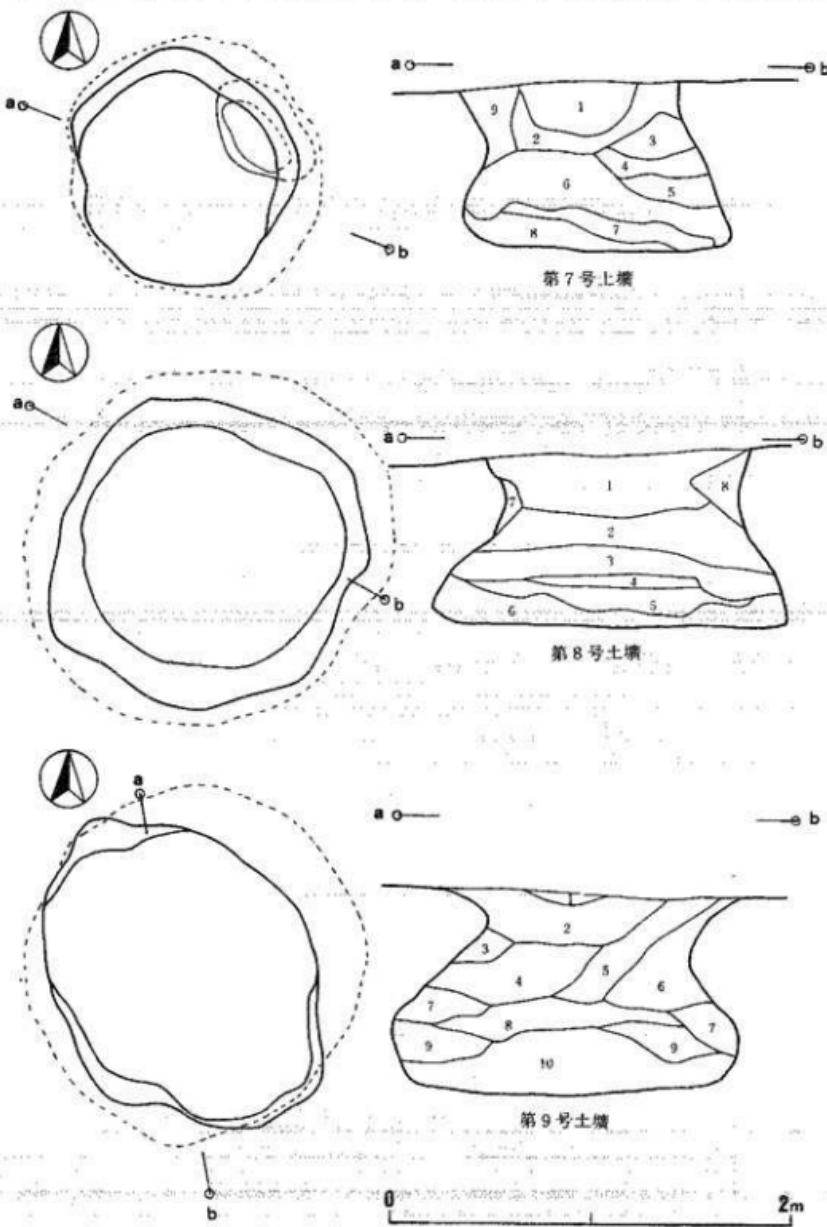
第7号土壤		播 国	12, 15~5	国 版	18
検出区	5-L	開口部径	底 径	深 さ	傾 斜 角
法量		110×108	132×122	84	61~66
覆 土					
1. 10YR 5/ 黒褐色 孔隙性小 粘質性やや強 均化物(径5~7mm)を1~2%含む 植物根を含む 2. 10YR 5/ 孔隙性少く7.5YR 5/ 黑褐色土が塊状(径5~6cm)に含まれる(ラスコビットの崩れたものと思われる)粘質性強 植物根を含む 3. 10YR 5/ 黒褐色 孔隙性が少ない 粘質性弱でボソボソした所も感じられる 4. 10YR 5/ 黑褐色 粘質性弱 孔隙性大 7.5YR 5/ 黑褐色土を50%含む(ラスコビットの崩れたものと思われる) 5. 10YR 5/ 黑褐色 粘質性強 ボソボソしている 均化物(径3~4mm)を1~2%含む 6. 7.5YR 5/ 黑褐色 粘質性強 径2~3mmの粒子(礫土)層である 孔隙性大 均化物(径4~5mm)が3~5%含まれる 7. 7.5YR 5/ 黑褐色 孔隙性小 粘質性強で均質 8. 7.5YR 5/ 黑褐色 孔隙性大 粘質性中 径2~3mmの粒子が全体に混入しており非常にもろい 9. 7.5YR 5/ 黑褐色 孔隙性小 粘質性ややあり 均質(ラスコビットの崩れたものと思われる)					
出土遺物	覆土中から後葉の土器片を出土している。				
倫 方	底面東側に径60×40cm、深さ10cm程度のビットをもつ。				

第8表 第8号土壤観察表

第8号土壤		播 国	12	国 版	13
検出区	5-L	開口部径	底 径	深 さ	傾 斜 角
法量		144×148	170×196	84	40°~53°
覆 土					
1. 10YR 5/ 黑褐色 粘質性で孔隙やや有 均化物質褐色土粒若干混入 2. 10YR 5/ 黑褐色 粘質性で孔隙大 質褐色土粒混入一部かたくしまる 3. 10YR 5/ 黑褐色 粘質性ではぼそとしている ロームブロック混入 4. 10YR 5/ 黑褐色 粘質性ではぼそとしている 黃褐色土粒混入 5. 10YR 5/ 粘質性 キメが荒い キメが荒い 6. 10YR 5/ 喀褐色 粘質性 キメこまかい しまっている 7. 10YR 5/ に古い 黃褐色 粘質性 しまりかたい 8. 10YR 5/ 喀褐色 粘質性 キメ細かい 黑褐色土炭化物若干混入					

第9表 第9号土壤観察表

第9号土壤		播 国	12, 15~(6~9)	国 版	18
法量		開口部径	底 径	深 さ	傾 斜 角
		174×130	168×168	100	44°~50°
覆 土					
1. 10YR 5/ 黑褐色 稕粘質 孔隙小 稲作土からの沈下と思われる10~20mm程度の理を含む 2. 10YR 5/ 黑褐色 粘質 孔隙小 径2~7mm程度のローム粒及び炭化物粒を含む 3. 10YR 5/ 喀褐色 粘質 孔隙大 黄褐色土粒子と喀褐色土粒子の混じり合ったもので土壤頭部の崩落土 4. 10YR 5/ 黑褐色 粘質性 孔隙比較的小 1bに比較してキメ細く2~7mm程度のローム粒炭化物粒を含む 5. 10YR 5/ 黑褐色 稕粘質 孔隙小 黄褐色土粒の混入が僅かなため全体に黒色に近く見える 6. 10YR 5/ 喀褐色 粘質 孔隙稍有 ローム粒(黄褐色土粒)と喀褐色土粒の混じり合った崩落土 7. 10YR 5/ 喀褐色 粘質 孔隙極端に多い ローム粒炭化物粒の混じり合ったものであり炭化物若干含む 8. 10YR 5/ 黑褐色 粘質性 孔隙稍有 キメ細かい キメの細い黄褐色土粒子が少量 炭化物僅かに混入 9. 10YR 5/ 黑褐色 粘質 孔隙大 砂地山(土壤掘り込み層)土のブロック僅かに喀褐色土が混じる 炭化物僅かに混入 10. 10YR 5/ 黑褐色 粘質性 孔隙稍有 炭化物が僅かに混入する					



第12図 第7号土壤～第9号土壤

第10表 第10号土壤観察表

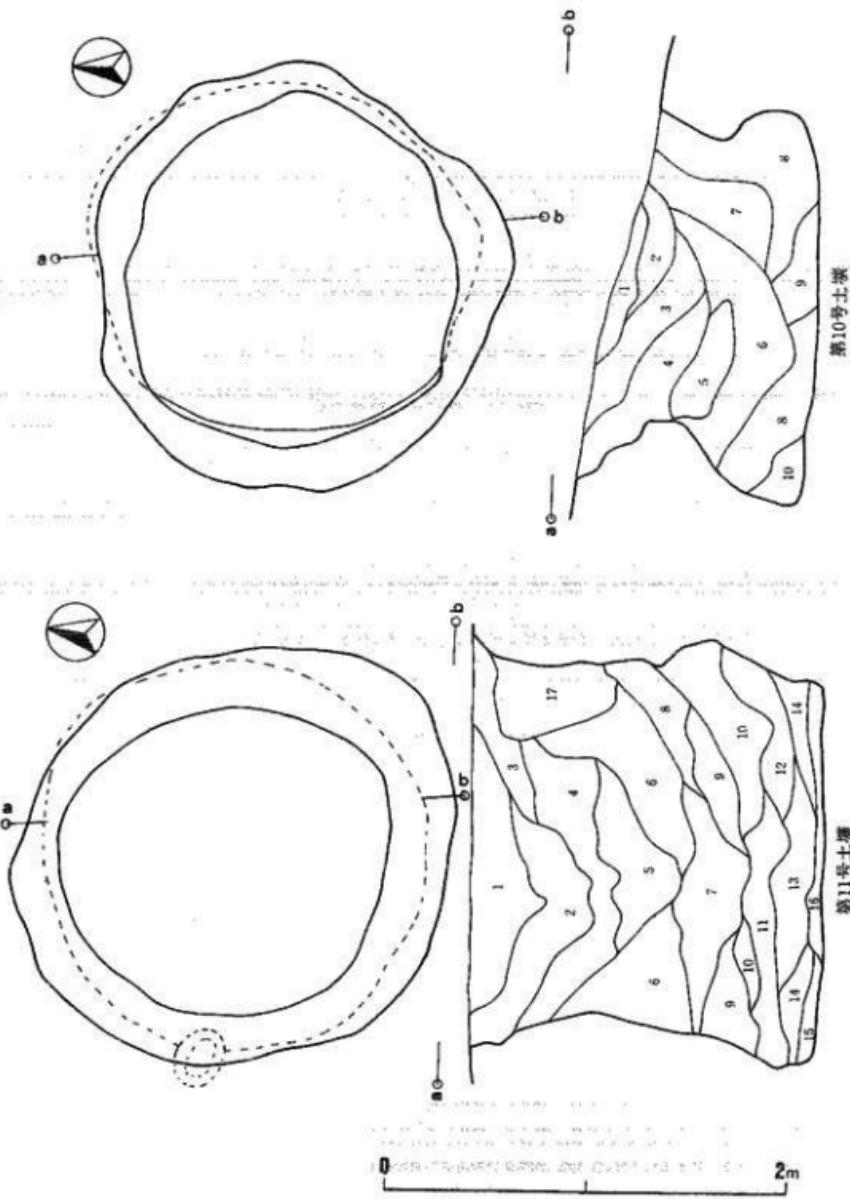
第10号土壤		沖 国	13	國 版	14
検出区	法量	開口部様	底 様	深さ	傾斜角
		210×204	196×172	100	36°~45°
覆 土	1. 10YR 5/6 黒褐色 粘質 孔隙少くしまっていて均質				
	2. 10YR 5/6 黒褐色 粘質 稍孔隙がある 炭化物を混入する				
	3. 10YR 5/6 暗褐色 粘質 孔隙がある 僅かに炭化物混入する				
	4. 10YR 5/6 暗褐色 粘質 孔隙は少くしまっている				
	5. 10YR 5/6 黒褐色 粘質 孔隙ある 壁の崩落土?				
	6. 10YR 5/6 黒褐色 粘性強い 孔隙あり 炭化物バミスを含む				
	7. 10YR 5/6 暗褐色 粘性強い 孔隙は少くローム粒若干混入				
	8. 10YR 5/6 黒褐色 粘性強い 孔隙あり ローム粒若干混入				
	9. 10YR 5/6 暗褐色 粘性非常に強く孔隙は少い 多量のローム混入				
	10. 10YR 5/6 褐色 粘性弱く孔隙は多い 非常にもろい				

第11表 第11号土壤観察表

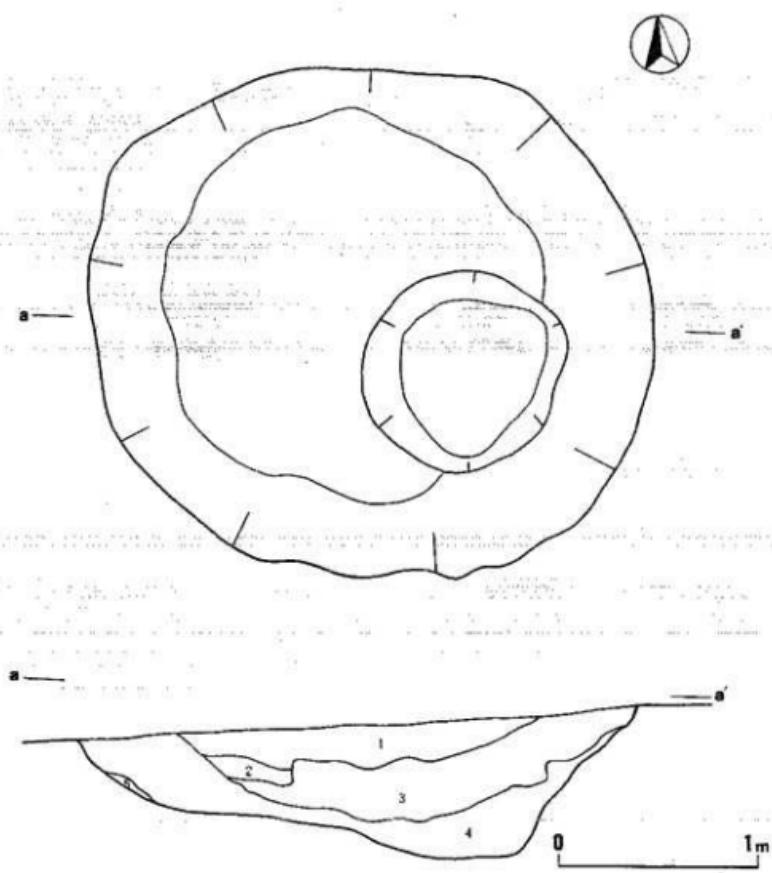
第11号土壤		沖 国	13, 15~(10~18)	國 版	18
検出区	法量	開口部様	底 様	深さ	傾斜角
		230×206	200×190	174	76~77
覆 土	1. 10YR 5/6 黒色 粘質 孔隙は少い 硫酸を僅かに含む				
	2. 10YR 5/6 暗褐色 粘質 孔隙少く褐色土黒褐色土の混り合ったもの				
	3. 10YR 5/6 暗褐色 粘性強 孔隙少 キメ細かく比較的しまっている。				
	4. 10YR 5/6 暗褐色 粘質 孔隙あり 色調棕明るく炭化物が混入する				
	5. 10YR 5/6 暗褐色 粘質 孔隙あり 色調は暗い 炭化物僅かに混入する				
	6. 10YR 5/6 暗褐色 粘性 孔隙あり 暗褐色土でブロック状に混入する				
	7. 10YR 5/6 暗褐色 粘性強くよくしまっている				
	8. 10YR 5/6 黑褐色 粘質 孔隙多い 炭化物少量混入				
	9. 10YR 5/6 褐色 粘質 孔隙少なくよくしまっている				
	10. 10YR 5/6 黑褐色 粘質 孔隙多く炭化物少量混入				
	11. 10YR 5/6 褐色 粘質 孔隙少くよくしまったブロック状部分と孔隙の多い部分に分けられる				
	12. 10YR 5/6 暗褐色 粘質 孔隙多い 極褐色土混入				
	13. 10YR 5/6 黑褐色 粘質 孔隙多い				
	14. 10YR 5/6 褐色 ブロック状であり暗褐色土が隙を埋める				
	15. 10YR 5/6 褐色 孔隙は多いが均質である				
	16. 10YR 5/6 黑褐色 粘質 孔隙多い 炭化物多く混入				
	17. 10YR 5/6 暗褐色 鋼面の未崩落土				
出土遺物	全面縦文の施された土器片が出土している (第 10~18)				

第12表 第12号土壤観察表

第12号土壤		沖 国	14, 15~(19~20)	國 版	
法量	開口部様	底 様	深さ	傾斜角	
		284×248	190×180	52	124°~149°
覆 土	1. 10YR 5/6 黒褐色 粘質 孔隙少く少量のバミスを含む				
	2. 10YR 5/6 褐色 粘質 孔隙少く炭化物極く僅かに含む				
	3. 10YR 5/6 黒褐色 粘質 孔隙少く炭化物僅かに含む				
	4. 10YR 5/6 黑褐色 粘質 孔隙少くバミスを含む				
	5. 10YR 5/6 暗褐色 粘質 孔隙多い地山層へ漸移する				
出土遺物	第4層中から全面縦文の施された破片を出土				
備考	底面・鋸面とも軟弱である。底面東側に深87×100cm、深160cm程のピットをもつ				

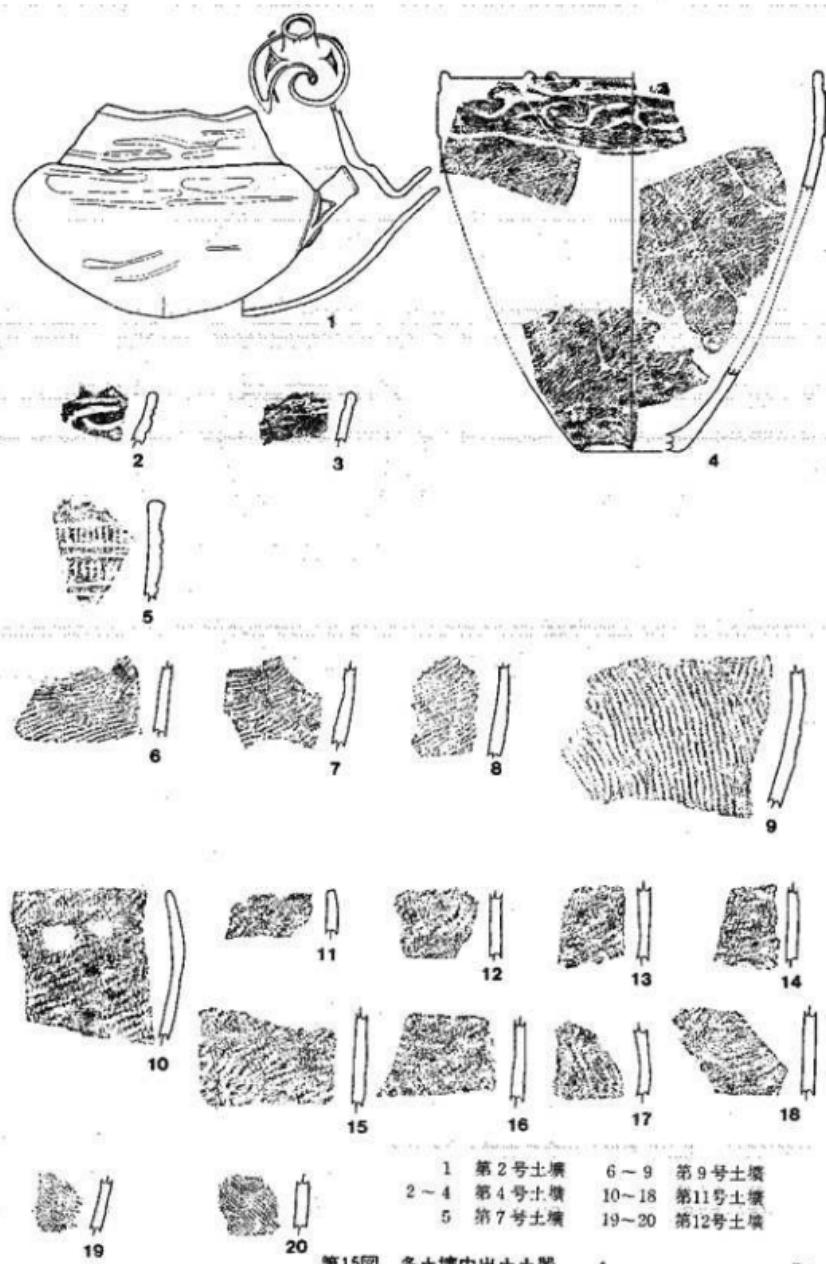


第13図 第10号土壤～第11号土壤



第14図 第12号土壤

図をとるものであり、後期後葉に位置づけられる。6~20は全面縄文の施された破片であり、後期後葉から晩期にかけての粗製土器と思われる。



第15図 各土壤内出土土器

#### ウ. 埋設土器遺構（第16図、第17図）

第1号住居跡南側 4-Hで検出された。

2個の埋設土器とも押漬された状態で確認された。

S X(UJ01)：全体の $\frac{1}{3}$ 程度が欠失した状態で検出された。断面では、押漬されて大きく開いた形状を呈する。埋置のためのピットは殆ど浅くしか掘り込まれておらない。覆土は、色調10YR $\frac{4}{4}$ 暗褐色を呈し、下部では地山層に漸移する。

土器は、口縁に12単位の突起をもち胴部半ばに屈曲部をもつ鉢形土器である。口縁の突起は、山形のものと頂部が二叉に分かれるものとが6単位づつ交互に配置され、突起下に沿って刻目帯がめぐる。文様帶は、胴部半ばの屈曲部を境として上段と下段に分かれるが、上段では刻目、下段では繩文による入組文が描かれる。いづれも無文部分にはミカキが施されているが、沈線自体の描き方は非常に粗雑である。繩文はJR原体を使用している。

S X(UJ02)：口縁部から胴部上半にかけての破片が、胴下半の破片と重なるように沈下している。特に南側の胴下半部は大きく内側に陥没している。埋置するために用いられたピットは埋設土器と殆ど同じ程度の規模しかもっておらない。ピット内の覆土は色調10YR $\frac{4}{4}$ 暗褐色を呈し、粘質で僅かながら炭化物を含む。

土器は、口縁部に8単位の3個1組の突起をもつ鉢形土器である。各突起頂部は二叉に分かれる。文様帶には平行沈線と刻目によって入組文が描かれるが、左傾する入組文の各入組部分は口縁部突起と対応する位置に設けられる。胴部はRL原体が横位に回転押捺されるが、底部近くの7cm程は無文となる。底部はその中心で1cm程抉り取られ極端な上げ底を呈する。

#### エ. 配石遺構（第18図、第19図）

##### 〈確認状況〉

調査区のほぼ中央10-J, 9-Jで確認された。

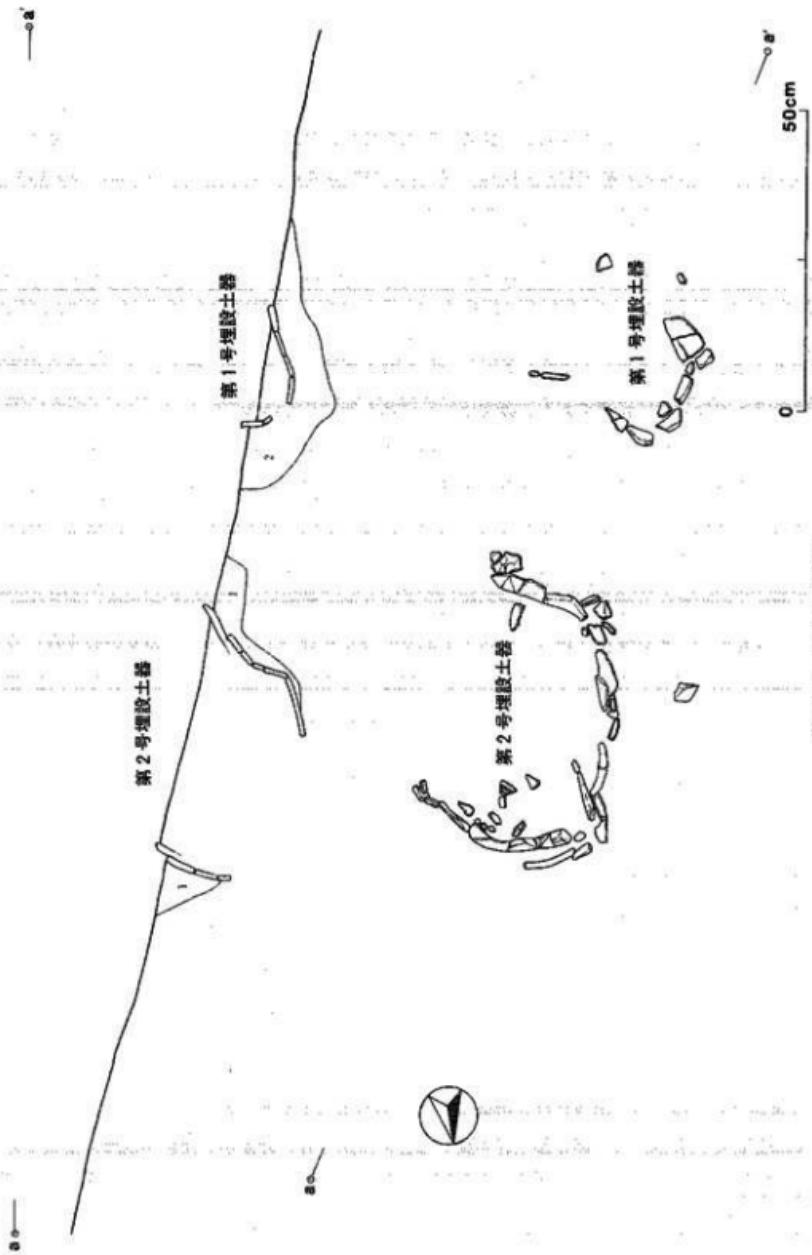
環状に礫を配した礫のまとまりと、その外周を弧状に囲むように配された10数個の礫からなる。中央部に位置するまとまりは長径が250cm前後、短径が190cm前後の範囲に礫の配されたものであるが、外縁に比較的大な礫を並べた後、内部に扁平な礫を西側から重ねるように立てて充填している。

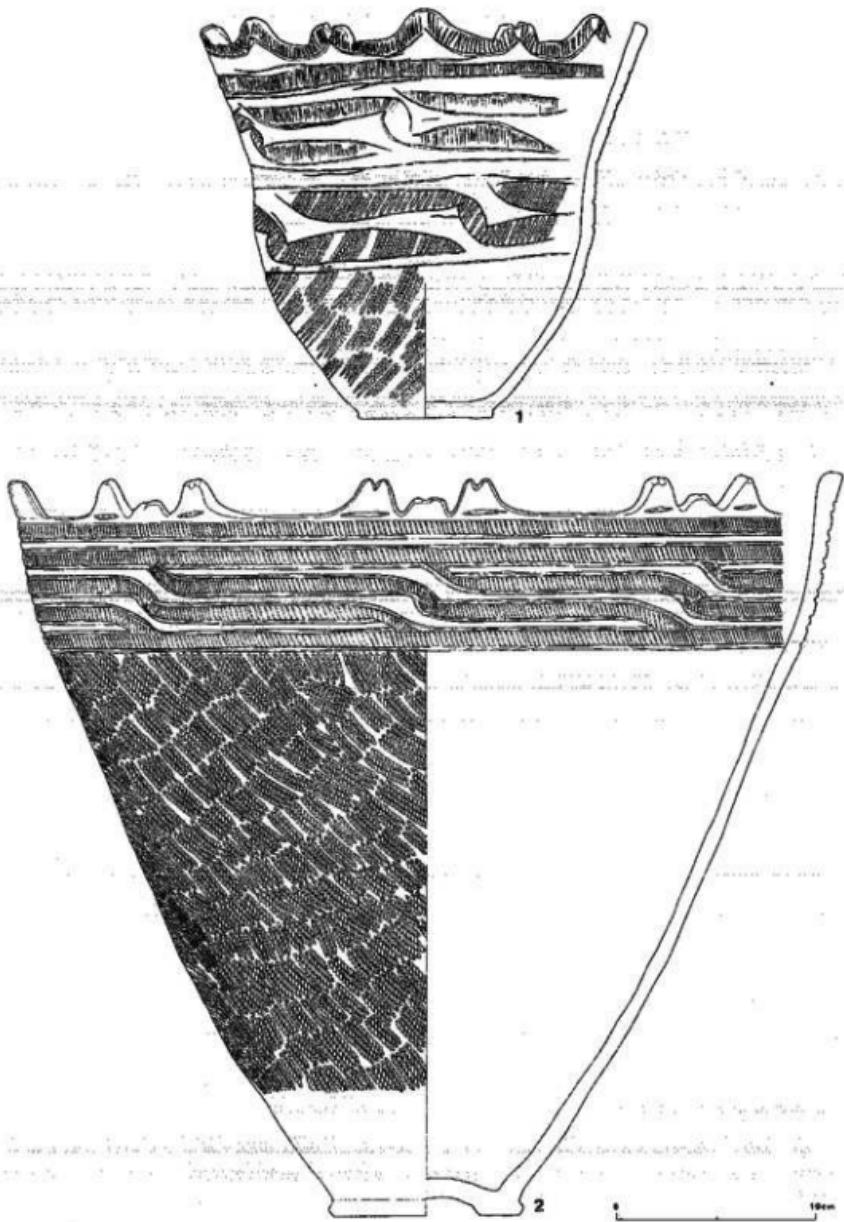
外周を囲む礫は、中央部に位置する礫のまとまりの東側の東側に弧状に配されており、西側では確認されなかった。礫自身は比較的大きいものが用いられている。

配石を取除いた後には、礫が置かれた浅い窪みが認められた程度で土壤等の施設は検出されなかつた。

配石の覆土註記は以下の通りである。

第16圖 理設土器遺構





第17図 埋設土器

1. 10YR%, 黒色、粘性弱く、孔隙多い、粒径の大きいパミス（径7～10mm）が若干量含まれる。耕作によると思われる有機物の混入も甚しい。
  2. 10YR%, 黒褐色、粘性弱く、孔隙も多い。粒径の小さいパミス（径3～5mm）が若干量含まれる。
  3. 10YR%, 黒褐色、粘質、キメ細かく、孔隙も少い。混入物も殆どなく均質。

〈關邊出土土器〉

土器は配石の周辺及び壁の間等から出土している。土器は全て破片であり、出土の状況も配石自体の構築時期を決定できるようなものではない。

第19図1, 2は同一個体である。R Lと思われる多条の原体を用い、回転方向を変えて羽状の効果を出したものである。器厚は厚手で胎土に繊維を混入する。前期のものであろう。3~12は全面繩文の施された破片である。原体はLRが多い。後期~晩期にかけての粗製土器と思われる。

才，遺樓外出土遺物

遺構外からの遺物出土量はそれ程多くはない。時期的には、縄文時代前期、後期前葉、後期中葉に大きく分けられる。

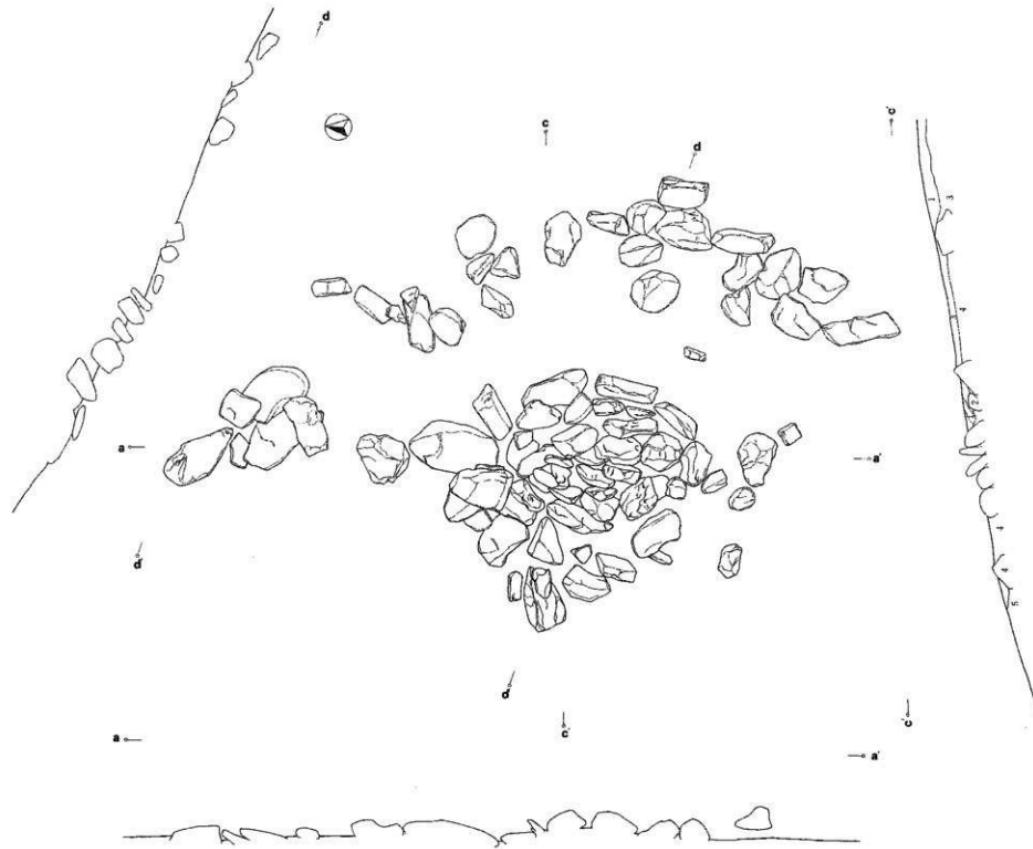
第20図1, 2は、配石造構周辺からの出土であり第19図1, 2と同一個体である。3はトレンチ調査区からの出土である。全面LR原体が横位に回転押捺される。胎土には纖維が含まれており、1, 2同様前期のものであろう。

4-11は、地文としての譯文が施された後に比較的太い沈線で、平行沈線文、曲線文が描かれたものである。後期前葉に位置すると思われる。12、13は、無文地の上に2本1組の沈線で幾何学的な文様が描かれている。沈線間は微隆帶となる。十腰内I式に比定される。14、15は地文として細かなL R原体が回転押捺された上に、細い沈線によって平行沈線文の描かれたものである。やはり後期前葉に位置すると思われる。

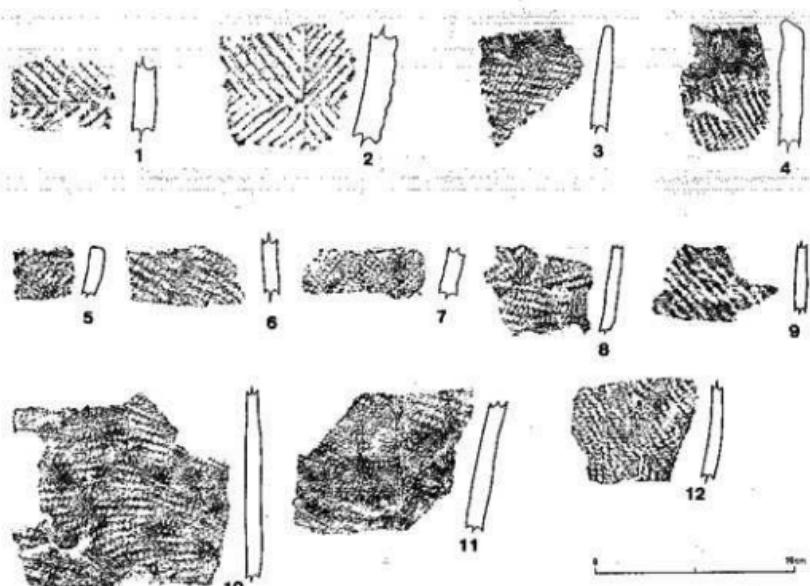
16-22は、住居跡等からの出土しているのと同様の入組文の施された土器である。入組文中には縄文の施されたもの、刻目の施されたものがある。23は無文の臺形土器口縁部から頭部にかけての破片である。口縁上には、山形の突起が付され突起上には刺突がなされる。後期後葉～晩期前葉のものであろう。

24-33は、全面縄文の施された破片である。後期後葉～晚期前葉に伴出する粗製土器と思われる。

34は、トレンチ調査区内で出土したヘラ形石器である。頁岩を素材として画面が丹念に削制

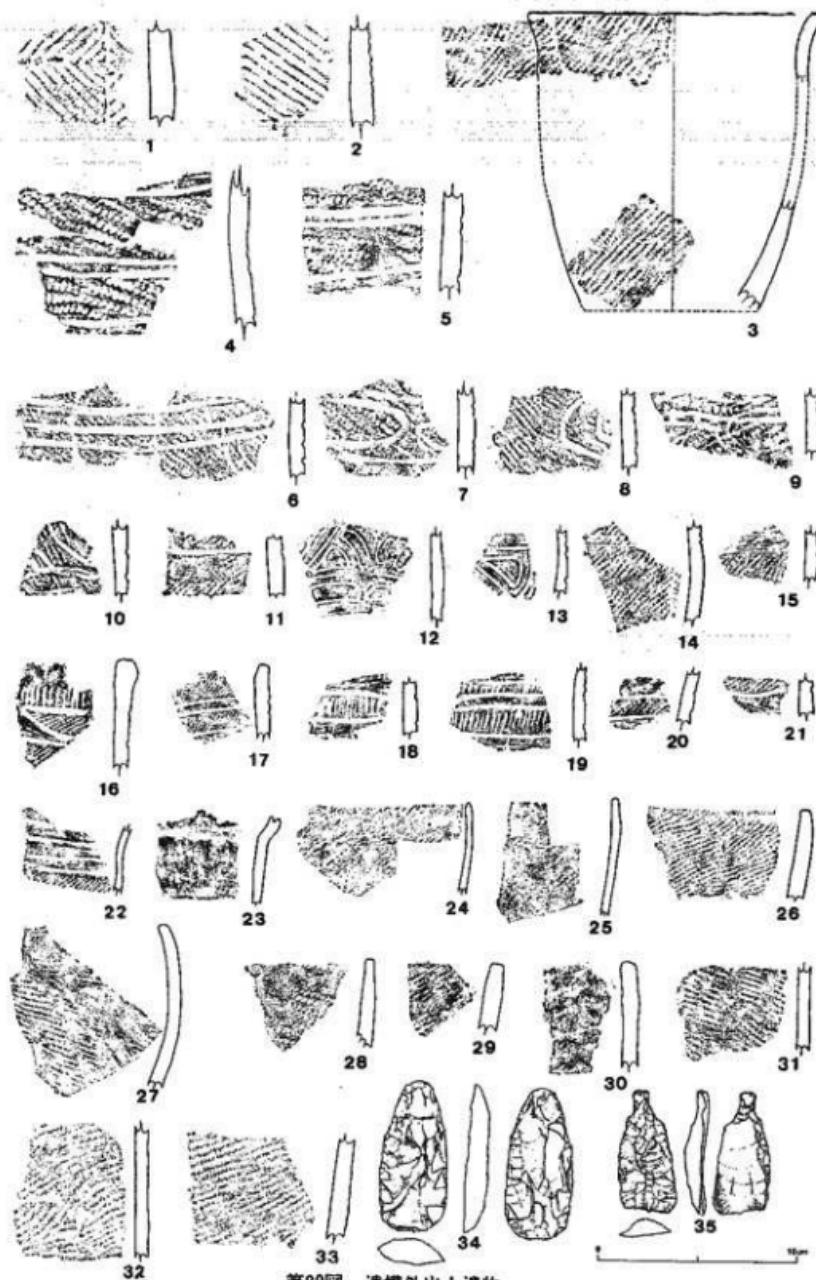


第18図 配石造構



第19図 配石遺構周辺出土土器

され、母岩からの第1次剥離の際の主要剥離面は残っていない。35もやはりトレンチ調査区内で出土した石匙である。やはり頁岩を素材としている。つまみ部分には第1次剥離の際の打面が残り、左側縁及びつまみ部分のくびれには背面からも調整剥離が施される。



第20図 造構外出土遺物

## 6. まとめ

案内II遺跡からは、住居跡、土壙、埋設土器遺構及び配石遺構等が検出されている。これら遺構は台地上部の平坦面ではなく、南及び南西側に面した緩斜面上に検出されたものである。

配置図が示すように、4棟の住居跡は半径10m前後の円弧上に載る形で配置されているが、これは住居跡の占地する台地地形、即ち図面上で見る等高線に沿ったものではない。4棟の住居跡を通る円弧は、むしろ等高線に交わる形で引くことができる。また、案内II遺跡で検出された遺構の中で数量的に大きな比重を占める土壙は、第1号～第3号、第7号、第8号、第10号の6基からなる群と、第5号、第6号、第9号、第11号の4基からなる群という2つの群に分かれて、住居跡を通る円弧の外側、西側のより下位の斜面上に存在する。

このような遺跡における住居跡の占地形態を、県内の他の遺跡について比較のため見てみたい。能代市杉沢台遺跡は、縄文時代前期の大型住居跡4棟を検出した遺跡であるが、大型から小型のものまで計44棟の住居跡、ほぼ同時期とされる108基のフラスコ状土壙を検出している。杉沢台遺跡の調査区は北東へ向う台地とその斜面が選定されているが、4基の大型住居跡は台地の中央寄りに、他の中型・小型の住居跡は台地縁辺部に、フラスコ状土壙は斜面上に位置している。4棟の大型のものを除いては台地縁辺部に住居跡が並ぶため、住居跡全体の配列は弧状を呈する。

また、男鹿市大畠台遺跡は、縄文時代中期の住居跡51棟、フラスコ状土壙10基を検出しており、計6基の変遷が考えられている遺跡である。遺跡の調査区は舌状に張り出した台地1つが選ばれており、各期の住居跡はほぼ台地縁辺に環状に近い形で配列されている。フラスコ状土壙は6期のうち前半期に限られるが、主に住居跡の並ぶ円周の外側、南東側の縁辺部に群をなして存在している。

案内II遺跡の場合はどうであろうか。前述したように案内II遺跡の4棟の住居跡は等高線に沿った配置がとられていない。つまり、地形に応じての住居の占地が行われてはいない。そして、遺跡の立地する台地全体の中にあって、住居跡の配置から求められる面的拡がりとしての空間の割合は極く小さなものとなっている。このような住居跡の占地形態では、台地全体で住居の密集空間がその内と外を画することなく、したがって「広場」的な空間が形成されることもない。

縄文時代の住居跡は、概して舌状に張り出した台地縁辺部で検出されることが多い。したがって住居跡の配置自体は台地の形状に応じて弧状、馬蹄形、環状といった形をとることになる。さらに、このような住居跡の配置がとられると、同一の台地（1つの集団の共通の生活領域の

核的存在と考えることも可能である）の中で住居の密集する空間とそうではない空間とが生まれてくる。そして住居跡の検出される遺跡にあって、後者のような空間は「広場」とい概念が与えられ、集団の構成員が共用しうる空間とする見方がある。こうした考え方方に立脚した場合、杉沢台遺跡、大畠台遺跡とも地形に応じてそれぞれ弧状、環状といった形で住居跡の密集する空間が形成され、それに囲まれた住居の非密集空間として前者では4棟の大型住居跡、後者では文字通りの「広場」的な遺構の存在しない空間が形づくられているのである。

しかし、このような「広場」的な空間の形成にはある程度の長期的な台地の利用を前提としている。大畠台遺跡の場合はVI期の変遷があつて成立しており、杉沢台遺跡の場合も6期の変遷が認められている。翻えて案内Ⅱ遺跡の場合には出土する遺物から見る限り、長期に亘って台地が利用されたとは考えにくく、時期は縄文時代後期後葉の一時期に限定することができる。したがって確認された住居跡も少なく、占地する空間も狹少なものに限られていると思われる。一つの可能性として留めておくが、案内Ⅱ遺跡の4棟の住居は同時に存在した単位として認識し得ると思われ、その単位が何時期かを経ることにより最終的には杉沢台、大畠台のような住居の占地形態に発達すると考える。即ち、検出された4棟の住居跡は縄文時代後期後葉に営まれた1つの単位であり、このような単位が、何期かを経て後に地形に即応した住居跡の配置をもって検出されるようになると思われる。無論、縄文時代遺跡の住居跡群の形成には様々なパターンがあり、弧状、馬蹄形、環状の配置をとる遺跡であっても、案内Ⅱ遺跡から推測されるように結果として「広場」的な空間が作られる場合と、遺跡が生活の場として選定された当初から「広場」的な空間を作りながら住居跡の数を増す場合等々あろう。また、時期的な特徴が住居群の占地形態に表われる場合も考え得る。

いづれ遺跡に於ける住居群の占地形態という現象は、その背後にある遺跡を担った人間集団を考える時大きな手掛りとなり得るものであろうし、こうした問題を含めて今後課題としてゆきたい。

## 付

本遺跡第1号住居跡（コードS I 003）、第10号土壌（コードS K(f)018）出土炭化物の<sup>14</sup>C測定を日本アイソトープ協会に依頼した。結果は以下の通りである。

## 測定結果報告書

昭和56年1月23日に受取りましたC-14試料の測定結果がでましたのでご報告します。

N-4135	TW19 S K(f)018	2800±80yB.P. (2720±75yB.P.)
N-4136	TW19 S I 003	2980±80yB.P. (2900±80yB.P.)

年代は<sup>14</sup>Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのばる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読み取りの誤差から計算されたもので、<sup>14</sup>C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお<sup>14</sup>C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）

調査参加者

畠山 末治 神田 良勇 井上 政治 奥村 一三 梅戸 正次郎 川又 秀也  
川又 武司

豊田 よ里 浅石 恵留子 相川 金子 川又 ヤエ 鬼沢 キヨエ 奥村 初恵  
中西 リチ 相川 リヨ 賀川 政子 石鳥谷 妙子 柳沢 ヤス 三カ田 孝子  
田中 ヨシエ 作山 ミエ 苗代沢 ノブ 津江 和子 金沢 ハルエ  
小田島 札子 畠山 陽子 阿部 シガ 小田島 キク 斎藤 キクエ  
浅石 夕ミ 井上 トミエ 工藤 スミ 工藤 キヌ 工藤 イツ 阿部 シマ  
佐藤 キエ 松岡 トキヨ 高畠 サキ 阿部 シモ 三上 美子 三上 トヨ  
柳沢 ヤス 安保 柳



遺跡遠景



図版 1

遺跡近景

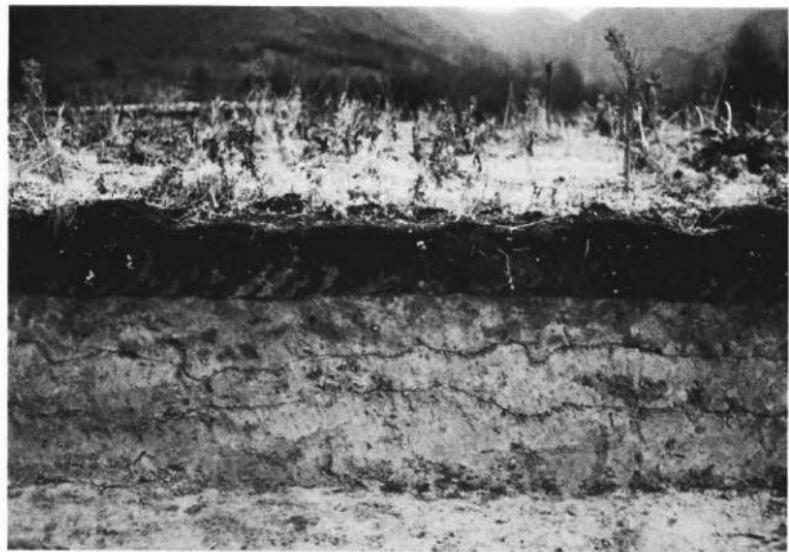


遺跡全景

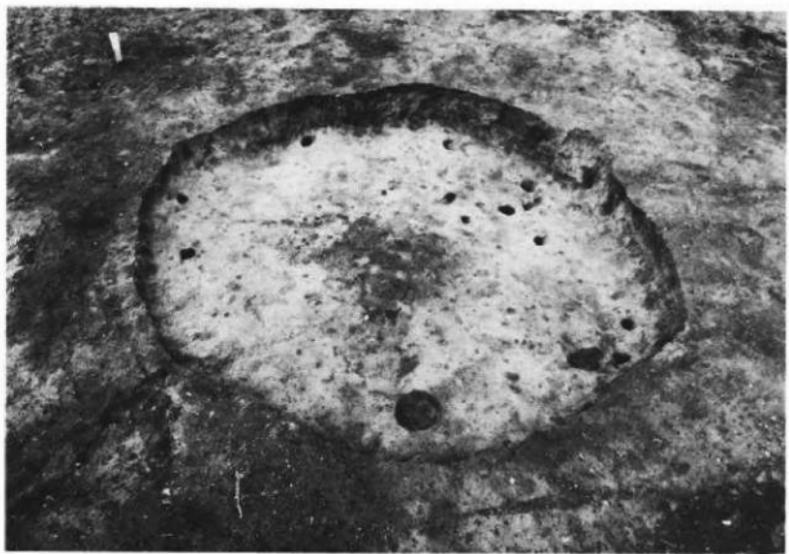


図版 2

トレンチ調査区



遺跡層序

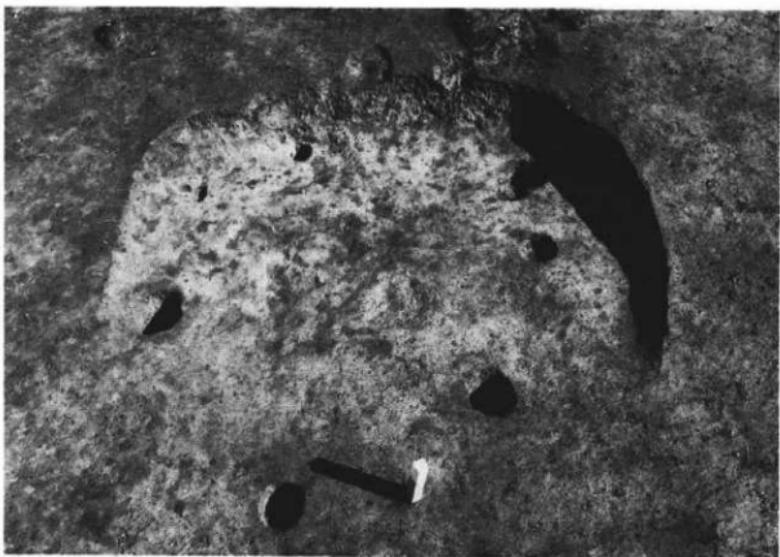


図版 3

第 1 号住居跡完掘状況



第2号住居跡発掘状況



図版 4

第3号住居跡発掘状況



第4号住居跡発掘状況



図版 5

第4号住居跡内遺物出土状況



土器埋設遺構



図版 6

同断面



記石造構



記石造構近接



配石遺構配石状況



同配石除去後



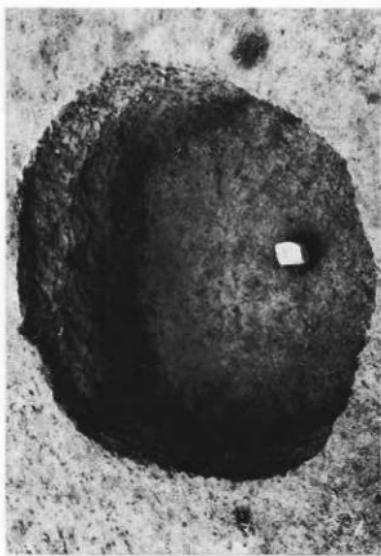
第1号土壙状跡



第2号土壙状跡



第2号土壙面

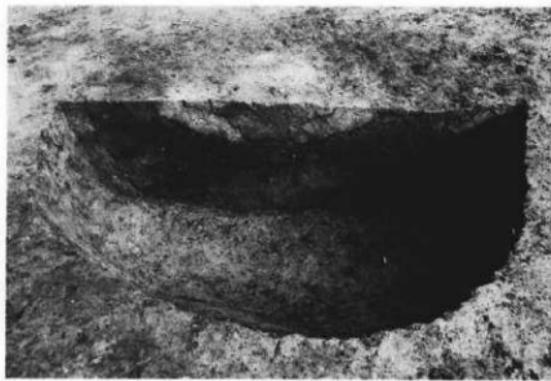


第2号土壙状跡

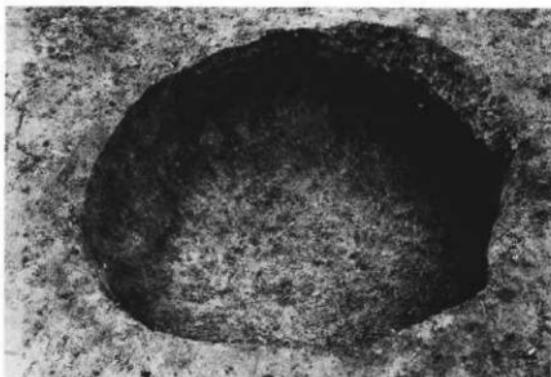


第5号、第6号土壤完提状况

图版10



第3号土壤断面



第3号土壤完提状况



第5号土壠断面



第5号土壠記録状況



第6号土壠断面



第6号土壠記録状況



第 8 号土壤断面



第 8 号土壤泥炭状况



第 9 号土壤断面



第 9 号土壤泥炭状况



第10号土墙断面



第10号土墙完掘状况



第10号土墙断面



第10号土墙完掘状况



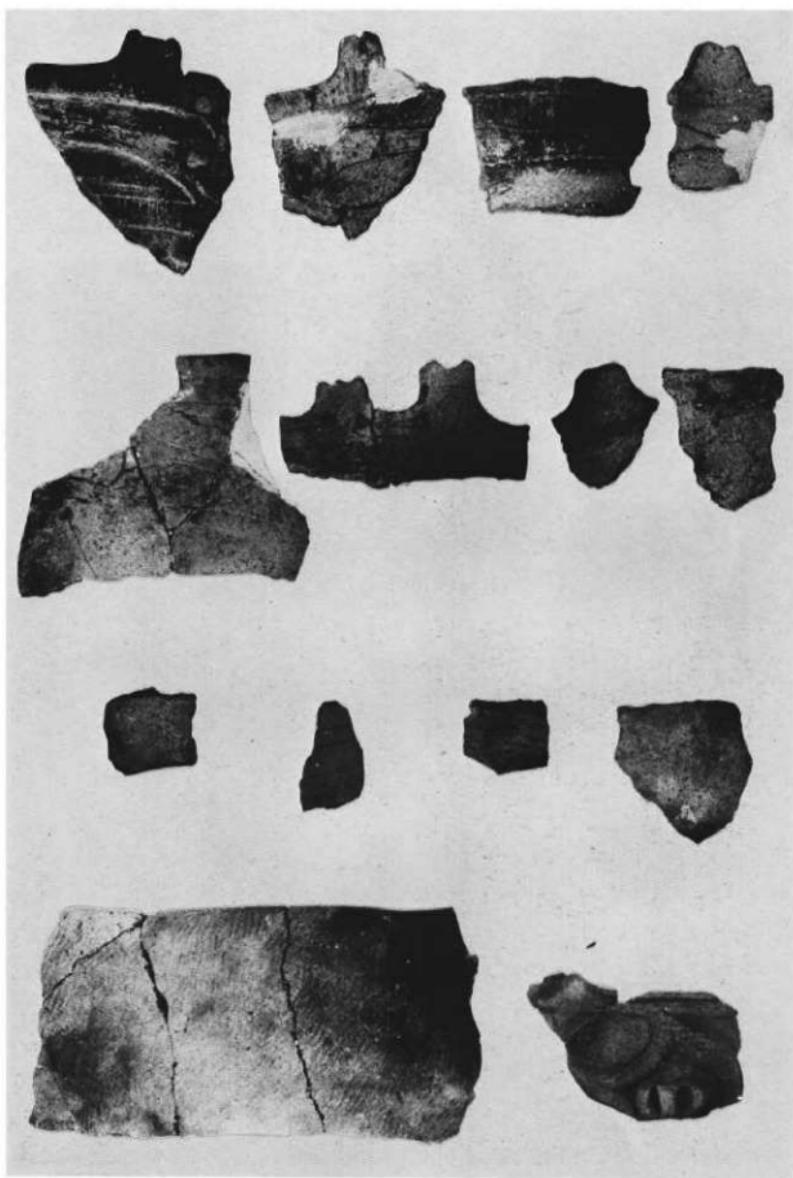
第4号土壤炭化状况



第7号土壤断面

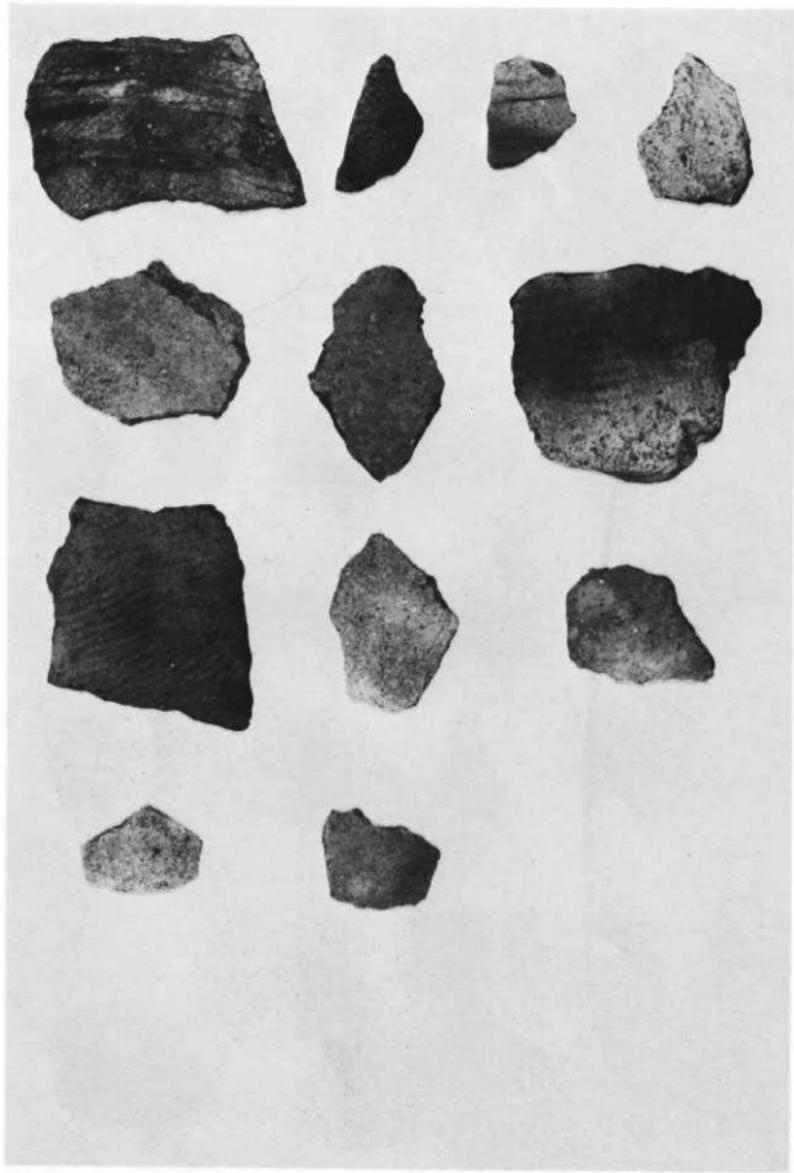


第7号土壤炭化状况



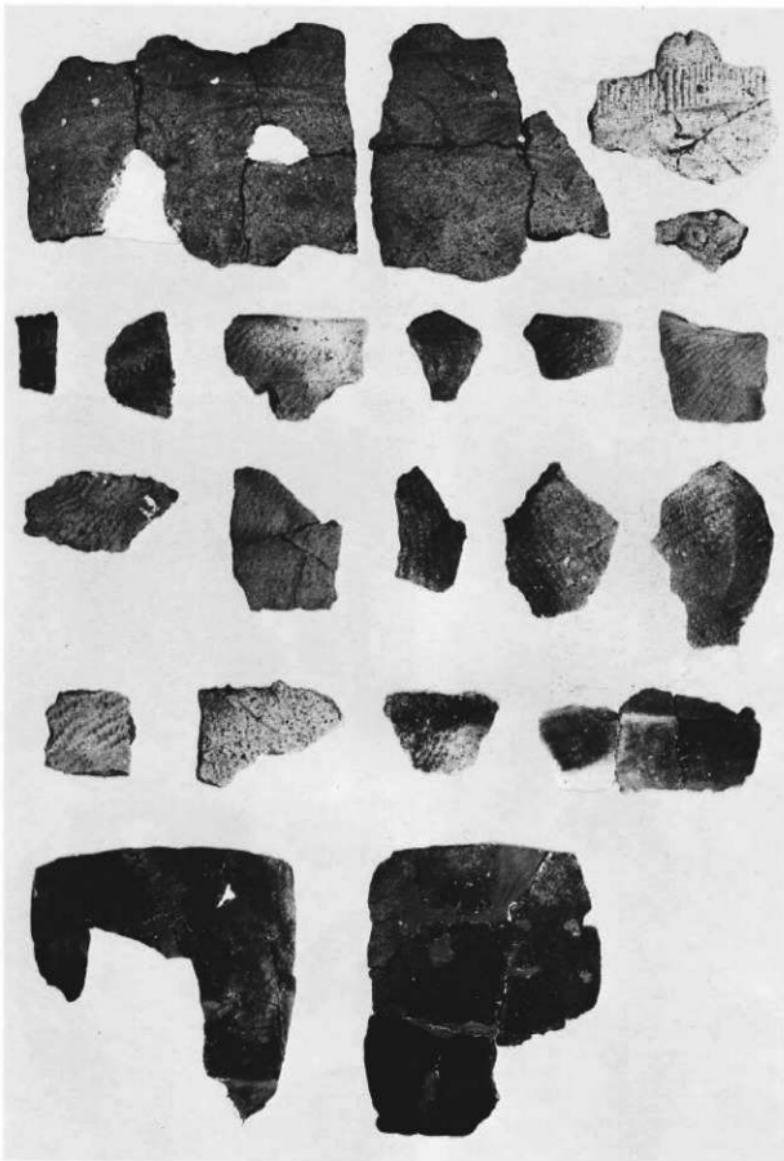
圖版15

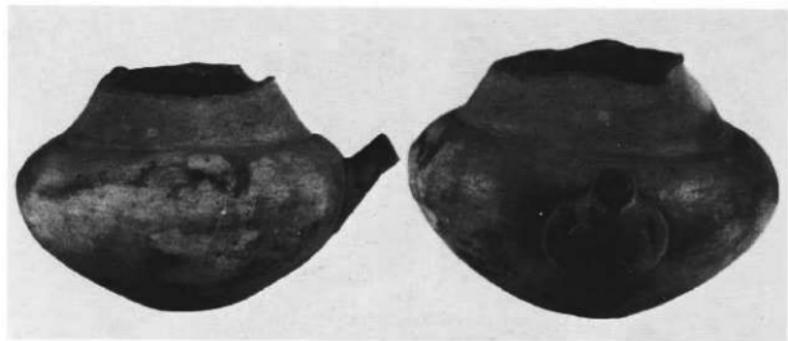
第1号住居跡出土土器



図版16

第3号住居跡出土土器





第2号土壤



第4号土壤



第9号土壤



第4号土壤

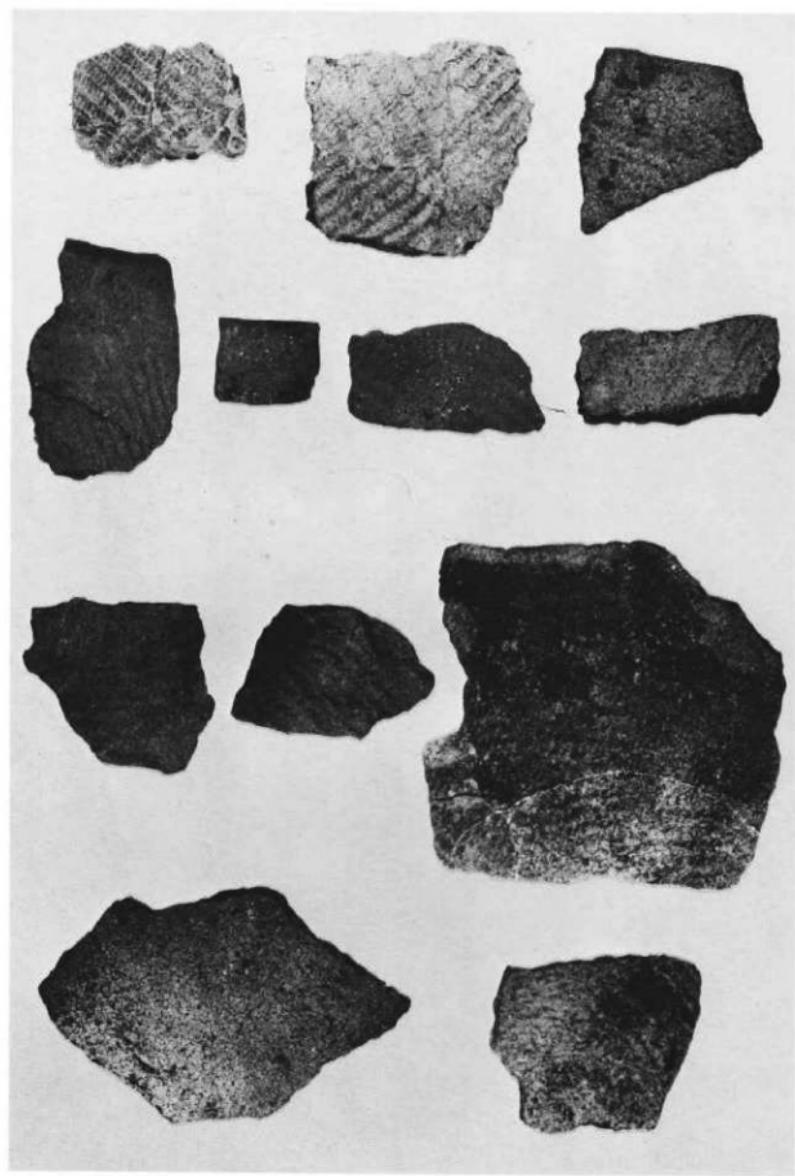


第7号土壤



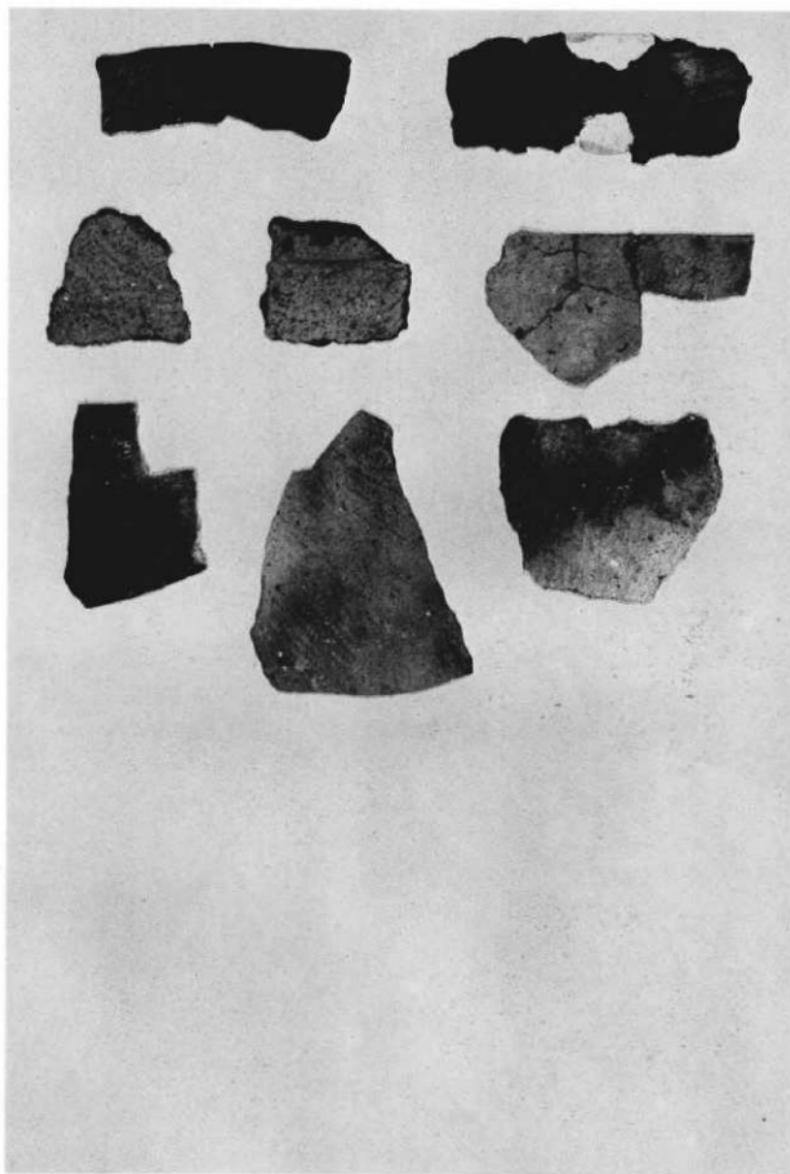
図版19

埋設土器



図版20

配石遺構周辺出土土器



図版21

遺構外出土土器

## 猿ヶ平 I 遺跡

遺跡番号 No.20

所在地 鹿角市花輪字猿ヶ平26の93他

調査期間 昭和55年10月4日～12月6日

発掘予定面積 6,199m<sup>2</sup>

発掘調査面積 4,100m<sup>2</sup>

## 1. 遺跡の概観

猪ヶ平 I 遺跡は秋田県鹿角市花輪字猪ヶ平26の93他に所在する。この地は国鉄花輪線陸中花輪駅東北東2.6km、花輪東山住宅団地の北0.7kmの地点で、北緯40度11分45秒、東経140度48分45秒、標高は200~204mである。

遺跡地は奥羽山脈の一峰をなすニッ森（標高895m）の西側斜面よりなだらかに延びる馬の背状の地形で、雜木林と原野から成り、地形学的には花輪中位段丘と呼ばれる面である。原野は終戦後開拓されその後放置された経緯を持ち、地続きの南方0.5kmの地点には案内II遺跡（遺跡番号No19）が位置する。

## 2. 調査の方法

グリッドは遺跡の調査対象区域に設定されている東北縦貫自動車道の路線中心杭STA 143とSTA 143+60の2基点を結ぶ直線及びその延長線を基準にし、これに直交する線を設け5m×5mのものを設定した。グリッドの呼称は東西軸にアルファベットで東からGからYまで南北軸にアラビア数字で南から3~15を付し、3-Gグリッドの如く両者の組合せにし、グリッド南東隅の交点（杭）をグリッド名称とした。

発掘調査によって確認された遺構には、その性格ごとに確認順に通し番号を付し、実測図作成は簡易遺り方測量に依った。

## 3. 調査経過

8月6日から3日間、調査対象区の刈払いと試掘を行い、9月下旬に重機を投入して表土除去を行う。

10月3日北の林遺跡から移転して来た調査員、補佐員、補助員、作業員によって発掘現場に到る農道の整備をし、プレハブに器材を搬入す。10月4日調査区北東隅の13-Gグリッド部分から地山面まで黒色土の掘り下げを開始す。10月15日この日までの調査では黒色土層中に部分的に大腸浮石層の広がりは認められるが遺構と遺物の検出は無い。

11月4日調査区南西部の発掘に入り多数の縄文土器片の出土を見る。11月5日発掘区の下方斜面に堆土の流出を防ぐ「しがらみ」を構築、11-S、12-Sグリッド地山面に竪穴住居跡と考えられる円形の黒色土の落ち込み（S I 001）を確認す。11月10日にはフラスコ状ピット（S

K F01) を発見、11日には埋設土器1個検出。その後調査区西側張出部で土壙とプラスコ状ビットが数多く検出される。11月22日には竪穴住居跡(S 1001) 完掘、実測も完了。11月29日好天のため発掘区の全景と遺構の群集部分の写真撮影を行う。

12月1日寒気のり、午後ついに降雪となる。新たに調査区南東部で上壙(S K 016)を確認。12月4日掘り下げた土壙の床面北壁近くから晩期大洞B式変形土器が横立で出土。降雪の中で実測を続行。12月6日土壙(S K 016)の実測と写真撮影を最後に、残った発掘器材を撤収し調査を終了する。

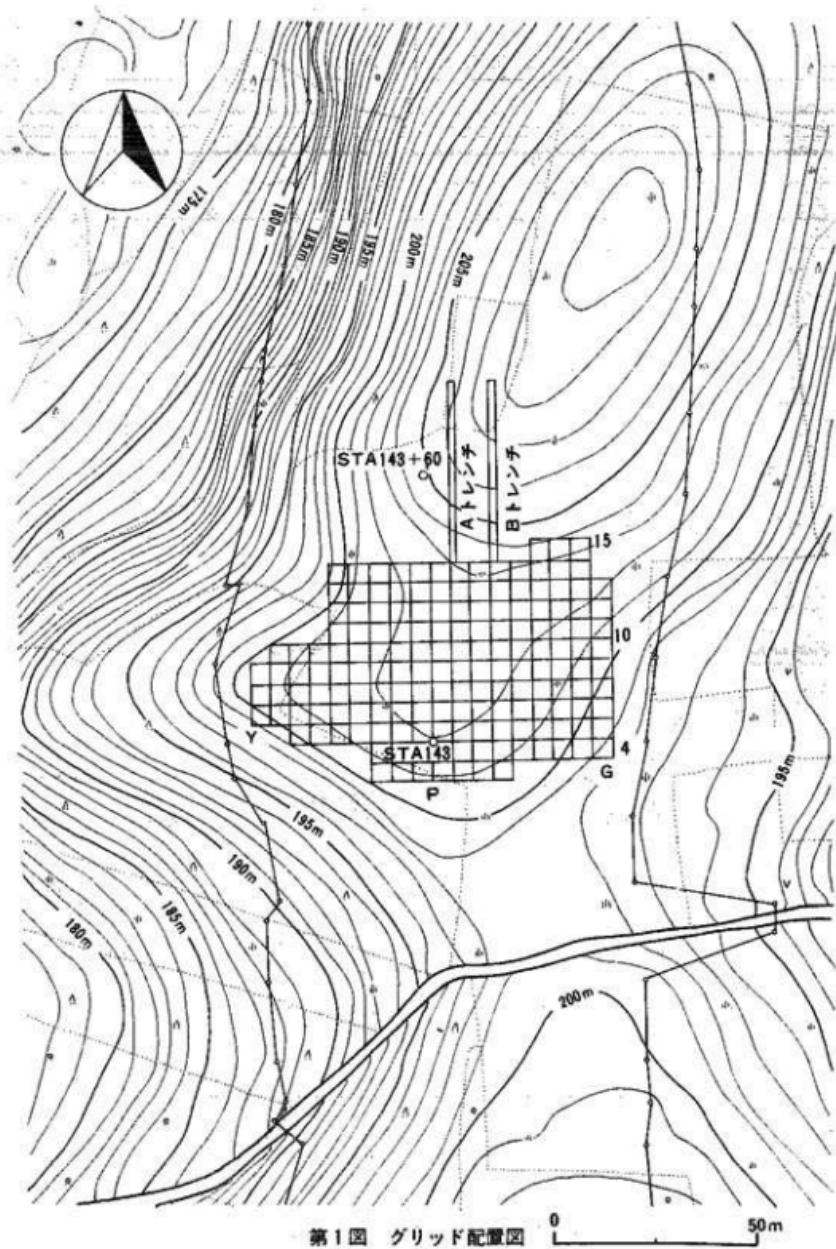
#### 4. 遺跡の層位

遺跡は北側から南側に緩傾斜の地形を示しており、基本的層位は2層に分層される。

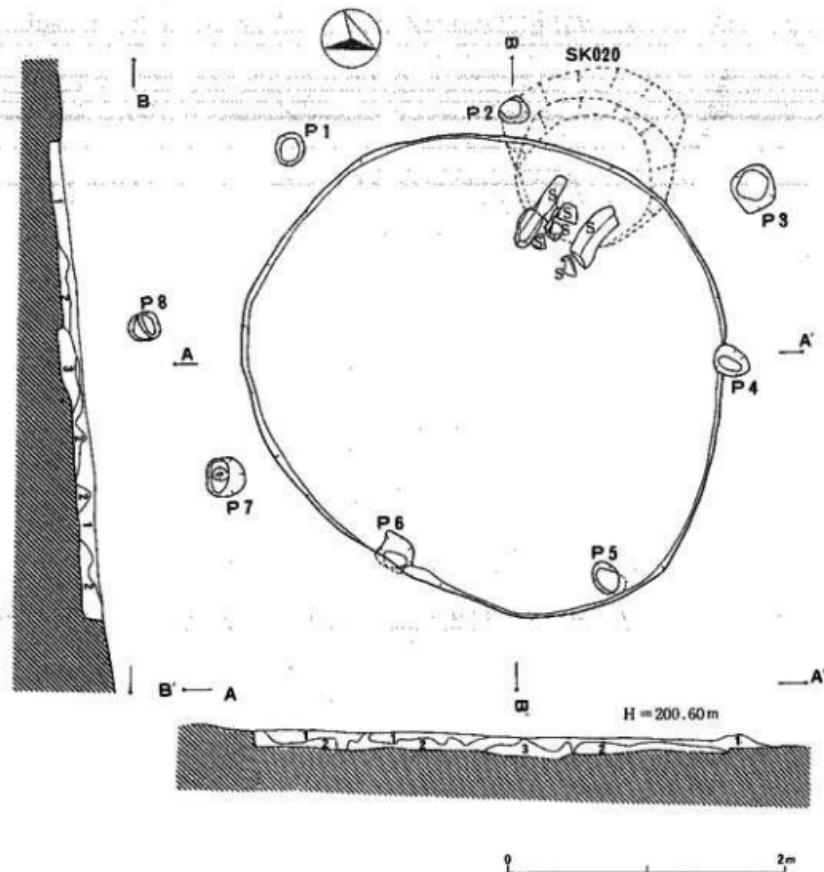
第I層：黒褐色土

第II層：黄褐色土で地山を構成している。

基本的層位は以上の如くであるが、部分的に第I層中に薄い大湯浮石の堆積層が認められた。遺物は第I層下部と遺構内からの出土である。

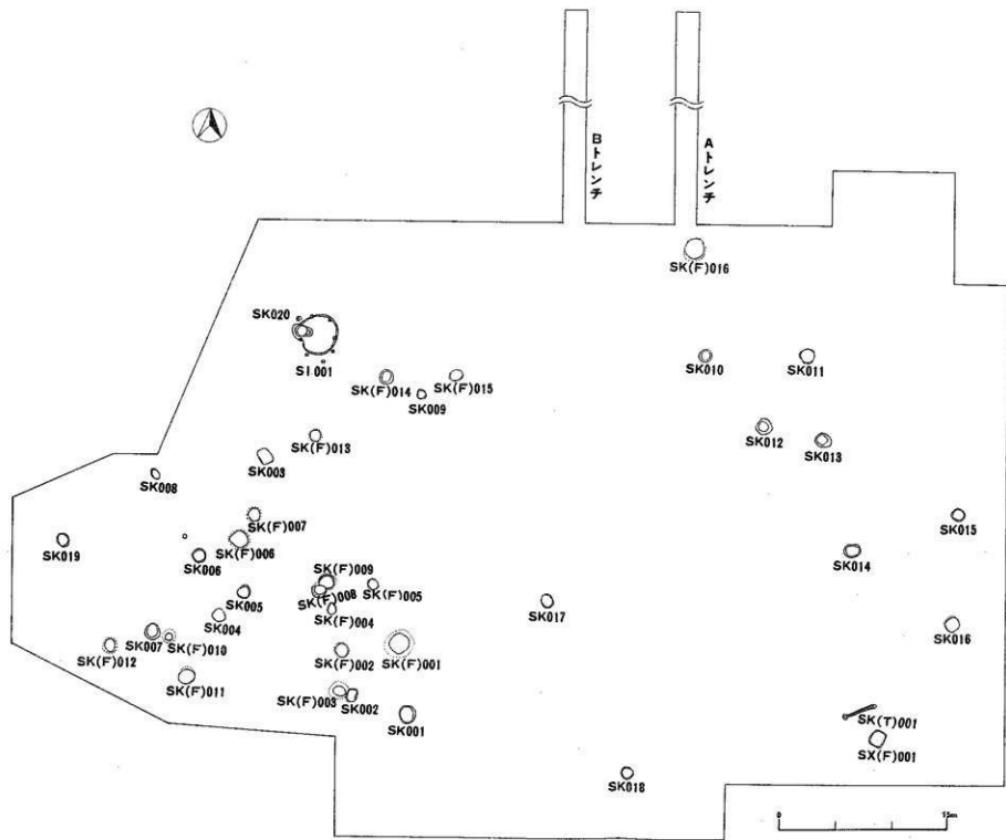


第1図 グリッド配置図



層	土 色	備 考
1	黒 色 (7.5 YR 4/1)	炭化物、黄褐色土粒子微量混入
2	極暗褐色 (7.5 YR 4/2)	炭化物微量混入
3	褐 色 (7.5 YR 4/3)	炭化物微量混入

第3図 S1-001整穴住居跡実測図

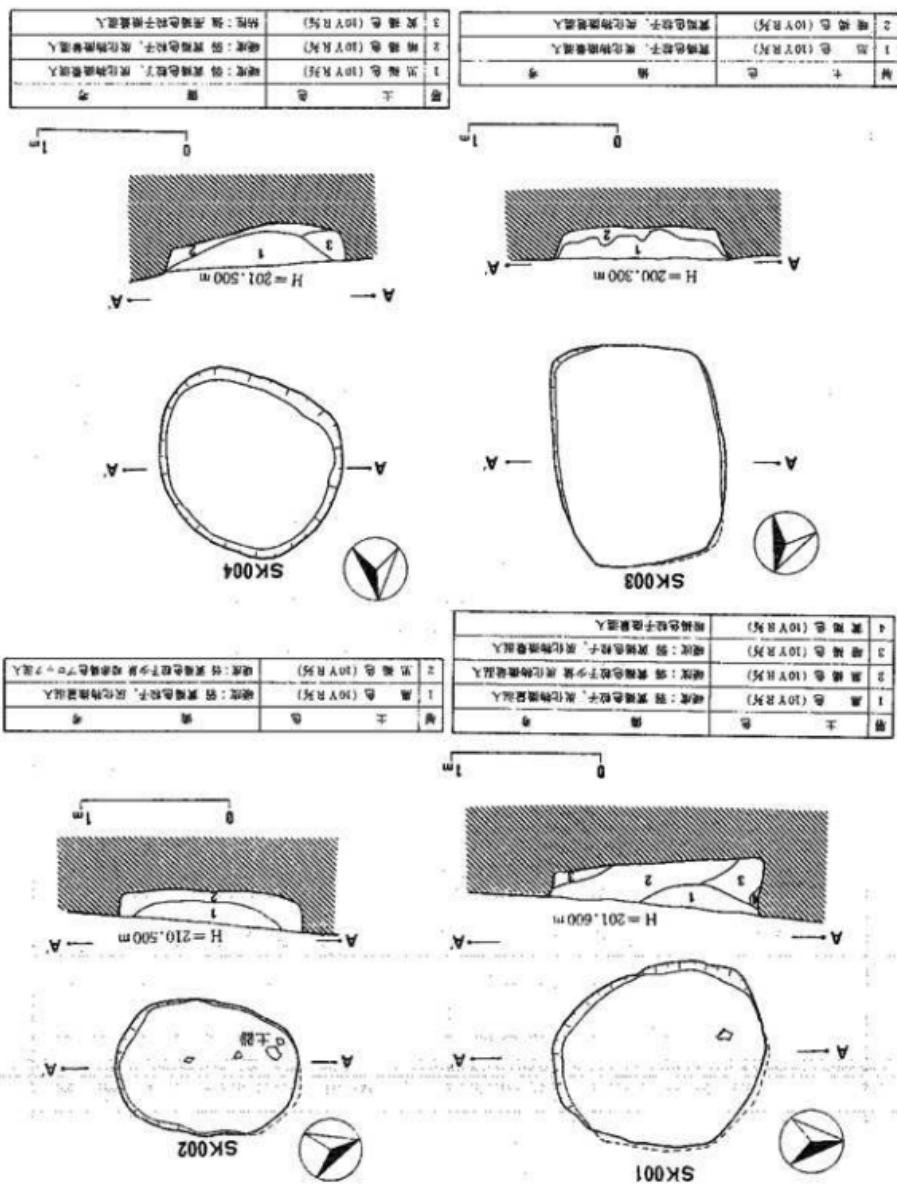


第2図 遺構配置図

第 1 表

遺構名	SI 001 壱穴住居跡		検出地区	11-S, 12-S
査定番号	3		図版番号	
形態	円形		主軸方向	
法量	長軸	373cm	短軸	338cm
	壁高	3~15cm	面積	10.3m <sup>2</sup>
確認	地山上面で確認した。			
壁	東西南壁で10~12cmの壁高を計り、ほぼ垂直に立ち上がるが、北壁においては、地山面からの掘り込みは浅い。			
床面	平坦で堅くしまっている。 床面中央部に焼土(80cm×72cm)の広がりがみられた。			
ピット	床面に1個、壁に2個、住居跡外に5個のピットを確認した。 各ピットは床面より10cm~20cmである。			
炉	住居跡西側に大小の石6個を使用し、「こ」字状に組んだ炉が存在する。			
遺物とその出土状態	埋土中に散在して出土した。 縄文土器(後期初頭)が十数点			
備考	当住居跡は、SK020を切って構築している。			

第4图 SK001, 002, 003, 004土壤剖面图

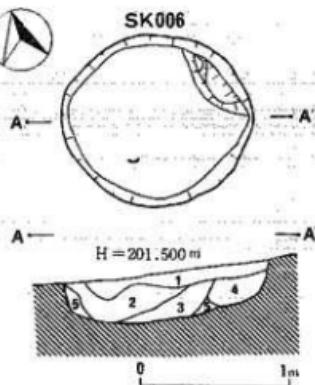
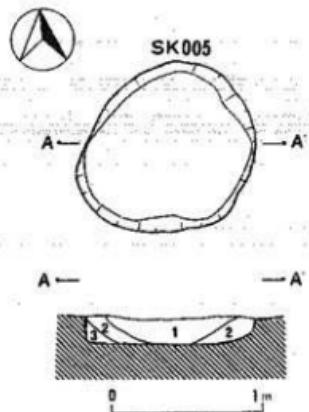


第2表		遺構名	SK 001	出土地区	5-Q	挿図番号	第4図	図版番号
法	長軸	短軸	深さ	形態	平面形, 不整円形、断面形、箱形			
量	135cm	117cm	29cm	主軸方位		N ←→ S		
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

第3表		遺構名	SK 002	出土地区	5-R	挿図番号	第4図	図版番号
法	長軸	短軸	深さ	形態	平面形, 小判形、断面形、箱形			
量	120cm	89cm	20cm	主軸方位		N ←→ S		
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

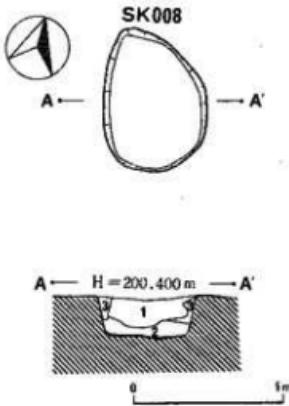
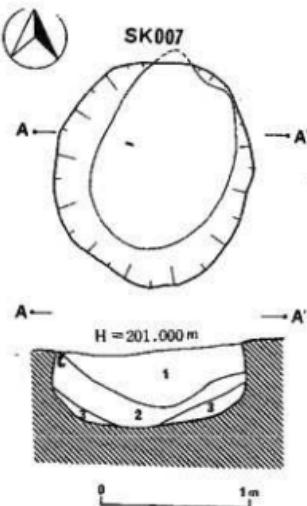
第4表		遺構名	SK 003	出土地区	9-T	挿図番号	第4図	図版番号
法	長軸	短軸	深さ	形態	平面形, 長方形、断面形, 台形			
量	149cm	112cm	20cm	主軸方位		NW ←→ SE		
出土遺物	縄文土器（後期）							
備考								

第5表		遺構名	SK 004	出土地区	6-U	挿図番号	第4図	図版番号	5下
法	長軸	短軸	深さ	形態	平面形, 不整円形、断面形、台形				
量	122cm	119cm	28cm	主軸方位		NW ←→ SE			
出土遺物	縄文土器（後期）								
備考									



帶	土 色	備 考
1	黑褐色 (10YR 4/2)	粘性：弱 黑褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗褐色 (10YR 5/2)	粘性：弱 黑褐色粒子、炭化物微量混入
3	褐 色 (10Y R 5/2)	黑褐色粒子微量混入

帶	土 色	備 考
1	暗褐色 (10Y R 5/2)	硬度：弱 黑褐色粒子、炭化物微量混入
2	褐 色 (10Y R 5/2)	硬度：弱 展层物、硬微量混入
3	褐 色 (7.5Y R 5/2)	炭化物微量混入
4	褐 色 (7.5Y R 5/2)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
5	黄褐色 (10Y R 5/2)	粘性：强 棕色土粒子微量混入



帶	土 色	備 考
1	褐褐色 (10Y R 5/2)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	褐 色 (10Y R 5/2)	炭化物微量混入
3	褐 色 (10Y R 5/2)	粘性：强

帶	土 色	備 考
1	黑 色 (10Y R 5/2)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗褐色 (10Y R 5/2)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	暗褐色 (10Y R 5/2)	炭化物微量混入

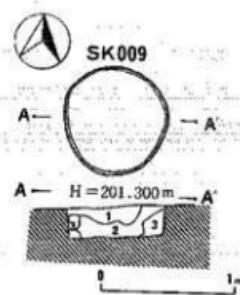
第5図 SK005, 006, 007, 008土壤実測図

第6表		遺構名	SK005	出土地区	7-T	拂図番号	第5図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形, 不整円形, 断面形, 盆形				
	113cm	112cm	15cm	主軸方位		↔			
出土遺物									
備考									

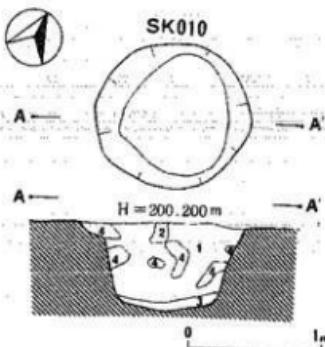
第7表		遺構名	SK006	出土地区	7-U	拂図番号	第5図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形, 円形, 断面形, 盆形				
	127cm	116cm	30cm	主軸方位		↔			
出土遺物									
備考									

第8表		遺構名	SK007	出土地区	6-V	拂図番号	第5図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形, 楕円形, 断面形, 鍋底形				
	148cm	124cm	49cm	主軸方位		N ↔ S			
出土遺物	縄文土器(後期)								
備考									

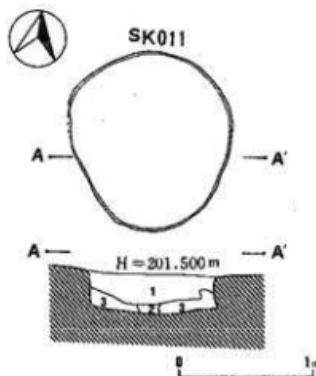
第9表		遺構名	SK008	出土地区	9-V	拂図番号	第5図	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形, 不整円形, 台形形, 台形				
	97cm	68cm	24cm	主軸方位		N ↔ S			
出土遺物									
備考									



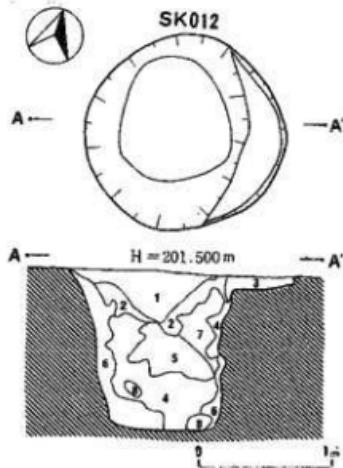
層	土 色	備 考
1	黒 色 (10Y R 3/1)	黄褐色粒子微量混入
2	黒 黄 色 (10Y R 3/6)	黄褐色粒子微量混入
3	暗 黄 色 (10Y R 3/6)	黄褐色粒子微量混入



層	土 色	備 考
1	灰 色 (10Y R 4/1)	黄褐色沙子、炭化物微量混入
2	黑 色 (10Y R 4/1)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	暗 黄 色 (10Y R 4/1)	黄褐色粒子少量混入
4	暗 黄 色 (10Y R 4/1)	黄褐色粒子、炭化物微量混入



層	土 色	備 考
1	黒 黄 色 (10Y R 3/6)	黄褐色粒子、小石微量混入
2	黒 黄 色 (10Y R 3/6)	黄褐色土少量混入
3	暗 色 (10Y R 4/1)	小石微量混入



層	土 色	備 考
1	黒 色 (10Y R 4/1)	黄褐色粒子、炭化物、小石微量混入
2	暗 黄 色 (10Y R 3/6)	硬度：強 黄褐色粒子、炭化物、小石微量混入
3	暗 黄 色 (10Y R 3/6)	硬度：強 炭化物、小石微量混入
4	暗 黄 色 (10Y R 3/6)	硬度：強 炭化物、小石微量混入
5	暗 黄 色 (10Y R 3/6)	硬度：強 粘性：強 大山噴出物微量混入
6	暗 色 (10Y R 4/1)	硬度：強 粘性：強 大山噴出物微量混入
7	暗 黄 色 (10Y R 3/6)	硬度：強 小石微量混入
8	暗 黄 色 (10Y R 3/6)	硬度：強 粘性：強

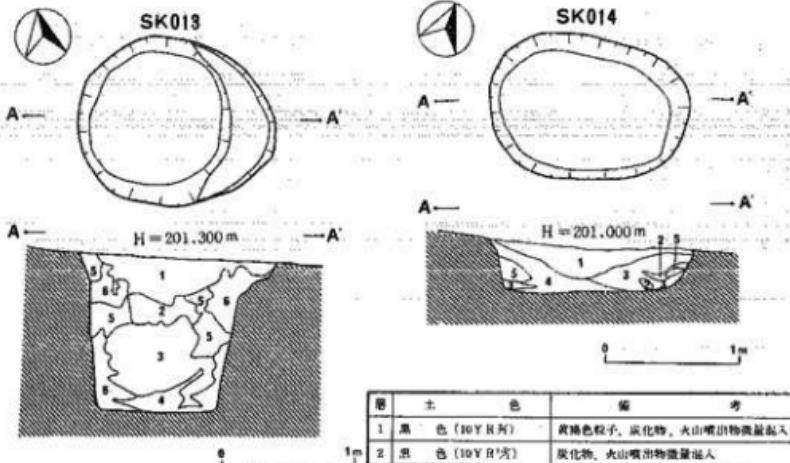
第6図 SK009, 010, 011, 012土壤実測図

第 10 表		遺構名	SK 009	出土地区	10-Q	挿図番号	第 6 図	図版番号
法 量	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形、円形、断面形、箱形			
		79cm	76cm	23cm	主軸方位	↑ ← → ↓		
出土 遺物								
備 考								

第 11 表		遺構名	SK 010	出土地区	11-L	挿図番号	第 6 図	図版番号
法 量	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形、円形、断面形、台形			
	116cm	108cm	66cm	主軸方位		↔		
出土 遺物								
備 考								

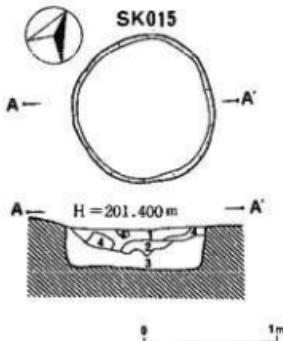
第 12 表		遺構名	SK 011	出土地区	11-J	挿図番号	第 6 図	図版番号
法 量	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形、不整橢円形、断面形、箱形			
	133cm	111cm	38cm	主軸方位		N ↔ S		
出土 遺物								
備 考								

第 13 表		遺構名	SK 012	出土地区	10-K	挿図番号	第 6 図	図版番号
法 量	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形、円形、断面形、台形			
	149cm	143cm	120cm	主軸方位		↔		
出土 遺物								
備 考								

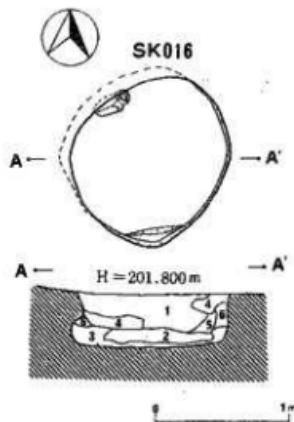


層	土 色	備 考
1	黑 色 (10Y R 3/4)	黃褐色粒子、炭化物、火山噴出物微量混入
2	黑 色 (10Y R 3/4)	炭化物、火山噴出物微量混入
3	黑 黃 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 黃褐色粒子、炭化物、火山噴出物微量混入
4	黃 黑 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 黃褐色粒子、炭化物微量混入
5	黑 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 黃褐色粒子、火山噴出物微量混入

層	土 色	備 考
1	黑 色 (10Y R 3/4)	炭化物、黃褐色粒子、小石微量混入
2	黑 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 黃褐色粒子、小石微量混入
3	黑 黃 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 黃褐色粒子微量混入
4	黑 黃 色 (10Y R 3/4)	炭化物、黃褐色粒子微量混入
5	黑 黃 色 (10Y R 3/4)	黃褐色粒子微量混入
6	黑 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 小石微量混入



層	土 色	備 考
1	黑 色 (10Y R 3/4)	炭化物、火山噴出物微量混入
2	黑 色 (10Y R 3/4)	炭化物、火山噴出物微量混入
3	黑 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 小石微量混入
4	黃 黑 色 (10Y R 3/4)	黃褐色粒子微量混入



層	土 色	備 考
1	黑 色 (10Y R 3/4)	黃褐色粒子、炭化物微量混入
2	黑 黃 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 黃褐色粒子、炭化物小石微量混入
3	黑 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 火山噴出物 小石微量混入
4	黃 黑 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 火山噴出物微量混入
5	黃 黑 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 火山噴出物、小石微量混入
6	黑 黃 色 (10Y R 3/4)	硬度：強 火山噴出物

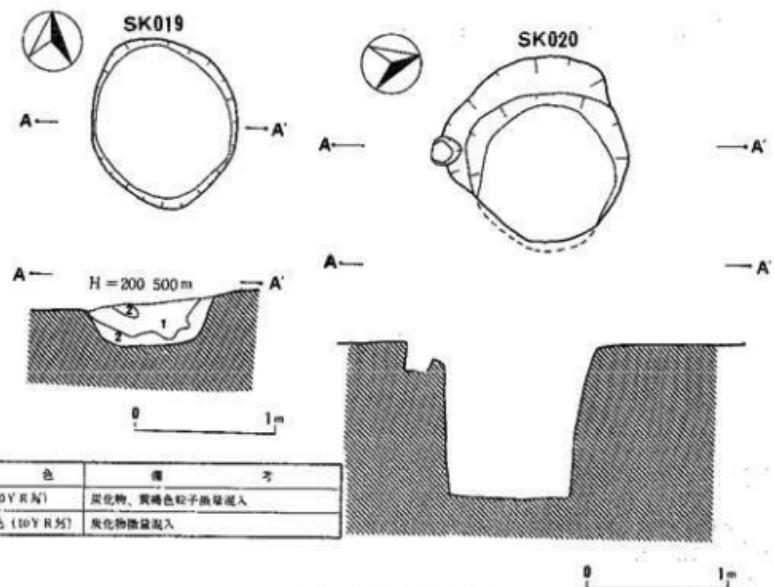
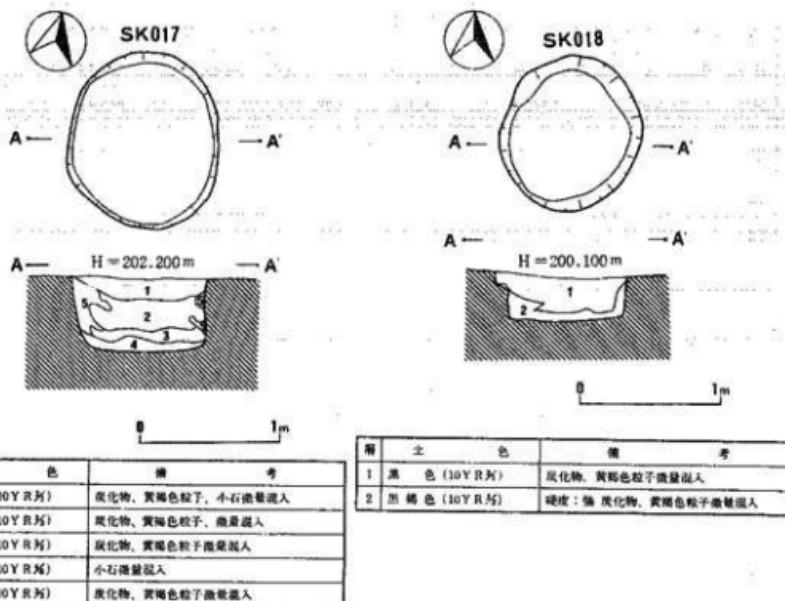
第7圖 SK013, 014, 015, 016土壤測定圖

第 14 表		遺構名	SK 013	出土地区	10・J	押図番号	第 7 図	図版番号	
法量	長 軸	短 軸	深 さ		形 態	平面形、円形・断面形、台形			
	147cm	124cm	116cm		主軸方位		↔		
出土遺物									
備考									

第 15 表		遺構名	SK 014	出土地区	8-I	押図番号	第 7 図	図版番号	
法量	長 軸	短 軸	深 さ		形 態	平面形、小判形・断面形、台形			
	149cm	110cm	22cm		主軸方位		E ↔ W		
出土遺物									
備考									

第 16 表		遺構名	SK 015	出土地区	8-G	押図番号	第 7 図	図版番号	
法量	長 軸	短 軸	深 さ		形 態	平面形、円形・断面形、箱形			
	111cm	106cm	29cm		主軸方位		↔		
出土遺物									
備考									

第 17 表		遺構名	SK 016	出土地区	6-G 6-H	押図番号	第 7 図	図版番号	6
法量	長 軸	短 軸	深 さ		形 態	平面形、円形・断面形、鍋底形			
	124cm	119cm	39cm		主軸方位		↔		
出土遺物	縄文土器（大洞B式）								
備考									



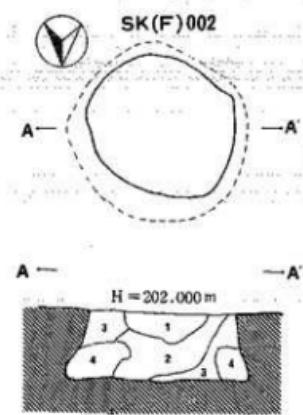
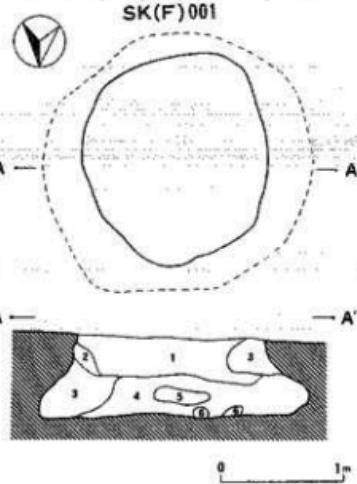
第8図 SK017, 018, 019, 020土壤実測図

第 18 表		遺構名	SK 017	出土地区	7—O	拂図番号	第 8 図	図版番号	
法	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形、小判形、断面形、台形				
量	125cm	105cm	51cm	主軸方位		N ←→ S			
出 土 遺 物									
備 考									

第 19 表		遺構名	SK 018	出土地区	4—M	拂図番号	第 8 図	図版番号	
法	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形、楕円形、断面形、箱形				
量	110cm	100cm	31cm	主軸方位		N ←→ S			
出 土 遺 物									
備 考									

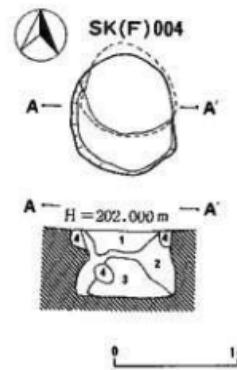
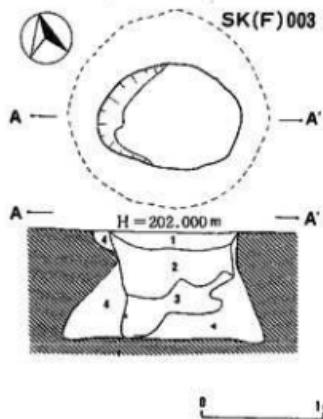
第 20 表		遺構名	SK 019	出土地区	8—X	拂図番号	第 8 図	図版番号	
法	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形、楕円形、断面形、鍋底形				
量	118cm	103cm	30cm	主軸方位		N ←→ S			
出 土 遺 物									
備 考									

第 21 表		遺構名	SK 020	出土地区	12—S	拂図番号	第 8 図	図版番号	
法	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形、円形、断面形、台形				
量	100cm	96cm	97cm	主軸方位		←→			
出 土 遺 物									
備 考	S I 001 穴住居跡が、本遺構東側を切って構造されている。								



番	土 色	備 考
1	黒 色 (10Y R 5)	粘性:弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 暗 色 (10Y R 5)	粘性:弱 黄褐色粒子少量混入
3	黄 暗 色 (10Y R 5)	黄褐色粒子微量混入
4	黑 暗 色 (10Y R 5)	黑色土壤混入
5	褐 色 (7.5Y R 5)	黑色土壤微量混入
6	明 黄 暗 色 (10Y R 5)	粘性:弱 黑褐色土微量混入

番	土 色	備 考
1	褐 色 (10Y R 5)	粘性:弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	黑 暗 色 (10Y R 5)	粘性:弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	红 暗 黄 暗 色 (10Y R 5)	粘性:弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	黄 暗 色 (10Y R 5)	黑色土壤微量混入



番	土 色	備 考
1	黑 暗 色 (10Y R 5)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 暗 色 (10Y R 5)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	暗 暗 色 (7.5Y R 5)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	赤 暗 色 (10Y R 5)	炭化物微量混入

番	土 色	備 考
1	黑 色 (10Y R 5)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 暗 色 (10Y R 5)	粘度:弱 黄褐色粒子、黑褐色粒子微量混入
3	暗 暗 色 (10Y R 5)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	黄 暗 色 (10Y R 5)	炭化物微量混入

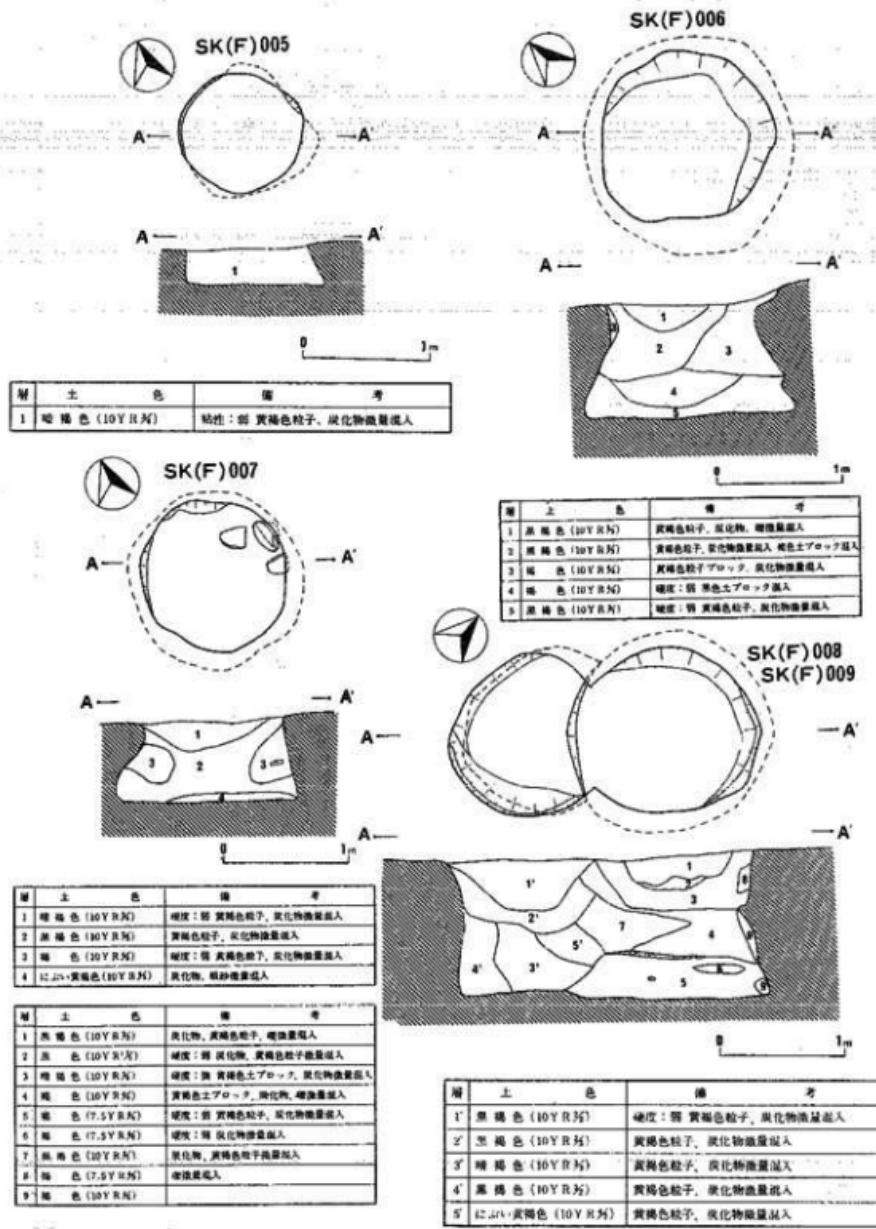
第9図 SK(F)001, 002, 003, 004 フラスコ状ピット実測図

第 2 表		遺構名	SK (F) 001	出土地区	7-S	挿図番号	第 9 図	図版番号	
法量	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形, 楕円形				
	165cm	150cm	65cm	主軸方位		N ←→ S			
出土遺物	縄文土器(後期)								
備考									

第 23 表		遺構名	SK (F) 002	出土地区	6-R	挿図番号	第 9 図	図版番号	
法量	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形, 楕円形				
	126cm	106cm	56cm	主軸方位		N W ←→ S E			
出土遺物									
備考									

第 24 表		遺構名	SK (F) 003	出土地区	5-R	挿図番号	第 9 図	図版番号	
法量	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形, 楕円形				
	116cm	85cm	86cm	主軸方位		E ←→ W			
出土遺物									
備考									

第 25 表		遺構名	SK (F) 004	出土地区	6-S 7-S	挿図番号	第 9 図	図版番号	
法量	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形, 楕円形				
	100cm	82cm	53cm	主軸方位		N ←→ S			
出土遺物									
備考									



第10図 SK(F)005, 006, 007, 008, 009 フラスコ状ピット実測図

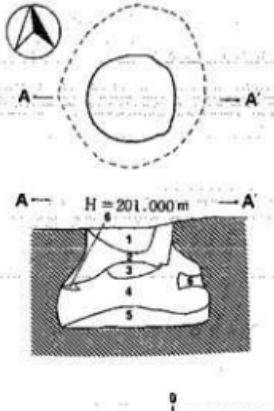
第 26 表		遺構名	SK(F)005	出土地区	7—R	押図番号	第10図	図版番号	
法	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形, 円形				
量	96cm	94cm	28cm	主軸方位					
出土遺物	縄文土器(後期)								
備考									

第 27 表		遺構名	SK(F)006	出土地区	8—T	押図番号	第10図	図版番号	
法	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形, 不整形				
量	135cm	130cm	90cm	主軸方位		E ←→ W			
出土遺物	縄文土器(後期)								
備考									

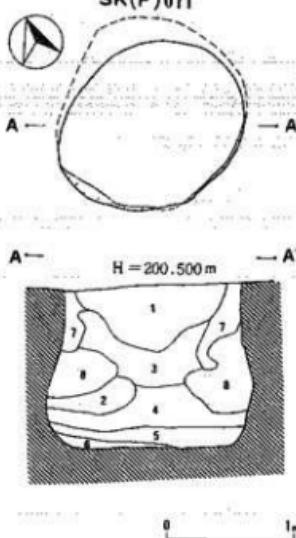
第 28 表		遺構名	SK(F)007	出土地区	8—T	押図番号	第10図	図版番号	
法	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形, 円形				
量	120cm	114cm	64cm	主軸方位		↔			
出土遺物	縄文土器(後期)								
備考									

第 29 表		遺構名	SK(F)008	出土地区	7—S	押図番号	第10図	図版番号	
法	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形, 不整形				
量	129cm	(120)cm	104cm	主軸方位		N ←→ S			
出土遺物									
備考	SK(F)009が本遺構を切って構築されている。								

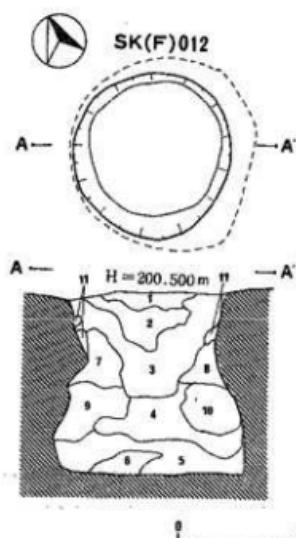
SK(F)010



SK(F)011



SK(F)012



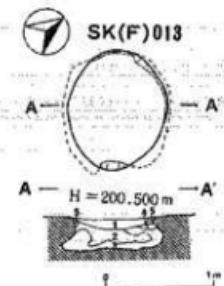
第11図 SK(F)010, 011, 012 フラスコ状ピット実測図

第30表		遺構名	SK(F)009	出土地区	7-S	捕図番号	第10回	図版番号
法	長軸	短軸	深さ	形態	平面形、楕円形			
量	(140)cm	130cm	112cm	主軸方位		N E ←→ S W		
出土遺物								
備考	S K(F)008が本遺構を切って構築されている。							

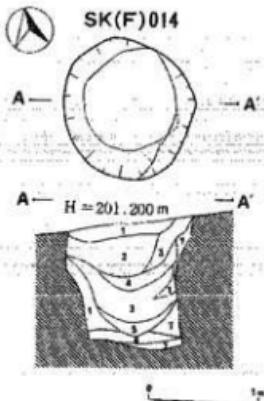
第31表		遺構名	SK(F)010	出土地区	6-U 6-V	捕図番号	第11回	図版番号
法	長軸	短軸	深さ	形態	平面形、円形			
量	69cm	68cm	78cm	主軸方位		←→		
出土遺物								
備考								

第32表		遺構名	SK(F)011	出土地区	5-U	捕図番号	第11回	図版番号
法	長軸	短軸	深さ	形態	平面形、楕円形			
量	150cm	115cm	127cm	主軸方位		E ←→ W		
出土遺物								
備考								

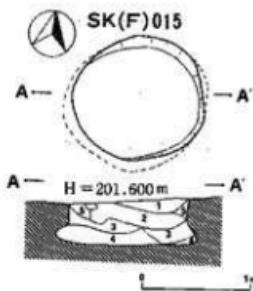
第33表		遺構名	SK(F)012	出土地区	6-W 6-X	捕図番号	第11回	図版番号
法	長軸	短軸	深さ	形態	平面形、楕円形			
量	131cm	124cm	142cm	主軸方位		N E ←→ S W		
出土遺物								
備考								



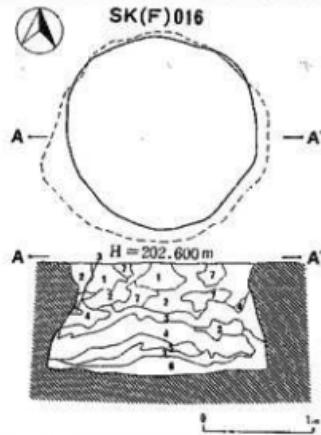
層	土 色	備 考
1	黒 色 (10Y R 5/1)	硬度：弱 黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	黒 色 (10Y R 5/1)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	暗 棕 色 (10Y R 5/1)	黄褐色土ブロック、炭化物微量混入
4	黑 棕 色 (10Y R 5/1)	黄褐色土ブロック状に混入
5	黄 棕 色 (10Y R 5/1)	硬度：弱



層	土 色	備 考
1	黒 色 (10Y R 5/1)	黄褐色粒子、炭化物、小石微量混入
2	黑 棕 色 (10Y R 5/1)	黄褐色セブロック粒子、炭化物微量混入
3	暗 棕 色 (10Y R 5/1)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	暗 棕 色 (10Y R 5/1)	硬度：強 黄褐色土ブロック、炭化物微量混入
5	灰 細 黄褐色 (10Y R 5/1)	炭化物、小石微量混入
6	褐 色 (10Y R 5/1)	黄褐色土少量、小石微量混入
7	褐 色 (10Y R 5/1)	硬度：強 小石微量混入



層	土 色	備 考
1	黒 色 (10Y R 5/1)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
2	暗 棕 色 (10Y R 5/1)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
3	暗 棕 色 (10Y R 5/1)	黄褐色粒子、炭化物微量混入
4	褐 色 (10Y R 5/1)	硬度：強 黄褐色土、小石微量混入
5	褐 色 (10Y R 5/1)	硬度：強 黄褐色土、炭化物微量混入



層	土 色	備 考
1	黒 色 (10Y R 5/1)	炭化物微量混入
2	黑 棕 色 (10Y R 5/1)	炭化物微量混入
3	黒 色 (10Y R 5/1)	炭化物微量混入
4	褐 色 (10Y R 5/1)	
5	暗 棕 色 (10Y R 5/1)	
6	黄 棕 色 (10Y R 5/1)	
7	灰 細 黄褐色 (10Y R 5/1)	小石微量混入

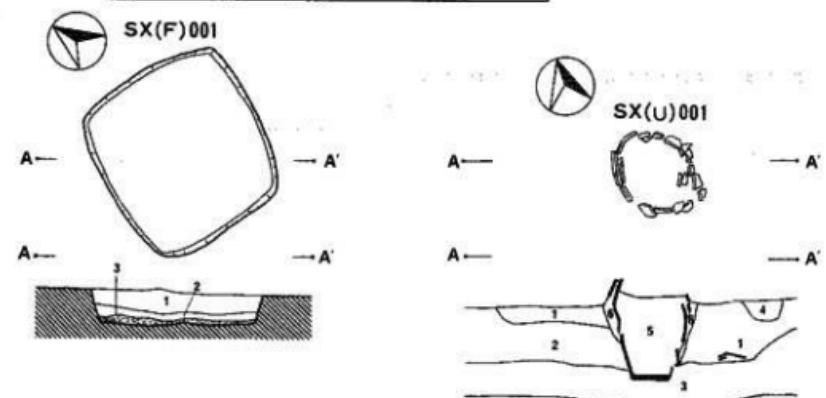
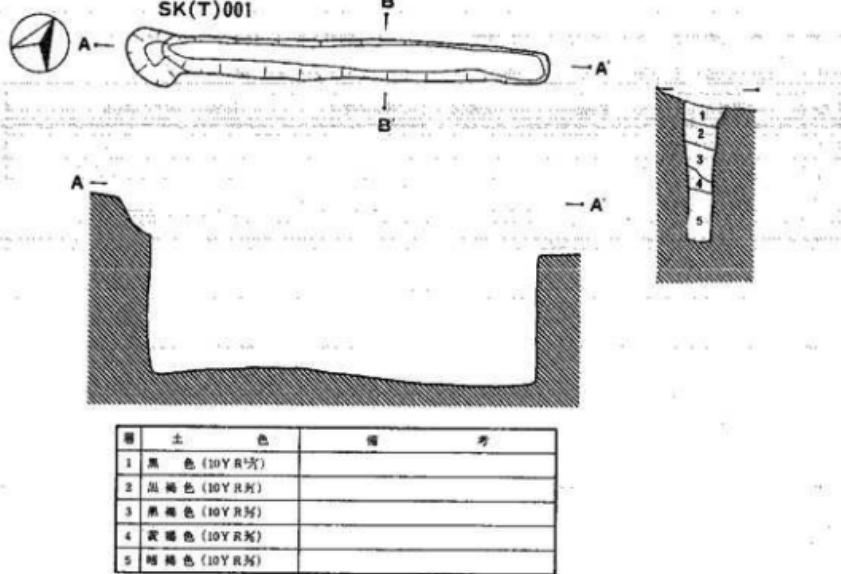
第12図 SK(F)013, 014, 015, 016 フラスコ状ピット実測図

第34表		遺構名	SK(F)013	出土地区	9-S	挿図番号	第12図	図版番号	
法 量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形、楕円形				
	-110cm	90cm	26cm	主軸方位	NW ←→ SE				
出土 遺物									
備 考									

第35表		遺構名	SK(F)014	出土地区	11-R	挿図番号	第12図	図版番号	
法 量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形、楕円形				
	131cm	118cm	112cm	主軸方位	N ←→ S				
出土 遺物									
備 考									

第36表		遺構名	SK(F)015	出土地区	11-P 11-Q	挿図番号	第12図	図版番号	
法 量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形、円形				
	120cm	114cm	40cm	主軸方位	↔				
出土 遺物									
備 考									

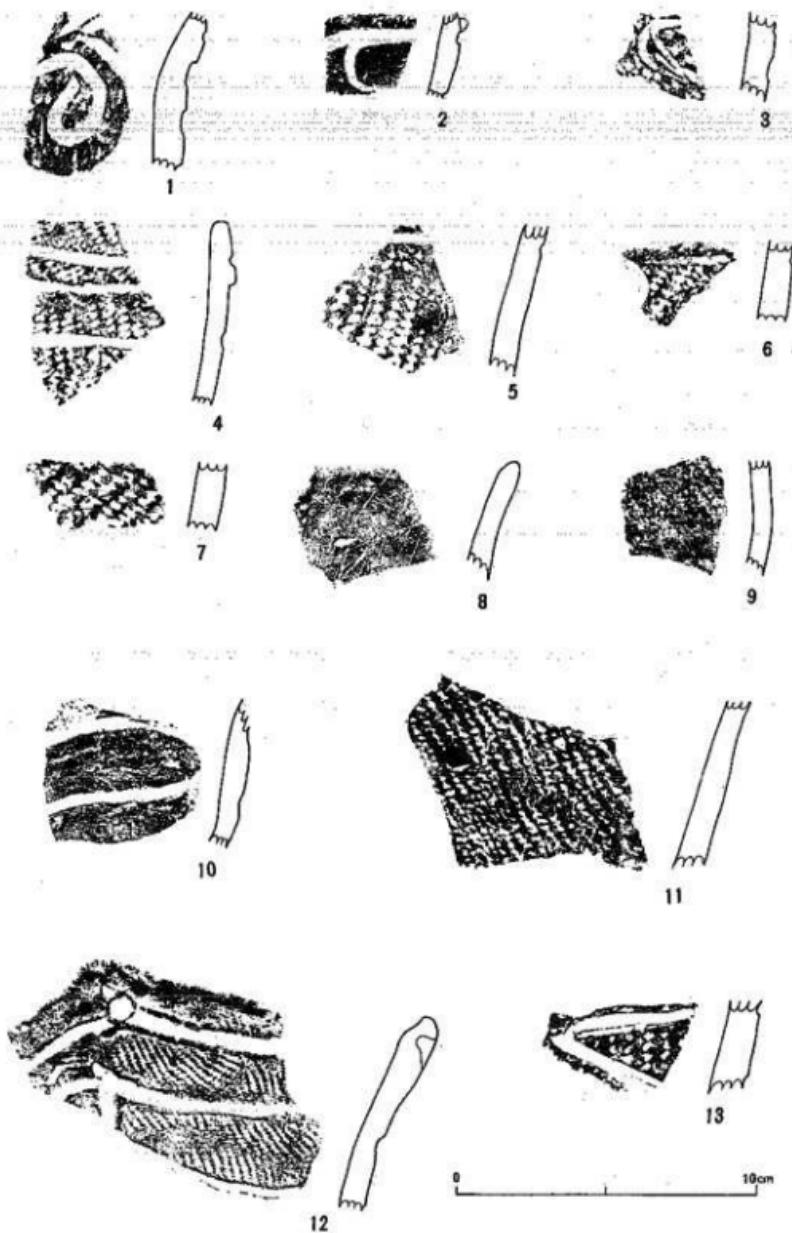
第37表		遺構名	SK(F)016	出土地区	13-L	挿図番号	第12図	図版番号	
法 量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形、円形				
	198cm	172cm	104cm	主軸方位	↔				
出土 遺物									
備 考									



第38表		遺構名	S K(T) 001	出土地区	5-U-I	挿図番号	第13図	図版番号	
法 量	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	面形、溝状断面形、台形				
	304cm	30cm	102cm	主軸方位	N.E. ← → SW				
出土遺物									
備考									

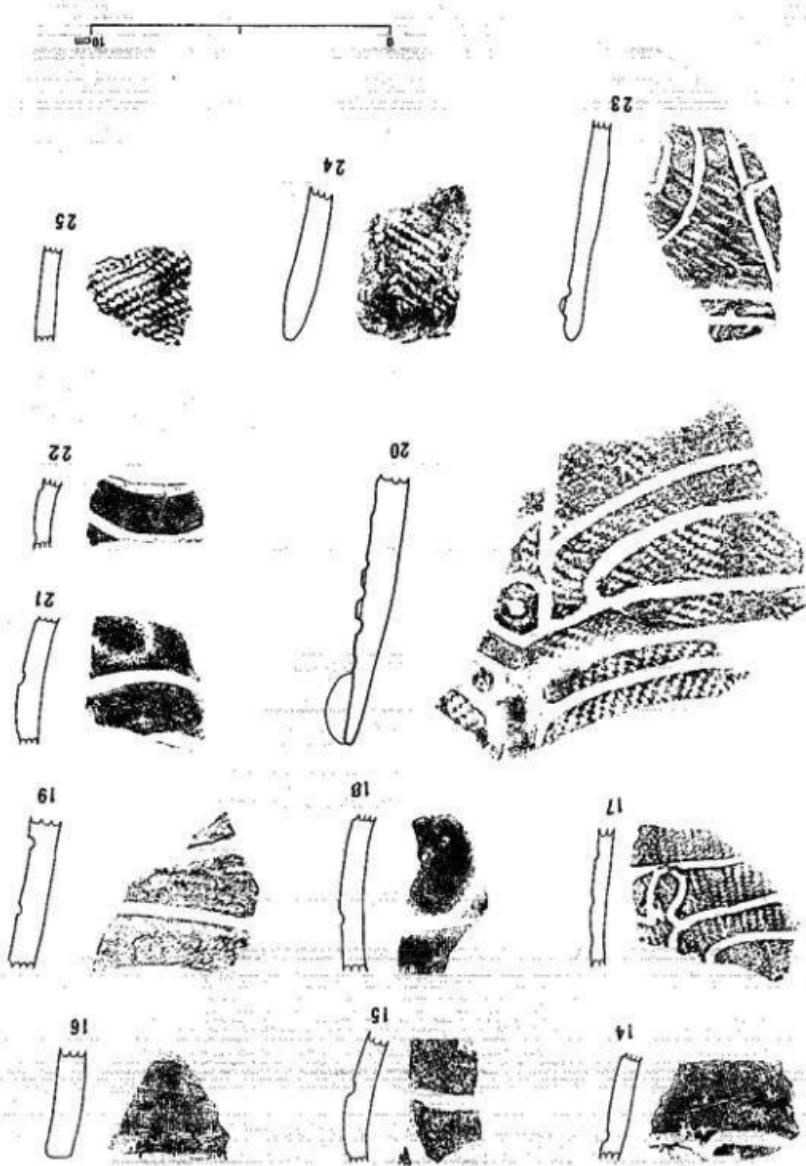
第39表		遺構名	S X(F) 001	出土地区	4-U-I	挿図番号	第13図	図版番号	
法 量	長 軸	短 軸	深 さ	形 態	平面形、方形、断面形、台形				
	130cm	119cm	26cm	主軸方位	N ← → S				
出土遺物									
備考									

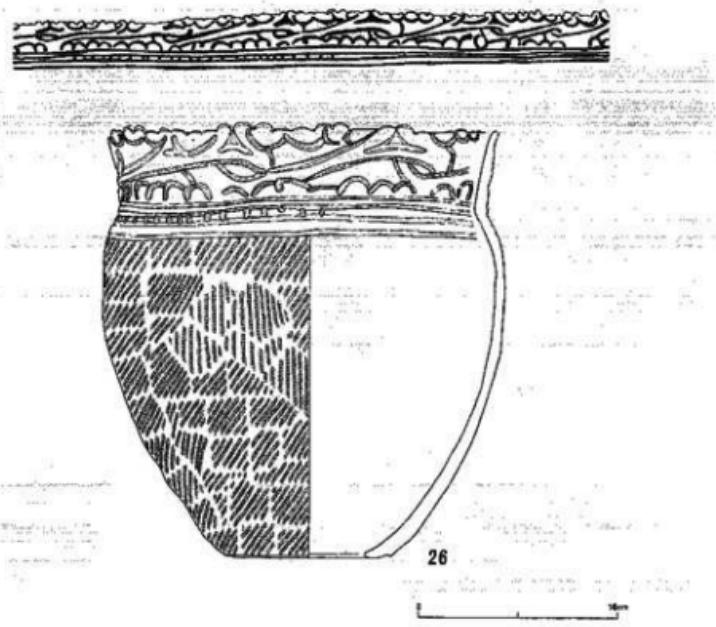
第40表		遺構名	S X(U) 001	出土地区	8-U	挿図番号	第13図	図版番号	
調査区西側で単独に検出された。埋設のための掘り込みは小さい。 土器は口縁部を欠く深鉢形である。土器埋土中には炭化物の含有が少量見られた。									



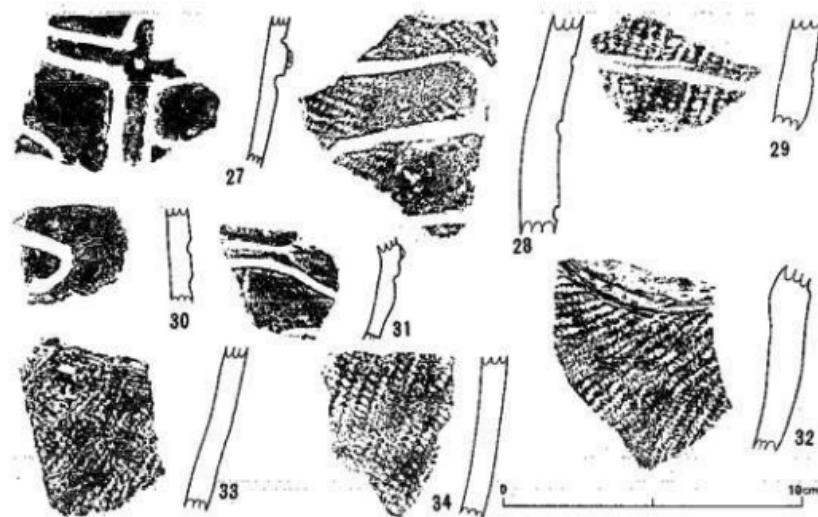
第14図 SI 001竪穴住居跡, SK 001, 002土壤出土土器(1)

圖15 圖 SK002, 003, 004出土土器(2)

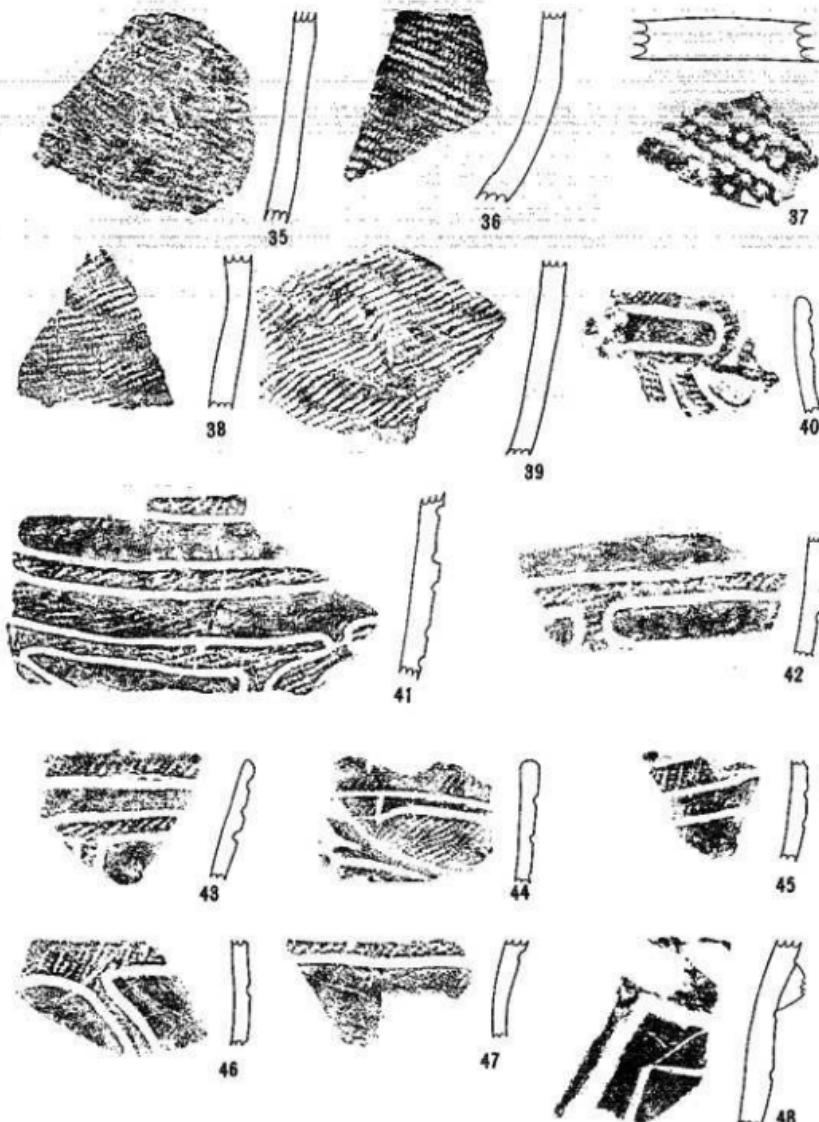




第16図 SK016土壤出土土器(3)



第17図 SK(F)001 フラスコ状ピット出土土器(4)

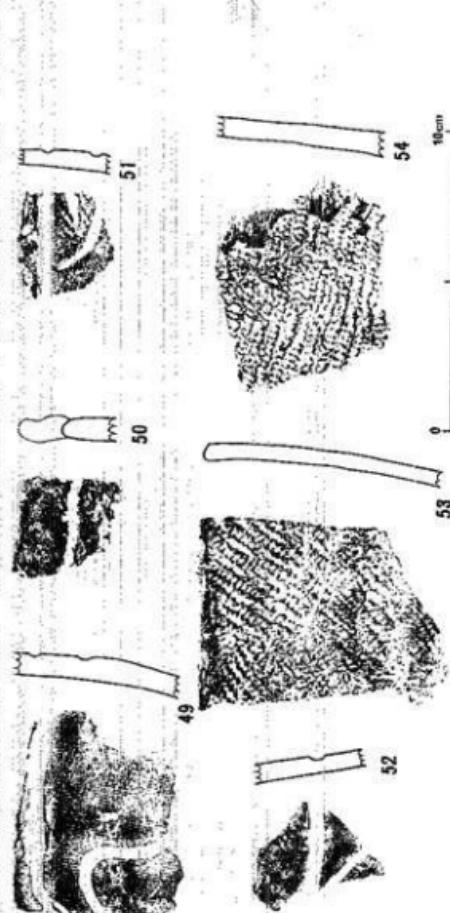


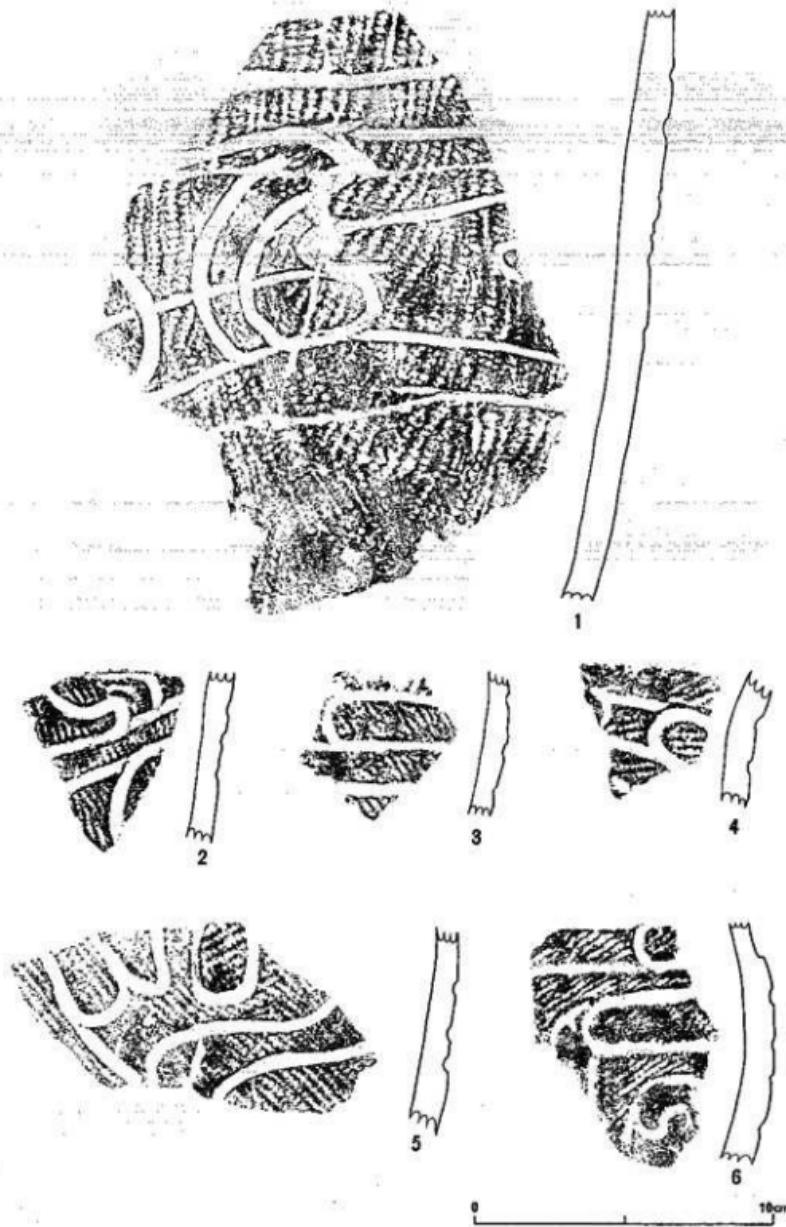
第18図 SK(F) 005, 006 フラスコ状ピット出土土器(5)

第20図 SX(U)001埋設土器実測図(7)



第19図 SK(F)007, 009プラスコ状ピット出土土器(6)

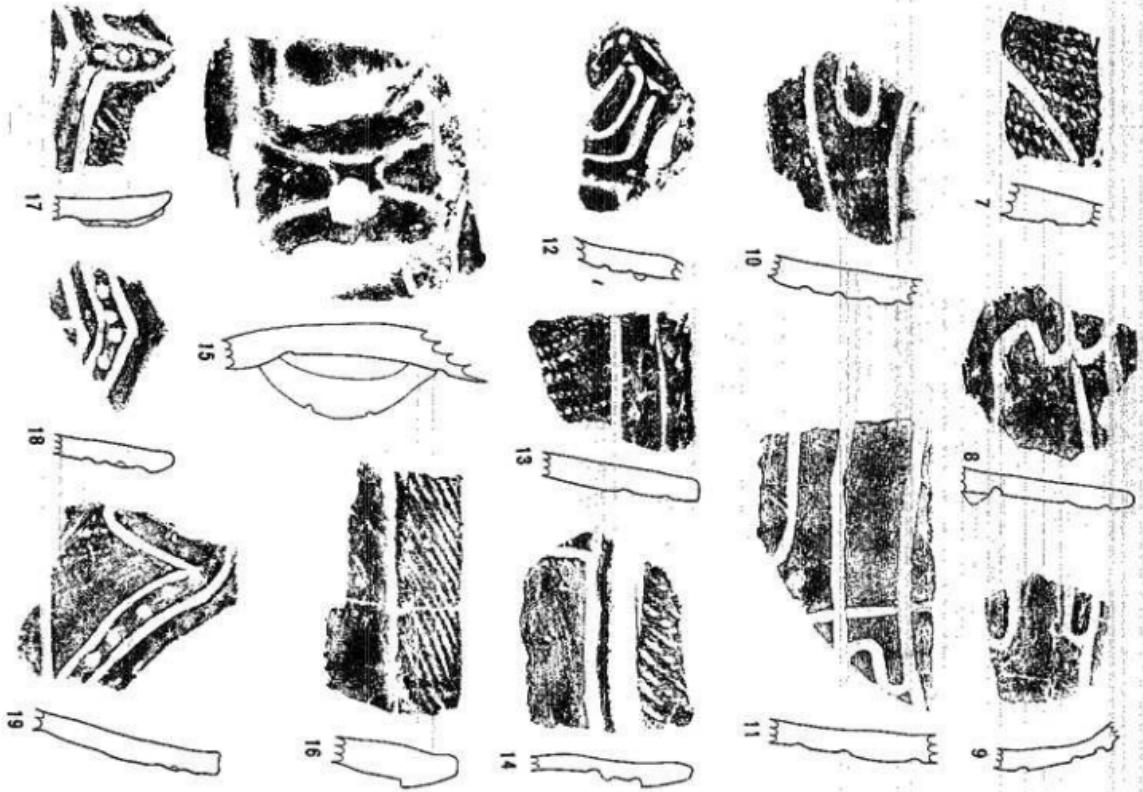


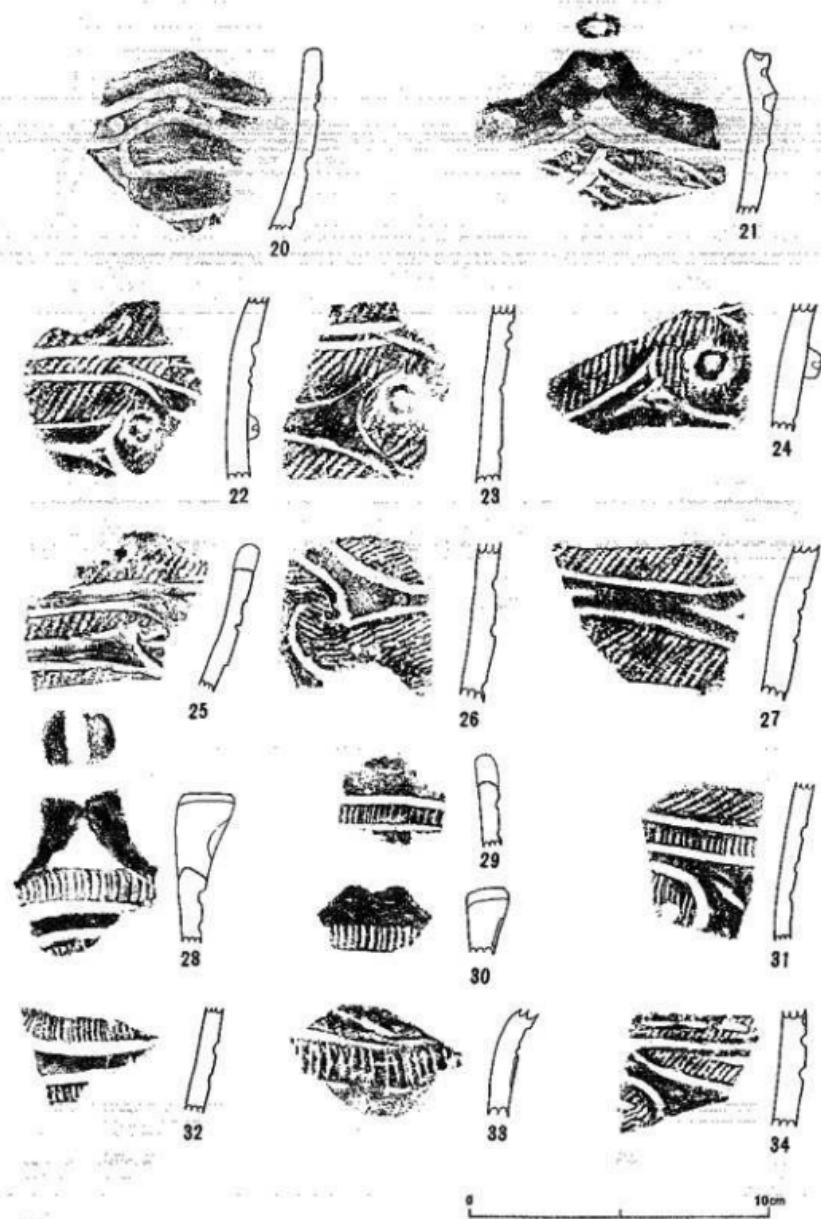


第21図 遺構外出土土器(1)

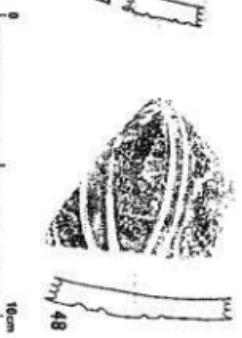
第22圖 遺構外出土器(2)

—374—

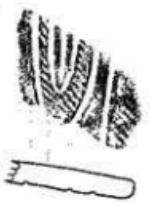




第23図 造構外出土土器(3)



48



46



47



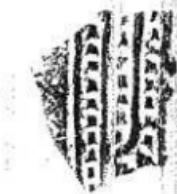
45



42



39



36



38



35



37



41



40



43

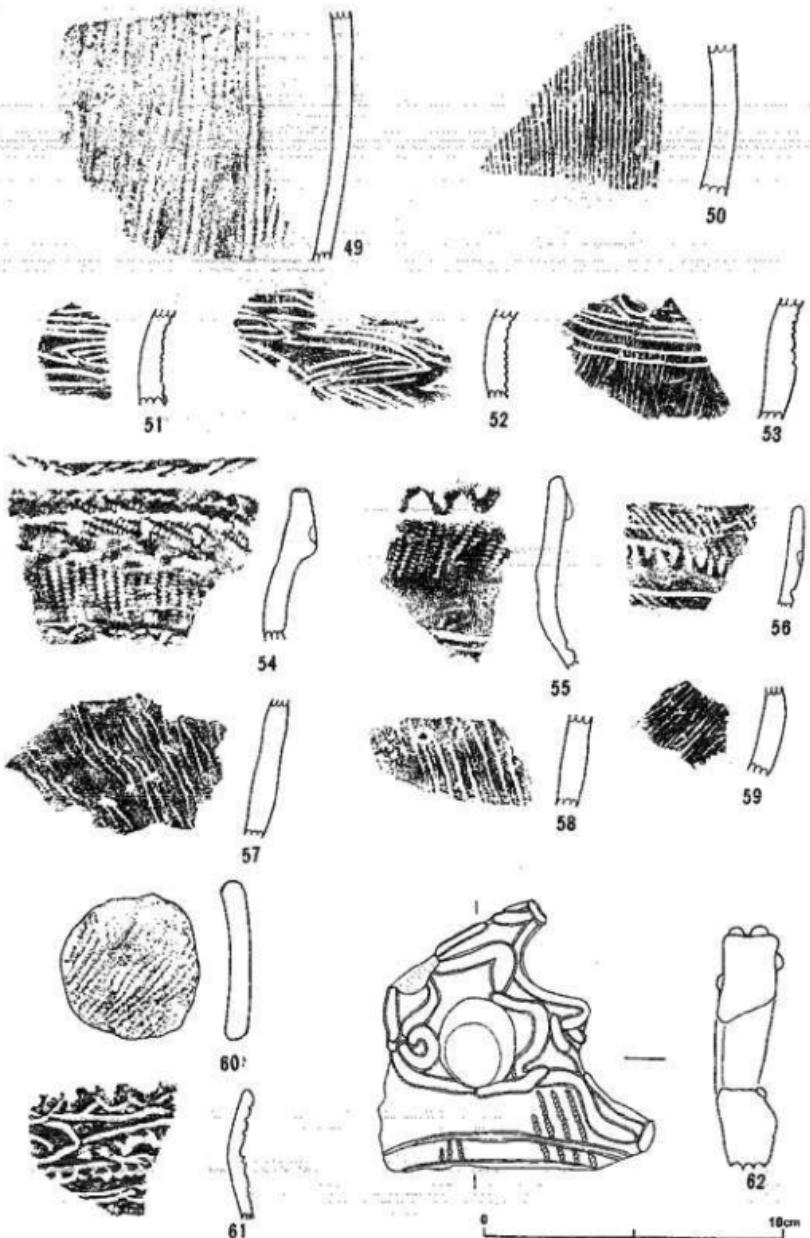


44

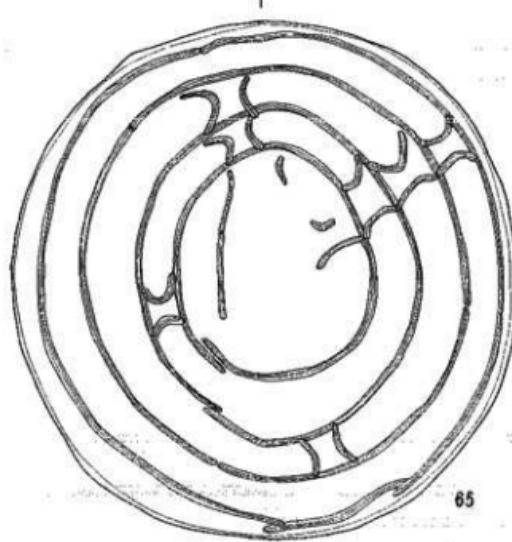
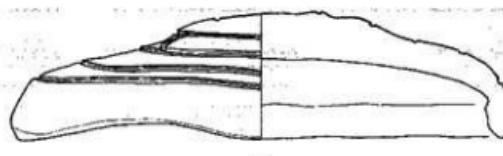
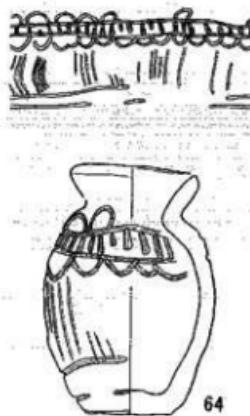
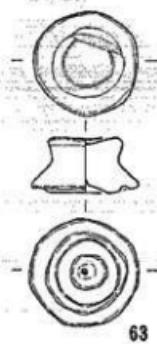


46

第24図 通縫外出土器(4)

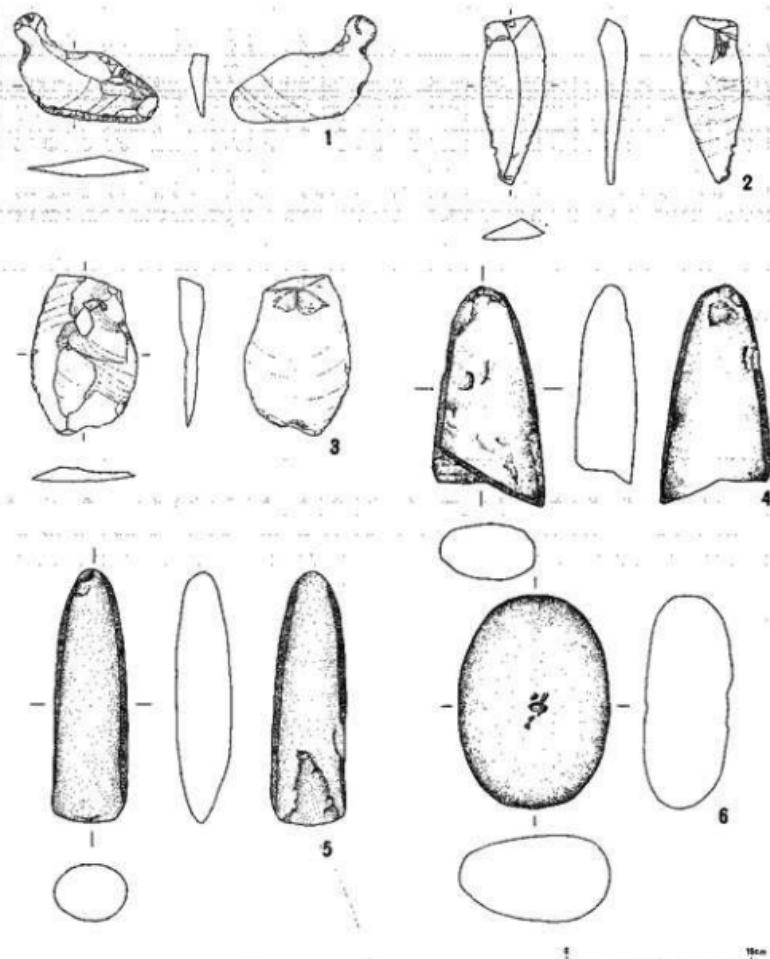


第25図 造構外出土土器(5)



第26図 遺構外出土土器(6)

0 5cm



第27図 造構出土石器

第41表 穴穴住居跡・土壤・フラスコ状ピット出土土器観察表(1)

件 番 号	拓 番	出 土 地 点	R.P. 番号	層位	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	燒成 度	備 考
						文 様	色 調	調 燒	色 調				
14-1	32	S I 001			胸 部	R L 蔵文縦位回転→沈縫	にぶい橙 7.5Y R 4%	横 位	褐 7.5Y R 4%	9	石英・長石 密	良好	
2	27	S I 001			胸 部	沈縫→磨溝	にぶい黄橙 7.5Y R 3%	斜 位	にぶい橙 7.5Y R 4%	7	石英・長石・雲母 密	良好	
3	25	S I 001			胸 部	縦文→沈縫	浅黄橙 10Y R 4%	縱 位	浅黄橙 10Y R 4%	10	石英・長石 密	良好	
4	167	S I 001	5		口縫部	R L 蔵文縦位回転→沈縫(折り返し口縫)	にぶい橙 7.5Y R 4%	横 位	にぶい橙 7.5Y R 4%	8	石英・長石 粗	良好	
5	19	S I 001			胸 部	R L 蔵文横位回転→沈縫	褐色 7.5Y R 4%	斜 位	にぶい黄橙 10Y R 4%	9	石英・長石 密	良好	
6	29	S I 001			胸 部	R L 蔵文縦位回転→沈縫	浅黄橙 10Y R 4%	斜 位	にぶい黄橙 10Y R 4%	10	石英・長石 密	良好	
7	30	S I 001			胸 部	R L 蔵文縦位回転	浅黄 2.5Y R 4%	横 位	にぶい黄橙 10Y R 4%	9	石英・長石 密	良好	
8	28	S I 001	8		口縫部	斜位・横位の複合状	にぶい橙 5Y R 4%	斜 位	にぶい橙 5Y R 4%	6	石英・長石・雲母 密	良好	
9	31	S I 001			胸 部		にぶい橙 5Y R 4%	横 位	にぶい橙 7.5Y R 4%	7	石英・長石 密	良好	
10	70	S K 001			胸 部	沈縫→磨溝	灰橙 7.5Y R 4%	横 位	灰橙 7.5Y R 4%	7	石英・長石 密	良好	
11	69	S K 001	3		胸 部	R L 蔵文縦位回転	にぶい橙 5Y R 4%	横 位	にぶい橙 5Y R 4%	10	石英・長石 密	良好	
12	58	S K 002			口縫部	L R 蔵文縦位回転→沈縫→斜文	暗赤褐色 2.5Y R 4%	横 位	暗赤褐色 2.5Y R 4%	8	石英・長石・雲母 密	良好	外面スヌ付有
13	60	S K 002	1		胸 部	L R 蔵文縦位回転→沈縫	にぶい橙 7.5Y R 4%	横 位	にぶい橙 5Y R 4%	10	石英・長石 密	良好	
15-14	57	S K 002	2		胸 部	沈縫→磨溝	にぶい橙 7.5Y R 4%	斜 位	にぶい橙 7.5Y R 4%	7	石英・長石・雲母 密	良好	内面一部未焼り
15	59	S K 002	2		胸 部	沈縫→磨溝	にぶい橙 7.5Y R 4%	斜 位	にぶい橙 7.5Y R 4%	7	石英・長石 密	良好	
16	61	S K 002	4		口縫部	磨溝	褐色 7.5Y R 4%	横 位	褐色 7.5Y R 4%	9	石英・長石・雲母 密	良好	
17	114	S K 003			胸 部	R L 蔵文縦位回転→沈縫	にぶい赤褐色 2.5Y R 4%	横 位	赤褐色 2.5Y R 4%	6	石英・長石 密	良好	
18	143	S K 003			胸 部	沈縫→磨溝	暗赤褐色 5Y R 4%	横 位	暗赤褐色 2.5Y R 4%	10	石英・長石・雲母 密	良好	
19	155	S K 004	4		胸 部	L R 蔵文科斜位回転→沈縫	にぶい橙 7.5Y R 4%	斜 位	にぶい橙 7.5Y R 4%	11	石英・長石・雲母 密	良好	
20		S K 004			口縫部	L R 蔵文科斜位回転→粘付→沈縫→斜文	にぶい橙 7.5Y R 4%	斜 位	にぶい橙 7.5Y R 4%	11	石英・長石・雲母 密	良好	

第42表 土壌・フラスコ状ピット出土土器観察表(2)

地 番 号	部 番	出 土 地 点	R.P. 番号	層位	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	地 上	地底	備 考	
						文	部	色 調	調 整					
15-21	44	S K 007			肩 部	沈線→磨消→朱赤り(?)		に赤い褐 7.5 Y R 5%	斜 位	に赤い褐 7.5 Y R 5%	7	石英・長石 密	良好	
22	46-48	S K 007			肩 部	沈線→磨消→朱赤り(?)		に赤い黄 10 Y R 5%	横 位	に赤い褐 7.5 Y R 5%	7	石英・長石 密	良好	
23	43	S K 007			口縁部	L.R.織文模位斜軸→沈線		灰褐色 7.5 Y R 5%	横 位→埋位	に赤い褐 7.5 Y R 5%	6	石英・長石・雲母 密	良好	
24	45	S K 007			口縁部	L.R.織文經位回転		褐 5 Y R 5%	斜 位	褐 5 Y R 5%	8	石英・長石 密	良好	
25	47	S K 007			肩 部	R.L.織文模位回転		に赤い黄 10 Y R 5%	斜 位	に赤い褐 7.5 Y R 5%	7	石英・長石 密	良好	
16-26		S K 016			光 彩	L.R.織文模位斜軸回転→沈線→刻目		に赤い褐 7.5 Y R 5%	横 位	に赤い褐 7.5 Y R 5%	6	石英・長石 密	良好	
17-27	67	S K 001			肩 部	陰線(河突)→沈線→磨消		に赤い黄 10 Y R 5%	横 位	に赤い褐 7.5 Y R 5%	7	石英・長石・雲母 密	良好	
28	2	S K 001	9		肩 部	L.R.織文模位斜軸→沈線		に赤い黄 10 Y R 5%	横 位	褐 5 Y R 5%	13	石英・長石・雲母 密	良好	
29	62	S K 001			肩 部	R.L.織文經位回転→沈線		に赤い褐 7.5 Y R 5%	斜 位	褐 5 Y R 5%	11	石英・長石・雲母 密	良好	
30	169	S K 001	3		肩 部	沈線→磨消		褐灰 7.5 Y R 5%	斜 位	に赤い赤褐色 10 Y R 5%	8	石英・長石・雲母 密	良好	
31	3	S K 001	9		肩 部	沈線→磨消		褐 5 Y R 5%	横 位	に赤い褐 7.5 Y R 5%	7	石英・長石 密	良好	
32	1	S K 001	5		肩 部	L.R.織文模位回転→沈線		に赤い黄 10 Y R 5%	横 位	に赤い黄 10 Y R 5%	11	石英・長石 密	良好	
33	5	S K 001			肩 部	L.R.織文模位斜軸		に赤い褐 5 Y R 5%	横 位	に赤い褐 7.5 Y R 5%	9	石英・長石・雲母 密	良好	
34	65	S K 001			肩 部	L.R.織文模位斜軸		に赤い褐 7.5 Y R 5%	斜 位	に赤い褐 7.5 Y R 5%	8	石英・長石・雲母 密	良好	
18-35	53	S K 001			肩 部	L.R.織文模位回転		褐 7.5 Y R 5%	斜 位	褐 7.5 Y R 5%	8	石英・長石 密	良好	
36	54	S K 001			肩 部	L.R.織文模位回転		に赤い黄 10 Y R 5%	横 位	に赤い黄 10 Y R 5%	9	石英・長石 密	良好	
37	64	S K 001			底 部	網代面		褐 2.5 Y R 5%	—	褐 2.5 Y R 5%	11	石英・長石 密	良好	
38	41	S K 005	3		肩 部	L.R.織文模位回転		に赤い褐 7.5 Y R 5%	斜 位→横 位	に赤い黄 10 Y R 5%	8	石英・長石 密	良好	
39	38	S K 005	2		肩 部	R.L.織文模位回転→沈線		に赤い褐 7.5 Y R 5%	斜 位	に赤い黄 10 Y R 5%	7	石英・長石 密	良好	
40	151	S K 006			口縁部	陰線→L.R.織文模位斜軸回転→沈線→磨消		に赤い赤褐色 5 Y R 5%	横 位	に赤い褐 7.5 Y R 5%	6	石英・長石 密	良好	

第43表 フラスコ状ピット出土土器・埋設土器観察表(3)

件 番 号	折 番	出 土 地 点	R P 番号	層位	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	施 成	備 考	
						文	様	色 調	調 整					
18-41	127	S K(F)05			胴 部	R L 繩文模位回転→沈縁→磨削		黒褐色 10YR 4/2	横 位	にぶい程 7.5YR 4%	7	石英・長石・雲母 密	良好	
42	150	S K(F)05			胴 部	L R 繩文模位回転→沈縁→磨削		にぶい程 7.5YR 4%	横 位	にぶい程 7.5YR 4%	6	石英・長石・雲母 密	良好	
43	147	S K(F)06			口縁部	R L 繩文模位回転→沈縁→磨削		程 5YR 4%	横 位	にぶい程 5YR 4%	6	石英・長石 密	良好	
44	149	S K(F)06			口縁部	波状口縁(貼コブ), R L 繩文模位回転→沈縁→磨削		にぶい程 7.5YR 4%	横 位	にぶい程 7.5YR 4%	6	石英・長石 密	良好	
45	148	S K(F)06			口縁部	L R 繩文模位回転→沈縁→磨削		にぶい程 7.5YR 4%	横 位	黒褐色 10YR 4/2	6	石英・長石 密	良好	
46	152	S K(F)06			胴 部	L R 繩文模位回転→沈縁→磨削		にぶい程 7.5YR 4%	横 位	にぶい程 7.5YR 4%	6	石英・長石 密	良好	
47	145	S K(F)06	4		胴 部	R L 繩文模位回転→沈縁→磨削		程 7.5YR 4%	横 位	にぶい程 7.5YR 4%	8	石英・長石・雲母 密	良好	
48	146	S K(F)07			胴 部	磨擦→沈縁→磨削		にぶい程 7.5YR 4%	横 位	にぶい程 7.5YR 4%	10	石英・長石 密	良好	
19-49	144	S K(F)07			胴 部	沈縁→磨削		にぶい赤褐色 2.5YR 4%	横位→横位	明赤褐色 2.5YR 4%	9	石英・長石・雲母 密	良好	
50	159	S K(F)09	2		口縁部	(折り返し口縁)		灰赤 2.5YR 4%	横 位	にぶい程 5YR 4%	9	石英・長石・雲母 密	良好	
51	164	S K(F)09			胴 部	R L 繩文模位回転→沈縁→磨削		にぶい程 7.5YR 4%	横 位	にぶい赤褐色 10YR 4/2	6	石英・長石 密	良好	
52	160	S K(F)09			胴 部	沈縁→磨削→朱書き(?)		にぶい程 7.5YR 4%	横 位	にぶい程 7.5YR 4%	7	石英・長石・雲母 密	良好	
53	163	S K(F)09	2		口縁部	L R 繩文模位回転		黒褐色 5YR 4%	横位→斜位	にぶい程 7.5YR 4%	6	石英・長石 密	良好	
54	165	S K(F)09	1		胴 部	L R 繩文模位回転		にぶい程 7.5YR 4%	斜位→横位	にぶい程 7.5YR 4%	8	石英・長石 密	良好	
20-55	-	S X(6)01			~底部	L 繩文模位回転		にぶい程 7.5YR 4%	横 位	程 5YR 4%	10	石英・長石 密	良好	外表面一部スス付着

第44表 遺構外出土土器鉢表(1)

排 番 号	拓 番	出 土 地 点	R.P. 番号	層位	部 位	外 面			内 面			厚 さ (mm)	胎	土	燒成	備 考
						文 様		色 調	調 整	色 調						
21-1	168				胴 部	L.R.繩文斜位回転→沈線		棕 7.5Y R 5%	横 位	に い 棕 7.5Y R 5%	12	石英、長石 密	良好			
2	109	9-S			胴 部	L.R.繩文縦位回転→沈線		に い 棕 7.5Y R 5%	斜 位	に い 棕 5 YR 5%	8	石英、長石 密	良好			
3	98	9-V SK 08			胴 部	L.R.繩文横位回転→沈線		黑褐 5 YR 5%	横 位	灰褐 7.5Y R 5%	8	石英、長石 粗	不良	外面スス付着		
4	110	9-S			胴 部	L.R.繩文縦位回転→沈線		に い 棕 7.5Y R 5%	斜 位	灰 褐 10Y R 5%	9	石英、長石 密	良好			
5	105 135	10-T			胴 部	L.R.繩文縦位回転→沈線		褐灰 7.5Y R 5%	横 位	に い 棕 7.5Y R 5%	10	石英、長石 密	良好	外面スス付着		
6	51	6-T			胴 部	L.R.繩文横位回転→沈線→磨消		黑褐 10Y R 5%	斜 位	に い 棕 7.5Y R 5%	10	石英、長石 粗	不良			
22-7	100	9-V			胴 部	R.L.繩文縦位回転→沈線		に い 棕 7.5Y R 5%	横 位	に い 棕 7.5Y R 5%	11	石英、長石、雲母 密	良好	外面スス付着		
8	139	10-T			口縁部	陰線→沈線→磨消		に い 棕 5 YR 5%	斜 位	に い 棕褐 5 YR 5%	9	石英、長石、雲母 密	良好			
9	39	7-R			胴 部	沈線→磨消		棕 5 YR 5%	横 位	棕 7.5Y R 5%	7	石英、長石 密	良好			
10	128	11-S			胴 部	沈線→磨消		に い 棕 7.5Y R 5%	斜 位	に い 棕 7.5Y R 5%	9	石英、長石 密	良好	外面朱塗り		
11	103	9-T			胴 部	沈線→磨消		黑褐 5 YR 5%	斜 位	明赤褐 2.5Y R 5%	10	石英、長石、雲母 密	良好			
12	92	9-R	47		胴 部	陰線(刺突)→沈線→磨消		棕 7.5Y R 5%	横 位	棕 5 YR 5%	7	石英、長石、雲母 密	良好			
13	108	9-T			口縁部	R.L.繩文縦位回転→沈線→磨消		棕 5 YR 5%	横 位	棕 5 YR 5%	8	石英、長石 密	良好			
14	116	10-T			口縁部	L.繩文横位回転→沈線→磨消		灰赤 2.5Y R 5%	横 位	灰赤 2.5Y R 5%	6	石英、長石、雲母 密	良好	外面スス付着		
15	142	10-T			胴 部	沈線 傷状把手		に い 棕 5 YR 5%	横 位	に い 棕褐 5 YR 5%	12	石英、長石、雲母 密	良好			
16	123	9-T	一括		口縁部	L.繩文横位回転→磨消 折り返し口縁		に い 棕 5 YR 5%	横 位	灰褐 5 YR 5%	11	石英、長石、雲母 密	良好	外面スス付着		
7	106	10-T			口縁部	山形突起 L.繩文縦位→沈線→刺突→磨消		黑褐 7.5Y R 5%	横 位	灰褐 5 YR 5%	7	石英、長石 密	良好	外面スス付着		
18	107	9-U			口縁部	波状口縁→沈線→刺突→磨消		に い 棕褐 5 YR 5%	横 位	灰褐 5 YR 5%	7	石英、長石、雲母 密	良好	外面スス付着		
19	104	9-U			口縁部	山形突起 L.R.繩文縦位→沈線→刺突→磨消		に い 棕褐 2.5Y R 5%	斜 位	灰褐 5 YR 5%	8	石英、長石 密	良好	外面スス付着		
23-20	138	9-U	一括		口縁部	波状口縁→沈線→刺突→磨消		に い 棕褐 5 YR 5%	横 位	に い 棕褐 5 YR 5%	7	石英、長石 密	良好			

第45表 造構外出土器觀察表(2)

排 団 番 号	拓 番	出 土 地 点	R P 番 号	層位	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎	土	施成	備 考
						文	様	色 調	調 整					
23-21	113	9-S	-	一括	口縁部	山形突起(刺突) L.繩文縦位→沈縫→刺突→磨消		褐灰 10Y R 5%	横位	に近い褐 7.5Y R 5%	8	石英、長石 密	良好	
22	111	9-S	-	一括	胴 部	沈縫→刻目		に近い褐 7.5Y R 5%	横位	に近い褐 7.5Y R 5%	7	石英、長石 密	良好	
23	119	9-S	19		胴 部	R L.繩文縦位回転 貼コア(刺突)→沈縫→磨消		灰赤 2.5Y R 5%	横位	に近い赤褐 5Y R 5%	8	石英、長石、雲母 密	良好	外面スス付着
24	101	9-S			胴 部	L R.繩文縦位回転 貼コア(刺突)→沈縫→磨消		に近い褐 7.5Y R 5%	横位	に近い褐 7.5Y R 5%	7	石英、長石、雲母 粗	不良	
25	68	8-K			口縁部	R L.繩文縦位回転 山形突起→沈縫→磨消		に近い赤褐 5Y R 5%	斜位	明赤褐 5Y R 5%	7	石英、長石 密	良好	外面スス付着
26	115	9-S	45		胴 部	L R.繩文縦位回転→沈縫→磨消		に近い褐 7.5Y R 5%	横位	に近い黄褐 0Y R 5%	7	石英、長石 密	良好	
27	152	SK0906	-	一括	胴 部	L R.繩文縦位回転→沈縫→磨消		に近い褐 7.5Y R 5%	横位	に近い褐 7.5Y R 5%	6	石英、長石 密	良好	
28	166	7-S			口縁部	山形突起(刻目)沈縫→刻目→磨消		灰褐 7.5Y R 5%	横位	灰褐 7.5Y R 5%	7	石英、長石、雲母 密	良好	外面スス付着
29	131	9-S	-	一括	口縁部	波状口縁・沈縫→刻目→磨消		に近い褐 7.5Y R 5%	横位	所縫 7.5Y R 5%	7	石英、長石 密	良好	外面スス付着
30	137	9-S	-	一括		波状口縁・刻目		に近い褐 7.5Y R 5%	斜位	黑褐 5Y R 5%	8	石英、長石 密	良好	
31	130	9-U	-	一括	胴 部	L R.繩文縦位回転→沈縫→刻目→刺突→磨消		に近い褐 7.5Y R 5%	斜位	に近い褐 7.5Y R 5%	6	石英、長石 密	良好	内面スス付着
32	106	9-T			口縁部	R L.繩文縦位回転→沈縫→磨消		褐 5Y R 5%	横位	褐 5Y R 5%	8	石英、長石 密	良好	
33	111	9-S	-	一括	胴 部	沈縫→刻目		に近い褐 7.5Y R 5%	横位	に近い褐 7.5Y R 5%	7	石英、長石 密	良好	
34	117	9-S	-	一括	胴 部	L R.繩文縦位回転→沈縫→刺突→磨消		に近い黄褐 10Y R 5%	斜位	灰黄褐 10Y R 5%	8	石英、長石、雲母 密	良好	
24-35	120	9-S	-	一括	胴 部	L R.繩文縦位回転→沈縫→刺突		に近い黄褐 10Y R 5%	斜位	灰褐 7.5Y R 5%	9	石英、長石 密	良好	外面スス付着
36	134	9-S	-	一括	胴 部	L R.繩文縦位回転→沈縫→刺突・刻目		灰褐 7.5Y R 5%	横位	に近い褐 7.5Y R 5%	7	石英、長石 密	良好	
37	136	9-S			胴 部	L R.繩文縦位回転→沈縫→刺突・刻目		に近い褐 7.5Y R 5%	横位	灰褐 7.5Y R 5%	7	石英、長石 密	良好	外面スス付着
38	121	9-S	-	一括	胴 部	L R.繩文縦位回転→沈縫→刻目		に近い褐 7.5Y R 5%	斜位	に近い褐 7.5Y R 5%	8	石英、長石 密	良好	
39	112	6-P			口縁部	口縁部削み L R.繩文縦位回転→沈縫→刻目		に近い褐 7.5Y R 5%	横位	灰褐 5Y R 5%	4	石英、長石、雲母 密	良好	外面スス付着
40	88	9-R	26		口縁部	口縁部に刻目と沈縫→刻目		褐 2.5Y R 5%	横位	灰褐 5Y R 5%	5	石英、長石 密	良好	

第46表 造構外出土土器觀察表(3)

神 番 号	折 番	出 土 地 点	R.P. 番号	層位	部 位	外 面		内 面		器厚 (mm)	胎 土	燒 成	備 考
						文	様	色調	調査				
24-41	75 83	9-R	45		口縁部 口部底状凹み→沈縫→磨消	L.R.漢文縦位斜軸 口部底状凹み→沈縫→磨消	に赤褐色 2.5YR5/4	無 位	に赤褐色 5YR5/4	5	石英・長石 密	良好	
43	87	9-R	44		胴 部	L.R.漢文縦位斜軸→沈縫→磨消	明赤褐色 5YR5/4	無 位	に赤褐色 5YR5/4	5	石英・長石・雲母 密	良好	
43		9-R			口縁部	L.R.漢文縦位斜軸→沈縫→磨消	明赤褐色 5YR5/4	無 位	に赤褐色 5YR5/4	5	石英・長石・雲母 密	良好	
44	90	9-R	44		胴 部	R.L.漢文縦位斜軸→沈縫	明赤褐色 5YR5/4	無 位	明赤褐色 5YR5/4	5	石英・長石 密	良好	
45	90	9-R	44		胴 部	L.R.漢文縦位斜軸→沈縫	明赤褐色 5YR5/4	斜 位	に赤褐色 5YR5/4	6	石英・長石 密	良好	
46	126	9-S	一括		口縁部	L.R.漢文縦位斜軸 (波状凸縫)→沈縫→磨消	に赤褐色 5YR5/4	無 位	に赤褐色 5YR5/4	7	石英・長石・雲母 密	良好	
47	125	10-T			胴 部	R.L.漢文縦位斜軸→沈縫→磨消	明赤褐色 2.5YR5/4	無 位	に赤褐色 2.5YR5/4	6	石英・長石・雲母 密	不良	外面スス付着
48	125	9-T	一括		胴 部	L.R.漢文縦位斜軸→沈縫→磨消	に赤褐色 2.5YR5/4	横位→斜位	橙 7.5YR1/4	7	石英・長石・雲母 密	良好	外面スス付着
25-49	153	8-S			胴 部	条紋	に赤褐色 10YR5/4	胴 位	に赤褐色 10YR5/4	8	石英・長石 密	良好	外面スス付着
50	140	9-I			胴 部	線条狀(舞目状の条痕)	橙 7.5YR5/4	無 位	橙 7.5YR5/4	10	石英・長石 密	良好	
51	97	7-O			胴 部	沈縫→磨消	に赤褐色 10YR5/4	無 位	に赤褐色 5YR5/4	7	石英・長石 密	良好	
52	94	7-O			胴 部	L.黒紋→沈縫→磨消	に赤褐色 7.5YR5/4	胴 位	に赤褐色 7.5YR5/4	6	石英・長石 密	良好	
53	95	7-O			胴 部	L.黒紋→沈縫	に赤褐色 5YR5/4	無 位	に赤褐色 5YR5/4	7	石英・長石 密	良好	
54	124	10-T			口縁部	黒縫→R.L.漢文縦位斜軸→R.L.漢文左縫 沈縫→斜突・口部底状凹状突起・割目	灰褐色 5YR5/4	横 位	灰褐色 7.5YR5/4	7	石英・長石・雲母 密	良好	外面スス付着
55	129	9-U			口縁部	黒縫→R.L.漢文縦位斜軸→斜突・沈縫	に赤褐色 7.5YR5/4	横 位	に赤褐色 7.5YR5/4	8	石英・長石・雲母 密	良好	内面スス付着
56	133	9-S	一括		口縁部	R.L.漢文縦位斜軸→文瓦列突・沈縫	に赤褐色 5YR5/4	横 位	に赤褐色 5YR5/4	6	石英・長石・雲母 密	良好	外面スス付着
57	72	10-K			胴 部	L.黒紋	に赤褐色 7.5YR5/4	無 位	に赤褐色 7.5YR5/4	6	石英・長石 密	良好	
58	73	4-R			胴 部	L.黒紋	暗赤褐色 2.5YR5/4	研 位	に赤褐色 2.5YR5/4	8	石英・長石 密	良好	外面スス付着
59	94	7-O			胴 部	撲紋	に赤褐色 10YR5/4	無 位	に赤褐色 5YR5/4	6	石英・長石 密	良好	
60	132	7-S			L.R.漢文(円錐状製品)	灰褐色 7.5YR5/4	無 位	に赤褐色 7.5YR5/4	8	石英・長石 密	良好		

第47表 進標外出土土器觀察表(4)

辨 識 番 号	折 番	出 土 地 点	R.P. 番号	層位	部 位	外 面 文 様		内 面		器厚 (mm)	胎 土	燒成 度	備 考
						色調	調 整	色調					
25-61	175	表 横			口縁部	沈線→刻み		黒褐 7.5Y R 5%	横 位	黒褐 7.5Y R 5%	5	石英・長石・雲母 密	良好
62	—	表 横			把 手	L.R. 製文底位圓軸→沈線・陰線	に上い橙 7.5Y R 5%		に上い橙 7.5Y R 5%		18	石英・長石 密	良好
25-63	—				耳飾り		浅黄褐 10Y R 5%				18		密 良好
64	—				充 形	沈線→刺突		に上い黄褐 10Y R 5%		浅黄褐 10Y R 5%	7		密 良好
65	—				充 形	沈線	浅黄褐 10Y R 5%		浅黄褐 10Y R 5%		15		密 良好

第48表 造様外出土石器觀察表

図版番号	標団番号	名 称	出土地域	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
14	27-1	石 匙	試掘トレンチ	6.5	2.5	1.0	29.5	真 岩	
14	27-2	搔 器	13 - P	8.9	3.3	1.4	29.0	砂 岩	
14	27-4	搔 器	13 - J	8.1	5.7	1.3	43.8	砂 岩	
14	27-4	磨 製 石 斧	4 - P	10.5	5.0	3.0	295.0		
14	27-5	磨 製 石 斧	S K(F) 002	13.7	3.9	3.0	260.0	安 山 岩	
14	27-6	凹 石	7 - T	11.6	8.0	4.6	680.0	安 山 岩	

## 6. 遺構と遺物

### (1) 遺構

本遺跡においては、36基におよぶ土壙とフラスコ状ピットが検出されているが、時期の判別できるものは縄文後期の9基、晩期の1基にすぎない。しかし、調査区西側に集中する土壙群は、遺構外の出土土器からみても多くは縄文後期と考えられる。平面形はいずれも円形、橢円形を基調とするもので、長方形を呈しているものも1例ある。フラスコ状ピットは、断面形において明確なくびれ部分が見られない袋状と言われるものが大部分である。

晩期の土壙は調査区東側にみられ、後期の土壙群と位置を異にしている。SK 016としたこの土壙からは、完形の土器が出土している。出土状態からみて、土壙構築後に壁際の袋状を呈している部分に埋納されたような状態で横倒しになって検出されたものである。土器は、内湾して立ちあがる脛部が頸部で若干ひきしまり、外反気味に口縁部に至る腰形土器である。口唇部には2個1対の小突起が見られる。底面は焼成後に打ち欠かれた状態を呈している。頸部の4条の平行沈線は、口縁部と脣部の文様帯を分ける。口縁部は、6単位の入組文を中心に上下に連弧状文、三叉文を配している。また、外面体上半部には煤状炭化物の付着が見られる。

埋設土器は、調査区西側で単独に正立して検出された。埋設のための掘り込みは小さく、下部ではほとんど土器と密着していた。土器は底部から外反しながらまっすぐ立ちあがる深鉢形で、口縁部を欠く。無節の縄文のみが施されているものである。なお、土器埋土中には炭化物の含有が認められた。

本調査で確認された1棟の住居跡は、多くのフラスコ状ピットや土壙群と時期を一にしている。しかし、集落跡が住居群を中心に構成されていると考えるならば、この遺跡におけるような住居が1棟のみで、残りは貯蔵穴、墓壙と考えられる土壙群が占めていることは不自然で、さらに地形から見て南北に伸びるであろうとされていたこの遺跡が、調査区以外の広がりがほとんど認められないことを考えあわせると、検出された1棟の住居跡は、少し離れた居住地と密接な関係をもつ狩猟時のキャンプサイト的役割をもった施設と考えられる。晩期においては、台地南端東側の一部を墓域として利用していたことが、大洞B式土器埋納の土壙の検出で理解できる。

## (2) 土器・土製品について

本遺跡で出土した土器は、縄文土器と弥生土器である。遺構内出土土器は僅少で、あるため、遺構外出土土器を中心とした分類にしたがって見ていきたい。

### 第Ⅰ群土器 (21図、22図7~16)

縄文後期初頭～前葉に比定されるものである。磨消手法の有無で2分類される。

#### 第1類 (21図、22図7)

磨消手法を施さないもので、横位の平行沈線を基軸にその間を曲線、弧線で結ぶものである。地文の縄文は単節、無節があり、条の広いものも見られる。

#### 第2類 (22図8~16、26図64・65)

磨消縄文の行われているもので、基本的には1類と同じ文様構成を持つ。沈線を結ぶ曲線には逆「S」字状の蛇行文も見られる。隆起帯があり、その屈曲部に刺突を持つもの、最大径が体部下半にくる壺形土器の頸部に付く橋状把手や蓋形土製品もこの類に入るものであろう。蓋形を呈するものは完形品であり、径が16.5~17.5cmの平面がほぼ円形のもので、そこに同心円文が4条、それを埋めるように「x」字状の弧線を配しているものである。なおこの類の土器には朱塗の痕跡の見られるものもある。器高8.3cmのミニチュア土器もこの類である。

### 第II群土器 (22図17~19、23図20・21)

口縁部の山形突起に刺突の入る一群である。突起頂下に刺突が施されているものと、口縁部に沿う2本の沈線間に間隔を置いて刺突の入るものがある。

### 第III群土器 (23図22~27)

縄文後期末葉～晩期初頭に比定される貼眉文土器である。刺突の入った瘤を中心に磨消手法を用いた入組状文（帶状文）が施されるもので、入組部分が三叉状を呈しているものもある。

### 第IV群土器 (23図28~34、24図35~37)

継位の連続する刻目のあるものである。平行沈線間に刻目が入る場合が多いようである。これらには斜行縄文や横位の刺突が加わる。口縁部は山形や波状を呈しており、第III群の口縁部や体部の文様帶を構成するものと思われる。

### 第V群土器 (24図39)

晩期大洞B式に比定されるものである。口縁部から頸部にかけて平行沈線に刻目を入れたものを3列施文している。口唇部は2個1対の小突起を配している。胴部は斜縄文である。

### 第VI群土器 (24図41~45)

頸部を磨消により無文化させ、その下に平行沈線を施すもので、体部には磨消による蓋形文が見られるものである。

### 第VII群土器 (24図46~48)

磨消手法により器面に凸レンズ状もしくは木葉状に沈線で描出されているもので、地文として斜行縞文が施されている。

#### 第四群土器（25図49・50）

縦位の条痕をもつもので2片出土した。1片は貝殻によるもので、居熊井遺跡SX(1)001に類例が見られる。もう1片は横状工具によるものと思われる条の細いものである。前者は後期、後者は晩期と考えられる。

#### 第五群土器（25図51～59）

弥生時代後期のものである。

##### 第1類（25図51～56）

交互刺突文の見られるもので、天王山式に比定されるものである。粘土紐上に刺突を施すものと、刺突のみで交互させているものがある。刺突下には縦位の縞文と横位の沈線が走る。体部は縦位の捺糸文に重菱形の沈線が施され、その後磨消を行うものとそうでないものがある。

##### 第2類（25図57～59）

条の広い捺糸文を施すもので、小坂X式に比定されるものである。

なお、表掲においては、縞文時代中期中葉と考えられる孔を有する把手（25図62）がある。

#### 土製品（25図60、26図63）

土製品としては円盤状土製品、耳飾りがある。耳飾りは上下面とも凹み、下面は1条の円形文と中央部に一孔が施文されておりスタンプ状を呈する。

## 7.まとめ

猿ヶ平I遺跡は秋田県鹿角市花輪字猿ヶ平に所在し、地形的には花輪盆地東側山地末端に形成された標高200mの花輪中位段丘上に立地する縞文時代と弥生時代の複合遺跡である。

縞文時代の遺構としては、後期の石組炉を有する円形の竪穴住居跡1棟、フラスコ状ビット16基、土壙19基、晩期の土壙1基、時期不明のTビット1基である。

出土遺物としては、中期大木Bb式、後期初頭～中葉の磨消文土器、末葉の點瘤文土器、晩期大洞B式土器が出土しているが、ほとんど破片である。これらのいずれかに伴うと考えられる石器としては、石鎌、石斧、不定形石器、土製品として耳飾、円盤状土製品がある。

後期の遺構・遺物は、住居跡と少しほなれた西に張り出す台地上に集中して検出され、なんなくフラスコ状ビットが目についた。いわゆる居住地外に集中するパターンに属するものである。このフラスコ状ビットは頭部のくびれの小さいもので、出土遺物は僅少であった。

底部に穿孔の認められる晩期大洞B式土器を出土した土壙は、調査区東隅で発見された。

弥生時代の遺構は発見されず、遺物は小坂X式と呼ばれる撚糸文土器片と交瓦刺突文の施文された天王山式土器で、縄文後期・晚期の遺構の検出をみた地区の中間位置で少量発見された。このことから、時代によって人々の居住区の違いが看取された。

#### 〈主要参考文献〉

- 奥山潤・安保彰 「十和田湖西南部（小坂鉱山）の弥生式文化とその後続形態（上・下）」『考古学雑誌』第49巻2・3号 1963年
- 田村誠一 「大曲1号遺跡」『岩木山』 1968年
- 安保彰・奥山潤 「小坂環状列石墳墓」『小坂町教育委員会』 1969年
- 鈴木克彦 「中の平遺跡」『青森県教育委員会』 1974年
- 古市豊司 「中の沢西張遺跡・古街道長根遺跡」『青森県教育委員会』 1975年
- 安保 彰 「小坂のあけぼの 縄文期・弥生期」 1975年
- 古市豊司 「水木沢遺跡」『青森県教育委員会』 1977年
- 工藤竹久 「東北北部における弥生時代の諸問題」『北奥古代文化第10号』 1978年
- 興野義一 「宮城県大穴遺跡の弥生式土器」『北奥古代文化第10号』 1978年
- 草間俊一 「岩手県の弥生文化」『北奥古代文化第10号』 1978年
- 葛西 効 「董沢遺跡（後期編）」『青森市董沢遺跡発掘調査団』 1979年
- 中村良幸 「立石遺跡」『大迫町教育委員会』 1979年
- 富樫泰時 「塚の下遺跡」『秋田県教育委員会』 1979年
- 葛西 効 「十腰内I式土器の編年の細分」『北奥古代文化第11号』 1979年
- 橋 善光 「入門講座・弥生土器—北東北3・4—」『考古学ジャーナル166・168号』 1979年
- 安孫子昭二 「コブ付土器様式から亀ヶ岡土器様式への変遷過程」『考古風土記5号』 1980年
- 永瀬福男 「秋田県内におけるラスコ状ビットについて」『秋田地方史論集』半田教授退官記念会 1981年
- 秋田県教育委員会 「居熊井遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書I』 1981年

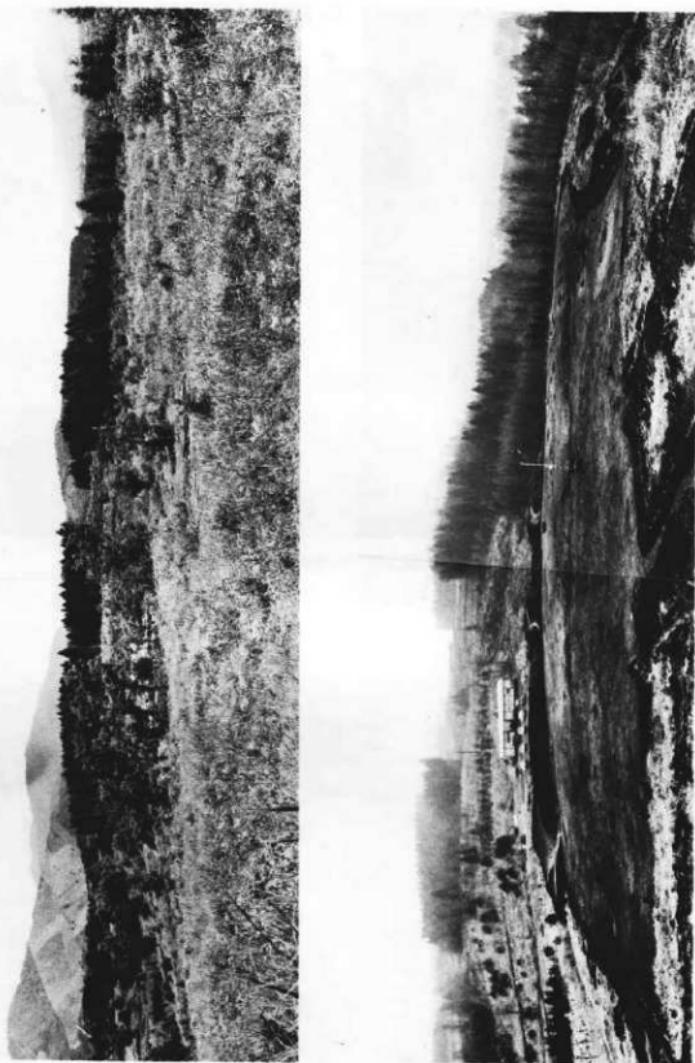
発掘調査参加者

浅石 三郎, 浅石 松藏, 安保 富蔵, 安保 富福, 小田島政美, 金沢 武,  
川又 繁治, 川又 忠治, 田中慶太郎, 穂澤 一三, 成田 猛太, 成田 与吉,  
畠山精次郎, 松岡 武男, 松岡 徳良

浅石 容子, 阿部 チエ, 阿部 テル, 安保テイ子, 石井ヨシエ, 石川 リサ,  
稻垣 キワ, 井上 ミヲ, 金沢 ミキ, 川村千鶴子, 川又 ヨリ, 木村 サタ,  
木村 チエ, 木村 ミキ, 木村 良子, 金田一實津子, 工藤 イネ, 工藤 ミツ,  
工藤 ヤエ, 佐藤 シミ, 関 キワ, 田中 タマ, 津江 ミナ, 津江 良子,  
成田 キヌ, 成田 クニ, 似鳥 キサ, 畠山 スエ, 畠山 千代美, 畠山 トヨ,  
松岡 テイ, 柳沢 テル, 柳沢 敏江

(五十音順)

遺跡全景(北▲南) 上・発掘調査前 下・発掘調査後



図版 1



調査終了後遺跡全影(南東▶北西)



図版 2

調査終了後遺跡全影(東▶西)

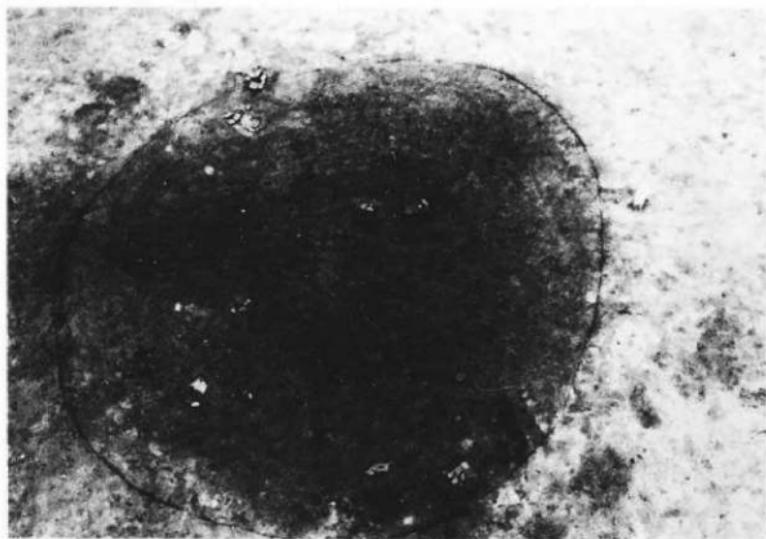


調査風景



図版3

調査風景



S1001 壇穴住居跡確認状況(南▶北)



図版 4

S1001壇穴住居跡(北▶南)



S1001 穫穴住居跡と炉(西▶東)



図版 5

S1001 穫穴住居跡・炉の下のSK020土壙(西▶東)

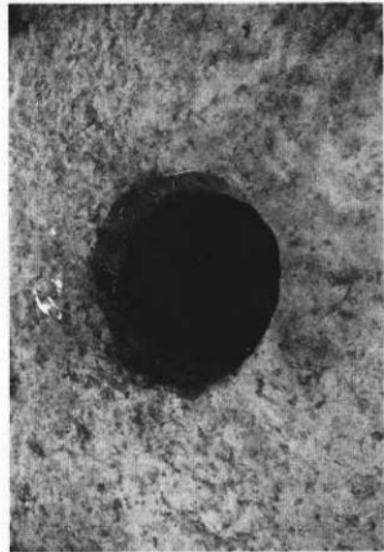
猿ヶ平I遺跡



▲ SK016土壤(東▼西)



▲ SK016 土壤土器出土状況



SK(F)012  
プラスコ状ビット(南▶北) ▶



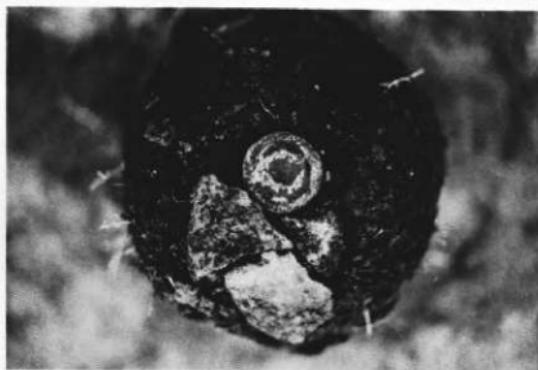
SX(U)001  
埋設土器(南▶北) ▶



▲9-Sグリッド土器出土状況



▲9-Ⅱ土器出土状況

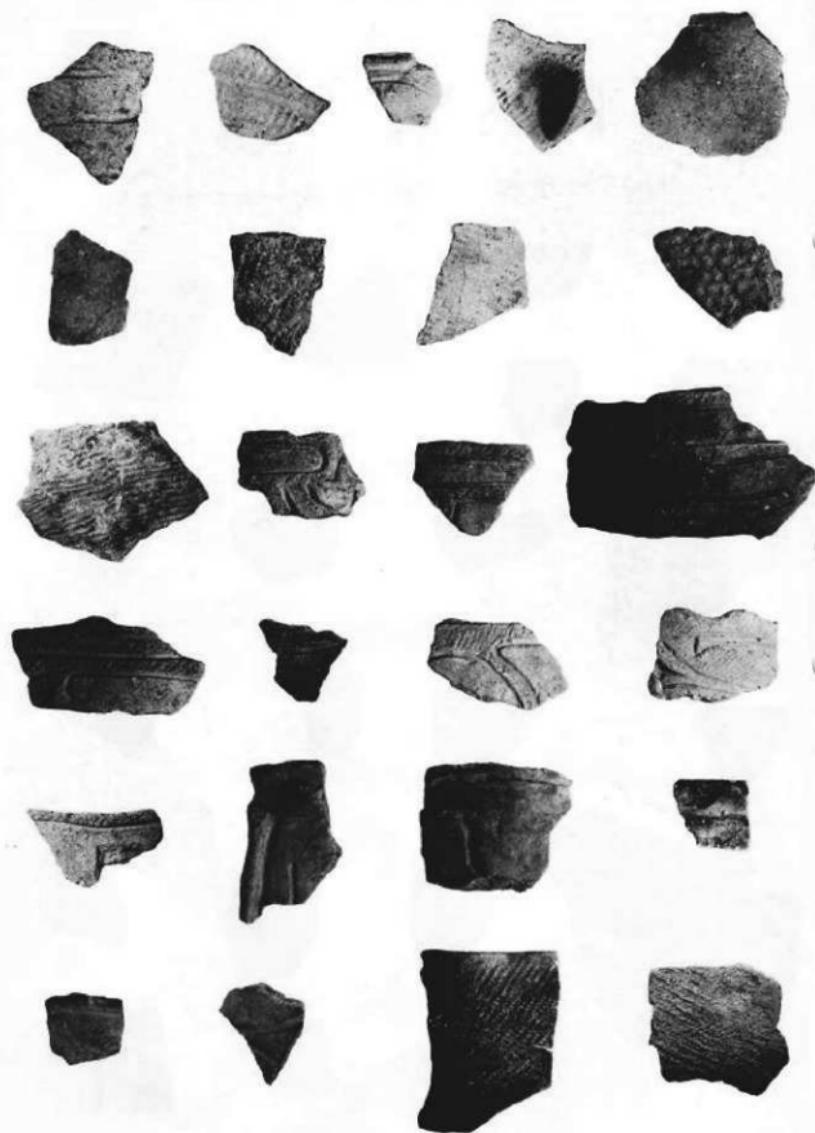


▲9-Ⅲ土器出土状況



図版 9

S I 001 穹穴住居・SK 001, 002, 003, 004 土壙  
SK (F) 001 フラスコ状ピット出土土器 (1)



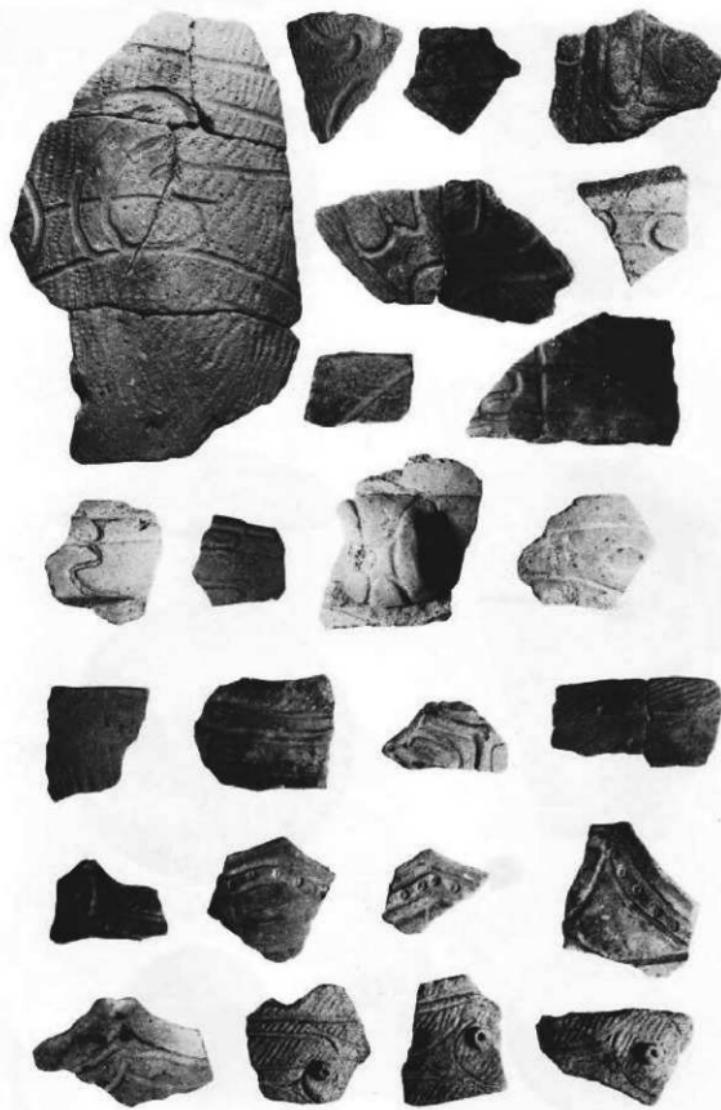
図版10

SK(F)005, 006, 007, 009 フラスコ状ビット出土土器(2)



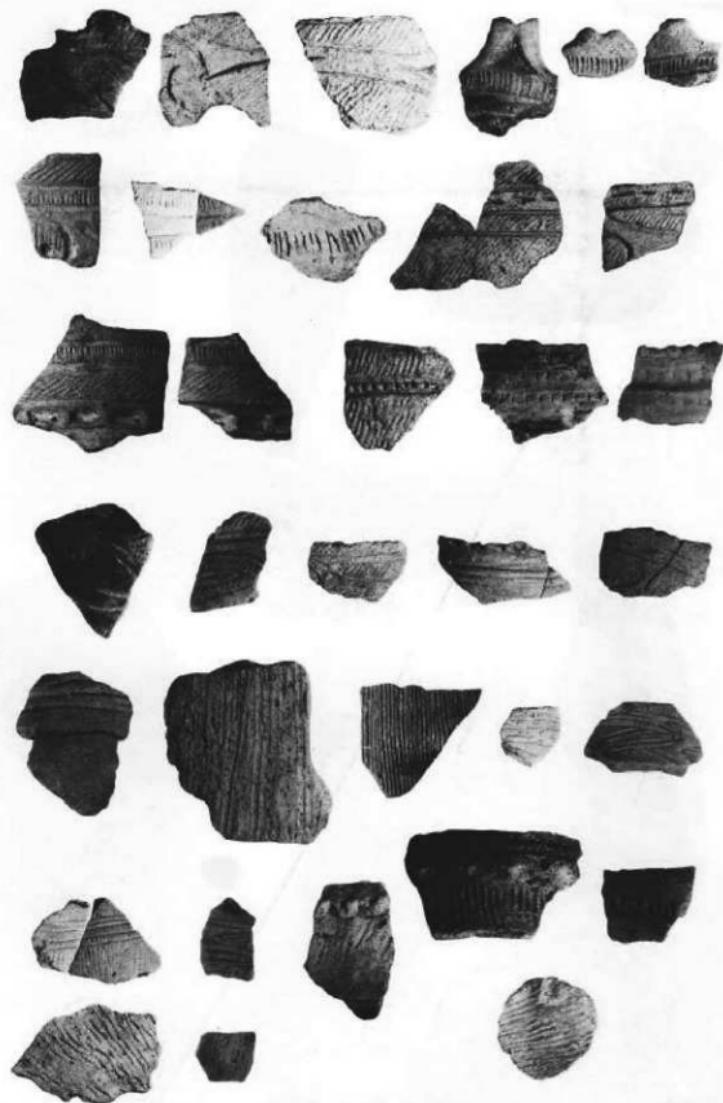
図版II

SK016 土壙, SX(U)001 墓設土器, 遺構外出土土器・土製品(3)



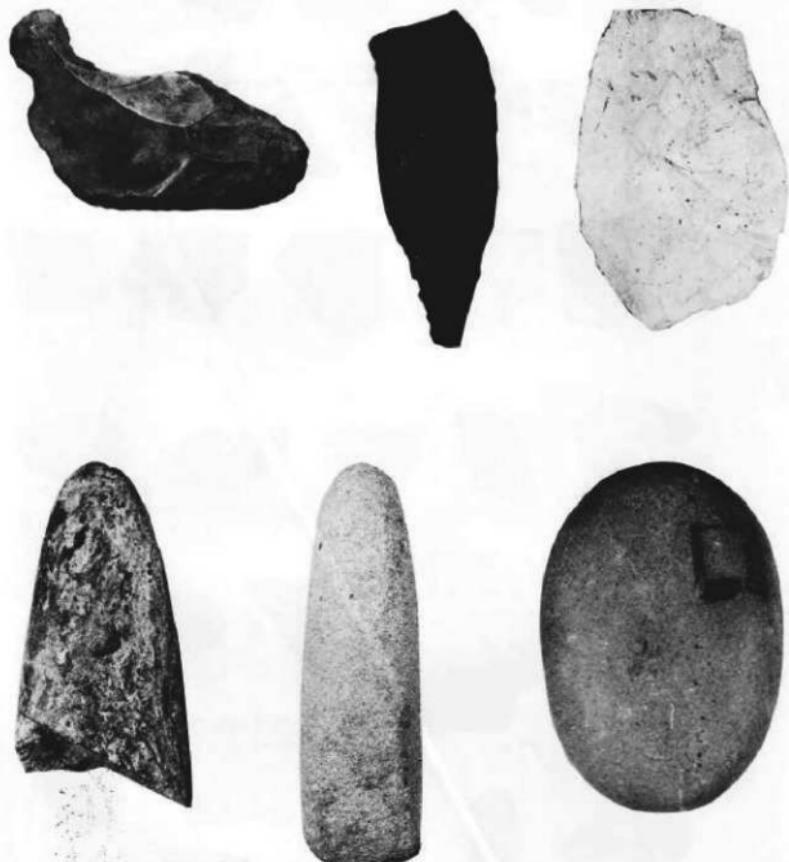
図版12

遺構外出土土器(4)



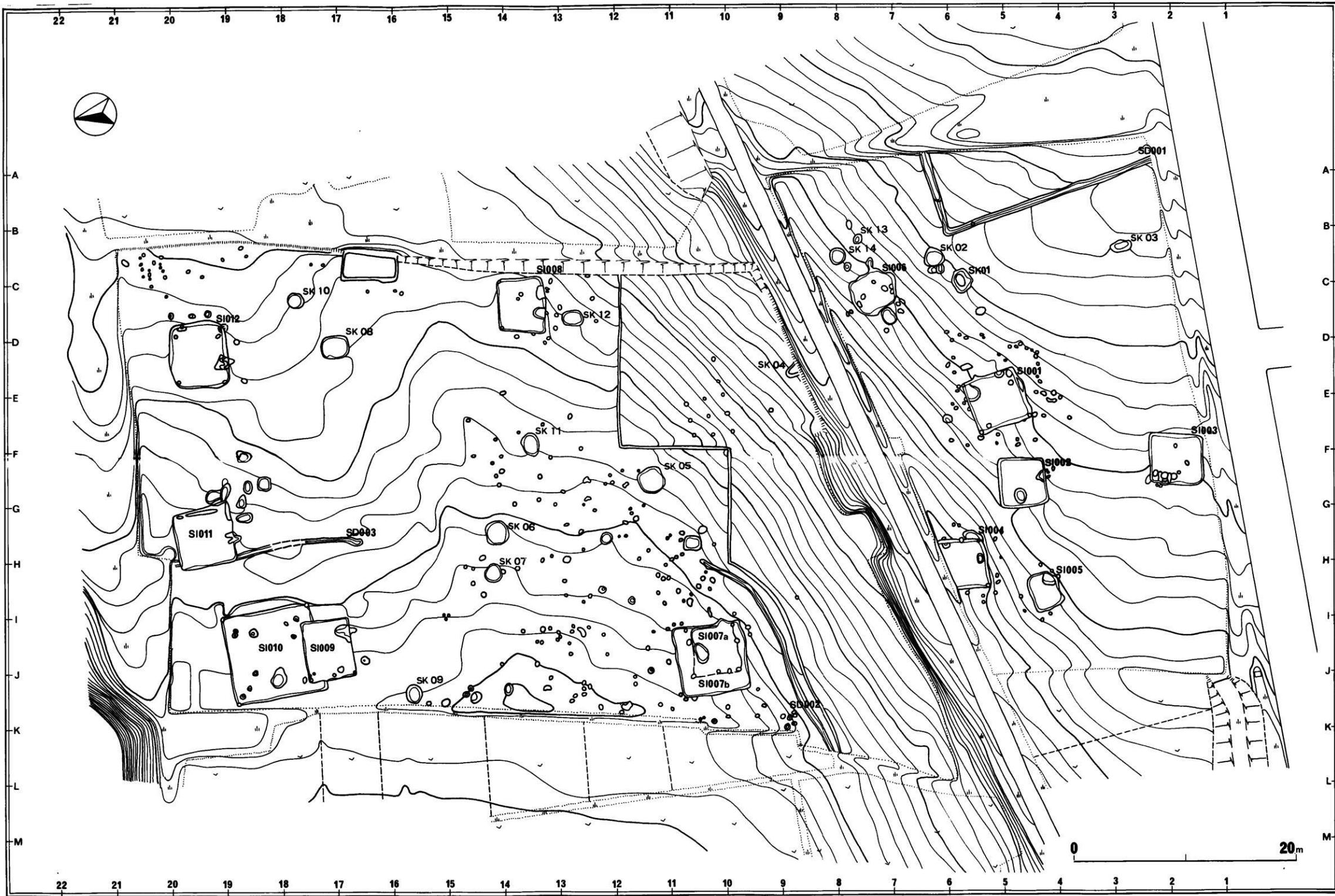
図版13

遺構外出土土器(5)

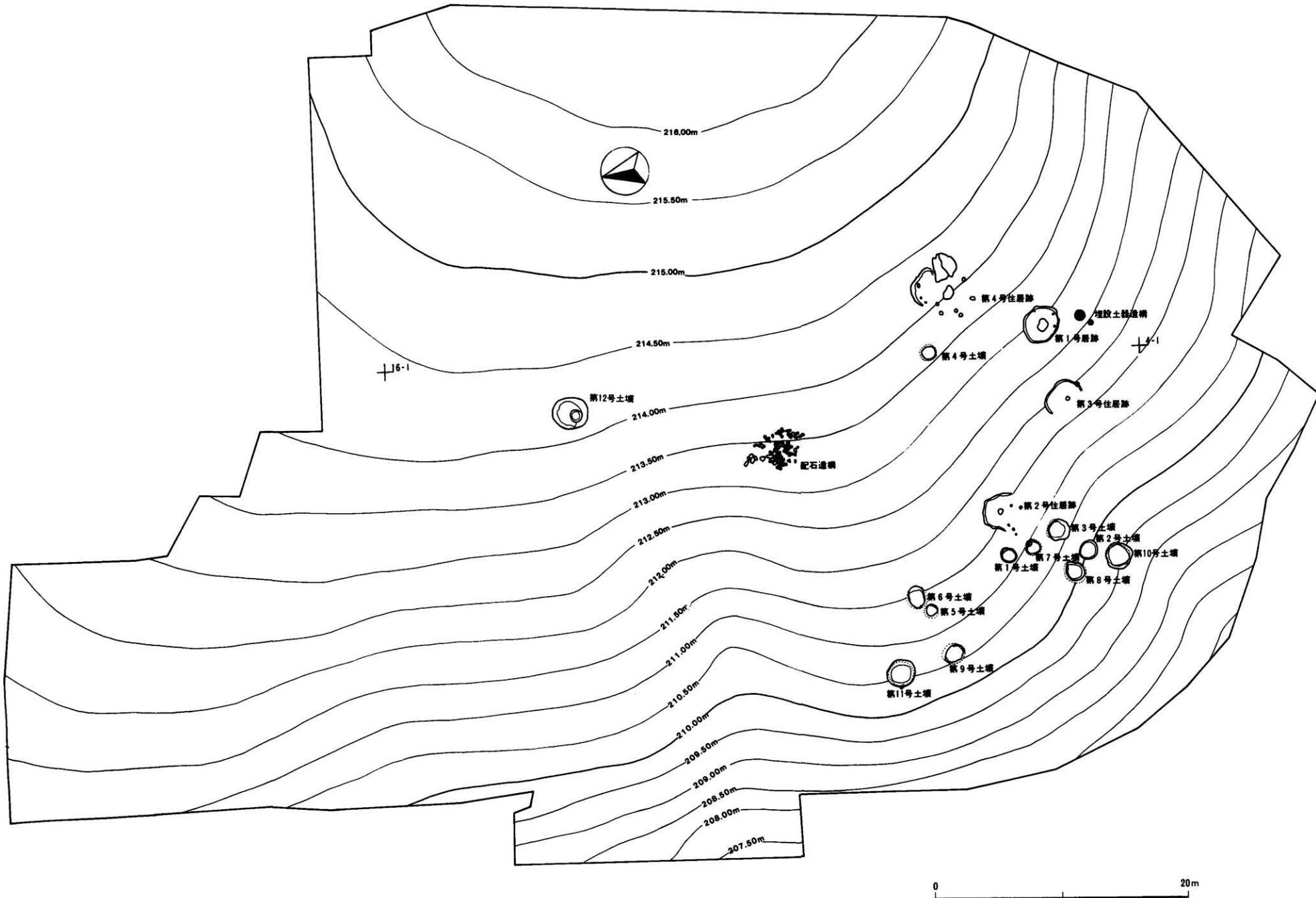


図版14

遺構外出土石器



付図1 上萬岡IV遺跡遺構配置図



付图2 案内II遺跡遺構配置図